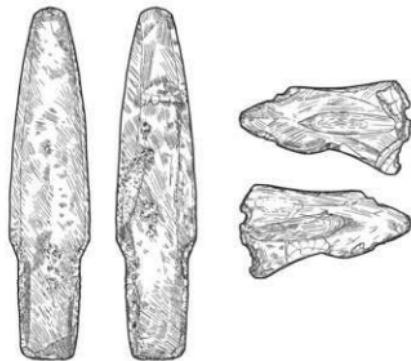


中間貯蔵施設事業遺跡発掘調査報告 2

後迫B遺跡



2022年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財團
環境省福島地方環境事務所

中間貯蔵施設事業遺跡発掘調査報告 2

うしろざく
後迫 B 遺跡

序 文

平成23年3月11日に発生した東日本大震災及びそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故から10年あまりが経過しました。これまで本県は未曾有の複合災害を克服して、着実に前に進んできましたが、復興は道半ばの状況です。

中間貯蔵施設は、原子力災害で飛散した放射性物質に汚染された土壌等を最終処分場に搬出するまで一時保管のための施設として、環境省が双葉町及び大熊町において整備を進めています。

この施設が建設される予定地内においても、ほかの地域と同じように私たちの先人が生活を営んだ痕跡として埋蔵文化財包蔵地が存在します。本教育委員会は、「中間貯蔵施設建設予定地に所在する埋蔵文化財調査の取扱方針」を定め、作業従事者の安全面を十分に確保した上で埋蔵文化財の分布調査、試掘・確認調査、発掘調査を実施してきました。

報告書は、双葉町の後廻B遺跡において令和元年度及び令和2年度までの2箇年にわたり実施した発掘調査成果をまとめたものです。本遺跡では、弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代を中心として長期間にわたり集落が営まれてきたことが確認されました。

この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解促進に繋がりますとともに、地域の皆様には教育活動や生涯学習の場において、郷土理解や歴史を解明するための基礎資料として広く活用されれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御理解と御協力をいただいた双葉町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和4年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

中間貯蔵施設事業にかかる埋蔵文化財の調査は、双葉町の銅谷廻遺跡と後廻B遺跡を対象として、平成30年度から令和2年度までの3箇年にわたって実施しました。

本報告書は、このうち、後廻B遺跡の調査成果をまとめたものです。本調査の結果、後廻B遺跡では、弥生時代から平安時代までの集落が営まれていたこと、江戸時代では墓域とされていたことが明らかになりました。弥生時代では東北地方において出土がきわめて稀な、武器形石製品の磨製石剣と磨製石戈が出土しました。当地域にまで武器形石製品を用いた儀礼文化が波及していたことをうかがわせる貴重な成果となりました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらには地域の歴史を理解する資料として、生涯学習の場などで幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました双葉町や関係機関に深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 大沼博文

緒 言

- 1 本書は、令和元・2年度に実施した中間貯蔵施設整備事業に関連する発掘調査報告書である。
- 2 本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

後廻B遺跡：福島県双葉郡双葉町大字郡山字後廻 遺跡番号：546900091
- 3 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が環境省の委託を受けて実施し、調査に係る費用は環境省が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財團法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 5 公益財團法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

令和元年度（発掘調査）
文化財副主査 佐藤 優 文化財主事 吉野勤也
他に、井 憲治、青山博樹、枝松雄一郎、吉田 功の協力を臨時に得た。

令和2年度（発掘調査）
副主幹 青山博樹 文化財副主査 佐藤 優
他に、香川慎一の協力を臨時に得た。

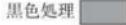
令和3年度（報告書作成）
副主幹 青山博樹 文化財副主査 佐藤 優（職名は当時）
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に使用したX線写真については、福島大学行政政策学類考古学研究室の協力を得た。
- 8 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

土器種実圧痕の同定 株式会社パレオ・ラボ
岩石肉眼鑑定 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各章末にまとめて掲載した。
- 10 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関及び個人から協力・助言を頂いた。(順不同)

環境省 福島県立博物館 双葉町教育委員会 福島大学行政政策学類考古学研究室
一般社団法人ONE福島
石川日出志 岡本孝之 及川良彦 鹿島昌也 加藤 学 菊地芳朗 小玉秀成 斎野裕彦
杉山浩平 田中 敏 田中祐樹 田中真理 長佐古真也 吉岡恭平 吉野高光 小川淳一
- 12 平成10年9月29日文化庁次長発出「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について(通知)」によれば、近現代の遺物について、「地域において特に重要なもの」を埋蔵文化財の対象とするとができると規定されている。本遺跡から出土した近現代の遺物について、双葉町の町域の大部分が帰還困難区域に指定されている現状を考慮すると、将来に伝えるべき文化財と思われる。本書では近現代の遺物について福島県教育庁文化財課と協議の上、埋蔵文化財と認定した。このことに関して、事業者である環境省の理解を得ている。

用例

1 本書における遺構図版の用例は、以下の通りである。

- (1) 方位 表記がない遺構図は、すべて本書の天を北とした。平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」によるゆがみを補正した平面直角座標系のIX系の数値を示している。
- (2) 縮尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (3) 標高 断面図及び地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (4) 土層 基本土層はアルファベット大文字のLとローマ数字、遺構内堆積土はアルファベット小文字のlと算用数字を組み合わせて表記した。
- (5) ケバ 遺構内の傾斜部は「↑」、相対的に緩傾斜の部分には「↓」、後世の擾乱部や人為的な削土部は「↖」の記号で表現した。
- (6) 用例 挿図中の網点は以下を示す。これ以外は同図中に用例を示した。
 焼土化  粘土
- (7) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は略号で記載した。
- (8) 土色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。
- (9) 掘形 遺構内の掘形は薄墨色（グレー）の線で表現した。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下の通りである。
- (1) 縮尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (2) 番号 挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、遺構図・写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 注記 出土位置・層位を、遺物番号右脇の()内に示した。
- (4) 土器断面 豆土に纖維混和痕が認められる土器には▲を付した。須恵器は断面を黒塗りとした。粘土紐の積上げ痕は、一点鎖線を入れて示した。
- (5) 計測値 各挿図中に示した。()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。
- (6) 用例 挿図中の網点等は以下を示す。これ以外は同図中に用例を示した。
黒色處理 

3 本書における文章の記載は以下の通りである。

- (1) 堪穴住居跡の方角は、北を軸とし、辺の傾きが45°未満を「南北」、45°以上を「東西」とした。

4 本書で使用した略号は、以下の通りである。

双葉町…F B	後廻B遺跡…U S S · B*
豎穴住居跡…S I	掘立柱建物跡…S B
鍛冶遺構…S W k	燒土遺構…S G
ビット…P	遺構外堆積土…L
	遺構内堆積土…l
	グリッド…G

*後廻B遺跡の読み假名について、当初「うしきさく」とし、「U S S」として調査・整理を進めていた。調査後に根室文化財保護地区の読み假名が「うしきさく」と判明したが、既に整理作業の多くを進めていたため、略号は当初のまま変更していない。

目 次

序 章

第1節 事業の概要と調査に至る経緯	1
第2節 後廻B遺跡の略歴	2
第3節 調査経過	2
第4節 遺跡の位置と地理的環境	4
第5節 歴史的環境	7
第6節 調査方法	11

第1章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要と基本土層	13		
遺構の概要(13)	基本土層 (13)		
第2節 竪穴住居跡	15		
1号住居跡(15)	2号住居跡(17)	3号住居跡(19)	4号住居跡(23)
5号住居跡(25)	6号住居跡(29)	7号住居跡(36)	8号住居跡(39)
9号住居跡(43)	10号住居跡(47)	11号住居跡(49)	12号住居跡(52)
13号住居跡(55)	14号住居跡(63)	15号住居跡(66)	16号住居跡(68)
17号住居跡(70)	18号住居跡(71)	19号住居跡(73)	20号住居跡(77)
21号住居跡(79)	22号住居跡(80)	23号住居跡(83)	24号住居跡(87)
25号住居跡(93)	26号住居跡(97)	27号住居跡(98)	28号住居跡(101)
29号住居跡(102)	30号住居跡(105)	31号住居跡(108)	32号住居跡(112)
33号住居跡(118)	34号住居跡(120)	35号住居跡(125)	36号住居跡(129)
37号住居跡(135)	38号住居跡(137)	39号住居跡(139)	40号住居跡(143)
41号住居跡(147)	42号住居跡(149)	43号住居跡(151)	44号住居跡(156)
45号住居跡(157)	46号住居跡(158)	47号住居跡(162)	48号住居跡(165)
49号住居跡(169)	50号住居跡(171)	51号住居跡(175)	52号住居跡(177)
53号住居跡(178)	54号住居跡(180)		

第3節 挖立柱建物跡	181
1号建物跡(181)	
第4節 土坑	184
1号土坑(184) 2号土坑(184) 3号土坑(185) 4号土坑(185) 5号土坑(185)	
6号土坑(186) 7号土坑(186) 8号土坑(188) 9号土坑(188) 10号土坑(188)	
11号土坑(189) 12号土坑(189) 13号土坑(189) 14号土坑(190) 15号土坑(190)	
16号土坑(192) 17号土坑(192) 18号土坑(192) 19号土坑(193) 20号土坑(193)	
21号土坑(194) 22号土坑(194) 23号土坑(194) 24号土坑(196) 25号土坑(196)	
26号土坑(196) 27号土坑(196) 28号土坑(197) 29号土坑(197) 30号土坑(197)	
31号土坑(199) 32号土坑(199) 33号土坑(199) 34号土坑(200) 35号土坑(200)	
36号土坑(200) 37号土坑(201) 38号土坑(201) 39号土坑(201) 40号土坑(203)	
41号土坑(203) 42号土坑(203) 43号土坑(204) 44号土坑(204) 45号土坑(205)	
46号土坑(205) 47号土坑(206) 48号土坑(206) 49号土坑(206) 50号土坑(210)	
51号土坑(212)	
第5節 溝跡	212
1号溝跡(212) 2号溝跡(213) 3号溝跡(213) 4号溝跡(214) 5号溝跡(214)	
6号溝跡(214) 7号溝跡(216) 8号溝跡(216) 9号溝跡(216) 10号溝跡(217)	
11号溝跡(217) 12号溝跡(219) 13号溝跡(219) 14号溝跡(219) 15号溝跡(220)	
16号溝跡(220) 17号溝跡(222) 18号溝跡(222) 19号溝跡(222) 20号溝跡(224)	
21号溝跡(226)	
第6節 鍛冶遺構、焼土遺構	226
1号鍛冶遺構(226) 1号焼土遺構(230)	
第7節 道跡	230
1号道路(230)	
第8節 塚	233
1号塚(233)	
第9節 煙跡	235
1・2号烟跡(235)	

第10節 遺物包含層	237	
1号遺物包含層(237)	2号遺物包含層(240)	
第11節 性格不明遺構	250	
1号性格不明遺構(250)	2号性格不明遺構(251)	3号性格不明遺構(252)
5号性格不明遺構(253)		
第12節 小穴群	254	
第13節 遺構外出土遺物	254	
第2章 総括		
第1節 遺構	276	
第2節 遺物	278	
第3節 磨製石剣・磨製石戈について	288	
第4節 弥生時代の石器について	295	
第5節 近世墓から出土した錫杖頭について	297	
第6節 まとめ	300	
付章 自然科学分析		
第1節 レプリカ法による土器種実圧痕の同定	303	

挿図・表・写真目次

【挿図】

図1 後庭B遺跡位置図	1
図2 工事範囲と遺跡の位置	2
図3 表層地質図	6
図4 周辺の遺跡位置図	8
図5 基本土層	14
図6 1号住居跡・出土遺物	16
図7 2号住居跡・出土遺物	18
図8 3号住居跡	20
図9 3号住居跡出土遺物	22
図10 4号住居跡・出土遺物	24
図11 5号住居跡	26
図12 5号住居跡カマド	27
図13 5号住居跡出土遺物	28
図14 6a号住居跡	30
図15 6a号住居跡カマド	31
図16 6b号住居跡	33
図17 6b号住居跡カマド	34
図18 6号住居跡出土遺物	35
図19 7号住居跡	37
図20 7号住居跡出土遺物	38
図21 8号住居跡	41
図22 8号住居跡カマド・出土遺物	42
図23 9号住居跡(1)	44
図24 9号住居跡(2)・出土遺物	45
図25 10号住居跡・出土遺物	48
図26 11号住居跡	49
図27 11号住居跡カマド	50
図28 11号住居跡出土遺物	51
図29 12号住居跡	53
図30 12号住居跡出土遺物	54
図31 13a号住居跡	57
図32 13a号住居跡カマド	58
図33 13b号住居跡	59
図34 13号住居跡出土遺物(1)	61
図35 13号住居跡出土遺物(2)	62
図36 14号住居跡	64
図37 14号住居跡出土遺物	65
図38 15号住居跡	67
図39 15号住居跡出土遺物	68
図40 16号住居跡・出土遺物	69
図41 17号住居跡・出土遺物	70
図42 18号住居跡・出土遺物	72
図43 19号住居跡	74
図44 19号住居跡カマド	75
図45 19号住居跡出土遺物	76
図46 20号住居跡・出土遺物	78
図47 21号住居跡・出土遺物	79
図48 22号住居跡	81
図49 22号住居跡出土遺物	82
図50 23号住居跡	84
図51 23号住居跡出土遺物	86
図52 24号住居跡	88
図53 24号住居跡カマド	89
図54 24号住居跡P1	90
図55 24号住居跡出土遺物	92
図56 25号住居跡	94
図57 25号住居跡カマド・鍛冶炉・出土遺物	95
図58 26号住居跡・出土遺物	97
図59 27号住居跡	99
図60 27号住居跡出土遺物	100
図61 28号住居跡・出土遺物	102
図62 29号住居跡・出土遺物	103
図63 30号住居跡	106
図64 30号住居跡カマド・出土遺物	107
図65 31号住居跡	109
図66 31号住居跡カマド	110

■67	31号住居跡出土遺物	111	■105	48号住居跡出土遺物	168
■68	32号住居跡(1)	114	■106	49号住居跡	170
■69	32号住居跡(2)	115	■107	49号住居跡出土遺物	171
■70	32号住居跡カマド	116	■108	50号住居跡	172
■71	32号住居跡出土遺物	117	■109	50号住居跡カマド・出土遺物	173
■72	33号住居跡・出土遺物	119	■110	51号住居跡	175
■73	34号住居跡	121	■111	51号住居跡出土遺物	176
■74	34号住居跡カマド	122	■112	52号住居跡	177
■75	34号住居跡出土遺物	124	■113	53号住居跡	179
■76	35号住居跡	126	■114	53号住居跡出土遺物	180
■77	35号住居跡カマド・出土遺物	127	■115	54号住居跡・出土遺物	181
■78	36号住居跡(1)	131	■116	1号建物跡(1)	182
■79	36号住居跡(2)	132	■117	1号建物跡(2)・出土遺物	183
■80	36号住居跡カマド・出土遺物	133	■118	1~7号土坑	187
■81	37号住居跡	135	■119	8~15号土坑	191
■82	37号住居跡出土遺物	136	■120	16~22号土坑	195
■83	38号住居跡・出土遺物	138	■121	23~30号土坑	198
■84	39号住居跡	140	■122	31~40号土坑	202
■85	39号住居跡カマド	141	■123	41~48号土坑	207
■86	39号住居跡出土遺物	142	■124	49~51号土坑	208
■87	40号住居跡	144	■125	5·11·13·14·16·18· 19·45·46号土坑出土遺物	209
■88	40号住居跡カマド	145	■126	50号土坑出土遺物	211
■89	40号住居跡出土遺物	146	■127	1·2·4~6号溝跡	215
■90	41号住居跡	148	■128	3·7~9·11号溝跡	218
■91	41号住居跡出土遺物	149	■129	10·12~15号溝跡	221
■92	42号住居跡	150	■130	16~19·21号溝跡	223
■93	42号住居跡出土遺物	151	■131	20号溝跡	224
■94	43号住居跡	153	■132	2·10·11·15~17· 20号溝跡出土遺物	225
■95	43号住居跡カマド	154	■133	1号鍛冶遺構	227
■96	43号住居跡出土遺物	155	■134	1号鍛冶遺構出土遺物	229
■97	44号住居跡・出土遺物	156	■135	1号燒土遺構	230
■98	45号住居跡	157	■136	1号道跡	231
■99	46号住居跡	159	■137	1号道跡出土遺物	232
■100	46号住居跡カマド・出土遺物	160	■138	1号塚・出土遺物	234
■101	47号住居跡	163	■139	1·2号烟跡・出土遺物	236
■102	47号住居跡カマド・出土遺物	164	■140	1号遺物包含層	238
■103	48号住居跡	166			
■104	48号住居跡カマド	167			

■141 1号遺物包含層出土遺物	239
■142 2号遺物包含層	240
■143 2号遺物包含層出土遺物(1)	244
■144 2号遺物包含層出土遺物(2)	245
■145 2号遺物包含層出土遺物(3)	246
■146 2号遺物包含層出土遺物(4)	247
■147 2号遺物包含層出土遺物(5)	248
■148 2号遺物包含層出土遺物(6)	249
■149 1号性格不明遺構	250
■150 2号性格不明遺構・出土遺物	251
■151 3号性格不明遺構・出土遺物	252
■152 5号性格不明遺構・出土遺物	253
■153 小穴群(1)	255
■154 小穴群(2)	256
■155 小穴群(3)	257
■156 小穴群(4)	258
■157 小穴群(5)・出土遺物	259
■158 遺構外出土遺物(1)	263
■159 遺構外出土遺物(2)	264
■160 遺構外出土遺物(3)	265
■161 遺構外出土遺物(4)	266
■162 遺構外出土遺物(5)	268
■163 遺構外出土遺物(6)	270
■164 遺構外出土遺物(7)	272
■165 遺構外出土遺物(8)	273
■166 遺構外出土遺物(9)	274
■167 遺構外出土遺物(10)	275
■168 出土遺物集成(1)	279
■169 グリッド別弥生土器出土量	281
■170 出土遺物集成(2)	283
■171 出土遺物集成(3)	284
■172 出土遺物集成(4)	285
■173 出土遺物集成(5)	286
■174 福島県内遺跡出土の羽釜形土器	287
■175 土器に記された「楯と戈を持つ人」	288
■176 中部高地以東の主な磨製石戈・ 磨製石劍出土遺跡	291
■177 本遺跡周辺の磨製石劍と 中部高地以東の主な一体式磨製短剣	292
■178 中部高地以東の主な磨製石戈	293
■179 製作工程ごとの磨製石器	296
■180 近世墓から出土した錫杖	299
■181 出土土器圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(1)	306
■182 出土土器圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(2)	307
■183 出土土器圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(3)	308

[表]

表1 周辺の遺跡一覧	9
表2 小穴一覧(1)	260
表3 小穴一覧(2)	261

表4 後廻B遺跡出土土器の圧痕同定結果 305

表5 後廻B遺跡出土土器の圧痕一覧 305

[写真]

1 調査区全景	311
2 調査区遠景	311
3 調査区遠景	312
4 調査区遠景	312
5 I・J・8~11グリッド付近 住居跡集中地区	313
6 F~I-17・18グリッド付近 住居跡集中地区	313
7 1号遺跡、10号溝跡	314
8 基本土層	314
9 調査風景ほか	315
10 1号住居跡全景	316

11	1号住居跡細部	316
12	2号住居跡全景	317
13	2号住居跡細部	317
14	3号住居跡全景	318
15	4号住居跡全景	318
16	5号住居跡全景	319
17	5号住居跡細部	319
18	6 a号住居跡全景	320
19	6 a号住居跡細部	320
20	6 b号住居跡全景	321
21	6 b号住居跡細部	321
22	7号住居跡全景	322
23	7号住居跡細部	322
24	8号住居跡全景	323
25	8号住居跡細部	323
26	9号住居跡全景	324
27	9号住居跡細部	324
28	11号住居跡全景	325
29	10・11号住居跡細部	325
30	12号住居跡全景	326
31	12号住居跡細部	326
32	13 a号住居跡全景	327
33	13 a・b号住居跡細部	327
34	14号住居跡全景	328
35	15号住居跡全景	328
36	16号住居跡全景	329
37	17号住居跡全景	329
38	18号住居跡全景	330
39	19号住居跡細部	330
40	20号住居跡全景	331
41	21号住居跡全景	331
42	22号住居跡全景	332
43	22号住居跡細部	332
44	23号住居跡全景	333
45	23号住居跡細部	333
46	24号住居跡全景	334
47	24号住居跡細部	334
48	25号住居跡全景	335
49	25号住居跡細部	335
50	26号住居跡全景	336
51	27号住居跡全景	336
52	28号住居跡全景	337
53	29号住居跡全景	337
54	30号住居跡全景	338
55	30号住居跡細部	338
56	31号住居跡全景	339
57	31号住居跡細部	339
58	32号住居跡全景	340
59	32号住居跡細部	340
60	33号住居跡全景	341
61	33号住居跡細部	341
62	34号住居跡全景	342
63	34号住居跡細部	342
64	35号住居跡全景	343
65	35号住居跡細部	343
66	36号住居跡全景	344
67	36号住居跡細部	344
68	37号住居跡全景	345
69	37号住居跡細部	345
70	38号住居跡全景	346
71	38号住居跡細部	346
72	39号住居跡全景	347
73	39号住居跡細部	347
74	40号住居跡全景	348
75	40号住居跡細部	348
76	41号住居跡全景	349
77	41号住居跡細部	349
78	42号住居跡全景	350
79	42号住居跡細部	350
80	43号住居跡全景	351
81	43号住居跡細部	351
82	44号住居跡全景	352
83	45号住居跡全景	352
84	46号住居跡全景	353
85	46号住居跡細部	353
86	47号住居跡全景	354

87	47号住居跡細部	354	124	28~31号住居跡出土遺物	382
88	48号住居跡全景	355	125	32~34号住居跡出土遺物	383
89	48号住居跡細部	355	126	35~37号住居跡出土遺物	384
90	49号住居跡全景	356	127	39~40号住居跡出土遺物	385
91	49号住居跡細部	356	128	42~43·46号住居跡出土遺物	386
92	50号住居跡全景	357	129	46~48号住居跡出土遺物	387
93	51号住居跡断面	357	130	48~51·53号住居跡出土遺物	388
94	52号住居跡全景	358	131	53·54号住居跡、溝跡、 土坑出土遺物	389
95	54号住居跡全景	358	132	土坑出土遺物	390
96	53号住居跡全景	359	133	50号土坑出土遺物	391
97	53号住居跡細部	359	134	1号鍛冶遺構、1号道跡、1号塚、 1·2号烟跡出土遺物	392
98	1号建物跡全景	360	135	1号遺物包含層出土遺物、 2号遺物包含層出土遺物(1)	393
99	1号建物跡細部	360	136	2号遺物包含層出土遺物(2)	394
100	1·2·4~7·13号土坑	361	137	2号遺物包含層出土遺物(3)	395
101	14·16·17·20·21· 25·27·29号土坑	362	138	2号遺物包含層出土遺物(4)	396
102	32·34·40·41·44·46·47号土坑	363	139	2号遺物包含層出土遺物(5)	397
103	50号土坑錫杖頭(図126-1)出土状況	364	140	性格不明遺構、小穴、 遺構外出土遺物(1)	398
104	50号土坑細部	364	141	遺構外出土遺物(2)	399
105	1~3·7·9~11号溝跡	365	142	遺構外出土遺物(3)	400
106	12~17·19~21号溝跡	366	143	遺構外出土遺物(4)	401
107	1号鍛冶遺構全景	367	144	遺構外出土遺物(5)	402
108	1号鍛冶遺構細部(1)	367	145	遺構外出土遺物(6)	403
109	1号鍛冶遺構細部(2)	368	146	鉄製品、石製品	404
110	その他の遺構	369	147	11号住居跡出土磨製石戈	405
111	1号塚	370	148	2号遺物包含層出土磨製石劍	406
112	1·2号遺物包含層	371	149	石器(1)	407
113	1~3号住居跡出土遺物	372	150	石器(2)	408
114	4·5号住居跡出土遺物	373	151	石器(3)、金床石、窯壁か	409
115	5·6号住居跡出土遺物	374	152	後廻B遺跡出土石器集合	410
116	7·8号住居跡出土遺物	375	153	13号住居跡出土土器集合	410
117	9·10·12·13号住居跡出土遺物	376			
118	13号住居跡出土遺物(1)	377			
119	13号住居跡出土遺物(2)	378			
120	14~16·18·19号住居跡出土遺物	378			
121	19·20·22号住居跡出土遺物	379			
122	23·24号住居跡出土遺物	380			
123	24·25·27号住居跡出土遺物	381			

序 章

第1節 事業の概要と調査に至る経緯

福島県では、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う東京電力株式会社福島第一原子力発電所の事故により、大気中に高濃度の放射性物質が拡散し、広範囲に土壤が汚染される事態となつた。中間貯蔵施設は、これら放射性物質を除去した際に生じた多量の汚染土壤等を最終処分するまでの期間、安全に管理・保管する施設として位置づけられる。

中間貯蔵施設建設予定地は、福島県浜通り地方中央部の双葉町と大熊町の2町にまたがり、およそ一般国道6号より東側から福島第一原子力発電所の周囲までを取り囲む約1,600haの範囲である。中間貯蔵施設建設予定地は、その全域が原子力災害対策特別措置法第15条に基づいた「帰還困難区域」に位置しており、當時高線量であることからバリケード柵などにより防護措置がなされると同時に、立ち入りが制限されている。中間貯蔵施設建設予定地内に位置する双葉町内の周知の埋蔵文化財包蔵地は47箇所を数え、本遺跡の所在する郡山地区は、郡山五番遺跡や堂ノ上遺跡、東原A遺跡、四郎田B遺跡など官衙関連遺跡が多く位置している。

福島県教育委員会は、平成28年9月に「中間貯蔵施設建設予定地に所在する埋蔵文化財の取扱方針」を策定し、この取り扱い方針に基づき埋蔵文化財の調査を行った。

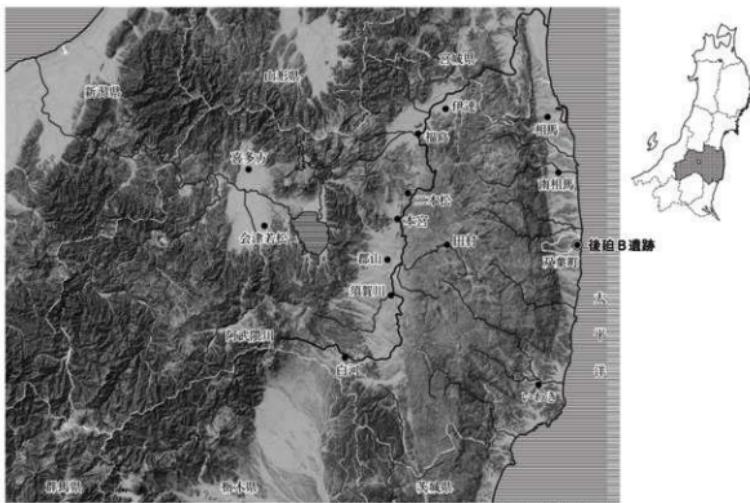


図1 後砲B遺跡位置図

第2節 後迫B遺跡の略歴

後迫B遺跡は、「双葉町史 第二巻」には、古墳時代後期から平安時代の土師器や須恵器、中近世の陶磁器片が採集できる遺物散布地として掲載されている(双葉町史編さん委員会1984)。

後迫B遺跡は中間貯蔵施設建設に係る工事に先立ち、平成30年9月末から令和元年6月にかけて、福島県教育庁文化財課南相馬市駐在(以下文化財課)による試掘・確認調査が行われ、平安時代の住居跡や土坑が確認された。平成30年11月22日には、試掘・確認調査の結果に基づき、後迫B遺跡の埋蔵文化財包蔵地範囲の再計測が行われ、面積は当初の「60,000m²」から「20,000m²」に変更された。さらに令和元年6月12日に実施された試掘・確認調査の結果、土師器などの遺物が確認出来たことから、後迫B遺跡の西側200mが包蔵地範囲として追加された。令和元(平成31)年度、令和2年度には中間貯蔵施設に係る工事に伴い、9,300m²を対象として発掘調査が実施された(本報告)。令和2年8月20日には、発掘調査にて江戸時代の烟跡等の遺構や古代の遺物の拡がりが確認されたことを受け、遺跡西側40mの範囲が拡張された。令和3年4月19日には、小字名の漢字表記を遺跡名に反映させ、「後迫B遺跡」から「後迫B遺跡」に遺跡名称の変更が行われた。(佐藤)

第3節 調査経過

後迫B遺跡の発掘調査は令和元(平成31)年度、令和2年度の2箇年度にわたりて実施した。本

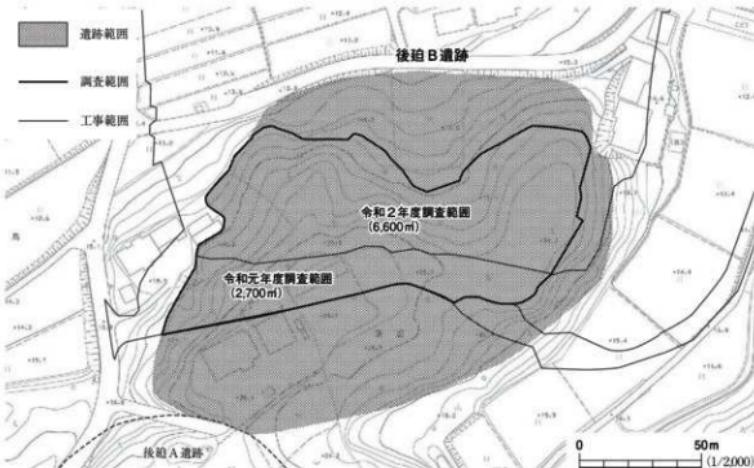


図2 工事範囲と遺跡の位置

節では調査経過について年度順に記述する。

平成30年5月8日に環境省福島地方環境事務所（以下、環境省）、文化財課、公益財団法人福島県文化振興財团遺跡調査部（以下、財団）の3者間で協議が行われた。環境省から、中間貯蔵施設建設予定地「双葉③工区」について、後廻B遺跡が周知の遺跡として位置し、要記録保存対象地となる可能性が高いとの報告があった。これを受け、平成30年9月、平成31年1月、令和元年5・6月にかけて、文化財課による後廻B遺跡の試掘・確認調査が行われた。その結果、後廻B遺跡の要保存範囲8,700m²が確定した。

令和元年7月11日に行われた連絡調整会議において、環境省から要保存範囲8,700m²の内、町道付け替え工事を行う範囲の2,700m²の発掘調査を優先して欲しいとの要望が出された。このことから、後廻B遺跡の発掘調査は令和元年度に町道付け替え部分を対象とした2,700m²、令和2年度に残りの6,000m²を行うことで決定した。令和元（平成31年）年度の発掘調査は福島県教育委員会から委託を受け、財団では、担当調査員2名を配置し、7月22日から発掘調査を開始した。

7月上旬に調査区内の樹木の伐採、家屋の解体が開始され、7月下旬から重機による表土除去を開始した。8月上旬からは検出した遺構の精査を本格的に開始した。表土除去直後からイノシシによる遺構内を掘り起こす被害が多発したため、調査区間に電気柵やソーラー防獣ライト、ウルフバー（天然オオカミ尿）を設置・散布し、イノシシ対策を講じた。10月12日に上陸した台風19号により現場への被害は認められなかったものの、いわき市や郡山市に居住する複数の作業員が被災し、人員不足により調査は一時停滯した。11月上旬には被災した作業員が順次復帰し、晴天も続いたことにより、調査は進捗した。丘陵南側斜面に位置する住居跡は、床面までの深さが70cm以上あり、掘削や排水に苦慮した。11月上旬には株式会社シン技術コンサルに委託した測量支援業務も開始され、調査は大きく進捗し、12月初旬には無人航空機を用いた測量、空中撮影を行った。

12月25日には環境省、文化財課、安藤ハザマJ.V、財団の4者により、町道付け替え部分の発掘調査終了確認と現地引渡しを行った。発掘調査期間は7月22日から12月25日までの154日間であった。

令和2年1月～3月にかけて、重機による令和2年度調査範囲の表土除去、作業員による木根の精査などを行った。

令和2年1月25日には、とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）を会場に、福島県教育委員会主催の「令和元年度遺跡発掘調査に係る出土品の公開」が開催され、後廻B遺跡の出土品を展示することとなった。会場には、双葉町民の方々が避難先から多数来場され、郷土の文化財に対する関心の高さがうかがわれた。

令和2年度の発掘調査は福島県教育委員会との委託契約により、財団は担当調査員2名を配置し、4月上旬から調査を開始した。

4月上旬には器材の搬入を行い、人力作業による遺構の調査を開始したが、まもなく新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言の発出により、中間貯蔵施設建設の全工事区域で現場作業

を休止することが決定し、同時に発掘調査も4月22～28日まで中断となった。5月上旬からは検出した遺構の精査を本格的に開始し、株式会社シン技術コンサルに委託した測量支援業務も開始した。また、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、なるべく作業員が密集して作業することがないよう、配慮しながら調査を行った。調査区東側の丘陵頂部では、古墳時代終末期・奈良時代、平安時代の堅穴住居跡や溝跡の他、江戸時代の墓坑が幾重にも重複しており、新旧関係の把握に時間要した。また、堅穴住居跡の遺存状況が良好で遺構内堆積土の土量も多かったことから、排土の運搬に苦慮した。6月以降は調査区西側丘陵部分の調査に着手し、丘陵斜面部には弥生時代中期後葉の堅穴住居跡や遺物包含層が確認された。本遺跡の北東側に隣接し、協議必要範囲とされた「後迫B遺跡隣接地-No.25」について、文化財課の試掘調査が行われた。その結果、埋蔵文化財は確認できなかったことから、この範囲について遺跡として取り扱わないとになった。

晴天にも恵まれ調査は順調に進み、8月初旬には無人航空機を用いた測量と空中撮影を行った。8月5日には文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門の近江俊秀文化財調査官が来室し、高線量下における発掘調査の現状について視察された。8月6日には双葉町による遺跡紹介映像の作成のため、一般社団法人ONE福島による撮影が行われた。10号溝跡、2号畠跡、2号遺物包含層について調査区の外に延伸することが判明したことから、文化財課から8月20日付けで600m²を対象とした発掘調査範囲の追加が指示された。これにより後迫B遺跡の要保存範囲は9,300m²、令和2年度の調査面積は6,600m²となった。9月には堅穴住居跡の貼床の掘り下げや断ち割り、遺物包含層の掘削を行った。9月2日には双葉町文化財保護委員が来室し、遺跡の状況等を視察された。

9月30日には環境省、文化財課、安藤ハザマJV、財團の4者により、発掘調査の終了確認と現地引渡しが行われた。これにより、令和元(平成31年)年度から2箇年度にわたって行われた後迫B遺跡の要保存範囲9,300m²の発掘調査はすべて終了した。

令和3年度は調査員1名を配置し、報告書の作成を行った。4月には、福島県立博物館の田中敏氏が来室され、弥生時代の土器・石器についてご教示を頂いた。石製品・石器の石材鑑定について、パリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託し、7月に肉眼による石材鑑定が行われた。土器の種実圧痕の採取・同定について、株式会社パレオ・ラボに業務委託し、7月に試料採取を実施した。10月9日～11月28日にかけて開催された、福島県立博物館のポイント展「金属器を模倣した石器」では、後迫B遺跡出土の磨製石剣・磨製石戈が展示された。12月に編集作業を終え、同月中に印刷会社へ入稿した。以後、校正と収藏にむけての整理作業を併行して実施した。
(佐藤)

第4節　遺跡の位置と地理的環境

浜通り地方 福島県の浜通り地方は、阿武隈高地の東縁に広がって太平洋に面する、南北約115km、東西35kmの地域である。

阿武隈高地は古生代から中生代の地層を基盤とする山地で、鉱物と石材資源に恵まれる。高地の

東縁部には双葉断層帯が南北に継続し、ここから急に標高を減じる。その東麓には、第三紀に形成された堆積岩(凝灰岩)からなる舌状の丘陵が数多く伸び、阿武隈高地を開析して東流する諸河川が形成した沖積平野がこの間を南北に連なる。

丘陵の多くは海岸に達し、その先端は太平洋の浸食によって断崖であることが多い。平野部の海岸には多くの場合で砂浜が形成され、かつては沿岸に発達した砂州によって多くの潟湖が存在したが、近代にその多くが干拓された。海岸線は比較的単調で、大きな湾はみられず、港は潟湖や河川の河口に立地することが多い。

北に隣接する宮城県、南に隣接する茨城県とは、平野部を縦貫する国道6号線とJR常磐線、常磐自動車道によって、西に隣接する中通り地方とは阿武隈高地をこえる磐越自動車道や複数の峠道、JR磐越東線によって、それぞれ結ばれている。国道6号線をはじめとする南北のルートは日本の大動脈の一つであり、浜通りと隣接地域との交通量は、南北を貫くルートが阿武隈山地をこえる峠道よりも多い。「浜通り」という地域名は、当地域が関東地方と仙台平野を結ぶ回廊であることを示す名称でもある。

双葉町 浜通り地方のほぼ中央部に位置し、阿武隈高地に源を発する前田川の形成した沖積平野と、その北・西・南の三方を取り囲む丘陵を町域とする。

この沖積平野は、南北約3km、東西約6kmの小規模な海岸平野で、浜通りの他の海岸平野と同様、固有の名称は付されていない。北に隣接する浪江町、南に隣接する大熊町とは、阿武隈高地の東麓から海岸付近まで伸びる丘陵を境とする。

後廻B遺跡は、この平野を北に臨む丘陵の北部、通称郡山台地に所在する。丘陵の上面は平坦で、多くの開析谷によって樹枝状に浸食され、その谷底を流れる小河川の多くは沖積平野へ流れ出る他、一部は直接太平洋に注いでいる。

本遺跡をはじめ浜通りに多い「サク」という地名は、このような開析谷を指す地形名称で、大熊町以北は「廻」、以南は「作」の字をあてることが多い。
(青山)

遺跡周辺 本遺跡はこのような開析谷の浸食によって形成された、低丘陵の頂部の平坦面や北側の緩斜面に立地する。本遺跡の位置する丘陵は、北東方向の四郎田地区に向かって徐々に標高を減じながら延伸し、北東端部は舌状である。丘陵の北側は細谷川の開析によって形成された河岸段丘、南東側は狹小な谷地である。海岸線からの遺跡までの距離は約650mを測る。

隣接する字名は、北が小譲、鹿島原、東が久保谷地、南が榎無、西が五斗蒔、陳場沢である。

遺跡の周囲は植栽された杉林や、小規模な集落が散見され、西側には阿武隈高地、北側には郡山丘陵、東側からは太平洋や細谷川の河口が望見できる。

本遺跡の周辺は、震災前は北側の河岸段丘や細谷川周辺の低地では水田が営まれ、陽当たりの良い丘陵裾部や緩斜面を造成して家宅や畑が築かれていた。調査前の現況は杉林及び宅地、畑であった。

本遺跡周辺は旧郡山村にあたり、郡山丘陵には旧村社の正八幡神社が鎮座しており、震災後においても地域住民の尽力により、神樂が奉納されている。また、北側の本遺跡北側の町道を挟んだ丘

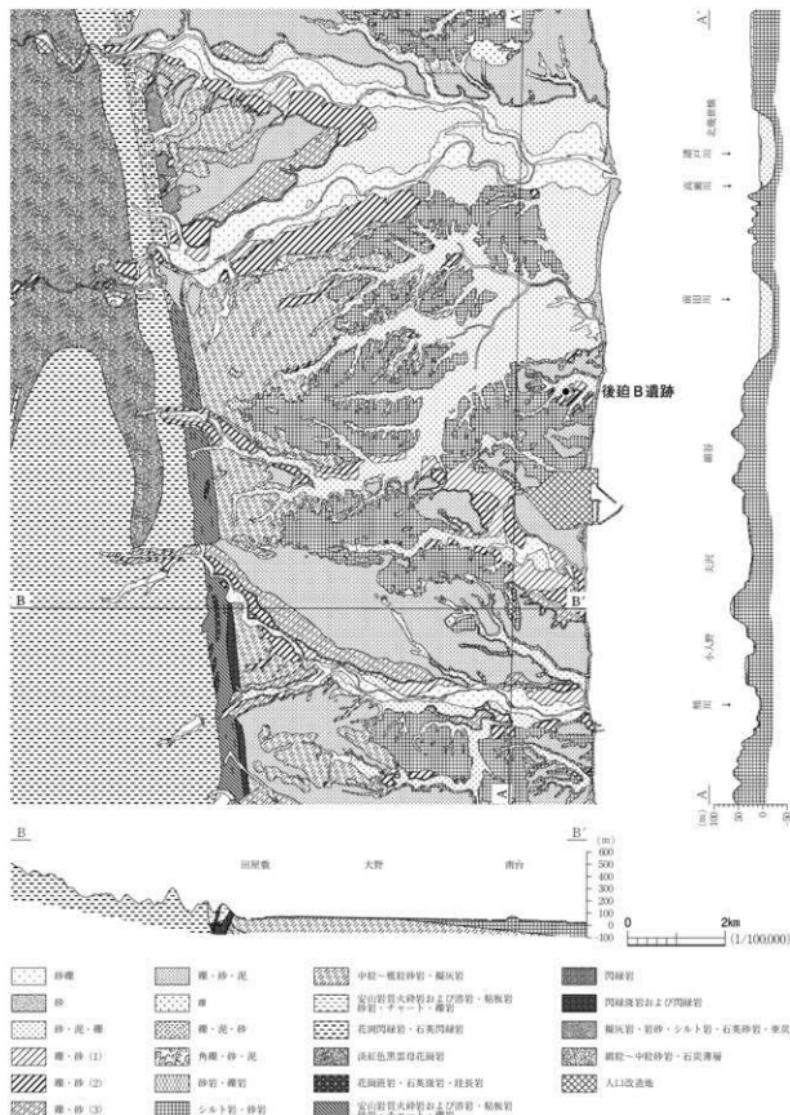


図3 表層地質図

丘陵頂部には、家宅に伴うとみられる祠の礎石があり、当時の信仰をうかがえる。1970年代の航空写真からは、丘陵頂部の平坦面は広範囲な畑であったことが確認できる。丘陵南東側の斜面部は水田耕作や宅地造成の掘削により、本来の地形は失われている。

福島県の作製した「津波想定区域図 市町村別双葉町 平成23年東北地方太平洋沖地震津波における浸水範囲(実績)」によれば、震災時の津波は細谷川を西側に週上し、本遺跡の北側の丘陵裾部や南東側の谷地にまで到達したとされる。
(佐藤)

気候・動植物 気候は海洋性で、夏は過ごしやすく、冬は温暖で降雪量は少ない。梅雨の時期にはヤマセの冷たく湿った風が太平洋から吹く。現場作業中にも、ヤマセに伴う濃い霧が流れ込むのがしばしば見えた。夏場は海風がよく吹き込む。冬季の西からの季節風は阿武隈高地に迷られるため強くないとされるが、中通り地方との大きな違いは感じられない。

現場周辺ではホトトギスやキジがよく鳴き、夕方人影がなくなるとイノシシの親子が現れ、朝の現場周辺には動物の粪がよく落ちていた。遺跡周辺は杉の人工林が多く、所々に竹林が点在する。遺跡周辺は本来の植生がすでに大きく失われている。
(青山)

第5節 歴史的環境

浜通り地方における人類活動の最も古い痕跡は、後期旧石器時代にさかのほる。楢葉町の大谷上ノ原遺跡、南相馬市の荻原遺跡などにおける発掘調査出土資料があり、双葉町では、手子塚A遺跡、東原B遺跡(67)などが知られる。

縄文時代には遺跡数が増加し、特に早期以降に急増する。前期には縄文海進によって平野部の海岸線が現在より内陸側に入り込み、いくつかの貝塚が形成された。双葉町の郡山貝塚はその1つである。浜通りは、前期から中期にかけて東北中南部に分布する大木式土器分布圏の南縁となり、後期には関東地方の影響を受け、晩期には亀ヶ岡式の土器圏に入る。

弥生時代には西日本から遠賀川系土器が波及し、浜通りにはいわき市の作B遺跡などの出土例がある。稲作は仙台平野沿岸部などで中期の大規模な水田跡の検出によって確認され、阿武隈山地に産出する粘板岩製の石庖丁が仙台平野に流通する。しかし、中期中葉に発生した巨大地震と大津波で大きな被害をうけ、その多くが廃絶する(斎野2017)。この大地震の規模は、東日本大震災と同等かやや大きなものであったと考えられ、浜通りでは被災の具体的な痕跡は確認されていないが、いわき市の龍門寺遺跡などは時を同じくして規模を大幅に縮小する。

浜通りではこれに続くニッ釜式期あるいは大畠E式期の遺跡は少ないものの、桜井式期に遺跡数が増加する。これらの多くは丘陵や台地上に立地し、数軒の小型の竪穴住居跡や土器棺墓が単独で検出される例が多い。この時期の水田跡はいわき市の中世原・番匠地遺跡で確認され、石庖丁などの大陸系磨製石器を多く出土するが、それまでの弥生遺跡とは立地や規模などのあり方が異なる。双葉町内にある弥生時代遺跡の多くはこの時期のものである。

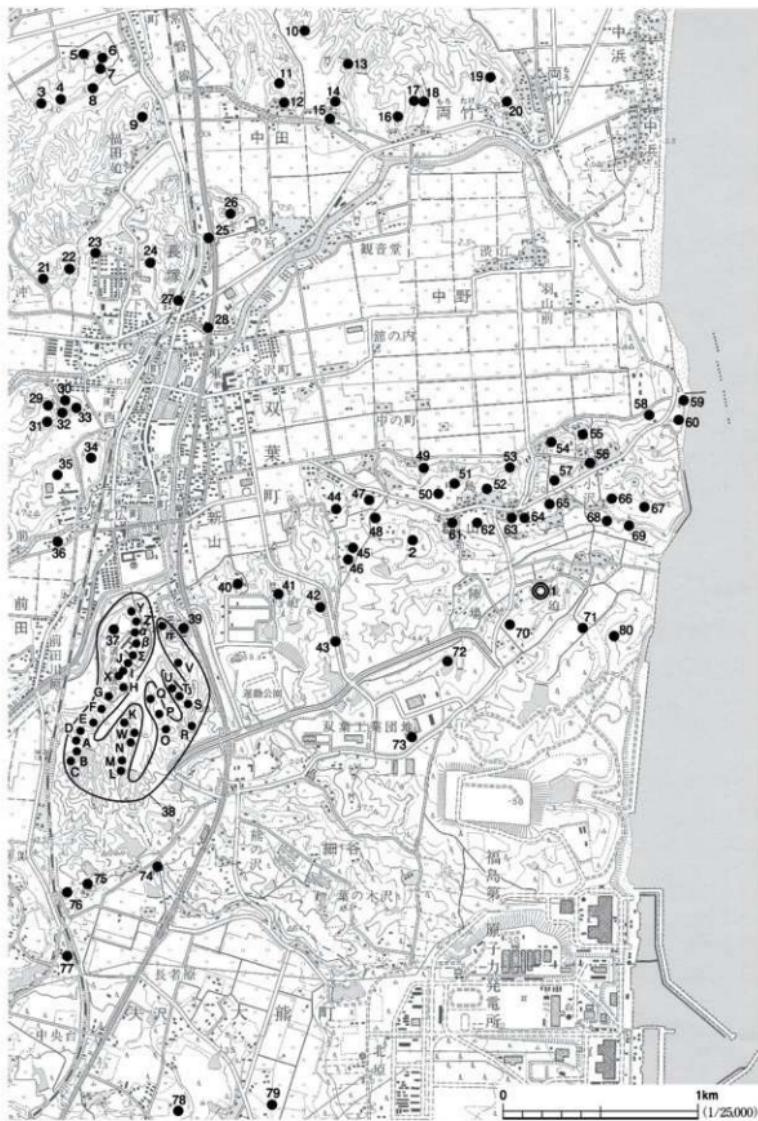


図4 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	後追B遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世	散布地	41	弓削A横穴墓群	古墳（3基）	古墳
2	鋼谷追跡	奈良、平安、近世	散布地	42	弓削B横穴墓群	古墳（4基）	古墳
3	台古墳群	古墳（円墳2基）	古墳	43	陣場沢道路	奈良（4基、須恵器、円錐鏡、扇尾）窓跡	窓跡
4	岩井追横穴墓群	古墳、中世（15基、縄削面）	古墳	44	西原B遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	散布地
5	龍島神社跡	平安～近世	社寺跡	45	椎原塚古墳	古墳（円墳1基、消滅）	古墳
6	西台遺跡	古墳～平安	散布地	46	西原C遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	散布地
7	光能寺跡	近世	社寺跡	47	西原A道路	古墳後期、奈良、平安	散布地
8	岩井追道路	弥生中期	散布地	48	西原沼道路	平安（墨書き土器「神J」）	その他
9	鴻草船跡	難倉、奈町、桃園	城船跡	49	鷲貝塚	縄文前期	貝塚
10	狸穴横穴墓群	古墳終末期（15基）	古墳	50	屢ノ腰古墳群	古墳後～終末期（6基現存）	古墳
11	中田船跡	中世	城船跡	51	屢ノ腰道路	縄文、弥生、古墳、古代、中世後	散布地
12	中田西庭横穴墓群	古墳終末期（4基）	古墳	52	郡山五番道路	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、近世	官衙跡
13	福井追横穴墓群	古墳後～終末期（9基、縦削面）	古墳	53	郡山五番古墳	円墳1基	古墳
14	大仏前横穴墓群	古墳終末期（3基）、近世	古墳	54	馬場D道路	弥生、奈良、平安	散布地
15	真福寺跡	近世	社寺跡	55	馬場A道路	古墳、奈良、平安	散布地
16	両竹庵廢仮	中世	石造物	56	馬場B道路	古墳、奈良、平安、中世	散布地
17	摩崖下横穴墓群	古墳終末期（6基）、中世	古墳	57	馬場C道路	弥生、平安	散布地
18	竜円寺跡	中世	社寺跡	58	小沢古墳群	古墳（3基）	古墳
19	両竹劍跡	中世	城船跡	59	沼ノ沢古墳群	古墳後～終末期（前方後円墳1基、円墳15基、現存は1基）	古墳
20	円通寺跡	中世	社寺跡	60	沼ノ沢道路	縄文、弥生	散布地
21	北沖横穴墓群	古墳	古墳	61	渕福寺跡	近世	社寺跡
22	北日沖横穴墓群	古墳終末期（5基）	古墳	62	堂ノ上道路	奈良、平安（基壇跡）	社寺跡
23	上船横穴墓群	古墳終末期（6基、消滅）	古墳	63	鹿鳥原道路	奈良、平安	散布地
24	西宮下横穴墓群	古墳終末期（土師器、須恵器）	古墳	64	斐島神社跡	平安～近代	社寺跡
25	寺内追横穴墓群	古墳終末期（大刀、勾玉、鏡等）	古墳	65	白道路	弥生、奈良、平安	散布地
26	寺内前古墳群	古墳（全長21mの前方後円墳む）、中世	古墳・塚	66	東原A道路	古墳後期～平安	散布地
27	南標量部障壁跡	近世	その他	67	東原日道路	旧石器、弥生	散布地
28	寺内前道路	奈良、平安	-	68	四郎田A道路	古墳～平安	散布地
29	安要院跡	中世	社寺跡	69	四郎田B道路	縄文～平安	散布地
30	深谷古墳群	古墳後期（円墳2基）	古墳	70	後追A道路	弥生、古墳、奈良、平安	散布地
31	深谷横穴墓群	古墳終末期（2基）	古墳	71	久保谷道路	弥生、古墳、奈良、平安	散布地
32	深谷A道路	弥生中期、平安	散布地	72	陣場沢B道路	弥生中期、奈良	散布地
33	深谷B道路	弥生中期	城船跡	73	陣場沢A道路	弥生中期	散布地
34	新山跡	中世	城船跡	74	斎ノ神古墳	古墳	古墳
35	東延道路	縄文早削期	散布地	75	柳ノ沢古墳	古墳	古墳
36	大堀前道路	縄文後削、弥生、古墳、奈良、平安	散布地	76	長者原横穴墓群	古墳	古墳
37	清戸追古墳群	古墳後期（円墳7基）	古墳	77	火ノ見塚古墳	古墳	古墳
38	清戸追横穴墓群	古墳後～終末期（300基以上）	古墳	78	棚相子古墳	古墳	古墳
39	武沢船跡	難倉（消滅）	城船跡	79	下团子横道跡	古墳	散布地
40	漆追道路	奈良、平安、近世	散布地	80	南久保谷B道路	縄文、弥生、奈良、平安	集落跡

弥生後期には、東北北部で成立する天王山式土器の分布圏に入る。この時期の遺跡は小規模なものが多く、浜通りの遺跡数は少ない。

古墳時代、浜通りは茨城県域、宮城県域と同様に南関東の影響を強く受け、多くの集落が出現し、これらの集落群が古墳造営の基盤である。背景には人の移動や移住が考えられる。前期には、いわき市の玉山1号墳(前方後円墳)、浪江町の本屋敷1号墳(前方後方墳)、南相馬市の桜井古墳(前方後方墳)などが築造される。双葉町内に前期古墳は未確認であるが、郡山五番遺跡(52)で当該期の住居跡が確認されている。

東北では中期古墳は規模を縮小するが、後期に拡大し、いわき市神谷作101号墳(前方後円墳)など埴輪を持つ古墳が現れる。双葉町塚ノ腰古墳群(50)の埴輪はこの時期に位置づけられる。郡山台地の東端部の海岸に面した断崖の上に所在する沼の沢古墳群(59)でも埴輪が出土していることからこの時期に築造が開始されたと考えられる。当古墳群は戦後の時点で、前方後円墳7基、円墳15基が存在したとされるが、海岸の浸食により崩落し現存するのは円墳1基のみである。この古墳群の築造は、7世紀に継続する。

古墳時代終末期(7世紀)の浜通りでは凝灰岩を掘り込んだ横穴墓が主要な墓制である。浜通りは装飾壁画を持つ横穴墓が多く確認され、双葉町では総数300基を超す横穴墓と装飾壁画が確認され頭椎大刀を出土した国指定史跡の清戸追横穴墓群(38)の他、岩井追4号横穴墓と稻荷追1号横穴墓で線刻壁画が確認されている。清戸追横穴墓群は、本遺跡の西方約2kmに位置し、アルファベットなどによって呼称される30の支群からなる(A～Σ)。それぞれの支群の多くは数基～三十数基の規模を有し、全体の規模は浜通りの横穴墓群の中でも有数のものである。7～9世紀の遺物が出土していることから、本遺跡や郡山五番遺跡と同じ時期に営まれた墓域であると考えられる。

文献記録によれば、7世紀の中頃に陸奥国が成立したと考えられ、浜通りには南から、菊多、磐城、標葉、行方、宇多の各郡が成立する。後追B遺跡の北側約570mの距離に位置する郡山五番遺跡は標葉郡衙跡と推定され、奈良～平安時代前期には近傍にこれと関連する多くの遺跡が立地する。付属寺院跡と考えられる堂ノ上遺跡(62)、郡社跡と考えられる鹿島原遺跡(63)の他、郡衙に付属する津と考えられる四郎田B遺跡(69)、「千刀自賣」の墨書き土器、綠釉陶器、円面鏡、桂甲、刀装具などを出土し官人層との関連が指摘される東原A遺跡(66)、須恵器、円面鏡、鷦尾など生産した官窯と考えられる陳場沢窯跡群(43)など、郡衙に関連する多くの遺跡が知られる。

平安後期以降、律令制が弛緩して標葉氏がこの地を治め、15世紀末に相馬氏がこれにかわった。現在も相馬郡で毎年開催される相馬野馬追祭りは、相馬氏が伝えたとされる。

江戸時代には同氏の相馬中村藩がこの地を治め、浜街道の宿場町(長塚宿)となつた。

明治維新後は、中村県、磐前県をへて福島県となつた。当地には明治22年の町村制施行で新山村と長塚村が発足し、明治29年には榆葉郡と標葉郡が合併し、双方の葉をとって双葉郡となつた。昭和26年には新山村と長塚村が合併して標葉町となり、昭和31年に双葉町に改名された。

現在の福島第一原子力発電所のある場所には、昭和16年に造られた陸軍磐城飛行場では、練習

機によるパイロットの養成が行われ、大戦末期には米艦載機の空襲を受けた。戦後、塩田をへて福島第一原子力発電所が昭和46年に営業運転を開始した。

平成23(2011)年の東日本大震災による原発事故で双葉町の全町民が避難を余儀なくされ、現在も大部分が帰還困難地域に指定されている。平成27(2015)年には除染土を仮貯蔵する中間貯蔵施設の受け入れが容認された。除染土は30年以内に県外での最終処分を行うとされている。(青山)

第6節 調査方法

今回の発掘調査は、過去に前例のない帰還困難区域内での作業であった。本節では、平時と異なる高線量下の特異な調査の工程・方法に着目して記載したい。

調査区内の表土はバックホーを用いて除去した。「線量低減措置」として、高線量の汚染土壌である表土層の上部5~10cmは、フレキシブルコンテナ(黒)に詰め、場外に搬出した。

作業員は安藤ハザマ JVから提供を得た。高線量下であることから、発掘作業の際の服装は肌を露出しない、長袖、長ズボン、手袋着用を原則とし、放射性物質を体内に取り込まないよう使い捨てのN95(米国NIOSHが制定した呼吸器防護具規格基準)防塵マスクを常時着用し、作業を行った。マスクと手袋は低レベル放射性廃棄物として、浪江町のスクリーニング場(高瀬・加倉)に持ち込み処理した。また、新型コロナウィルス感染拡大の影響により、マスクの入手が困難になり、フィルター取り換え式の防塵マスクに切り替えた。体内被ばくのリスクの軽減措置として屋外での飲食は飲料水を含め禁止され、消防署がないことから防火に配慮して火気の使用も厳禁とされた。

帰還困難区域への立ち入り時間は7:30~17:00厳守で、夜間は出入口のゲートが封鎖されることから、常に時間に配慮した調査を行った。また、帰還困難区域内への立ち入りは環境省の発出する許可証(3箇月ごと更新)が必要で、出入り時は決められたゲートでの提示を求められた。

現場作業に際して遺構面の養生や発掘器材の洗浄の際に用いる水は、安藤ハザマ JVに依頼し、帰還困難区域外から散水車にて運搬した。また帰還困難区域内に立ち入った際は、財団が策定したガイドラインに準じた放射線障害防止対策を講じ、常に被ばく線量計を携帯し、毎日の被ばく線量を管理簿に記録した。職員個々の被ばく管理簿は財団総務課にて適正に30年間保管されている。

上述した作業時間の制約から生じる調査の遅滞や、被ばくのリスクを軽減するため、遺構図化、小型無人機を用いた空中写真撮影、航空測量等の支援業務を株式会社シン技術コンサル福島支店に委託して実施し、調査の効率化を図った。

出土遺物等については、国や県が推奨する国立文化財機構東京文化財研究所作成「警戒区域内からの資料の搬出作業マニュアル」に準拠し、表面汚染限度である13,000cpmの1/10までを基準(1,300cpm)として計測(シンチレーション検出器)を行い、この数値を超える資料がないことを確認し、現地にて水洗い後、福島市の当財團山下分庁舎へ搬送・仮保管した。

表土層より下層の堆積土については、原則的に人力で行い、堆積土の層位ごとに遺物の出土状態

に留意しながら基盤土まで掘り下げている。ただし、掘削途上で遺構・遺物が存在しないと判断された土層については、バックホーを用いて掘削した。調査において掘削によって生じた堆土については、クローラーダンプに積み込み、工区内に設定した仮置場まで搬出した。

遺構の番号は、検出時に種別ごとに通し番号を付した。ただし、精査の途上で別種の遺構もしくは遺構ではないと判断されたものについては欠番とした。

遺構の調査にあたっては、遺構の特性や遺存状態に応じて土層観察用の畦を設け、遺構の埋没過程や遺物の出土状況を確認しながら精査した。なお、堆積土は、遺構外の標準土層についてはアルファベット大文字Lとローマ数字の組み合わせ、遺構内堆積土層についてはアルファベット小文字lと算用数字の組み合わせで層位を示した。堆積土の観察には『新版標準土色帖』を参考にし、その表記法に従った。遺跡の測量記録においては、国土座標第IX系の座標値と近隣の三角点を基とする標高を有する基準点を遺跡内に設置した。遺構・遺物の大まかな位置については、国土座標を用いた10m方眼のグリッドによって示した。グリッドは遺跡の北西側のX = 160,980 : Y = 105,700に原点を設定し、その名称は原点からY座標軸沿いに東に向かって算用数字、同じくX座標軸沿いに南に向かってアルファベットを順に付し、それらを組み合わせて表記した。また、遺構図の位置表示については、国土座標の座標値を示している。遺跡の図化について、株式会社シン技術コンサル福島支店に業務を委託した。

遺跡の写真記録は、検出状況、土層断面、遺物出土状況、完掘状況、断ち割りなど調査の過程に応じて隨時撮影している。撮影にはフルサイズ一眼レフデジタルカメラを使用した。撮影ごとにグレースケールを配置し、RAWデータ、JPEGデータで記録している。本書に掲載する遺物写真については、フルサイズ一眼レフデジタルカメラを用い、撮影ごとにグレースケールを配置して撮影した。発掘調査で得られた各種記録や出土遺物は、財团遺跡調査部山下分庁舎において、整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳類を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館（愛称まほろん）に収蔵・保管される予定である。

(佐藤)

引用・参考文献

- 大竹憲治ほか 1994『双葉・塚ノ腰遺跡Ⅱ』福島県双葉町教育委員会
- 大竹憲治ほか 1996『細谷・郡山』福島県双葉町教育委員会
- 大竹憲治ほか 1999『双葉・西原B遺跡』福島県双葉町教育委員会
- 大竹憲治ほか 2002『概要』福島県双葉町教育委員会
- 木村裕之ほか 2017『平成28年度保管場設置工事予定地における埋蔵文化財調査業務報告書（堂ノ上遺跡）』福島県教育委員会 環境省東北地方環境事務所福島環境再生事務所
- 齊田克史ほか 2020『平成31・令和元年度中間貯蔵土壤貯蔵施設等工事予定地における埋蔵文化財調査業務 業務報告書』福島県教育委員会 環境省福島地方環境事務所
- 齋野裕彦 2017『津波災害痕跡の考古学的研究』同成社
- 双葉町史編さん委員会 1984『双葉町史』第二巻原始・古代・中世資料 福島県双葉町
- 双葉町 1997『双葉町史』第一巻通史 福島県双葉郡双葉町教育委員会

第1章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要と基本土層

遺構の概要

今回の発掘調査の結果、弥生時代中期後葉の堅穴住居跡、遺物包含層、古墳時代前期・後期・終末期、奈良・平安時代の集落跡、江戸時代の墓坑、烟跡を確認した。

弥生時代中期後葉の堅穴住居跡は4軒認められ、いずれも丘陵北側の緩斜面に分布している。平面形は不整形で、掘り込みは浅く、当該期の周辺地域の堅穴住居跡と同様の傾向を示している。丘陵北側斜面と裾部には遺物包含層が形成され、弥生土器や石器の他、磨製石剣が出土している。

古墳時代以降では、堅穴住居跡50軒、掘立柱建物跡1棟、鍛冶遺構1基、小穴群をおもに確認した。所属時期は古墳時代前期・後期・終末期と奈良・平安時代があり、集落が断続的に営まれたと考えられる。堅穴住居跡や掘立柱建物跡は丘陵頂部に密集して分布している。調査区北西側の緩傾斜には5軒の堅穴住居跡が散在している。鍛冶遺構は調査区中央の谷地形の傾斜が比較的緩やかな場所を利用して築かれている。調査区北東側の丘陵の突端部の緩傾斜では、小穴が多く分布している。調査区より南側は、丘陵頂部の平坦面が広くなり、後廻A遺跡では同時代の集落跡が確認されていることから、本遺跡で確認された集落跡は調査区より南側に広がると考えられる。

近世では、丘陵頂部の平坦面に密集して塚1基、土坑墓3基、北西側の緩斜面に烟跡2箇所が分布している。

基本土層（図5、写真8）

調査区内の遺構外堆積土のうち、標準的な堆積土について、表土から以下の6層に区分した。

色調及び土質の違いからLⅢ・Ⅳについては番号の後にアルファベット小文字を付した。丘陵頂部の地表から3~4m下位には、仙台層群大年寺層と考えられる砂岩質の岩盤層が確認できた。

LⅠ：現代の表土層である。褐灰色土を基調とし、最上部には植栽林を由来とする森林腐植土が厚く堆積している。層厚は薄い箇所で2~8cm、厚い箇所で20~30cmほどである。

LⅡ：褐灰色土を基調とし、LⅢとの層界付近にはLⅢ粒や炭化物粒を微量に含む。丘陵頂部では安定的に堆積しているが、北側斜面部では層厚が薄く一部は堆積していない。堆積の安定している箇所の層厚は20~30cmほどである。

LⅢ：土質の違いから、LⅢaはにぶい橙色土、LⅢbはにぶい黄橙色砂質土に細分した。弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、近世の遺構検出面である。LⅢaは調査区中央部の沢部と西側丘陵の尾根突端部を除く全域に堆積している。一方、LⅢbの堆積は限定的で、基本土

層③、丘陵頂部の西側にのみ認められる。層厚は10~50cmほどで、最大で70cmを測る。

L IV : 土質の違いからL IV aは明オリーブ灰色粘土、L IV bはオリーブ灰色粘質土に細分した。いずれもグライ化した粘性のある土質を基調とする。L IV aは調査区北東隅部や西側丘陵の尾根部突端を除く全域に堆積している。L IV bの堆積は限定的で、基本土層②、丘陵頂部の一部にのみ認められる。層厚は50~70cmほどで、最大で1mを超える箇所も認められる。

L V : にぶい黄褐色砂を基調とする。丘陵斜面や裾部に立地する弥生時代・奈良・平安時代の遺構検出面である。調査区全域に堆積しており、確認できた箇所での層厚は約50cmである。鉄分を含んだ細砂を基盤とし、約1~3cm大の角礫が多く認められる。

L VI : にぶい褐色砂である。西側丘陵の尾根突端部、基本土層⑦でのみ堆積を確認できた。土質はL Vと近似するが、角礫はほとんどみられず、鉄分を斑状に微量含んだ細砂が帶状に認められる。

(佐藤)

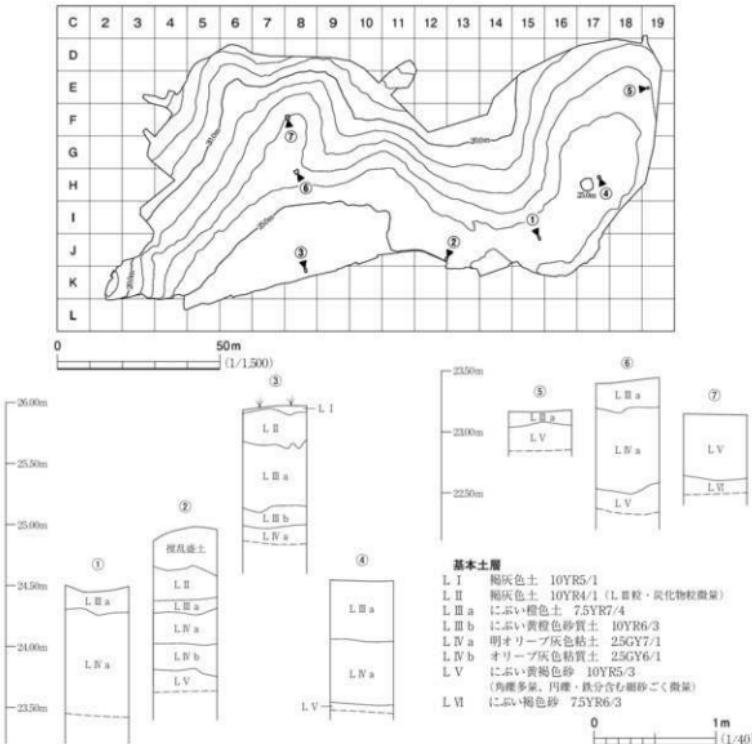


図5 基本土層

第2節 壁穴住居跡

1号住居跡 S I 01

遺構 (図6、写真10・11)

本住居跡は、調査区の南部、I・J-10グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部平坦面に立地する。本住居跡は他遺構との重複関係は認められないが、周辺には、4・6・17号住居跡などが密集して分布している。床面の南側や東壁は、部分的な搅乱によって破壊されている。

L III上面の検出作業により、暗褐色粘質土を基調とした不整形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は方形で、規模は、南北3.10m、東西3.27m、検出面からの深さは最大21cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は6層に分けられた。本住居跡の西側に堆積する ℓ 1は暗褐色粘質土の均一な性状から自然堆積土、 ℓ 2は暗褐色粘質土に褐色土塊が混入することから、人為堆積土と判断した。 ℓ 3は壁ぎわに三角堆積し、L IIIに由来することから壁面の崩落土と考えられる。 ℓ 4は壁溝内堆積土、 ℓ 5の黒褐色土塊を少量に含む明黄褐色粘質土は、貼床である。 ℓ 6の浅黄橙色粘質土塊を少量に含む黄褐色粘質土は掘形の埋土である。

床面はほぼ平坦に構築されており、特に住居中央から北側は硬く締まっていた。中央部には、厚さ2cmほどの貼床が確認できた。掘形は床面全体で認められたが、東壁ぎわの一部はステップ状の高まりとして残されていた。床面から掘形底面までの深さは最大28cmを測る。

本住居跡に付属する施設として、床面から壁溝、ピット3基(P 1~3)を確認した。

壁溝は南西側の周壁に沿い、「コ」字状に位置する。規模は最大幅25cm、床面からの深さは最大5cmほどを測る。

床面から検出されたピットは、いずれも位置や規模に規則性は認められない。中央部より北側に位置するP 1は平面形が梢円形で、規模は長径66cm、短径46cm、深さ11cmである。堆積土には焼土塊を多量に含んでいた。P 2は平面形が梢円形で、規模は長径38cm、短径33cm、深さ15cmである。堆積土には、炭化物粒を少量に含む。P 3は長径33cm、短径27cm、深さ11cmを測り、床面から垂直に掘り込まれていることから、柱穴の可能性も考えられる。

P 1より南側の床面からは、カマドの構築材と思われる粘土塊が出土しているが、カマドの痕跡は確認できなかった。

遺物 (図6、写真113)

本住居跡からは、弥生土器5点、土師器126点、須恵器2点、陶磁器1点、石器・石製品2点、土製品2点が出土している。このうち、土師器6点、土製品2点を図示した。

西壁中央付近の床面からは、図6-4の土師器杯が伏せられた状態で出土している。また、西壁ぎわの床面に土師器片が集中して出土している。

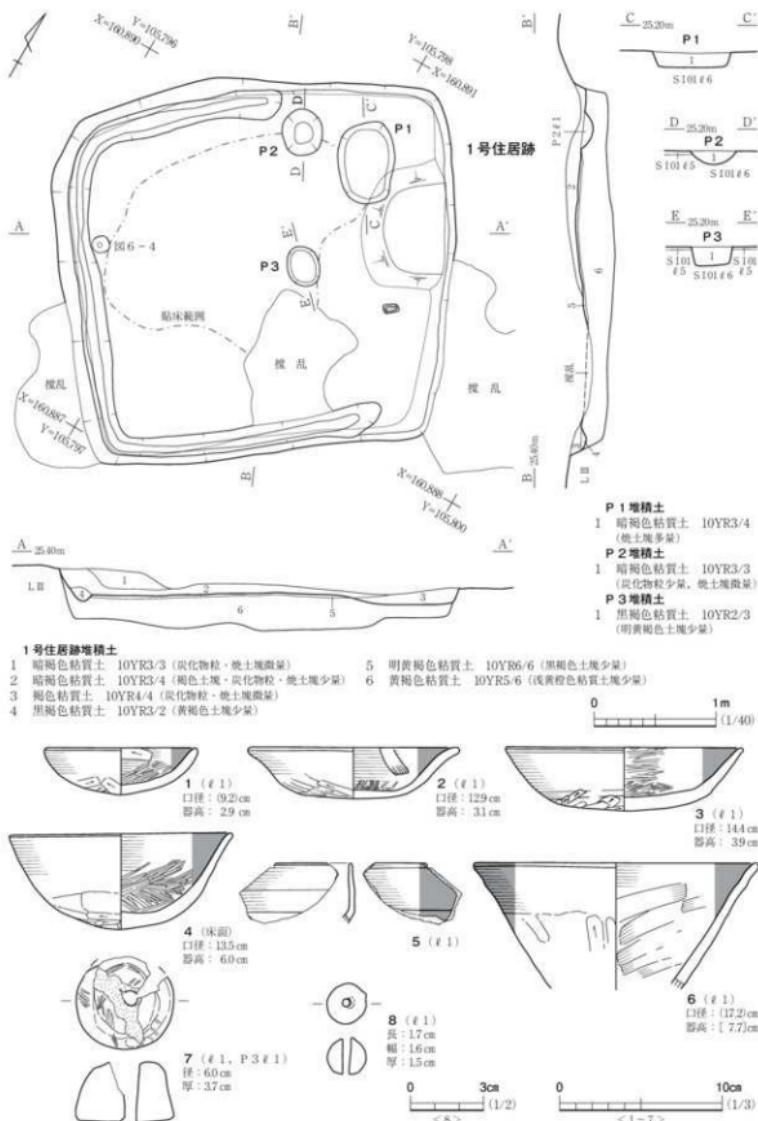


図6 1号住居跡・出土遺物

図6-1～5は土師器の杯である。1～4の口縁部の内外面にはヨコナデが認められ、底部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。1は丸底で、肥厚しながら短く立ち上がる。口縁部内面にはヘラケズリが施されている。2は薄手の平底で、口縁部は肥厚しながら外反している。口縁部内面には斜位のユビナデが施されている。3は丸底から直線的に外傾する。体部外面にはわずかに稜が認められる。4は丸底の椀形で、体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。5は口縁部とした。薄手で、体部には明晰な稜があり、そこから垂直に口縁端部まで立ち上がる。内外面にヨコナデ、内面には黒色処理が施されている。

同図-6は土師器の鉢とした。底部は欠失している。直線的に外傾しながら立ち上がる。口縁部付近の内外面にはヨコナデ、胴部外面にはヘラケズリ、内面にはユビナデが施されている。内外面には、黒色処理が施されている。

同図-7は土製品の紡錘車である。全面を丹念なミガキで調整している。

同図-8は土製品の丸玉である。中央部にある貫通孔は、片側から穿孔している。

まとめ

本住居跡は、住居群が密集して分布する丘陵頂部平坦面に立地する。平面形は方形を基調とし、規模は南北3.10m、南西3.27mである。カマドは認められないが、床面の踏み締まりが強いことから一定程度の期間、利用されたものと考えている。所属時期は、出土遺物から奈良時代、8世紀と考えられる。

(吉野)

2号住居跡 S I 02

遺構(図7、写真12・13)

本住居跡は、調査区の南東隅部、J・K-16グリッドの12号住居跡の堆積土最上面で検出された。北東側に延びる丘陵の南東側の緩斜面上に立地する。12号住居跡とは入れ子状に重複し、本住居跡が新しい。

北東側3mには1号建物跡が位置している。本住居跡の南端部は、近代の道路によって削平され、遺存していない。

本住居跡は当初、1軒の住居跡として調査を開始したが、土層観察用の畦を残して床面まで検出した際、住居跡床面中央部に一回り小さな方形の範囲を確認した。さらに土層観察用の畦に小さな方形の範囲に対応する壁の立ち上がりが確認されたことから、重複する2軒の住居跡の存在が明らかとなった。このことから、本住居跡は12号住居跡の堆積土及び床面を掘り抜いて構築されていると判断した。

本住居跡の平面形は方形で、比較的小型の住居跡である。規模は、遺存の良好な東西で2.80m、検出面から床面までの深さは最大59cmである。周壁の立ち上がりは、床面から50～80度と急である。

住居内堆積土は2層に分層された。 ℓ 1は12号住居跡の堆積土に類似した黒褐色粘質土で、LⅢに由来する明黄褐色土塊が少量に含まれていることから、人為堆積土と思われる。 ℓ 2は黒褐色

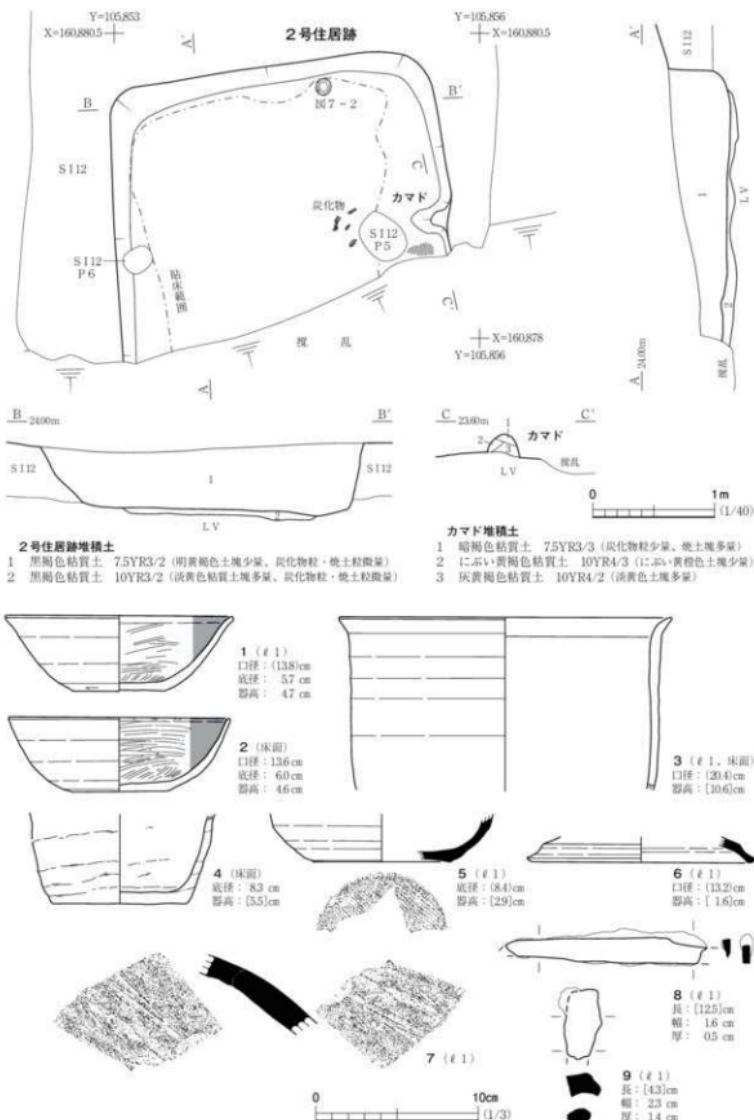


図7 2号住居跡・出土遺物

粘質土と淡黄色粘質土塊の混合土で、貼床である。

床面はやや凹凸はあるものの、おおむね平坦である。踏み締まりは弱く、周壁ぎわを除く大部分に貼床が認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基を確認した。

カマドは住居東壁で検出されたが、煙道は確認できず、わずかに左袖の基底部と燃焼部の底面が遺存していた。左袖の遺存する規模は、長さ29cm、幅22cm、床面からの高さ20cmである。左袖は暗褐色や灰黄褐色の粘質土を積んで構築されている。燃焼部の底面には焼上面が確認できた。平面形は梢円形で、規模は長径22cm、短径8cmである。被熱は非常に弱く、厚さは1cm未満であった。

遺物（図7、写真113・146）

本住居跡からは、弥生土器24点、土師器468点、須恵器10点、石器・石製品5点、鉄製品4点が出土している。このうち、土師器4点、須恵器3点、鉄製品2点を図示した。

北壁ぎわの床面からは図7-2の土師器の杯が、カマド左袖付近の床面からは、同図-4の土師器の鉢が出土している。

図7-1・2は土師器の杯である。ロクロ成形で、平底から直線的に立ち上がる。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。1の体部下端は、回転ヘラケズリで再調整されている。

同図-3は土師器の甕である。ロクロ成形で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。

同図-4は土師器の鉢とした。上部は欠失している。底面は砂底で、体部は急な角度で立ち上がる。外面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。

同図-5は須恵器の杯である。湾曲しながら立ち上がる。底部切り離しは静止糸切りである。

同図-6は須恵器の蓋である。外面には稜が認められる。

同図-7は須恵器の甕である。体部上半の小片で、外面には平行タタキ、内面にはユビオサエ、ユビナデが施されている。

同図-8・9は鉄製品である。8は刀子で、峰側の茎部は刃部に向かわざかに湾曲している。9は釘の可能性がある。上端は平坦である。

まとめ

本住居跡は、北東側に延びる丘陵の南東側の緩斜面上に立地する。12号住居跡の中心を掘り込んで構築し、平面形は方形を基調とし、規模は遺存の良好な東西で280mである。規模やカマド位置の傾向は29号住居跡と類似する。本住居跡の所属時期は、床面から出土した図7-1・2のロクロ成形の土師器杯から平安時代、9世紀前半と考えられる。

（吉野）

3号住居跡 S I 03

遺構（図8、写真14）

本住居跡は、調査区の南東隅部、J・K-15グリッドのLⅢ上面で検出された。北東側に延びる丘陵の南側の緩斜面上に立地する。8号住居跡と入れ子状に重複しており、本住居跡が新しい。

本住居跡の北東側約10mには、5号住居跡が位置している。本住居跡の南西側は近代の道路によつて削平され、遺存していない。L III上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は方形を基調とし、規模は南北4.27m、東西4.15m、検出面からの深さは最大で37cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土で、レンズ状の堆積から自然堆積土と考える。 ℓ 2は褐灰色土で、黄褐色土塊や焼土粒を多量に含むことから、人為堆積土と判断した。 ℓ 3は褐灰色土で、黄褐色土塊や焼土粒を多量に含むことから、人為堆積土と判断した。

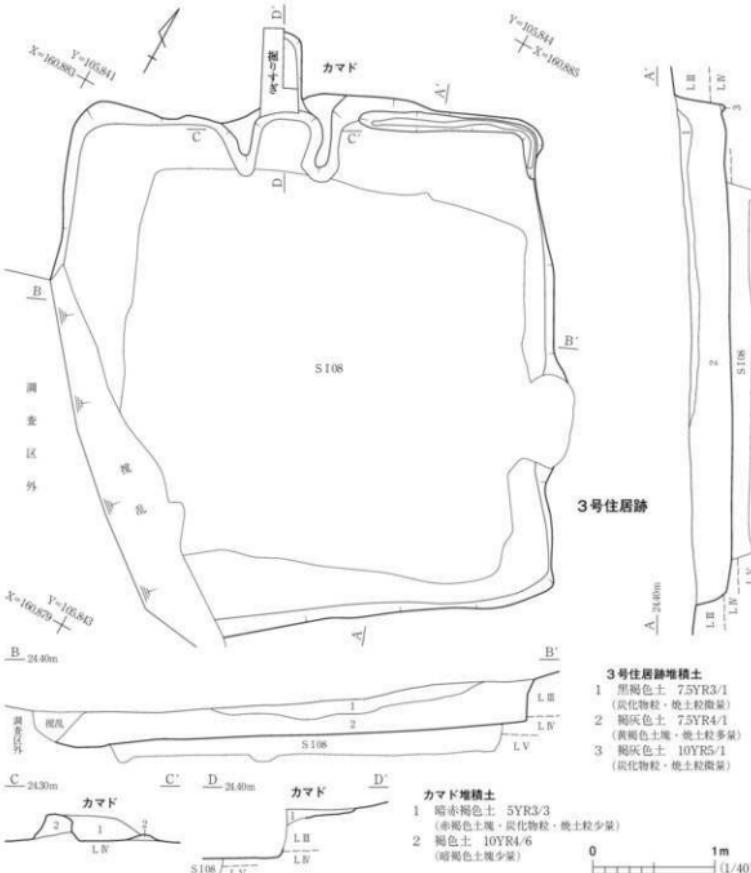


図8 3号住居跡

は壁溝内堆積土である。

床面はL IV上面まで掘り込み、ほぼ平坦に構築されている。住居中央部は、8号住居跡の埋土の最上部を床面としている。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基と床面から塙溝を検出した。

カマドは、住居跡の北壁中央に構築される。木根による破壊や掘りすぎにより、煙道の一部は遺存していない。カマドの両袖は壁に対し直角に延び、遺存する規模は、左袖が長さ50cm、最大幅40cm、床面からの高さ18cm、右袖が長さ72cm、最大幅30cm、床面からの高さは4cmである。両袖基部間の幅は108cmを測る。両袖ともに褐色土を基調とした土により構築されている。また、燃焼部の底面に被熱痕跡は認められなかった。煙道は壁から直角に延び、規模は長さ65cm、検出面からの深さは11cmである。底面は住居跡の外側に向かって緩やかに立ち上がっている。

カマドの堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒などを少量に含む暗赤褐色土で、カマドの天井崩落土と判断した。 ℓ 2は暗褐色土塊を少量に含む褐色土で、両袖の構築土である。

北隅部周辺には、塙溝が確認されている。平面形は「L」字状で、規模は最大幅17cm、床面からの深さは最大5cmほどを測り、断面形は「U」字形である。

遺 物（図9、写真113・146）

本住居跡からは、弥生土器1点、土師器613点、須恵器29点、石器・石製品3点、鉄製品2点が出土している。このうち、土師器4点、須恵器5点、石製品1点、鉄製品2点を図示した。

図9-1は土師器の高杯である。杯部は椀形で、脚部上半は棒状となり、袖部で「八」字状に開く。脚部の中実部には貫通孔を穿つ。内外面の口縁部付近はヨコナデ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2・3は土師器の甕である。2の体部は垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面の口縁部付近はヨコナデが施されている。3の口縁部は緩やかに外傾する。内外面の口縁部付近はヨコナデが、体部外面にはハケメが施されている。

同図-4は筒形土器である。体部は垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに外傾する。内外面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。

同図-5は須恵器の杯である。平底で、湾曲しながら立ち上がる。底部付近は回転ヘラケズリで調整され、底部切り離しは静止糸切りである。

同図-6～9は須恵器の壺である。6は口縁部付近の小片で、端部はわずかに内傾する。7は頸部付近で、体部との接合部で剥離している。内面下端部には、体部と接合する際の連続したユビオサエが認められる。8・9は体部上半で、いずれも球形を呈する。9の外側の肩部には自然釉が認められ、内面には丁寧なカキメによる調整が施されている。

同図-10は砥石である。4面を砥面とし、下端から上端に向けて薄くなる。上端部は破損しており、破断した部分は再度、砥面として利用している。

同図-11・12は鉄製品である。11は韋形を呈し、中央に軸棒状の突起が付く。軸棒の下端部に

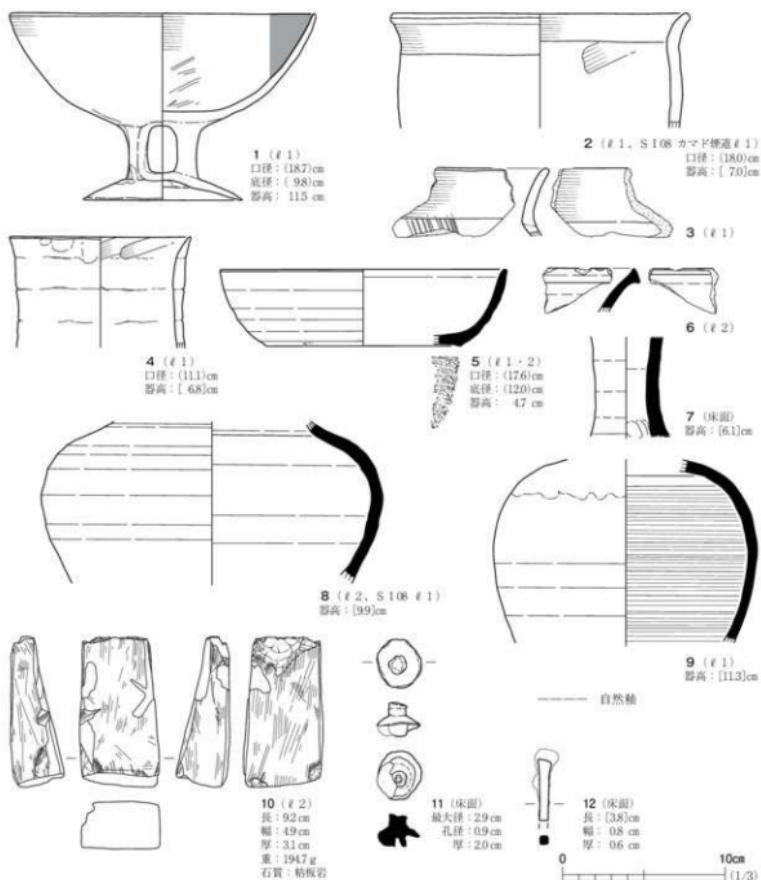


図9 3号住居跡出土遺物

は盲孔がある。飾り金具や、釘隠しの金具の可能性がある。12は釘で、断面形は正方形である。下端は欠損している。

まとめ

本住居跡は、北東側に延びる丘陵の南側の緩斜面上に立地する。平面形は方形基調で、規模は南北4.27m、東西4.15mで、本遺跡では主体的な規模である。本住居跡の軸方向とカマドの位置は、5号住居跡と類似する。本住居跡の所属時期は、出土遺物から古墳時代終末期～奈良時代初頭、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

(吉野)

4号住居跡 S I 04

遺構（図10、写真15）

本住居跡は調査区中央部のJ-10グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡と重複する遺構は認められないが、北西側1mには近接して16号住居跡が位置している。

後世の宅地造成による搅乱が著しく、遺存状況は不良である。LⅢ上面の検出作業で貼床や掘形などの範囲や、カマド袖の焚口の構築材とみられる白色粘土が遺存していたことから、住居跡として認識した。本住居跡の南東半部は調査区外の南側に延びており、調査区内で遺存していたのは、住居西壁の一部、貼床・掘形、床面のピット、カマド燃焼部の底面、両袖の焚口の構築材である。

本住居跡の平面形は、遺存する掘形から類推すると方形を基調としていたと考えられる。検出面から床面までの深さは最大で17cmを測る。周壁の中で唯一遺存している西壁は、急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒や焼土粒を微量に含む褐灰色土である。LⅡと性質が類似することから、自然に流入した土と判断した。 ℓ 2はLⅢ粒を微量に含む黒褐色土で、三角堆積を示すことから流れ込んだ土と判断した。貼床とした ℓ 3は、炭化物粒を微量に含む灰黄褐色粘質土で薄く帯状に認められる。 ℓ 4は灰黄褐色土と黒褐色土の混合土で、住居掘形の埋土と判断した。

貼床は住居中央部やカマド燃焼部の前面に水平かつ平坦に貼られており、厚さは最大で7cmである。掘形は床面中央付近を残し、住居壁面に沿って幅広の周溝状に掘り込まれている。規模は東西4.41m、周溝の幅は狭い箇所で79cm、広い箇所で138cmである。床面からの深さは最大で14cmを測る。掘形の底面は凹凸が顕著に認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基と床面からピット1基(P1)、掘形底面からピット1基(P2)を確認した。

カマドは住居北壁の中央付近に設けられている。後世の搅乱により、遺存しているのは燃焼部と、両袖の先端部に付設された白色粘土の焚口の構築材のみである。燃焼部の規模はいずれも遺存値で、長軸99cm、短軸95cmである。両袖の焚口の構築材間の幅は54cmである。白色粘土には掘形が認められ、燃焼部の平面形は不整円形で、深さは6~10cmを測る。堆積土は炭化物粒・焼土粒を微量に含む黒褐色土で、構築材の掘形埋土である。

P1はカマドの南西側に位置する。平面形は不整円形で、直径20cm、床面からの深さは8cmである。堆積土はLⅢ粒を微量に含む黒褐色土で、住居内堆積土 ℓ 2と近似する。性格は不明である。

P2は北隅部付近に位置する。平面形は楕円形で、長径53cm、短径34cm、床面からの深さは9cmである。堆積土は黒褐色土粒を微量に含む明褐灰色粘質土で、住居内堆積土 ℓ 4と近似する。性格は不明である。

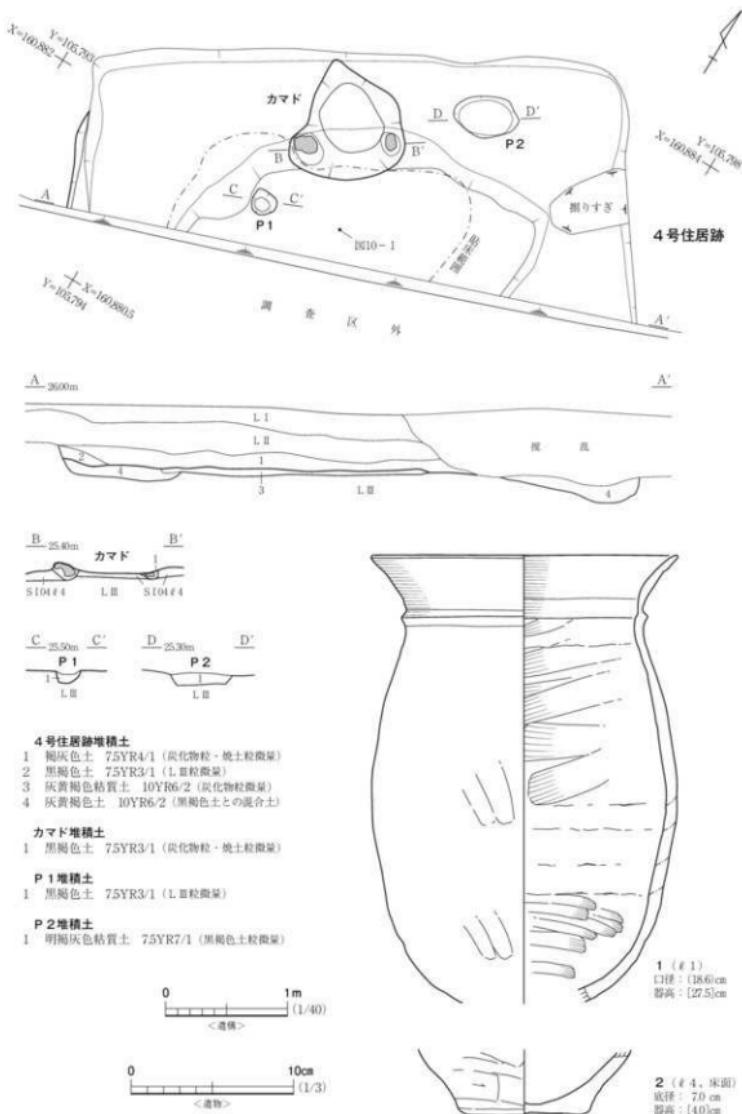


図10 4号住居跡・出土遺物

遺物 (図10、写真114)

本住居跡からは弥生土器6点、土師器73点、須恵器2点、石器・石製品3点が出土した。このうち、土師器2点を図示した。

カマドの前面付近からは、図10-1の土師器壺が横倒しになった状態で出土している。

図10-1・2は土師器の壺である。1は体部が長胴で、最大径は体部中央に位置し、上半は内傾する。頸部には明瞭な段を持ち、口縁部は外反する。調整は内外面の口縁部付近にヨコナデ、体部の外面にヘラケズリ、内面にはユビナデが施されている。2は底部付近の小片で、平底から直線的に立ち上がる。外面には横位のヘラケズリが施されている。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地し、その大半は調査区外に位置している。後世の擾乱により遺存状況が悪く、周壁の一部と貼床・掘形のみを確認した。掘形は住居壁面に沿って掘り込まれ、床面中央付近は掘り残すように構築される。カマドの焚口の構築材には白色粘土を使用し、本遺跡内におけるカマドの構築方法と合致する。本住居跡の所属時期は、図10-1の土師器壺の特徴から古墳時代後期～終末期、6世紀末～7世紀前半と考えられる。

(佐藤)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図11・12、写真16・17)

本住居跡は調査区の南東部、I・J-16、J-17グリッドのL III上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の平坦部に立地している。本住居跡は、1号建物跡とJ 16 G P 4・17・18が重複しているが、いずれよりも古い。本住居跡の南西側5mには、12号住居跡が位置している。

本住居跡はL III上面の検出作業により、にぶい黄褐色粘質土を基調とし部分的に灰白色粘土塊を含む方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北で3.56m、東西で3.64m、検出面から床面までの深さは最大32cmを測る。周壁はいずれも床面から急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は4層に分けられた。ℓ 1は、L IIIに由来するにぶい黄褐色粘質土と、L IIに由来する褐色土塊、L IVに由来する灰白色粘土塊の混土である。その堆積状況から人為堆積土と判断した。ℓ 2は壁ぎわに三角堆積していることから、壁面の崩落土と考えられる。ℓ 3は壁溝堆積土、ℓ 4は貼床を構築した土である。

床面はほぼ平坦であり、全体に貼床がなされている。本住居跡はL IIIを掘り込み、掘形底面はさらに下層のL IVに達している。

本住居跡に付属する施設は、カマド1基、床面から壁溝、ピット3基(P 1～3)を検出した。

カマドは北壁の西側に構築される。煙道は部分的に削平され、カマド袖の一部と燃焼部、及び煙道の一部が遺存している。右袖と燃焼部の先端部は、J 16 G P 17により破壊されている。規模は左袖が長さ55cm、最大幅18cm、床面からの高さ15cm、右袖が長さ47cm、最大幅16cm、床面からの

高さ12cmである。カマドの幅は63cmを測る。燃焼部の底面は平坦だが、奥壁に向かって3cmほど落ち込み、その後煙道に向かって急な角度で立ち上がる。カマドの構築方法は、袖部の焚口の構築材として浅黄色粘土塊を使用し、床面に粘土を立てる掘形を設け焚口の構築材を固定したうえで袖を造っている。浅黄色粘土塊は、その性状から遺構周辺で確認されたLIV由來の粘土を利用したものと判断した。燃焼部底面は貼床で、焼上面は燃焼部中央付近で検出された。平面形は不整梢円形で、規模は長径44cm、短径33cm、厚さは最大2.5cmであることを断ち割りで確認した。煙道の規模は、長さが遺存値で60cm、幅が18cm、検出面からの深さ6cmである。

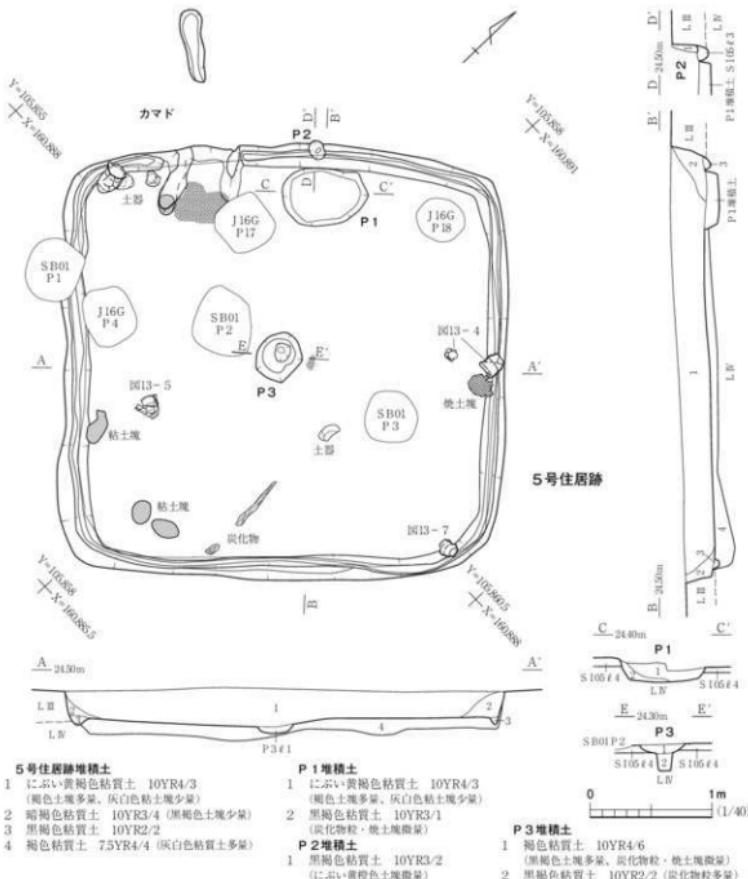


図11 5号住居跡

カマド堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒・焼土塊などを微量に含むにぶい黄褐色粘質土、 ℓ 2は黒褐色粘質土を主体とし焼土塊を少量に含むことから、いずれもカマド天井の崩落土と判断した。 ℓ 3はにぶい黄橙色土塊・焼土塊を少量に含む灰黄褐色粘質土で、煙道天井の崩落した土と判断した。 ℓ 4は黒褐色土塊を多量に含む褐色粘質土で、カマド袖の構築土である。

壁溝はカマド周辺を除いて壁ぎわ全周にあり、規模は幅6~14cm、深さ10cmほどである。

カマド右袖に近接して位置するP1は、その位置や規模から貯蔵穴と判断した。平面形は楕円形で、浅い土坑状のくぼみである。規模は長径72cm、短径47cm、深さ16cmである。堆積土は2層に分けられ、いずれにも土塊や炭化物粒を含むことから、人為堆積土と判断した。

P2は北壁ぎわの中央部にあり、壁溝の堆積土を掘り込んで構築される。平面形は不整円形で、直径16cm、深さ20cmである。堆積土は黒褐色粘質土の単層である。

P3は床面のほぼ中央付近に掘り込まれ、その位置や規模から柱穴の可能性がある。平面形は不整円形で、播鉢状に浅く掘り込まれ、中心部には円筒状の小穴が垂直に掘り込まれていた。規模は直径40cm、床面からの深さは21cmで、円筒状の小穴は直径12cm、深さは14cmである。断面形は漏斗状である。堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は褐色粘質土で、黒褐色土塊を多量に含む。 ℓ 2は

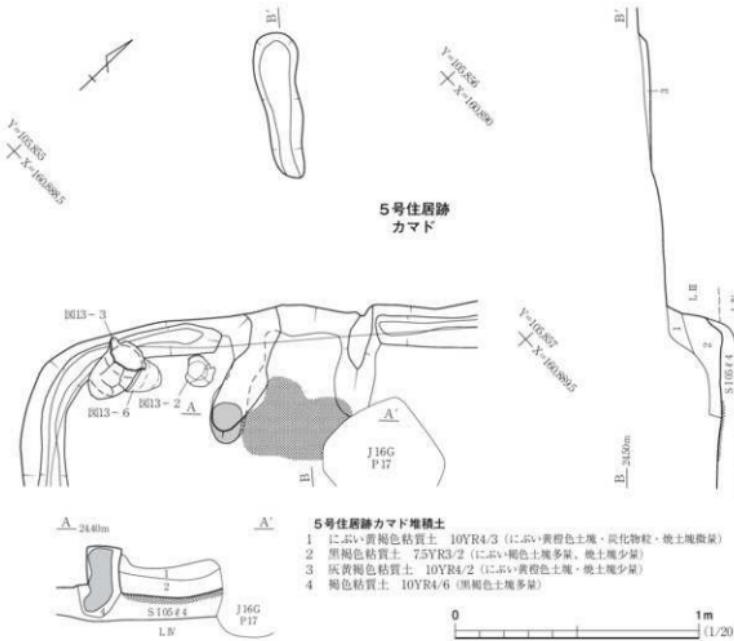


図12 5号住居跡カマド

炭化物粒を多量に含む黒褐色粘質土で、中心の小穴を埋めている。また、P 3 の北東側の床面には、長さ 12cm、最大幅 6cm の半月状の範囲がピットに沿って焼土化している。

遺 物 (図13、写真114・115)

本住居跡からは弥生土器 15 点、土師器 357 点、石器・石製品が 7 点出土している。このうち、土師器 7 点を図示した。

カマド左袖の外側の床面からは、図13-3・6 の土師器の甕が斜めに重なるように出土している。他に床面や壁溝上面付近からは、同図-1・2・4・5・7 が出土している。

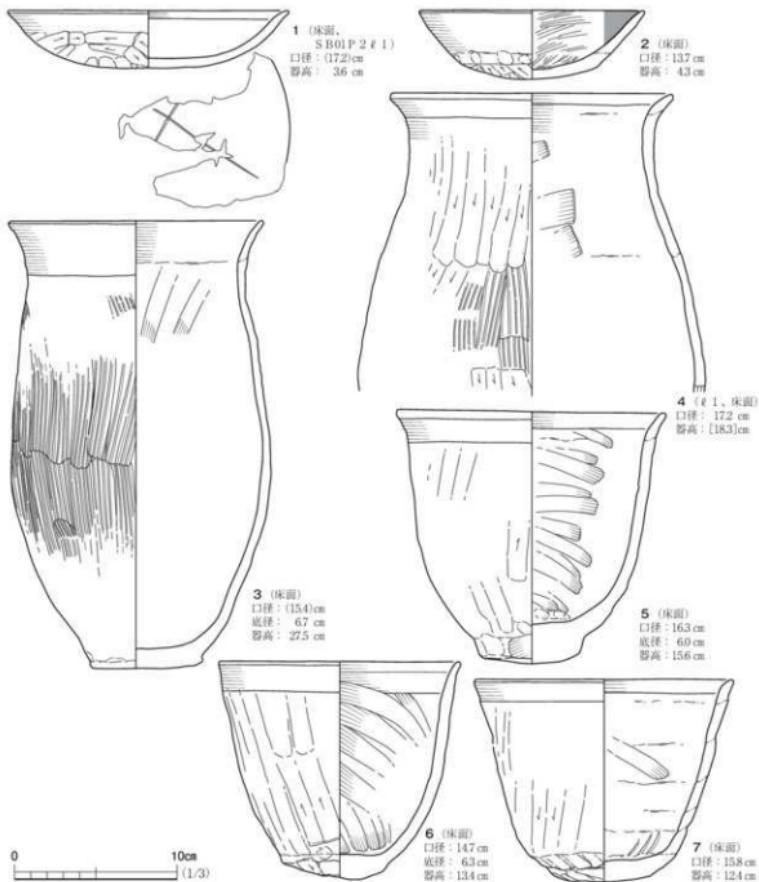


図13 5号住居跡出土遺物

図13-1・2は土師器の杯である。1は丸底の皿形で、口縁端部がわずかに外反する。口縁部の内外面にはヨコナデが、体部から底部にかけての外面には、ヘラケズリが施されている。底部外面の中央部には、「×」の線刻が認められる。2は丸底で、体部は直線的に立ち上がる。外面の口縁部から体部上半にかけてヨコナデが施され、底部は連続したユビオサエとヘラケズリで調整されている。内面には丹念なヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-3~7は、土師器の甕である。3・4はいずれも下膨れ状の長胴で、口縁部は緩やかに外傾している。口縁部付近の内外面にはヨコナデ、外面にはハケメやヘラケズリが施されている。5~7はいずれも小型で、丸底から急な角度で立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内外面の口縁部付近には、ヨコナデが、外面にはヘラケズリ、内面にはユビナデが施されている。7の内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められ、底部周縁にはヘラ状工具が接した痕跡が確認できる。

まとめ

本住居跡は、北東方向に延びる丘陵の平坦部に立地している。平面形は、隅丸方形を基調とし、規模は南北で3.56m、東西で3.64mである。カマドは北壁にみられ、左袖の外側からは、土師器の甕がまとまって出土している。カマドの位置する部分以外には全周に壁溝があり、床全面に貼床が施されていた。また、住居の中央には柱穴とみられる円形のビットが確認されている。本住居跡の所属時期は、床面から出土した図13-1~7の土師器の特徴から、奈良時代初頭、8世紀初頭頃と考えられる。

(吉野)

6号住居跡 S I 06

遺構(図14~17、写真18~21)

本住居跡は調査区中央部のI・J-10グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部の平坦面の北側縁部に立地する。本住居跡と重複する遺構はないが、南東側に隣接して1号住居跡が位置している。

LⅢ上面の検出作業により、褐灰色土を基調とした方形の範囲とカマドの煙道を確認した。遺存状況は良好である。調査の結果、1度の建て替えが確認でき、住居を東側へ拡張した様子が認められた。拡張後を6a号住居跡、拡張前を6b号住居跡として報告する。

6a号住居跡 本住居跡の平面形は方形である。規模は南北5.93m、東西6.15m、検出面から床面までの深さは最大で22cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、直線的に整えられているが、南壁はややいびつである。

6a号住居跡の堆積土は2層に分けられた(6号住居内堆積土ℓ1・2)。いずれも人為堆積土である。ℓ1はLⅢ塊を微量に含む褐灰色土で、住居全体を覆う土である。ℓ2はLⅢ塊を微量に含む黒褐色土で、壁溝を覆う土である。床面は、6b号住居跡堆積土のℓ3が貼床に相当し、その上面とLⅢを平坦に整えて塗かれ、全面に踏み締まりが認められた。

本住居跡に付属する施設として、カマド2基(カマド1・2)、床面から壁溝、ビット5基(P1~

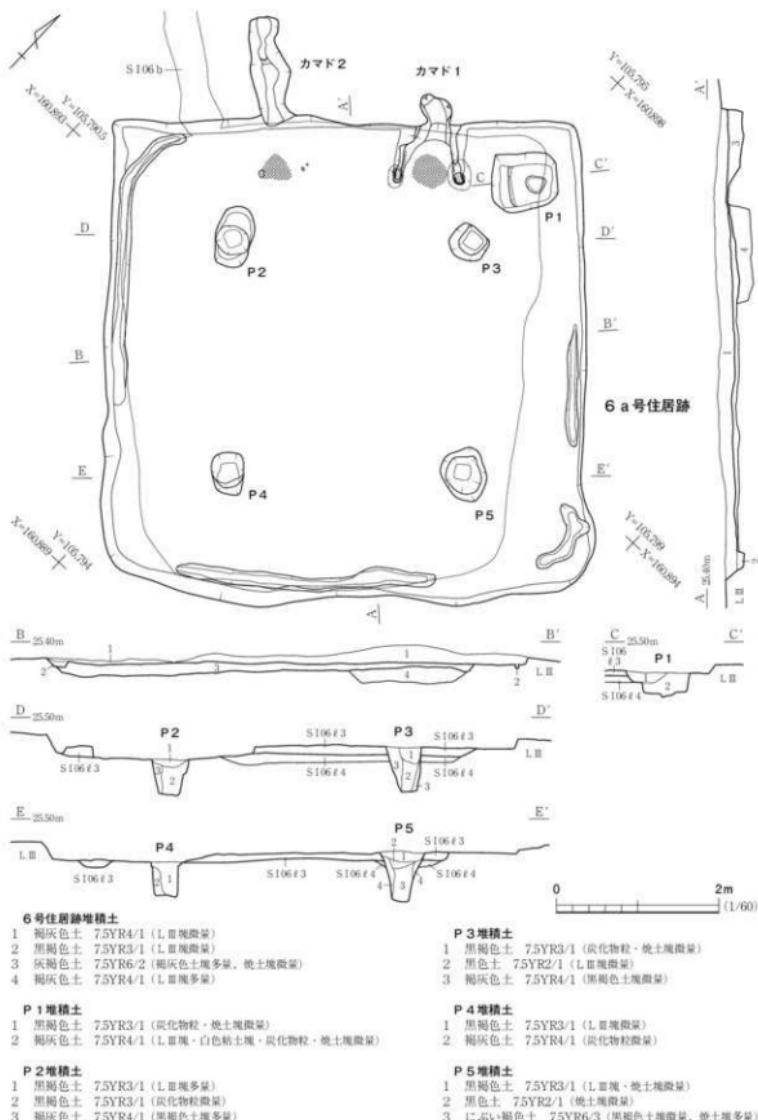


図14 6a号住居跡

5)を確認した。

カマド1は住居北壁の中央よりやや北側に位置する。燃焼部の天井は人為的に破壊されていた。燃焼部は6 b号住居跡堆積土とL IIIを底面としている。両袖が遺存し、いずれも北壁から直角に構築される。規模は向かって右側の袖が壁から73cm、左側が70cm、基部間の幅は最大86cmで、高さは10cmを測る。両袖ともにL III塊や白色粘土粒を含んだ土によって構築され、先端には棒状の白色粘土を垂直に据え置き、焚口の構築材としている。焼土面は、両袖の先端を結ぶ線の中央に位置する。平面形は梢円形で、中心部は被熱により硬化が認められる。規模は長径42cm、短径38cmで、最大4cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。

煙道は北壁に対し、やや西に向かう弧状に掘り込まれ、規模は長さ37cm、幅は最大で34cmである。煙道は、燃焼部底面から先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド1の堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は白色粘土塊や炭化物粒、焼土塊を微量に含む褐灰色土で、カマドの天井崩落土と判断した。 ℓ 2は炭化物粒や焼土塊を多量に含む、黒褐色土である。燃焼部底面に薄く堆積しており、カマド機能時に堆積したものと判断した。 ℓ 3は褐灰色土塊や炭化物粒、焼土塊を微量に含む褐灰色土で、焚口の構築材設置に伴う掘形の埋土である。

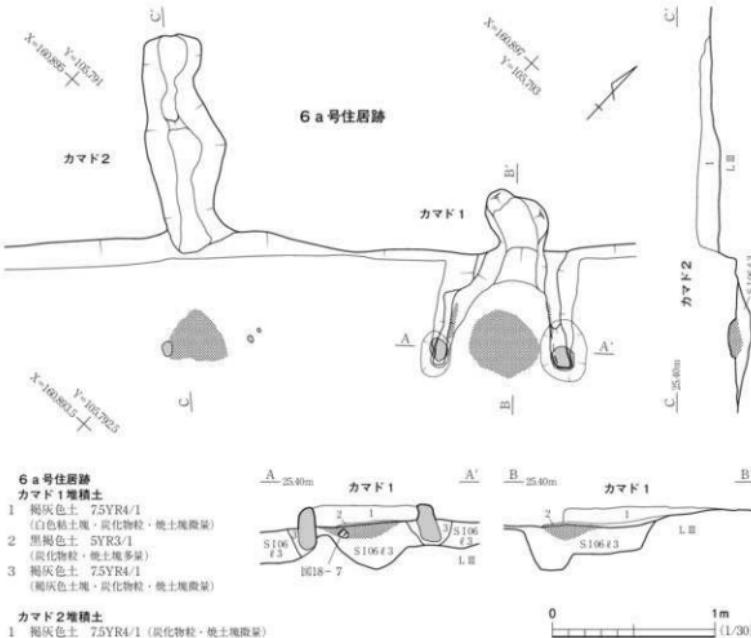


図15 6 a号住居跡カマド

カマド2は住居北壁の中央よりやや西側に位置する。燃焼部の天井や両袖は人為的に破壊され、焼土面と、両袖の焚口の構築材とみられる白色粘土の残骸が散在していた。また、焼土面の周辺には、カマド2を由来とする焼土粒・炭化物粒・白色粘土粒がまばらに分布していた。焼土面は煙道の延長線上に位置する。平面形は不整三角形で、中央部が盛り上がり、断面形は逆台形である。規模は一辺34cmで、最大4cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は北壁に対し直角に掘り込まれる。規模は長さ132cm、幅は最大で49cmを測る。煙道は先端に向けてきわめて緩やかに立ち上がる。カマド2の堆積土は炭化物粒や焼土塊を微量に含む褐灰色土の単層で、屋外からの流れ込みや煙道天井の崩落した土の混合土と判断した。

壁溝は北壁のカマド1・2やP1の周辺を除き、断続的に掘り込まれる。幅は最大で24cm、床面から底面までの深さは最大で8cmである。

住居の北隅部、カマド1の右袖に近接するP1は、位置と規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は隅丸長方形を基調とし、規模は長軸80cm、短軸72cm、床面からの深さ29cmを測る。P1底面には梢円形の浅いくぼみがあり、カマド側はテラス状の段差がある。堆積土は黒褐色土や褐灰色土で、炭化物粒や焼土塊などを微量に含むことから、人為堆積土と判断した。

P2～5は対角線上に1間四方に配置された4基のビットで、主柱穴と考えられる。平面形は不整梢円形で、規模は長径44～75cm、短径39～53cm、床面からの深さが43～63cmを測る。いずれの柱穴も柱痕が認められる。堆積土は褐灰色土や黒褐色土などを基調とし、LⅢ塊や炭化物粒、焼土塊を含むことから、人為堆積土と判断した。柱間の間隔は2.25～2.42mで、柱の配置はおおむね正方形を描く。

6 b号住居跡 本住居跡の平面形は北西・南東方向に長辺を持つ隅丸長方形である。規模は長辺である南北が5.76m、短辺である東西が5.18m、検出面から床面までの深さは最大で15cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

6 b号住居跡の堆積土は2層に分けられた(6号住居内堆積土ℓ3・4)。ℓ3は褐灰色土塊を多量に含む灰褐色土で、6 b号住居跡全体を埋めて、上面は6 a号住居跡の床面とした土である。ℓ4はLⅢ塊を多量に含む褐灰色土を基調とし、6 b号住居跡に伴う掘形の埋土である。いずれも人為堆積土である。

床面は平坦で、踏み締まりが認められる。床面の掘形は北半部に認められ、北壁や東壁に並行した不整な溝状を呈する。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基(カマド3)、床面から壁溝、ビット4基(P6～9)を確認した。

カマド3は北壁の西端に位置する。燃焼部の天井や両袖は遺存していなかった。燃焼部の底面には、カマド3 P1が認められ、カマドを壊した際の掘り込みにより生じた可能性がある。カマド3 P1の平面形は梢円形で、規模は長径84cm、短径58cm、深さは最大で16cmを測る。堆積土は2層に分けられ、いずれも白色粘土塊や焼土塊を微量に含む褐灰色土で、カマド構築土に由来すること

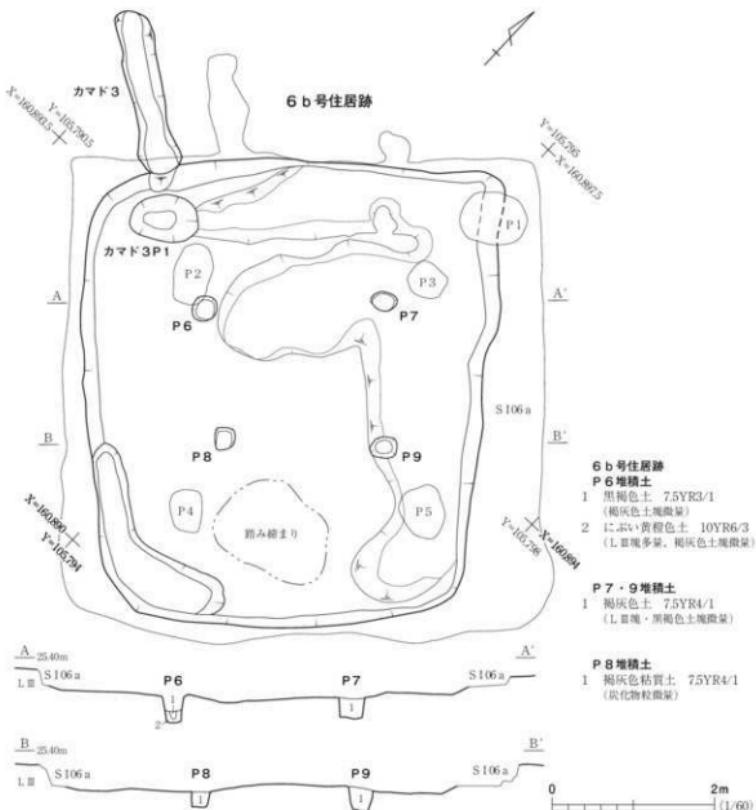


図16 6 b号住居跡

から、カマド3は人為的に破壊されていたと考えられる。煙道は北壁に対し直角に掘り込まれる。規模は長さ203cm、幅は最大で52cmを測る。煙道底部は水平かつ平坦である。カマド3煙道の堆積土はL III塊や炭化物粒や焼土塊を微量に含む褐灰色土の単層で、屋外からの流れ込みと煙道天井の崩落した土の混合土と判断した。

壁溝は南隅部付近に掘り込まれる。幅は最大で77cm、床面からの深さは最大で18cmである。

P 6～9は対角線上に1間四方に配置され、主柱穴と考えられる。柱間の間隔は1.30～1.90mで、柱の配置はいびつな長方形を描く。平面形は方形や楕円形を基調とし、規模は25～32cm。床面からの深さは18～33cmを測る。いずれの柱穴も柱痕は認められない。堆積土は褐灰色土や黒褐色土を基調とし、L III塊や炭化物粒を含むことから、柱を抜き取り後の人為堆積土と判断した。

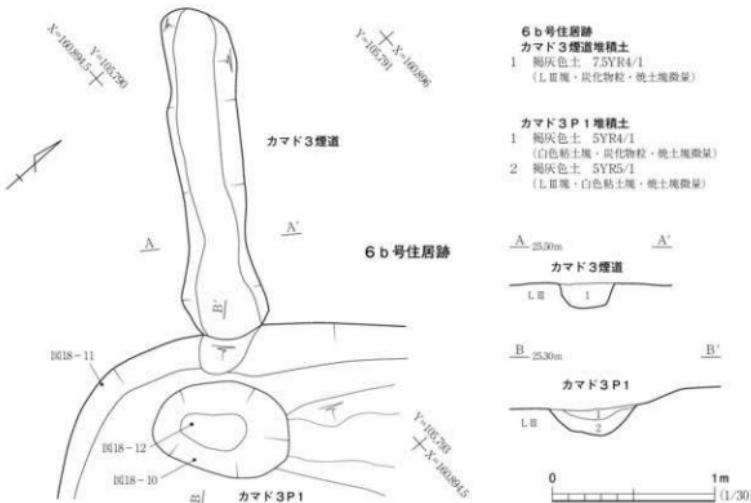


図17 6b号住居跡カマド

遺 物 (図18、写真115・146・150)

本住居跡からは弥生土器73点、土師器530点、石器・石製品16点、鐵製品1点が出土した。このうち、土師器12点、石器2点、鐵製品1点を図示した。

カマド3P1の付近からは、手づくね土器(図18-10～12)が3点出土している。図18-10は、カマド3P1の堆積土最上面から斜位に出土している。カマドの廃絶に伴う儀礼の可能性がある。カマド燃焼部直下の住居掘形覆土中からは、同図-7の土師器壺が破片で出土している。

図18-1は土師器のロクロ成形の杯である。平底で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面底部付近には、回転ヘラケズリが、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。底部外面には、「万」の墨書が認められる。

同図-2・3は土師器の杯である。2は丸底で外傾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁部の内外面にはヨコナデ、外面の体部から底部はヘラケズリが施され、粘土紐の積み上げ部分を連続したユビオサエで調整している。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されているが、斑状である。3は平底ぎみで、湾曲しながら立ち上がり、口縁部で外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデ、外面にはヘラケズリが施され、工具方向は底部付近が継位、体部付近が斜位である。内面には丹念なヘラミガキのち黒色処理が施されているが、斑状である。

同図-4は土師器の高杯である。杯部は垂直に立ち上がり、口縁部付近で外傾する。脚部は肥厚しながら、「八」字形に開口する。外面には杯部がヨコナデ、脚部とその接合部は連続したヘラケズリが継位に施されている。内面にはヨコナデ、ヘラミガキのち黒色処理が施されている。

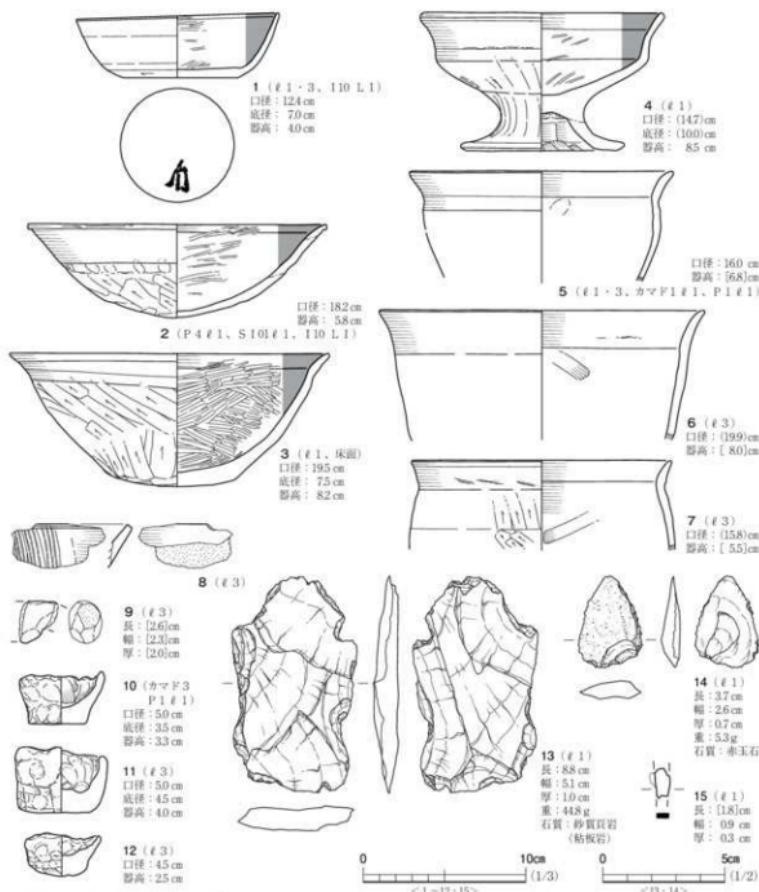


図18 6号住居跡出土遺物

同図-5～7は土師器の壺である。いずれも口縁部内外面にはヨコナデが施されている。7の体部外面にはヘラケズリが施されている。口縁部の外面には、ヘラ状工具の接した痕跡が連続して認められる。

同図-8は壺の口縁部片で、外面にはヨコナデののちハケメ調整が施されている。

同図-9は土師器に付された把手の一部の可能性がある。ユビオサエにより成形している。

同図-10～12は手づくね土器である。ユビオサエやユビナデが施されている。10は平底で、底部にはスサの圧痕が認められる。11は平底で器壁が厚い。垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに

内傾する。12は丸底で、口縁端部に向かって器壁が薄くなる。

同図-13は板状石器である。左右両端部に連続した細かい剥離調整を加えている。

同図-14は剥片石器である。礫の縁辺を素材とし、端部に細かい剥離調整を加えている。

同図-15は鉄製品で、上下両端部が欠損した釘とした。断面形は長方形である。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。建て替えを1度行っており、6 b号住居跡の東側を拡張し6 a号住居跡を構築している。住居の平面形は隅丸長方形から方形へと替わり、カマドは2度造り替えを行うが、一貫して北壁に構築される。規模は6 a号住居跡が南北5.93m、東西6.15m、6 b号住居跡が南北5.76m、東西5.18mである。

6 b号住居跡に付属するカマド3は、燃焼部の底面を掘り込んで破壊し、カマドの残骸で埋め、周囲に手づくり土器がまとまって認められる状況から、カマドの廃絶の際に儀礼を行った可能性がある。カマド1は両袖先端に焚口の構築材を据え置き、他の住居跡と同様の傾向が認められる。主柱穴は6 b号住居跡より6 a号住居跡の方が規模は大きいことから、住居の拡張に併せ上屋を支える主柱穴の規模を大きくしたものと想定される。

本住居跡の所属時期は、P 4や床面から出土した図18-2・3の土師器杯の特徴から、奈良時代、8世紀中葉～後葉と考えられる。

(佐藤)

7号住居跡 S I 07

遺構(図19、写真22・23)

本住居跡は調査区中央部のI・J-9グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡は、13号住居跡、I 9 G P 1と重複し、いずれよりも古い。本住居跡の北東1.5mには6号住居跡が位置する。本住居跡の西半部は13号住居跡により壊され、遺存していない。

L III上面の検出作業により、13号住居跡と重複する褐灰色土を基調とした範囲として確認した。検出時は、東壁付近にL III塊や焼土粒や炭化物粒が多く分布していた。

本住居跡の平面形は方形を基調としていたと考えられる。規模は南北で5.07m、検出面から床面までの深さは最大で10cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はL III塊・黒色土塊などを微量に含む褐灰色土で住居全体を覆う人為堆積土である。 ℓ 2は黒褐色土塊を微量に含む灰黄褐色粘質土で、貼床の構築土である。 ℓ 3は黒褐色土塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、掘形の埋土である。

床面には貼床が住居の中央部から東側、ピットの周辺にかけて認められる。床面は平坦で、貼床の範囲は踏み締まりが顕著である。掘形は床面全体に認められ、深さは最大で11cmである。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット5基(P 1～5)を確認した。

P 1～5は北壁や東壁ぎわに接し、その間隔は不揃いである。P 4・5は重複し、P 5が新しい。平面形はいずれも円形を基調とし、直径は26～50cm、床面からの深さは19～37cmである。堆積土

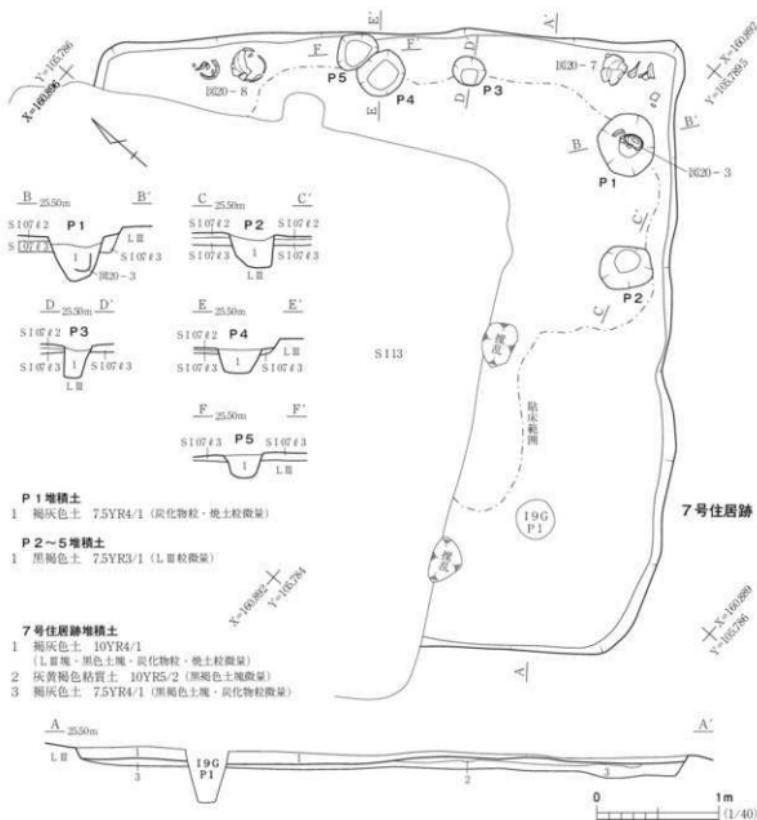


図19 7号住居跡

はP1が焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐色灰土の単層で、本住居跡ℓ1と近似する。P2～5は、L III粒を微量に含む黒褐色土の単層である。P1～5の性格は不明である。

遺 物 (図20、写真116)

本住居跡からは弥生土器20点、土師器379点が出土した。このうち、土師器9点、弥生土器1点を図示した。

住居北東隅部の床面からは、図20-8の土師器甕が出土している。体部は土圧で破碎し、その北西側には口縁部が逆位で認められた。P1の底部から中位にかけて同図-2の土師器の小型丸底鉢、同図-3の土師器の鉢、同図-4～6の土師器の壺、同図-7・9の土師器の甕が、まとまつた破片で出土している。

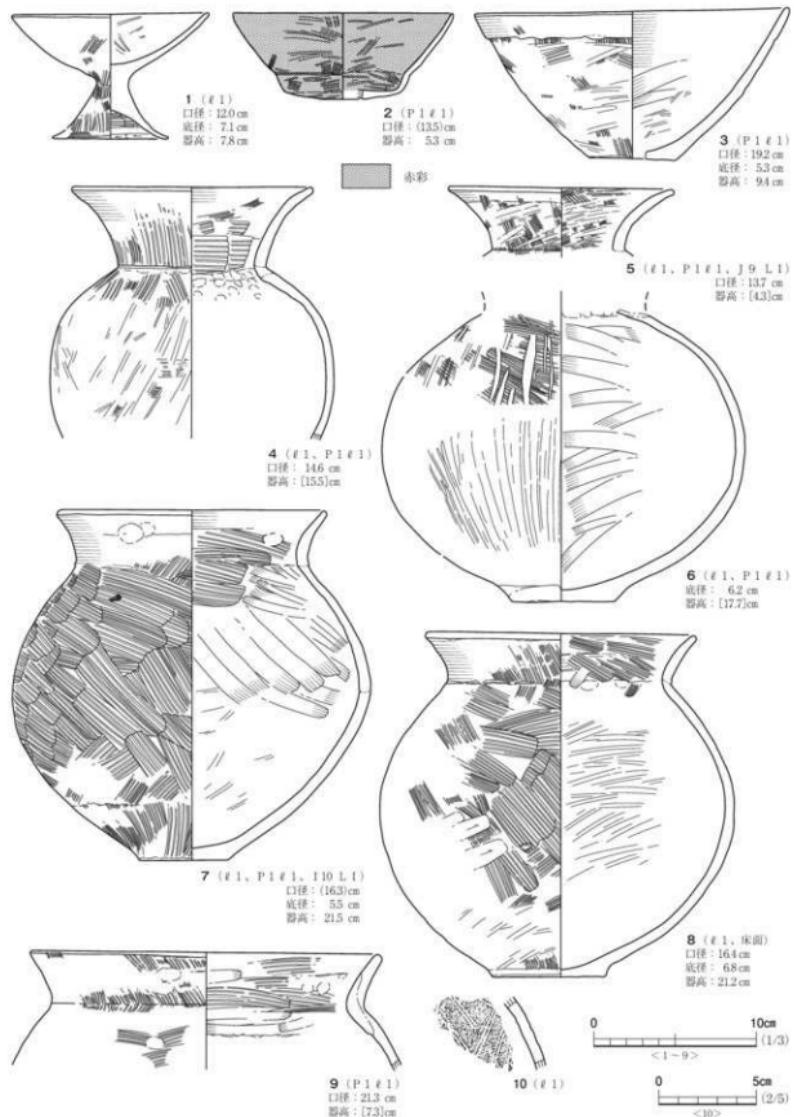


図20 7号住居跡出土遺物

図20-1は土師器の高杯である。杯部は浅い椀形で、「八」字に聞く脚部を持つ。外面にはハケメが施されている。杯部の内面にはヘラミガキ、脚部の内面には横位のハケメ、端部はヘラケズリにより調整される。

同図-2は土師器の小型丸底鉢である。体部は短く偏平で、口縁部は長く直線的に外傾する。内外面には丁寧なヘラミガキのち赤彩が施されている。

同図-3は土師器の鉢である。底部の中央には穿孔がみられ、いわゆる「有孔鉢」である。平底で、体部は口縁部に向かって直線的に外傾する。外面には口縁部がヨコナデ、体部にはハケメのちヘラミガキが施されている。内面には、上部がヨコナデとユビナデ、底部付近にはヘラミガキが施されている。

同図-4~6は土師器の壺である。4は体部が球形となり、口縁部は緩やかに外反する。外面にはハケメのちヨコナデ、ヘラミガキが、内面には口縁部に横位のハケメとヨコナデが施されている。5は口縁部のみが遺存し、外反しながら端部に至る。内外面にはハケメのちヘラミガキが施されている。6は平底で球形の体部である。体部外面の下半は丁寧なミガキで調整され、上半はハケメのち、まばらなヘラミガキが認められる。内面は丁寧なユビナデで調整される。

同図-7~9は土師器の壺である。7・8は小ぶりの底部で、体部は球形となり、口縁部は急に外傾する。7は外面に丁寧な斜位のハケメが施され、口縁部はヨコナデで調整される。内面には口縁部が横位のハケメのちヨコナデ、体部はユビナデやヘラミガキが認められる。8の体部外面にはハケメのちヘラケズリやミガキ調整を加え、口縁部はヨコナデのちハケメ調整する。内面には口縁部がハケメ、体部にはミガキが施されている。9は口縁部から頸部付近のみ遺存しており、外面にはハケメ、内面にはハケメのちユビナデが施されている。

同図-10は弥生土器である。壺の体部上半で、二本同時施文の平行沈線が施されている。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。13号住居跡と重複し本住居跡が古い。平面形は方形基調で、規模は南北で5.07mである。壁ぎわにはピットが認められるが間隔は不揃いで、性格は不明である。

P1から複数器種の土師器の破片がまとめて出土していることから、住居が廃絶する際、家財を一括してピットに廃棄している様子がうかがえる。本住居跡の所属時期は、床面やP1から出土した遺物の特徴から、古墳時代前期と考えられる。
(佐藤)

8号住居跡 S I 08

遺構(図21・22、写真24・25)

本住居跡は調査区南東部のJ・K-15グリッドの、LIV下面からLV上面で検出された。北東側に張り出した丘陵の南側緩斜面に立地する。3号住居跡と入れ子状に重複し、本住居跡が古い。本住居跡の東側6mの丘陵南側斜面には、住居跡が入れ子状に重複する2・12号住居跡が位置する。

3号住居跡の床面を精査中に暗褐色粘質土を基調とした方形の範囲として確認した。カマドは当初3号住居跡に伴うものと誤認して調査を行い、燃焼部底面と床面の関係に齟齬が生じたことから、重複する2軒の住居跡として把握した。本住居跡の南西隅部は後世の擾乱により遺存していない。

本住居跡の平面形は方形である。規模は東西3.24m、南北3.16m、検出面から床面までの深さは最大で22cmを測る。周壁は砂質のLVを掘り込んでいるため、細かな凹凸が顯著に認められる。

住居内堆積土は2層に分けられた。 $\ell 1$ はLVを由来とする黄橙色土塊や炭化物粒・焼土塊を微量に含む、暗褐色粘質土である。 $\ell 2$ は炭化物粒を微量に含む褐灰色土である。いずれも3号住居跡の床面とするため、埋めたものと判断した。

床面は掘り込んだLVを利用し、貼床や掘形は認められなかった。細かな凹凸が顯著に認められ、南隅部に向かいわずかに傾斜している。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット3基(P1～3)を確認した。

カマドは住居東壁の中央付近に位置する。カマドの燃焼部は周壁の外側に構築されている。燃焼部は住居床面のLVから、煙道はLV・Vから、煙出しピットはLIIIから掘り込まれる。燃焼部の遺存状況は不良で、左袖の一部は人為的に破壊されている。左袖が想定される箇所には、袖の焚口の構築材の掘形が遺存していた。右袖はLVを10cmほど掘り込み、そこに白色粘土を据えて焚口の構築材としている。遺存する右袖の長さは、壁から27cm、床面からの高さは16cmである。右袖の内側上部や、燃焼部右側の壁面は焼土化が認められ、最大2cmの厚さで被熱した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。左袖の掘形は、燃焼部の外側に向かってオーバーハングしながら掘り込まれる。平面形は楕円形で、長径26cm、短径25cm、床面からの深さは最大で17cmである。焼土面は、焚口に近い左袖の掘形と右袖を結ぶ線上に位置する。平面形は楕円形で、中心に向けてわずかにくぼむ。規模は長径35cm、短径18cm、最大2.5cmの厚さで被熱した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は天井まで遺存しており、長さ100cm、幅20cm、深さ32cmを測る。煙出しピットの平面形は、煙道の長軸方向がわずかに長い楕円形を呈し、煙道から急角度で立ち上がる。煙出しピットの規模は長径23cm、短径19cm、煙道底部から煙出しまでの高さは遺存値で53cmである。

カマドの堆積土は4層に分けられた。 $\ell 1$ はLIV塊などを微量に含む褐灰色土で、カマド廃絶後の人為堆積土と判断した。 $\ell 2$ は炭化物粒や焼土粒を多量に含む褐灰色土で、カマドの天井崩落土と判断した。 $\ell 3$ はLIV塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、煙道の底面付近に堆積していることから、外部からの流れ込みや煙道の壁面が崩落した土と判断した。 $\ell 4$ は炭化物粒や焼土粒を多量に含む灰褐色土で、カマド左袖の掘形の埋土である。

壁溝は南壁の一部と東壁のカマド部分を除き、壁ぎわを全周にするように確認された。また、本住居跡の床面中央を南北に向かって弧状に延び、壁溝に接続する溝が1条掘り込まれる。幅は最大で31cm、床面からの深さは最大で6cmと浅い。堆積土は本住居跡堆積土の $\ell 1$ と同質である。

P1は北壁ぎわに、P3は住居中央から南側で検出された。平面形は方形で、規模は一辺25～27cm、底面からの深さは11～25cmである。堆積土はLIV粒を微量に含む褐灰色砂質土の単層である。

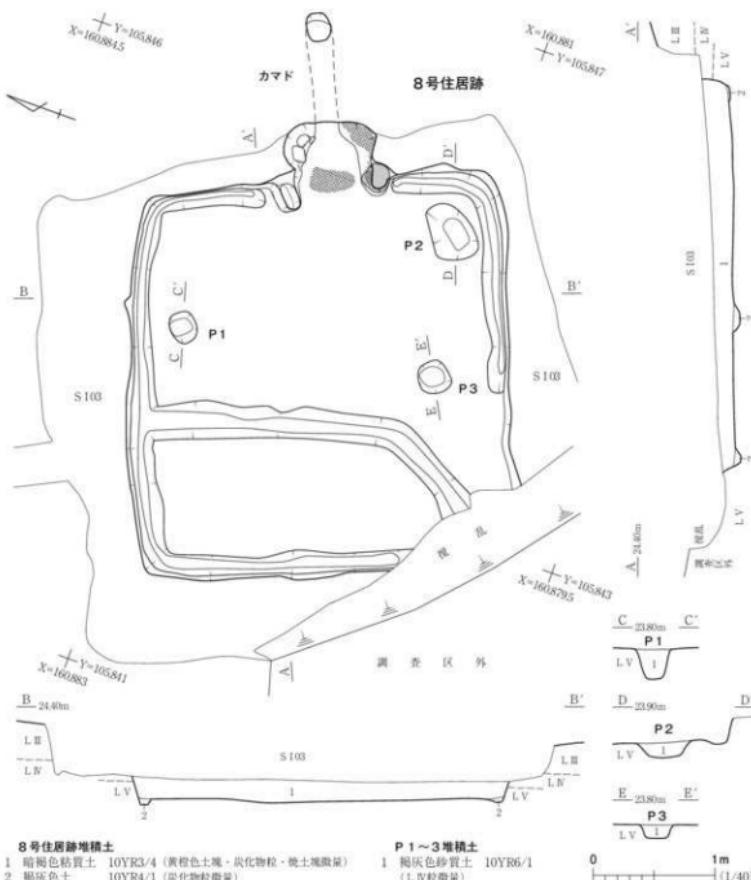


図21 8号住居跡

底面は平坦でグライ化が認められた。これらのピットの性格は不明である。

P2は住居東隅部のカマド右袖に近接して検出された。位置や規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は不整楕円形で、規模は長径50cm、短径37cm、床面からの深さは12cmである。堆積土はLIV粒を微量に含む褐灰色砂質土の単層である。

遺物 (図22、写真116・146)

本住居跡からは弥生土器3点、土師器が236点、須恵器8点、鉄製品4点が出土した。このうち、土師器1点、須恵器1点、鉄製品2点を図示した。

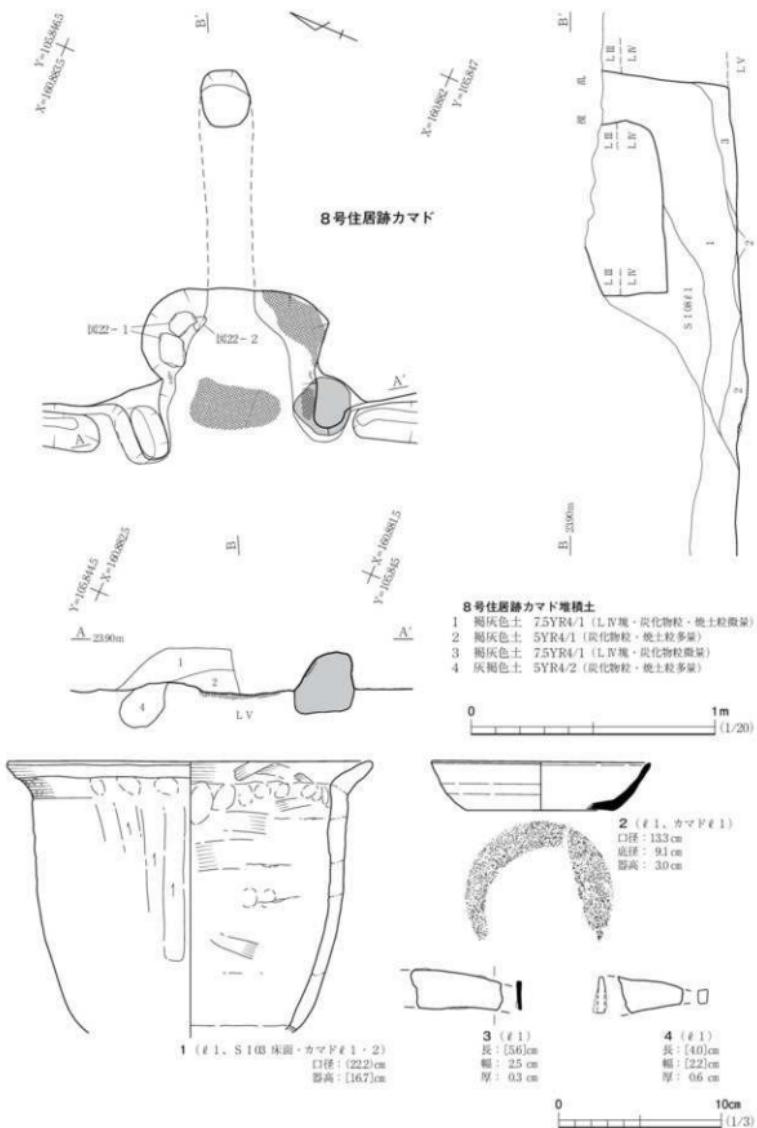


図22 8号住居跡カマド・出土遺物

カマド燃焼部の左壁に貼り付けられるように、図22-1の土師器の壺の破片や、同図-2の須恵器の杯が出土している。

図22-1は土師器の壺である。器壁は厚く、ややいびつである。体部上半から垂直に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部の内外面にはヨコナデやユビナデが施されている。体部外面にはヘラケズリ、内面には粘土紐の積み上げ痕やユビオサエの痕跡が認められる。

同図-2は須恵器の杯である。焼成不良の軟質で、器壁の剥落が著しい。底部から直線的に外傾し、口縁端部は丸く肥厚する。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

同図-3・4は鉄製の刀子茎部と考えられる。いずれも断面形は長方形を基調とする。

まとめ

本住居跡は北東側に張り出した丘陵頂部付近の南側緩斜面に立地する。平面形は方形基調で、規模は東西324m、南北3.16mである。3号住居跡とは入れ子状に重複しており、本住居跡が古い。近接して位置する2・12号住居跡も同様に入れ子状に重複し、同様の傾向がうかがえる。貼床や掘形は認められず、LVを床面として使用し、壁溝は南壁の一部と東壁のカマド部分を除いて全周することから、壁溝を伴わない南東側が出入りの可能性がある。カマドは東壁の中央部に構築され、燃焼部が周壁の外側に位置するのが特徴である。本住居跡の所属時期は、カマドから出土した図22-1の土師器壺や同図-2の須恵器杯の特徴から、奈良時代、8世紀頃と考えられる。(佐藤)

9号住居跡 S I 09

遺構(図23・24、写真26・27)

本住居跡は、調査区中央部、I-11・12グリッドのLV上面から検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。10号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。本住居跡の西側7.5mには1・6号住居跡が、北西側4.5mには46号住居跡が位置している。

LV上面の検出作業により、黒褐色粘質土を基調とする方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は一辺の整った方形で、規模は東西4.18m、南北3.97m、検出面から床面までの深さは最大16cmを測る。本住居跡の向きは東壁を基準として、北から東に2度傾く。周壁はいずれも床面から急激に立ち上がる。

住居内堆積土は6層に分けられた。 ℓ 1は、黒褐色粘質土に暗褐色粘質土塊などを微量に含む。土塊を含むことから人為堆積土と判断した。 ℓ 2は壁ぎわに三角堆積しており、LV由来の明黄褐色土塊を少量に含むことから壁面の崩落土と考えられる。 ℓ 3はにぶい黄橙色粘質土で、貼床上である。 ℓ 4は壁溝内堆積土で、灰黄褐色粘質土を主体とする堆積土で、西壁・南壁の内側にみられる。 ℓ 5は黒褐色粘質土を主体とした堆積土で、東側の壁溝内堆積土である。 ℓ 6は掘形埋土で、褐色粘質土に灰白色土塊を少量に含む。

床面は壁溝を埋め、全面に貼床が水平かつ平坦に整えられるが、東側に向けてわずかに傾斜している。主柱穴より内側の範囲の踏み締まりは強く硬い。掘形は全面に認められ、床面からの深さは

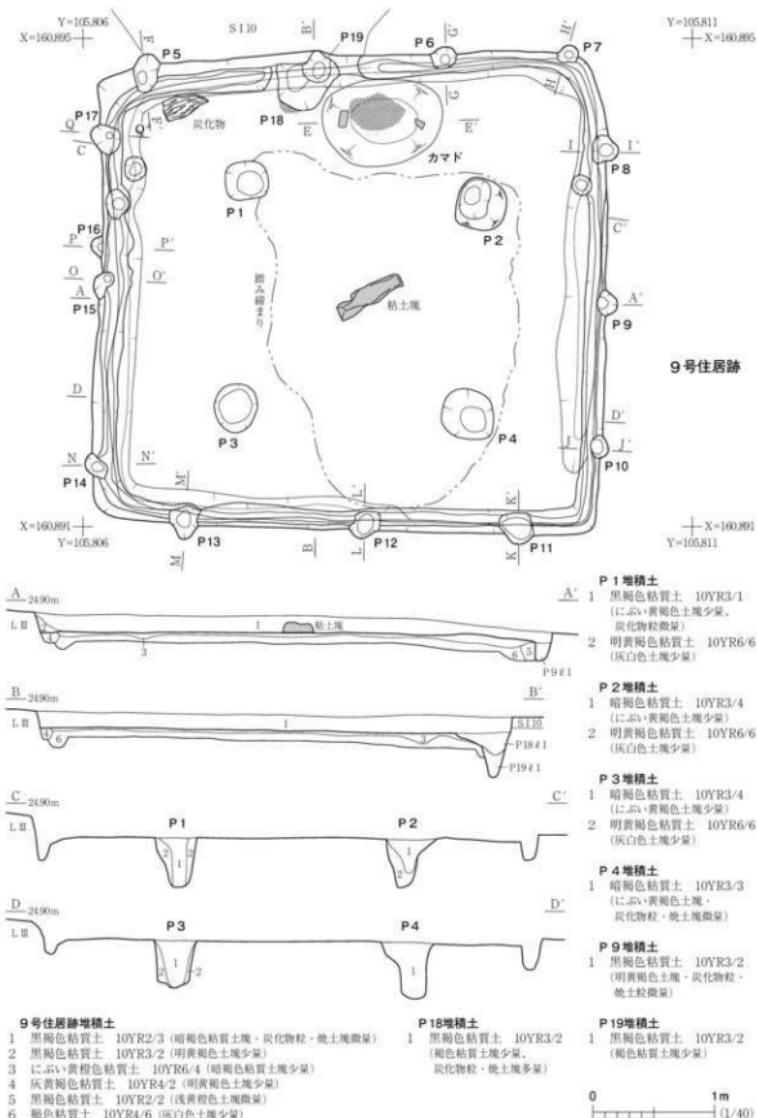
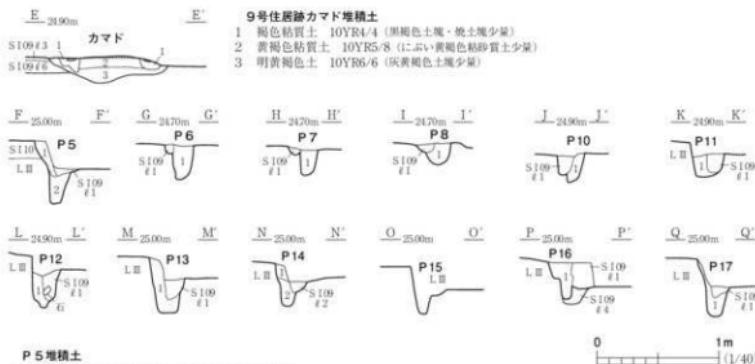


図23 9号住居跡（1）



P 5 堆積土
1 黒褐色粘質土 7.5YR3/1 (炭化物粒・焼土塊少量)
2 暗褐色粘質土 10YR3/3 (浅黄色粘質土塊少量)

P 6 堆積土
1 黑褐色粘質土 10YR2/3 (暗褐色土塊少量)

P 7 堆積土
1 黑褐色粘質土 7.5YR2/2 (褐色粘質土塊・炭化物粒・焼土粒微量)

P 8 堆積土
1 黑褐色粘質土 10YR2/3 (褐色土塊少量)

P 10 堆積土
1 黑褐色粘質土 10YR2/3 (褐色土塊少量)

P 11 堆積土
1 暗褐色粘質土 10YR3/4 (浅黄色土塊少量)

P 12 堆積土
1 暗褐色粘質土 10YR3/4 (灰白色土塊多量)

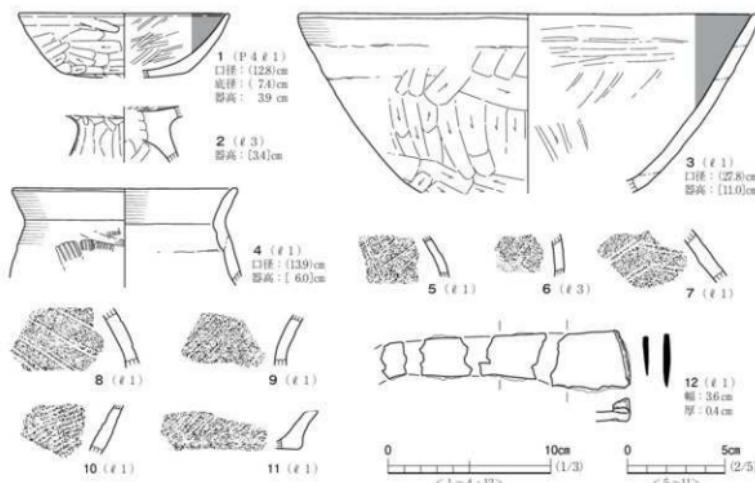
P 13 堆積土
1 暗褐色粘質土 7.5YR4/4 (暗褐色土塊多量・炭化物粒・焼土粒微量)

P 14 堆積土
1 暗褐色粘質土 10YR4/6 (黒褐色土塊少量)
2 黑褐色粘質土 10YR3/2 (浅黄色粘質土塊微量)

P 15 堆積土
1 黑褐色粘質土 7.5YR3/2 (炭化物粒・焼土塊少量)

P 16 堆積土
1 黑褐色粘質土 7.5YR3/2 (炭化物粒・焼土塊少量)
2 暗褐色粘質土 10YR3/3 (浅黄色粘質土塊少量)

P 17 堆積土
1 黑褐色粘質土 7.5YR3/2 (炭化物粒・焼土塊少量)
2 暗褐色粘質土 10YR3/3 (浅黄色粘質土塊少量)



最大10cmである。

本住居跡に付属する施設としてカマド1基、貼床の下から壁溝、床面からピット19基を検出した。

カマドは北壁のほぼ中央付近で検出された。上部は後世の擾乱により削平され、カマド袖部の焚口の構築材とみられる褐色粘土の基部と、燃焼部の焼土面のみが遺存している。遺存する褐色粘土と北壁からの距離は、粘土の南端部を基準として左右ともに60cmである。左右の粘土間の距離は56cmを測る。焼土面は楕円形で、規模は長径44cm、短径30cm、厚さは3cmである。焼土面を除去すると、床面から土坑状のくぼみが検出され、カマドの掘形と判断した。平面形は楕円形で、規模は長径99cm、短径70cmで深さ21cmである。

カマド掘形の堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は褐色粘質土で、カマド焚口の構築土である。 ℓ 2は黄褐色粘質土で、住居貼床の土と近似する。 ℓ 3は明黄褐色土でLⅢを由来とする。カマドの構築方法を整理すると、①土坑状の掘形を掘り込む。②掘形をカマド ℓ 3で平坦に埋める。③袖部の焚口の構築材を据え置く。④カマド ℓ 1で構築材を固定し、両袖の間は ℓ 2で埋める。なお、住居中央の床面には焚口の構築材と同様の白色粘土塊が検出されている。

壁溝は貼床下から検出され、カマド付近を除き壁ぎわ全周に認められる。規模は幅10~23cm、床面からの深さは8~16cmほどで、「U」字形の断面を持つ。

P 1~4は対角線上に配置された4基のピットで、位置や規模から主柱穴と判断した。平面形は方形・楕円形で、規模は31~47cm、深さは38~45cmである。柱間の間隔は、東西方向のP 1・2間が1.85m、P 3・4間が1.95m、南北方向のP 1・3間が1.85m、P 2・4間が1.83mではほぼ方形に並ぶ。柱を抜き取った痕跡はP 1~3で確認された。堆積土は黒褐色や暗褐色の粘質土を基調とし、掘形埋土である。

壁ぎわに位置するP 5~17・19の14基のピットは、位置や規模から壁柱穴と判断した。北壁の壁柱穴P 5、P 19、P 6、P 7の間隔は1~1.45mである。それ以外の壁柱穴は27cm~1.55mの間隔で並ぶ。床をはさんで北壁と南壁の壁柱穴は対象の位置関係にはならないが、東壁のP 8と西壁のP 17、同様にP 9~P 15、P 10~P 14はほぼ対象の位置にある。壁柱穴の平面形は円形である。規模は、直径が15cm~25cm、床面からの深さが14cm~38cmである。壁柱穴の断面観察では、壁柱穴の内側に壁材を設置し、壁溝を埋めた後に貼床を行ったと考えられる。また、西壁に確認されたP 16については、堆積土の状況から壁溝が埋められた後に新しく設置された壁柱穴と判断している。堆積土は黒褐色や暗褐色の粘質土を基調とし、土塊を含むことから人為堆積土と判断した。

カマド西側のP 18は、北壁ぎわの住居床面より検出された。壁柱穴のP 19より新しい。平面形は不整楕円形で、規模は、直径52cm、床面からの深さ18cmである。P 18の南西側の上端は、被熱により焼土化した部分が確認された。堆積土は黒褐色粘質土の単層で、炭化物粒や焼土塊を多量に含む。その性格は不明である。

遺 物（図24、写真117・146）

本住居跡からは弥生土器27点、土師器256点、須恵器1点、陶磁器1点、石器・石製品15点、

土製品1点、鉄製品1点が出土している。このうち、弥生土器7点、土師器4点、鉄製品1点を図示した。

図24-1は土師器の杯である。ロクロ成形の平底で、直線的に立ち上がる。外面にはヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち、黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の高杯の脚部である。外面には縦位のヘラケズリが連続して施されている。

同図-3は土師器の鉢とした。厚手で急な角度で立ち上がる。外面には口縁部付近にヨコナデ、体部にはヘラケズリが、内面には、ヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-4は土師器の壺である。体部は内傾し、口縁部から急に外傾する。口縁部付近の内外面にはヨコナデ、体部外面にはハケメが施されている。

同図-5~8は弥生土器の壺の体部上半である。いずれも二本同時施文の平行沈線で、重蔓文や重山形文が施されている。

同図-9~11は壺もしくは壺である。いずれにも地文が施され、9・11が附加条、10が単節である。

同図-12は鉄製の鎌とした。下端に刃部を持ち、右側縁部は折り曲げられている。

まとめ

本住居跡は、丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形は一辺の整った方形を基調とし、規模は東西4.18m、南北3.97mである。住居内には掘形を持つカマド1基、主柱穴が4基、壁柱穴が14基認められた。柱穴や壁柱穴が整然と並び、全面に貼床が認められる。土層断面の観察から、壁溝を埋めた後に貼床を行ったと考えられる。本住居跡の所属時期は、図24-1の土師器の杯から奈良時代、8世紀中頃~後半と考えられる。

(吉野)

10号住居跡 S I 10

遺構(図25、写真29)

本住居跡は、調査区中央部のH-11、I-11・12グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部の北側縁部に立地する。本住居跡は複数遺構と重複し、9号住居跡より古く、28号土坑より新しい。

後世の畑作や宅地造成の擾乱土を除去した後、LⅢ上面の検出作業により灰黄褐色土を基調とした範囲として確認した。本住居跡の南東半部は、後世の擾乱により遺存していない。

本住居跡の平面形は遺存している範囲から、正方形の可能性がある。規模は東西6.12m、検出面から床面までの深さは最大で20cmを測る。周壁は北壁と西壁は急に、東壁は緩やかに立ち上がる。

住居内堆積土は2層に分けられた。いずれも灰黄褐色土を基調とし、ℓ1は床面全体に堆積し、LⅢ塊や炭化物粒を微量に含む。ℓ2は壁溝周辺に堆積し、LⅢ・IV塊を多量に含む。いずれも人為堆積土と判断した。

床面に貼床や掘形は認められず、住居を掘り込んだLⅢ上面を利用している。ほぼ平坦で、踏み締まりは認められない。

本住居跡に付属する施設として、床面から壁溝、ピット1基(P1)を確認した。

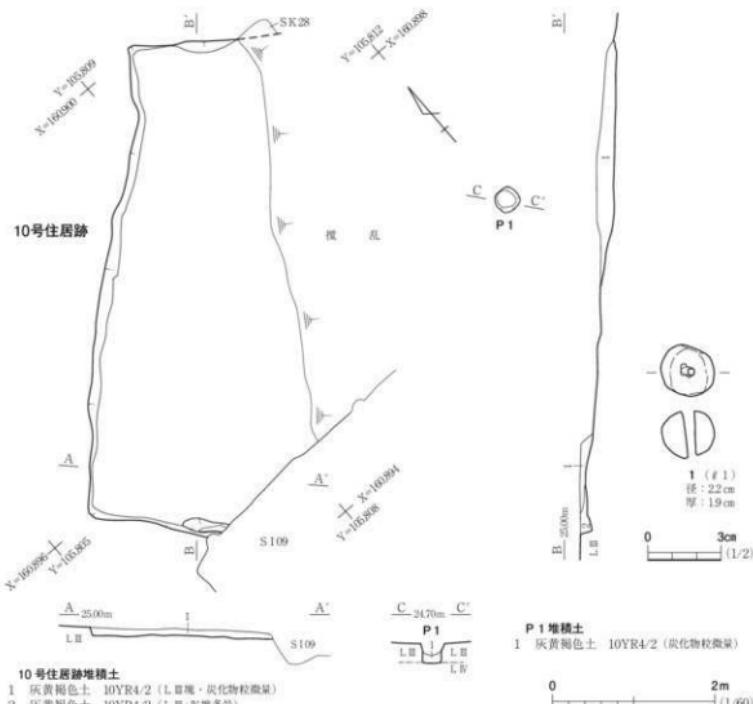


図25 10号住居跡・出土遺物

壁溝は西壁ぎわで部分的に検出された。幅は15cm、床面からの深さは7cmと浅い。周壁は、住居外側は垂直になるのに対し、住居内側は緩やかに立ち上がる。

P 1は西壁から南東側へ4.5mの位置にあり、平面形は方形で、一辺27cm、床面からの深さは20cmを測る。P 1の堆積土は、住居内堆積土と同質の灰黄褐色土で炭化物粒を微量に含んでいる。

遺 物 (図25、写真117)

本住居跡からは土師器7点、須恵器2点、土製品1点、石器・石製品1点が出土した。このうち、土製品1点を図示した。図25-1は土製の丸玉である。両側から刺突を加え、穿孔している。

ま と め

本住居跡は丘陵頂部縁辺部の平坦面に立地し、平面形は正方形基調の可能性があり、規模は東西が6.12mで、床面には貼床や掘形を持たない。本住居跡の所属時期は、出土遺物に乏しく詳細は不明だが、9号住居跡より古いことから奈良時代以前と判断した。

(佐藤)

11号住居跡 S I 11

遺構 (図26・27、写真28・29)

本住居跡は調査区南部のJ・K-13グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡と重複する遺構は認められないが、東側4mには1号性格不明遺構が位置する。周壁やカマド周辺の一部は擾乱により遺存していない。

現代の畑作溝を掘削後のL III上面の検出作業により、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本住居跡の大部分は、南側の調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、検出された範囲から方形を基調としている可能性がある。規模は、北壁が遺存値で4.09mで、検出面から床面までの深さは最大で23cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はL III塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、人為堆積土である。 ℓ 2はL III・IVの混合土で、焼土粒や炭化物粒を多量に含む褐灰色土で、貼床とした土である。 ℓ 3は焼土粒や炭化物粒を多量に含む黒褐色土である。掘形の埋土である。

床面には、貼床が斑状に認められ、踏み締まりが認められる。掘形は、周壁ぎわに浅い土坑状の掘り込みとして確認できた。床面からの深さは最大で18cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット1基(P 1)を確認した。

カマドは住居北壁の中央付近に位置する。燃焼部は後世の擾乱により、遺存状況は不良である。

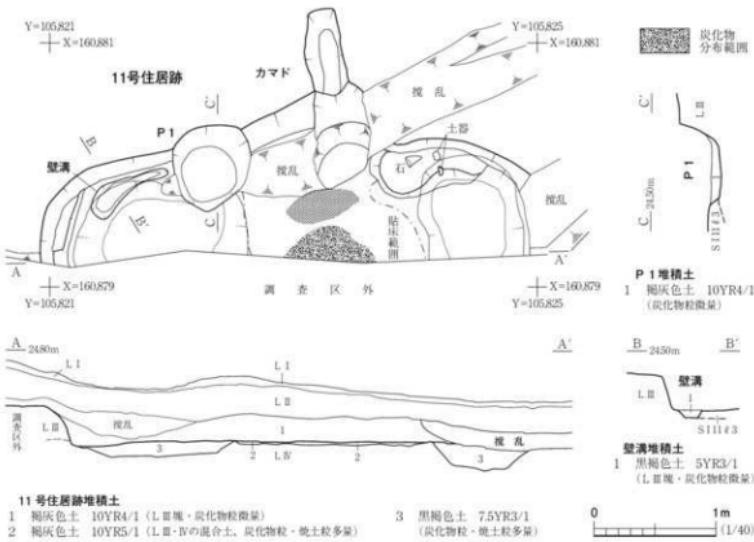


図26 11号住居跡

右袖は北壁に沿うように構築し、東西方向に伸びる。右袖の構築土中には、芯材とみられる縦長の石が据え置かれていた。遺存する右袖の規模は、南北方向で38cm、東西方向で99cm、床面からの高さは最大で15cmである。焼土面は煙道の長軸上よりわずかに西側で確認された。平面形は長楕円形で、中心が盛り上がる。規模は長径60cm、短径25cm、最大4cmの厚さで被熱した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は、住居北壁から直角に延びるように掘り込まれる。規模は、長さ94cm、幅30cm、深さ13cmを測る。カマドの堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は、焼土塊を微量に含む褐灰色土で、壊された燃焼部の構築土である。 ℓ 2・3はL III塊や焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で、平行に堆積し、締まりが強い。カマド右袖の構築土である。

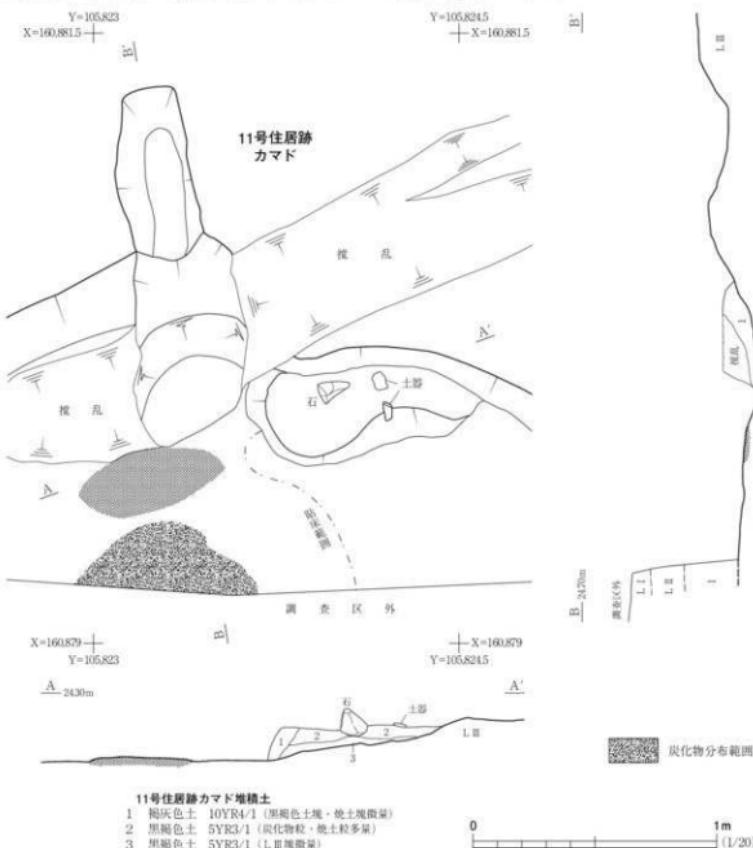


図27 11号住居跡カマド

焼土面の南側には炭化物が分布しており、位置関係からカマド燃焼材の残滓の可能性がある。

壁溝はP 1の西側で、北壁周壁に沿うように検出された。幅は最大で20cmである。

P 1は、カマド左袖の西側に近接して検出された。位置や規模から貯蔵穴と考えられる。北側は周壁を掘り込んで構築される。平面形は不整形形を呈し、規模は直径70cm、床面からの深さは8cmである。堆積土は炭化物粒を微量に含む褐色灰色土で、住居内堆積土のℓ 1に近似する。

遺 物 (図28、写真146・147)

本住居跡からは弥生土器1点、土師器が140点、須恵器1点、石器・石製品3点、鉄製品1点が出土した。このうち、土師器2点、石器1点、鉄製品1点を図示した。

図28-1は土師器杯の口縁部片である。ロクロ成形で、体部は直線的に外傾する。外面にはロクロナデ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の壺の口縁部である。ロクロ成形で、口縁部は面を持ち、わずかに垂下する。

同図-3は武器形石製品の磨製石戈と判断した。基部側は双孔を境に意図的に打ち欠かれ、身部のみ遺存している。身部の遺存する長さは9.4cmで、従来の石戈より短い。背面の先端付近には、鏑を意識した稜線が認められる。基部側は柄の端部を境にわずかに薄くなる。上端部は緩やかに湾曲し、下端部は基部に向かって強く外反し、「胡」を表現している。上端部の側面は平滑で、下端部の側面にはわずかに稜が認められる。基部側には上下一対の双孔が認められる。上方の孔は再調整による剥離で不明瞭だが、下方の孔は明瞭に確認でき、復元できた直径は7mmである。腹背両面の中央には、柄とみられる幅広の浅い溝がそれぞれ1条認められる。柄の規模は背面が長さ5.4cm、幅1.15cm、腹面が長さ5.3cm、幅1.25cmで、ほぼ表裏対称になる。柄の断面形は浅い皿形を呈する。腹面の上側縁には、研磨より古い幅広の剥離調整と敲打の痕跡が認められる。また、腹面の上の孔の周縁に認められる剥離は研磨より古いくことから、穿孔時に生じたものと判断した。全面には丁寧な研磨が加えられ、柄部分の研磨は他よりも新しい。先端部には、研磨より新しい剥離が認められる。基部の周辺には、研磨より新しい連続した剥離が認められ、再加工が行われている。

同図-4は鉄製の釘と考えられる。下端は欠損している。

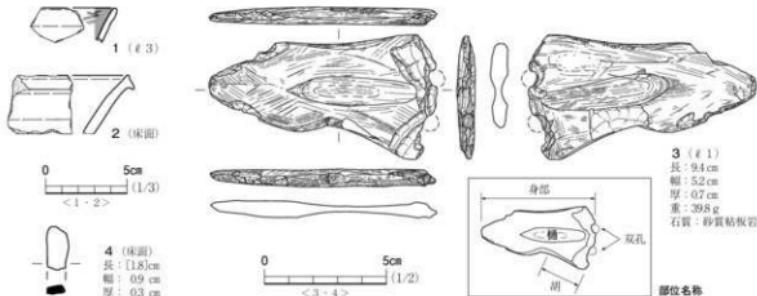


図28 11号住居跡出土遺物

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。住居跡の大半は南側の調査区外に位置し、平面形は方形を基調としていたと考えられ、規模は遺存値で一辺4.09mほどである。カマドの右袖は周壁に沿うように構築し、叩きしめられた痕跡が認められ、24号住居跡のカマドと共通性がある。

本住居跡の堆積土中からは、図28-3の弥生時代中期後葉とみられる武器形石製品の石戈が出土している。東北地方における弥生時代中期の石戈の出土例はなく、特筆される。

本住居跡の所属時期は、図28-1のロクロ成形の土師器杯が出土していることから平安時代、9世紀頃と考えられる。

(佐藤)

12号住居跡 S I 12

遺構 (図29、写真30・31)

本住居跡は、調査区の南東隅部、J・K-16グリッドのLⅢ・LⅤ上面で検出された。北東側に延びる丘陵の南東側の緩斜面上に立地する。2号住居跡と重複し、本住居跡が古い。北東側2mには1号建物跡が位置している。本住居跡の南端部は、近代の道跡によって削平され、遺存していない。

本住居跡は当初、2号住居跡として調査を開始したが、土層観察用の畦の精査と床面位置の違いから、一回り小さな住居跡が入れ子状に存在していることが判明した。これにより、新しく造られた小さな住居跡を2号住居跡、古い住居跡を12号住居跡とし、調査を行った。2号住居跡同様、南端部は後世の搅乱を受け、破壊されている。

本住居跡の平面形は、遺存している範囲から方形と推測され、規模は東西で3.84m、検出面から床面までの深さは最大70cmと深い。本住居跡の主軸方位は、東壁を基準としてほぼ真北を指す。壁の立ち上がりは床面から70~80度の角度をなし、特に北壁の遺存状況は良好である。南西端の周壁には階段状の段差が見られたが、木根の搅乱により破壊され、本住居跡に伴う施設が不明である。

住居内堆積土は2層に分層された。 ℓ 1は2号住居跡の堆積土に類似した黒褐色粘質土だが、周辺のLⅢに由来する黄褐色粘質土塊が部分的に互層となって混入している。 ℓ 2の暗褐色粘質土は東壁ぎわの壁溝に堆積した土である。いずれも人為堆積土である。

本住居跡はLⅢ~Vを掘り込んでおり、貼床が確認されなかったことから、床面はLⅤ上に形成されたと考えられる。床面はやや凹凸はあるものの、おおむね平坦である。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、壁溝、床面からピット6基(P1~6)を検出した。カマドは北壁中央付近に設置されている。燃焼部は完全に壊されており、幸うじて右袖の基部であろうと思われる基盤層の高まりが認められた。左袖にも構築材とみられる粘土塊がわずかに遺存している。破壊されたカマドの残骸の可能性がある焼土塊や白色粘土塊は、カマドを中心に、P1・2の周辺に流れ込むように堆積している。煙道の遺存は良好で、LⅤをトンネル状に掘り抜いて造っている。規模は長さ97cmで、幅28cm、底面から天井までの高さ24cmである。煙出しの平面形

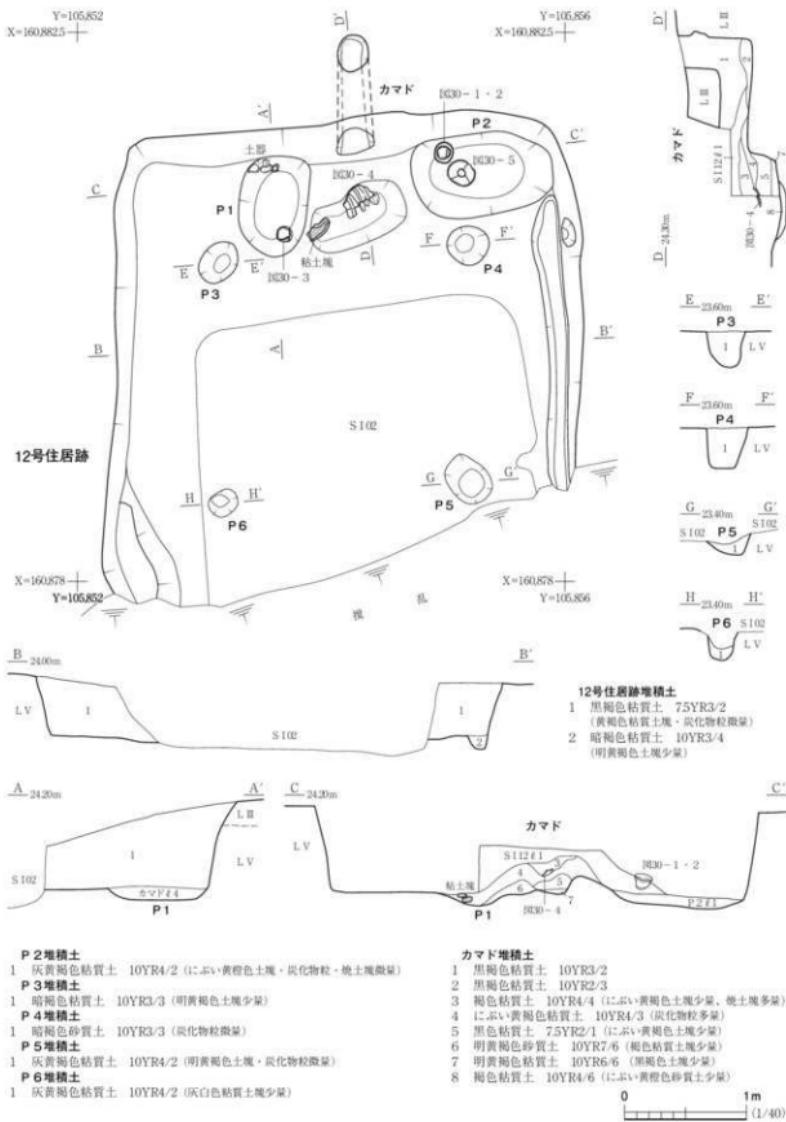


図29 12号住居跡

は楕円形で、規模は直径31cm、検出面から底面までの深さ60cmである。煙道内部の表面は黒く煤けており、燃焼部付近は一部焼化もみられる。

燃焼部底面からは、浅い土坑状の掘形が確認できた。平面形は東西方向に延びる楕円形で、規模は長径84cm、短径45cm、深さは5cmである。

カマドの堆積土は8層に分けられた。ℓ 1・2は黒褐色粘質土で、斜面上部から煙道に流れ込んだ土である。ℓ 3～7はカマドの構築土を由来とする土である。ℓ 8は掘形の埋土である。

壁溝は東壁ぎわにあり、断面形は「U」字形である。規模は幅15～23cm、深さは11cmほどである。

P 3～6は対角線上に配置された4基のビットで、位置や規模から主柱穴と判断した。P 3・4は住居床面から、P 5・6は2号住居跡の貼床を除去した際に検出した。平面形は円形で、直径は25～41cm、床面からの深さは19～32cmを測る。柱間の間隔は、東西方向のP 3・4間が2.00m、P 5・6間が2.05m、南北方向のP 3・6間が1.95m、P 4・5間が2.00mでほぼ方形に並ぶ。柱痕

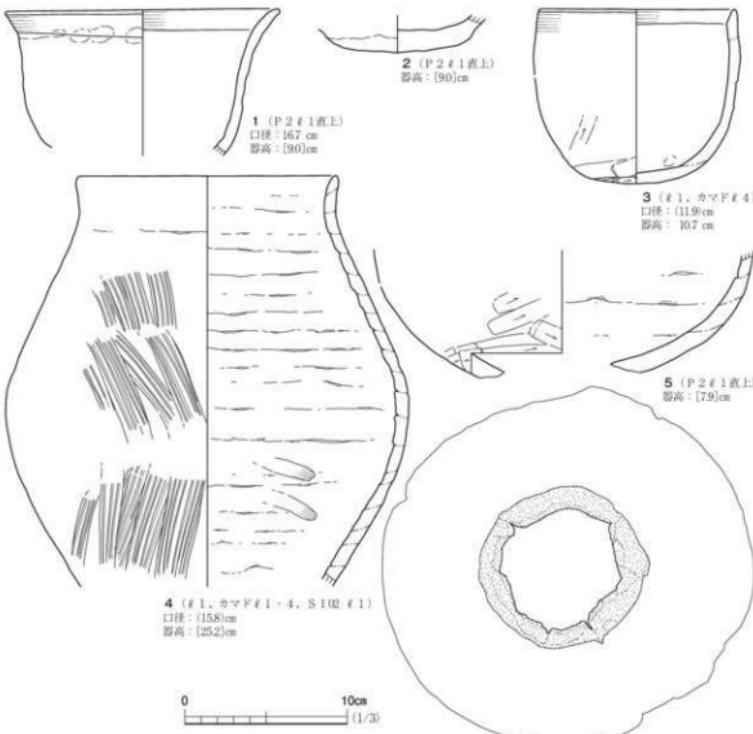


図30 12号住居跡出土遺物

跡は確認されなかった。堆積土は暗褐色砂質土や灰黄褐色粘質土を基調とし、土塊などを含む。

P 1・2はカマドの両側に位置する。位置や規模から貯蔵穴と判断した。P 1の平面形は南北方向に延びる梢円形で、規模は長径83cm、短径56cm、深さ11cmである。堆積土はカマド④を主体とする土が流れ込んでおり、カマドを破壊した際の残骸である焼土塊や粘土塊が多く認められた。P 2の平面形は東西に延びる梢円形で、規模は長径115cm、短径67cm、深さ9cmである。堆積土は、焼土塊を微量に含む灰黄褐色粘質土の単層である。

遺物 (図30、写真117)

本住居跡からは弥生土器6点、土師器211点、須恵器2点、石器・石製品1点、鉄製品3点が出土した。このうち、土師器5点を図示した。

カマドの燃焼部周辺やP 1・2からは土師器が多く出土している。カマドを壊し、その周辺に土師器を配置している状況がうかがえる。P 1堆積土上には、図30-3の土師器鉢がほぼ正位で据え置かれていた。燃焼部の堆積土上面からは、同図-4の土師器壺が横位で出土している。P 2の堆積土上面からは同図-5の穿孔された壺の底部が正位で置かれ、これに隣接し同図-1の壺が正位で置かれ、その中には同図-2の壺の底部が伏せ置かれるように出土している。

図30-1・2は土師器の壺である。接合はしないが、胎土の特徴や出土状況から同一個体の可能性がある。1は体部から口縁部に向かって外反する。外面には被熱により斑状の剥離が目立つ。

同図-3は土師器の鉢とした。丸底で、体部は垂直となり口縁部まで立ち上がる。内外面の口縁部にはヨコナデが施されている。底部外面付近は横位のヘラケズリで調整している。

同図-4・5は土師器の壺である。4は体部の中央に最大径を持ち、口縁部に向かって緩やかに内傾する。体部外面にはハケメが施され、内面には粘土紐の積み上げの痕跡が明瞭に認められる。5は体部下半から底部にかけての破片である。底部の内側から穿孔され、体部外面にはヘラケズリが施されている。

まとめ

本住居跡は北東側に延びる丘陵の南東側の緩斜面上に立地する。平面形は方形を基調していたと推測される。規模は東西で3.84m、検出面から床面までの深さは最大70cmと深いのが特徴である。住居内にはカマド1基、主柱穴が4基、貯蔵穴2基が認められた。住居の中心部分は2号住居跡に掘り抜かれているものの、カマド廃絶時に土師器を据え置いた状況が明瞭に確認できた。カマドの燃焼部には掘形があり、9号住居跡と同様の傾向が認められる。本住居跡の軸方向とカマドの位置は、9・14号住居跡に類似する。本住居跡の所属時期は出土遺物から、奈良時代、8世紀頃と考えられる。

(吉野)

13号住居跡 S I 13

遺構 (図31~33、写真32・33)

本住居跡は調査区中央部のI-9グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の北側縁辺に立地

する。7号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。また、15号溝跡とも重複するが、同時に掘り下げを行ったため、新旧関係は不明である。周壁の一部は木根の搅乱により破壊されている。本住居跡の東側3.5mには、6号住居跡が位置している。

L III上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲と、カマドとみられる粘土塊や焼土塊の分布として住居跡の範囲を確認できた。調査の結果、1度の建て替えが確認でき、住居全体を拡張し、カマドを北壁から東壁へ造り替えを行っている様子が認められた。拡張後を13 a号住居跡、拡張前を13 b号住居跡として報告する。

13 a号住居跡 本住居跡の平面形は方形である。規模は南北4.45m、東西4.68m、検出面から床面までの深さは最大で25cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、一辺が直線的になるように整えられている。

13 a号住居跡の堆積土は6層に分けられた(住居内堆積土 ℓ 1～6)。 ℓ 1はL III塊を微量に含む黒褐色土で、人為堆積土である。 ℓ 2はL III塊や黒褐色土塊などを微量に含む黒褐色土で、床面の直上にみられる人為堆積土である。 ℓ 3は焼土塊を多量、炭化物粒を微量に含む赤褐色土で、南壁の中央部周辺にのみ堆積していた。 ℓ 4はL III塊を微量に含む黒褐色土で、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 1～4は土塊などを含むことから、住居廃絶後の人為堆積土と判断した。 ℓ 5はL IVを由来とした灰褐色粘土質で、貼床である。 ℓ 6はL III塊・炭化物粒・焼土粒を多量に含む黒褐色土で、掘形の埋土である。

床面は、貼床がP 3や西壁の周辺を除いて全面に水平かつ平坦に認められる。貼床は非常に踏み締まっており、特に住居の中央部、主柱穴であるP 1～4を結んだ内側の範囲は顯著である。貼床が認められない部分は堆積土 ℓ 6の上面を床面として使用し、踏み締まりは認められなかった。住居の掘形は床面全体に認められ、深さは最大で14cmである。掘形の底面には凹凸が認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基(カマド1)、床面から壁溝、ピット5基(P 1～5)を確認した。

カマド1は東壁の中央に位置する。両袖は、いずれも東壁から直角に構築される。右袖の長さは74cm、高さは18cmを測る。左袖の長さは73cm、高さは17cmを測る。基部の幅は最大81cmである。両袖の内側は焼土化しており、厚さは最大で8cmに及ぶことを断ち割りで確認した。両袖とともにL III粒や白色粘土の混合土によって構築され、先端には棒状の白色粘土を直立させ、焚口の構築材としている。燃焼部の焚口付近には、両袖の上部に掛けられた角棒状の白色粘土が遺存し、半ばで折損している。その位置から、焚口上部の構築材とみられる。角棒状の白色粘土の規模は、長さ55cm、幅13cm、厚さは最大で8cmである。燃焼部はカマド内堆積土 ℓ 5、住居内堆積土 ℓ 6、L IIIを底面とし、焼土化は認められない。燃焼部中央の底面には支脚とみられる白色粘土が煙道に向かって斜位に置かれていた。煙道は東壁に対し直角に掘り込まれ、先端部で急な角度で立ち上がる。規模は長さ30cmと短く、幅は33cmを測る。焚口付近に貼床は認められない。

カマド1の堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1・2は炭化物粒、焼土粒を含む黒褐色土で、燃焼部

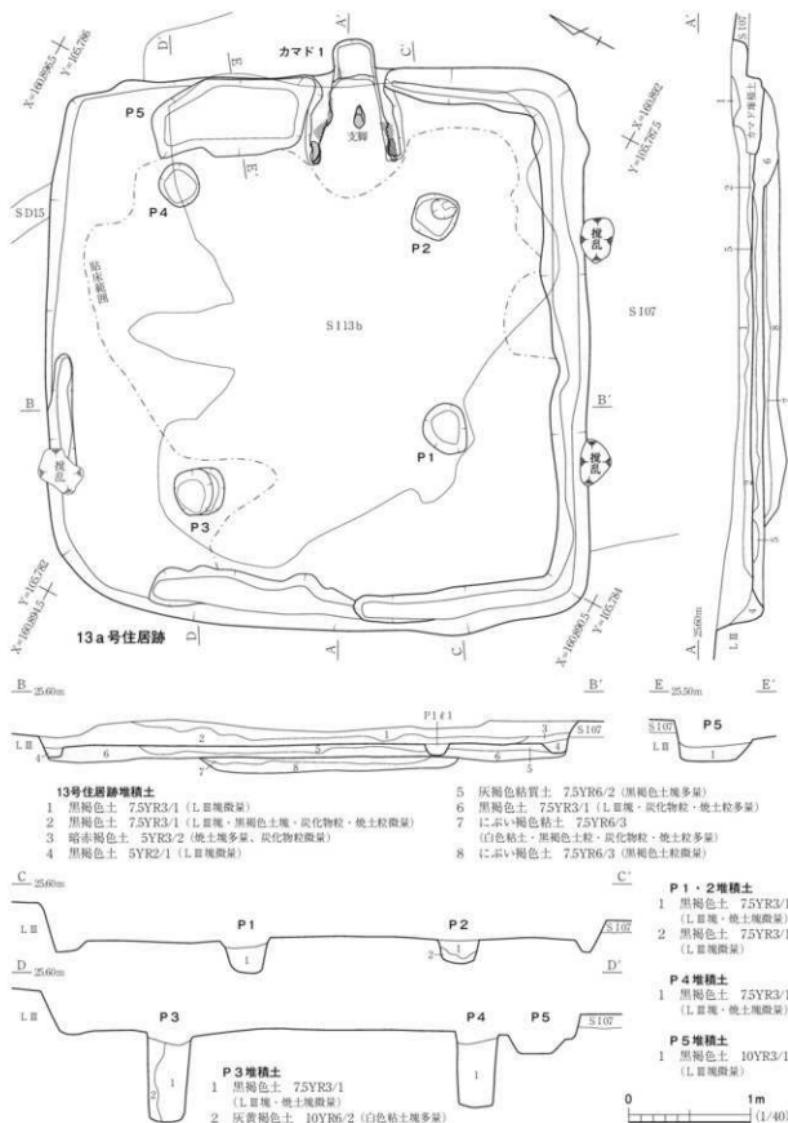


図31 13a号住居跡

や煙道の天井崩落土と判断した。 ℓ 3は炭化物粒や焼土塊を多量に含む暗赤褐色土である。燃焼部や煙道の底面に帯状に堆積し、天井内側の崩落土や機能時に堆積した土と判断した。 ℓ 4はLIVを由来とする白色粘土やL III粒などを微量に含む黒褐色土で、カマド両袖の構築土である。 ℓ 5はL III粒を微量に含む黒褐色土である。両袖より古く、燃焼部底面付近に薄く帯状に堆積していることから、カマドの構築に伴う整地土の可能性がある。

壁溝は周壁付近に断続的に掘り込まれる。幅は最大で45cm、床面から底面までの深さは最大で10cmである。

P 1~4は対角線上に1間四方に位置しており、その規模から主柱穴と考えられる。平面形は方形や楕円形で、規模は36~42cmである。床面からの深さはP 1・2が29・19cmであるのに対し、

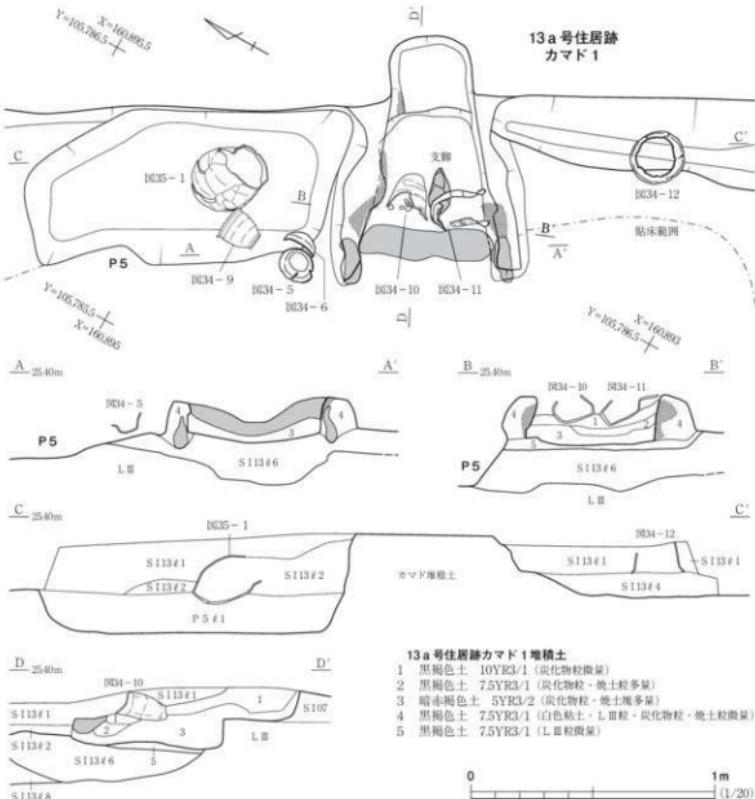


図32 13a号住居跡カマド

P 3・4は73・61cmと深くなる傾向がある。いずれも柱痕は認められない。堆積土は黒褐色土を基調とし、L III塊などを含むことから、柱を抜き取った後の人為堆積土と判断した。P 1の底部の中心は、きわめて縮まりの強い粘土が薄く堆積していた。

カマドの左側に隣接するP 5は、位置や規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は不整長方形で、東壁に沿って構築される。規模は長軸が137cm、短軸62cm、床面からの深さは最大で17cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がるが、北西側は比較的緩やかである。底面は平坦に整えられる。P 5の堆積土は、L III塊を微量に含む黒褐色土の単層である。住居内堆積土ℓ 2と近似することから、住居と同時期にP 5も埋めたものと判断した。

13 b 号住居跡 本住居跡は13 a号住居跡の掘り込みによって壊されており、貼床及び掘形、カマドの下端のみ遺存していた。貼床は中央付近に認められ、踏み締まりは顕著である。掘形の平面形は遺存範囲から方形の可能性がある。規模は東西で4.04m、深さは最大で13cmである。

13 b号住居跡の堆積土は2層に分けられた(13号住居内堆積土ℓ 7・8)。ℓ 7は白色粘土や黒褐色土粒などを多量に含むにぶい褐色粘土で、貼床である。ℓ 8は黒褐色土粒を微量に含むにぶい褐色土で掘形を覆う人為堆積土である。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基(カマド2)、床面からビット1基(P 6)を確認した。

カマド2は住居北壁に位置する。13 a号住居跡の構築に伴い破壊され、燃焼部の底面と両袖の下端付近のみ遺存している。カマド2の堆積土は炭化物粒や焼土粒を微量に含む灰黄褐色土で、カマド使用時の残滓と判断した。



図33 13 b 号住居跡

カマド2の左袖の外側に隣接して位置するP6は、位置や規模から貯蔵穴と判断した。P6はP3の調査時の断ち割りにより、上端が壊されている。規模は遺存値で直径60cm、床面からの深さは最大26cmである。遺構内堆積土は2層に分けられた。ℓ1は黒褐色土塊を微量に含むぶい褐色粘質土で、ℓ2がLIII塊を微量に含む黒褐色土である。

遺 物 (図34・35、写真117~119・150・153)

本住居跡からは弥生土器85点、土師器388点、須恵器1点、石器・石製品9点、土製品1点が出土した。このうち、弥生土器3点、土師器14点、土製品1点、石器2点を図示した。

カマド1やその周辺からは、土師器の杯や甕が多く出土している。図34-10・11の甕は、カマド燃焼部の天井を壊した際に堆積したℓ1上面に置かれていた。カマドに向かって左側に位置する10は横位で口縁部が燃焼部に向くように置かれていた。右側に位置する11は、斜位で口縁部が右袖にもたれ掛かるように置かれている。カマドの南東側には、図34-12の甕が壁溝に伏せ置かれていた。カマド左袖の外側、P5の南西隅部にかけて、杯が2個体重なるように出土している。P5の堆積土上部には、図35-1の甕が斜位に据え置かれ、図34-9の甕が横位で出土した。

図34-1~5は、土師器の杯である。1は有段丸底で、口縁部にはヨコナデ、底部にはヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。2は体部の外面に弱い稜を持ち、口縁部はわずかに外反する。外面にはヨコナデのちヘラケズリが、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。3は体部で湾曲し、口縁端部は外反する。口縁部付近にはヨコナデ、体部にはヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキが施され、黒色処理の痕跡は認められない。4は大型で、底部は緩やかな凸面を呈する。口縁部まで直線的に立ち上がる。外面にはアバタ状の剥落が顕著で、口縁部にはヨコナデ、体部から底部にかけては入念なヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。5は体部と口縁部の境に強い稜が認められる。口縁部にはヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-6は土師器の椀である。深身の丸底で、口縁部は垂直に肥厚する。口縁部にはヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-7・8は高杯である。7は杯部が椀形で、口縁端部はわずかに内傾する。外面には杯部にヨコナデ、脚部には斜位のヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。8は脚部と杯部の接合部に連続したユビオサエで調整している。

図34-9~12、図35-1は土師器の甕である。9は小型で、平底から湾曲しながら立ち上がり、体部は垂直となり口縁部で強く外反する。底部は砂底である。体部内面には帯状のコゲが認められる。10は体部が垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。外面には被熱により、器壁の剥落が顕著である。底部には木葉痕が認められる。内面には粘土紐の積み上げ痕が認められる。11は長胴で、体部的最大径は中央に位置する。口縁部は短く外反する。外面には口縁部がヨコナデ、体

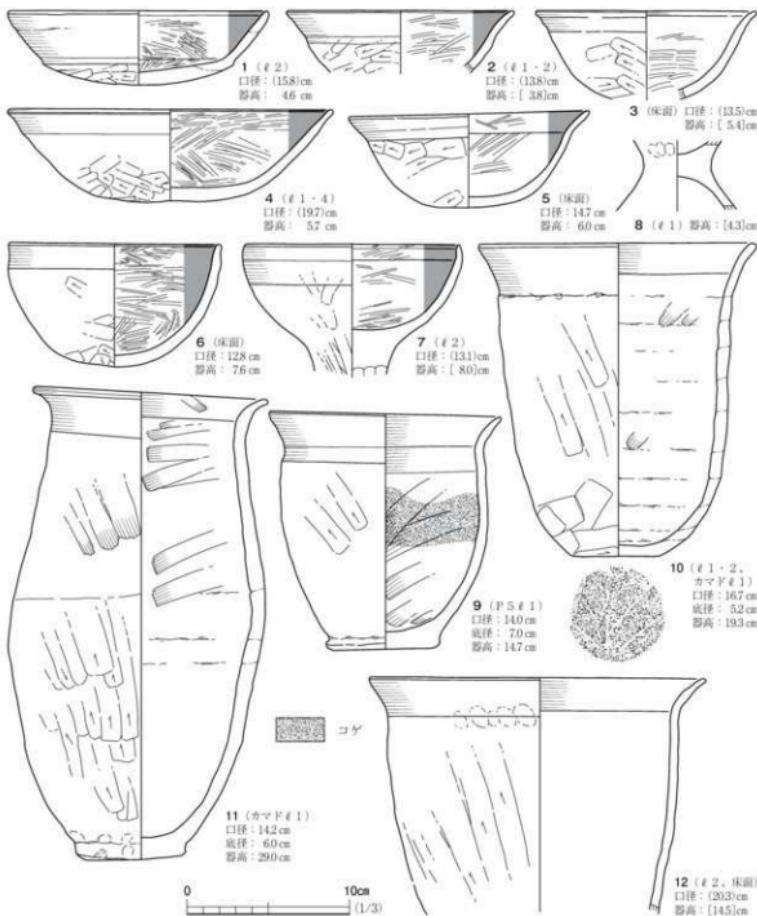


図34 13号住居跡出土遺物 (1)

部上半にはユビナデ、下半にはヘラケズリが施されている。内面の上半にはユビナデが施され、アバタ状に剥落が顕著に認められる。12の器厚は比較的薄手で、体部は垂直に立ち上がり、口縁部で外反する。外面にはヘラケズリが施されている。図35-1は球形の体部となり口縁部はわずかに稜を持つ。外面には口縁部をヨコナデ、体部から底部にかけてが入念なヘラケズリが施されている。内面には口縁部がヨコナデ、体部上半がユビナデ、下半が横位のヘラケズリで調整されている。

同図-2はいわゆる小型丸底鉢である。口縁部は長く外傾する。内外面には赤彩が施されている。

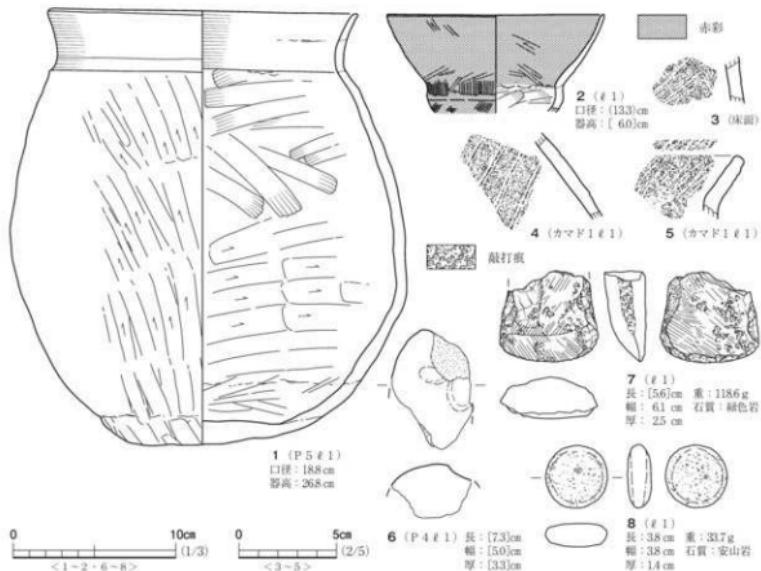


図35 13号住居跡出土遺物（2）

外面にはハメののちヘラミガキ、内面にはユビナデとヘラミガキが施されている。

同図-3～5は弥生土器である。3・4は壺の体部上半で、二本同時施文の平行沈線が施されている。5は甕の口縁部である。

同図-6は土製品である。円柱状を呈することから、カマドの支脚の可能性がある。

同図-7は偏平片刃石斧である。左右両側面には敲打痕が顕著に認められる。刃部には連続した剥離調整が加えられ、刃部の再生を意図している。

同図-8は磨石である。腹背面の中央にはわずかに敲打の痕跡が認められる。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の北側縁辺に立地する。本住居跡は建て替えを1度行っており、13 b号住居跡を拡張するように13 a号住居跡を構築している。13 b住居跡は、13 a住居跡の拡張に伴う掘り込みによりほとんどが破壊され、貼床と掘形、カマドの下端と貯蔵穴のみ確認した。

13 a号住居跡の平面形は方形基調で、規模は一辺の長さが4m中ほどである。床面全体に掘形を持ち、中央には貼床が確認できた。カマドと貯蔵穴は北壁から、東壁に造り替えている。

カマドや貯蔵穴付近からは土師器の壊や甕が一括で出土しており、往時の土器組成がうかがえる。特にカマド上に据え置かれた甕(図34-10・11)は被熱し赤化しており、カマドに設置して煮炊きに使用されていたと考えられる。貯蔵穴に据え置かれた甕(図35-1)は被熱しておらず、穀物な

どの貯蔵具と考えられ、用途を反映した出土位置を示している可能性がある。本住居跡の所属時期は出土遺物から古墳時代後期、6世紀中葉～後葉と考えられる。

(佐藤)

14号住居跡 S I 14

遺構(図36、写真34)

本住居跡は調査区南西部のJ-9グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に位置する。本住居跡は複数の住居跡と重複し、15・18号住居跡より新しい。本住居跡西側に近接して2号性格不明遺構が位置する。2018年に行われた文化財課の試掘調査により把握された住居跡で、LⅢ上面の検出作業により、黒褐色土の正方形の範囲とカマドの燃焼部とみられる焼土が分布する範囲として確認した。本住居跡の東壁や床面の一部は、試掘トレンチの掘り込みにより遺存していない。

本住居跡の平面形は方形である。規模は東西で4.33m、南北で4.55m、検出面から床面までの深さは最大で11cmを測る。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はLⅢ塊や炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、住居全体を覆う人為堆積土である。 ℓ 2は褐灰色粘質土で貼床である。性状は黒褐色土と互層となり、貼床の補修がうかがえる。 ℓ 3はLⅢ塊・炭化物粒や焼土粒を微量に含む黒褐色土で掘形の埋土である。

床面には貼床が認められ、カマドとP1付近にのみ付設され、範囲は長さが2.16m、幅が1.28mほどで、踏み締まりが顕著である。住居の掘形は、北半部に認められる。平面形は不整長方形で、規模は長軸が3.80m、短軸が2.70m、床面からの深さは最大で18cmである。底面にはわずかに凹凸が認められる。上面の踏み締まりは弱い。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基と、床面からビット1基(P1)を確認した。

カマドは住居北壁の中央からわずかに東側に位置する。検出時は燃焼部崩落土の焼土範囲が認められ、煙道は後世の畑作による搅乱により遺存しておらず、燃焼部の天井は人為的に破壊されていた。両袖とも遺存し、規模は向かって右側の袖が壁から52cm、幅が28cm、左側が55cm、幅が23cm、基部の幅は最大94cmである。両袖ともに黒褐色土を積んで構築し、掘形を持つ。左袖には棒状の白色粘土が焚口の構築材として埋設されていた。燃焼部はLⅢ上面や貼床を底面とし、中央より左袖ぎわに焼土面が認められる。平面形は楕円形で、規模は長径38cm、短径30cm、最大6cmの厚さで被熱が及ぶことを断ち割りで確認した。

カマドの堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒や焼土粒を多量に含む黒色土で、燃焼部天井の崩落土である。 ℓ 2は炭化物粒や焼土粒を微量に含む黒褐色土で、煙道天井部の崩落土と判断した。 ℓ 3はLⅢを由来とする褐灰色土で、カマド右袖付近に塗布した痕跡が認められ、袖を補修した土と判断した。 ℓ 4は灰褐色土塊や焼土粒を微量に含む黒褐色土で袖の構築土である。 ℓ 5は褐灰色土で、焚口構築材に伴う掘形の埋土である。

北東隅部に隣接して位置するP1は、位置や規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は楕円形で、

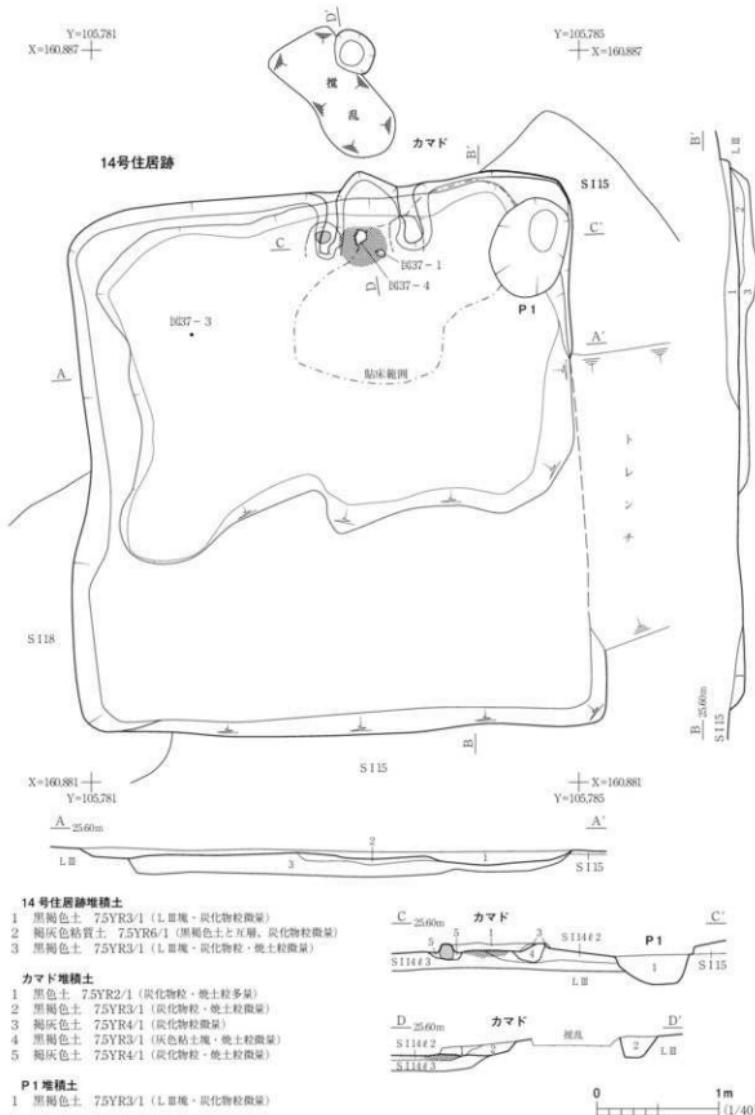


図36 14号住居跡

規模は長径82cm、短径60cm、床面からの深さは24cmを測る。堆積土はLⅢ塊や炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、住居内堆積土ℓ1と同質であることから、本住居跡と同時に堆積したと考えられる。

遺物 (図37、写真120・149・150)

本住居跡からは、弥生土器7点、土師器75点、須恵器2点、石器・石製品3点が出土している。このうち、土師器3点、須恵器1点、石器2点を図示した。

カマド燃焼部上面からは図37-4の須恵器の壺が、底面からは同図-1の土師器杯が伏せ置かれるように出土している。また、カマド左袖から南西側121mの床面からは、同図-3の手づくね土器が出土している。

図37-1は、土師器の杯である。ロクロ成形で、底部から体部下端にかけては回転ヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は、土師器の鉢である。底部の中央には穿孔がみられ、いわゆる「有孔鉢」である。

同図-3は、手づくね土器である。連続したユビオサエにより成形されている。

同図-4は、須恵器の壺の肩部である。外面には平行タタキが施され、灰の付着が認められる。内面には無文の當て具痕が認められる。

同図-5は、磨製石斧の未完成品と判断した。楕円形の礫を素材とし、背面には礫面を残す。腹面は剥離調整に前後する研磨が中央にのみ認められる。

同図-6は、石核とした。上端部を打面とし、1度の剥離を行っている。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地し、重複する4軒の住居跡の中で最も新しい。平面形は方形

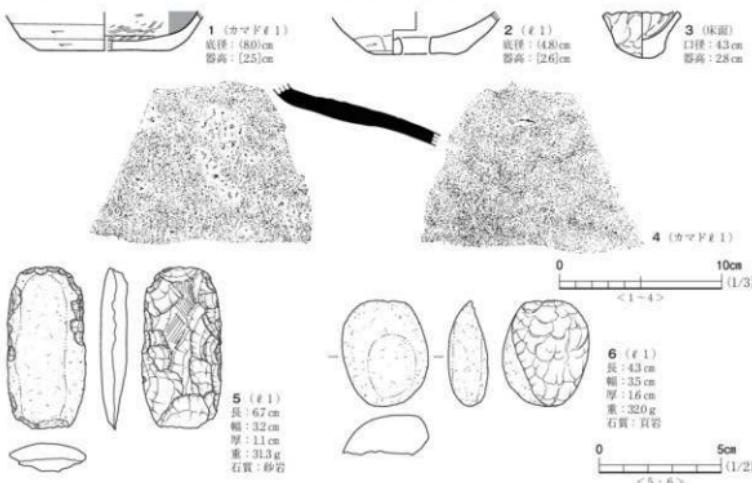


図37 14号住居跡出土遺物

基調で、規模は東西4.33m、南北4.55mで、カマド周辺にのみ貼床が認められる。

本住居跡の所属時期は、カマド燃焼部から出土した図37-1のロクロ成形の土師器杯から、平安時代、9世紀前半と考えられる。

(佐藤)

15号住居跡 S I 15

遺構(図38、写真35)

本住居跡は、調査区南西部のJ-8、J・K-9グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に位置する。本住居跡は複数の住居跡と重複し、28号住居跡より新しく、14・18号住居跡より古い。本住居跡の北東側1.9mには16号住居跡が位置する。

LⅢ上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。遺存状況は不良で、現代の削平が著しく、南辺は壁溝と周壁のわずかな高まりのみ確認できた。

本住居跡の平面形は長方形を呈する。規模は、長軸の東西で7.76m、短軸の南北で6.30m、検出面から床面までの深さは最大で20cmを測る。周壁では遺存が良好な西壁が急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1・2は黒褐色土で、 ℓ 1は住居内を、 ℓ 2は壁溝や間仕切り溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 3はLⅢ塊を微量に含んだ灰褐色土で、掘形の埋土である。

床面は平坦で、掘形は東壁ぎわに沿って認められる。範囲は南北で4.15m、東西で1.04m、床面からの深さは最大で10cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状である。底面にはわずかに凹凸が認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、間仕切り溝2条、ピット6基(P1~6)を確認した。

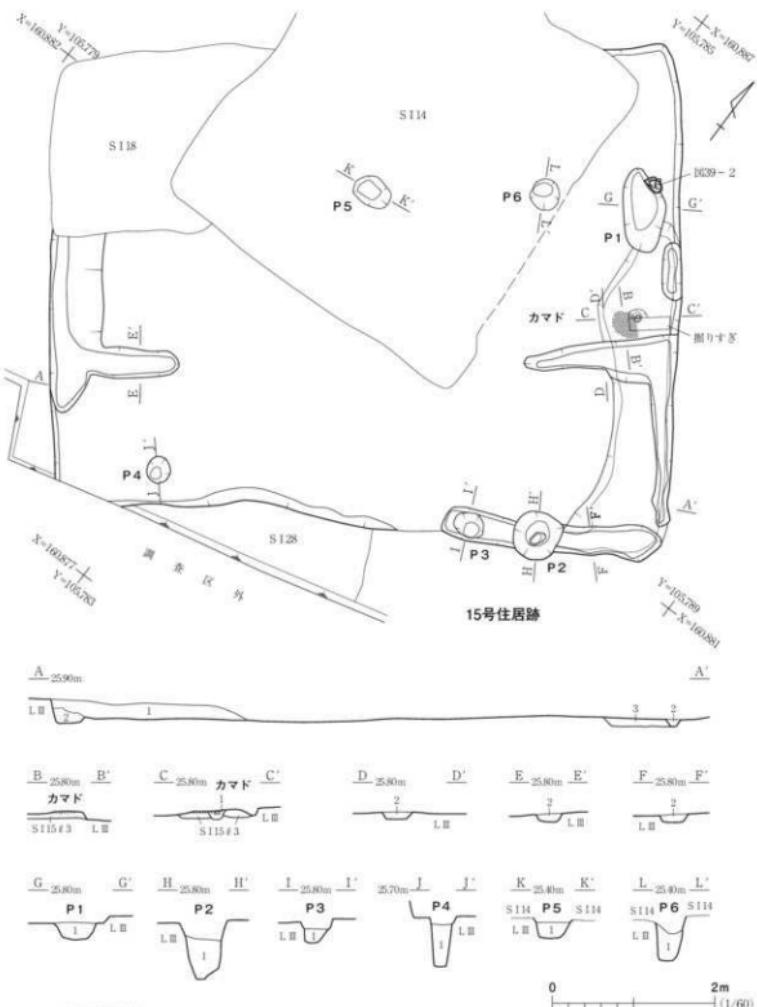
カマドは東壁の中央付近に位置する。その大部分は後世の擾乱及び、壁溝の掘削により破壊されていた。遺存しているのは焼土面と、左袖の焚口の構築材の一部である。

焼土面の平面形は東西方向に長径を持つ楕円形で、長径40cm、短径25cm、最大3cmの厚さで被熱が及ぶことを断ち割りで確認した。焼土面の北側に近接して、焚口の構築材とみられる柱状の白色粘土が付設されていた。焚口の構築材の掘形は、平面形が円形で、直径21cm、深さ11cmである。堆積土は炭化物粒を微量に含む黒褐色土の単層である。

壁溝は東壁、南壁付近に断続的に認められる。床面からの深さは最大で12cmである。間仕切り溝は、東壁と西壁の中央部に位置する。周壁から住居内側に垂直に延び、2条の溝が対になるよう構築されている。間仕切り溝は壁溝から延び、新旧関係は無く、一体に構築されたと考えられる。東壁の間仕切り溝はカマドを壊して構築される。規模は東壁の溝が長さ190cm、幅が広い箇所で57cm、狭い箇所で15cm、深さは8cmと浅い。西壁の溝は長さ159cm、幅が38cm、深さ10cmである。

東壁ぎわの北西側に位置するP1は、位置や規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は、不整楕円形で、規模は長径104cm、短径53cm、床面からの深さは22cmである。

南壁ぎわや壁溝内にはP2~4が位置し、壁柱穴の可能性がある。いずれも平面形は不整円形で、



15号住居跡堆積土

- 1 黒褐色土 75YR3/1 (L.II層・炭化物粒・焼土粒多量)
 2 黑褐色土 75YR3/1 (L.II層・黑色土壤多量)
 3 灰褐色土 5YR4/2 (L.II層微量)

カマド堆積土

- 1 黑褐色土 75YR3/1 (炭化物粒微量)

P1～3堆積土

- 1 黑褐色土 75YR3/1 (L.II層・炭化物粒・焼土粒微量)

P4～6堆積土

- 1 黑褐色土 75YR3/1 (L.II層・炭化物粒微量)

図38 15号住居跡

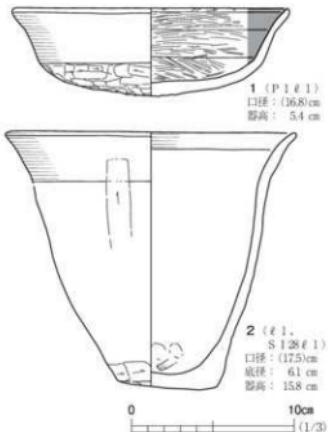


図39 15号住居跡出土遺物

本住居跡からは弥生土器9点、土師器44点、石器・石製品が1点出土している。このうち、土師器2点を図示した。

P 1 の上端付近の床面からは、図39-2の土師器の甕が出土している。

同図-2は土師器の甕である。口縁部は急に外反する。外面には被熱による器壁の剥落が顕著である。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。4軒重複する住居跡の中で、28号住居跡より新しく、14・18号住居跡より古い。平面形は長方形を基調とし、本住居跡の規模は長軸の東西で7.76m、短軸の南北で6.30mと本遺跡内では、最も長大である。また、カマドを壊して間仕切り溝が掘り込まれ、住居内でカマドの造り替えが行われたことを示唆する。また、新しいカマドは14・18号住居跡と重複する箇所に構築され、同遺構の掘削により壊されていた可能性がある。本住居跡の所属時期は出土遺物から、古墳時代後期、6世紀中葉～後葉と考えられる。

(佐藤)

16号住居跡 S I 16

遺構 (図40、写真36)

本住居跡は、調査区中央部、J-10グリッドのLIII上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡と重複する遺構は認められないが、北側約1mには近接して17号住居跡が位置している。

後世の畑作や宅地造成の擾乱土を除去した後のLIII上面の検出作業時に、褐色土やにぶい黄橙色粘質土を基調とした不整方形の範囲として確認した。本住居跡の遺存状況は不良で、検出の際に南東半部は、貼床が露出している状況であった。

規模は直径32～59cm、深さは26～70cmである。

P 5・6は住居中央から北側に位置し、性格は不明である。いずれも平面形は不整円形で、直径38～47cm、深さ24～54cmである。P 1～6の堆積土はいずれも黒褐色土で、住居内堆積土の①と同質であることから、ピットと住居跡はほぼ同時に埋めたものと考えられる。

遺物 (図39、写真120)

本住居跡からは弥生土器9点、土師器44点、石器・石製品が1点出土している。このうち、土師器2点を図示した。

P 1 の上端付近の床面からは、図39-2の土師器の甕が出土している。

図39-1は土師器の杯である。丸底で、体部と底部の境に弱い稜が認められる。外面には口縁部から体部をヨコナデ、底部にヘラケズリが認められ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の甕である。口縁部は急に外反する。外面には被熱による器壁の剥落が顕著である。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。

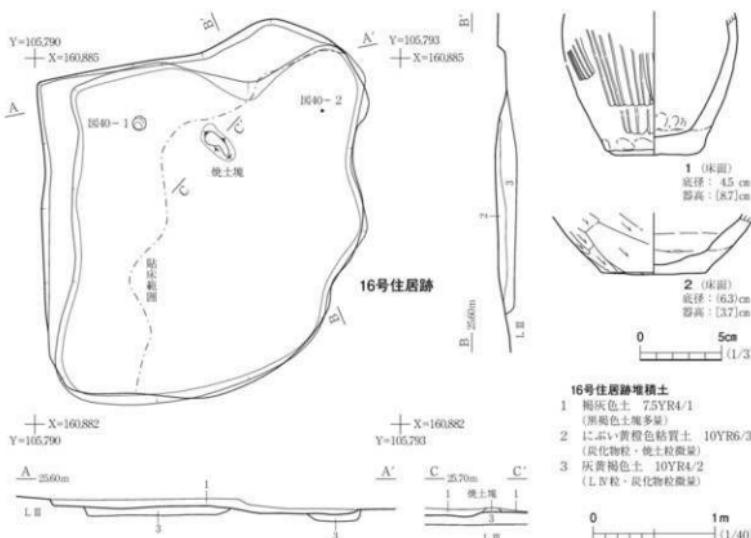


図40 16号住居跡・出土遺物

本住居跡の平面形は、方形を基調としていたと考えられる。規模は遺存値で東西2.72m、南北2.82mである。検出面から床面までの深さは最大で9cmを測る。周壁は北西隅部では急に、南東側は緩やかに立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土塊を多量に含む褐灰色土で、人為堆積土と判断した。 ℓ 2は炭化物粒・焼土粒を微量に含むにふい黄橙色粘質土である。 L III・IVを由来とした粘質土を用いた貼床で、締まりは強い。 ℓ 3は灰黄褐色土で L IV粒や炭化物粒を微量に含む。 L IIIを由来とした土で、掘形の埋土である。

床面はほぼ平坦で、南東半部には貼床が認められ、強く踏み締まる。その規模は北東-南西方向で3.26m、北西-南東方向で1.77m、深さは最大で7cmを測る。北壁と西壁付近を除く全面に掘形が認められ、床面からの厚さは最大で18cmを測る。掘形上面の踏み締まりは、貼床と比較して弱い。

床面の中央から北側には焼土塊が置かれていた。規模は長さ37cm、幅16cm、厚さは3cmである。

遺 物 (図40、写真120)

本住居跡からは弥生土器1点、土師器8点が出土した。このうち、土師器2点を図示した。

床面からは、図40-1・2の土師器の壺が出土している。

図40-1・2は、土師器の壺である。1は平底の長胴で、湾曲しながら立ち上がる。外面には底部がヘラナデ、体部にはタタキメが施されている。底部は砂底である。2は平底となる底部で、外面には斜位のヘラケズリが施されている。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形は方形を基調としていたと考えられ、規模は遺存値で、東西2.72m、南北2.82mと小型の住居跡である。近接する17号住居跡とは、住居の軸方向が類似する。床面の南東半部には貼床が、北壁と西壁付近を除く全面には掘形が認められた。

本住居跡の所属時期は、図40-1の外面にタタキメを持つ甕から、おおむね奈良・平安時代と考えられる。
(佐藤)

17号住居跡 S I 17

遺構(図41、写真37)

本住居跡は調査区中央部、I-10、J-9・10グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の

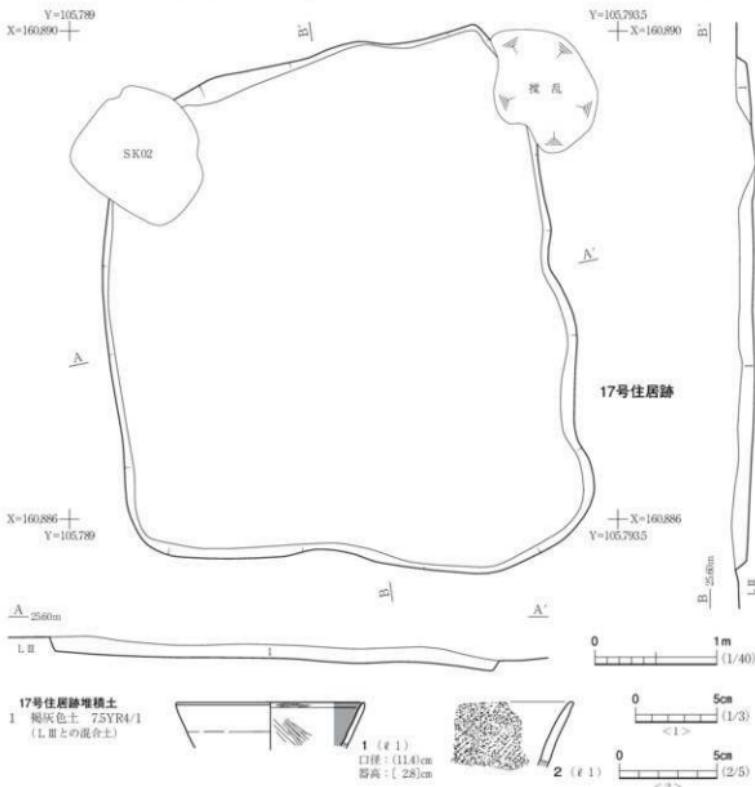


図41 17号住居跡・出土遺物

平坦面に立地している。2号土坑と重複し、本住居跡が古い。本住居跡の北東側には6号住居跡が、南側に16号住居跡が近接して分布している。

本住居跡は、後世の畑作の擾乱土を除去した後のLⅢの検出作業により、褐灰色土を基調とした方形の範囲として確認した。本住居跡の北東隅部は、擾乱により遺存していない。

本住居跡の平面形は方形を基調とし、東壁が幅広となる。規模は東西が3.85m、南北が4.51m、検出面から床面までの深さは最大で14cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は、褐灰色土とLⅢの混合土の単層で、人為堆積土と判断した。

床面は平坦で、踏み締まりや貼床、掘形は認められない。また、カマドや壁溝など付属施設について確認できなかった。

遺物（図41）

本住居跡からは弥生土器2点、土師器6点、須恵器1点が出土している。このうち、弥生土器1点、土師器1点を図示した。

図41-1は土師器の杯で、口縁部付近の小片である。ロクロ成形で、体部は口縁端部に向けて直線的に外傾する。外面にはロクロナデ、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は弥生土器の甕である。口縁部付近の小片で、端部は平坦である。摩滅が著しいが、外面には地文が認められる。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形は方形基調で、規模は東西が3.85m、南北が4.51mである。近接する16号住居跡とは、住居の軸方向が類似する傾向にある。カマドではなく、床面の踏み締まりや貼床の痕跡は認められず、機能していた時期は短期間であった可能性がある。

本住居跡の所属時期は出土遺物に、図41-1のロクロ成形の土師器杯が含まれることから、平安時代、9世紀頃と考えられる。
(佐藤)

18号住居跡 S I 18

遺構（図42、写真38）

本住居跡は調査区の南西側、J-8・9グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地している。本住居跡は複数の住居跡との重複関係が認められた。14号住居跡より古く、15号住居跡より新しい。本住居跡の北西側3.4mには22号住居跡が、北側1.6mには2号性格不明遺構が位置している。

調査当初は、15号住居跡の西隅部として調査を行ったが、堆積土が異なることや、南東側に15号住居跡とは異なる掘形が認められたことから、再度精査を行った。その結果、黒褐色土を基調とした長方形の範囲として確認した。本住居跡の北東側は、14号住居跡の掘削により周壁や床面は破壊され、P1・2のみ遺存していた。また、15号住居跡の調査時の掘削により東壁は破壊され、掘形のみ遺存している。

本住居跡の平面形は遺存している部分から、北東-南西方向に長軸を持つ長方形と考えられる。本住居跡の平面形は、15号住居跡の周壁及び西隅部と合致することから、埋没した15号住居跡の西隅部を掘り直し、周壁に利用している。規模はいずれも遺存値で、長軸の南北が2.58m、短軸の東西が2.15mである。検出面から床面までの深さは最大で10cmを測る。遺存する周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は5層に分けられた。 $\ell 1$ は白色粘土塊を多量に含む黒褐色土で、住居全体を覆う人為堆積土である。 $\ell 2$ は炭化物粒を微量に含むにぶい黄橙色土粘質土で、貼床である。 $\ell 3 \sim 5$ は掘形の埋土である。

床面は平坦で、貼床は住居中央からやや東側にのみ構築される。貼床の北東側は、P 1と14号住居跡に破壊され遺存していない。貼床の平面形は楕円形で、規模は遺存値で長径49cm、短径42cmと範囲は小規模なことから、床面の経年使用によりくぼんだ範囲を補修した可能性がある。住居の掘形は、全面に認められた。床面からの深さは最大で18cmである。周壁は急な角度で立ち上がり、底面には細かな凹凸が顕著に認められる。

本住居跡に付属する施設として、床面から、焼土面1箇所、壁溝、ピット2基(P 1・2)、掘形底面からピット1基(P 3)を確認した。

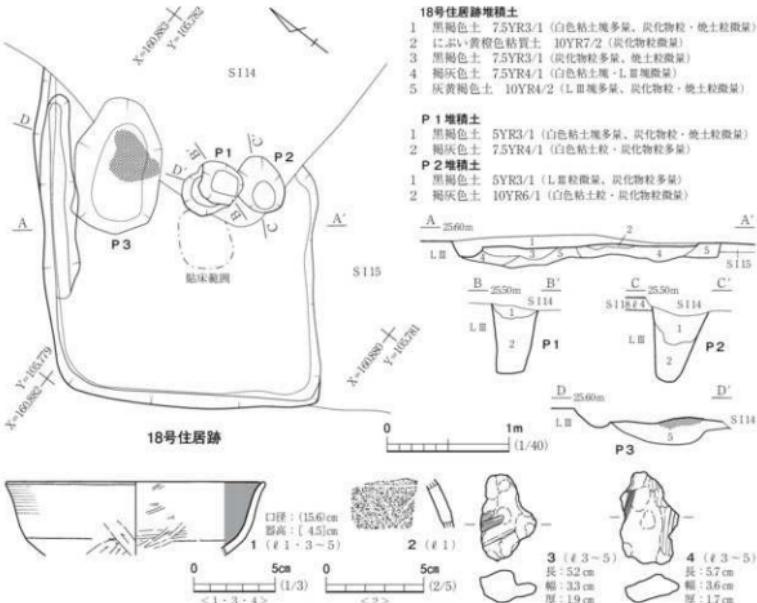


図42 18号住居跡・出土遺物

焼土面は住居北側のP 3の上部に位置する。平面形は不整形で、長さは44cm、最大8cmの厚さで被熱が及ぶことを断ち割りで確認した。カマドや炉などの施設と想定される。

壁溝は西壁に沿って構築される。長さは遺存値で167cm、幅30cm、床面からの深さ8cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状である。

P 1・2は住居東隅部に位置する。P 1は、貼床とP 2の縁辺と重複し、これより新しい。P 1の平面形は不整梢円形を呈し、西側は段状になる。規模は長径52cm、短径39cm、深さは55cmである。P 2の平面形は梢円形で、規模は長径48cm、短径は遺存値で38cm、深さは55cmである。堆積土はいずれも、黒褐色土や褐灰色土を基調とし、白色粘土粒や炭化物粒が含まれる。住居内堆積土ℓ 1と近似することから、住居と同時にP 1・2も埋めたものと判断した。

掘形底面で検出したP 3は壁溝に隣接して位置する。P 3は浅い土坑状の掘り込みで、直上には焼土面が認められることから、焼土面に伴う掘形の可能性がある。平面形は梢円形で、規模は長径111cm、短径70cm、床面からの深さは最大22cmである。

遺 物 (図42、写真120)

本住居跡からは弥生土器6点、土師器35点、石器・石製品1点、粘土塊5点が出土した。このうち、弥生土器1点、土師器1点、粘土塊2点を図示した。

図42-1は土師器の杯である。丸底で、体部は急な角度で外傾し、口縁部でわずかに外反する。口縁部付近の外面にはヨコナデ、体部下位の外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は弥生土器である。壺の体部上半とみられ、一本引きの沈線で文様が施されている。

同図-3・4は粘土塊である。ユビオサエで成形され、スサの圧痕が多く認められる。

ま と め

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形は長方形基調と考えられ、規模は遺存値で長軸の南北が2.58m、短軸の東西が2.15mである。本住居跡は、15号住居跡の周壁の位置と合致することから、埋没した15号住居跡の西隅部を掘り込み、周壁としている。床面の焼土面は、炉やカマドの燃焼部の可能性がある。本住居跡の所属時期は、住居掘形から出土した図42-1の土師器の杯から古墳時代後期、6世紀中葉～後葉と考えられる。

(佐 藤)

19号住居跡 S I 19

遺 構 (図43・44、写真39)

本住居跡は調査区南西部のK-7グリッドのL IIIの上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。5号土坑と重複し、本住居跡が新しい。本住居跡の北東2.20mには21号住居跡が位置している。L III上面の検出作業により、褐灰色土を基調とした方形の範囲とカマドの煙道を確認した。本住居跡の南半部は調査区外に延びている。遺存状況は良好である。

本住居跡の平面形は方形を基調とする。規模は、遺存の良好な東西で392m、検出面から床面ま

での深さは最大で28cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はLⅢ塊や黒褐色土塊を微量に含む褐灰色土で、住居全体を覆う人為堆積土と判断した。 ℓ 2はLⅢ粒や炭化物粒・焼土粒を微量に含むにぶい黄橙色粘土で、貼床である。 ℓ 3はLⅢ塊やにぶい黄橙色粘土粒を微量に含む褐灰色土で、掘形の埋土である。

床面は平坦で、貼床はカマド周辺から住居中央部にかけて認められ、最大幅は2.40mである。掘形は全面に認められた。掘形の底面の一部には、浅い溝状の掘り込みが認められた。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面でピット3基(P1・2・4)、掘形底面からピット1基(P3)を確認した。

カマドは住居北壁の中央よりやや東側に位置する。左袖と焼土面の西半部は、P2の掘削により

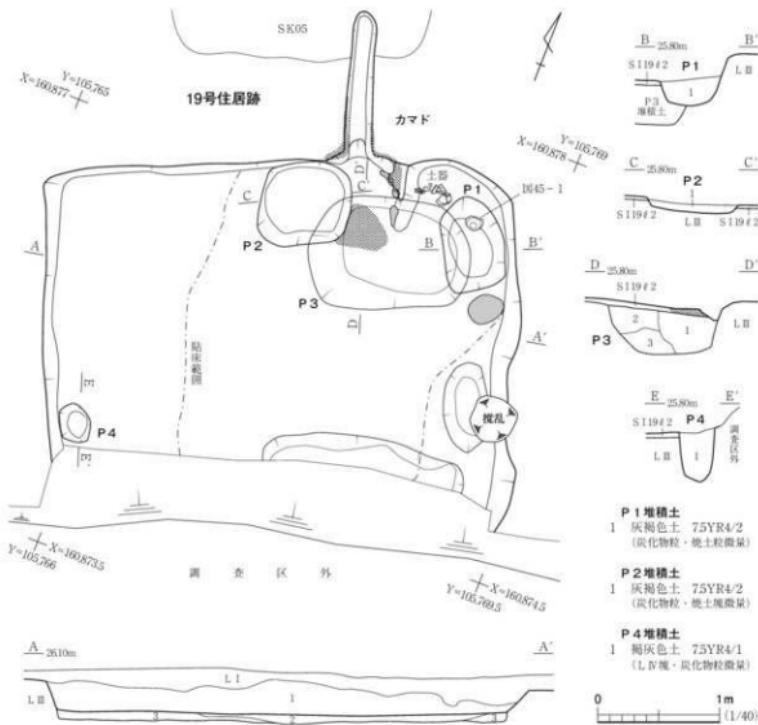


図43 19号住居跡

破壊されている。燃焼部には、天井とみられるこぶし大の焼土塊が多く認められた。遺存する右袖は、壁から55cm、幅24cm、高さは20cmを測る。右袖の内壁は焼土化しており、その厚さは最大で4cmである。袖の構築土には褐灰色土(カマド堆積土ℓ3)を用い、その内側には、LIVを由来とする白色粘土を焚口の構築材としている。燃焼部は貼床を底面とし、右袖の南西側には焼土面が認められる。平面形は楕円形の可能性があり、規模は長径が遺存値で43cm、短径が38cmで、最大5cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は北壁に対し直角に延びている。規模は長さ105cm、幅は燃焼部側で23cm、煙出し側で19cmである。煙道の底面は、煙出し側に向けて緩やかに立ち上がり、燃焼部側の壁は焼土化している。

カマドの堆積土は3層に分けられた。ℓ1は炭化物粒・焼土粒を微量に含む褐灰色土で、住居内堆積土ℓ1に近似することから、カマド廃絶後に住居跡と同様に埋めた土と判断した。ℓ2は焼土

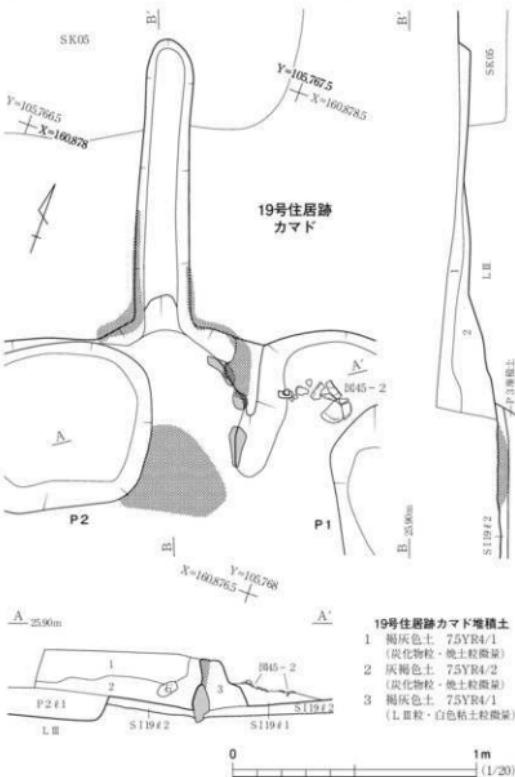


図44 19号住居跡カマド

粒や炭化物粒を微量に含んだ灰褐色土で、カマドの天井崩落土である。ℓ3はLⅢ系や白色粘土粒を微量に含む褐灰色土で、袖の構築土である。

カマド右袖に近接して検出されたP1は、位置や規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は楕円形で、規模は長径76cm、短径50cmで床面からの深さは21cmを測る。堆積土は灰褐色土の単層で、炭化物粒や焼土粒を微量に含む。

P2はカマドの左側に位置し、カマド左袖と焼土面の西半部を壊して掘り込まれる。平面形は方形で規模は一辺68~75cmで、床面からの深さは7cmと浅い。堆積土は灰褐色土の単層で、P1の堆積土と同質である。カマドを壊した際の掘削痕跡の可能性がある。

P4は西壁ぎわに位置す

る。平面形は不整方形で、規模は一辺33cm、床面からの深さは40cmである。堆積土はLⅣ塊・炭化物粒を微量に含む褐灰色土の単層である。その性格は不明である。

P3は掘形底面のカマド燃焼部直下に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径133cm、短径92cmである。深さは床面から最大で40cmである。断面形は逆台形となり、底面は平坦である。P3の堆積土は3層に分けられた。 $\ell 1$ はLⅢ塊を多量に含む黒褐色土で、 $\ell 2$ はLⅢを由来とするにぶい黄橙色土で、黒褐色土塊を微量に含む。 $\ell 3$ は炭化物粒や焼土粒を微量に含む褐灰色土である。P3はカマド燃焼部や、貯蔵穴の防湿を目的としていると考えられる。

遺物(図45、写真120・121)

本住居跡からは弥生土器16点、土師器片533点、須恵器5点、石器・石製品2点、土製品1点が出土した。このうち、赤焼土器1点、土師器10点、須恵器1点、土製品1点を図示した。

図45-1は赤焼土器の杯である。平底で体部は直線的に外傾し、口縁端部に至る。底部から体部下端には回転ヘラケズリが施されている。全体的にいびつで、底部外面には黒斑が認められる。

同図-2~7はロクロ成形の土師器杯である。いずれも体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。いずれも外面にはロクロナデ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。2・3・5・

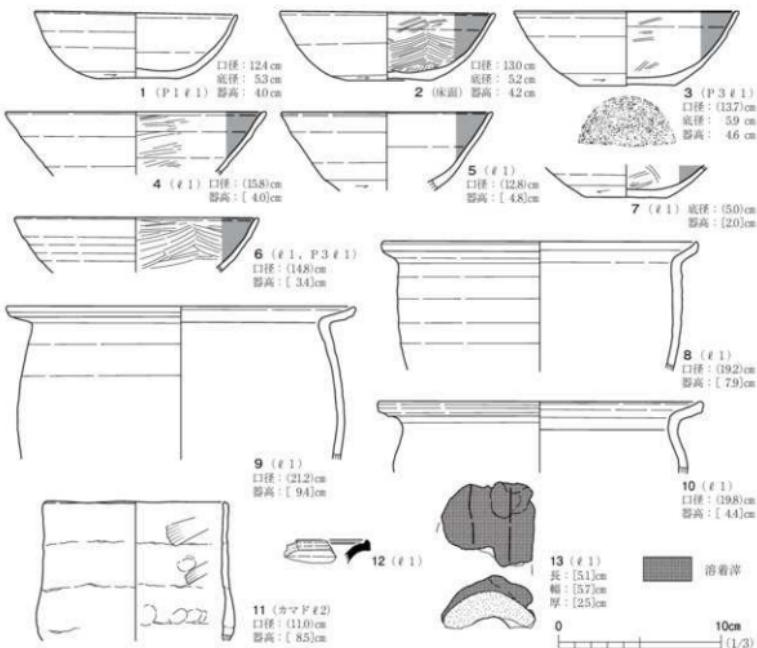


図45 19号住居跡出土遺物

7の底部から体部下端にかけては、回転ヘラケズリが施されている。

同図-8~10はロクロ成形の土師器壺である。いずれも口縁部で強く外反し、口縁端部は肥厚し、わずかに斜位に摘み上げられる。外面には、ロクロナデが認められる。

同図-11は筒形土器である。垂直に立ち上がり、内外面に粘土粙の積み上げ痕が認められる。

同図-12は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は受け口状になる。内面に自然釉が付着している。

同図-13は羽口である。鍛冶に用いられたとみられ、先端部には溶着滓が付着している。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地し、平面形は方形基調で、一辺4mほどの住居跡である。P3はカマド燃焼部付近の直下にあり、カマドや貯蔵穴の防湿を目的とした可能性がある。P2はカマド左袖と焼土面の西半部を壊して掘られ、カマド廃絶に伴う掘削痕跡の可能性がある。出土した図45-1の赤焼土器の杯には、回転ヘラケズリが加えられており、特異な点といえる。

本住居跡の所属時期は出土遺物の状況を勘案し、平安時代、9世紀と考えられる。(佐藤)

20号住居跡 S I 20

遺構(図46、写真40)

本住居跡は、調査区南西部のJ・K-7グリッドのLIII上面で検出された。丘陵頂部の平坦面、住居跡群が分布する範囲の南西端部に立地する。5号土坑と重複し、本住居跡が古い。本住居跡の南側1.7mには19号住居跡が、南東側1.6mには21号住居跡が近接して位置している。

LIII上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。本住居跡の周壁の一部は、木根により破壊され遺存していない。

本住居跡の平面形は方形である。規模は南北5.70m、東西5.85m、検出面から床面までの深さは最大で12cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は、褐灰色土塊を多量に含む黒褐色土で、住居全体を覆う人為堆積土である。 ℓ 2はLIII・IV塊を微量に含む灰黄褐色土で、掘形の埋土である。

床面は平坦を基調とし、中央部分は黒褐色土が斑状に認められる。掘形は住居壁面に沿って、幅広の周溝状に掘り込まれ、床面中央を掘り残す。中央から東側はスロープ状になる。周溝状となる掘形の幅は0.57~2.60mである。床面からの深さは、西側が16cmと浅いのに対し、東側は最大29cmと深い傾向がある。底面は凹凸が顕著である。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット1基(P1)を確認した。

P1は住居中央部からやや北東側に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径55cm、短径46cm、床面からの深さは28cmである。堆積土は2層に分けられ、 ℓ 1は褐灰色土、 ℓ 2は灰黄褐色土でいずれも住居内堆積土 ℓ 2と近似する。

遺物(図46、写真121)

本住居跡からは弥生土器71点、土師器150点、石器・石製品5点、土製品1点が出土した。この

うち、土師器3点、弥生土器1点、土製品1点を図示した。

図46-1は土師器の壺である。複合口縁で、外面にはヨコナデ、ハケメが施されている。

同図-2は土師器の壺である。口縁部は強く外反し、口縁端部は水平となる。外面にはハケメが施され、外面には赤彩が認められる。

同図-3は壺の口縁部付近で、短く外傾する。外面にはハケメ、内面にはヨコナデが施されている。

同図-4は弥生土器の壺の口縁部と判断した。口縁端部は平坦で、キザミが施されている。外面には二本同時施文の平行沈線文が施されている。



図46 20号住居跡・出土遺物

同図-5は土製支脚とした。偏平で、先端に向けて湾曲する。全体をユビオサエにより整形し、胎土にはスサや種実、繊維の圧痕が認められる。焼成は不良で剥落が著しい。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形が方形で、南北5.70m、東西5.85mの住居跡である。住居の掘形は、住居周壁に沿い、幅広の周溝状に掘り込まれる。カマドの痕跡は認められなかった。本住居跡の所属時期は、カマドが認められないことや、出土遺物の特徴から古墳時代前期と考えられる。

(佐藤)

21号住居跡 S I 21

遺構 (図47、写真41)

本住居跡は、調査区の南西部、J・K-7・8グリッドのLIII上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡は、他遺構との重複関係は認められないが、本住居跡の北側には、3号土坑が隣接し、西側約1.5mには20号住居跡が、南西側2mには19号住居跡が分布する。

LIII上面の検出作業により、褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。南隅部は擾乱により遺存していない。

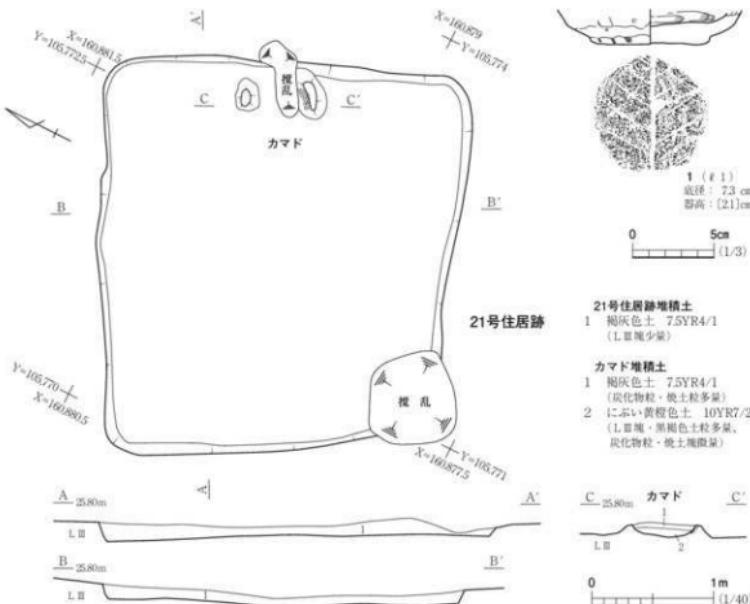


図47 21号住居跡・出土遺物

本住居跡の平面形は方形で、規模は南北3.27m、東西3.04m検出面から床面までの深さは15cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土はL IIを由来とする褐灰色土の単層で、周辺からの流れ込んだ土と判断した。

床面はL IIIを掘り込んで造られ、北西側に向かってわずかに傾斜するが、ほぼ平坦になる。床面の踏み締まりは弱く、貼床や掘形は認められない。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基を確認した。

カマドは住居北壁の中央付近に位置する。カマドの燃焼部や煙道の一部は木根の搅乱により遺存しておらず、両袖のみを確認した。両袖は、L IIIを削り出して構築されている。比較的良好な右袖が壁から45cm、高さは10cm、両袖の基部間の幅は75cmである。右袖の内壁は焼土化しており、その厚さは2cmに及ぶことを断ち割りで確認した。

カマド内の堆積土は2層に分けられた。ℓ 1は炭化物粒・焼土粒を多量に含む褐灰色土で、天井の崩落土と判断した。ℓ 2はL III塊や黒褐色土粒を多量に含むにぶい黄橙色土で、天井崩落土やカマド使用時の堆積の混合土と判断した。

遺 物（図47）

本住居跡からは弥生土器2点、土師器20点が出土した。このうち土師器1点を図示した。

図47-1は土師器の壺の底部である。底部外面には粘土粒及び、木葉痕やスサの圧痕が認められる。内面はユビナデで調整している。

ま と め

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地し、平面形は方形で、規模は一辺3mほどの比較的小型な住居跡である。22号住居跡とは、住居の規模、軸方向、カマドの構築位置が類似する。床面には踏み締まりは弱く、貼床の痕跡は認められない。本住居跡の所属時期は、出土遺物に乏しく判然としないが、おおむね古墳時代～古代と考えられる。

（佐藤）

22号住居跡 S I 22

遺 構（図48、写真42・43）

本住居跡は、調査区の南西部の、J-8グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地している。他遺構との重複関係は認められないが、本住居跡の北側1mには13号土坑が位置している。

現代の搅乱や烟作溝を掘削後、L III上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。カマドの煙道や、東壁や西壁の上端の一部は搅乱により破壊され、遺存していない。

本住居跡の平面形は方形で、規模は南北2.74m、東西2.44m、検出面から床面までの深さは最大で24cmを測る。周壁は東壁が緩やかに、それ以外は急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は4層に分けられた。ℓ 1・2はL III塊などを少量に含む黒褐色土で住居全体を覆う人為堆積土である。ℓ 3はL III塊を多量に含む褐灰色土で、周壁の崩落土である。ℓ 4は黒褐色

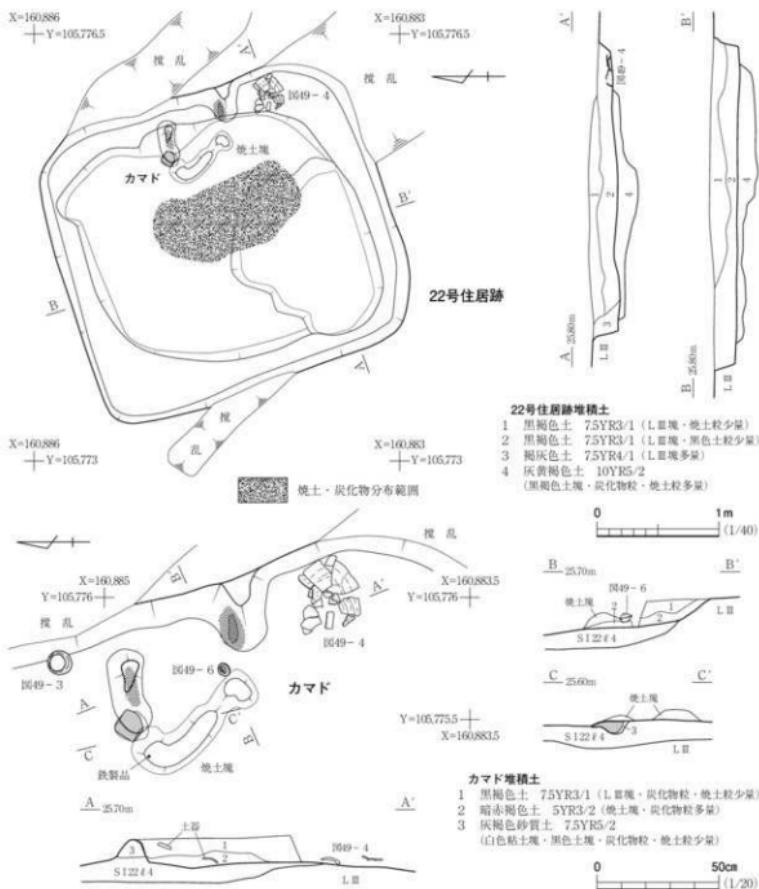


図48 22号住居跡

土塊・炭化物粒・焼土粒を多量に含む灰黄褐色土で、掘形の埋土である。

床面は、南西隅部に向かってわずかに傾斜するが、ほぼ平坦である。住居中央からカマドの焚口前面付近には焼土や炭化物が分布していた。全体的に床面の踏み締まりは弱い。床面の中央には掘形が認められた。平面形は長楕円形を基調とし、規模は長径2.29m、短径2.00m、床面からの深さは最大で17cmである。底面は中央部から南西隅部にかけてくぼんでいる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基を確認した。

カマドは住居東壁の中央付近に位置する。カマドの煙道は搅乱により遺存していない。袖の一部

は人為的に破壊されていた。燃焼部前面に位置する焼土塊は、カマドの構築材と考えられるが、原位置を留めていない。左袖は基部が壊され、規模は遺存する長さが35cm、高さは8cmである。右袖は先端部が壊され、遺存する長さは29cmである。両袖の基部間の幅は68cmである。両袖の内壁は焼土化し、その範囲が1cmに及ぶことを断ち割りで確認した。両袖とも灰褐色砂質土を用いて構築され、左袖の先端部には、掘形を持つ白色粘土が垂直に据え置かれており、焚口の構築材と考えられる。

カマド内の堆積土は3層に分けられた。 $\ell 1$ はLⅢ塊や炭化物粒・焼土粒を少量に含む黒褐色土で、住居内堆積土 $\ell 1$ に近似する。 $\ell 2$ は焼土塊や炭化物粒を多量に含んだ暗赤褐色土で、カマド使用時の堆積や天井崩落土と判断した。 $\ell 3$ は白色粘土塊や黒色土塊などを少量に含む灰褐色砂質土で、両袖の構築土、左袖先端部の白色粘土の掘形埋土である。

遺 物 (図49、写真121・146・151)

本住居跡からは弥生土器6点、土師器102点、須恵器1点、石器・石製品4点、土製品1点、鉄製品1点が出土した。このうち、土師器5点、土製品1点、石製品1点、石器1点を図示した。

本住居跡のカマド周辺の床面付近からは、土師器や土製品が出土している。カマド前面にある焼

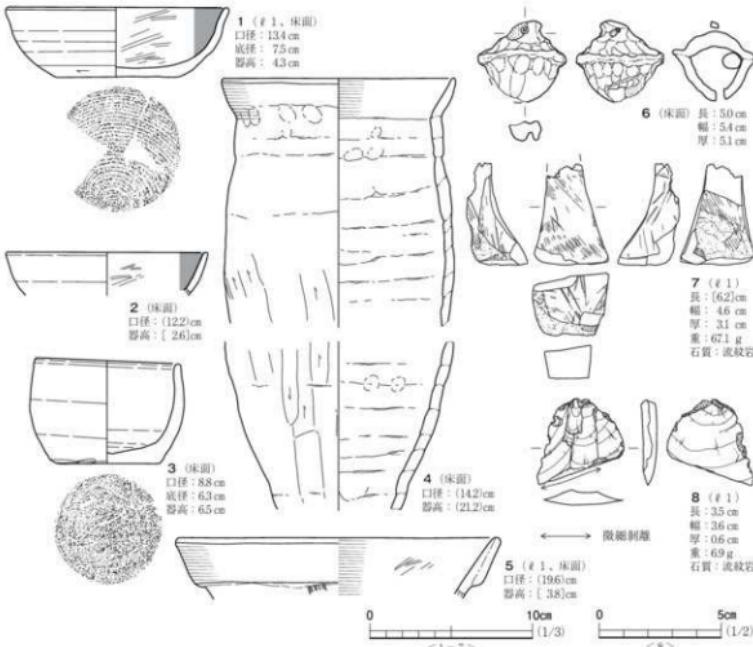


図49 22号住居跡出土遺物

土塊の上には、図49-6の土鉢が一部を打ち欠かれた状態で斜位に据え置かれていた。住居廃絶に際したカマド終いに関連する祭祀行為の痕跡と考えられる。カマド左袖の外側、東壁ぎわには、図49-3の鉢が床面に伏せ置かれ、右袖の外側には、図49-4の壺が破碎した状態で出土した。

図49-1・2は、土師器のロクロ成形の杯である。いずれも、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。1は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部でわずかに外傾する。外面には不明瞭ながら、底部回転糸切後の回転ヘラケズリによる再調整が体部下端にまで施されている。外面には部分的に黒斑が観察される。

同図-3は土師器の小型鉢である。ロクロ成形で、体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、口縁部は垂直に肥厚する。外面の底部は、手持ちヘラケズリで丁寧に調整される。内面の底部には使用による摩滅が認められる。

同図-4は土師器の壺である。長胴で、体部下半は外傾し、体部上半は垂直に立ち上がり、口縁部で緩やかに外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部外面の下半には縦位のヘラケズリ、内面には粘土紐の積み上げ痕が顕著に認められる。

同図-5は土師器の複合口縁の壺である。口縁部の内外面にはヨコナデ、外面にはハケメ、内面にはヘラミガキが施されている。

同図-6は土製品の土鉢である。半球形の部分と紐孔のある蓋形の部分を連続したユビオサエで接合、調整している。下部の欠損部は意図的に壊された可能性がある。紐孔は2箇所認められ、貫通孔と盲孔がある。土鉢の内部には、丸玉状のいわゆる「鳴子」がはいっていた。

同図-7は砥石である。細かい斜位の線状痕が認められる。腹面の一部には礫面が認められる。

同図-8は形状から石核もしくは、石槍の可能性がある。背面には縦長の連続した剥離調整が加えられる。欠損した下端部には微細な剥離調整が加えられている。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形は方形基調で、規模は南北2.74m、東西2.44mの比較的小型の住居跡である。21号住居跡とは住居の規模、軸方向、カマドの構築位置が類似している。床面の中央部には長楕円形の掘形を持つ。土鉢は、カマドの天井とみられる焼土塊の上に、据え置かれた状況で確認できた。住居廃絶に際したカマド終いにかかる祭祀行為がうかがえる。

本住居跡の所属時期は出土遺物から、平安時代、9世紀代と考えられる。

(佐藤)

23号住居跡 S I 23

遺構(図50、写真44・45)

本住居跡は、調査区南西隅部、I-4グリッドのL III上面で検出された。丘陵北西側の斜面の中でも、裾部にはほど近く、傾斜が緩やかになる箇所に立地する。本住居跡と重複する遺構はないが、北東側1mに5号性格不明遺構が位置する。

L III上面の検出作業により、灰黄褐色土を基調とした方形の範囲とカマドの煙道を確認した。

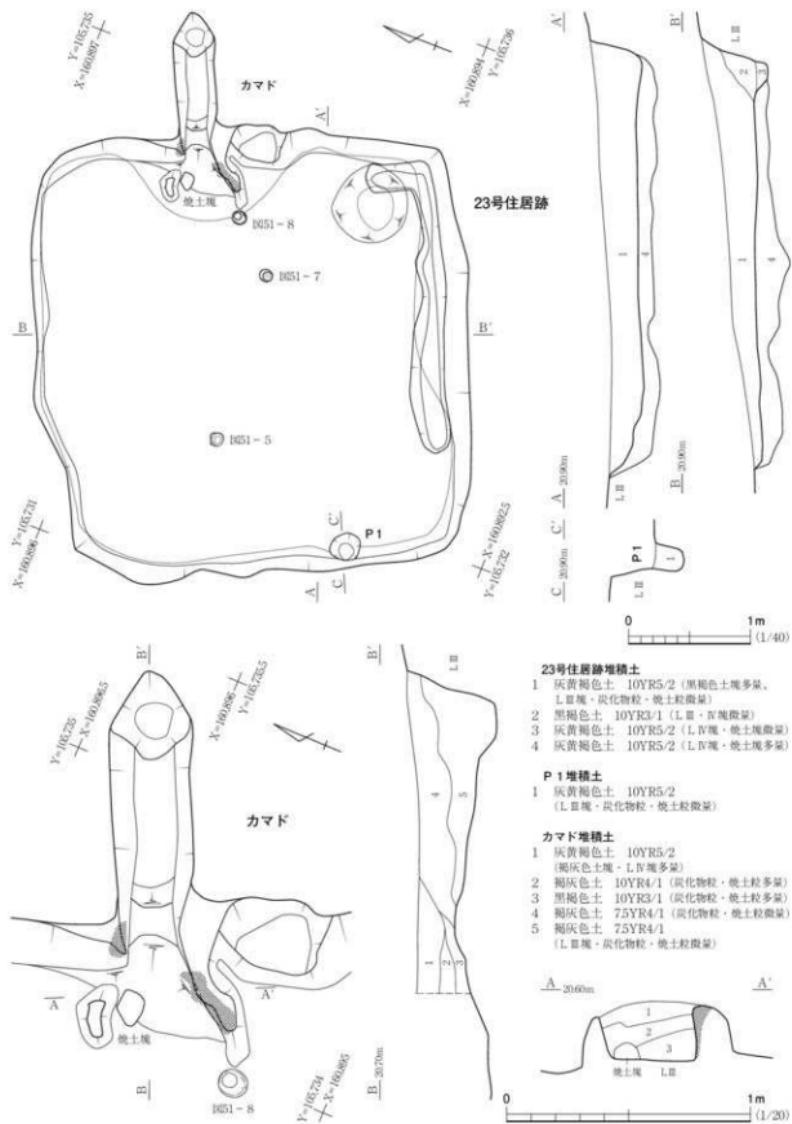


図50 23号住居跡

本住居跡の平面形は方形である。規模は南北で3.58m、東西で3.63m、検出面から床面までの深さは最大で40cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土塊やL III塊を含む灰黄褐色土で住居全体を覆う人為堆積土である。堆積状況から住居廃絶後に同質の土で、短期間に埋め立てたものと判断した。 ℓ 2はL III・IV塊を微量に含む黒褐色土で、南壁の床面に堆積していた。 ℓ 3はL IV塊や焼土塊を微量に含む灰黄褐色土で、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 4はL IV塊や焼土塊を多量に含む灰黄褐色土で ℓ 3と比較し、締まりや粘性が強い。掘形の埋土である。

床面には掘形が認められ、カマドや壁溝付近を除いた全面で確認できた。東隅にはピット状の浅い掘り込みが認められる。床面からの深さは最大で29cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット1基(P 1)を確認した。

カマドは東壁の中央付近に位置する。両袖は遺存しているが、左袖の基部は部分的に破壊されている。規模は、右袖が壁から長さ70cm、高さ20cmである。右袖の内壁は焼土化し、最大6cmの厚さに及ぶことを断ち割りで確認した。遺存している左袖の長さは27cm、高さ21cmである。両袖の基部間の最大幅は68cmで、L IIIを削り残して構築している。また、右袖の南東側、床面から10cmほどの高さにはテラス状の段差があり、長さ47cm、幅30cmを測る。煙道は東壁に対し直角に延びるように掘り込まれる。規模は長さ107cm、幅は33cmである。煙道の底面は、燃焼部から緩やかに立ち上がり、約10cmの長さで平坦となり、先端の煙出しピットに向けて、緩やかに低くなる。煙出しピットの平面形は、煙道の長軸上に隅部を持つひし形で、東西方向で37cm、南北方向で34cm、検出面からの深さ36cmである。

カマドの堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1は褐灰色土塊やL IV塊を多量に含む灰黄褐色土で、住居の堆積土 ℓ 1に近似することから、カマド廃絶後に住居と同様の土で埋めたものと判断した。 ℓ 2・3は炭化物粒や焼土粒を多量に含む土で、カマドの天井崩落土と判断した。 ℓ 4・5は炭化物粒や焼土粒を微量に含む褐灰色土で、煙道を壊した土で人為堆積と判断した。

壁溝は東隅部と南壁ぎわに位置し、平面形は「L」字形で、長さは290cm、幅29cm、床面からの深さは10cmである。

P 1は、南隅部に近い西壁ぎわに位置し、壁柱穴と考えられる。平面形は円形で、規模は直径26cm、床面からの深さは23cmを測る。堆積土はL III塊などを微量に含む灰黄褐色土で、住居内堆積土 ℓ 1と同質であることから、住居と同時に埋めた土と考えられる。

遺物(図51、写真122)

本住居跡からは弥生土器4点、土師器167点、須恵器32点、石器・石製品4点が出土した。このうち、土師器9点、須恵器1点を図示した。

カマド右袖の先端付近の床面からは、図51-8の土師器の甕が逆位で出土している。

図51-1~3は、土師器の杯である。1は平底で、緩やかに湾曲しながら立ち上がる。体部下半から底部の外面にかけて、入念なヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち黒色処

理が施されている。2・3はいずれも丸底で、湾曲しながら立ち上がる。口縁部にはヨコナデ、体部下半から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキで調整され、3には黒色処理が施されている。

同図-4は土師器の鉢とした。直線的に立ち上がる。外面は口縁部がヨコナデ、体部はユビオサエで調整され、粘土紐の積み上げ痕が認められる。内面にはヨコナデやユビナデが施されている。

同図-5～7は土師器の高杯である。5は杯部が浅く湾曲し、脚部は短く「八」字状に開き、4つの円窓が両側からの刺突により施されている。外面には杯部がヨコナデのちヘラミガキ、脚部は連続した継位のヘラケズリにより調整されている。内面には杯部がヨコナデ、ヘラミガキのち黒色処理が施されている。6は全体的にいびつで杯部は短く肥厚し、脚部は「八」字状に開く。杯部は内外面ともユビオサエで調整され、脚部は外面の接合部を連続したユビナデで調整する。7の杯部は外傾しながら立ち上がり、内面にはわずかに屈曲する。脚部は短く「八」字状に開く。外面には杯部がヘラケズリ、脚部は外面の接合部をユビナデ・ヘラナデ・ヘラケズリにより調整し、内面には連続したユビオサエが施されている。

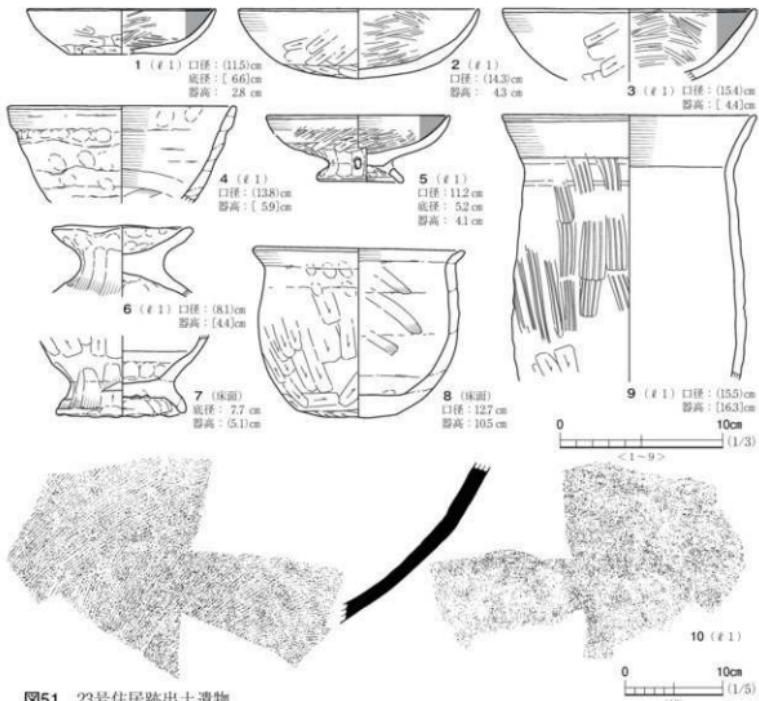


図51 23号住居跡出土遺物

同図-8・9は土師器の甕である。8は小型の丸底で体部は球形を呈し、口縁部から短く外反する。体部から底部の外面にはヘラケズリが施されている。9は長胴で、体部はわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁部で外傾する。内外面の口縁部にはヨコナデが、体部外面にはハケメが施されている。

同図-10は須恵器の甕である。外面には平行タタキ、内面には無文の當て具痕が認められる。

まとめ

本住居跡は丘陵北西側の斜面の中でも裾部にほど近く、傾斜が緩やかになる箇所に立地する。同立地には軸方向を同一とする30・47号住居跡がまばらに位置している。本住居跡の平面形は方形基調で、規模は南北で3.58m、東西で3.62mである。

本住居跡の所属時期は出土遺物に高杯が含まれるが、土師器杯(図51-1~3)の特徴から、おむね奈良時代、8世紀中頃~後半と考えられる。
(佐藤)

24号住居跡 S I 24

遺構(図52~54、写真46・47)

本住居跡は、調査区南西隅部、K-6・7グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部西側の縁辺部に立地する。25号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。本住居跡の北西側2mには4号土坑が、北東側4mには20号住居跡が位置している。

LⅢ上面の検出作業により、当初は25号住居跡の一部と捉えて調査していたが、堆積土が異なることから別の遺構と判断し、再度検出を行い、2軒の住居跡と判断した。その結果、褐色土を基調とし、カマド周辺に焼土粒や炭化物粒が分布する、長方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は南北方向に長軸を持つ長方形である。規模は長軸の南北で3.64m、短軸の東西で3.00m、検出面から床面までの深さは最大で21cmを測る。周壁は北隅部の周辺が緩やかに、それ以外は急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は5層に分けられた。ℓ1は炭化物粒を微量に含む褐色土で、自然に流れ込んだ土と判断した。ℓ2はLⅢ塊や炭化物粒・焼土粒を多量に含む黒褐色土である。カマドに近い部分には焼土粒や炭化物の混入が顕著なことから、カマドの構築土を由来とする土も含まれると判断した。ℓ3はLⅢ塊を多量に含む褐色土で、床面付近を覆う人為堆積土である。ℓ4はにぶい黄橙色粘質土で貼床と判断した。上面には住居機能時に混入した黒褐色土粒や炭化物粒・焼土粒が顕著に認められる。ℓ5は黒褐色土塊やLⅢ塊を微量に含む灰褐色土で掘形の埋土と判断した。

床面には貼床が全面に水平かつ平坦に貼られ、踏み締まりが顕著である。掘形は、貼床と同様の範囲に認められる。東壁の中央付近には、土坑状の掘り込みがある。深さは最大で25cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面からピット6基(P1~6)を確認した。

カマドは住居北壁の中央付近に設けられる。両袖が遺存し、左袖は黒褐色土で細長く構築される。一方、右袖はLⅣを由来とする粘土塊を用いて、P1のカマド側を埋め、上端の平坦面を広く

確保している。左袖は壁から長さ60cm、幅18cm、高さ9cmであるのに対し、右袖は長さ77cm、幅73cm、高さ13cmである。両袖の基間の幅は、153cmである。燃焼部は住居床面(住居内堆積土④)上面に構築される。燃焼部底面から左袖の壁面にかけて、広範囲に焼土面が確認できる。平面形は長楕円形で、長径62cm、短径35cm、最大4cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は住居北壁に対し直角に掘り込まれる。規模は長さ71cm、幅24cm、検出面から底面までの深さは、最大14cmである。煙道の周壁には焼土化が認められる。煙道の底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。煙出し付近の底面には、平面形が不整形の浅いピットが設けられる。

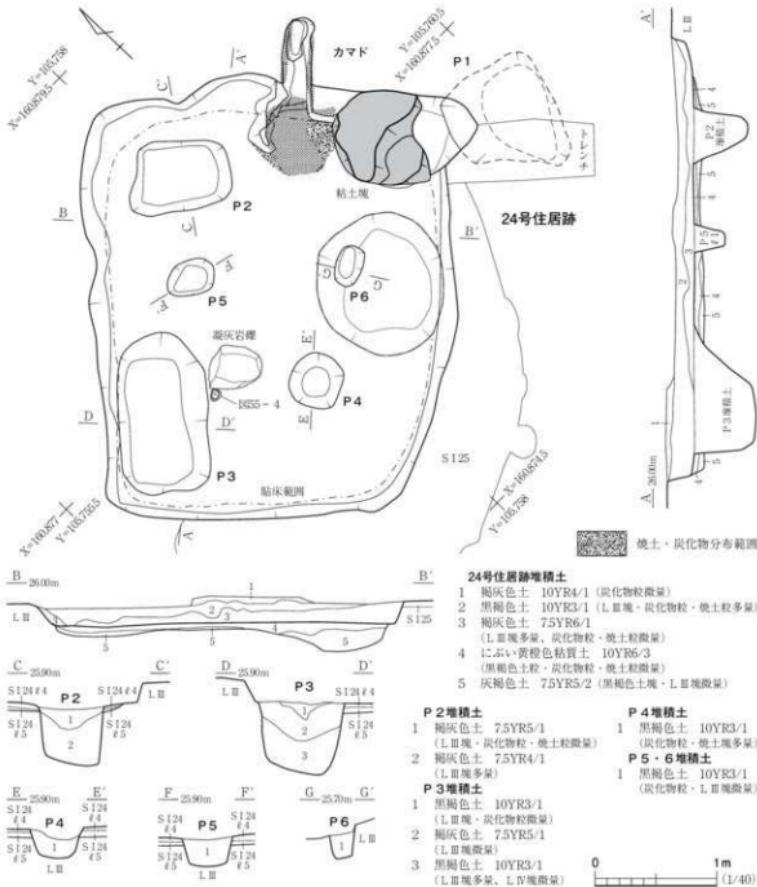


図52 24号住居跡

第2節 穴穴住居跡

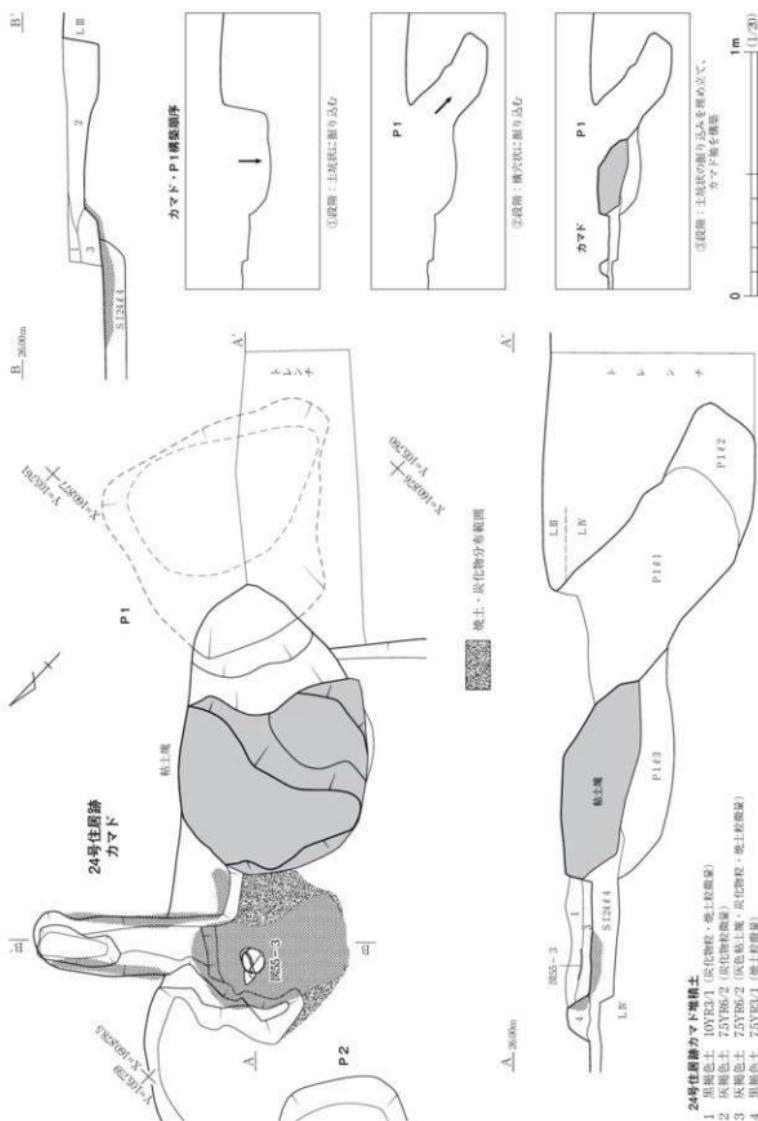


図53 24号住居跡カマカ

カマドの堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒や焼土粒を微量に含む黒褐色土で、住居内堆積土 ℓ 2に近似することから、カマド廃絶後に住居と同様に埋めたものと判断した。 ℓ 2は炭化物粒を微量に含む灰褐色土で、煙道を覆う人為堆積土である。 ℓ 3は灰色粘土塊や炭化物粒・焼土粒を微量に含む灰褐色土で、カマドの天井崩落土と判断した。 ℓ 4は焼土粒を微量に含む黒褐色土で左袖の構築土である。

P 1は本住居跡の東隅部、カマドの東側に隣接して位置する。カマドに近接することから貯藏穴と判断している。P 1はカマド右袖と一緒に造られ、横穴状を呈する。その構築順序は、①住居東隅部に土坑状の掘り込みを行う。②斜め下に向け、横穴状の掘り込みを行う。③土坑状の掘り込みのうち、カマド側を ℓ 3で部分的に埋め、住居内堆積土 ℓ 4により本住居跡の掘形を埋める。その後、P 1の開口部とカマド右袖を粘土塊により構築する。

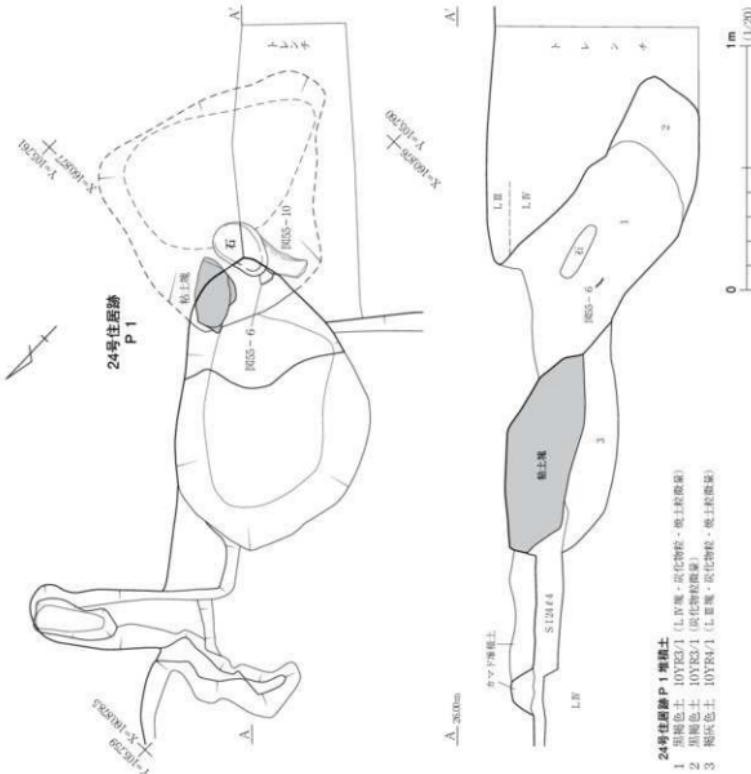


図54 24号住居跡 P 1

横穴部分の掘り込みは奥壁の幅が広くなるよう掘り込まれている。P 1 全体の規模は、長さ 194cm、幅 90cm である。横穴部分は、開口部が直径 65cm、奥行は 129cm、奥壁の幅 87cm、検出面からの深さは最大で 87cm である。

P 1 の遺構内堆積土は 3 層に分けられた。 ℓ 1 は L IV 塊や炭化物粒、焼土粒を微量に含む黒褐色土である。住居内堆積土 ℓ 2 と近似するが、縮まりが弱い。 ℓ 2 は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、横穴の奥壁周辺を覆う人為堆積土である。 ℓ 3 は L III 塊や炭化物粒、焼土粒を微量に含む褐灰色土で、カマド右袖を構築する際に土坑状の掘り込みを埋めた土である。

P 2 は住居北隅部付近の床面に位置するピットである。平面形はやや不整長方形を呈し、規模は長軸 85cm、短軸 58cm、床面からの深さは最大で 47cm を測る。周壁はいずれも垂直に立ち上がり、底面は平坦である。P 2 の堆積土は 2 層に分けられた。いずれも褐灰色土を基調とし、L III 塊を微量に含んでいることから人為堆積土と判断した。

P 3 は住居西隅部付近の床面に位置するピットである。平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸 130cm、短軸 74cm、床面からの深さは最大で 60cm を測る。周壁はいずれも垂直に立ち上がり、底面は平坦である。P 3 の堆積土は 3 層に分けられた。 ℓ 1 は L III 塊や炭化物粒を微量に含む黒褐色土である。 ℓ 2 は L III 塊を微量に含む褐灰色土である。 ℓ 3 は L III 塊を多量、L IV 塊を微量に含む黒褐色土である。いずれも堆積土に土塊を含むことから人為堆積土と判断している。

P 4 ~ 6 は床面の中央付近に位置するピットである。配置や規模に規則性は認められず、性格は不明である。平面形は方形もしくは梢円形を呈し、規模は長さ 34 ~ 44cm、深さは 19 ~ 23cm を測る。堆積土はいずれも黒褐色土を基調とし、人為堆積土である。

床面の中央より西側には凝灰岩の偏平な礫が据え置かれていた。

遺 物 (図 55、写真 122・123)

本住居跡からは弥生土器が 1 点、土師器 411 点、須恵器 8 点、石器・石製品 2 点が出土した。このうち、赤焼土器 4 点、土師器 5 点、須恵器 1 点を図示した。

P 3 付近の ℓ 2 の直上からは、図 55-4 の底部穿孔された土師器の高台杯が、伏せ置かれるように出土している。カマドの ℓ 3 上面からは、図 55-3 の赤焼土器の杯が伏せ置かれるように出土している。P 1 の堆積土中からは、長さ 30cm ほどの粘土塊や、偏平な円礫、図 55-6 の土師器の杯、図 55-10 の須恵器の甕が投げ込まれるように出土している。

図 55-1 ~ 3 は赤焼土器の杯である。1・2 は楕形で底部付近に稜を持ち、口縁端部は肥厚する。いずれも底部切り離しは回転糸切りである。3 は遺存状況が不良で、器壁は被熱による剥落が著しい。底部付近には手持ちヘラケズリが施されている。

同図-4 は赤焼土器の高台杯である。高台は「八」字形に開き、底部切り離しは回転糸切りである。内面にはヘラミガキが施されている。底部には穿孔があり、底部外面から打撃を加えている。

同図-5 ~ 7 は土師器のロクロ成形の杯で、いずれも内面にはヘラミガキのち黒色処理が施され、底部はわずかに凹状である。底部切離しは回転糸切りである。5 は 1・2 の赤焼土器と器形が

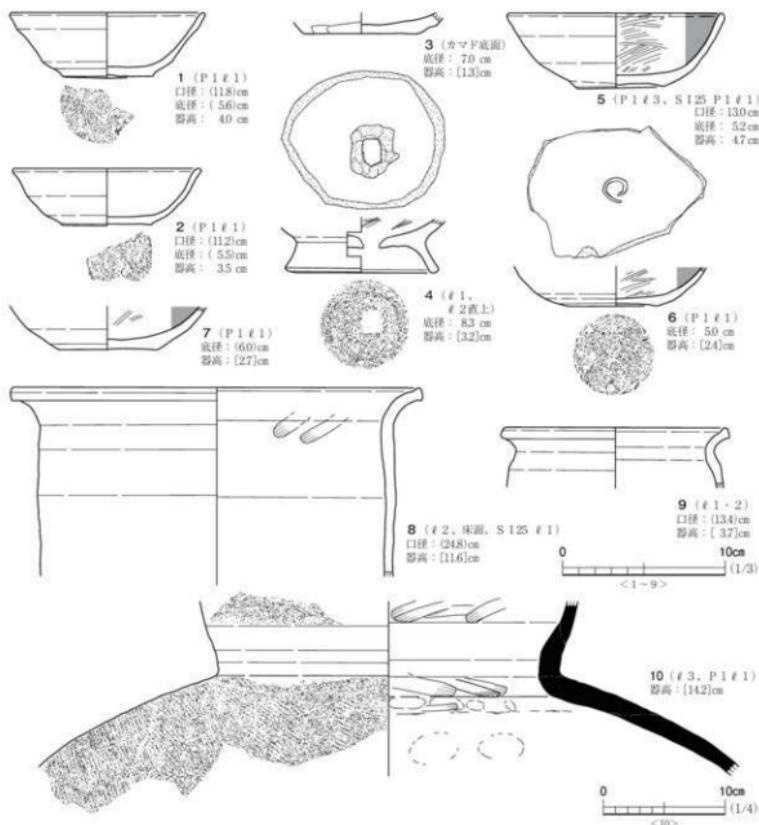


図55 24号住居跡出土遺物

類似する。6の見込み中央には「○」の線刻が認められる。7は被熱による剥落が著しい。

同図-8・9はロクロ成形の壺である。いずれも内外面にはロクロナデが施されている。8は長胴で、体部は垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。9は小型で口縁部が外反し、端部はわずかに上方に摘み上げられる。

同図-10は須恵器の壺である。肩部から頸部まで遺存し、外面には頸部に波状文、肩部に平行タタキが施され、「丁」字状の線刻が認められる。内面には無文の當て具痕が認められる。

まとめ

本住居跡は、丘陵頂部南西側の縁辺部、住居跡が密集する範囲の南西隅部に位置する。25号住居跡の大部分を壊して築かれ、平面形は長方形、規模は長軸の南北で3.64m、短軸の東西で3.00m

の住居跡である。カマド右袖と一緒に横穴状に掘り込まれたP 1は類例がなく、特筆される。性格不明のP 2・3は、大型の土坑状で掘り込みが深い。本住居跡の所属時期は、組成に赤焼土器の杯が一定量含まれることから、平安時代、9世紀末～10世紀初頭と考えられる。
(佐藤)

25号住居跡 S I 25

遺構 (図56・57、写真48・49)

本住居跡は調査区南西隅部、K-6グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部西側の縁辺部に立地する。本住居跡は、24号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。遺存状況は不良で、北西側の大半は24号住居跡の掘り込みによって壊されている。本住居跡の北西側3.2mには4号土坑が、同じく北西側7.4mには1号道跡が位置している。

当初は24号住居跡の一部と捉えて調査していたが、堆積土が異なることから、別の遺構と判断し再度検出を行い、2軒の住居跡と判断した。その結果、褐色土を基調とし、カマドや鍛冶炉周辺に焼土粒や炭化物粒が分布する不整梢円形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は、不整梢円形を基調としている。規模は遺存値で長径の東西で3.86m、短径の南北で2.00m、検出面から床面までの深さは最大で6cmと浅い。周壁の掘り込みは粗雑で凹凸が目立ち、立ち上がりはいずれも緩やかである。床面には、細かい凹凸が認められる。

住居内堆積土は、L III塊や炭化物粒・焼土粒を微量に含む褐色土の単層で、住居全体を覆う人為堆積土である。

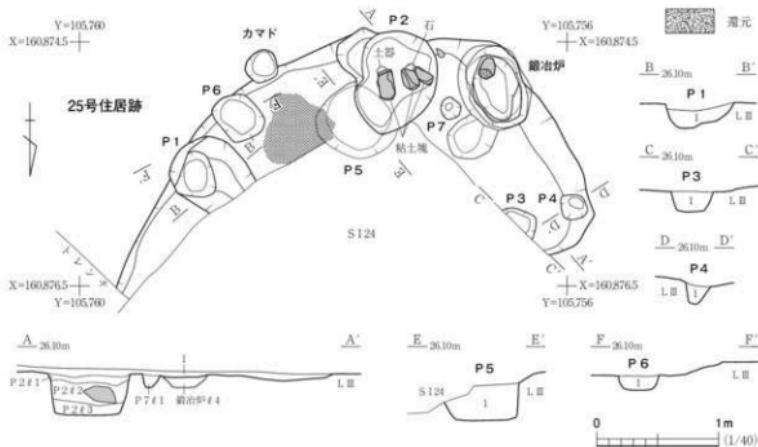
本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から鍛冶炉1基、ピット7基(P 1～7)を確認した。

カマドは住居南壁の中央付近に設けられる。カマドで遺存しているのは、煙出しピットと燃焼部の焼土面のみである。カマドの堆積土は、L III塊や炭化物粒・焼土粒を多量に含む褐色土で、カマドの天井崩落土と判断している。焼土面は、平面形が不整梢円形で、規模は北西・南東方向で55cmである。焼土化は、最大8cmの厚さに及ぶことを断ち割りで確認した。煙出しピットは南東周壁の上端を掘り込んで造られる。平面形は円形で、直径27cm、検出面から底面までの深さは16cmである。

鍛冶炉は住居西壁のきわに位置し、周壁の一部を掘り込んで造られる。鍛冶炉は炉底の防湿を目的とした、いわゆるカーボンベッドといわれる掘形を持ち、その上部にL IVを由来とする灰色粘土やにぶい黄橙色土(Ⅱ2)を現状に貼り付け、炉の周壁としている。鍛冶炉の中央部に位置する粘土は、基底部付近の炉壁の残欠とみられ、一部は還元し青灰色を呈する。

平面形は梢円形で、規模は長径68cm、短径46cm、深さは最大で9cmを測る。炉の周壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸があり、炭化物粒や焼土粒が薄く分布していた。

鍛冶炉の掘形は、炉と同様の部分に位置する梢円形の掘り込みと、これより古い北東側に隣接する不整梢円形の掘り込みで構成される。炉と同様の部分の掘形の規模は長径73cm、短径54cm、炉



25号住居跡堆積土

- 1 暗灰色土 5YR4/1 (L.II塊・炭化物粒・焼土粒微量)
- 1 P 1堆積土
- 1 暗灰色土 7.5YR4/1 (炭化物粒・焼土粒微量)
- 3 P 2堆積土
- 1 暗灰色土 5YR4/1 (炭化物粒・焼土粒微量)
- 2 暗灰色土 5YR4/1 (白色粘土塊・炭化物粒・焼土粒多量)
- 3 暗灰色土 5YR5/1 (炭化物粒・焼土粒多量)

P 3堆積土

- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 (炭化物粒微量)
- 4 P 4堆積土
- 1 暗灰色土 10YR4/1 (L.IV小塊・焼土小塊微量)
- 5 P 5堆積土
- 1 暗灰色土 5YR4/1 (炭化物粒・焼土粒多量、黒褐色土塊微量)
- P 6・7堆積土
- 1 暗灰色土 5YR4/1 (炭化物粒・焼土粒微量)

図56 25号住居跡

底からの深さは最大で12cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底部はわずかに凹凸があり、断面形は椀形である。北東側の掘形の規模は遺存値で長径44cm、短径34cm、床面からの深さは最大で6cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底部は平坦である。

鍛冶炉の堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒や焼土粒を微量に含む暗灰色土で、炉壁の姿勢を安定させるための裏込め土と判断した。 ℓ 2は黒褐色土小塊を微量に含むL.IIを由来としたにぶい黄橙色粘土である。炉底全体を覆い、一部は環状の盛土状になることから、炉壁基部や炉底の構築土とした。 ℓ 3は炭化物粒を多量、L.III粒や焼土粒を微量に含む黒色土で、掘形の埋土である。 ℓ 4はL.IV小塊や炭化物粒・焼土粒を多量に含む暗灰色土で、梢円形の掘形の埋土である。

カマドの左側に近接するP1は、南壁ぎわを掘り込んで造られる。位置や規模から貯蔵穴と判断した。北西側は24号住居跡の掘り込みにより壊され、遺存していない。平面形は梢円形の可能性があり、規模は、長径が遺存値で59cm、短径が56cm、床面からの深さは最大で20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は椀形である。底部は凹凸が著しい。P1の堆積土は炭化物粒や焼土粒を微量に含む暗灰色土の単層で、住居内堆積土と類似することから、住居跡と同時に埋めたものと判断している。

P2は鍛冶炉の東側に近接し、本住居跡の周壁を掘り込んで構築される。P5と重複し、P2が新しい。位置や規模、類例から、鍛冶工人が作業時に足を入れた穴の可能性がある。平面形は

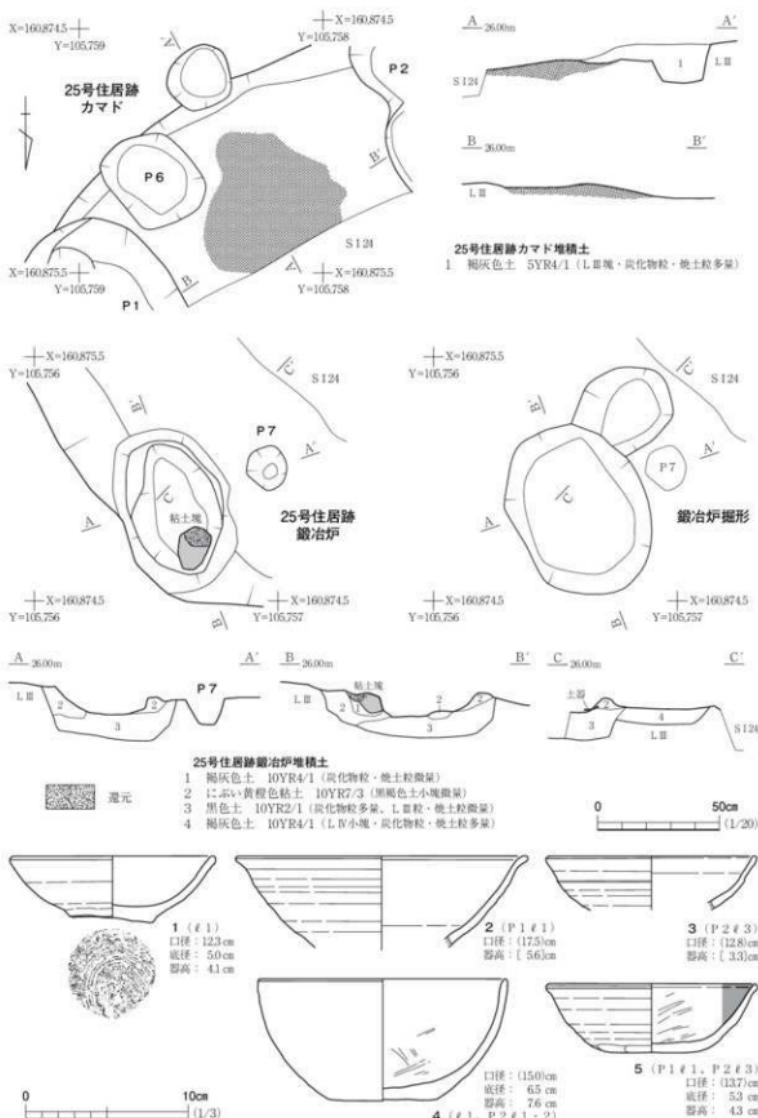


図57 25号住居跡カマド・鍛冶炉・出土遺物

南北方向に長径を持つ不整楕円形で、東側はテラス状の張り出しを持つ。規模は長径86cm、短径64cm、床面からの深さは33cm、張り出し部の幅は36cmである。周壁はいずれもほぼ垂直で、底部は平坦である。P 2の堆積土は3層に分けられた。いずれも褐灰色土を基調とし、炭化物粒や焼土粒を含んでいる。ℓ 2で多量に認められた白色粘土塊は、鍛冶炉の炉壁に由来するものと判断した。

P 3・4・6・7は、床面の各所にあり、配置や規則性が認められず、性格は不明である。平面形は円形や不整形形で、規模は長さ18~40cm、床面からの深さは11~20cmである。堆積土は黒褐色土や褐灰色土で、人為堆積土と判断した。

P 5はカマドの西側に隣接して位置する穴である。カマドに伴う焼土面、P 2よりも古いことから、住居機能時には埋められていたと考えられる。平面形は方形と考えられ、規模は一辺60cm、床面からの深さは29cmを測る。周壁は南東側が垂直に、それ以外は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。P 5の堆積土は炭化物粒や焼土粒を多量に、黒褐色土塊を微量に含む褐灰色土の単層で、人為堆積土と判断した。

遺 物 (図57、写真123)

本住居跡からは弥生土器1点、土師器335点、須恵器2点、陶磁器1点、炉壁760g、鍛冶滓380g、鉄滓2gが出土した。このうち、赤焼土器4点、土師器1点を図示した。

図57-1~3は赤焼土器の杯である。1は楕形で底部付近に稜を持ち、口縁端部はわずかに外傾する。底部切り離しは回転糸切りである。2は体部が外傾し、口縁端部は斜めに摘み出され、外反する。3は体部外面に稜を持つ。4は土師器の杯と思われる。輪積み整形で、湾曲しながら立ち上がり、口縁部は垂直に肥厚する。内面にはヘラミガキが施されているが黒色処理はみられない。

同図-5は土師器の杯である。ロクロ成形で体部は直線的に立ち上がり、口縁端部でわずかに外傾する。外面にはロクロナデが施され、底部は手持ちヘラケズリで調整される。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

ま と め

本住居跡は丘陵頂部西側の縁辺部に立地する。本住居跡の大半は24号住居跡の掘り込みにより壊されて遺存していないが、平面形は不整楕円形を基調とし、規模は遺存値で長径3.86m、短径2.00m、周壁や床面には凹凸が目立ち、貼床なども認められないことから、他の住居跡とは異なる特徴を有する。本住居跡の性格として鍛冶炉が確認されていることや、堆積土中から鍛冶滓が出土していることから、鍛冶工房を併設する住居跡と判断した。

鍛冶炉は平面形が楕円形で、防湿を目的としたカーボンベッドとされる掘形を持ち、白色粘土やL IVのにぶい黄橙色土を環状に貼り付け、炉壁基部としている。鍛冶炉北東側に隣接する不整楕円形の掘形は、輪座や金床石などを据えた痕跡の可能性がある。P 2は鍛冶炉に近接することや、形態的な特徴から鍛冶工人が作業時に足を入れた穴で、テラス状の張り出しに腰かけた可能性がある。本住居跡の所属時期は、組成に赤焼土器の杯が一定量含まれることから、平安時代、9世紀末~10世紀初頭と判断した。

(佐藤)

26号住居跡 S I 26

遺構 (図58、写真50)

本住居跡は、調査区の南東部、J-16グリッドのL III上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の基部の頂部平坦面に立地する。6号溝跡と重複し本住居跡が新しい。東側1.6mには5号住居跡と1号建物跡が、北西1.4mには27号住居跡が位置している。

L III上面の検出作業時に、灰黄褐色粘質土の南北に延びる長方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は南北方向に延びる不整隙丸長方形を呈している。規模は長軸3.47m、短軸2.35mで、検出面から床面までの深さは最大で20cmである。遺存する周壁は急な立ち上がりを見せると、北東側の壁はやや緩やかである。

住居内堆積土は、灰黄褐色粘質土を主体とした混合土の単層で、人為堆積土と判断した。床面はやや凹凸があり、貼床は認められなかった。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット2基(P1・2)を確認した。

P1は、住居西壁と接し、平面形は梢円形で、規模は長径102cm、短径76cm、床面からの深さ19cmを測る。堆積土は住居内堆積土のP1と同様で、住居跡と同時に埋められたと考えられる。性格は不明である。P2はP1の南東側に隣接して位置する。平面形は円形で、直径28cm、深さ21cmである。性格は不明である。

遺物 (図58、写真146)

本住居跡からは弥生土器1点、土師器69点、鉄製品1点が出土した。このうち、土師器1点、鉄製品1点を図示した。

図58-1は土師器の杯である。口部成形で体部は直線的に立ち上がる。内面には疊らなヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は鉄製の釘である。上端は厚

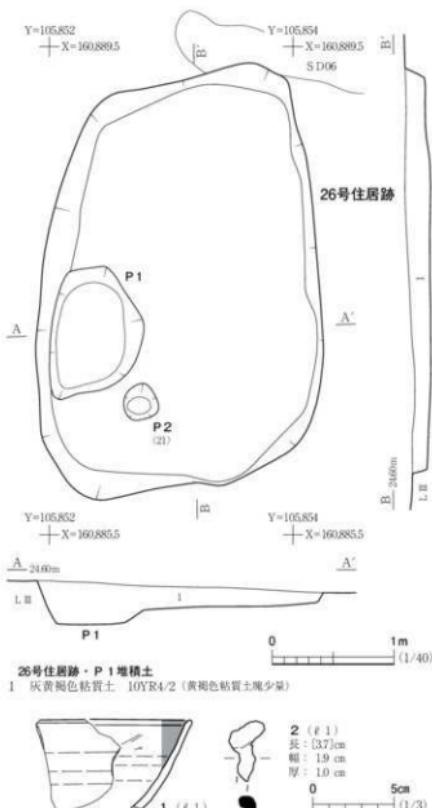


図58 26号住居跡・出土遺物

く屈曲し、下端部は欠損している。断面形は円形である。

まとめ

本住居跡は北東方向に延びる丘陵の基部の頂部平坦面に立地する。平面形は南北方向に延びる不整隅丸長方形で、規模は長軸3.47m、短軸2.35mである。本住居跡の所属時期は、図58-1のロクロ成形の土師器杯から、平安時代、9世紀と考えられる。
(吉野)

27号住居跡 S I 27

遺構(図59、写真51)

本住居跡は、調査区の南東部、I-16グリッドのLⅢ上面で出された。北東方向に延びる丘陵の頂部平坦面に立地する。2号溝跡と重複し本住居跡が古い。本住居跡の南東側5mには5号住居跡と1号建物跡が位置している。本住居跡の北西側は搅乱によって大きく破壊されており、南東隅部とカマドが遺存するのみである。

LⅢ上面の検出作業時に、コンクリートなどを含む近現代の搅乱を発見し、掘り下げ、土層断面を確認したところ、遺構の立ち上がりを確認したことから、周辺の検出作業を複数回行い、褐色粘質土を主体とした灰白色粘質土塊が混入する不定形な範囲として確認した。

本住居跡の規模は、いずれも遺存値で南北が137m、東西が2.41mを測る。検出面から床面までの最大の深さは21cmである。周壁の立ち上がりは床面から60~70度の角度をなす。

住居内堆積土は2層に分けられた。ℓ1はLⅢを由来とする褐色粘質土に本住居跡周辺のLⅣに由来する灰白色粘質土塊が混入する。その堆積状況から人為堆積土と判断した。ℓ2はにぶい黄橙色粘質土塊を多量に含む褐色粘質土で、貼床土である。

遺存する床面はほぼ平坦であり、ほぼ全面に貼床が認められる。貼床の厚さは最大で6cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面からピット1基(P1)を検出した。

カマドは南壁に設置されている。煙道の中間部は2号溝跡の掘削や木根によって破壊されている。両袖は南壁から直角に延び、燃焼部は周壁から20cmほど突出して掘り込まれる。規模は、右袖が長さ39cm、幅22cm、床面からの高さ11cm、左袖が長さ34cm、幅16cm、床面からの高さ6cm、両袖の基部間の幅は99cmである。両袖の先端には、焚口の構築材としてLⅣの白色粘土を使用している。焚口の構築材である白色粘土は、貼床面に掘形を造って固定され、その上から褐色系の粘土材で袖を構築している。袖の構築状況は、断ち割りで確認した。カマドは廃絶時に人為的に破壊したと思われ、燃焼部からは多量の焼土塊や天井崩落土が堆積し、特に燃焼部内のカマド堆積土ℓ2からは土師器甕や土師器杯の破片が多数出土している。燃焼部の底面はほぼ平坦であり、中央部には焼土面が認められる。平面形は梢円形で、長径40cm、短径29cm、厚さは最大3cmであることを断ち割りにて確認した。燃焼部底面には直径16~20cm、深さ5cmほどの円形のピットが左右に2基並んで確認された。カマド堆積土ℓ2と類似した黒褐色系の堆積土が認められたことから、カマド破壊時に取り外された支脚の掘形と考えられる。燃焼部の奥壁は50度ほどの角度で立ち上がる。

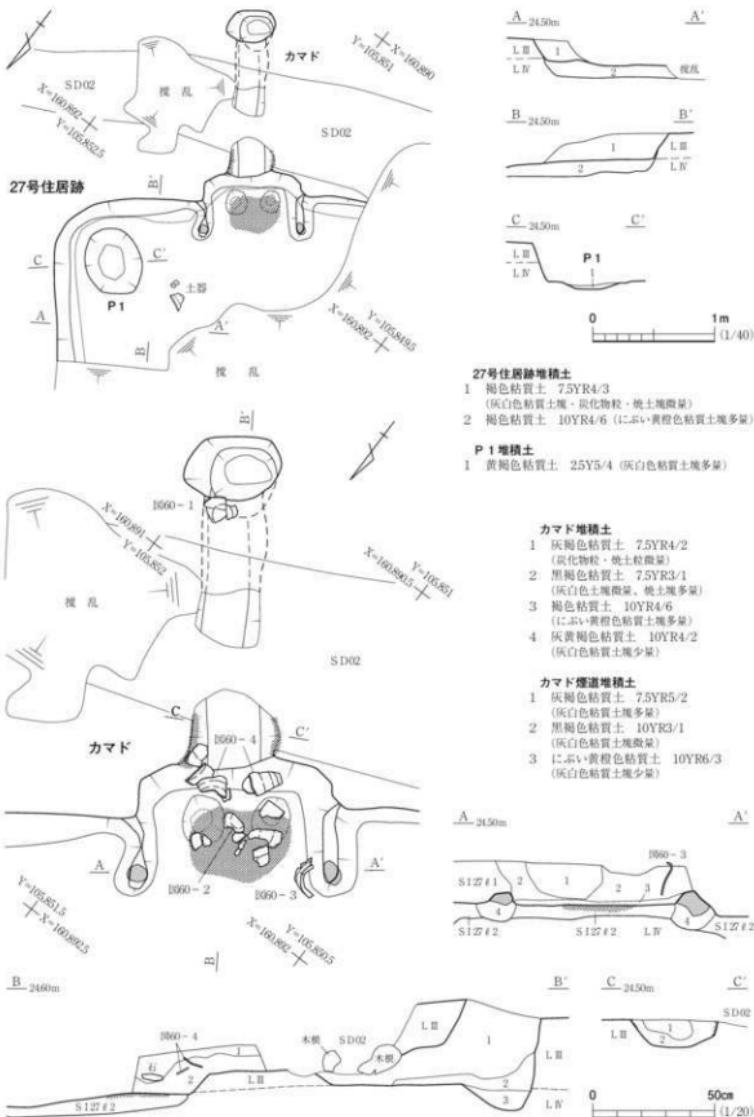


図59 27号住居跡

煙道は底面に対して8cmほど高い位置から掘り込まれ、一部は天井が遺存している。煙道はLⅢをトンネル状に掘り込んでいる。その横断面形は、ほぼ円形で規模は直径25~35cmで、煙出しピットに向かい緩やかに下り傾斜する。奥壁から煙道の開口部にかけても被熱による焼土化が認められた。煙道の長さは135cm、幅は37cm、天井部の遺存が良好な箇所の高さは16cmである。煙出しピットの平面形は不整梢円形で、長径40cm、短径26cmである。検出面から底面までの深さは38cmである。

カマドの堆積土は4層に分けられた。ℓ1の灰褐色粘質土やℓ2の黒褐色粘質土は、焼土や土塊を含む。カマド天井の崩落土を基調とする土である。ℓ3はLⅢ由来の土塊を含んだ褐色粘質土で、煙出しピットの底面にのみ堆積している。カマド機能時に壁面が崩落した土で、自然堆積と判断した。ℓ4は灰黄褐色粘質土で、カマド焚口の構築材に伴う掘形の埋土である。

住居東隅部とカマド左袖の外側の間に位置するP1は、位置や規模から貯蔵穴と判断した。平面形は梢円形で、規模は長径56cm、短径45cm、深さ6cmである。堆積土は土塊を多量に含む黄褐色粘質土で、人為堆積土である。

遺 物 (図60、写真123・146)

本住居跡からは土師器258点、須恵器1点、鉄製品2点が出土している。このうち、土師器4点、鉄製品2点を図示した。

燃焼部の堆積土上面からは図60-2の土師器の杯、同図-3の土師器の壺、同図-4の筒形土器が破片で出土している。燃焼部の天井を破壊した土の中に土師器が含まれていたと判断している。煙出しピットと煙道の境付近の底面からは、同図-1の土師器の杯が正位で出土している。煙出しピットを埋める際に置いた可能性がある。

図60-1・2は土師器の杯である。いずれもロクロ成形で、平底から直線的に立ち上がり、口

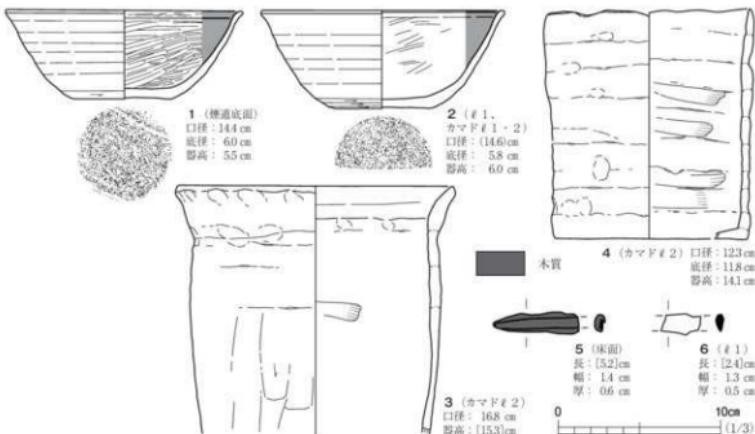


図60 27号住居跡出土遺物

縁端部でわずかに外反する。外面の底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整が施され、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-3は土師器の甕である。長胴で垂直に立ち上がり、頭部からわずかに外傾する。口縁部は連続したユビオサエで調整し、体部外面にはヘラケズリが施されている。

同図-4は筒形土器である。平底から垂直に立ち上がり、口縁端部は摘み上げるように成形する。内外面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。

同図-5・6は鉄製品である。5は棒状で基部は欠損し、鋭角な先端部付近が遺存する。全面に本質部が認められる。6は刀子とした。上下の側縁部には、わずかに闇の痕跡が認められる。

まとめ

本住居跡は、北東方向に延びる丘陵の頂部平坦面に立地する。北西側の大半が後世の擾乱や木根によって破壊されている。全面に貼床が施され、カマド1基と貯蔵穴1基が検出された。煙出しピットと煙道の境付近の底面からは、図60-1の土師器の杯が正位で置かれており、カマド終いに開通した祭祀行為をうかがわせる。本住居跡の所属時期は、図60-1・2のロクロ成形の土師器杯から、平安時代、9世紀中葉と考えられる。

(吉野)

28号住居跡 S I 28

遺構(図61、写真52)

本住居跡は調査区南隅部、K-9グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の平坦面に立地している。15号住居跡と重複し、本住居跡が古い。本住居跡の北側2mには14号住居跡、北西側3mには18号住居跡が位置している。遺存状況は不良で、後世の宅地造成による擾乱や、15号住居跡の掘り込みにより破壊されている。南東半部は調査区外に延びている。

L III上面の検出作業により、床面とみられる硬化した面と、斑状に黒褐色土を基調とした範囲が認められたことから、住居跡として認識した。

本住居跡は、周壁は壊され床面の掘形の一部が遺存しており、住居の平面形は不明である。調査区際の断面からみた長さは、遺存値で東西3.24m、検出面から床面までの深さは最大で11cmである。

住居内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はL III塊を微量に含む黒褐色土で、住居を覆う人為堆積土である。 ℓ 2は黒褐色土塊を多量に含む灰黄褐色土で、貼床と判断した。

床面は中央に向かってくぼみ、踏み締まりが認められる。掘形は遺存している床面全体に認められ、深さは最大で17cmである。掘形の底面には、凹凸が顕著に認められる。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット1基(P 1)を確認した。P 1は南側の調査区際に位置し、南半部は調査区外に延びている。平面形は方形の可能性があり、規模は一辺40cm、床面からの深さは39cmを測る。P 1の堆積土は、L IV・V塊などを多量に含む灰黄褐色土の单層で、人為堆積土と判断した。住居跡とP 1が同時に埋めたものと考えられる。その性格は明らかにできなかった。

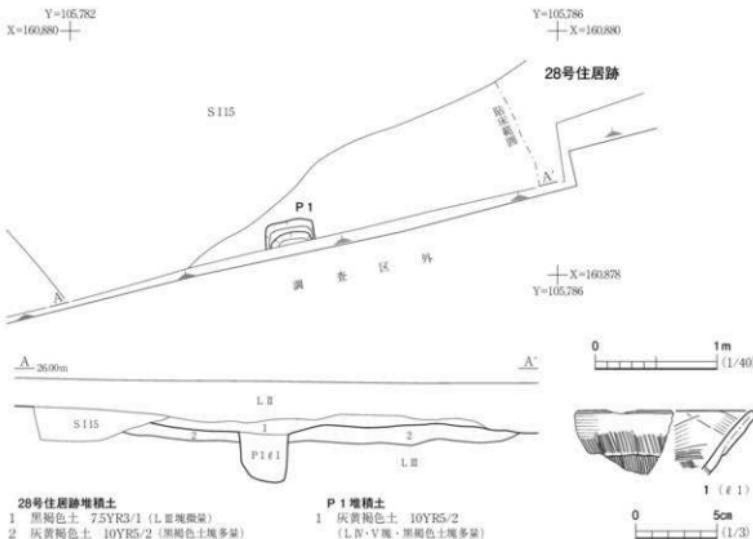


図61 28号住居跡・出土遺物

遺 物 (図61、写真124)

本住居跡からは弥生土器15点、土師器103点、石器・石製品1点が出土した。このうち、土師器1点を図示した。

図61-1は土師器の壺である。複合口縁で、外面にはヨコナデのちハケメが施されている。内面にはハケメが施されている。

ま と め

本住居跡は丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡は14・15・18号住居跡の重複関係からみて最も古い。本住居跡は、後世の搅乱や他遺構の掘り込みにより遺存状況が不良で、床面の一部のみ確認された。本住居跡の南半部は、調査区外へ延びている。本住居跡の所属時期は、図61-1の土師器の壺から、古墳時代前期と考えられる。

(佐藤)

29号住居跡 S I 29

遺 構 (図62、写真53)

本住居跡は、調査区の南東部、J-13・14グリッドのL.III上面から検出された。北東方向に延びる丘陵の基部付近の頂部に立地している。本住居跡はJ-14 G P1とはわずかに重複するが、新旧関係は不明である。また、周辺に住居跡などの遺構はなく、単独で位置する。

調査開始時は、後世の搅乱によってプランが非常に不鮮明であった。搅乱を掘り下げていく中で

煙道や壁の立ち上がりが徐々に明らかになった。そのため、当初設定した土層断面観察用の畦の位置が住居跡の軸線と一致しない。南東隅部と煙道の一部及び煙出し部を除いた周壁は、床面近くまで後世の削平により破壊され、全体的な遺存状況は悪い。

本住居跡の平面形は方形で、規模は東西2.33m、南北2.34m、検出面から床面までの深さは最大23cmを測る。周壁は北東側が搅乱によって削平されているため、壁の立ち上がりをわずかに確認できるのみであった。しかし、南東隅の壁の遺存状態は良好で、床面から急な角度で立ち上がる様子が確認できた。

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は、にぶい黄褐色粘質土にLV由来の浅黄橙色土塊を微量に含む混合土であり、人為堆積土と判断した。 ℓ 2は褐色粘質土である。壁ぎわに三角堆積し、L III由来の明褐灰色土塊が混入することから、壁面の崩落土と考えられる。 ℓ 3の褐色粘質土は貼床の土である。 ℓ 4の褐色粘質土は掘形の埋土である。

床面はほぼ平坦で、全面に貼床が構築され、硬く踏み締まっている。掘形は住居の中央が擂鉢状

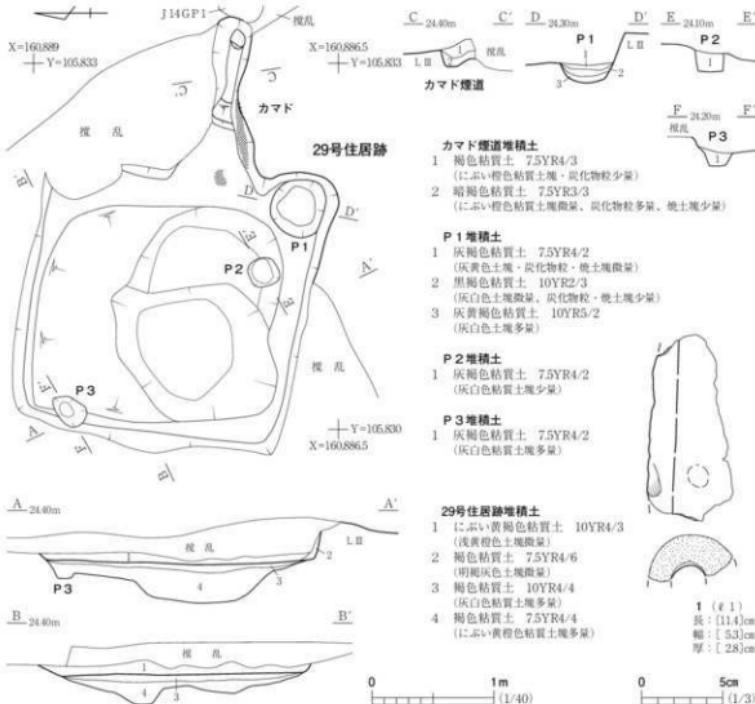


図62 29号住居跡・出土遺物

にくぼむ土坑状となり、底面は凹凸が著しい。床面からの深さは最大で31cmである。

本住居跡に付属する施設としてカマド1基、床面からピット1基(P 1)、掘形底面からピット2基(P 2・3)を検出した。

カマドは東壁の中央に設置される。北側は、後世の搅乱により破壊されている。燃焼部は住居壁面より外側に構築され、住居側に向かって「八」字状に開く。燃焼部内の南側壁は被熱により、焼土化している。断ち割り調査の結果、燃焼部の焼土の厚さが最大15cmになることを確認した。燃焼部底面は、わずかに炭化物粒と焼土塊が分布するだけで、焼土面は認められない。規模は、遺存値で焚口から燃焼部奥壁までの長さが50cm、最大幅は72cmである。底面は、煙道開口部に向かって緩やかに立ち上がる。煙道は住居壁面から直角に掘り込まれ、長さ85cm、幅は遺存値で31cmである。底面は煙出しピットに向かって緩やかに傾斜している。煙出しピットの平面形は梢円形で、長径30cm、短径25cm、検出面からの深さ24cmである。

カマド煙道の堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はL IVを由来とするにぶい橙色粘質土塊を少量に含む褐色粘質土で、煙道天井の崩落土と判断した。 ℓ 2はL IVを由来とするにぶい橙色粘質土塊を微量、炭化物粒を多量、焼土塊を少量に含む暗褐色粘質土で、煙道天井の内側の崩落土やカマド使用時の堆積土の混合土と判断した。

住居南東隅部に位置するP 1は、カマドに近接する位置や規模から貯蔵穴と判断した。平面形は円形で、規模は直径46cm、床面からの深さ15cmである。堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1・2は焼土塊を含むことから、カマドを壊した際の土で埋めていると判断した。 ℓ 3は灰黄褐色粘質土で、土塊を含むことから、人為堆積土と判断した。

住居掘形の底面の南壁付近からP 2を、西壁ぎわからP 3を確認した。P 2の平面形は方形、一辺24cm、深さは最大17cmを測る。P 3の平面形は不整梢円形、長径31cm、短径21cm、深さは最大11cmを測る。堆積土は、いずれも灰褐色粘質土を基調とし、住居内堆積土 ℓ 4と近似することから、住居掘形と同時に埋めたものと判断した。性格として、住居掘形の掘削痕跡の可能性がある。

遺 物 (図62、写真124)

本住居跡からは、土師器33点、土製品1点、鉄製品1点が出土している。このうち、土製品1点を図示した。

図62-1は土製品の羽口である。上下の端部は欠損している。外面にはユビナデやユビオサエによって整形されている。表面は被熱によりアバタ状に剥離している。

ま と め

本住居跡は、北東方向に延びる丘陵の基部付近の頂部に立地している。周辺に住居跡はみられず、単独で位置する。本住居跡周辺の地山には、L IV・Vが露出していることから、住居の掘り込みに不向きなため、住居跡の分布が疎らになった可能性がある。平面形は方形を基調とし、規模は東西2.33m、南北2.34mである。本住居跡の所属時期は、未掲載遺物の中に内面黒色処理の土師器杯の破片があることから、おおむね古代頃と判断した。

(吉野)

30号住居跡 S I 30

遺構 (図63・64、写真54・55)

本住居跡は調査区の北西部、G・H - 5 グリッドのL III上面で検出された。丘陵西側の緩斜面の中央に立地する。他の遺構との重複関係は認められないが、南側には1号烟跡が、南東側の斜面上部には47号住居跡が分布している。

L III上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。本住居跡は、風倒木の影響により、北東側の上端は遺存していない。

本住居跡の平面形は方形を呈し、規模は南北で4.23m、東西で4.42m、検出面から床面までの深さは最大で49cmを測る。周壁は北・東壁は垂直に立ち上がる。西壁は遺存が不良で、わずかな立ち上がりが確認できる。

住居内堆積土は6層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土、 ℓ 2はにぶい褐色土で、焼土粒や炭化物粒を微量に含む。住居跡全体を覆う人為堆積土である。 ℓ 3～5は地山由来の土や黒褐色土粒・塊などを含む褐灰色土で、床面の直上や壁ぎわ、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 6は黒褐色土粒やL IV粒を多量に含む褐灰色粘質土で掘形を埋め、床面とした土である。

床面は全体には掘形が確認できた。東側は平坦に掘り下げ、西側は住居西隅部に向かいスロープ状に掘り下げられる。深さは最大で27cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット5基(P 1～5)を確認した。カマドは西壁の中央に位置し、住居内堆積土 ℓ 6の上面に構築される。両袖が遺存し、規模は向かって右側の袖が壁から30cm、左側が62cm。カマドの幅は最大で76cmである。焼土面は燃焼部中央に位置し、平面形は不整橢円形を呈する。規模は長径33cm、短径28cm、最大5cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は確認されなかった。

カマドの堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を多量に含む黒褐色土で、燃焼部天井の崩落土と判断した。 ℓ 2は黒褐色土粒や焼土粒を微量に含む灰褐色土で両袖の構築土である。

壁溝は、西隅部を除き全局で検出された。壁溝の上端はいびつで、P 1と接する部分では途切れる。幅は最大で42cm、床面からの深さは最大20cmである。

5基のピットのうち対角線上に1間四方に配置された4基のピット(P 2～5)は、位置と深さから主柱穴と考えられる。平面形は橢円形で、最も大きいP 2は長径52cm、短径35cm、最も小さいP 5は直径31cmで、P 2～5の床面からの深さは25～58cmである。柱間の間隔は14～17mで、主柱穴の配置は正方形である。堆積土は褐灰色土や灰黄褐色土を基調とし、いずれも柱を抜き取り後に埋めた土と判断した。

住居西隅部の床面で検出したP 1は、位置と規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は橢円形で、長径54cm、短径41cm、床面からの深さは最大で12cmである。堆積土は褐灰色土の単層で、主柱穴P 2・3の堆積土と同質である。堆積土上面には長さ16cmほどの長方形の粘土塊を確認した。

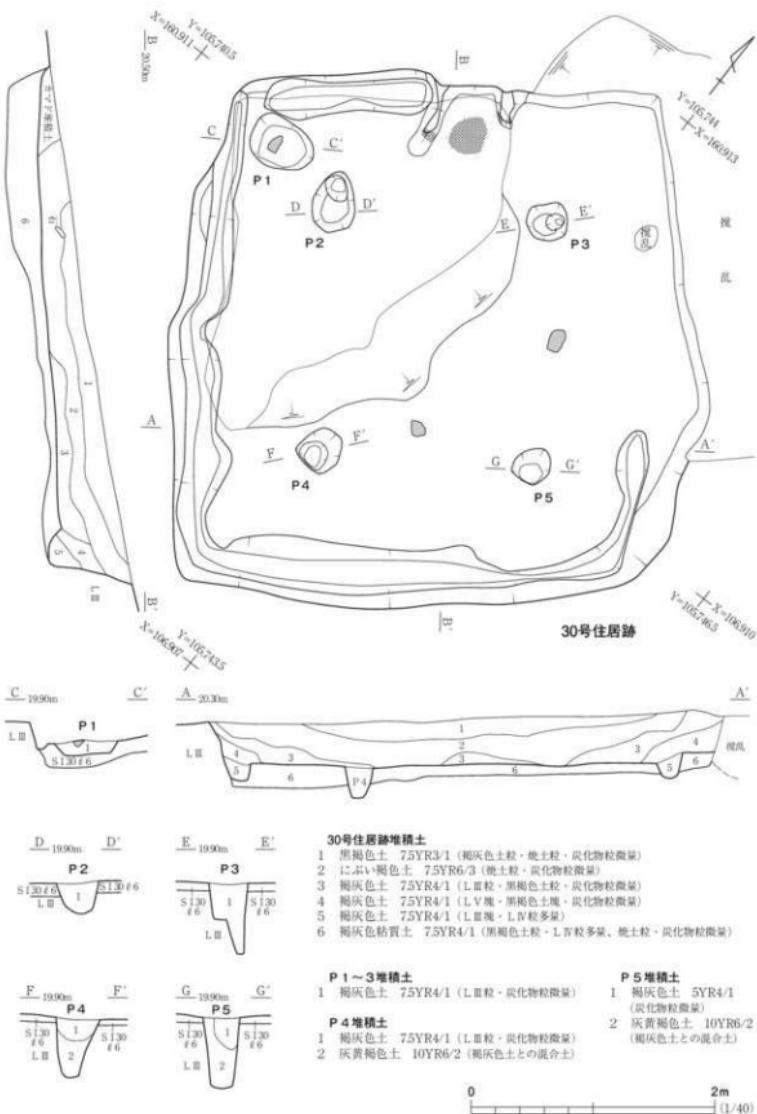


図63 30号住居跡

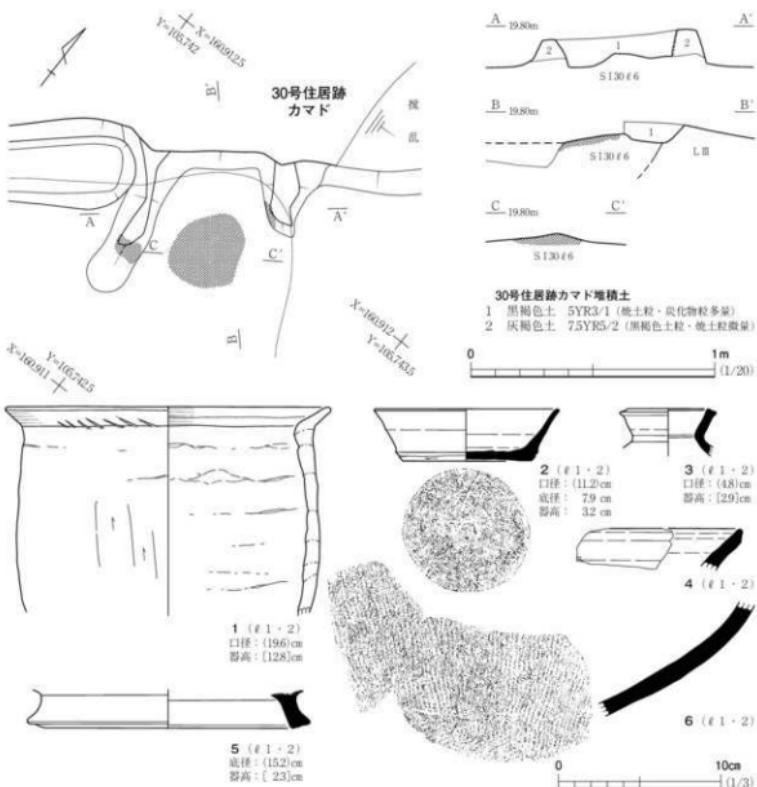


図64 30号住居跡カマド・出土遺物

遺 物 (図64、写真124)

本住居跡からは弥生土器17点、土器180点、須恵器27点が出土した。このうち、土器1点、須恵器5点を図示した。

図64-1は土器の甕である。体部は垂直に立ち上がり、口縁部は短く外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。頸部外面には連続したヘラ状工具の整形痕が認められ、体部にはヘラケズリが施されている。内面には粘土紐の積み上げ痕が認められる。

同図-2は須恵器の杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。底部の外面付近には、回転ヘラケズリが施されている。

同図-3～5は須恵器の壺である。3は口縁部付近の破片で、外傾しながら肥厚し、口縁端部は面を持つ。4は口縁端部で上に向かわざかに摘み出す。内面には降灰が認められる。5は底部付近

の破片で、体部と高台の接合部で剥離している。

同図-6は須恵器の壺の体部下半である。外面には平行タタキ、内面には無文の当て具をナデ消した痕跡が認められる。

まとめ

本住居跡は丘陵西側の緩斜面の中位に立地する。同立地には軸方向を同一とする、23・47号住居跡がまばらに分布している。平面形は方形基調で、規模は、南北で4.23m、東西で4.42mである。本住居跡の中央には、4本の主柱穴を持つ。本住居跡の所属時期は出土遺物から、奈良時代、8世紀と考えられる。

(佐藤)

31号住居跡 S I 31

遺構 (図65・66、写真56・57)

本住居跡は、調査区東部のH・I-17・18グリッドのLIII上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面に立地する。34号住居跡、2号溝跡、46号土坑と重複する。本住居跡が2号溝跡、46号土坑より古いことは検出作業により把握することができた。しかし、34号住居跡との前後関係については、重複する部分がごくわずかであり、検出作業によっては判断できなかったものの、出土土器の様相から本住居跡がやや新しいと判断される。西壁と床面の一部は搅乱によつて壊されている。

平面形は方形で、規模は東西5.90m、南北5.90mである。壁は北東部の残りが最も良く、床面から最大で約50cmが遺存していた。

住居内堆積土は4層に分けられ、大きくℓ1とℓ2～4に大別することができる。ℓ1は小土塊を含まない一方、ℓ2～4はいずれも小土塊を多量に含んだ人為堆積土と判断される。このことは、本住居跡の廃絶にあたって埋められたのち、自然堆積によってℓ1が堆積したことを示す。

床面は、全面が水平かつ平坦な貼床で、ほぼ全面が強く締まっていた。貼床層はℓ5とした。掘形底面には、不規則な凹凸が認められた。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット6基(P1～6)を検出した。

カマドは北壁のほぼ中央に付され、両袖と煙道、煙出しピットが検出された。規模は向かって左側の袖が壁から58cm、右袖が62cm、幅は最大109cmである。両袖の内面は被熱により赤変していた。焼土面は両袖の先端を結ぶ線のやや外側に位置する。平面形は不整梢円形で、規模は長径19cm、短径14cmで、最大3cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は北壁に對してほぼ直角方向に延び、先端に煙出しピットが開口する。

煙道は、46号土坑との搅乱によって一部が壊されていた以外は天井が崩落せずにトンネルが遺存していたため、断ち割りを行った。トンネルの断面は円形で、底面は煙出しピットに向かって下る緩やかな勾配がある。トンネル内は流入した褐色土で満たされていた。煙道の規模は、煙出しピットを含めた長さが163cm、煙道の幅は最大で29cm、高さは遺存した部分で最大20cmである。煙出し



図65 31号住居跡

ピットは、平面形は不整円形で、規模は直径32cm、検出面からの深さ78cmで、煙道底面より一段深く掘り込まれ、その差は7cmである。

壁溝は、カマドが付されている部分を除いたすべての壁ぎわに掘られている。幅は最大で約40cm、床面からの深さは10~15cmである。

6基のピットのうち、四隅の対角線上で1間四方に配置された4基のピットは、位置と深さから主柱穴と考えられる。これらを北東から時計回りにP 1~4とした。平面形は不整円形ないし梢円形で、最も大きいP 4は、長径61cm、短径55cm、最も小さいP 1は長径52cm、短径42cm、P 1~

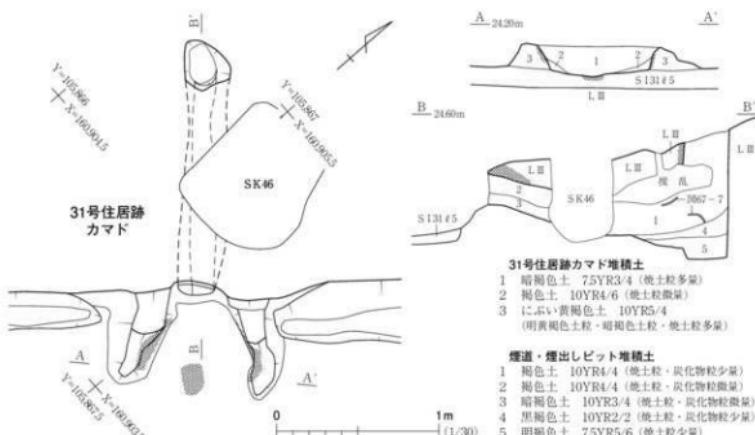


図66 31号住跡カマド

4の床面からの深さは50~63cmである。柱穴の配置はおおむね正方形を描く。

この他2基のピットは、P 5・6とした。P 5は床面中央部、P 6はP 2の東に隣接する。いずれも平面形は不整橿円形で、規模はP 5が長径19cm、短径16cm、床面からの深さ9cm、P 6が長径40cm、短径35cm、床面からの深さ10cmである。いずれも褐灰色土が堆積していた。

遺 物 (図67、写真124・146)

本住跡からは、弥生土器4点、土師器584点、須恵器5点、石器・石製品17点、鉄製品2点が出土した。このうち、土師器8点、須恵器1点、弥生土器1点、鉄製品2点を図示した。

本住跡に伴う遺物としては、北壁ぎわ床面で出土した図67-3の高杯、P 6から出土した同図-2の土師器杯、西隅の床面で出土した同図-11の鉄鎌がある。この他、煙出しピットからは、同図-5・7が出土した。あるいはこれらの土器の破片を用いてピットの開口部を覆っていたなどの性格が考えられる。堆積土中からは比較的多くの遺物が出土した。

図67-1・2は土師器の杯である。1は有段丸底で、口縁部の外外面にはヨコナデが、外面上にはケズリ、内面にはミガキと黒色処理が施されている。2は有段丸底で、外外面とも摩滅が激しいものの、外面上の口縁部にはヨコナデ、体部にはケズリ、内面にはわずかにミガキが観察される。黒色処理は施されていない。

同図-3は土師器の高杯である。口縁端部の大部分と、裾部を欠失する。杯部は有段で、脚部は上部が中実である。外面上の口縁部にはヨコナデ、同体部と脚にはケズリ、杯部内面にはミガキと黒色処理、脚部内面にはケズリが施されている。

同図-4は土師器の鉢である。口縁部付近の破片からの復元である。急な角度で立ち上がり口縁部にいたる。口縁部の外外面にはヨコナデが施されている。輪積み痕をわずかに残す。

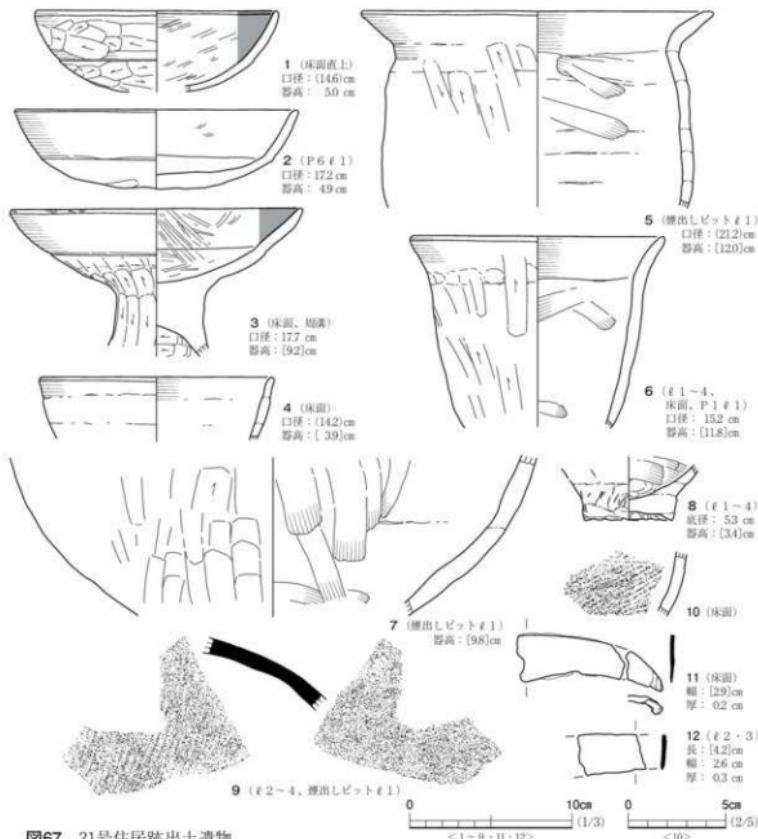


図67 31号住居跡出土遺物

同図-5は土師器の甕である。長胴の体部に外傾する口縁部を持つ。体部外面にはケズリ、口縁部内外面にはヨコナデ、体部内面にはナデが施されている。

同図-6は土師器で、器種は器形から瓶と思われる。きわめて緩やかに湾曲しながら外傾する体部と口縁部を持つ。体部外面にはケズリ、口縁部内外面にはヨコナデ、体部内面にはナデが施されている。

同図-7は土師器の壺もしくは鉢と思われる。体部下半の破片からの復元である。外面にはケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

同図-8は、土師器の甕もしくは鉢と思われる。底部に低い脚台を付す。脚台の内外面には、指頭と爪先の圧痕が多く付す。外面には輪積み痕を残し、内面にはナデが施されている。

同図-9は須恵器の甕の体部片である。外面には平行タタキメ、内面にはアテ具痕がみられる。アテ具痕は無文であるが、わずかに木目のような平行に走る筋がみられる。

同図-10は弥生土器である。外面に単節繩文の上から二本同時施文の平行沈線を横方向に引く。

同図-11・12は鉄鎌である。接合しないが、出土状況からも同一個体と思われる。

まとめ

本住居跡の平面形は方形基調で、規模は東西5.90m、南北5.90mである。4本の柱で上屋を支える構造の住居跡である。北壁にカマドを付す。廃絶に際しては人為的に埋められたと思われる。本住居跡の所属時期は、床面から出土した土器の特徴、特に土師器の杯がいずれも丸底で平底のものを含まないことから、奈良時代の後葉には降らずその前葉から中葉、8世紀の前葉から中葉頃に位置づけられる。

(青山)

32号住居跡 S I 32

遺構 (図68~70、写真58・59)

本住居跡は調査区の東隅部、I-17・18グリッドのL III上面で検出された。北東側丘陵の頂部よりやや南側の緩斜面に立地している。33号住居跡、14号土坑と重複し、本住居跡が新しい。

L III上面の検出作業により、黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。木根による搅乱が著しく、カマドの一部や住居跡の北西隅部は遺存していない。本住居跡の北側には近接して31号住居跡が位置している。

本住居跡の平面形は不整方形を呈し、北東隅部は歪みが著しい。規模は南北で5.09m、東西で4.43m、検出面から床面までの深さは、北壁側で最大36cm、これ以外では最大20cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1・2は床面より上部の住居内堆積土、 ℓ 3~5は貼床土である。 ℓ 1は黒褐色土で、L III粒や炭化物粒を微量に含む。斜面上部から住居全体を覆うように、L IIが流れ込んだものと判断している。 ℓ 2は灰黄褐色土でL III塊や黒褐色土塊を多量に含んでいる。床面を覆う人為堆積土である。 ℓ 3は褐灰色粘質土で、L IIIとの混土である。 ℓ 4は黒褐色土粒や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土、 ℓ 5はL IV塊を多量に含む灰黄褐色土である。

床面には貼床が全面にみられ、水平かつ平坦に整えられる。掘形は全面に認められ、床面からの深さは最大28cmである。掘形の東隅部は土坑状、西壁ぎわには溝状の掘り込みがある。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面からピット5基(P 1~5)、貼床の下や掘形の底部からピット4基(P 6~9)を検出した。

カマドは住居東壁の中央付近に設けられる。カマドで遺存しているのは、両袖と、煙道、煙出しピットである。煙道は天井の一部が崩落しておらず、トンネル状に遺存していた。燃焼部は、その大部分が東壁を掘り込んで構築されている。両袖は、燃焼部より焚口に向かって、狭くすぼまる。両袖はカマド堆積土 ℓ 6を掘り込み、その上から灰褐色土(カマド堆積土 ℓ 5)を据えて構築され

る。左袖は長さ44cm、幅21cm、床面からの高さは8cmである。右袖は長さ25cm、幅15cm、床面からの高さは8cmである。カマドの幅は81cmである。両袖とも上部が焼土化し、その範囲が最大4cmに及ぶことを断ち割りで確認した。煙道は燃焼部の奥壁に対して直角方向に延び、規模は長さ64cm、幅36cm、底面からの高さ15cmである。煙出しピットは2基認められ（煙出しピット1・2）、カマドが同位置で造り直された可能性を示唆する。煙出しピット1は、煙道の先端に位置し、煙出しピット2と重複し、これより新しい。平面形は不整方形で、規模は一辺32cm、検出面からの深さは62cmである。周壁北側の上部は焼土化し、厚さは1cmに及ぶ。煙出しピット2の平面形は方形で、規模は一辺30cm、検出面からの深さは21cmである。

カマド燃焼部の底面から焚口前面、P2にかけて、浅いくぼみが認められた。堆積の新旧関係は住居床面よりも古いことから、カマド周辺の防湿を目的とした基礎構造の可能性がある。範囲は東西方向で194cm、南北方向で134cmに及び、深さは最大12cmである。両袖先端の西側からは凝灰岩の偏平な礫が一对となり、カマド堆積土ℓ6中から出土した。礫は一辺が31～36cmほどで、線状の整形痕が認められた。一对の礫の性格は不明だが、カマド袖の構築材の可能性がある。

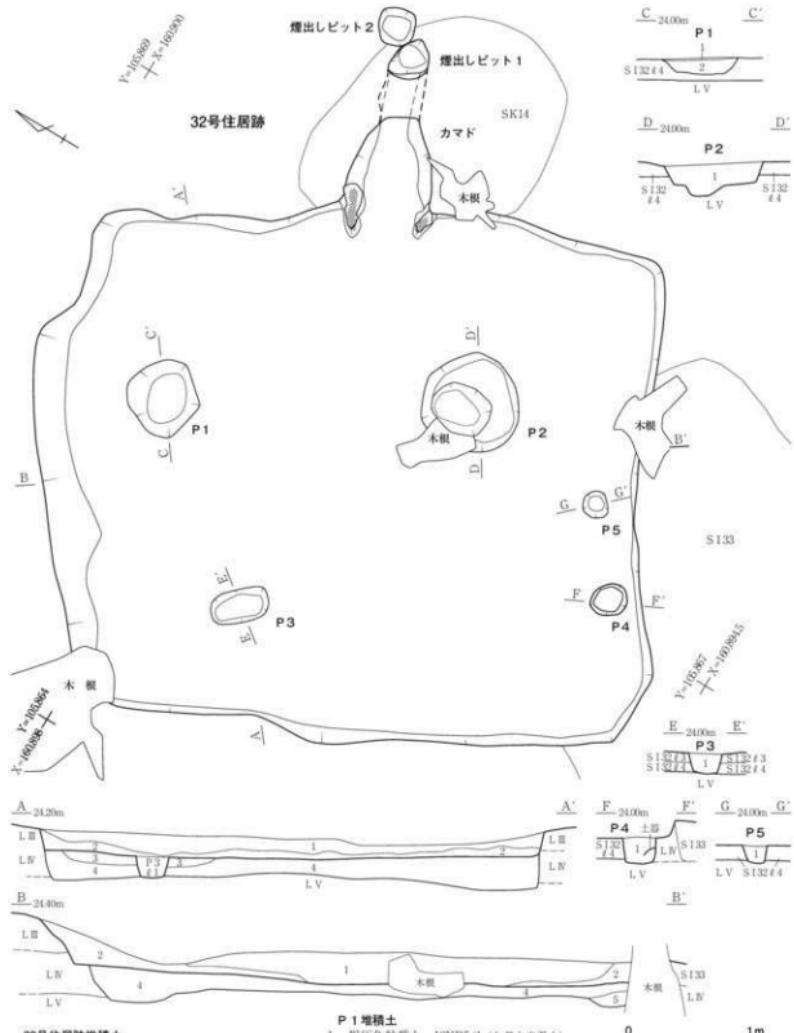
カマドの堆積土は6層に分けられた。ℓ1はLIII粒や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色粘質土で、燃焼部の天井崩落土と住居内堆積土ℓ1の混合土である。ℓ2は焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、煙出しピット1の上部を覆う人為堆積土である。ℓ3はLIV塊・焼土粒・炭化物粒を多量に含む褐灰色土で、燃焼部天井の崩落土と判断した。ℓ4は炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、煙出しピット1を覆う人為堆積土である。ℓ5は焼土粒を多量、炭化物粒を微量に含む灰褐色土で、カマド両袖の構築土である。ℓ6は焚口前面の浅いくぼみを充填するように堆積している。焼土を基調とし、炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、カマドの基礎構造を埋めた人為堆積土である。

煙出しピット2の堆積土は、炭化物粒を微量に含む褐灰色土の単層で、人為堆積土である。

P1は北壁に近接するピットである。床面の精査時に炭化物を斑状に含む範囲として検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径64cm、床面からの深さは最大で14cmを測る。断面形は楕円形で、底面にはわずかに凹凸が認められる。堆積土は2層に分けられた。ℓ1は住居内堆積土ℓ3の褐灰色粘質土に近似する。ℓ2は黒色炭層で、骨片やLIII粒・焼土粒を微量に含む。調理の際に生じた残滓を廃棄し、上端に貼床と同質の土を貼った可能性がある。

P2は住居中央部から、やや南東側に位置するピットである。検出時は床の直上に炭化物が斑状に分布する範囲として確認し、その部分を掘り下げ、不整円形の範囲としてP2を検出した。平面形は不整円形で、規模は直径80cm、床面からの深さは最大で25cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。北西側の底面にはピットが認められ、掘り込みはLVの直上に達している。P2の堆積土は褐灰色土塊を微量に含む黒色炭層の単層で、人為堆積土と判断している。P2は掘形底部で検出したP7～9との位置関係から、主柱穴の可能性がある。

P3は住居中央部から西側に位置するピットである。平面形は梢円形で、規模は長径48cm、短径27cm、床面からの深さは最大で17cmである。周壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

**32号住居跡堆積土**

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (L.III粒・炭化物粒微量)
- 2 底黄褐色土 10YR5/2 (L.III層・黒褐色土多量)
- 3 底黄褐色土 10YR5/1 (L.IIIとの混土)
- 4 底黄褐色土 10YR5/2 (黒褐色土粒・炭化物粒微量)
- 5 底黄褐色土 10YR5/2 (L.IV複多量)

P 1堆積土

- 1 極灰色粘質土 10YR5/1 (L.IIIとの混土)
- 2 黒色炭層 10YR2/1 (骨片・L.III粒・燒土粒微量)

P 2堆積土

- 1 黑色炭層 10YR2/1 (極灰色土微量)

P 3堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/1 (L.III粒微量)

0 1m
(1/40)

P 4・5堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/1 (L.IV粒微量)

図68 32号住居跡 (1)

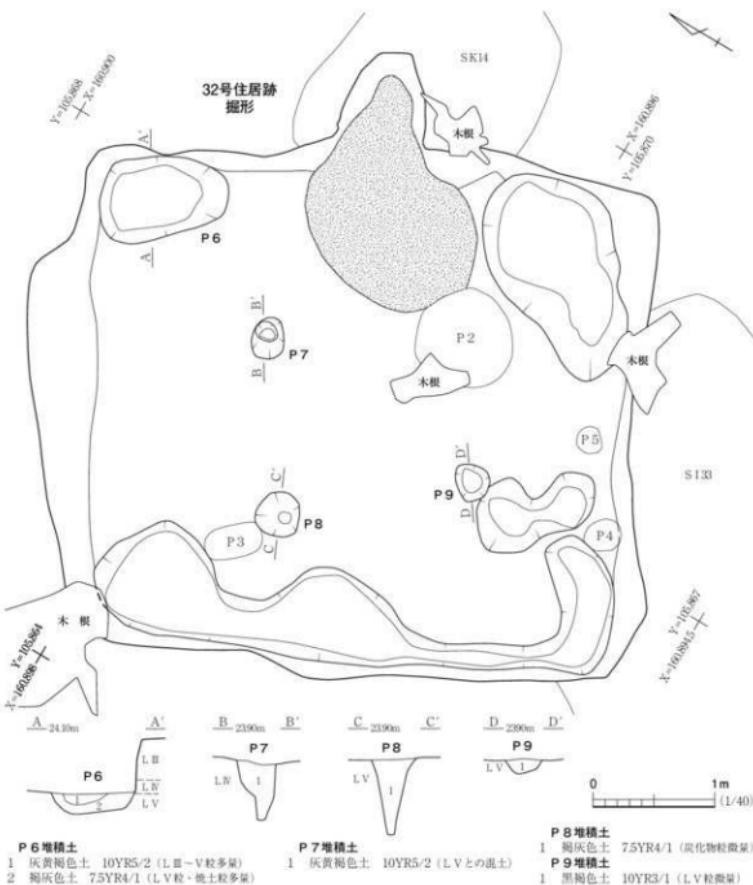


図69 32号住居跡（2）

堆積土はL III粒を微量に含む黒褐色土で、人為堆積土と判断している。P 3の性格は不明である。

P 4・5は南壁ぎわの中央に位置するピットである。平面形は円形で規模は、P 4が直径31cm、床面からの深さは最大22cm、P 5が直径22cm、床面からの深さは最大で14cmを測る。堆積土はL IV粒を微量に含む黒褐色土である。その位置から出入口に関連する構造の可能性がある。

P 6は掘形底面で検出された、住居北隅部に位置するピットである。平面形は隅丸長方形で、規模は長径108cm、短径68cm、床面からの深さは最大で16cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形を呈する。底面は平坦に整えられている。堆積土はL 1がL III～V粒を多量に含む灰黄

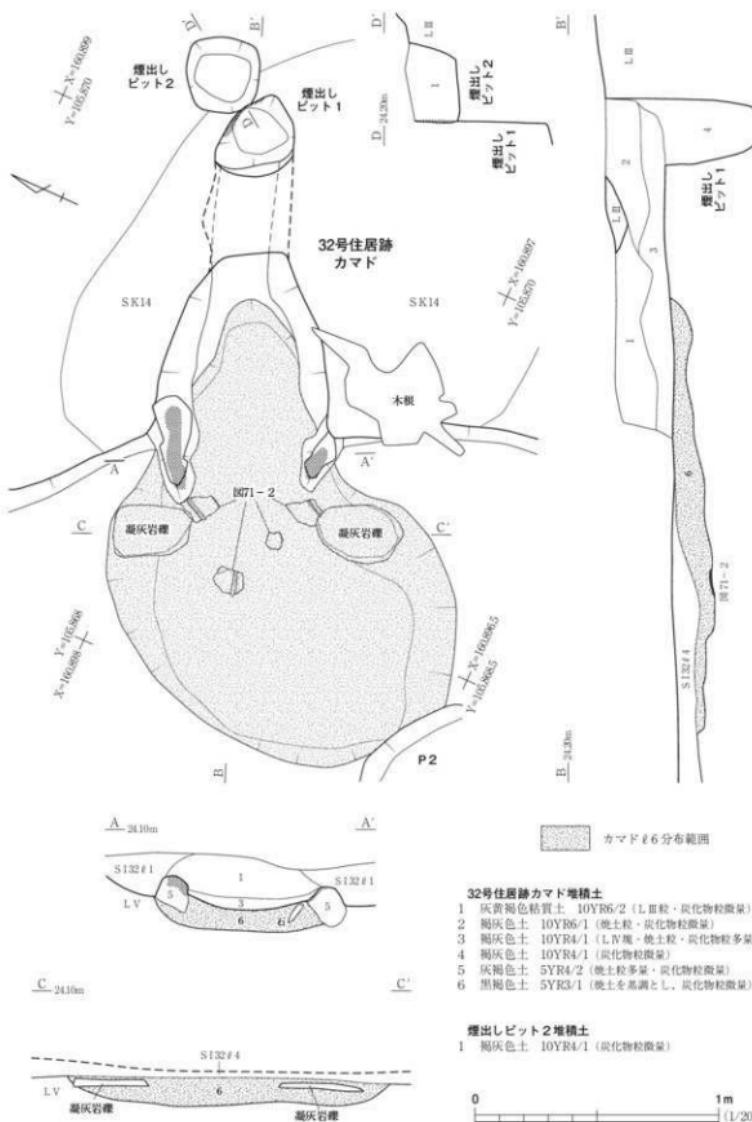


図70 32号住居跡カマド

褐色土で、 ℓ 2がL V粒や焼土粒を多量に含む褐灰色土である。いずれも人為堆積土である。

掘形底面で検出されたP 7～9は、床面で検出したP 2を加えると、対角線上に1間四方に位置する。形状から柱穴の可能性が高い。掘形底面で検出したことから、床面造り替え前に機能していた可能性がある。柱間の距離は短く、いずれも床面が構築される以前に掘り込まれている。平面形は方形や稍円形で、規模は32～39cmである。床面からの深さはP 7が46cm、P 8が61cmであるのに対し、P 9は12cmと浅い。堆積土はP 7が灰黄褐色土、P 8が褐灰色土、P 9が黒褐色土である。

遺物 (図71、写真125・146)

本住居跡からは弥生土器7点、土師器496点、須恵器14点、石製品1点、鉄滓3gが出土した。このうち、土師器3点、須恵器1点、石製品1点を図示した。

カマド焚口付近のカマド堆積土 ℓ 6からは、図71-2の羽釜形土器が破片で出土している。

図71-1は土師器の杯である。ロクロ成形の平底で、体部は外傾しながら立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りで、底部から体部下端には再調整が認められるが、摩滅しており、具体的な方法は不詳である。内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の羽釜形土器とした。体部下半は湾曲し、最大径から垂直に立ち上がり、口縁端部は平坦である。体部中ほどには、隆帯が貼り付けられる。内外面にはロクロナデが施されている。

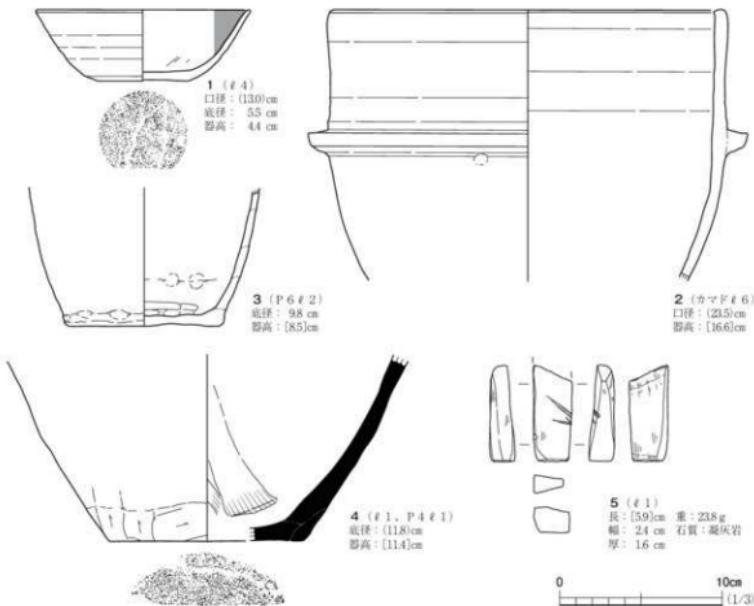


図71 32号住居跡出土遺物

同図-3は土師器の壺である。底部は砂底で、体部は急角度で外傾する。

同図-4は須恵器の壺である。平底で、直線的に外傾しながら立ち上がる。外面の体部と底部の境には、粘土を補った痕跡がある。底部外面付近にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施され、底部外面には縦の茎の圧痕が顕著に認められる。

同図-5は砥石である。4側面を砥面とし、そのうち一面の中央には2条の深い線状痕が認められる。

ま と め

本住居跡は北東側丘陵の頂部よりやや南側の緩斜面に立地する。本住居跡の平面形は不整方形が基調で、規模は南北で5.09m、東西で4.43mである。カマドは燃焼部を周壁の外側を掘り込んで設け、下部には焼土を基調とした土を充填しており、防湿を目的とした基礎構造の可能性がある。掘形の底面から検出されたP7~9と、床面から検出されたP2は、配置や規模から主柱穴の可能性がある。また、カマド煙出しピットの重複や床面等の再構築が認められることから、2時期の可能性を考えられる。本住居跡の所属時期は、図71-1のロクロ成形の土師器杯から平安時代、9世紀と考えられる。

(佐藤)

33号住居跡 S I 33

遺構(図72、写真60・61)

本住居跡は調査区の東端部、I-17グリッドのLIV上面で検出された。東側丘陵の頂部よりやや南側の緩斜面に立地している。32号住居跡と重複し、本住居跡が古い。本住居跡の北側4mには31号住居跡、南西側には隣接して15号土坑が位置している。

LIV上面の検出作業で、32号住居跡と重複する黒褐色土を基調とした長方形の範囲として確認した。本住居跡は、32号住居跡の掘り込みや木根による搅乱により大部分が破壊され、中央部は床面が露出した状況で検出された。壁溝は東壁のみ遺存している。

本住居跡の平面形は遺存している部分から、南北方向に長軸を持つ長方形基調と判断した。規模は長軸4.26m、短軸2.95m、検出面から床面までの深さは16cmを測る。

住居内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はLIII塊や褐色土塊を多量に含む黒褐色土で、人為堆積土である。 ℓ 2は焼土粒や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色粘質土で、貼床に用いた土である。

床面は全面が顕著に硬化している。北西側の床面の一部には、炭化物粒や焼土粒が密に分布していた。貼床は全面に確認でき、床面の深さは最大で12cmである。

本住居跡に付属する施設として、床面から壁溝、ピット6基(P1~6)を確認した。

壁溝は北壁・東壁に沿うように掘り込まれる。遺存した範囲での平面形は「L」字形である。壁溝の規模は、幅14cm、床面からの深さは8cmを測る。壁面は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は褐灰色粘質土の単層で、LIV粒や焼土粒を微量に含む。

P1は壁溝に隣接するピットである。P3と重複し、P1が新しい。北側周壁の一部は搅乱によ

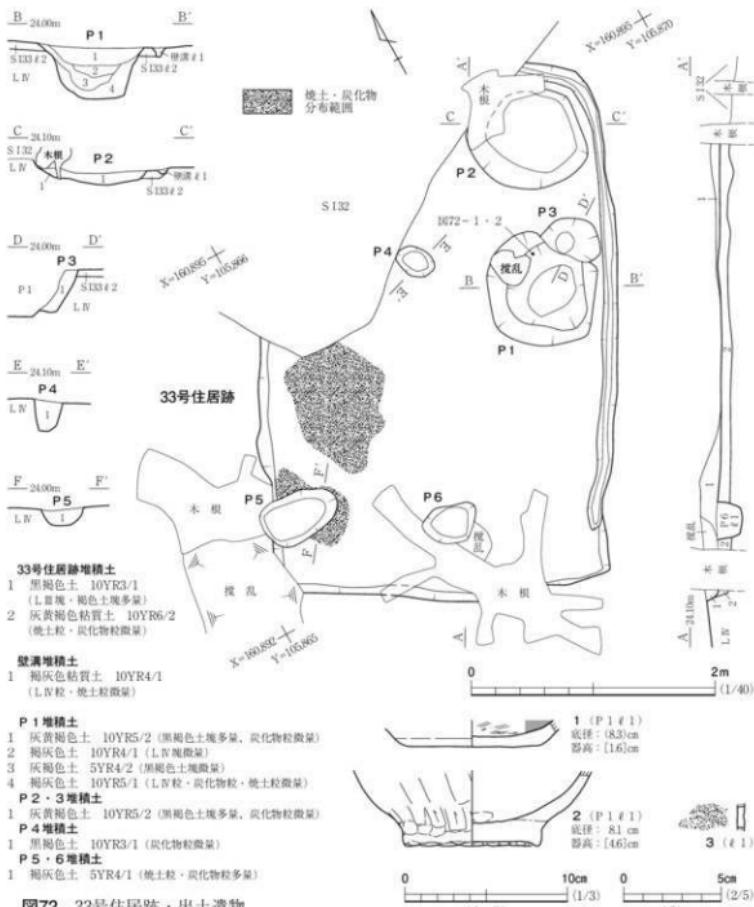


図72 33号住居跡・出土遺物

り破壊されている。平面形は不整円形で、規模は直径100cm、床面からの深さは最大で41cmを測る。壁は底面から急角度で立ち上がり、上部は上端に向か緩やかに開口する。P 1 の堆積土は4層に分けられる。ℓ 1 はLIVを由来とする灰黃褐色土、ℓ 2 はLIV塊を微量に含む褐灰色土で、ℓ 3 は焼土を基調とした灰褐色土、ℓ 4 はLIV粒や焼土粒・炭化物粒を微量に含む褐灰色土である。いずれも人為堆積土である。P 1 の性格は不明である。

P 2 は北東隅部に位置するピットである。北西側は、32号住居跡の掘り込みや木根により破壊されている。位置や規模から貯蔵穴の可能性がある。平面形は不整方形で、規模は一辺100cm、床

面からの深さは最大で9cmと浅い。P 2の堆積土はP 1・3のℓ 1と同質の灰黄褐色土で、人為堆積土である。

P 3は壁溝に隣接するピットである。P 3の南西側はP 1の掘り込みにより破壊され、遺存していない。平面形は円形基調で、規模は直径44cm、床面からの深さは最大で35cmを測る。P 3の堆積土はP 1・2のℓ 1と同質の灰黄褐色土で、人為堆積土である。

P 4は床面の中央部からやや北側に位置するピットである。西側は木根により破壊されている。平面形は梢円形で、規模は直径30cm、床面からの深さは最大で25cmを測る。P 4の堆積土は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、人為堆積土と判断している。

P 5は南西隅部に位置するピットである。平面形は梢円形で、周壁の一部を掘り込んで構築される。規模は長径64cm、短径39cm、床面からの深さは最大で12cmを測る。堆積土は焼土粒・炭化物粒を多量に含む褐灰色土で、人為堆積土と判断している。

P 6は南壁付近に位置する。平面形は梢円形で、規模は長径43cm、短径30cm、床面からの深さは最大で20cmである。堆積土はP 5と同様である。

遺 物 (図72、写真125)

本住居跡からは、土師器156点、須恵器1点、石器・石製品1点が出土した。このうち、弥生土器1点、土師器2点を図示した。

図72-1は土師器杯の底部である。ロクロ成形で、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。再調整は摩滅により、不明である。

同図-2は土師器甕の底部片である。底面はユビオサエにより、凹面に仕上げられ、体部は湾曲しながら立ち上がる。体部下端の外面上には、縦位のヘラケズリが施されている。

同図-3は弥生土器である。外面には幅の狭い二本同時施文の平行沈線により、波状文が施されている。

ま と め

本住居跡は東側丘陵の頂部に立地する。平面形が長方形基調で、規模は長軸4.26m、短軸2.95mの住居跡である。住居東壁と北壁の一部に「L」字形の壁溝を伴い、床面にはP 2とした1基の貯蔵穴を有する。本住居跡の所属時期は、32号住居跡より古いことや、図72-1のロクロ成形の土師器杯から勘案して、平安時代、9世紀と考えられる。

(佐 藤)

34号住居跡 S I 34

遺 構 (図73・74、写真62・63)

本住居跡は、調査区東部のG-18、H-17・18グリッドのL III上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面に立地する。31号住居跡、2号溝跡、50号土坑と重複し、2号溝跡、50号土坑より本住居跡が古いことが検出作業により把握することができた。31号住居跡との前後関係については、31号住居跡の項目でも述べたが、重複する部分がごくわずかであることもあり、



図73 34号住居跡

検出作業によっては判断できなかった。出土土器の様相は本住居跡がやや古い。

平面形は方形で、規模は東西5.50m、南北5.56mである。壁は西部の残りが最も良く、床面から最大で約64cmが遺存していた。

住居内堆積土は3層に分けられる。いずれも小土塊や焼土粒を含み、人為堆積土と判断される。このことは、本住居跡が廃絶のち埋められたことを示唆する。

床面には、貼床が全面に水平かつ平坦に貼られ、ほぼ全面が強く締まっていた。掘形底面には、不規則な凹凸が認められた。貼床層は ℓ 4とした。

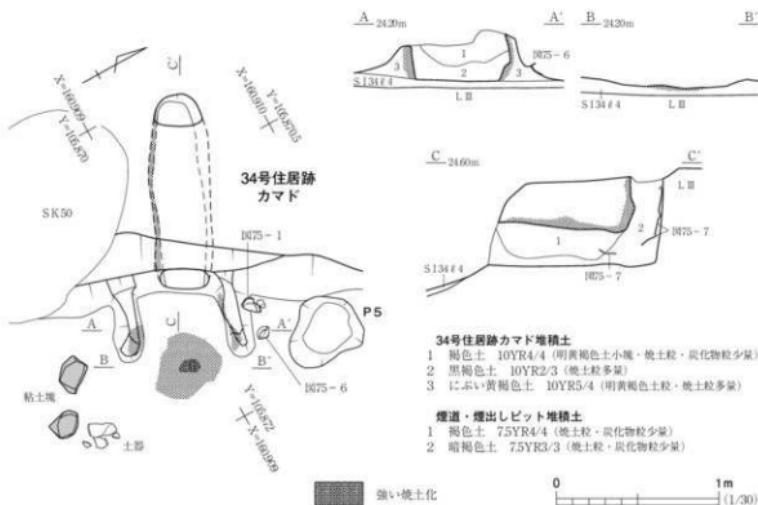


図74 34号住居跡カマド

本住居跡に付属する施設として、西壁からカマド1基、床面から壁溝、ピット13基(P1・3～14)が検出された。

カマドは西壁の中央からやや北に寄った位置にあり、両袖と煙道、焼土面が検出された。規模は、向かって左側の袖が壁から53cm、右袖が55cm、幅は最大86cmである。両袖の内面には被熱により赤変していた。焼土面は両袖の間にある。平面形は不整楕円形で、中央部がとくに強く焼土化していた。規模は長径44cm、短径34cmで、最大3cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りで確認した。

煙道は壁に対してほぼ直角方向に延び、先端に煙出しピットが開口する。煙道は天井が崩落せずにトンネルが遺存していた。トンネルの断面は楕円形で、煙出しピットに向かうにしたがって径を減じる。底面はほぼ水平である。トンネル内は流入土で満たされていた。規模は煙出しピットを含めた長さが119cm、幅は最大で38cm、高さは最大27cmである。

煙出しピットは平面形が不整楕円形で、規模は長径30cm、短径20cm、検出面からの深さ56cmで、底面は煙道底面と同じ高さである。煙道はトンネル部分の天井と側壁の全体が被熱により焼土化し、その厚さは最大6cmの厚さに及ぶことを断ち割りで確認した。また、煙出しピットと煙道の最奥部の壁の表面には黒色のススが付着して硬化していた。

壁溝は南壁ぎわから東壁ぎわの南部にかけてと北隅部、北壁の中央付近に掘り込まれている。幅は最大25cm、床面からの深さは5～7cmである。

13基のピットのうち、四隅の対角線上に位置するものは柱穴と考えられる。床面精査の段階で

は北西の柱穴にあたる位置にはビットが確認されなかったものの、貼床を除去した段階で検出されることを見込み、南西から時計回りにP 1～4の番号を割り振った。しかし、貼床を除去したちの掘形底面でもP 2の位置には柱穴は検出されなかつたため、P 2は欠番とした。柱穴の平面形は円形から梢円形で、規模は最も大きいP 4が長径30cm、短径25cm、最も小さいP 1は長径25cm、短径20cmである。床面からの深さは、最も深いP 3が41cm、最も浅いP 4が15cmである。

この他、貯蔵穴と思われるビットが西壁ぎわの中央からやや北側、北西隅、南西隅で検出され、これらをそれぞれ、P 5・6・12とした。P 5は平面形が不整梢円形で、規模は、長径49cm、短径44cm、床面からの深さ12cmである。P 6は平面形が不整梢円形で、規模は長径57cm、短径49cm、床面からの深さは55cmである。P 12は平面形が円形で、規模は長径54cm、短径45cm、床面からの深さ13cmである。

この他のビットについては床面の各所に散在しており、規模がまちまちで、性格を明らかにできなかつた。

遺物 (図75、写真125・149)

本住居跡からは、弥生土器4点、土師器603点、須恵器5点、白玉5点、石器・石製品4点が出土した。このうち、土師器10点、白玉4点、石器2点を図示した。

本住居跡の床面に伴つて数点の遺物が出土した。図示できたものは、カマド右袖の脇で出土した図75-1の土師器杯と同図-6の土師器鉢、北壁ぎわの北西隅近くの床面で同図-2の土師器杯、同図-8・9の土師器壺である。この他、P 4の北側で同図-11～14の白玉が出土した。白玉はまとまって5点が出土し、このうちの2点が接合した。白玉の破損が人為的なものかは不明である。他に、図示できなかつた土器がカマド南東部と東壁ぎわで出土した他、カマド構築材と考えられる白色の粘土塊がカマドの南東部、板状の炭化材がP 6の東側、短い棒状の炭化材が東壁ぎわの中央部で出土した。

図75-1～4は土師器の杯である。このうち1・2の色調は橙色から明赤褐色である。1は、底部にはケズリ調整によって作られた平坦面を持ち、緩やかに湧曲する体部と外反する口縁部を持つ。外面の底部と体部にはケズリ、同口縁部にはヨコナデ、内面にはミガキと黒色処理が施されている。2は、摩滅により不明瞭であるが、底部にわずかに平坦面を持ち、体部はきわめて緩やかに立ち上がる。外面調整は不明瞭であるが、内面にはミガキと黒色処理が施されている。3は、口縁部付近の破片からの復元である。内外面に段を有し、口縁部は外傾する。口縁部外面にはヨコナデが施され、輪積み痕を残す。内面にはミガキと黒色処理が施されているが、段の部分にミガキ以前のヨコナデが観察される。4は、体部から口縁部にかけての破片からの復元である。偏平な半球形の体部に短く直立する口縁部を持つ。体部と口縁部に境には段を有する。調整は、口縁部にヨコナデがみられる他は摩滅のため不明瞭である。

同図-5は土師器の高杯である。脚部の小片からの復元である。脚頂部にわずかに中実部があり、裾部は「八」字に開く。内外面とも摩滅が激しいが、脚部外面にはケズリが施されているようである。

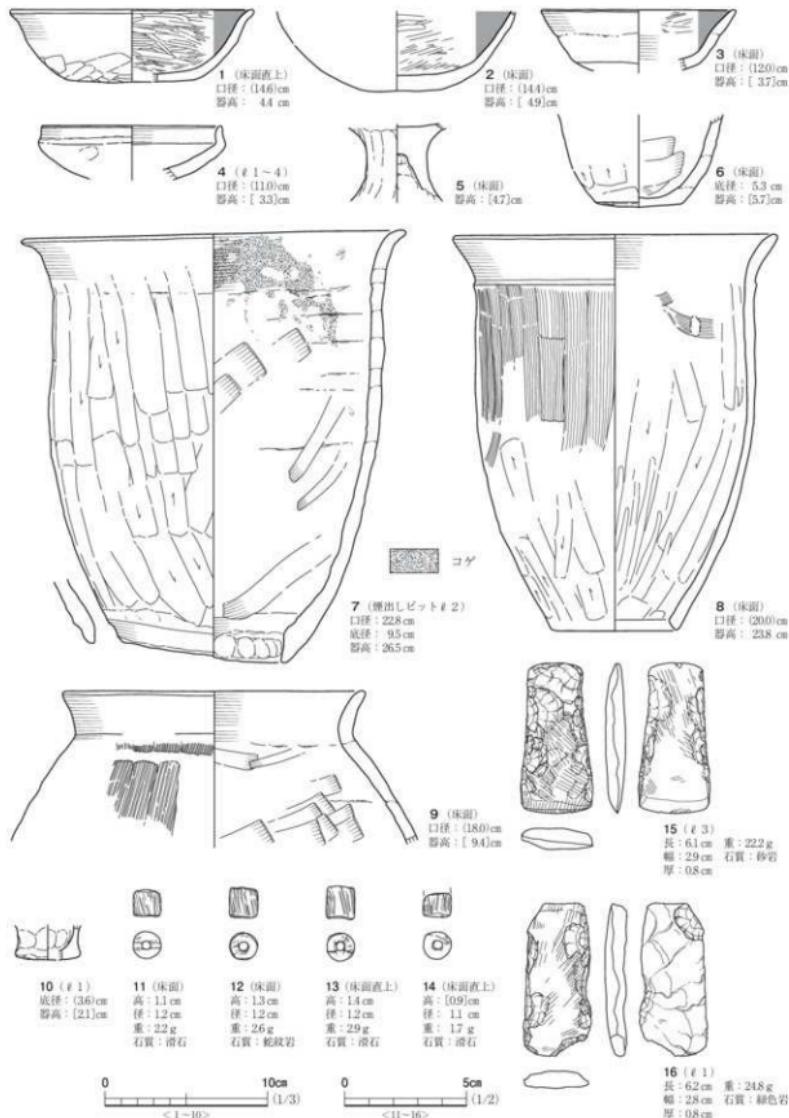


図75 34号住居跡出土遺物

杯部は内面の底部がわずかに残るが、黒色処理は施されていない。

同図-6は土師器の鉢である。やや凸面をなす平底から急角度で体部が立ち上がる。外面には摩滅が激しいがケズリが施されているようである。内面にはヘラナデが施されている。

同図-7・8は土師器の瓶である。いずれも無底で、体部は下半が底部からしだいに径を増し、上半は寸胴で、口縁部は短く外反する。7は体部外面にケズリ、口縁部内外面と体部下端にはヨコナデ、体部内面にはヘラナデ、底部開口部の内面に指頭圧痕をめぐらす。口縁部内面の一部にはコゲと思われる炭化物が付着する。8は、体部外面にはハケメのち下半にはケズリ、口縁部内外面にはヨコナデ、体部内面には、①ハケメ②ケズリ③ミガキの順番で調整が施されている。

同図-9は土師器の壺である。体上部と口縁部の破片からの復元である。体部上半は内傾し、口縁部は急な角度で外傾する。体部外面にはハケメ、口縁部外面にはヨコナデ、体部内面にはヘラナデが施されている。

同図-10は土師器のミニチュアである。平底の底部の小片である。内外面には指頭の圧痕がみられる。

同図-11~14は白玉である。いずれも両小口面が平行せず粗割りの状態をそのまま残し、側縁には縱方向の擦痕を顕著に残すなど、仕上げ工程がみられない粗雑なものである。

同図-15は偏平片刃石斧である。短冊形で、表裏に研磨しきれなかった剥離面を残す。

同図-16は、偏平片刃石斧の未完成品の可能性がある剥片である。

まとめ

本住居跡の平面形は方形基調で、規模は東西5.50m、南北5.56mである。柱穴は3基しか検出されなかったものの、4本の柱で上屋を支える構造と思われる。西壁にカマドを付す。廃絶に際しては人為的に埋められたと思われる。本住居跡の所属時期は、床面から出土した土器の特徴、特に土師器の杯が橙色から明赤褐色のものを中心など古い様相を持つことから、古墳時代の後期、6世紀に位置づけることができる。

(青山)

35号住居跡 S I 35

遺構 (図76・77、写真64・65)

本住居跡は、調査区北東部のG・H-16・17グリッドのLⅢ上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の西側縁辺部に立地する。南東側が37号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。本住居跡の東側2.5mには、36号住居跡が位置している。

本住居跡は、くぼみ部分に堆積していた表土や伐木、ガレキなどを除去した後の精査で灰褐色粘土を基調とした方形の範囲として確認した。このことから、本住居跡が埋まりきらず、調査の直前までくぼみとなっていた可能性がある。木根の搅乱により壁面や床面中央の一部は遺存していない。

本住居跡の平面形は方形を呈し、規模は南北で3.32m、東西で3.68m、検出面から床面までの深さは、最大で20cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

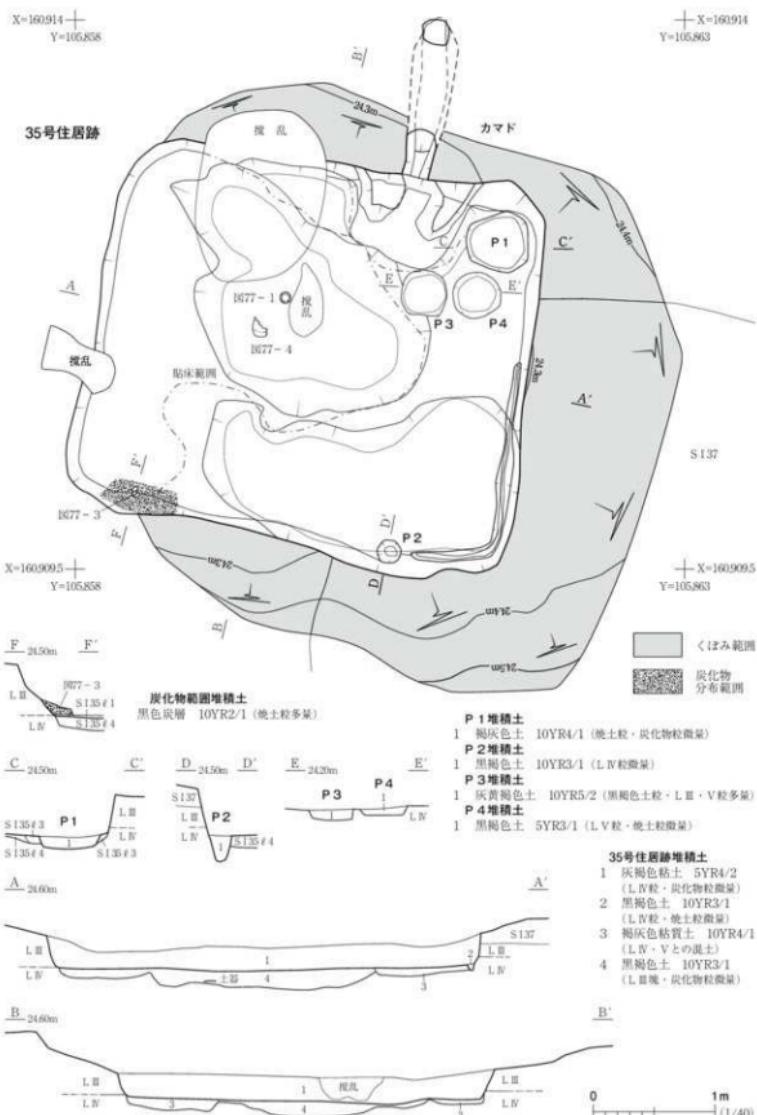


図76 35号住居跡

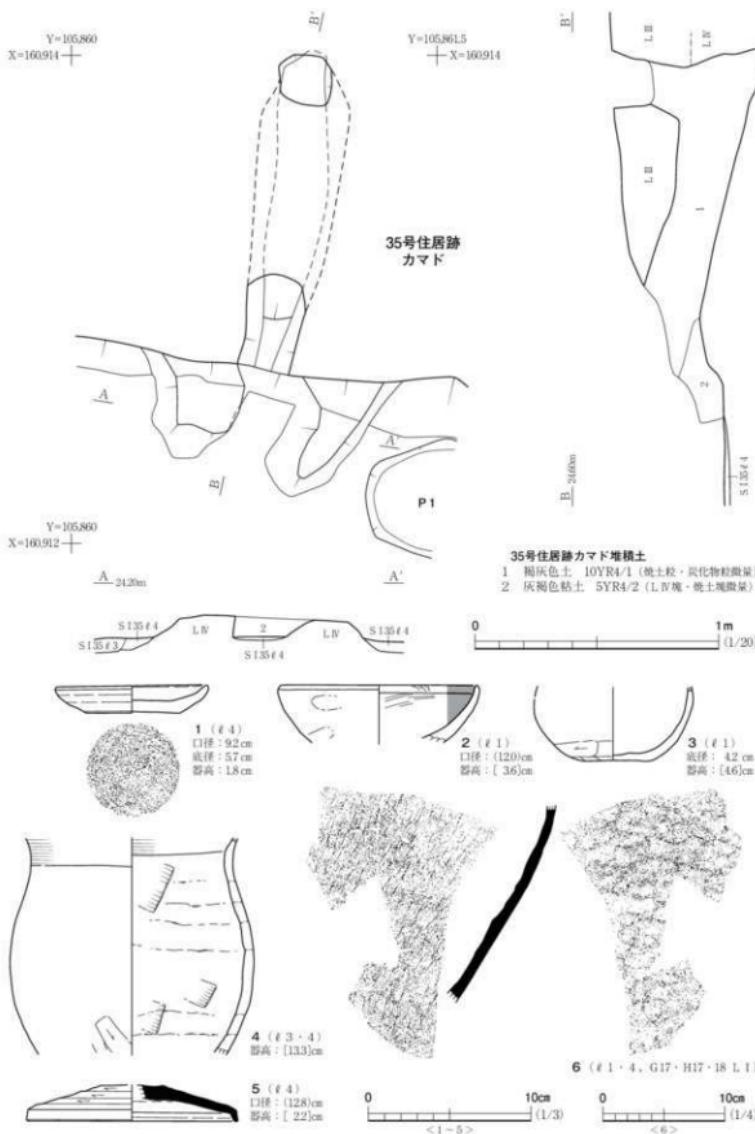


図77 35号住居跡カマド・出土遺物

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1はL IV粒や炭化物粒を微量に含む灰褐色粘土で、住居全体を覆うように堆積しており、短期間に埋めたものと判断している。 ℓ 2はL IV粒や焼土粒を微量に含む黒褐色土で、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 3はL IVとL Vの混合土の褐灰色粘質土で、貼床である。 ℓ 4はL III塊・炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、掘形の埋土である。

床面には、平坦に整えられた踏み縮まりが認められた。貼床は、東半部に薄い帯状となって認められる。掘形は全面に認められ、中央部や南東隅部には浅い土坑状の掘り込みが認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から煙溝、ピット2基(P 1・2)、掘形底面からピット2基(P 3・4)を確認した。

カマドは住居北壁の中央よりわずかに東側に位置する。両袖が遺存し、L IVを掘り残して構築される。規模は右袖が長さ52cm、幅30cm、床面からの高さは7cm、左袖が長さ40cm、幅40cm、床面からの高さ9cmである。カマドの幅は81cmである。煙道は住居壁から直角に延び、L IIIを掘り込んで構築され、先端部に煙出しピットが掘り込まれる。煙道の一部は天井が遺存していた。規模は長さ150cm、幅36cmである。底面は煙出しピットに向けて低くなり、奥壁はわずかに内傾しながら立ち上がり、上部は外傾する。煙出しピットの平面形は方形で、規模は一辺20cm、検出面からの深さは60cmである。

カマドの堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、煙道の壁面が崩落した土や、煙出しピットから流れ込んだ土と判断した。 ℓ 2はL IV塊や焼土塊を微量に含む灰褐色粘土で、燃焼部の天井崩落土と住居内堆積土 ℓ 1の混合土である。

壁溝は、東壁の南側から南壁の東側にかけて周壁に沿うように検出された。平面形は「L」字状で、規模は長さ220cm、幅13cm、床面からの深さは最大で5cmと浅い。

P 1はカマドの右袖の東側に隣接し、位置や規模から貯蔵穴とした。平面形は不整円形で、規模は直径51cm、床面からの深さは10cmである。周壁は急な角度で立ち上がり、底面はL IVまで掘り込まれ、平坦である。堆積土は焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、人為堆積土と判断した。

P 2は南壁ぎわのやや東側に位置するピットで、その性格は不明である。平面形は円形で、規模は直径19cm、床面からの深さは最大で21cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がり、その断面形は「U」字状である。P 2の堆積土はL IV粒を微量に含む黒褐色土で、人為堆積土と判断した。

P 1南側の住居掘形の底面には、P 3・4が並列して位置する。いずれも平面形は円形で、直径36~38cm、深さは最大で7~9cmである。いずれの堆積土にも、地山を由来とした土粒が含まれていた。性格は不明だが、深さが浅いことから、掘形の掘削痕跡の可能性がある。

また、 ℓ 1の堆積土中、南西隅よりやや東側の壁面付近からは東西60cm、南北24cmの範囲で焼土粒を多量に含む炭化物が分布していた。

遺 物（図77、写真126）

本住居跡からは弥生土器1点、土師器117点、須恵器9点、石器・石製品1点が出土した。このうち、赤焼土器1点、土師器3点、須恵器2点を図示した。

南西隅よりやや東側の壁面付近の炭化物分布範囲上からは、図77-3の土師器の鉢が置かれるように出土している。本住居跡の掘形からは、図77-1の赤焼土器の杯が完形で出土している。

図77-1は赤焼土器の杯である。平底で口径に対して器高は低く、短く湾曲しながら立ち上がる。口縁部には丸みを持つ。底部切り離しは回転糸切りである。

同図-2は土師器の杯である。体部は湾曲し、口縁端部はごく短く直立する。内面にはヘラミガキのもの、黒色処理が施されている。

同図-3は土師器の鉢である。平底で、体部は球形である。外側の底部付近にはヘラケズリが施されている。

同図-4は土師器の壺である。体部中ほどは膨らみを持つ。外側にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

同図-5は須恵器の蓋である。外側には回転ヘラケズリが施されている。

同図-6は壺の体部片である。色調は外側が赤褐色、内側が赤橙色を呈する。外側には幅の広い平行タタキが、内側には無文の當て具痕が認められる。

まとめ

本住居跡は北東側丘陵の頂部西側の緩斜面に立地する。本住居跡の平面形は方形で、規模は南北が3.32m、東西が3.68mである。本住居跡の所属時期は掘形から出土した図77-1の赤焼土器の杯から、平安時代、10世紀後半～11世紀前半と考えられる。

(佐藤)

36号住居跡 S I 36

遺構 (図78～80、写真66・67)

本住居跡は、調査区北東部のG-17・18、H-17グリッドのLⅢ上面で検出された。北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡は複数の遺構と重複しており、37号住居跡より新しく19号土坑より古い。本住居跡の西側2.5mには、35号住居跡が位置している。住居南壁の一部は、木根の搅乱により遺存していない。

LⅢ上面の検出作業により、灰黄褐色土を基調とした正方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は正方形を呈し、規模は南北で5.30m、東西で4.89m、検出面から床面までの深さは、最大で35cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土で、住居全体を覆うように堆積しており、短期間に埋めた可能性がある。 ℓ 2はLⅣ粒や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土である。床面南西部では、斑状に堆積していた。 ℓ 3は黒褐色土で、LⅢとの混合土である。壁溝を覆う人為堆積土とした。 ℓ 4はLⅢ・Ⅳの混合土で、貼床である。

床面には、貼床が前面に水平かつ平坦に貼られ、ほぼ全面が強く締まっていた。

本住居跡に付属する施設として、カマド2基(カマド1・2)、床面から壁溝、ピット6基(P1～6)、掘形の底面からピット11基(P7～17)を確認した。

カマド1は住居北壁の中央に設けられる。遺存しているのは、両袖と焼土面、煙道、煙出しピットである。両袖は壁に対し直角に延び、灰黄褐色土により構築されている。左袖は長さ61cm、幅47cm、床面からの高さ12cmである。右袖は長さ41cm、幅28cm、床面からの高さ15cmである。カマドの幅は92cmである。左袖の内面上部は焼土化し、その範囲が厚さ5cmに及ぶことを断ち割りで確認した。燃焼部の左袖ぎわには焼土面が認められる。平面形は楕円形で、規模は長径34cm、短径24cm、焼土化した部分の厚さは2cmである。煙道は壁に対し直角に延びるように掘り込まれる。規模は長さ177cm、幅39cmを測る。底面は、住居側から煙出しピットに向けて緩やかに低くなっている。煙出しピットの平面形は楕円形で、規模は直径35cm、検出面からの深さは53cmである。壁は湾曲しながら立ち上がり、中位から外傾し、上端へ至る。

カマド1の堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1はLIV塊・焼土粒・炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土で、住居内堆積土 ℓ 1と裾部や煙道の崩落土の混合土である。 ℓ 2は焼土粒や炭化物粒を多量含む褐灰色土で、カマドの天井崩落土である。 ℓ 3はLIV塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、煙出しピット付近の底面に堆積している。三角堆積を示すことから、流れ込みと判断した。 ℓ 4はLIV塊や焼土粒・炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土で、両袖の構築土である。

カマド2は住居東壁の中央に設けられている。遺存しているのは、煙道と煙出しピットのみである。煙道は壁に対し直角に延び、天井は一部が崩落せず遺存していた。規模は長さ127cm、幅38cm、天井部が遺存する箇所の床面からの高さは32cmである。底面は、住居側から煙出しピットに向けて緩やかに低くなっている。煙道の天井部は全面が厚さ最大3cmにわたって焼土化していることを断ち割りで確認した。煙出しピットの平面形は方形で、規模は一辺35cm、検出面からの深さは59cmである。壁は垂直に立ち上がる。

カマド2の堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒を少量、L III粒や炭化物粒を多量に含む褐灰色土で、煙道天井部の崩落した土と判断した。 ℓ 2はL III粒や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、煙道・煙出しピット全体に流れ込んだ土である。 ℓ 3は焼土粒や炭化物粒を多量に含む黒褐色土で、カマド2の使用により堆積した土と判断した。

壁溝は四方の壁ぎわに断続的に掘り込まれる。幅は20~30cmほどで、床面からの深さは最大で10cmと浅い。カマド1の左袖西側のみ、幅が77cmと広く掘り込まれる。

P 1~4は対角線上に1間四方に配置される。その位置や規模から、主柱穴と考えられる。

P 1はP 5・6と重複し、いずれよりも新しい。直径は50cmで、床面からの深さは51cmである。底面はL IVに達し、底面中央には柱痕が確認できた。堆積土は2層に分けられ、いずれもL IV粒や炭化物粒を含む灰黄褐色土で、柱を抜いた後の人為堆積土と判断した。

P 2は住居中央より北西側に位置する柱穴である。P 2の周囲には平面形が不整長方形の深い掘り込みが認められ、この底面から検出した。深い掘り込みの規模は長軸155cm、短軸104cm、床面からの深さは18cmを測る。深い掘り込み部分には貼床が確認されないことから、柱を抜き取る際の掘り込みと判断した。柱穴の平面形は不整形で、規模は一辺37cm、床面からの深さは最大で

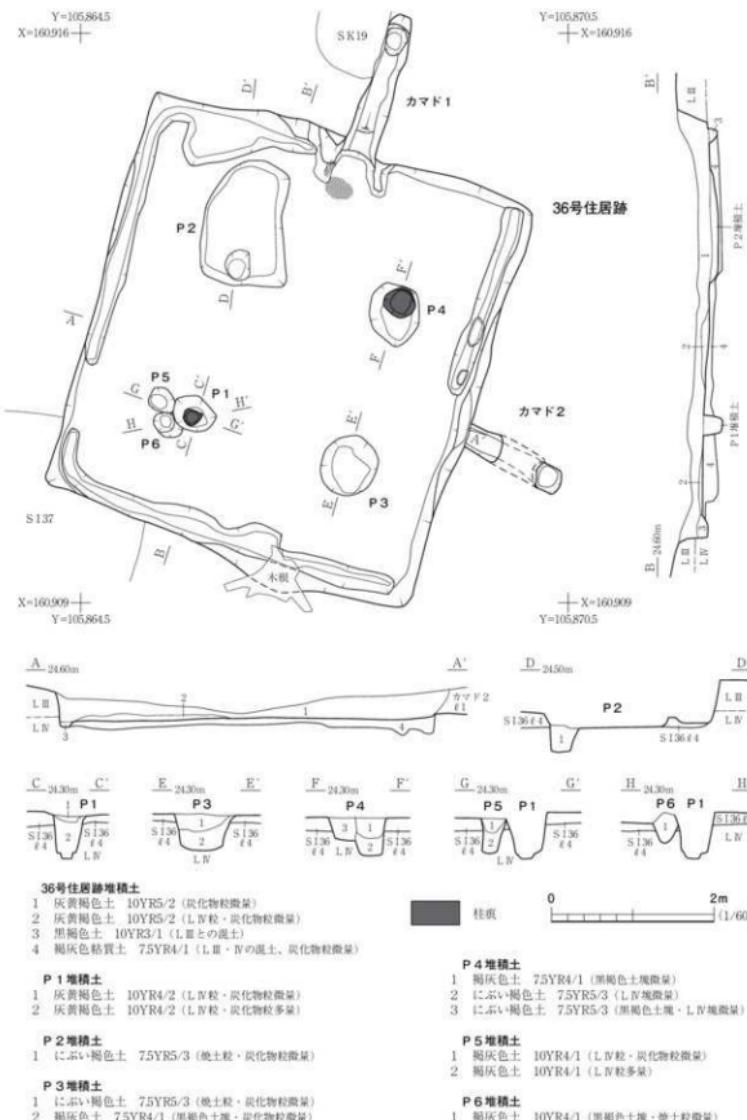


図78 36号住居跡（1）

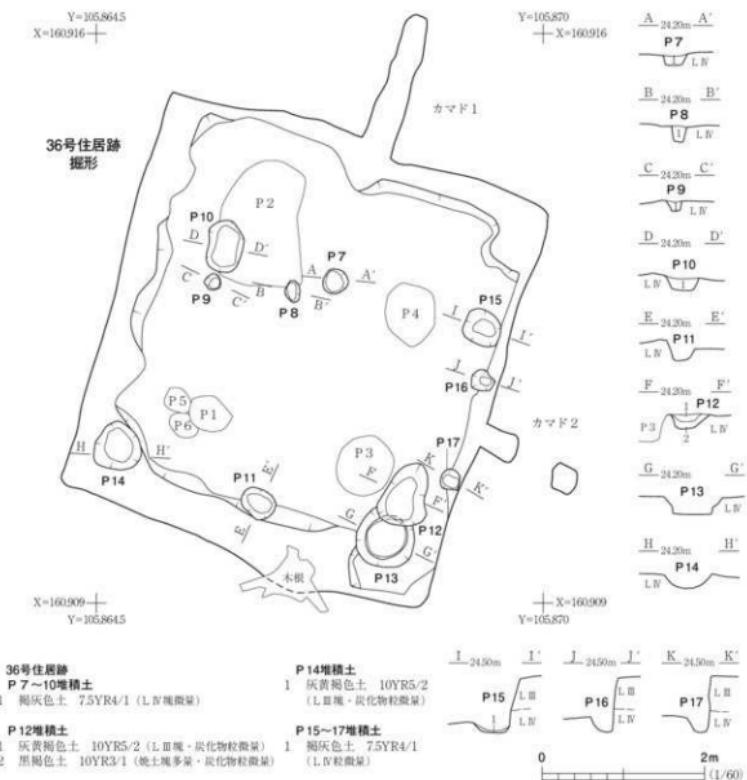


図79 36号住居跡（2）

32cmを測る。P 2の堆積土は焼土粒や炭化物粒を微量に含むにぶい褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。

P 3は住居中央より南東側に位置する柱穴である。平面形は円形で、規模は直径75cm、床面からの深さは最大で44cmを測る。P 3の堆積土は2層に分けられた。ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を微量に含むにぶい褐色土で、P 2の土質に近似する。ℓ 2は黒褐色土塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色土である。いずれも人為堆積土と判断した。

P 4は住居中央より北東側に位置する柱穴である。平面形は楕円形で、北部が一段深く掘り込まれる。規模は直径75cm、床面からの深さは最大で45cmを測る。底面には柱のあたりが認められ、直径は40cmである。P 4の堆積土は3層に分けられた。ℓ 1は黒褐色土塊を微量に含む褐灰色土である。ℓ 2はL.IV塊を微量に含むにぶい褐色土である。ℓ 3は黒褐色土塊やL.IV塊を微量に含む



図80 36号住居跡カマド・出土遺物

にぶい褐色土である。いずれも人為堆積土と判断した。

P 5・6はP 1の西側に隣接して位置する。重複しており、P 5がP 6より新しい。P 5・6は位置や規模から、主柱穴として掘り込んだが、何らかの理由で使用されなかった可能性がある。平面形はいずれも不整形円形である。規模は、P 5は長径が遺存値で34cm、短径29cm、床面からの深さ44cm、P 6は長径が26cm、短径が遺存値で24cm、床面からの深さ37cmである。堆積土はいずれもL IV粒や黒褐色土塊を含む褐灰色土を基調とし、人為堆積土と判断した。

掘形底部で検出されたP 7～17は各所に位置し、規則性はなく性格は不明だが、掘り込み時の掘削痕跡の可能性がある。平面形は円形・方形・不整形形があり、規模は長さ19～81cm、深さは11～20cmである。堆積土は褐灰色土、黒褐色土、灰黄褐色土で、L IVやL III由来の土塊や土粒、焼土塊、炭化物粒などを含んでいる。

遺 物（図80、写真126）

本住居跡からは弥生土器11点、土師器片が229点、須恵器5点、石器・石製品14点、土製品1点が出土した。このうち、土師器4点、須恵器2点、土製品1点を図示した。

カマド1の右袖外側の床面からは、図80-3の土師器の鉢が伏せた状態で出土している。

図80-1は土師器のロクロ成形の杯である。口縁部の小片で、外面にはロクロナデ、内面には黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の杯である。平底で、緩く湾曲しながら立ち上がる。口縁部と体部の境には、わずかに稜を持つ。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。底部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-3・4は土師器の鉢である。いずれも丸底の椀形で、口縁部の内外面にヨコナデが施されている。3は被熱による外面の剥落が著しい。底部の外面にはヘラケズリが施されている。4は薄手で、体部から底部にかけての外面にはヘラナデが施されている。

同図-5・6は須恵器の壺である。5は口縁部片で、口縁端部は外面側に肥厚する。焼成不良で色調は褐色を呈する。6は体部の破片である。胎土は緻密で、外面には黒色の吹き出しが認められる。体部外面には、ヘラ状工具による線状の痕跡が認められる。

同図-7は球形の土製品である。椭円形でユビオサエにより成形している。

ま と め

本住居跡は、北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面に立地する。平面形は正方形基調で、規模は南北で530m、東西で489m、軸方向は重複する37号住居跡と同じである。カマドは2基確認され、東壁から北壁への付け替えがうかがえる。床面からは、一間四方の主柱穴が確認された。P 1と重複するP 5・6はこれより古く、位置も若干ずれることから、主柱穴として掘り込んだが、なんらかの理由で使用されなかった可能性がある。P 2には柱を抜き取った際に貼床を壊し、浅く掘り込んだ痕跡が認められた。本住居跡の所属時期は、ℓ 4から出土した図80-2の土師器杯の特徴から奈良時代、8世紀代と考えられる。

（佐藤）

37号住居跡 S I 37

遺構 (図81、写真68・69)

本住居跡は、調査区北東部のG-17、H-16・17グリッドのL III上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面に立地する。1号塚の封土除去後の検出作業により、黒褐色土を基調とした不整形の範囲として捉えたものの、当初は遺構と認識していなかった。その後、35・36号住居跡の掘削を行った際、周壁に遺構の立ち上がりを確認したため、再度検出作業を行い、黒褐色



図81 37号住居跡

土を基調とした方形の範囲として確認した。1号塚、35・36号住居跡と重複し、本住居跡が古い。本住居跡の周辺の平坦面には31・34～36・44号住居跡が密に分布している。

本住居跡の平面形は方形で、規模は南北で5.05m、東西で4.94mで、検出面から床面までの深さは最大で21cmである。周壁は西側が緩やかに、それ以外は急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 $\ell 1$ は炭化物粒を微量に含む黒褐色土、 $\ell 2$ は砂礫をごく微量に含む灰黄褐色土で、全体を覆う人為堆積土である。 $\ell 3$ は黒褐色土粒を多量に含む褐灰色土で、掘形を埋め、床面とした土である。

床面は平坦で、中央部には炭化物や焼土が分布していた。掘形は、全体を2～6cmほど浅く掘り下げた後、住居隅部や壁ぎわ付近を除き、さらに5cmほど掘り下げている。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット2基(P1・2)を確認した。

ピットの配置に規則性はなく、性格は不明である。いずれも平面形は不整円形で、直径19～27cm、床面からの深さは最大23cmである。堆積土にはLIV塊や炭化物粒を微量に含むことから、人為堆積土と判断している。

遺物(図82、写真126・149)

本住居跡からは弥生土器22点、土師器379点、須恵器1点、石器・石製品が2点出土した。このうち、土師器3点、須恵器1点、弥生土器1点、石器1点を図示した。

図81-1は土師器の杯である。平底で湾曲しながら立ち上がり、口縁端部まで至る。外面にはヨコナデのちヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は土師器のロクロ成形の杯である。平底で緩やかに湾曲しながら立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。外面にはロクロナデ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-3は土師器の甕の口縁部の破片である。口縁端部は外反し、わずかに垂下する。

同図-4は須恵器での高台付杯である。底部の切り離しは静止糸切りである。

同図-5は弥生土器の壺の頸部片と思われる。摩滅が著しいが、わずかに地文が認められる。

同図-6は偏平片刃石斧の未成品である。偏平な楕円形の砾を素材としている。左右両側縁には

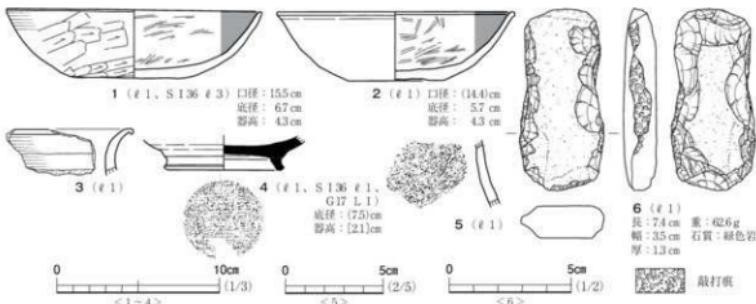


図82 37号住居跡出土遺物

剥離調整ののち、敲打による調整が認められる。

まとめ

本住居跡は北東側丘陵の平坦面に立地する。平面形は方形で、規模は南北で5.05m、東西で4.94mである。1号塚、35・36号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。カマドは認められず、床面からはピットが2基検出されたのみである。本住居跡の所属時期は、遺構の重複関係や図81-1の土師器杯から、奈良時代、8世紀と考えられる。
(佐藤)

38号住居跡 S I 38

遺構(図83、写真70・71)

本住居跡は調査区の北東部、F・G-17グリッドのLⅢ上面で検出された。東側丘陵の頂部西側の縁辺部に立地する。G 17 G P 1と重複し、本住居跡が古い。本住居跡の南東側1mには36号住居跡が、北東側2.5mには39号住居跡が位置し、西側にはピット群が分布している。

LⅢ上面の検出作業で、焼土面を伴う褐色灰色土を基調とした不整形の範囲として確認した。本住居跡の東側は、後世の搅乱により破壊され、検出作業時には床面が露出していた。

本住居跡の平面形は不整形を呈する。西壁は直線的で両隅部は直角だが、東側はいびつになる。本住居跡が掘り込まれた当初は、方形を基調としていた可能性がある。遺存の良好な規模は西壁で3.71m、検出面から床面までの深さは最大で9cmである。

住居内堆積土は、焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐色灰色土の単層である。屋外からの流れ込みと住居機能時の土の混土である。

床面は掘り込んだLⅢを使用し、南側の一部の範囲に、踏み縮まりが認められる。

本住居跡に付属する施設として、床面から炉1基、ピット3基(P 1~3)を確認した。

炉は住居跡の北壁ぎわに位置し、焼土面とこれに伴う掘形によって構成される。焼土面の平面形は不整形である。本来の焼土面は梢円形であったが、南西半部の焼土面を壊して再度、掘形と同様の土で埋めている。焼土面の規模は東西49cm、南北52cm、厚さは最大11cmに及ぶことを断ち割りで確認した。また、断ち割りした断面を観察すると焼土面の下縁に凹凸があることから、焼土面の形成が複数回に及ぶ可能性がある。掘形の平面形は、北東-南西方向に長径を持つ不整梢円形で、規模は長径114cm、短径70cm、床面からの深さは最大で32cmである。炉掘形の堆積土は焼土粒をごく微量に含む灰黄褐色土である。

P 1は炉の東側、40cmに位置する。炉に近く、周壁の一部が焼土化していることから炉に付随する施設の可能性がある。平面形は不整円形で直径38~42cm、床面からの深さは15cmを測る。焼土化は東壁の上端付近にみられ、最大4cmの厚さに及ぶことを断ち割りで確認した。堆積土は2層に分けられ、ℓ 1はLⅣ塊などを微量に含む褐色灰色土で、ℓ 2はLⅢ粒などを微量に含む灰褐色土である。いずれも人為堆積土と判断した。

P 2・3の配置に規則性はなく、性格は不明である。いずれも平面形は不整円形で、直径35~

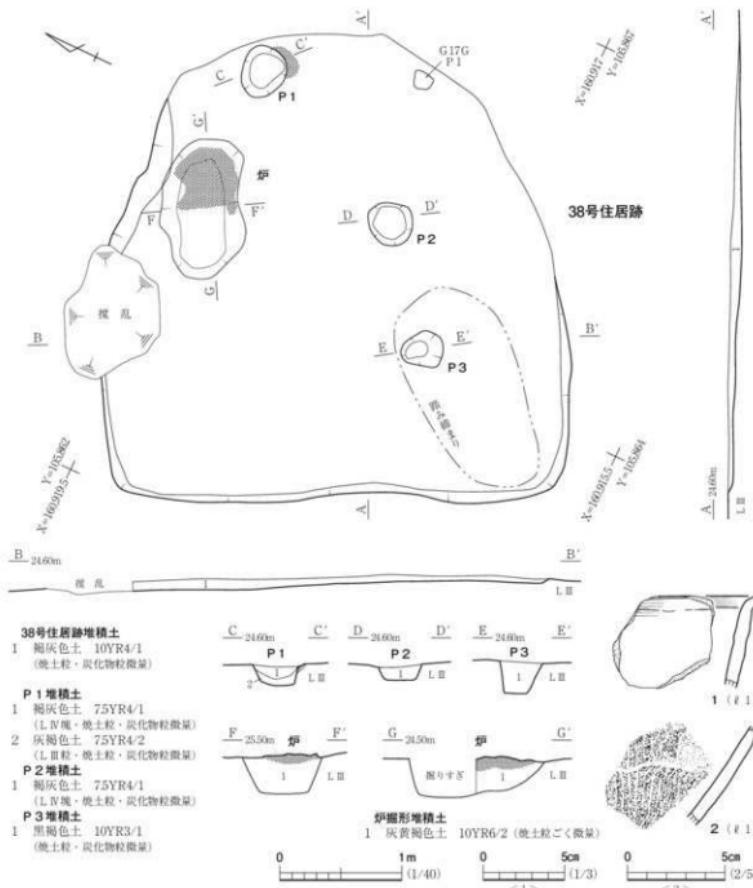


図83 38号居住跡・出土遺物

37cm、床面からの深さは10~26cmである。堆積土はP 2がP 1 ℓ 1と同質の細灰土色、P 3が焼土粒や炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、いずれも人為堆積土と判断した。

遺 物 (図83)

本住居跡からは弥生土器13点、土師器50点、須恵器4点、石器・石製品2点が出土した。このうち、土師器1点、弥生土器1点を図示した。

図83-1は土師器の甕である。体部は急角度で外傾し、口縁部はわずかに外反する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。

同図-2は弥生土器の体部下半で、地文は附加条である。

まとめ

本住居跡は東側丘陵の頂部西側の縁辺部に立地する。遺存状況は不良だが、平面形は方形を基調としていた可能性があり、西壁は3.71mである。床面からは炉が1基確認された。炉は掘形を持ち、焼土面の南西半部は壊されていた。本住居跡の所属時期は、図83-1の土師器の甕から奈良時代、8世紀と考えられる。
(佐藤)

39号住居跡 S I 39

遺構(図84・85、写真72・73)

本住居跡は、調査区東部のF・G-17・18グリッドのⅢ上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面に立地する。48号土坑と重複し、これより古い。

平面形は方形で、規模は東西5.45m、南北5.36mである。ただし、南辺はやや短く4.92mである。壁は西部の残りが最も良く、床面から最大で約46cmが遺存していた。

住居内堆積土は4層に分けられる。層の境がやや上下するもののおおむねレンズ状に堆積することから自然堆積の可能性が高い。

床面は、水平かつ平坦で、貼床が部分的に貼られていた。貼床は、床面の中央部を除いた部分に貼られ、中央部は掘形の底面をそのまま床面としていた。東・西・北部の貼床の範囲は、壁から50~110cmの幅である一方、南部は160~200cmと広い。貼床の厚さは最大20cmほどで、掘形の底面には緩やかな凹凸が認められた。貼床層はⅤとした。

本住居跡に付属する施設として、北壁からカマド1基、床面から壁溝、ピット7基(P1~7)が検出された。

カマドは、北壁の中央よりやや東に寄った位置にある。両袖と煙道、煙出ピットが検出された。規模は、向かって左側の袖が壁から50cm、右袖が60cm、幅は最大105cmである。焼土面は確認されなかった。両袖の先端にはいびつな直方体形に切り出した軟質の凝灰岩が立てられていた。この凝灰岩は貼床に据形を掘ってその下部を埋めていることを断ち割りによって確認した。この他、袖の壁と接する部分にも切り出した凝灰岩が埋め込まれていた。

煙道は壁に対してほぼ直角方向に延び、先端に煙出しピットが掘り込まれる。底面はほぼ水平である。煙出しピットを含めた煙道の長さは140cm、幅は最大で31cm、検出面からの深さは18cmである。

煙出しピットは南北に長い楕円形で、規模は長径46cm、短径35cm、検出面からの深さ33cmで、煙道底面より15cm深い。堆積土は3層からなり、いずれも焼土粒あるいは焼土塊を含んでいた。

壁溝は、カマドがある北壁ぎわの中央部と南壁ぎわのごく一部を除いた部分に掘り込まれている。幅は最大約20cm、床面からの深さは6~10cmである。

7基のピットのうち、P1~3は貯蔵穴と考えられる。P1は北西隅、P2はその東隣の北壁ぎわ、P3は北東隅に位置する。いずれも平面形は楕円形で、規模はP1が長径86cm、短径72cm、床面か

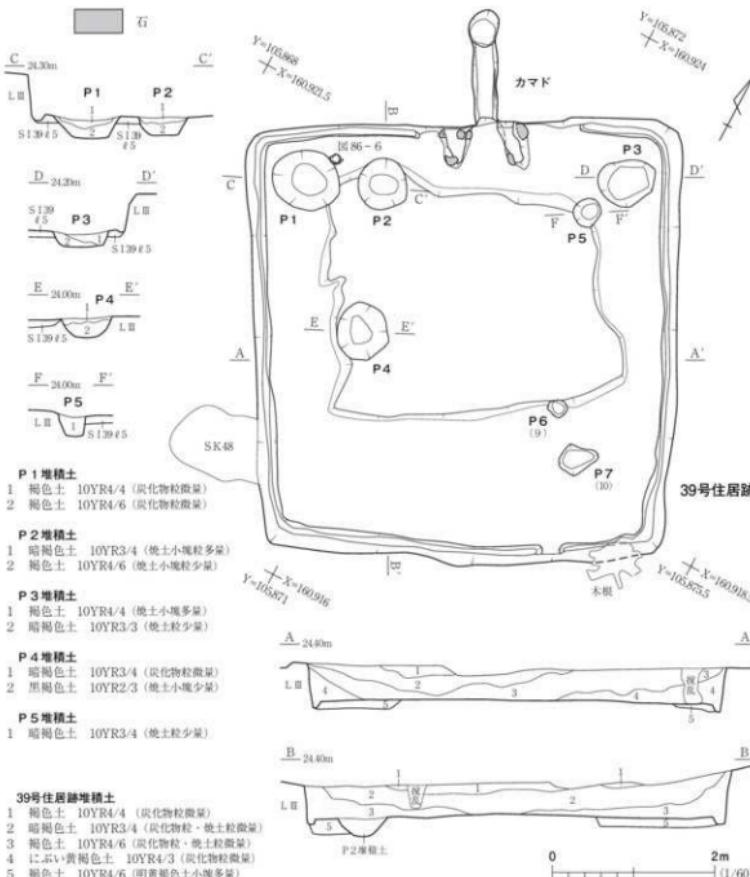


図84 39号住居跡

らの深さ26cm、P2が長径64cm、短径60cm、深さ23cm、P3が長径70cm、短径57cm、深さ17cmである。この他のピットについては床面の各所に位置し、性格などについて明らかにできなかった。

遺 物 (図86、写真127・146・150)

本住居跡からは、弥生土器4点、土師器401点、須恵器16点、石器・石製品15点が出土した。このうち、土師器5点、須恵器4点、石器2点、弥生土器2点を図示した。

P1の東縁からは、図86-6の須恵器高台付杯が底部を下にした状態で出土した。その他比較的多くの遺物が堆積土中から出土した。

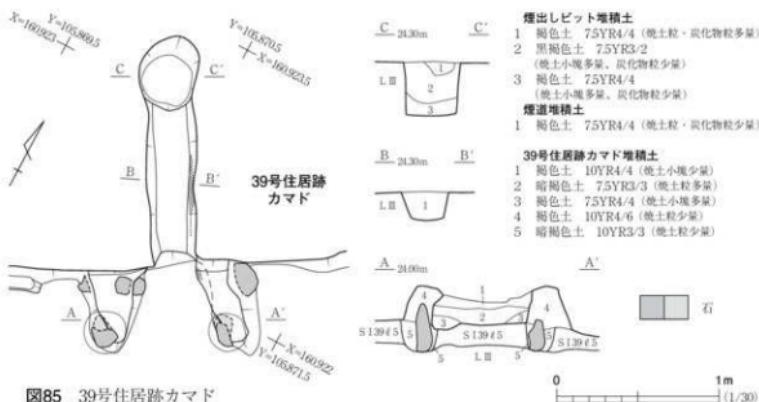


図85 39号住居跡 カマド

図86-1~3は土師器の杯である。1は無段平底で、外面にはヨコナデのちケズリ、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。体部の外面には「×」の線刻が1箇所みられる。2は、有段平底で、底面から体部へは緩やかな屈曲を持って移行する。体部外面にはケズリ、口縁部にはヨコナデ、内面にはヨコナデのち底部付近にミガキ、内面全体には黒色処理が施されている。3は、口縁部の小片で、外面は摩滅し、内面にはミガキと黒色処理が施されている。

同図-4は、「八」字に開く短い脚台を持つ土師器で、器種は高杯と思われる。脚部には内外面に指頭圧痕を残し、杯部の外面にはケズリ、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。

同図-5は、土師器の壺である。長胴の体部に短く外傾する口縁部を持つ。体部の外面にはナデ、口縁部の内外面にはヨコナデ、体部内面には摩滅と剥離があるがわずかにナデが観察され、輪積み痕を残す。体部外面の一部と内面には多くの炭化物が付着する。

同図-6は、須恵器の杯である。平底で、体部から口縁部は直線的に外傾する。内外面にはロクロナデが施され、底部切り離しは回転ヘラ切りである。全体にいびつで、底面の縁辺には重ね焼きによる溶着の剥離痕が一部は破断面のようにみられる。重ね焼きは底部同士を合わせて行ったもののようにある。

同図-7は、須恵器の高台付杯である。平底で、体部から口縁部は直線的に外傾する。高台は短く「八」字に開き、端部は外方にやや突出する。杯部の底部には静止糸切り痕が残る。内外面にはロクロナデが施され、杯部の底部付近には回転ヘラケズリが施されている。

同図-8は、須恵器の蓋である。口縁部付近の小片からの復元である。体部は水平に近く、端部を直角に近い角度でごく短く摘み出す。口縁端部に小さな付着物が溶着する。内外面にはロクロナデが施されている。

同図-9は、須恵器の窯道具と思われる。小片からの復元である。平底から急角度で体部が立ち上がり、口縁端部には内傾する面を持つ。内外面にはロクロナデが、外面の底部から体下部には回

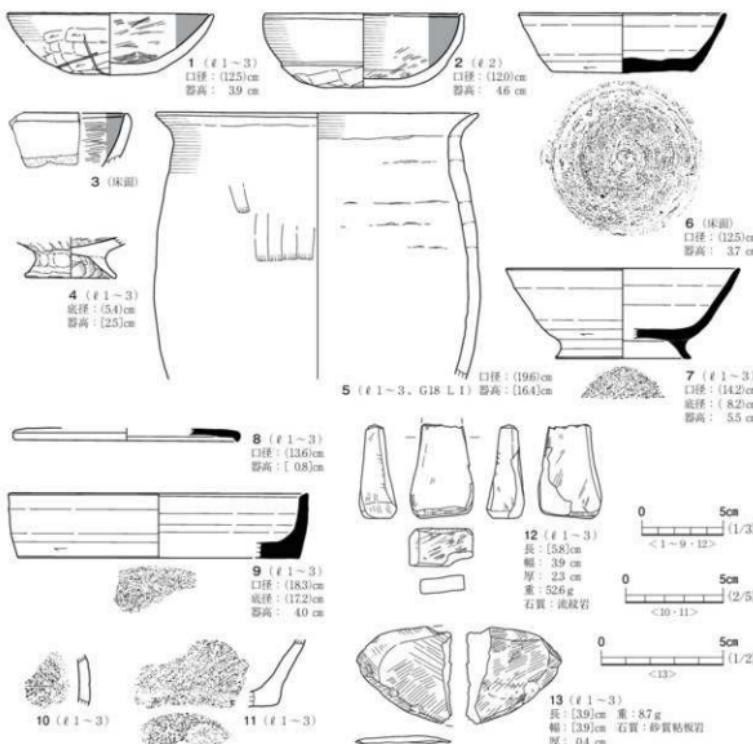


図86 39号住居跡出土遺物

転へラケズリが施されている。

同図-10・11は、弥生土器である。10は幅の狭い平行沈線による重三角文の一部と思われる文様がみられる。11は、底部の小片で、外面に附加条、底面に布压痕がみられる。

同図-12は、砥石である。おおむね直方体で、6面のうち細る側の小口は破断面、反対側の小口は粗く整形され、四側面が砥面として使用される。このことから、この砥石はもと直方体であつたものが砥ぎ減りにより中ほどが細って破断したものの片割れと考えられる。

同図-13は、石庖丁である。片側の端部のみが遺存し、穿孔は確認できない。ごく一部に荒削りによる凹みが残るもの表裏の大部分が磨かれ、峰にはごく狭い平坦な面を、遺存した範囲では刃部を片刃に研ぐ。

まとめ

本住居跡は平面形は方形を基調とし、規模は東西5.45m、南北5.36mである。柱穴は検出されな

かった。北壁にカマドを付す。本住居跡の所属時期は、出土した土器の特徴から、奈良時代の後葉、8世紀後葉と思われる。

(青山)

40号住居跡 S I 40

遺構 (図87・88、写真74・75)

本住居跡は調査区の北東部、F-17グリッドのLⅢ上面で検出された。東側丘陵の頂部西側の緩斜面に立地する。本住居跡と重複する遺構はないが、南東側18mには18号土坑が位置し、周辺にはピットがまばらに分布している。

LⅢ上面の検出作業により、黒褐色土や灰黄褐色土を基調とした正方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は正方形で、規模は東西が3.67m、南北が3.67m、検出面から床面までの深さは最大で44cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は6層に分けられた。 ℓ 1はLⅢ塊を多量に含む黒褐色土で、住居内堆積土上面にできた浅いくぼみを覆う人為堆積土である。 ℓ 2・3はLⅢを由来とする灰黄褐色土で、住居全体を覆う人為堆積土である。 ℓ 4は褐色粘質土で、カマド周辺にのみ堆積していた。 ℓ 5は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 6は褐色土塊や炭化物粒を微量に含む、LVを由來としたにぶい黄橙色砂質土で、掘形を埋め、床面とした貼床土である。

床面は平坦で、部分的に踏み締まりが認められる。床面全体に貼床が貼られる。貼床の厚さは20cmほどで、掘形底面の北東・北西隅付近は溝状や梢円形にわずかにくぼむ。

本住居跡に付属する施設は、カマド1基、床面から壁溝、ピット6基(P1~6)を確認した。

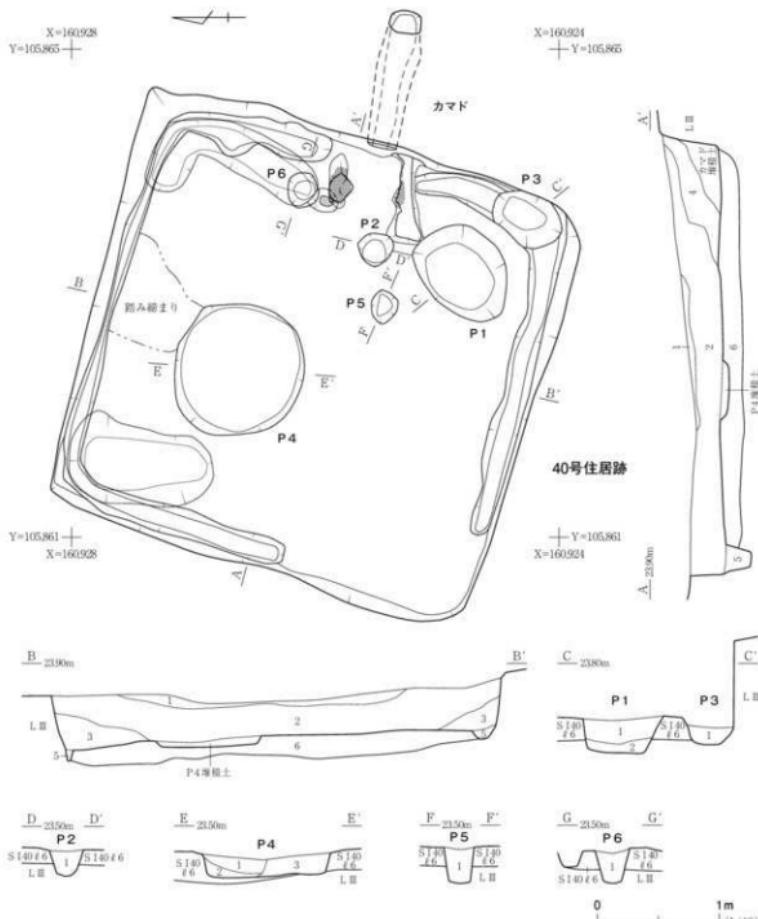
カマドは東壁の中央に位置する。右袖の遺存は良好で、左袖は基部や先端部が壊されている。規模は向かって右側の袖が壁から78cm、左側が遺存値で45cm、カマドの幅は最大で72cmである。両袖の内側は焼土化しており、厚さは右袖が3cm、左袖が14cmである。燃焼部底面に焼土面は認められない。左袖には、構築材とみられる白色粘土が遺存していた。煙道は住居壁面から直角に掘り込まれ、天井が遺存していた。規模は長さ114cm、幅34cmである。煙道天井の一部は焼土化しており、厚さは最大3cmである。底面は煙出しピットに向けて緩やかに下っている。煙出しピットの平面形は隅丸長方形で、規模は長軸26cm、短軸18cm、検出面からの深さは最大で72cmである。

カマドの堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1・2は焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐色土で、斜面上部から煙道に流れ込んだ土と判断した。 ℓ 3は焼土塊を多量に含む暗赤灰色土で、燃焼部の天井崩落土と判断した。 ℓ 4は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、カマド両袖の構築土である。

壁溝はカマド周辺と西隅部を除き検出された。幅は最大34cm、床面からの深さは最大20cmである。

カマド右袖に隣接して検出したP1は、位置と規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は梢円形で、長径87cm、短径65cm、床面からの深さは最大で27cmである。堆積土は2層に分けられ、いずれもLV塊を微量に含む土で、人為堆積土と判断した。

P3は南東隅部に位置する。平面形は梢円形で、規模は長径59cm、短径43cm、床面からの深さ

**40号住居跡堆積土**

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (L.V.塊微量)
- 2 灰黃褐色土 10YR5/2 (細灰色土粒・燒土粒・炭化物粒微量)
- 3 灰黃褐色土 10YR5/2 (細灰色土粒ごく微量)
- 4 細灰色粘質土 10YRA4/1 (L.IIIと細灰色土の混土。桃土粒・炭化物粒微量)
- 5 黑褐色土 10YR3/1 (炭化物粒微量)
- 6 にぶい黄褐色砂質土 10YR6/3 (細灰色土塊・炭化物粒微量)

P 1堆積土

- 1 黑褐色粘質土 10YR3/1 (L.V.塊微量)
- 2 灰黃褐色砂質土 10YR6/2 (L.V.塊微量)

P 2・5・6堆積土

- 1 黑褐色粘質土 10YR3/1 (L.V.塊微量)

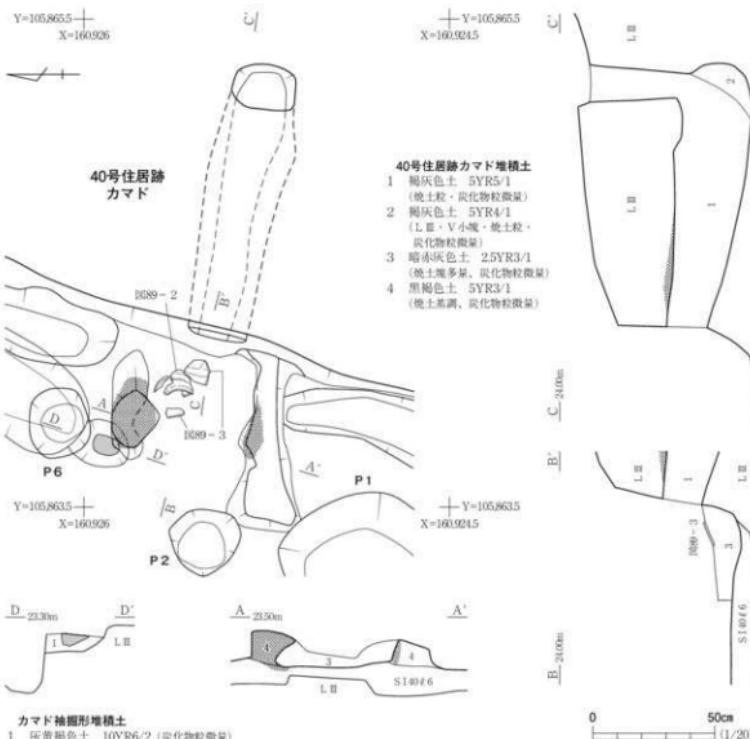
P 3堆積土

- 1 灰褐色砂質土 10YR5/1 (L.V.塊微量)

P 4堆積土

- 1 細灰色土 10YRA4/1 (黑褐色土塊微量)
- 2 灰黃褐色砂質土 10YR6/2 (黑褐色土塊微量)
- 3 黑褐色土 10YR3/1 (砂塊微量)

図87 40号住居跡



カマド袖掘形堆積土

1 灰黃褐色土 10YR6/2 (炭化物粒微量)

図88 40号住居跡 Kamado

は最大で13cmである。堆積土はL.V塊を微量に含む褐灰色粘質土の単層で人為堆積土である。

P.4は住居中央の北側に位置する。平面形はいずれも円形で規模は直径113cm、床面からの深さは最大で18cmである。底面はおおむね平坦である。堆積土は3層に分けられた。ℓ.1は黒褐色土塊を微量に含む褐灰色土、ℓ.2はL.Vを由来とする灰黃褐色砂質土、ℓ.3は砂礫を微量に含む黒褐灰色土である。

P.2・5・6はカマド周辺に位置する。その性格は不明である。平面形はいずれも梢円形で、規模は直径27~30cm、床面からの深さは21~27cmである。堆積土はL.V塊を微量に含む黒褐色粘質土の単層で、人為堆積土である。性格は不明である。

遺物 (図89、写真127・149)

本住居跡からは弥生土器6点、土師器91点、須恵器7点、石器・石製品8点が出土した。このうち、土師器3点、弥生土器3点、石器1点を図示した。

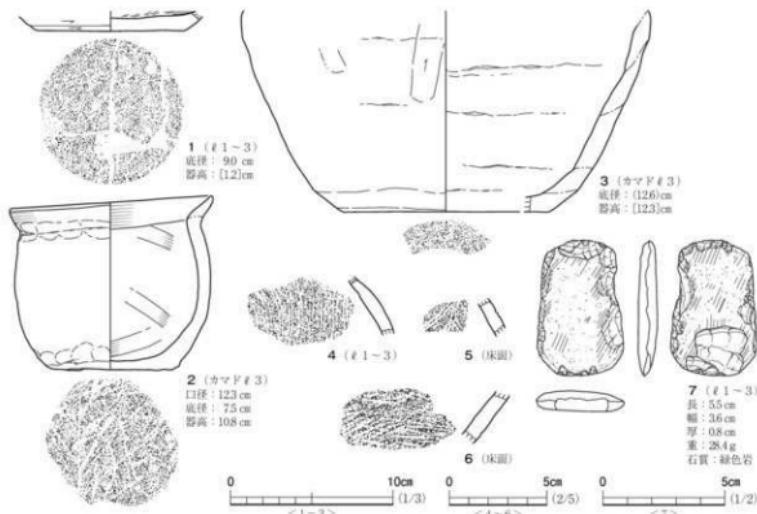


図89 40号住居跡出土遺物

カマド燃焼部の $\ell 3$ 上面からは、図89-2・3の土師器の壺の破片が多く出土している。

図89-1は土師器のロクロ成形の杯である。底部付近のみ遺存し、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の小型の壺である。平底で、体部はわずかに張り、口縁部は短く外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。頸部の外面や底部の周縁は、連続したユビオサエにより整形される。底部には複数枚の葉を敷いたとみられる木葉痕が重なって認められる。

同図-3は土師器の壺である。平底で、外傾しながら立ち上がる。外面には部分的にヘラケズリが施され、内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。底部には木葉痕が認められる。体部外面の一部は被熱により、暗灰色や暗赤灰色となる。

同図-4～6は弥生土器である。4・5は壺の体部上半で、二本同時施文の平行沈線が施されている。4は渦文もしくは同心円文が、5には綾杉文が施されている。6は体部下半で、外面には附加条が施されている。

同図-7は磨製石斧である。偏平な円錐を素材とし、縁辺に剥離調整を加えたのち、研磨が施されている。腹面の刃部側には、研磨より新しい剥離が連続して認められ、使用時に刃こぼれしたものとみられる。

まとめ

本住居跡は、東側丘陵頂部の西側緩斜面に立地し、密集する住居群の北端に位置する。平面形は正方形を基調とし、規模は一辺が3.67mである。カマドは東壁の中央に位置し、左袖には粘土を構

築材として用いている。カマドから向かって右側には貯蔵穴とみられるP 1・P 3が位置する。本住居跡の所属時期は、図89-1のロクロ成形の土師器杯が伴うことから、おおむね平安時代、9世紀前半と考えられる。

(佐藤)

41号住居跡 S I 41

遺構(図90、写真76・77)

本住居跡は調査区の北東部、E-18・19グリッドのL III上面で検出された。東側丘陵の頂部北側の縁辺に立地する。本住居跡と重複する遺構は認められないが、周辺にはピットがまばらに分布している。L III上面の検出作業により、褐色土を基調とした不整形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は不整形である。規模は南北が2.99m、東西が3.14m、検出面から床面までの深さは最大で45cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、北壁と東壁に低い段がとりつく。

住居内堆積土は3層に分けられた。ℓ 1・2は炭化物粒やL V塊を微量に含む褐色粘質土で、ℓ 3は黒褐色土塊を微量に含む灰黄褐色砂質土で、三角堆積を示す。いずれも斜面上部から流れ込んだ土と判断した。

床面はL V上面まで掘り下げられ、砂礫が露出し細かな凹凸が顕著に認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面からピット4基(P 1~4)を確認した。

カマドは北壁の中央に位置する。L Vを掘り残して造られた両袖が遺存している。規模は向かって右側の袖が壁から57cm、左側の袖が65cm、カマドの幅は最大で84cmである。左袖の内側は焼土化しており、厚さ2cmに及ぶことを断ち割りで確認した。燃焼部底面に焼土面は認められない。煙道は住居壁面に対しわずかに東側に向けて掘り込まれる。規模は長さ116cm、幅は遺存値で36cmである。底面は住居側が高く、先端に向けて緩やかに下る。カマドの堆積土は焼土粒や炭化物粒を多量に含む褐色砂質土の単層で、天井崩落土と判断した。

カマド右袖に隣接して検出したP 1は、位置と規模から貯蔵穴と考えられる。平面形は梢円形で、長径46cm、短径34cm、床面からの深さは最大で16cmである。堆積土は焼土粒・炭化物粒を微量に含む、L Vを由来とする灰黄褐色砂質土の単層で、上部からの流れ込みと判断した。

P 2は南壁中央付近の床面に、P 3・4はカマド左袖の西側に位置し、その性格は不明である。平面形は方形や不整円形で、規模は長さ18~28cm、床面からの深さは8~23cmである。堆積土はL IV粒を微量に含むL Vを由来とする灰黄褐色砂質土の単層で、上部からの流れ込みと判断した。

遺物(図91)

本住居跡からは弥生土器3点、土師器21点、石器・石製品1点が出土した。このうち、土師器2点、弥生土器1点を図示した。

図91-1は土師器の杯である。湾曲しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに摘み上げる。口縁部にはヨコナデ、体部にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

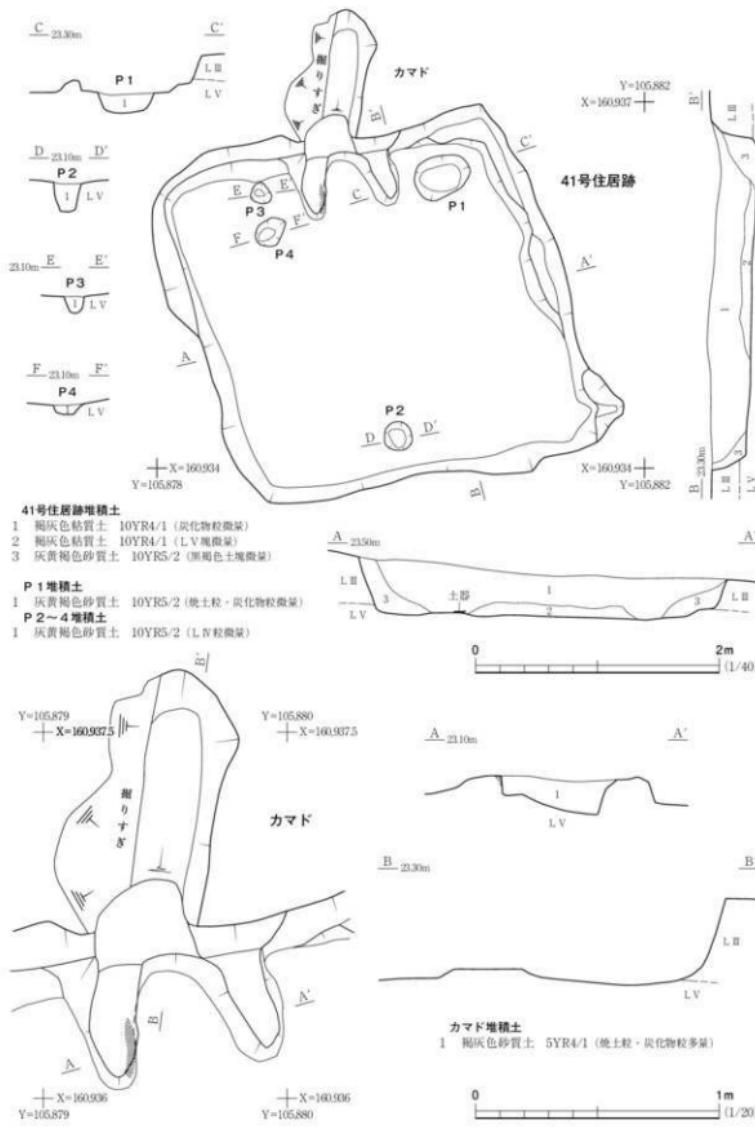


図90 41号住居跡

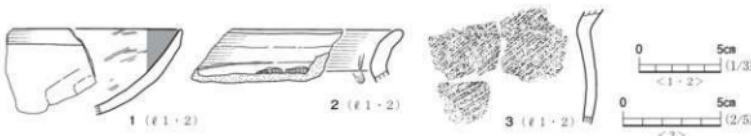


図91 41号住居跡出土遺物

同図-2は土師器甕の口縁部で、わずかに外反する。口縁部の内外面にはヨコナデが施され、外面の頸部より下にはハケメが認められる。

同図-3は弥生土器の甕である。地文は附加条で、頸部付近は無文である。

まとめ

本住居跡は東側丘陵の頂部北側の縁辺に立地し、周辺に住居跡は認められない。平面形は不整方形を基調とし、規模は南北が2.99m、東西が3.14mである。カマドは北壁中央に設けられ、カマド右袖に隣接して貯蔵穴のP1が掘り込まれる。L V上面を床面とし、貼床を持たない点は49号住居跡と共通する。本住居跡の所属時期は出土遺物から、奈良時代、8世紀と考えられる。（佐藤）

42号住居跡 S I 42

遺構（図92、写真78・79）

本住居跡は、調査区東部のH・I-16グリッドのL III上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面の縁辺に立地し、北西に向かって緩やかに下る。本住居跡と重複する遺構はない。

平面形は方形で、規模は、東西2.96m、南北2.76mである。壁は南東隅部の残りが最も良く、床面から最大で51cmが遺存していた。

堆積土は3層に分けられる。堆積土の大部分は小土塊を多量に含むℓ2によって占められ、人为的に埋められたと考えられる。壁ぎわにわずかに堆積するℓ3は壁の崩落による自然堆積である。最上部に堆積するℓ1には小土塊が含まれていないことから、埋められた後、わずかに残ったくぼみに流入した自然堆積層と考えられる。

床面は水平かつ平坦で、貼床は全面に、最大9cmの厚さで貼られていた。掘形の底面には、凹凸が多くみられた。貼床層はℓ4とした。

本住居跡に付属する施設として、東壁からカマド1基、床面からピット2基(P1・2)が検出された。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置する。両袖と煙道、煙出しピットが検出された。規模は、向かって左側の袖が壁から22cm、右袖が60cm、幅は最大67cmである。いずれも袖の内面が焼土化していたものの、カマド底面に焼土化した部分は確認されなかった。

煙道は東壁に対して直角方向から南に約10度傾いて延び、先端に煙出しピットが開口する。煙道は天井が崩落せずにトンネルが遺存していた。トンネルの断面は円形で、底面は煙出しピットに向かって下る緩やかな勾配がある。トンネル内は流入した褐色土や暗褐色土で満たされていた。煙

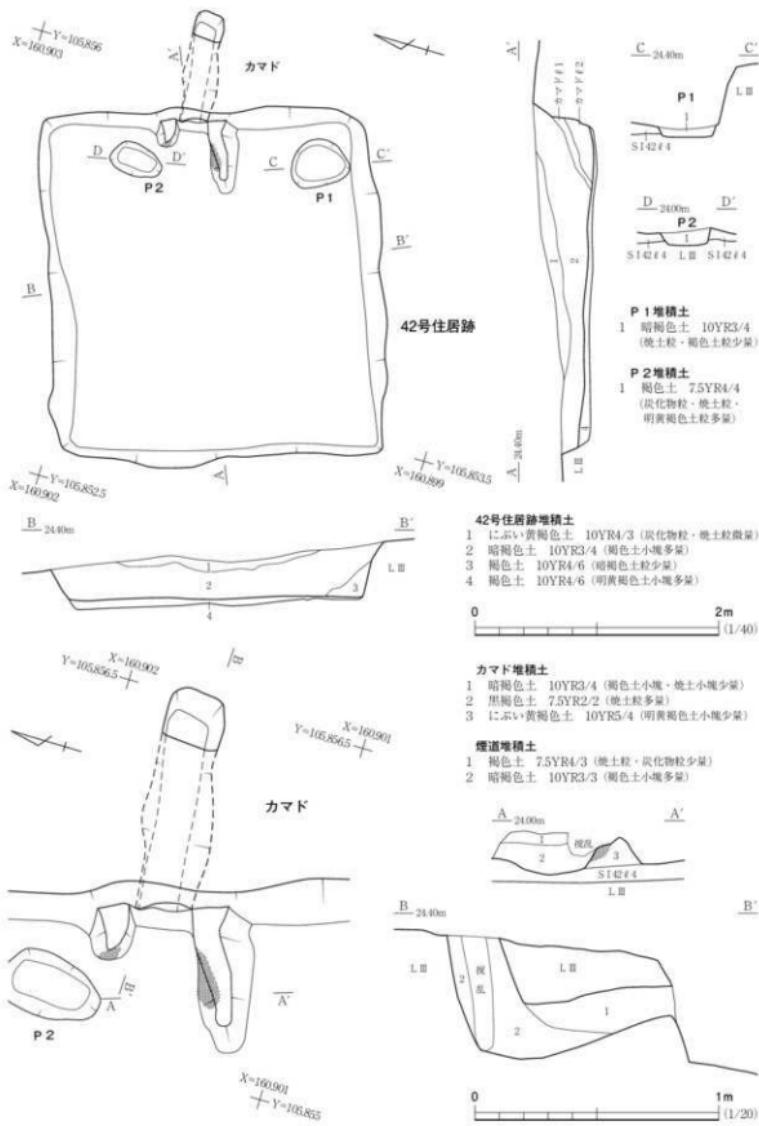


図92 42号住居跡

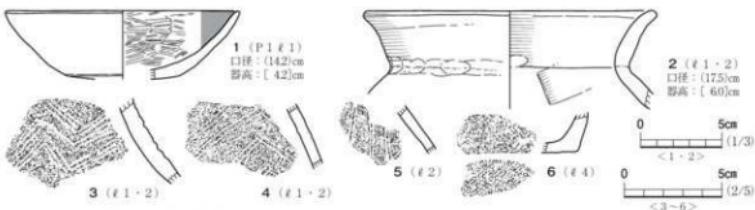


図93 42号住居跡出土遺物

道の規模は煙出しピットを含めた長さが93cm、幅は最大で30cmである。煙出しピットは平面形がいびつな楕円形で、規模は長径25cm、短径22cm、検出面からの深さ51cmである。煙道・煙出しピットの堆積土は2層からなり、P1には焼土粒と炭化物粒が、P2には小土塊を含む。

2基のピットは、いずれも貯蔵穴と考えられる。これらをP1・2とした。P1は南東隅、P2は東壁ぎわのカマド北側に位置し、平面形はいずれも南北に長い不整楕円形である。規模は、P1が、長径48cm、短径38cm、床面からの深さ9cm、P2が、長径44cm、短径26cm、床面からの深さ13cmである。

遺 物 (図93、写真128)

本住居跡からは、弥生土器4点、土師器87点、石器・石製品5点が出土した。このうち、土師器2点、弥生土器4点を図示した。

P1の堆積土から図93-1の土師器杯が出土した他、床面からは遺物は出土しなかった。堆積土中からは少量の遺物が出土した。

図93-1は土師器の杯である。無段平底で、摩滅が激しいものの外面にはケズリ、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は土師器の壺である。口縁部付近の破片からの復元である。口縁部は緩やかに外反し、内外面にはヨコナデ、体部内面にはヘラナデが施されている。

同図-3~6は弥生土器である。3は壺の体上部から頸部にかけての破片で、三本同時施文具により重山形文を描く。4は壺の体部片で、平行沈線により重山形文もしくは重菱形文を描く。5は壺の頸部の破片で、平行沈線により3条の垂線を描く。6は底部片で、底面に布压痕がみられる。

ま と め

本住居跡は、平面形が方形を基調とし、規模は東西296m、南北276mである。柱穴は検出されなかった。東壁にカマドを付す。本住居跡の所属時期は、出土した土器の特徴から、奈良時代の後葉、8世紀後葉と思われる。

(青山)

43号住居跡 S I 43

遺 構 (図94・95、写真80・81)

本住居跡は、調査区の東部、H・I-16・17グリッドのL III上面で検出された。北東方向に延

びる丘陵頂部の平坦面に立地する。本住居跡は17号土坑やH 16 G P 3と重複し、いずれの遺構よりも古い。本住居跡の北西側に隣接して42号住居跡が位置している。

L III上面の検出作業時は斑状に炭化物が分布する範囲として確認され、住居跡とは認識していないかった。しかし、17号土坑の掘り込みを行った際、本住居跡の周壁と壁溝を確認したことから、再度検出作業を行い、褐灰色粘土を基調とした長方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は、東西方向に長軸を持つ長方形である。規模は東西で4.16m、南北で3.39m、検出面から床面までの深さは最大で29cmである。周壁は南壁が緩やかな角度で、それ以外の壁は急な角度で立ち上がる。住居東隅部付近の壁面には小さな段が認められる。

床面には貼床が全面に水平かつ平坦に貼られ、縫まりが認められる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はL IV塊を多量、炭化物粒を微量に含む褐灰色粘土である。L IIIを由来とする土で住居内堆積土の大部分を占める。地山土を由来とした土塊を含むことから、人為堆積土である。 ℓ 2はL IV塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色粘質土で、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 3は黒褐色土塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色粘質土で、貼床である。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット4基(P 1～4)、掘形の底面からピット4基(P 5～8)を確認した。

カマドは東壁の中央に設けられる。両袖と煙道が遺存していた。両袖は住居壁に対し直角に築かれている。右袖の先端部は「J」字状となり、掛け口付近の構築土である。規模は右袖が長さ92cm、幅21cm、床面からの高さ7cmである。左袖は長さ53cm、幅が27cm、床面からの高さ18cmである。両袖とも褐灰色土で構築される。なお、燃焼部を掘り込むP 4は、カマド堆積土 ℓ 1が堆積している状況から、カマドに伴う施設ではなくカマドを壊した際の掘削痕と判断している。

煙道は住居壁から直角に掘り込まれ、一部は天井が遺存している。規模は長さ126cm、幅31cm、遺存が良好な部分の底面から天井までの高さは、14cmである。煙道の燃焼部側の底部や天井部は焼土化し、その厚さは最大2cmに及ぶことを断ち割りで確認した。底面は先端の煙出しピットに向けて低くなる。煙出しピットは不整円形で、規模は直径36cm、床面からの深さは46cmである。

カマドの堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を多量に含む黒褐色土で、カマド天井崩落土や屋外からの流入土の混土である。 ℓ 2は黒褐色土粒を微量に含む灰黃褐色土である。燃焼部の底部や左袖の内側の一部に斑状に堆積している。カマドを補修した土の可能性がある。 ℓ 3は焼土粒を微量に含む黒褐色炭層で、煙出しピット底面周辺にのみ堆積している。カマド機能時に堆積した可能性がある。 ℓ 4は焼土粒を微量に含む褐灰色土で、両袖の構築土である。

壁溝は、カマドやP 2がある東壁や東隅部付近を除いて全周に掘り込まれる。細長い溝状を基調とし、幅は20cm、床面からの深さは最大で16cmを測る。

カマド右袖の東側に隣接して位置するP 1は、位置や規模から貯藏穴と考えられる。平面形は長椭円形で、規模は長径94cm、短径62cm、床面からの深さは最大で19cmを測る。P 1の堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はL IV塊や炭化物粒を微量に含む灰褐色土である。 ℓ 2は炭化物粒や焼土粒

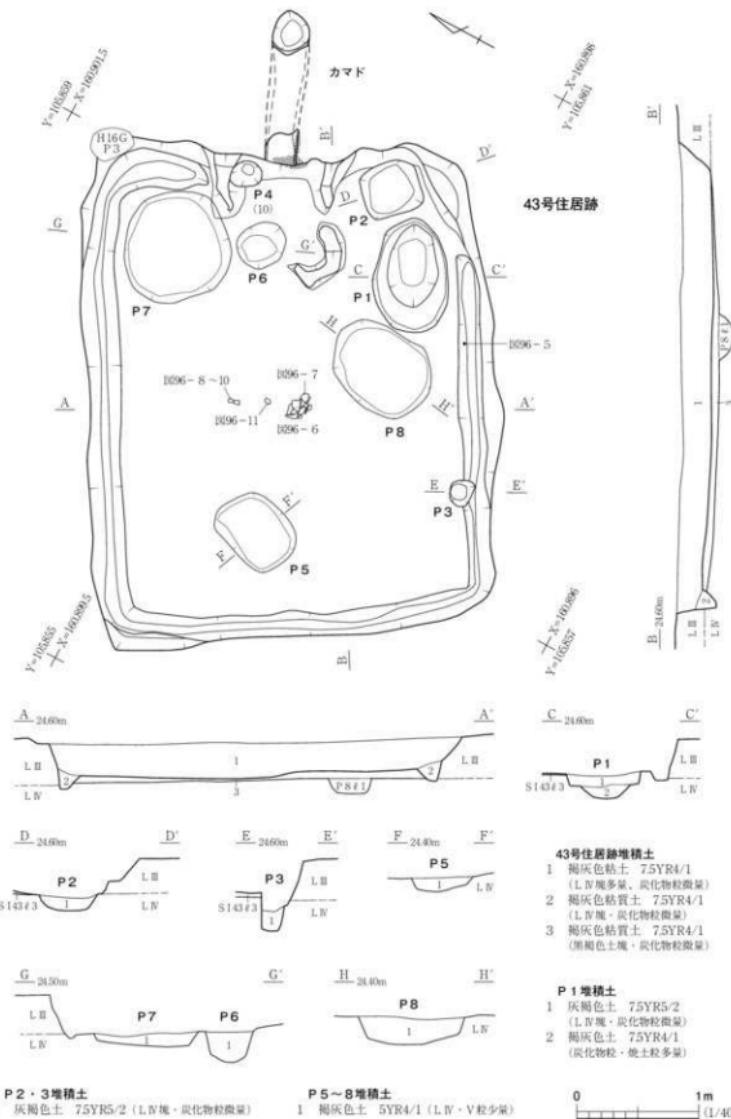


図94 43号住居跡

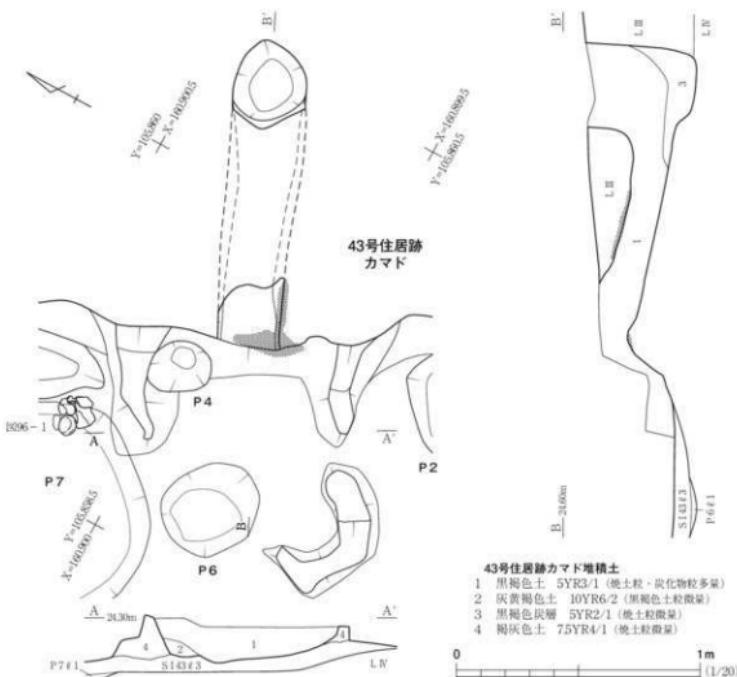


図95 43号住居跡カマド

を多量に含む褐灰色土である。いずれもカマドの残滓を由来とする堆積である。

カマド右袖と住居東隅の間に位置するP2は、P1と同様に貯蔵穴と考えられる。平面形は隅丸方形で、規模は一辺48cm、床面からの深さは最大で11cmを測る。P2の堆積土はLIV塊や炭化物粒を微量に含む灰褐色土で、人為堆積土である。P3の堆積土と同質である。

P3は住居南壁ぎわの南西側に位置するビットで、位置や規模から壁柱穴の可能性がある。住居の南壁溝の一部を掘り込んでいる。平面形は不整円形で、規模は直径19cm、床面からの深さは最大で30cmを測る。P3の堆積土は、P2の堆積土と同質の人為堆積土である。

P5～8は、貼床下の各所にあって配置や深さに規則性が認められず、その性格は不明である。平面形は円形や楕円形で、規模はP6が直径41cm、深さは25cmである。P5・7・8の規模は長径65～92cm、短径50～88cm、深さは11～22cmである。堆積土はLIV・V粒を少量に含む褐灰色土で、貼床土とは性状の異なる人為堆積土である。

遺 物 (図96、写真128・146)

本住居跡からは土師器225点、須恵器2点、石器・石製品1点、鉄製品4点が出土した。このう

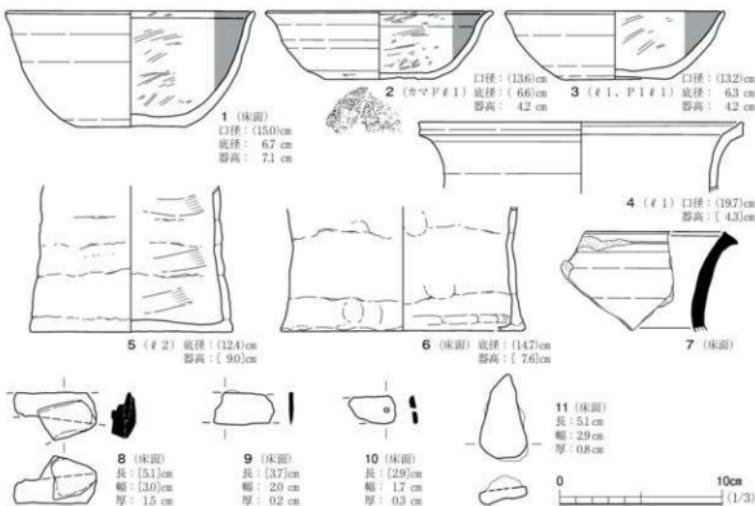


図96 43号住居跡出土遺物

ち、土師器6点、須恵器1点、鉄製品4点を図示した。

住居中央部の床面からは、図96-6の筒形土器や、同図-8~11の鉄製品の破片がまとまって出土している。また、壁溝中から同図-5の筒形土器が、カマド左袖の外側の床面からは、同図-1の土師器の杯が割れた状態で出土している。

図96-1~3は土師器のロクロ成形の杯である。いずれも外面にはロクロナデ、内面にはヘラミガキのうち、黒色処理が施されている。1は平底の深身で、口縁端部でわずかに外反する。2は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部で強く外反する。体部下端付近には、回転ヘラケズリによる再調整が施されている。底部切り離しは回転糸切りである。3は平底で直線的に立ち上がる。

同図-4は土師器の壺である。口縁部から頸部にかけての破片で、頸部は外反し、口縁部で湾曲しながら端部は上方に摘み出される。内外面にはロクロナデが施されている。

同図-5・6は筒形土器で、体部はわずかに内傾しながら立ち上がる。内外面には粘土紐の積み上げ痕が認められる。

同図-7は須恵器の壺の口縁部である。頸部は外反し、口縁端部は上方と側方に摘み出される。

同図-8~11は鉄製品である。8~10は刀子の可能性がある。8は3つの小片が接着している。9は刃部の小片で、10には穿孔が認められる。11は不明鉄製品とした。不整三角形を呈し、断面形は偏平な長方形である。

まとめ

本住居跡は北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地する。平面形は長方形で、規模は長軸の東

西で4.16m、短軸の南北で3.39mである。カマドは東壁の中央に位置し、煙道の天井が部分的に遺存していた。床面中央からは、鉄製品の刀子や筒形土器が出土している。本住居跡の所属時期は出土遺物から平安時代、9世紀前半頃と考えられる。

(佐藤)

44号住居跡 S I 44

遺構(図97、写真82)

本住居跡は、調査区東部のH-16グリッドのLIII上面で検出された。北東方向に延びる丘陵の頂部の平坦面の縁辺に立地し、北西に向かって緩やかに下る。本住居跡と重複する遺構はない。

平面形は不整長方形で、規模は、東西262m、南北3.28mである。壁は斜面の南東隅の残りが最も良く、床面から最大で28cmが遺存していた。壁と床面との境は不明瞭で、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられる。レンズ状で自然堆積と思われる。

床面は斜面下方に向かう下り傾斜で、緩やかな凹凸がみられる。貼床は施されていない。

本住居跡に付属する施設として、床面の東部から2基のピット(P1・P2)が検出された。

P1・P2は平面形が不整橢円形で、規模は長径22~30cm、短径18~27cm、床面からの深さ13~



図97 44号住居跡・出土遺物

15cmである。いずれも性格は不明である。

遺物(図97)

本住居跡からは、弥生土器 1 点、土師器 9 点、石器 1 点が出土した。このうち弥生土器 1 点を図示した。床面に伴う遺物ではなく、堆積土から少量の遺物が出土した。

図97-1は弥生土器の表の体部片で、外面に撲糸文が施され、一部に炭化物が付着する。

まとめ

本住居跡は、不整長方形の平面形を持った遺構で、規模は東西2.62m、南北3.28mである。遺物は堆積土から少量の弥生土器片などが出土した。床面からは2基のピットが検出されたのみで、炉などは確認されず、住居跡であることを示す積極的な根拠には乏しいものの、当地域で確認される弥生時代の住居跡と、規模や形態が類似することから、本遺構を住居跡とした。所属時期を決める根拠にも乏しいが、本遺跡から出土している弥生土器がいわずも桜井式から天神原式のものであることから、弥生時代中期後葉に位置づけられる。

(青山)

45号住居跡 S I 45

遺構 (図98、写真83)

本住居跡は調査区の中央部、H・I-10・11グリッドのLⅢ上面で検出した。丘陵頂部の縁辺部に立地する。本住居跡と重複する遺構は認められない。本住居跡の東側には隣接して46号住居跡が位置する。LⅢ上面の検出作業により、褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。

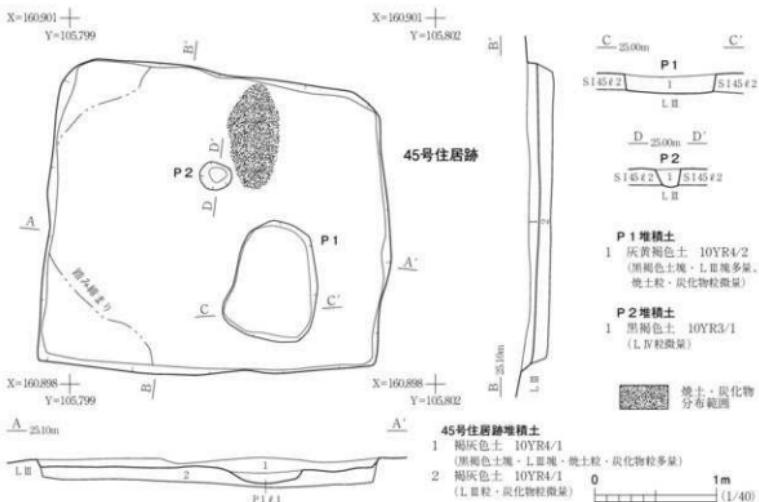


図98 45号住居跡

本住居跡の平面形は方形で、規模は南北で254m、東西で281m、検出面から床面までの深さは、最大で13cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土塊・L III塊・焼土粒・炭化物粒を多量に含む褐灰色土で、本住居跡全体に堆積しており、土質の性状から人為堆積土と判断した。 ℓ 2はL III粒や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、貼床土である。

床面は平坦であり、貼床が全面に認められる。踏み締まりは北西隅部や南西隅部を除き、ほぼ全面に認められる。P 2の東側に隣接して、焼土・炭化物が帯状に薄く分布していた。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット2基(P 1・2)を確認した。

P 1は住居中央より南東側に位置する。平面形は不整長方形で、規模は長軸100cm、短軸75cm、床面からの深さは14cmである。周壁は急な角度で立ち上がる。P 1の堆積土は黒褐色土塊・L III塊を多量に、焼土粒や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。

P 2は住居中央よりわずかに北側に位置する。P 2の平面形は楕円形で、規模は直径26cm、床面からの深さは最大で15cmを測る。周壁は急角度で立ち上がる。堆積土はL IV粒を微量に含む黒褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。

本住居跡からは土師器が9点、須恵器が5点、石器・石製品が1点出土したが、いずれも小片で図示していない。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の縁辺部に立地する。平面形は方形基調で、規模は南北で254m、東西で281mである。南北に軸方向を持ち、カマドがなく床面の踏み締まりや貼床が認められない点は、17号住居跡と共に通る。本住居跡の所属時期は、良好な出土遺物がなく不明である。(佐藤)

46号住居跡 S I 46

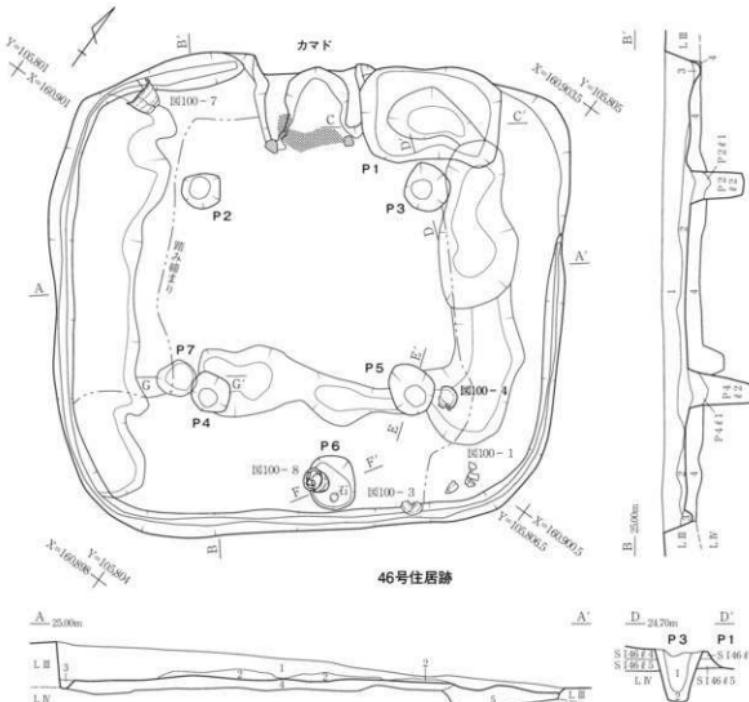
遺構(図99・100、写真84・85)

本住居跡は調査区の中央部、H・I-11グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部の北側縁辺部に立地する。本住居跡と重複する遺構は認められない。南西側には隣接して45号住居跡が位置している。L III上面の検出作業中に、褐灰色土を基調とした隅丸方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北で3.97m、東西で4.25m、検出面から床面までの深さは、最大で30cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1はL III粒・焼土粒・炭化物粒を多量に含む褐灰色土で、住居内堆積土の大部分を占める。土質から人為堆積土とした。 ℓ 2は炭化物を基調とする黒褐色土で、L III粒や焼土粒を多量に含み、床面上に斑状に堆積している。 ℓ 3はL III粒・焼土粒・炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 4はL IV粒や黒褐色土粒を多量含む灰黄褐色粘質土、 ℓ 5はL IV粒を微量に含む黒褐色土と褐灰色土の混合土で、いずれも貼床である。

床面には貼床が全面に水平かつ平坦に貼られている。床面はカマドから南壁にかけて幅約240cm



46号住居跡

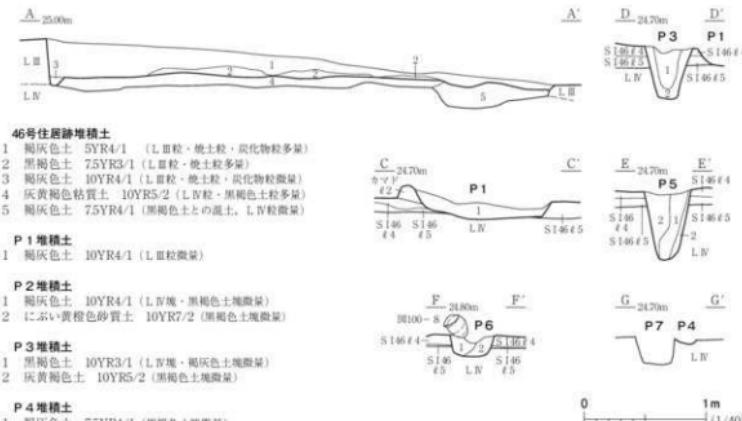


図99 46号住居跡

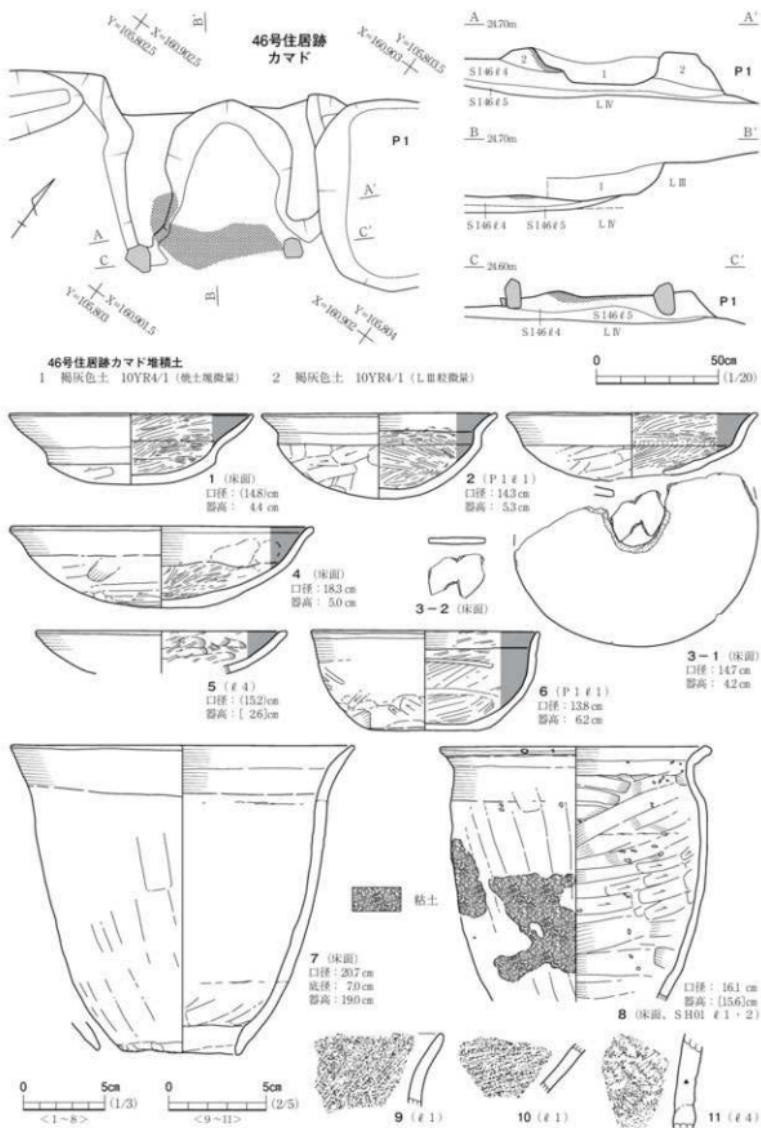


図100 46号住居跡カマド・出土遺物

の範囲で、顕著な踏み締まりが認められる。東壁や西壁ぎわの床面は踏み締まりが弱い傾向がある。貼床の下には、「コ」字状となる連続した浅い掘り込みが認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット6基(P 1~6)、貼床の下からピット1基(P 7)を確認した。

カマドは北壁の中央に設けられている。右袖の一部はP 1の掘り込みにより壊されている。煙道はカマドの外側を精査したが確認できなかった。両袖は褐灰色土で構築され、先端には焚口の構築材とみられる白色粘土が配置されている。両袖は住居の壁に対し直角に築かれる。右袖は長さ58cm、幅が遺存値で29cm、高さ15cmである。左袖は長さ62cm、幅40cm、高さ6cmである。カマドの幅は遺存値で92cmである。焼土面は両袖先端を結ぶ線上に位置する。左袖の内側まで焼土化した範囲が及んでいる。焼土面の平面形は不整長方形で、規模は長軸54cm、短軸14cm、最大4cmの厚さで焼土化した範囲が及ぶことを確認した。

カマドの堆積土は2層に分けられた。ℓ 1は焼土塊を微量に含む褐灰色土で、住居内堆積土ℓ 1と燃焼部天井の崩落した土の混合土である。ℓ 2はL III粒を微量に含む褐灰色土で、両袖の構築土である。

壁溝はカマド、P 1の周辺を除いた壁ぎわに認められる。細長い溝状を基調とし、幅は23cm、床面からの深さは最大で14cmである。

カマド右袖に隣接して位置するP 1は、位置や規模から貯蔵穴と判断した。住居北壁やカマド右袖の一部を掘り込んでいる。平面形は不整隅丸長方形で、規模は長軸116cm、短軸75cm、床面からの深さは最大で14cmを測る。周壁はカマドに隣接する西側は緩やかに、それ以外は急な角度で立ち上がる。底面は平坦を基調とするが、細かい凹凸が認められる。堆積土はL III粒を微量に含む褐灰色土の単層で、住居内堆積土のℓ 1と近似する人為堆積土である。

P 2~5は四隅を結ぶ対角線上に1間四方に配置される。位置と深さから主柱穴と考えられる。平面形は不整円形で、規模は直径32~43cm、床面からの深さは40~53cmである。堆積土は褐灰色土や黒褐色土を基調とし、地山を由来とする土塊を含む。

P 6は南壁ぎわの中央に位置する。その性格は不明である。平面形は方形で、規模は一辺44cm、床面からの深さは最大で18cmを測る。P 6の堆積土は2層に分けられた。ℓ 1は褐灰色土塊を微量に含む黒褐色土である。ℓ 2は黒褐色土塊を微量に含むぶい黄橙色土である。いずれにも土塊を含むことから人為堆積土と判断している。

P 7は貼床の下から確認され、その性格は不明である。東隅部はP 4の掘り込みにより破壊されている。平面形は不整円形で、規模は直径30cm、深さは22cmである。堆積土は住居内堆積土ℓ 4と同質で、人為堆積土と判断した。

遺物(図100、写真128・129)

本住居跡からは縄文土器1点、弥生土器10点、土師器217点、陶磁器2点、石器・石製品2点が出土した。このうち、土師器8点、弥生土器2点、縄文土器1点を図示した。

住居東隅部やP 5付近の床面からは、図100-1・3・4の土師器の杯が出土している。3-1は底部を打ち欠き、その底部とみられる3-2を元の箇所に戻した上で床面に置いている。

住居西壁ぎわの床面や壁溝の上からは、同図-7の土師器の瓶が壁面に立て掛けられるように出土している。P 6のℓ 1・2の上面からは、同図-8の土師器の壺が斜位で出土している。カマドに掛けていた壺をP 6に置いた可能性がある。

図100-1~6は土師器の杯である。1~3は体部の外外面に強い棱を持ち、口縁部は外反する。口縁部がヨコナデ、体部下半から底部にかけての外面にはヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキのち、黒色処理が施されている。3の底部は穿孔されている。4は丸底で湾曲しながら立ち上がり、口縁端部で外反する。口縁部の外外面には、ヨコナデが施されている。底部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち、黒色処理が施されている。5は皿形で、体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲し、口縁端部はわずかに肥厚する。外面にはヨコナデ、内面には横位のユビナデのち、まばらなヘラミガキが施されている。6は椀形の平底で、体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外傾する。内外面の口縁部にはヨコナデが施されている。体部から底部にかけての外面にはヘラケズリ、ユビナデが、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

同図-7は土師器の瓶である。体部は急な角度で外傾し、口縁部は外反する。口縁部の外外面にはヨコナデ、体部にはヘラケズリが施されている。下端部は連続したユビオサエが認められる。

同図-8は壺である。長胴で、肩部から内傾しながら頸部に至り、口縁部は強く外反する。外面には口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部にはヘラケズリが施されている。体部外面にはカマドに設置した際の粘土が帶状に付着している。内面には口縁部がヨコナデ、体部は横位を基調とするユビナデ及びヘラケズリが丁寧に施されている。内外面には、2~5mm大の楕円形の圧痕が多く認められる。

同図-9・10は弥生土器である。9は壺の口縁部で、地文は附加条、10は体部の小片で、地文は附加条である。11は縄文土器の深鉢である。外面には羽状縄文が施され、胎土には纖維を含む。

まとめ

本住居跡は丘陵頂部の北側縁辺部に立地する。平面形は隅丸方形基調で、規模は南北で3.97m、東西で4.25mである。床面やピットからは土師器の杯や瓶、壺がまとまって出土している。カマドは北壁中央に設けられ、右袖に近接して貯藏穴とみられるP 1がある。本住居跡の所属時期は、床面から出土した土師器の特徴から古墳時代後期、6世紀中葉～後葉と考えられる。 (佐藤)

47号住居跡 S I 47

遺構 (図101・102、写真86・87)

本住居跡は調査区の北西部、H-5・6グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵西側の緩斜面の中位に立地する。重複する遺構はないが、北西側の斜面下方約2mには、30号住居跡や1号烟跡が位置する。

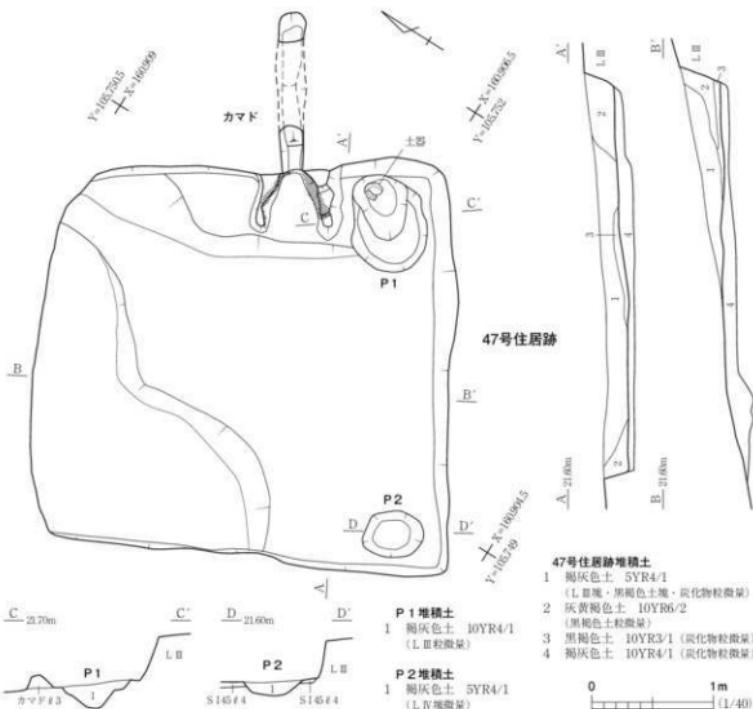


図101 47号住居跡

検出作業時は、褐灰色土を基調とした方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は正方形を基調とするが、壁は西壁のみ直線的ではない。規模は南北で3.43m、東西で3.41m、検出面から床面までの深さは、最大で30cmを測る。周壁は斜面上部の東壁が急角度で立ち上がり、斜面下位の西壁は流失し、遺存していない。

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1はL.III塊・黒褐色土塊・炭化物粒を微量に含む褐灰色土である。L.IIは由来とする土で住居全体を覆う人為堆積土である。 ℓ 2は黒褐色土粒を微量に含む灰黄褐色土で、南東隅周辺を覆う人為堆積土である。 ℓ 3は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、床面直上に斑状に堆積している。 ℓ 4は炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、貼床である。

床面は平坦かつ水平に整えられる。全面に貼床が認められ、掘形底部は住居西隅部に向け深くなる。床面から掘形底面までの深さは最大で21cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面からピット2基(P.1・2)を確認した。

カマドは北壁の中央に設けられる。カマドの両袖は壁から直角に構築される。規模は右袖が長さ

58cm、幅29cm、高さ16cmで、左袖が長さ48cm、幅22cm、高さ11cmである。カマドの幅は76cmである。両袖の内側上部は焼土化し、断ち割りによって確認した焼土化の厚さは最大3cmに及ぶ。煙道は壁に対して直角に延び、一部は天井が遺存している。規模は長さ128cm、幅は24cmで、トンネルの高さは最大29cmである。煙道は先端に向かって径が大きくなる。煙出しピットの平面形は隅丸方形で、規模は長軸24cm、検出面からの深さは31cmである。壁面は急な角度で立ち上がる。

カマド内の堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は褐灰色土で黒褐色土塊とL IV塊との混土である。燃焼部の上面や煙道を覆う人為堆積土である。 ℓ 2は焼土粒や炭化物粒を多量に含む黒褐色土で、燃焼部にのみ堆積している。燃焼部天井の崩落土と考えられる。 ℓ 3は灰黄褐色土を基調とし、カマド両袖の構築土である。

カマド右袖と住居東隅部の間に位置するP 1は、位置や規模から貯蔵穴と判断した。平面形は梢円形で、規模は長径80cm、短径63cm、床面からの深さは最大で19cmを測る。北東側は1段低くなる。堆積土はL III粒を微量に含む褐灰色土で、人為堆積土と判断した。

P 2は南隅部に位置する。平面形は梢円形で、規模は長径50cm、短径38cm、床面からの深さは最大で11cmを測る。堆積土はL IV塊を微量に含む褐灰色土で、人為堆積土と判断した。

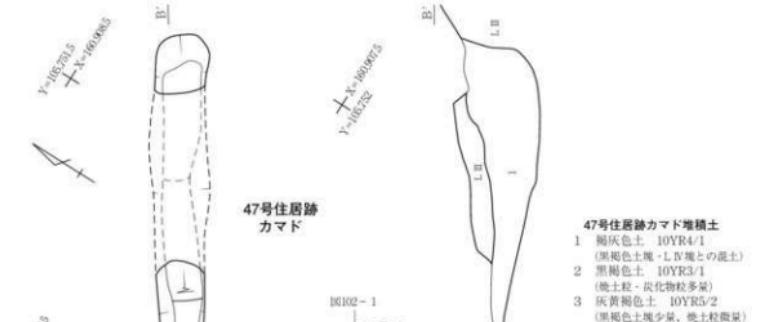


図102 47号住居跡カマド・出土遺物

遺物 (図102、写真129)

本住居跡からは土師器46点、鉄滓110gが出土した。このうち、土師器1点を図示した。

P 1のℓ 1中からは、図102-1の土師器の杯が斜めに出土している。

図102-1は土師器杯である。平底から湾曲しながら立ち上がる。器壁は厚い。外面にはヨコナデとケズリ、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

まとめ

本住居跡は丘陵西部の緩斜面の中腹に立地する。平面形は方形基調で、規模は南北が3.43m、東西が3.41mである。北壁にカマドを設け、東隅に貯蔵穴(P 1)を持つ。本住居跡の所属時期は出土した図102-1の土師器杯から、奈良時代、8世紀と考えられる。
(佐藤)

48号住居跡 S I 48

遺構 (図103・104、写真88・89)

本住居跡は、調査区北部のF-9グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部から北東に向かって下る浅い谷部の中腹に位置する。本住居跡と重複する遺構はない。

平面形は方形で、規模は東西3.22m、南北2.85mである。東辺は北から西に44度傾く。壁は北西隅の残りが最も良く、床面から最大で30cmが遺存していた。

住居内堆積土は3層に分けられた。ℓ 1・2はおむねレンズ状に堆積し小土塊を含まないことが自然堆積と判断される。ℓ 3は壁の崩落土を含む壁ぎわの三角堆積である。

床面は水平かつ平坦で、貼床は床面西部を除いた部分に貼られ、特に南北の隅を結ぶ線の東側は掘形が深くなっている、最も厚い部分で最大16cmの厚さがある。掘形の底面には、凹凸が多くみられた。貼床層はℓ 4とした。

本住居跡に付属する施設として、西壁からカマド1基、北壁の外側から外延溝、床面から壁溝、ピット3基(P 1~3)が検出された。

カマドは西壁の南西隅側に寄った位置にある。両袖と煙道、煙出しピットが検出された。両袖は地山を掘り残した基部が高さ8cmほど遺存していた。規模は、向かって左側の袖が壁から29cm、右袖が39cm、幅は最大68cmである。カマド底面のやや左袖寄りの位置に平面形が不整梢円形の焼土面が検出された。規模は、長径26cm、短径17cm、焼上化した範囲は厚さ2cmを測る。

煙道は壁に対しておむね直角方向に延び、先端に煙出しピットが開口する。煙道は天井が崩落せずにトンネルが遺存していた。トンネルの断面形は梢円形で、底面は煙出しピットに向かって上の緩やかな勾配と小さな凹凸がある。煙道の規模は煙出しピットを含めた長さが93cm、煙道の幅は最大で33cmである。煙出しピットは平面形がいびつな梢円形で、規模は長径32cm、短径22cm、検出面からの深さ25cmである。煙出しピットと煙道には流入したにぶい黄褐色土から黒褐色土で満たされていた。

壁溝は、西壁を除いた三方の壁ぎわに掘り込まれている。幅は最大で19cm、床面からの深さは4~

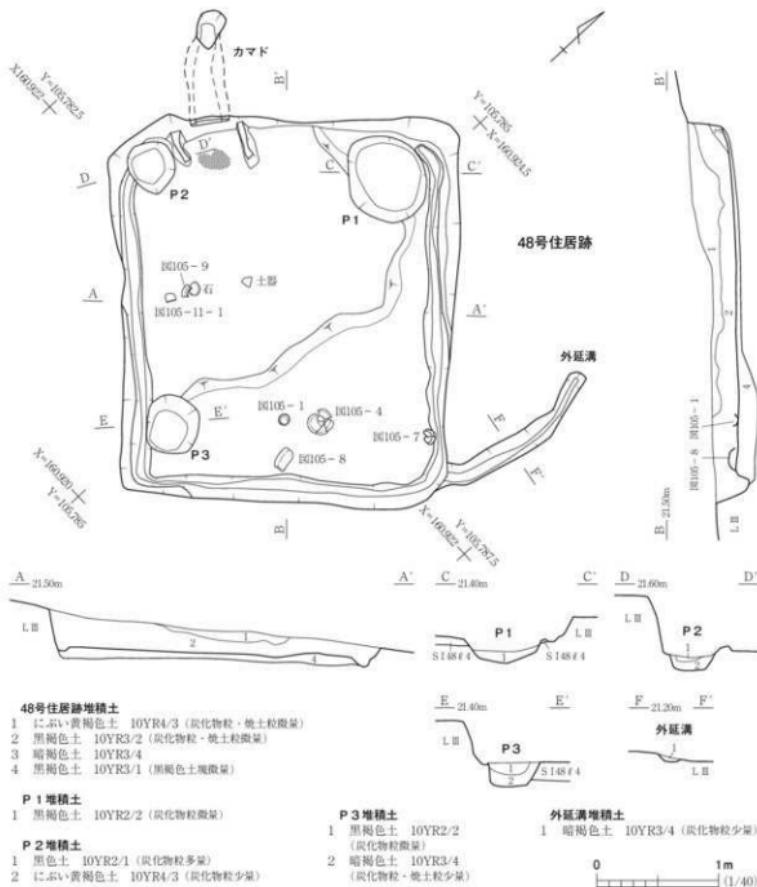


図103 48号住居跡

10cmである。壁溝は、東隅に取りつく外延溝に接続している。

外延溝は東隅から斜面の下方にあたる北に向かって緩やかなカーブを描きながら140cmほど伸びる。幅は最大で19cm、検出面からの深さは10cmほどである。

3基のビットは、いずれも貯蔵穴と考えられる。これらをP1～3とした。P1は北隅、P2は西隅、P3は南隅に位置し、平面形は不整円形もしくは楕円形である。規模は、P1が長径77cm、短径66cm、床面からの深さ20cmで、P2が長径44cm、短径37cm、床面からの深さ12cmで、P3が長径48cm、短径42cm、床面からの深さ19cmである。

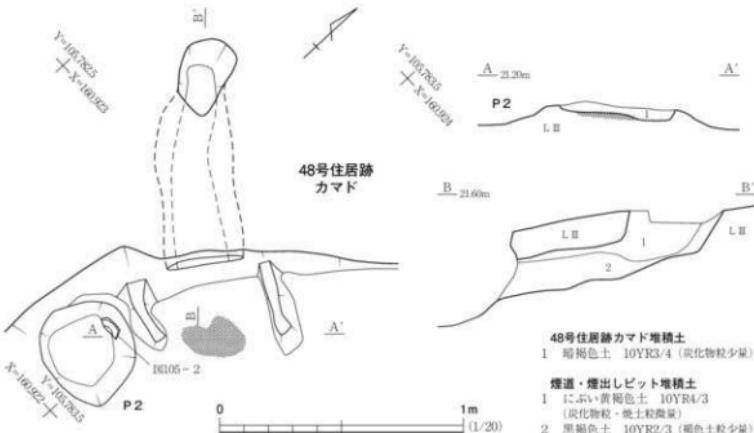


図104 48号住居跡カマド

遺 物 (図105、写真129・130)

本住居跡からは土師器39点、須恵器4点が出土し、このうち土師器8点と須恵器4点を図示した。床面とピットからは7点の遺物が出土した。P2からは図105-2の土師器杯が、床面南部から同図-9の須恵器壺が、同図-11-1の須恵器壺の体部片が、床面東部からは同図-1・4・7の土師器杯が、同図-8の土師器壺がそれぞれ出土した。その他少量の遺物が、堆積土中から出土した。

図105-1~5は土師器の杯である。1は無段平底で、底部をケズリによってやや凸面に作る。口縁部から底部にかけてケズリ、内面にはヨコナデとヘラナデが施されている。内面にはミガキがなく、大部分が黒斑のような色調ではあるものの、黒色処理が施されていたようには見えない。内面の口縁部付近には縦長の油煙の付着が1箇所みられることから、照明に使われたものと思われる。2は無段平底で、底部と体部の外面にはケズリ、口縁部内外面にはヨコナデ、体部内面にはミガキが施されている。1と同様、黒色処理が施されていたようにはみえない。3は口縁部から体部の破片で、底部の形状は不明である。体部は無段で、外面にはヨコナデとケズリ、内面にはナデが施されている。黒色処理は施されていない。4は無段平底で、体部の外面にはケズリ、口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。底面に木葉痕、体部外面には輪積み痕を残す。外面は被熱により赤変劣化し、内面の一部が薄い黒色に変色する。5は体部から口縁部にかけての破片からの復元である。無段で、外面にはケズリ、内面にはミガキと黒色処理が施されている。

同図-6は土師器の鉢である。平底で、体部から口縁部を直線的に外傾する。底面に幅1cmほどどの棒状の工具を押し当てて一定方向に引いた跡が密集し、体部の外面には指頭圧痕、口縁部の内外面にはヨコナデ、体部の特に底部付近の内面には指頭圧痕がみられる。

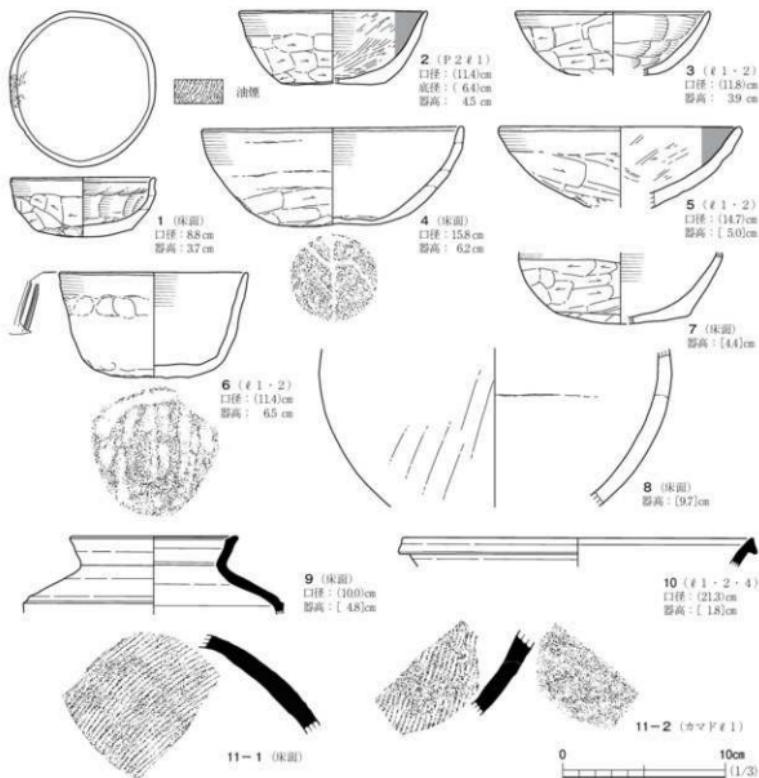


図105 48号住居跡出土遺物

同図-7は土師器で、口縁部を欠失する。器種の判断は難しいが、上掲の同図-1～4と類似点が多いので杯の可能性がある。無段平底で、外面にはケズリ、内面にはヨコナデが施されている。黒色処理は施されていない。

同図-8は土師器の壺の体部片である。内外面とも摩滅が激しく、調整は不明瞭である。

同図-9は須恵器の壺である。短頸で体上部は内傾し、体部中ほどとの間に強い稜線がある。口縁端部には内傾する面を持ち、面の中ほどに凹線がめぐる。外面にはロクロナデが施されている。

同図-10は須恵器の瓶類で、口縁部の小片からの復元である。端部を上下に拡張し、内外面にはロクロナデが施されている。

同図-11は須恵器の壺の体部片である。外面には平行タタキメ、内面には無文のアテ具痕がみられる。

まとめ

本住居跡の平面形は方形基調で、規模は東西3.22m、南北2.85mである。柱穴は検出されなかつた。西壁にカマドを付す。本住居跡の立地はやや特異で、同時期の他の住居跡がいずれも丘陵頂部付近にあるのに対し、本住居跡は斜面中腹の谷筋に位置する。出土土器は奈良時代に位置づけることのできるものであるが、これもやや特異で、杯の内面にミガキと黒色処理を施されていないものが多い。本住居跡の所属時期は、出土した土器の特徴から、奈良時代の後葉、8世紀の後葉と思われる。

(青山)

49号住居跡 S I 49

遺構(図106、写真90・91)

本住居跡は調査区の北西部、G・H-7グリッドのLV上面で検出された。丘陵西側斜面の中位にある平坦部に立地する。11号溝跡と重複し、本住居跡が新しい。本住居跡の北側と南東側には10号溝跡が、南西側3.6mには50号住居跡が位置している。

LV上面の検出作業により、灰褐色粘質土を基調とした正方形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は、方形である。規模は南北で2.93m、東西で3.25m、検出面から床面までの深さは最大で29cmを測る。周壁は、南壁では急角度で立ち上がり、北壁は遺存状況が不良で、わずかに立ち上がりを確認できるのみである。

住居内堆積土は2層に分けられた。いずれもLVの混合土を基調とする土で、人為堆積土と判断した。

本住居跡はLV上面を床面とし、貼床や掘形は確認できない。床面には小礫が露出し、凹凸が顕著に認められる。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット1基(P1)を確認した。

カマドは東壁の中央に設けられる。右袖と煙道のみ遺存している。右袖の規模は壁から長さ45cm、幅20cm、高さ17cmである。袖はLVを掘り残して構築される。右袖の内側上部は焼土化し、断ち割りによって確認した厚さは最大2cmに及ぶ。煙道は本住居跡の壁から外側に向かって弧状に延び、その長さは111cm、幅は32cmである。底面は煙出しピットに向かいわずかに下り傾斜となる。煙出しピットの平面形は不整円形で、直径30cm、検出面からの深さは29cmである。壁は垂直に立ち上がる。カマドの堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はLV砂礫を多量、焼土粒や炭化物粒を微量に含む褐灰色土である。カマドの天井崩落土と判断した。 ℓ 2は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、煙出しピットの底部付近を覆う人為堆積土である。

壁溝は、斜面上部側の南壁と西壁のきわを「L」字状に掘り込む。幅は28cm、床面からの深さは8cmである。

P1は住居の南隅部に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は直径44cm、床面からの深さは最大で12cmを測る。堆積土は灰褐色砂質土の単層で、黒褐色土を多量に含む。

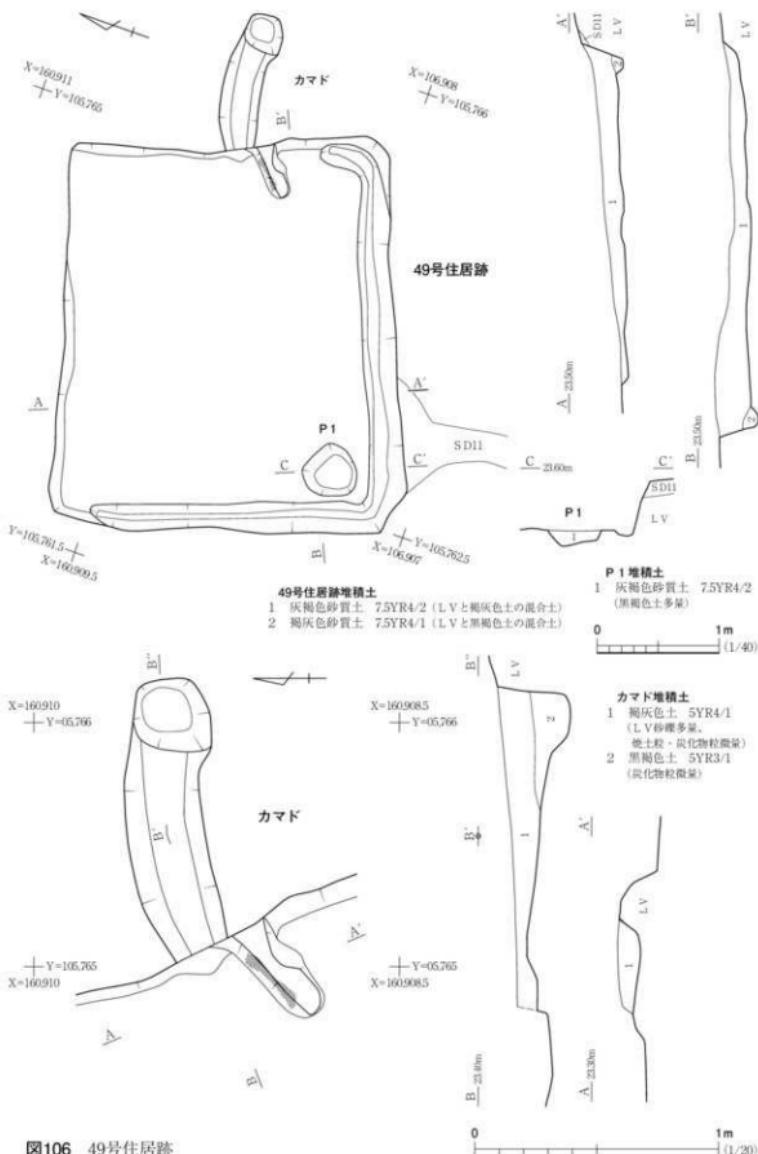


図106 49号住居跡

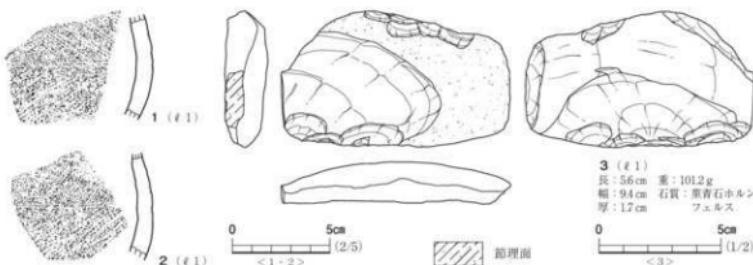


図107 49号住居跡出土遺物

遺 物 (図107、写真130・150)

本住居跡からは弥生土器3点、土師器33点、石器・石製品4点が出土している。このうち、弥生土器2点、石器1点を図示した。

図107-1・2は弥生土器である。いずれも壺の体部の小片である。最大径より下部には直前段多条の地文、上部には二本同時施文の平行沈線により、重菱形文か重山形文が施されている。

同図-3は打製石庖丁と判断した。円礫の縁辺部に打撃を加え素材を採取している。左側面には節理面が認められる。刃部には、複数の剥離による整形痕が認められる。

ま と め

本住居跡は丘陵西側斜面の中位にある平坦部に立地する。平面形は方形で、規模は南北で2.93m、東西で3.25mである。41号住居跡と同様に、L Vの小礫が露出する面を床面に利用している。

本住居跡の所属時期は、小片のため未報告とした遺物にロクロ成形による土師器杯の小片が認められることから、おおむね平安時代、9世紀頃と判断した。
(佐藤)

50号住居跡 S I 50

遺 構 (図108・109、写真92)

本住居跡は調査区の北西部、H-6・7グリッドのⅢ上面で検出された。丘陵西側斜面の中位にある平坦部に立地する。本住居跡と重複する遺構はないが、北東側の同一標高には49号住居跡、11号溝跡が近接して位置している。

検出作業時は2軒が重複する方形の住居跡として調査を開始したが、いずれも堆積土が同様であることから、再度精査を行い、1軒の住居跡として確認できた。

本住居跡の平面形は東西に延びる長方形である。規模は東西で4.33m、南北で3.75m、検出面から床面までの深さは、最大で39cmを測る。周壁は、斜面上部の東壁では急な角度で立ち上がり、斜面下位の西壁は遺存状況が不良で、わずかに立ち上がりを確認できる。

住居内堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を多量、焼土粒を微量に含む黒色土で、 ℓ 2はⅢ塊や焼土粒を微量に含むⅣを由来とした灰黄褐色土で、床面の大部分を覆う人為堆積土で

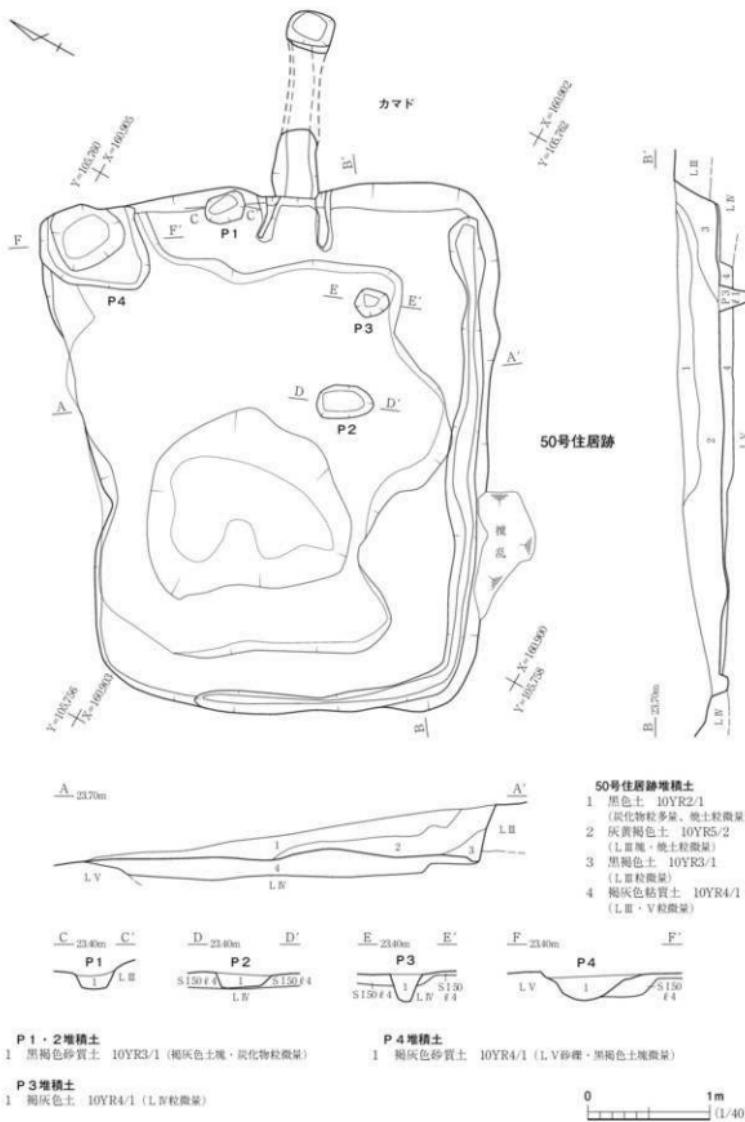


図108 50号住居跡

ある。 ℓ 3はL III粒を微量に含む黒褐色土で、斜面上部側の東壁周辺や壁溝を覆う人為堆積土である。 ℓ 4はL III・V粒を微量に含む褐灰色粘質土で、貼床土である。

本住居跡の床面には全面に貼床が貼られていた。掘形底面の中央から西側周辺は、浅い土坑状になる。床面からの深さは最大で22cmである。

本住居跡に付属する施設として、カマド1基、床面から壁溝、ピット4基(P 1~4)を確認した。

カマドは東壁の中央に設けられる。両袖が遺存しており、規模は右袖が長さ48cm、幅14cm、床面からの高さは10cmで、左袖が長さ37cm、幅18cm、床面からの高さは6cmである。カマドの幅は

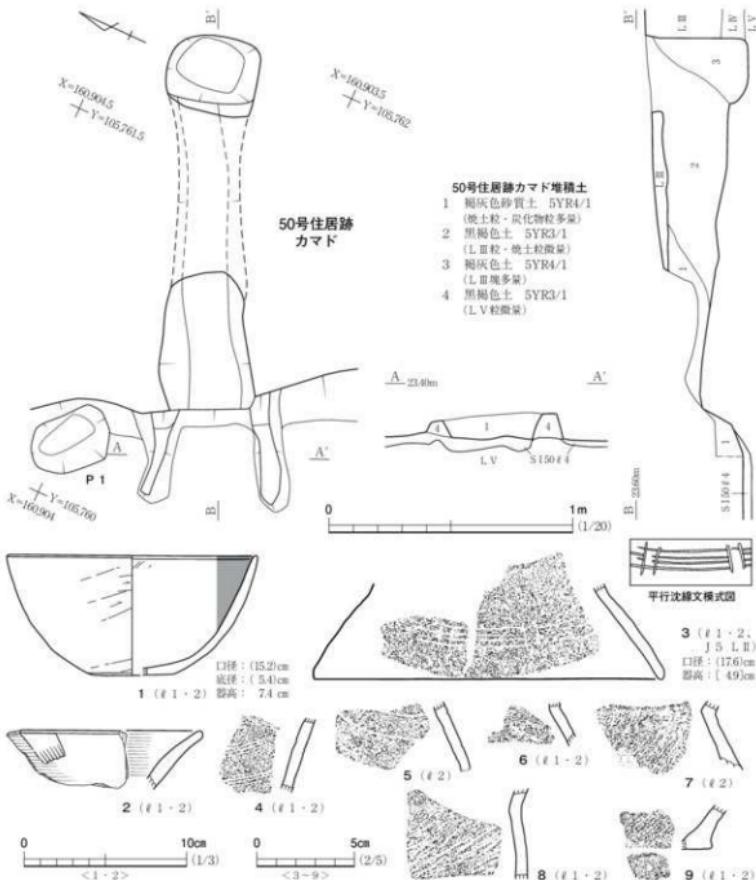


図109 50号住居跡カマド・出土遺物

58cmである。カマド袖は黒褐色土で構築され、被熱による焼土化は確認できない。煙道は壁から直角に延び、天井の一部は遺存している。規模は長さ153cm、幅は38cm、底面から天井までの高さは最大で26cmである。底面は煙出しピットに向かって緩やかな下り傾斜となる。煙出しピットの平面形は不整橢円形で、直径37cm、検出面から底面までの深さは42cmである。

カマド内の堆積土は4層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を多量に含む褐灰色砂質土である。燃焼部や住居側の煙道を覆っており、カマド天井の崩落土と判断した。 ℓ 2はLⅢ粒や焼土粒を微量に含む黒褐色土で、 ℓ 3はLⅢ塊を多量に含む褐灰色土で、いずれも煙出しピットを覆う人為堆積土である。 ℓ 4はLⅤ粒を微量に含む黒褐色土で、カマド袖の構築土である。

壁溝は西壁と南壁の間に沿って「L」字状に掘り込まれる。幅は27cm、床面からの深さは最大で8cmである。

カマド左袖の北側に隣接して位置するP1は、比較的小型の貯蔵穴である。平面形は不整橢円形で、規模は長径34cm、短径23cm、床面からの深さは最大で11cmを測る。堆積土は黒褐色砂質土である。

P2・3は住居中央よりわずかに南東側に位置する。平面形はいずれも橢円形で、規模はP2が長径46cm、短径26cm、深さが12cm、P3が長径28cm、短径23cm、深さは22cmを測る。いずれも土塊やLIV粒を微量に含んでいることから、人為堆積土と判断した。

住居北隅部に隣接して位置するP4は、位置や規模から貯蔵穴と判断した。平面形は橢円形で、規模は直径90cm、短径68cm、床面からの深さは最大で25cmを測る。P4の底部には橢円形の掘り込みが認められる。堆積土は褐灰色砂質土である。

遺 物 (図109、写真130)

本住居跡からは弥生土器21点、土師器143点、須恵器1点、石器・石製品16点が出土した。このうち、土師器2点、弥生土器7点を図示した。

図109-1は土師器の杯である。ロクロ成形の平底で、口縁端部に向かって緩やかに湾曲しながら外傾する。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。

同図-2は壺もしくは甕の口縁部で、内外面にはヨコナデが施されている。

同図-3は弥生土器の蓋である。外面には4本の沈線が横位にめぐり、これより新しい二本1単位の沈線が縦位に区画施文される。

同図-4～6は弥生土器の壺である。4は口縁部付近とみられ、四本同時施文の沈線で、連弧文が施されている。5は一本引きで同心円文もしくは渦文が施されている。6は二本同時施文の波状文が施されている。

同図-7～9は弥生土器の甕である。7・9の地文は附加条、8は直前段反撲である。

ま と め

丘陵西側斜面の中位にある平坦部に立地する。平面形は東西に延びる長方形を基調とし、規模は東西で4.33m、南北で3.75m、東壁にカマドを持つ。本住居跡の所属時期は、図109-1のロクロ成形の土師器杯から、平安時代、9世紀前半と判断した。

(佐藤)

51号住居跡 S I 51

遺構 (図110、写真93)

本住居跡は調査区の北隅部、D・E - 9 グリッドに位置する。南北方向に延びる丘陵の北側裾部に立地する。本住居跡と重複する遺構はないが、西側に2号遺物包含層が近接して位置している。

L III の検出作業により黒色砂質土を基調とした不整形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は不整形で、規模は南北で2.77m、東西方向で2.39m、検出面から床面までの深さは、最大で40cmを測る。周壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。

住居内堆積土は3層に分けられた。いずれもL V を由来とする砂質土で円礫や黒色砂質土を含むことから、斜面上部からの流れ込みと判断した。

床面は掘形底面のL III をそのまま利用している。おおむね平坦で、わずかに凹凸が認められる。

本住居跡に付属する施設は確認できなかった。

遺物 (図111、写真130・150)

本住居跡からは弥生土器137点、石器・石製品10点が出土した。このうち、弥生土器15点、石器1点を図示した。

図111-1は弥生土器の高杯である。無文で、内面にはユビナデやユビオサエが認められる。

同図-2~4は弥生土器の壺の体部上半である。いずれも二本同時施文の沈線で、2・3は菱文か重山形文、4は同心円文か渦文が施されている。



図110 51号住居跡

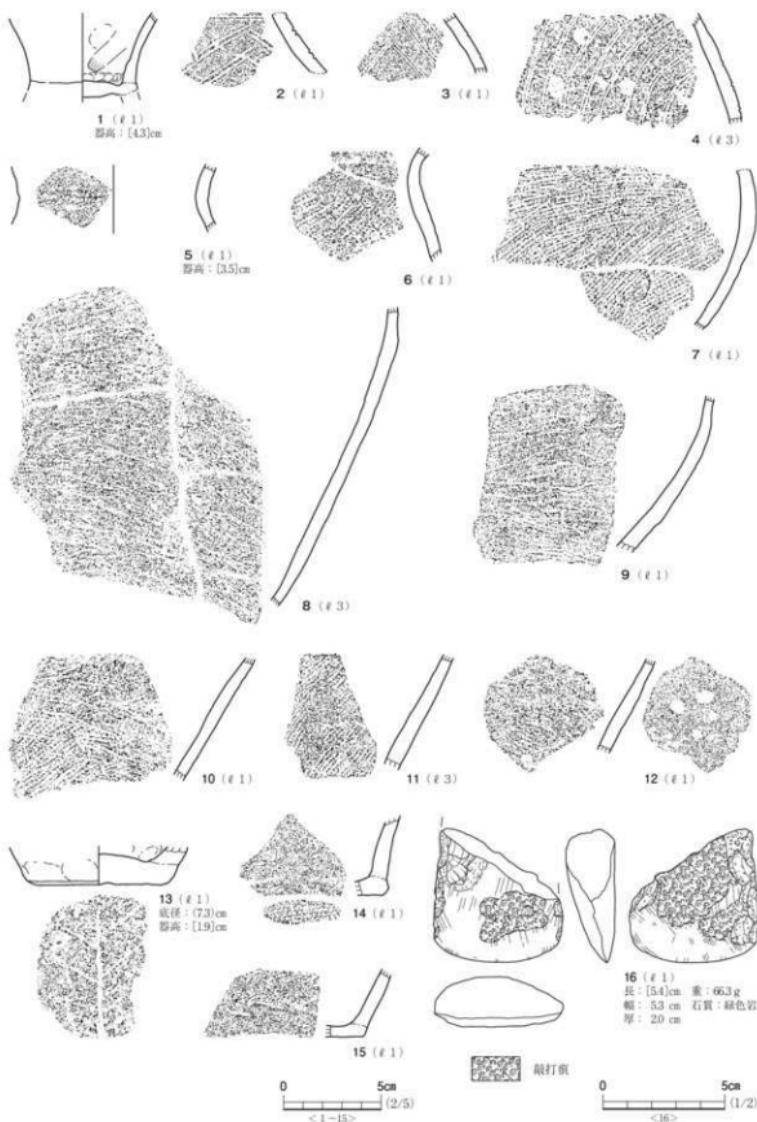


図111 51号住居跡出土遺物

同図-5・6は弥生土器の壺もしくは壺の体部から頸部付近である。5の地文は撫糸もしくは附加条の可能性がある。外面にはスヌが付着している。6は頸部を無文帶とし、地文は附加条である。

同図-7~15は、弥生土器の壺もしくは壺の体部から底部である。地文は、7が附加条もしくは直前段多条、8・9が直前段反撫である。10は地文に直前段多条と撫糸の2種の原体を用いて施文している可能性がある。11の地文は直前段多条で、内面にはコゲが付着している。12の地文は直前段多条で、内面には円形のくぼみが4つ認められる。13の底部には木葉痕が、14・15の底部には布目の圧痕が認められる。

同図-16は偏平片刃石斧である。基部側は欠損し、遺存していない。研磨後に両側縁に連続した剥離を加えた後、敲打を加えている。着柄の調整によるものか、もしくは他の石器に転用を試みた可能性がある。

まとめ

本住居跡は南北方向に延びる丘陵の、北側裾部に立地する。平面形は不整形で、規模は南北で2.77m、東西方向で2.39mである。掘り込みが浅く、周壁の立ち上がりが緩やかなのが特徴である。本住居跡の所属時期は、出土した土器から、弥生時代中期後葉と判断した。
(佐藤)

52号住居跡 S I 52

遺構(図112、写真94)

本住居跡は、調査区北部のG-9グリッドのL III上面で検出された。丘陵頂部から北東に向かって

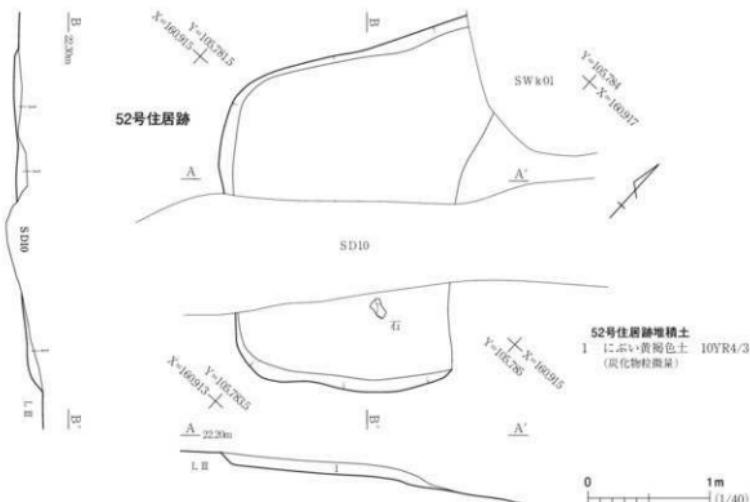


図112 52号住居跡

て下る浅い谷部の中腹に位置する。10号溝跡、1号鍛冶遺構と重複し、このいずれより古く、10号溝跡によって中央部が、1号鍛冶遺構によって北東部が壊されている。斜面下方にあたる東部は壁が遺存しない。

平面形は隅丸長方形で、規模は、東西で2.90mが遺存し、南北は2.01mである。壁は南壁の残りが最も良く、床面から最大で8cmが遺存していた。

住居内堆積土はにぶい黄褐色土の单層からなり、自然堆積したものと思われる。

床面は、きわめて緩やかな凹凸がある他はほぼ水平で平坦である。本住居跡に付属する施設は確認できなかった。

本住居跡の床面から自然石が1個出土したのみで、他に出土遺物はなかった。

まとめ

本住居跡は、隅丸長方形の平面形を持った遺構で、規模は東西2.90m、南北2.01mほどである。遺物は出土せず、近世の10号溝跡、平安時代前期の1号鍛冶遺構よりも古いが、遺物が出土しなかったため時期はそれ以上特定できなかった。

(青山)

53号住居跡 S I 53

遺構(図113、写真96・97)

本住居跡は調査区の北西部、F-5・6グリッドのLⅢ上面で検出された。南北方向に延びる丘陵の西側の緩斜面に立地する。本住居跡と重複する遺構はないが、北東側5mの平坦面には1号焼土遺構が位置している。LⅢ上面の検出作業により、弥生土器片を含む灰褐色砂質土や褐灰色土を基調とした不整形の範囲として確認した。

本住居跡の平面形は、不整形方を基調とする。規模は南北方向で3.51m、東西方向で3.33m、検出面から床面までの深さは、最大で24cmを測る。周壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。斜面下位の西壁は遺存状況が不良で、わずかに立ち上がりを確認できる。

住居内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はLⅢ塊や黒褐色土塊を微量に含む褐灰色土で、住居南側の上面を覆う人為堆積土である。 ℓ 2はLⅢ塊や炭化物粒を微量に含む灰褐色砂質土で、床面全体を覆った土である。 ℓ 3は焼土粒を微量に含む灰褐色土で、掘形を埋めた人為堆積土である。

床面には南北に向かう帯状の範囲で、強い踏み締まりが確認できた。床面の中央には掘形が認められ、平面形が梢円形の浅いくぼみとして確認できる。床面から掘形底面までの深さは、最大で21cmである。本住居跡の床面からは、地床炉やピット等、付属する施設は確認できなかった。

遺物(図114、写真130・131)

本住居跡からは弥生土器203点、石器・石製品5点が出土した。このうち、弥生土器13点を図示した。

住居中央部よりわずかに南側の ℓ 2上面からは、図114-1の弥生土器の鉢の底部が斜位で出土している。地文は撚糸で、底部外面には布の圧痕が認められる。底部には内面側からの打ち欠き穿



図113 53号住居跡

孔が認められる。

同図-2～4は弥生土器の壺の体部片である。2は、東線具とみられる四本1単位の沈線が横位に施されている。3は二本同時施文による沈線で、重菱文か重山形文が施されている。4は二本同時施文の平行沈線で、縦位と斜位に施されている。

同図-5は弥生土器の壺もしくは短頸壺の口縁部から頸部である。二本同時施文の平行沈線により、縦位の文様が施されている。

同図-6～12は壺もしくは壺の破片資料で、6～9は体部下半、10～12は底部付近の資料である。地文はいずれも附加条である。10の底部には円形のくぼみが2つ、12には5つ認められる。11の底部には布の圧痕が認められる。

同図-13はミニチュア土器である。外面には連続したユビオサエ、内面にはユビナデで成形している。

まとめ

本住居跡は、南北方向に延びる丘陵の、西側緩斜面に立地する。平面形は不整方形で、掘り込み

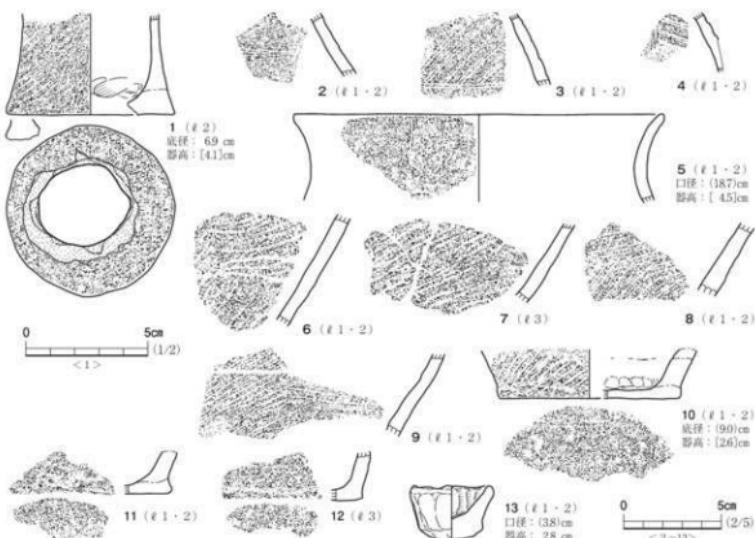


図114 53号住居跡出土遺物

が浅く、周壁の立ち上がりが緩やかのが特徴で、浜通り地域における弥生時代中期後半の住居跡と共通する。床面には掘形があり、強い踏み締まりが認められる。本住居跡の所属時期は出土した遺物から、弥生時代中期後葉と判断した。

(佐藤)

54号住居跡 S I 54

遺構 (図115、写真95)

本住居跡は調査区の西部、H-8グリッドのL III上面で検出された。丘陵西側斜面中位にある平坦部に立地している。10号溝跡と重複し、本住居跡が古い。本住居跡西側の同立地には、49・50号住居跡が位置している。本住居跡の南半部は、10号溝跡の掘削により破壊されており、遺存していない。

L III上面の検出作業により、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本住居跡の南東部は10号溝跡の掘削により破壊され、遺存部分から平面形は長方形を基調としていた可能性がある。北東-南西方向に長軸を持ち、規模は遺存値で長軸3.06m、短軸1.99m、検出面から床面までの深さは、最大で7cmを測る。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。

住居内堆積土は、L III塊や黒褐色土塊を微量に含む褐灰色土の單層である。

床面は平坦で、掘形底面のL IIIを利用していている。踏み締まりは認められない。本住居跡の床面からは、地床炉やピットなど、付属する施設は確認できなかった。

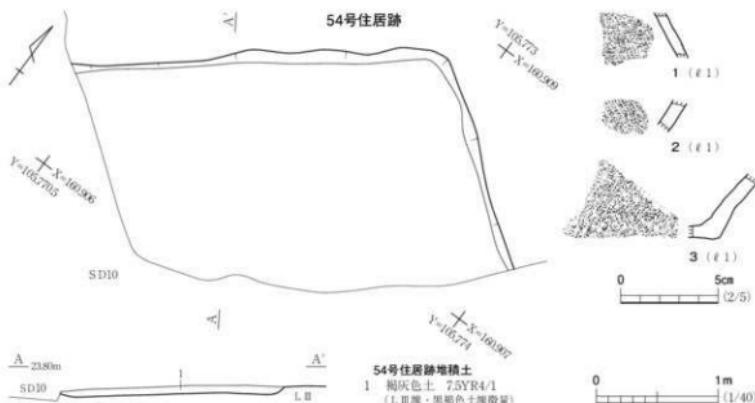


図115 54号住居跡・出土遺物

遺 物(図115、写真131)

本住居跡からは弥生土器38点、石器・石製品1点が出土した。このうち、弥生土器3点を図示した。図116-1は弥生土器の壺である。東縁具とみられる四本1単位の沈線が横位に施されている。同図-2・3は弥生土器の壺もしくは壺である。地文は2が附加条、3は摩滅しており、不明である。

ま と め

本住居跡は丘陵西側斜面中位にある平坦部に立地する。平面形は長方形を基調とする可能性があり、掘り込みが浅く、周壁の立ち上がりが緩やかのが特徴である。所属時期は、本住居跡の形態的な特徴や出土遺物から、弥生時代中期後葉と判断した。
(佐藤)

第3節 掘立柱建物跡

1号建物跡 S B 01 (図116・117、写真98・99)

本建物跡は、調査区南東隅部のJ-16・17グリッドのLIIIで検出された。北東方向に延びる丘陵頂部の緩斜面上に立地する。5号住居跡とJ16 G P 2、J17 G P 2と重複し、いずれよりも本建物跡が新しい。本住居跡の南西側3mには、2・12号住居跡が位置している。

調査当初は柱穴内の堆積土が不鮮明であり、重複に気づかず5号住居跡の調査を開始した。5号住居跡の調査途中で、土層観察用の畦に柱穴の掘り込みが認められたことから、再度LIII上面の検出作業を行った。その結果、住居内とその周辺に等間隔で並ぶ柱穴が検出されたことから、建物跡として認識し、調査を開始した。

本建物跡は、13基の柱穴で構成される。身舎の柱穴は、北西-南東方向に主軸を持つ長方形に

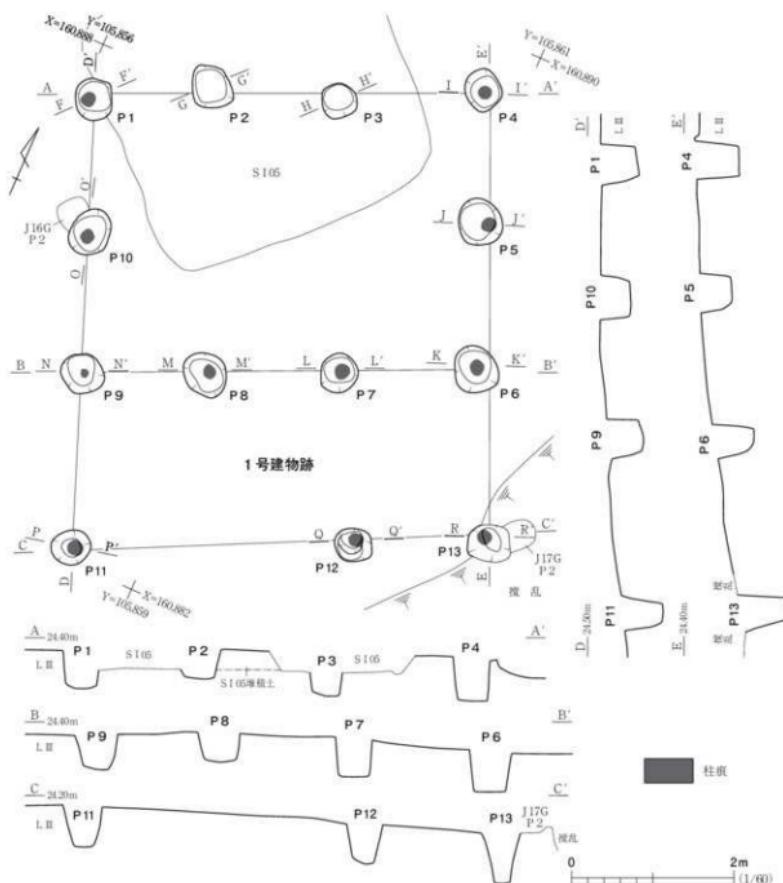
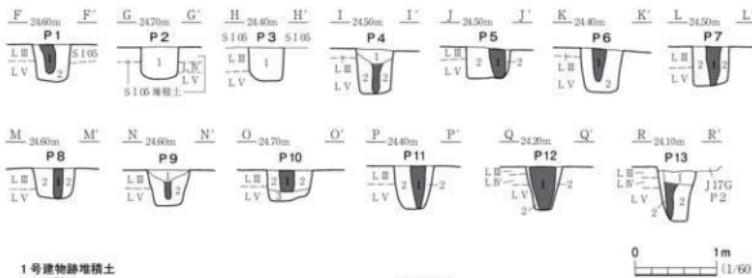


図116 1号建物跡（1）

配列され、桁行3間、梁行2間で、南側に廂が付く。方位は、東列が真北に対し西に24度傾く。
P 11とP 12の中間地点にも柱穴の存在を疑い精査したが、確認できなかった。

建物の規模は、身舎が、東辺のP 4～6の芯々間が3.40m、南辺のP 6～9の芯々間が4.92mである。廂は3基の柱穴からなり、P 6～13の芯々間が2.13m、P 11～13の芯々間が5.00mである。身舎の面積は16.7m²で、廂を含めると27.4m²である。

各柱穴の芯々間の距離は、身舎の部分で桁行のP 1～4が1.45～1.78mで、平均すると1.60mで、P 6～9が1.52～1.75mで、平均すると1.64mである。梁行のP 1～10は1.70m、P 9～10は1.75m



1号建物跡堆積土

P 1堆積土

- 1 黒褐色粘質土 7.5YR4/3
2 淡黄色粘質土 25Y8/3 (黃褐色粘質土塊多量)

P 2堆積土

- 1 黑褐色粘質土 10YR3/2 (炭化物粒・施土塊微量)

P 3堆積土

- 1 黑褐色粘質土 10YR3/3 (炭化物微量)

P 4堆積土

- 1 黄褐色粘質土 7.5YR4/4 (灰白色粘質土塊・炭化物粒微量)
2 黑褐色粘質土 10YR3/2 (灰白色土塊・炭化物粒微量)

P 5堆積土

- 1 黄褐色粘質土 10YR5/8 (灰白色土塊多量・炭化物粒微量)
2 灰黃褐色粘質土 10YR4/2 (灰白色粘質土塊微量)

P 6堆積土

- 1 にひい黄褐色粘質土 10YR4/3 (浅黄色粘質土塊少量)
2 黄褐色粘質土 7.5YR4/3 (灰白色土塊微量)

P 7堆積土

- 1 黄褐色粘質土 10YR3/4
2 黄褐色粘質土 10YR4/4 (黄色粘質土塊多量)

P 8堆積土

- 1 にひい黄褐色粘質土 10YR4/3
2 黄褐色粘質土 7.5YR4/3 (淡黄色粘質土塊微量)

P 9堆積土

- 1 黄褐色粘質土 10YR3/4 (浅黄色粘質土塊・炭化物粒微量)
2 にひい黄褐色粘質土 7.5YR5/4 (淡黄色粘質土塊微量)

P 10堆積土

- 1 黄褐色粘質土 7.5YR3-3 (褐色粘質土塊微量)
2 黄褐色粘質土 10YR3/4
3 黄褐色粘質土 7.5YR4/3 (灰白色粘質土塊微量)

P 11堆積土

- 1 にひい黄褐色粘質土 10YR4/3
2 にひい黄褐色土 10YR5/4 (灰白色粘質土塊・炭化物粒微量)

P 12堆積土

- 1 黄褐色粘質土 7.5YR3/4
2 黄褐色粘質土 2.5Y8/4 (にひい黄褐色粘質土塊微量)

P 13堆積土

- 1 黄褐色粘質土 10YR3/4 (褐色粘質土塊微量)
2 にひい黄褐色粘質土 10YR7/4 (灰白色粘質土塊多量)



1 (P 4 ℓ 2)
底深: 6.8cm
高さ: 1.7cm
スケール: 1/30

図117 1号建物跡（2）・出土遺物

であり、平均すると1.73mである。P 4～5は1.60m、P 5～6は1.80mであり、平均すると1.70mである。一方、廂の桁行に並行する部分はP 11～12が3.48m、P 12～13が1.52mである。梁行の延長上のP 6～13、P 9～11はともに2.12mである。

柱穴の平面形は、おおむね円形や橢円形が多い。柱穴の規模は、直径45～60cm、検出面からの深さは35～60cmである。周壁はP 1～P 10が垂直に立ち上がり、底面は平坦である。P 11～P 13の周壁は70～80度の角度で立ち上がり、底面が狭くなる傾向がみられる。断面形は逆台形となる。

柱穴の堆積土は、P 1～P 4～9～11～13は2層に、P 10は3層に分けられた。 ℓ 1は褐色粘質土や暗褐色粘質土などを主体とした混土が堆積している。断面形は、すべてが漏斗形または円錐形を基調としており、柱痕跡と判断した。 ℓ 2・3は掘形を埋めた土である。L IIIの褐色土を主体とする人為堆積土で、L IV由来の灰白色または淡黄色の粘土塊が含まれている。 ℓ 2・3の堆積状況から、柱穴を掘り込んだ排土を利用して埋め戻したものと判断した。P 2・3の堆積土は暗褐色及び黒褐色の粘質土を基調とし、分層はできなかった。5号住居跡の堆積土に由来する土で、人為堆積土である。

遺 物 (図117)

本建物跡からは、弥生土器1点、土師器38点が出土した。このうち、土師器1点を図示した。

図117-1は土師器杯の底部の破片である。平底で、内面にはヘラミガキのち黒色処理が施されている。外面は摩滅が著しく、調整などは判然としない。

ま と め

本建物跡は北東方向に延びる丘陵東側の緩斜面上に立地する。桁行3間×梁行2間の身舎の南側に1面に扉が付く。身舎の推定床面積は16.7m²で、扉を含めると27.4m²である。本建物跡の所属時期は、5号住居跡より新しいことや出土遺物から、奈良・平安時代と考えている。 (吉野)

第4節 土 坑

1号土坑 SK 01 (図118、写真100)

本土坑は調査区の西隅部、丘陵西側の斜面裾部、K-3グリッドに位置する。検出面はLVで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南西側約10mには7号土坑が位置している。

本土坑の平面形は楕円形である。規模は、長径119cm、短径90cm、検出面からの深さは最大38cmである。周壁はいざれも急な角度で立ち上がり、東壁は段状である。底面は皿状にくぼみ、LVの礫が露出する。壁の南東部と底面の一部は焼土化しており、その厚さは最大2cmである。

遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を微量に含むLIIを由来とする褐灰色土で、斜面上部からの自然堆積と判断した。 ℓ 2は焼土粒を微量に含む暗灰色炭層である。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は、平面形が楕円形で、周壁の一部が焼土化し、底面直上に炭化物が堆積していることから、木炭焼成土坑と考えられる。 ℓ 2は木炭を取り出した際の残滓と判断した。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。 (佐藤)

2号土坑 SK 02 (図118、写真100)

本土坑は、調査区の西部、丘陵頂部の平坦面、J-9・10グリッドに位置する。検出面はLIIIで、黒褐色土を基調とした範囲として確認した。17号住居跡と重複し、本土坑が新しい。本土坑の周辺には、6・7・13・16号住居跡が近接して位置している。

本土坑の平面形は不整長方形を呈する。規模は、長軸106cm、短軸97cm、検出面からの深さは最大19cmである。周壁は西側は急な角度で、東側は緩やかな角度で立ち上がる。東半部の周壁はテラス状になる。底面は平坦である。北西と南西の周壁の一部が焼土化しており、厚さは最大2cmである。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒・焼土粒を微量に含む黒褐色土で、人為堆積土と判断した。 ℓ 2は炭化物粒・焼土粒を多量に含む黒色土である。本土坑から遺物は出土し

ていない。

本土坑は、周壁の一部が焼土化し、底面付近に炭化物粒が堆積していることから、木炭焼成土坑と考えられる。北東と南東の周壁のテラス状となる箇所は、土坑から木炭を採取する際に生じたもので、 ℓ 2は木炭を取り出した際の残滓と判断した。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。

(佐 藤)

3号土坑 SK 03 (図118)

本土坑は、調査区の西部、丘陵頂部西側の平坦面、J - 8 グリッドに位置する。検出面はL IIIで、褐灰色土を基調とする範囲として確認した。検出当初から土坑の縁辺には炭化物が認められた。本土坑と重複する遺構はないが、南東側に21号住居跡が近接して位置している。

本土坑の平面形は不整円形を呈する。規模は、直径114cm、検出面からの深さは最大14cmである。周壁は北東側が緩やかな角度で、それ以外は急な角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はL III塊を微量に含む褐灰色土、 ℓ 2はL III塊を微量に含む暗灰色炭屑で、いずれも人為堆積土と判断した。本土坑からは弥生土器1点、土師器2点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本土坑の性格は不明だが、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐 藤)

4号土坑 SK 04 (図118、写真100)

本土坑は、調査区の西部、丘陵頂部西側の縁辺部、J・K - 6 グリッドに位置する。検出面はL IIIで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南東側に24・25号住居跡が近接して位置している。

本土坑の平面形は、南西に向かって幅を減じる不整梢円形を呈する。規模は、長径282cm、短径172cm、検出面からの深さは最大42cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はL III塊を微量に含む褐灰色土で、斜面上部からの流れ込みと判断した。 ℓ 2はL III塊を多量に含む黒褐色土で、人為堆積土と判断した。本土坑から出土物は出土地していない。

本土坑の性格や所属時期は不明である。

(佐 藤)

5号土坑 SK 05 (図118・125、写真100・132)

本土坑は、丘陵頂部西部の平坦面、K - 7 グリッドに位置する。検出面はL IIIで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本土坑は19・20号住居跡と重複関係にあり、19号住居跡より古く、20号住居跡より新しい。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸217cm、短軸114cm、検出面からの深さは最大30cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土はL

Ⅲ塊・焼土塊を微量に含む褐灰色土の単層である。土塊を含むことから、人為堆積土と判断した。

本土坑からは弥生土器4点、土師器35点、須恵器1点が出土した。このうち、土師器2点、須恵器1点、弥生土器3点を図示した。

図125-3・5は土師器である。3は壺の口縁部片で、口縁端部が上方に摘み出される。外面にはハケメ、内面にはヨコナデが施されている。形態の特徴から布留式の壺の可能性がある。5は複合口縁の壺である。口縁部の外側面にヨコナデ、頭部の外側面にはハケメが施されている。

同図-11は須恵器の壺である。体部の小片で、外側面には自然釉が認められる。

同図-13-15は弥生土器である。13は壺の口縁部である。平行沈線文が2条認められる。14・15は壺もしくは壺の体部下半である。地文は、14が無節、15が单節である。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物の特徴から奈良・平安時代と判断した。（佐藤）

6号土坑 SK 06 (図118、写真100)

本土坑は、調査区の西部、丘陵頂部西側の緩斜面、I・J-6グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本遺構と重複する遺構はないが、南東側4.5mには1号道跡が位置している。

本土坑の平面形は長方形を呈する。規模は、長軸127cm、短軸95cm、検出面から底面までの深さは29cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面は中央がわずかにくぼむ。西壁の中央や、底面の西半部は斑状に焼土化している。底面の東部には小穴状の掘り込みが認められる。小穴の平面形は楕円形で、長径70cm、短径41cm、深さ9cmである。遺構内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を微量に含む褐灰色土で斜面上部からの流れ込みと判断した。 ℓ 2は炭化物粒や焼土粒を多量に含む黒褐色土である。 ℓ 3は黒褐色土塊を微量に含む灰黄褐色土で、小穴を覆うように堆積している。 ℓ 2・3は堆積状況から、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は北西周壁の中央部や、底面の一部が焼土化していることから、木炭焼成土坑の可能性がある。底面にみられた小穴の用途は不明である。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。

（佐藤）

7号土坑 SK 07 (図118、写真100)

本土坑は調査区西隅部の丘陵裾、K-2グリッドに位置する。検出面はLVで、暗灰色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北東側10mには1号土坑が位置している。本土坑の西半部は調査区外に延びている。

本土坑の平面形は楕円形の可能性がある。規模は、いずれも遺存値で長径が120cm、短径が37cm、検出面から底面までの深さは10cmである。周壁は、北壁が緩やかな角度で、それ以外は急な角度で立ち上がる。底面は平坦である。東壁の中央部や、底面の一部は焼土化している。焼土化



図118 1～7号土坑

した部分の厚さは、2cmであることを断ち割りで確認した。遺構内堆積土は、L IV塊を微量に含む暗灰色土の単層で、人為堆積と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は、周壁や底面の一部が焼土化していることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。
(佐藤)

8号土坑 SK 08 (図119)

本土坑は、調査区東部の丘陵頂部、J-15・16グリッドに位置する。検出面はL IIIで、灰褐色粘質土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構は認められないが、南東側3.8mには、12号住居跡が位置している。

本土坑の平面形は不整梢円形を呈する。規模は、長径102cm、短径87cm、検出面からの深さは最大21cmである。周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は2層に分けられた。ℓ 1はL IIIを由来とする灰褐色粘質土で、焼土塊を多量に含む。ℓ 2はにぶい黄褐色粘質土で、炭化物粒や焼土塊を微量に含む。いずれも人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格や所属時期は不明である。

(吉野)

9号土坑 SK 09 (図119)

本土坑は、調査区西部の丘陵頂部、I-7グリッドに位置する。検出面はL IIIで、1号道跡に伴う排土除去後の精査で、黒色土を基調とした範囲として確認した。1号道跡の掘削に伴う排土と重複し、本土坑が古い。本土坑は木根の搅乱が著しく、南・北側周壁の一部は遺存していない。

本土坑の平面形は不整梢円形を呈する。規模は、長径が遺存値で94cm、短径が65cm、検出面からの深さは最大10cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、北東周壁の一部は焼土化している。底面は平坦である。遺構内堆積土は黒色土の単層で、炭化物粒を多量に、焼土粒やL III粒を微量に含んでいる。土質から人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁の一部が焼土化し、炭化物粒が多量に含む土が堆積していることから、木炭焼成土坑と考えられる。ℓ 1は、炭を取り出した際の残滓と判断している。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。
(佐藤)

10号土坑 SK 10 (図119)

本土坑は、調査区西部の丘陵頂部、I-8・9グリッドに位置する。検出面はL IIIで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北東側1.2mには13号住居跡が位置している。本土坑は木根の搅乱により、西側周壁は部分的に遺存していない。

本土坑の平面形は不整形方形を呈する。規模は一辺が132~138cm、検出面からの深さは最大43cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面は中央が緩やかにくぼんでいる。遺構内堆積土は2層に分けられた。ℓ 1は褐灰色土で、L IV塊や炭化物粒を微量に含む。ℓ 2は灰黄褐色土で、

炭化物粒を微量に含む。いずれもLⅢを由来とし、レンズ状に堆積することから、自然堆積と判断した。本土坑からは、古代のものと思われる土師器5点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐 藤)

11号土坑 SK 11 (図119・125、写真132)

本土坑は、調査区東端部の南斜面、J-17グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色を基調とする範囲として確認された。本土坑は他遺構との重複関係は認められない。本土坑の西側に近接して1号建物跡と5号住居跡が位置している。

本土坑の平面形は楕円形を呈する。規模は、長径88cm、短径73cm、検出面からの深さは最大40cmである。底面は中央に向かってややくぼむが、おおむね平坦である。周壁は急な角度で立ち上がる。遺構内堆積土はLⅢ由来のにぶい黄褐色粘質土を多量に含む褐色粘質土の單層で、人為堆積土と判断した。

本土坑からは土師器が1点出土し、これを図示した。図125-10は手づくね土器である。平底で、連続したユビオサエにより、整形している。

本土坑の性格は不明で、出土した土器は手づくね土器のため、所属時期は不明である。(吉 野)

12号土坑 SK 12 (図119)

本土坑は、調査区東部の丘陵頂部、I・J-15グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒色粘質土の範囲として確認した。7号溝跡と重複し、本土坑が新しい。南側には1号溝跡が近接している。

本土坑の平面形は不整円形を呈する。規模は直径153cmで、検出面からの深さは最大50cmである。底部は擂鉢状であり、周壁は急激に立ち上がる。遺構内堆積土は3層に分層した。 ℓ 1~3はレンズ状の堆積を示すことから、周囲からの流れ込みと判断した。本土坑からは、弥生土器1点、土師器60点、須恵器1点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は、出土した土器の大半が古代のものであることから、古代以降と判断した。

(吉 野)

13号土坑 SK 13 (図119・125、写真100・131・132)

本土坑は、調査区西部の丘陵頂部、J-8グリッドに位置する。検出面はLⅢで、土師器片を多く含む黒褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南側1mには22号住居跡が位置している。

本土坑の平面形は楕円形を呈する。規模は、長径69cm、短径50cm、検出面からの深さは最大13cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は南東側に向けて緩やかに下る傾斜が認められる。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はLⅢ塊を微量に含む黒褐色土、 ℓ 2は炭化物粒

を微量に含む褐灰色土である。堆積状況からいずれも人為堆積土と判断している。

本土坑からは土師器195点が出土しており、このうち2点を図示した。

本土坑のℓ1中や底面付近から図125-4・6の土師器が、破片で折り重なるように出土している。胎土や調整から判断すると大部分は同図-4の土師器の壺と同一個体とみられるが、接合したものは少なかった。

図125-4・6は土師器である。4は複合口縁の壺である。頸部から口縁部にかけて外反している。口縁部の内外面にはヨコナデののちまばらにハケメが施されている。頸部の内外面には密なハケメののち横位のまばらなミガキが施されている。6は鉢である。体部はやや偏平な球形で、口縁部は緩やかに外反し、内外面にはヨコナデが施されている。

本土坑の性格は不明だが、所属時期は出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。 (佐藤)

14号土坑 SK 14 (図119・125、写真101・132)

本土坑は、調査区東部の丘陵南側の縁辺、I-17・18グリッドに位置する。検出面はLⅢで、灰黄褐色土を基調とした範囲として確認した。32号住居跡のカマド煙道と重複し、本土坑が古い。本土坑の北側には31号住居跡が隣接して位置している。

本土坑の平面形は梢円形を基調とし、規模は、長径が遺存値で199cm、短径169cm、検出面からの深さは最大25cmである。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。底面は中央が緩やかにくぼんでいる。堆積土は焼土塊や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。

本土坑からは土師器68点、石器・石製品2点が出土し、このうち土師器1点を図示した。

図125-7は土師器の壺である。長胴で口縁部は外反し、口縁端部は舌状となる。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。体部外面の調整は摩滅により観察できない。体部内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。

本土坑の性格は不明であり、所属時期は出土遺物の特徴から、奈良時代頃と判断した。(佐藤)

15号土坑 SK 15 (図119)

本土坑は、調査区東部の丘陵南側の縁辺、I-17グリッドに位置する。検出面はLⅢで、にぶい褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北東側に近接して33号住居跡が位置している。本土坑は木根の搅乱により、周壁の一部は遺存していない。

本土坑の平面形は梢円形を呈する。規模は、長径が遺存値で162cm、短径152cm、検出面からの深さは最大40cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、南西部の中ほどに段を有する。底面は中央が緩やかにくぼんでいる。遺構内堆積土は2層に分けられた。ℓ1はLⅣ塊や黒褐色土塊を微量に含むにぶい褐色土、ℓ2は黒褐色土塊を微量に含む灰黄褐色土である。いずれもLⅢに由来し、斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格や所属時期は不明である。

(佐藤)

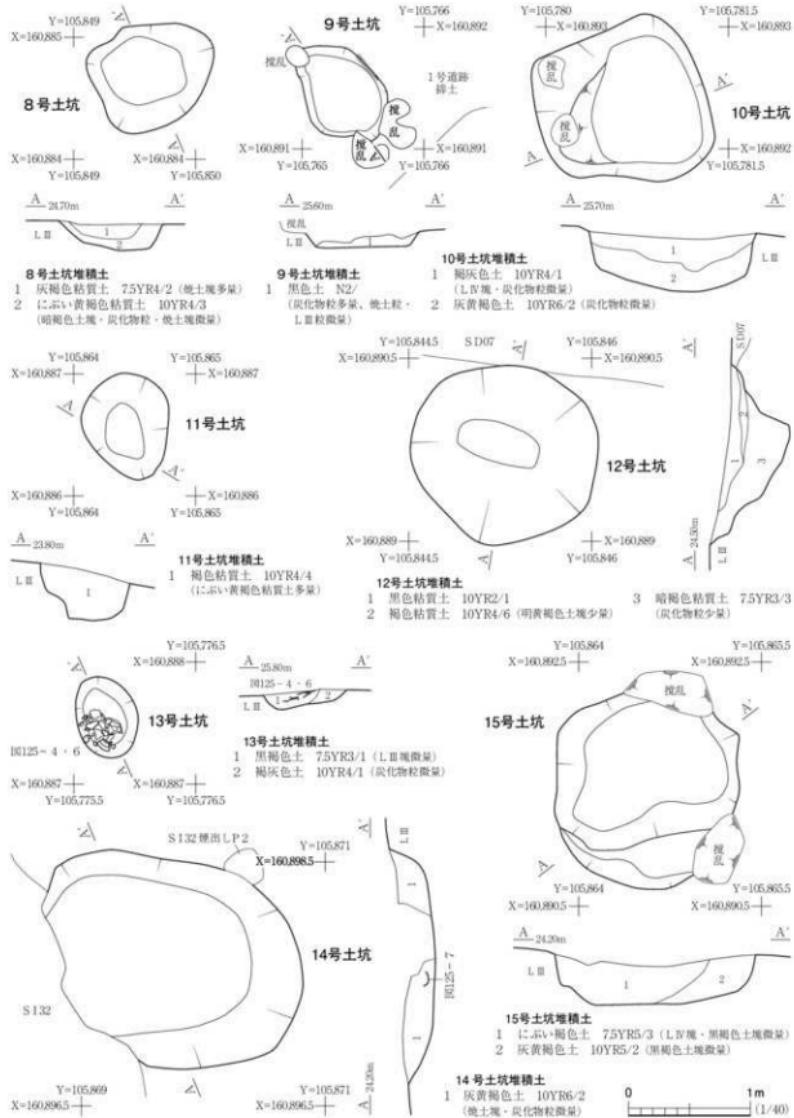


図119 8~15号土坑

16号土坑 SK 16 (図120・125、写真101)

本土坑は、調査区東部の丘陵頂部、I - 16グリッドに位置する。検出面はL IIIで、にぶい褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北東側には42・43号住居跡が位置している。本土坑の北東部周壁の一部は擾乱により遺存していない。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸266cm、短軸170cm、検出面からの深さは最大19cmである。周壁は南側が緩やかな角度で、それ以外は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、ℓ 1はL III塊や炭化物粒を微量に含むにぶい褐色土、ℓ 2は褐色土塊を多量に含む灰褐色土である。いずれも人為堆積土と判断した。

本土坑からは弥生土器1点、土師器29点が出土し、このうち、土師器1点を図示した。

図125-1は土師器の杯である。口クロ成形とみられる。外面は摩滅が著しく調整は確認できず、内面にはミガキののち黒色処理が施されている。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土した土器から平安時代と判断した。

(佐藤)

17号土坑 SK 17 (図120、写真101)

本土坑は、調査区北東部の丘陵頂部、I - 16グリッドに位置する。検出面は43号住居跡堆積土の上面とL IIIで、縁辺の一部に焼土のめぐる褐灰色土を基調とした範囲として確認した。43号住居跡と重複し、本土坑が新しい。本土坑の南東側約1mには2号溝跡が位置している。

本土坑の平面形は南北に延びる隅丸長方形を呈する。規模は、長軸103cm、短軸70cm、検出面からの深さは最大22cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、西側周壁の上部には、わずかに焼土化した範囲が認められる。底面は平坦で、掘り込みはL IV上面にまで達している。遺構内堆積土は3層に分けられた。ℓ 1はL III粒を微量に含む褐灰色土で、流れ込んだ土と判断した。ℓ 2は焼土粒を多量に含む黒色炭層である。ℓ 3はL III粒や焼土粒を微量に含む褐灰色土である。ℓ 2・3は土質の性状から人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は西側周壁の上部が焼土化し、堆積土中に炭層が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は出土遺物に乏しく不明だが、類例から古代の可能性がある。

(佐藤)

18号土坑 SK 18 (図120・125、写真131・132)

本土坑は、調査区東部の丘陵頂部、F - 17グリッドに位置する。検出面はL IIIで、黒褐色土や灰褐色土が斑状に認められる範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北西側約1.6mには40号住居跡が位置している。

本土坑の平面形は不整円形を呈し、規模は、直径200～220cm、検出面からの深さは最大46cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面はわずかにくぼむ。遺構内堆積土は4層に分けられた。ℓ 1・3はL III粒を微量に含む黒褐色土、ℓ 2・4はL IIIを由来とする灰褐色土である。ℓ 2

は炭化物粒をごく微量に、 ℓ 4は焼土塊を多量に含む。いずれも人為堆積土で、互層となることから、短期間のうちに埋めたものと判断した。

本土坑からは、土師器82点、須恵器2点、石器・石製品が1点出土し、このうち土師器1点と須恵器1点を図示した。底面の北東側からは、図125-8の破片がまとめて出土している。

図125-8は土師器の壺である。ロクロ成形で体部は丸みを持ち、口縁部は水平に延びたのち短く外傾する。体部内面にはミガキのち黒色処理が施されている。口縁部内面には丁寧なミガキが施されている。口縁部から体部上半の外面にはロクロナデが明瞭に認められ、体部下半には、ヘラケズリが施されている。

同図-12は須恵器の壺である。外面にはロクロナデのちハケメが施され、一部はロクロナデのちカキメで調整される。胎土には粒径1~3mm程度の長石が多量に含まれる。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から平安時代、9世紀と考えられる。(佐藤)

19号土坑 SK 19 (図120・125、写真132)

本土坑は、調査区東部の丘陵頂部、G-17グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色土の範囲として確認した。36号住居跡のカマド煙道と重複し、本土坑が新しい。

本土坑の平面形は梢円形を呈し、規模は、長径113cm、短径77cm、検出面からの深さは最大7cmである。周壁はいざれも緩やかな角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は炭化物粒を微量に含むLⅡを由来とする褐灰色土の単層で、人為堆積土と判断した。

本土坑からは土師器22点が出土し、このうち、1点を図示した。図125-9はロクロ成形の土師器壺である。長胴で口縁部は外傾し、端部は短く垂下する。口縁部から体部上半にかけての外面にはロクロナデが認められ、体部下半にはヘラケズリが施されている。

本土坑の性格は不明で、所属時期は重複関係から平安時代、9世紀頃と判断した。(佐藤)

20号土坑 SK 20 (図120、写真101)

本土坑は、調査区北東部の丘陵突端部、E-17グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、東側にはグリッドピットが分布する。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸81cm、短軸62cm、検出面からの深さは最大28cmである。周壁は北東壁が垂直で、それ以外は急な角度で立ち上がる。底面は平坦である。周壁には焼土化した範囲が部分的に認められる。焼土面の厚さは、最大3cmであることを断ち割りで確認した。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒・炭化物粒を微量に含むLⅡを由来とする褐灰色土で、遺構の上部を覆う人為堆積土である。 ℓ 2は黒色炭層である。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁の上部が焼土化し、堆積土中に炭層が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は出土遺物に乏しく不明だが、類例から古代の可能性がある。(佐藤)

21号土坑 S K 21 (図120、写真101)

本土坑は、調査区の北東部、東側丘陵の突端、E-18グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、周辺にはグリッドピットが多く分布している。

本土坑の平面形は不整隅丸長方形で、規模は、長軸119cm、短軸62cm、検出面からの深さは最大32cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面は段差があり、北西側が1段高い。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は褐色土、 ℓ 2は暗褐色土で、いずれも炭化物粒や焼土粒を含むことから、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

22号土坑 S K 22 (図120)

本土坑は、調査区の北東部、丘陵の頂部の平坦面であるF-18グリッドに位置する。検出面はLⅢで、暗褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南西約1.4mに39号住居跡が位置している。本土坑の西壁の一部は木根の搅乱により遺存していない。

本土坑の平面形は南北に延びる隅丸長方形である。規模は、長軸115cm、短軸55cm、検出面からの深さは最大21cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。西側周壁の上部には、わずかに焼土化した範囲が認められ、その厚さは3cmである。底面は凹凸が著しい。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒や焼土粒を多量に含む暗褐色土で、周壁の崩落土と判断した。 ℓ 2は炭化物粒を多量に、焼土粒を少量に含む黒色土で、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は西側周壁の上部が焼土化し、堆積土中に炭化物粒が多量に認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代頃の可能性がある。

(佐藤)

23号土坑 S K 23 (図121)

本土坑は、調査区の北東部、丘陵頂部の平坦面、F-18グリッドに位置する。検出面はLⅢで、暗褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北から南西側にはグリッドピットが多く分布している。

本土坑の平面形は不整梢円形で、規模は、長径175cm、短径は103cm、検出面からの深さは最大18cmである。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がり、断面形は皿形である。底面は中央に向かわざかにくぼむ。遺構内堆積土は炭化物粒を少量に含むLⅡを由来とする暗褐色土の単層で、上部からの流れ込みと判断した。本土坑から土師器が4点出土しているが、いずれも小片の為、図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)



図120 16~22号土坑

24号土坑 S K 24 (図121)

本土坑は、調査区の北東隅部、東側丘陵の突端、D - 19グリッドに位置する。検出面はLVで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。北半部はトレンチの掘削により遺存していない。本土坑と重複する遺構はないが、南西側3.8mには25号土坑が位置する。

本土坑の平面形は梢円形を呈し、規模は、長径151cm、短径は遺存値で96cm、検出面からの深さは最大34cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は焼土粒・炭化物粒をごく微量に含むLⅡを由来とする褐灰色土の単層で、斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

25号土坑 S K 25 (図121、写真101)

本土坑は、調査区の北東隅部、東側丘陵の突端部、D - 18グリッドに位置する。検出面はLVで、褐灰色土の範囲として確認した。重複する遺構はないが、北東側3.8mには24号土坑が位置する。

本土坑の平面形は梢円形を呈し、規模は、長径140cm、短径117cm、検出面からの深さは最大24cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土はLⅡに由来する褐灰色土の単層で、炭化物粒をごく微量に含む。斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑からは土師器が1点出土しているが、小片のため図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降である。

(佐藤)

26号土坑 S K 26 (図121)

本土坑は、調査区の東部、丘陵突端の緩斜面、E - 16グリッドに位置する。検出面はLVで、黒褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はない。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸85cm、短軸60cm、検出面からの深さは13cmである。周壁は南東側が急な角度で、それ以外は緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦である。南東部の底面にはピット状の掘り込みが認められる。平面形は不整梢円形で、規模は、長径55cm、短径35cm、深さは40cmである。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を微量に含む黒褐色土で、 ℓ 2はLⅢを由来とする灰黄褐色土で、砂礫をごく微量に含む。いずれも斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑からは土師器が5点、石器・石製品が1点出土しているが、小片のため図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

27号土坑 S K 27 (図121、写真101)

本土坑は、調査区東部、丘陵の斜面裾部、E・F - 15グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色

砂質土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、周辺にはグリッドピットが分布する。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸123cm、短軸97cm、検出面からの深さは最大37cmである。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は微細な凹凸が目立つ。北西壁付近の上部や底面の北東部には、焼土化した部分が顕著に認められる。その厚さは最大6cmである。遺構内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を微量に含む褐灰色砂質土である。 ℓ 2は焼土塊や炭化物粒を多量に含む褐灰色砂質土である。 ℓ 3はL Vに由来する砂礫や焼土粒、炭化物粒を微量に含む黒色砂質土である。土質の性状からいざれも人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁や底部が一部焼土化し、堆積土中に焼土や炭化物が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。

(佐藤)

28号土坑 S K 28 (図121)

本土坑は、調査区の中央部、丘陵頂部の縁辺、I - 11・12グリッドに位置する。検出面はL IVで、灰黄褐色粘質土を基調とした範囲として確認した。10号住居跡と重複し、本土坑が古い。本土坑の北西側約3.6mには46号住居跡が位置する。

本土坑の平面形は梢円形で、規模は、長径143cm、短径111cm、検出面からの深さは最大で36cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が著しい。遺構内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を微量に含む灰黄褐色粘質土で、 ℓ 2・3は小円礫や炭化物粒を含むL IIを由来とする褐灰色土である。いざれも人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

29号土坑 S K 29 (図121, 写真101)

本土坑は、調査区中央部、丘陵北東側斜面の中腹、H - 12グリッドに位置する。検出面はL Vで、黒褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、西側約1.6mには30号土坑が位置する。

本土坑の平面形は不整方形で、規模は、一辺82cm、検出面からの深さは最大で18cmである。周壁は急な角度で立ち上がる。底面はL Vの円礫が露出し、凹凸が著しい。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土、 ℓ 2はL IIに由来する褐灰色土である。いざれも炭化物粒を多量に、L V由来の小円礫を少量に含むことから、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

30号土坑 S K 30 (図121)

本土坑は、調査区中央部、北東側斜面の中腹、H - 12グリッドに位置する。検出面はL Vで、褐灰色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、東側約1.6mには29号土坑が位置する。

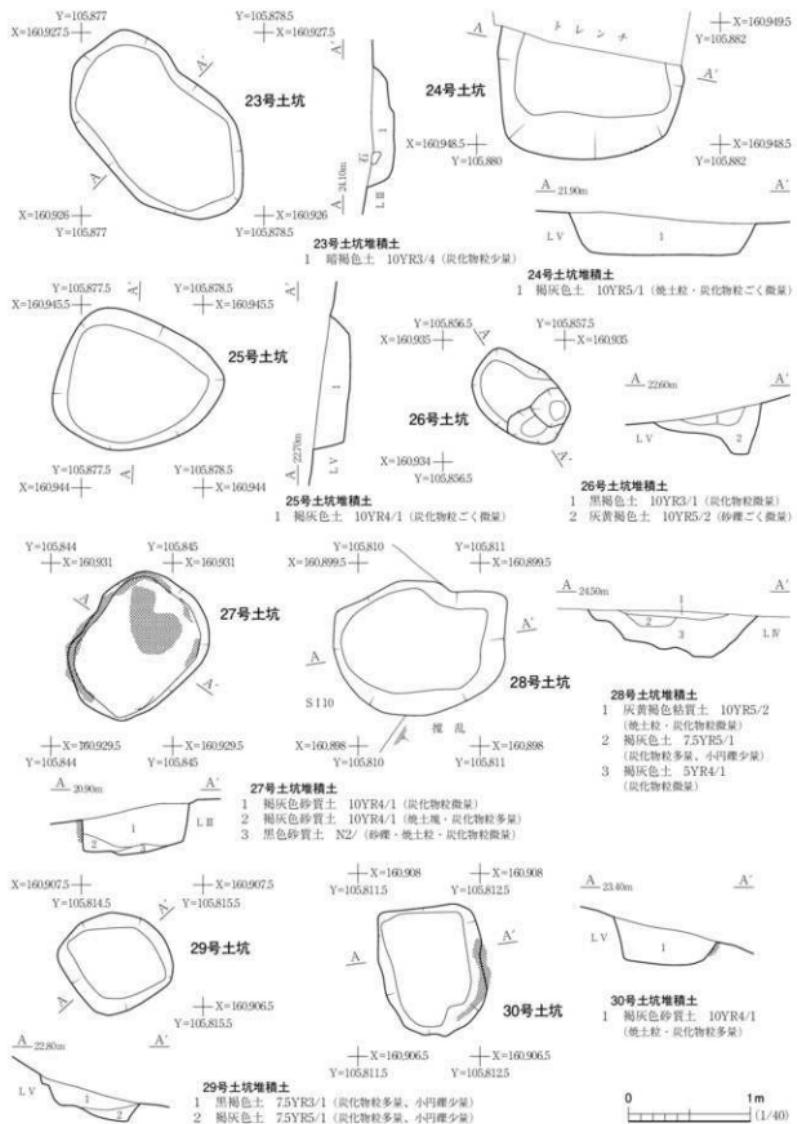


図121 23~30号土坑

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、南東隅・南西隅は丸みを帯びる。規模は長軸107cm、短軸87cm、検出面からの深さは最大32cmである。周壁は南東壁が緩やかで、それ以外は急な角度、もしくは垂直に立ち上がる。底面はLVの円礫が露出し、凹凸が著しい。東壁は焼土化した部分が認められ、その厚さは最大4cmである。遺構内堆積土はLIIを由来とする褐灰色砂質土の単層で、焼土粒・炭化物粒を多量に含む。遺構全体を覆う人為堆積土である。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁に焼土化した部分があり、堆積土中には焼土粒や炭化物粒が多量に認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。(佐藤)

31号土坑 SK 31(図122)

本土坑は、調査区中央部、丘陵頂部の縁辺、H-11グリッドに位置する。検出面はLIIIで、褐灰色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南西側には46号住居跡が隣接して位置する。

本土坑の平面形は隅丸長方形で、規模は、長軸144cm、短軸86cm、検出面からの深さは最大で9cmである。周壁は緩やかな角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は黒褐色土塊や炭化物粒を微量に含む褐灰色土で、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

32号土坑 SK 32(図122、写真102)

本土坑は、調査区の東部、谷地形の底部であるG-14グリッドに位置する。検出面はLVで、縁辺に焼土がめぐる褐灰色土を基調とした範囲として確認した。北東隅部は木根の搅乱により遺存していない。本土坑と重複する遺構はないが、南西側約44mには33号土坑が位置する。

本土坑の平面形は長方形を呈する。規模は、長軸128cm、短軸72cm、検出面からの深さは最大21cmである。周壁はいずれも垂直に立ち上がる。底面は平坦を基調とするが、一部にLVの円礫が露出し、凹凸が認められる。東壁以外の周壁の上部には、焼土化が認められ、厚さは最大6cmで、上端に向かい厚みを増している。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1はLIIに由来する褐灰色土で、焼土粒・炭化物粒を微量に含む。斜面上部からの流れ込みと判断した。 ℓ 2は炭化物粒を多量に、LIII塊や焼土粒を微量に含む黒色土で、人為堆積土である。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁に焼土化した部分が認められること、 ℓ 2中に炭化物粒が多量に含まれていることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。(佐藤)

33号土坑 SK 33(図122)

本土坑は、調査区の東部、谷地形の底部であるH-14グリッドに位置する。検出面はLVで、褐灰色砂質土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北東側約4.4mには32号土坑が位置する。H14 G P 1~3と重複し、本土坑が古い。

本土坑の平面形は楕円形で、規模はいずれも遺存値で、長径が81cm、短径が65cm、検出面からの深さは最大で18cmである。周壁は南西側が急な角度で、南東側は緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦を基調とし、一部にLVの円窪が露出し、微細な凹凸が認められる。遺構内堆積土には焼土塊や炭化物粒が多量に含まれることから、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

34号土坑 S K 34 (図122、写真102)

本土坑は、調査区の中央部、北東側斜面の裾部、H-13グリッドに位置する。検出面はLVで、褐色土の範囲として確認した。北側の上端付近は擾乱により遺存していない。本土坑と重複する遺構はないが、北側には20・21号溝跡が隣接して位置する。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸104cm、短軸53cm、検出面からの深さは最大20cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面はわずかにくぼむ。西壁を除く周壁の下位から中位にかけて、焼土化が認められ、厚さは最大2cmである。遺構内堆積土は2層に分けられた。 $\ell 1$ はLIIを由来とする褐色土で、焼土塊・炭化物粒を微量に含む。斜面上部からの流れ込みである。 $\ell 2$ は黒褐色土で、炭化物粒を多量に含む。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁に焼土化した部分が認められ、堆積土中に炭化物粒が多量に含まれることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。

(佐藤)

35号土坑 S K 35 (図122)

本土坑は、調査区の北部、北側斜面の裾部、E-10グリッドに位置する。検出面はLIIIで、暗褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北西側5.6mには51号住居跡が位置する。

本土坑の平面形は楕円形で、規模は、長径109cm、短径81cm、検出面からの深さは最大で12cmである。周壁は緩やかな角度で立ち上がり、断面形は皿形である。底面はLVの砂窪が露出し、微細な凹凸が認められる。遺構内堆積土は2層に分けられた。 $\ell 1$ は炭化物粒や焼土粒を少量に含む暗褐色土で、斜面上部からくぼみに堆積した流れ込みと判断した。 $\ell 2$ は炭化物粒や焼土粒を多量に含む黒色土である。人為堆積土で、遺構の底面を覆う。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

36号土坑 S K 36 (図122)

本土坑は、調査区の西部、北側斜面の中位、H-9グリッドに位置する。検出面はLIIIで、褐色土を基調とした範囲として確認した。1号遺跡と重複し、本土坑が古い。本土坑の北側約2~3mには41・42号土坑が位置する。

本土坑の平面形は楕円形である。規模は、長径167cm、短径は遺存値で131cm、検出面からの深

さは最大で17cmである。周壁は緩やかな角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は炭化物粒を微量に含む褐灰色土の単層で、上部から流れ込んだ土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐 藤)

37号土坑 S K 37 (図122)

本土坑は、調査区西部、北西側斜面の中腹、H-7グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、同一標高の東側1.4mには18号溝跡が位置する。

本土坑の平面形は楕円形で、規模は、長径154cm、短径115cm、検出面からの深さは最大で16cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は逆台形である。底面は平坦である。遺構内堆積土はLⅢ塊・焼土粒・炭化物粒を微量に含む黒褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。本土坑からは弥生土器7点、土師器3点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降である。

(佐 藤)

38号土坑 S K 38 (図122)

本土坑は、調査区の西部、北西側斜面の裾部、E・F-9グリッドに位置する。検出面はLⅢで、ぶい黄褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、同一標高の南東側2.3mには39号土坑が位置する。

本土坑の平面形は円形で、規模は、直径66cm、検出面からの深さは最大で12cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は擂鉢状になる。遺構内堆積土は炭化物粒を微量に含むにぶい黄褐色土の単層で、斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑からは土師器5点、須恵器1点、石器・石製品1点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降である。

(佐 藤)

39号土坑 S K 39 (図122)

本土坑は、調査区の西部、北西側斜面の裾部、F-9グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、同一標高の北西側2.3mには38号土坑が位置する。

本土坑の平面形は円形で、規模は、直径63cm、検出面からの深さは最大で25cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を多量に含む黒褐色土、 ℓ 2は焼土粒を少量に、炭化物粒を微量に含む暗褐色土で、いずれも人為堆積土と判断している。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐 藤)

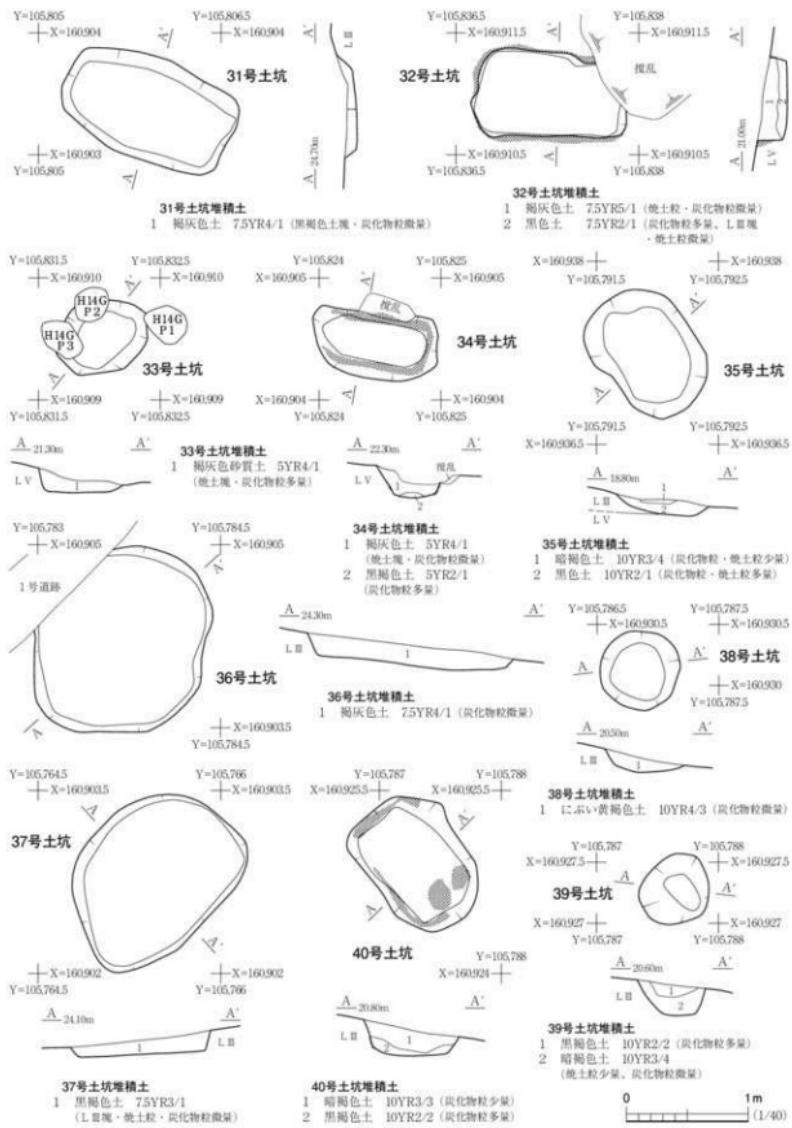


図122 31~40号土坑

40号土坑 S K 40 (図122、写真102)

本土坑は、調査区西部、北西側斜面の下位、F-9グリッドに位置する。検出面はLIIIで、暗褐色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、斜面上部、南西側1.6mには48号住居跡が位置している。

本土坑の平面形は隅丸長方形である。規模は、長軸115cm、短軸83cm、検出面からの深さは最大24cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面は平坦を基調とするが、わずかに微細な凹凸が確認でき、炭化物粒が吸着している。周壁の北西と南西の一部は、底面から約10cmの高さまで焼土化した部分が認められる。焼土化した部分の厚さは最大2cmである。底面は南東隅部に焼土化が斑状に認められた。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒を少量に含む暗褐色土である。 ℓ 2は炭化物粒を多量に含む黒褐色土で、堆積土の下部に薄く堆積している。いずれも人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は周壁や底面に焼土化した部分が認められ、堆積土に炭化物粒を多量に含むことから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。

(佐藤)

41号土坑 S K 41 (図123、写真102)

本土坑は、調査区の中央部、北東方向に延びる谷地形の上部、H-9グリッドに位置する。検出面はLIIIで、黒褐色土やにぶい黄褐色土を基調とした範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、斜面上部には42号土坑が隣接して位置する。

本土坑の平面形は、上端は不整梢円形、中端は隅丸長方形を基調とする。規模は、上端で長径150cm、短径127cm、中端で長軸119cm、短軸85cmである。検出面からの深さは、最大37cmである。周壁は下端から中端までは急な角度で、中端から上端は緩やかに立ち上がる。南側の底部付近から南壁周辺の下部には、強く焼土化した部分が確認でき、厚さは2cmである。底面は平坦を基調とする。

遺構内堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1~3は焼土粒や炭化物粒を多量に含む黒褐色土やにぶい黄褐色土を基調とし、人為堆積土と判断した。 ℓ 4は焼土粒を多量に含むLIII由来の暗褐色土で、周壁の崩落土である。 ℓ 5は炭化物粒を多量に含む黒色土で、堆積土の下部に薄く堆積している。

本土坑からは、土師器22点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本土坑は、周壁や底面に焼土化した部分が認められ、堆積土中に炭化物粒を多量に含むことから、木炭焼成土坑と考えられる。本来の平面形は隅丸長方形だったが、木炭を取り出した際に、土坑の上端が掘削により壊されたものと考えられる。所属時期は、出土した土師器から奈良・平安時代と考えられる。

(佐藤)

42号土坑 S K 42 (図123)

本土坑は、調査区の中央部、北東方向に延びる谷地形の上部、H-9グリッドに位置する。検出

面はLⅢで、暗褐色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、斜面下位の北東側に隣接して、41号土坑が位置する。

本土坑の平面形は稍円形で、規模は、長径155cm、短径107cm、検出面からの深さは最大で38cmである。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がり、底面は小さく、鉢鉢状になる。遺構内堆積土は3層に分けられた。いずれも炭化物粒を微量に含む暗褐色土や褐色土で、レンズ状に堆積することから、斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑からは土師器が2点出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

43号土坑 SK 43 (図123)

本土坑は、調査区の北西部、谷地形の上位、G-9グリッドに位置する。検出面はLⅢで、にぶい黄褐色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、北側には10号溝跡が隣接して位置する。

本土坑の平面形は不整梢円形で、北側に向かってすぼまる。規模は、長径188cm、短径98cm、検出面からの深さは最大で33cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は炭化物粒や焼土粒を微量に含むにぶい黄褐色土で、 ℓ 2は焼土粒を微量に含む褐色土である。いずれもLⅡを由来とし、レンズ状に堆積することから、斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

44号土坑 SK 44 (図123、写真102)

本土坑は、調査区の西隅部、北西側斜面の裾部、G-5グリッドに位置する。検出面はLⅢで、縁辺の一部に焼土がめぐる褐灰色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南西側3.2mには1・2号烟跡が、北東側1mには45号土坑が位置する。

本土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸104cm、短軸81cm、検出面からの深さは最大28cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、南東側には段差が認められる。底面は凸凹が顕著に認められる。周壁の中位から上部には焼土化した部分が認められ、赤褐色を基調とするが、一部は還元し青灰色である。厚さは最大2cmである。遺構内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はLⅡに由来する褐灰色土で、LⅢ粒や炭化物粒を微量に含む。斜面上部からの流れ込みと判断した。 ℓ 2は炭化物粒を微量に含み、LⅢを由来とするにぶい褐色土と焼土の混土で、周壁の崩落土と判断した。 ℓ 3は焼土塊を微量に含む黒色炭層である。本土坑からは土師器が1点出土しているが、小片のため図示していない。

本土坑は周壁には焼土化した部分があり、堆積土中に炭層が認められることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は不明だが、類例から古代の可能性がある。

(佐藤)

45号土坑 S K 45 (図123・125、写真131)

本土坑は、調査区の西隅部の北西側斜面の裾部、G-5グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土の範囲として確認した。本土坑と重複する遺構はないが、南西側5.2mには1・2号煙跡が、南西側1mには44号土坑が位置する。

本土坑の平面形は不整円形で、規模は直径が最大59cm、検出面からの深さは最大で11cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は逆台形である。底面は北側に向かいわずかに下に傾く。遺構内堆積土はLⅢ粒を微量に含む黒褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。本土坑からは土師器16点、石器・石製品1点が出土し、このうち土師器1点を図示した。図125-2は土師器の杯である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部の外外面にはヨコナデ、体部から底部の外外面にはヘラケズリが施されている。内面にはミガキのち黒色処理が施されている。

本土坑の性格は不明であり、所属時期は出土遺物の様相を考慮すると、奈良時代、8世紀頃と判断した。

(佐藤)

46号土坑 S K 46 (図123・125、写真102・132)

本土坑は、調査区の東部、H-17グリッドのLⅢ上面から検出された。北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地する。本遺構の南西側は、31号住居跡の煙道と重複し、これより新しい。本土坑の周辺には近世墓とみられる1号塚や、47・50号土坑が近接して位置する。LⅢ上面の検出作業時に、褐色土の範囲として確認した。

本土坑の平面形は、不整隅丸長方形で、規模は、長軸92cm、短軸は74cm、検出面からの深さは45cmである。周壁はいずれも垂直に立ち上がり、断面形は箱形である。底面はわずかに凹凸が認められる。LⅣ下面を底面とし、一部はLⅤの砂礫が露出している。

遺構内堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1と3は黄褐色土小塊を多量に含む褐色土で、 ℓ 2は褐色土小塊を多量に含む黄褐色土である。各層の堆積状況から、本遺構はLⅢ・Ⅳを由来とする土で、掘削後まもなく埋めたものと判断した。

本土坑からは煙管4点、古銭6点、木製品1点が出土し、すべて図示した。

ℓ 1・2中からは、約20~40cmの凝灰岩の礫が3点出土している。土坑を埋める際に投げ入れたものと判断した。底面の中央からは図125-20・21の銭貨6枚が重なった状態で出土している。また、底面からは同図-16~19・22の煙管の一部が出土している。

図125-16・17は煙管の火皿で、雁首は遺存していない。16の内面にはススが付着している。

同図-18・19は煙管の吸口である。18の内面には木製の羅字が遺存する。

同図-20・21は銭貨「寛永通寶」で、いわゆる「新寛永通寶」である。20は5枚が上下に重なり、銹着している。最も下面に位置するものの裏面には「文」の文字が認められる。いわゆる「文銭」である。

同図-22は煙管の羅字である。同図-19の吸口に差し込まれた状態で出土した。吸口に差し込

まれた部分から3cmの長さで遺存している。

本土坑は6枚の銭貨と煙管が出土したことから、土坑墓と考えられる。被葬者の姿勢は屈葬、もしくは座葬の可能性がある。堆積土中から出土した、凝灰岩の礫は墓坑の閉塞に用いられた可能性がある。所属時期は出土した銭貨がすべて「新寛永通寶」であることから、江戸時代、18世紀以降と判断した。

(佐藤)

47号土坑 S K 47 (図123、写真102)

本土坑は、調査区の東部、H-17グリッドのLⅢ上面で検出された。北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地する。本土坑と重複する遺構はないが、周辺には近世墓とみられる1号塚や、46・50号土坑が近接して位置する。LⅢ上面の検出作業時に、褐色土の範囲として確認した。

本土坑の平面形は隅丸長方形で、規模は、長軸146cm、短軸97cm、検出面からの深さは106cmである。周壁はいずれも垂直に立ち上がり、上部はわずかに外傾する。掘り込みはLⅤの上面に達し、底面は平坦に整えられている。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は浅黄橙色土小塊を多量に含む褐色土で、人為堆積土である。 ℓ 2は浅黄橙色土小塊を少量に含む、黄褐色土である。いずれも地山に由来する土で、掘削後まもなく埋めたものと判断した。本土坑の堆積土中からは、土師器が1点出土しているが、小片のため図示していない。

本土坑は、形態と人為堆積土の特徴から、土坑墓と判断した。遺構の掘り込みが深いことから、被葬者は座葬の可能性がある。所属時期は他の墓跡を参考に江戸時代と判断した。

(佐藤)

48号土坑 S K 48 (図123)

本土坑は、調査区の東部、北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面、G-17・18グリッドに位置する。検出面はLⅢで、灰褐色砂を基調とした範囲として確認した。39号住居跡と重複し、本土坑が古い。本土坑の南西側80cmには19号土坑が位置する。北壁の一部は木根による搅乱により遺存していない。

本土坑の平面形は不整梢円形の可能性があり、規模は長径が遺存値で97cm、短径75cm、検出面からの深さは最大で16cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が著しい。遺構内堆積土は黒褐色土塊を微量に含む灰褐色砂の単層で、上部から流れ込んだものと判断した。

本土坑からは土師器1点、石器・石製品が1点出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本土坑の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

49号土坑 S K 49 (図124)

本土坑は、調査区の西隅部の斜面裾部、F-4グリッドに位置する。検出面はLⅢで、灰黄褐色土を基調とした範囲として確認した。10号溝跡と重複し、本土坑が古い。南東側8.4mには44号土坑が位置する。



図123 41~48号土坑

本土坑の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸95cm、短軸は遺存値で75cm、検出面からの深さは最大で26cmである。周壁は南東・南西壁は急な角度で、北東・北西壁は緩やかに立ち上がる。南東壁の一部は焼土化していた。焼土化した部分の厚さは、1cm未満である。底面は中心がわずかにくぼむ。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は黒褐色土粒を微量に含む灰黄褐色土で、斜面上部からの流れ込みと判断した。 ℓ 2は焼土粒と炭化物粒を少量に含む褐色土で、人為堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑は、周壁の一部が焼土化していることや、堆積土中に焼土粒や炭化物粒が少量に含まれることから、木炭焼成土坑と考えられる。所属時期は遺構の重複関係や類例から、古代以降の可能性がある。

(佐藤)

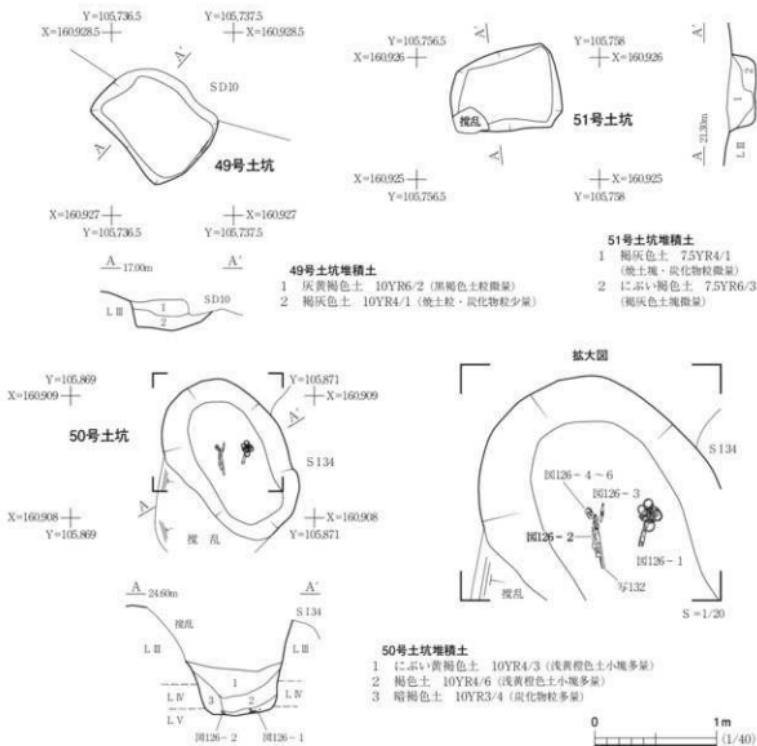


図124 49~51号土坑

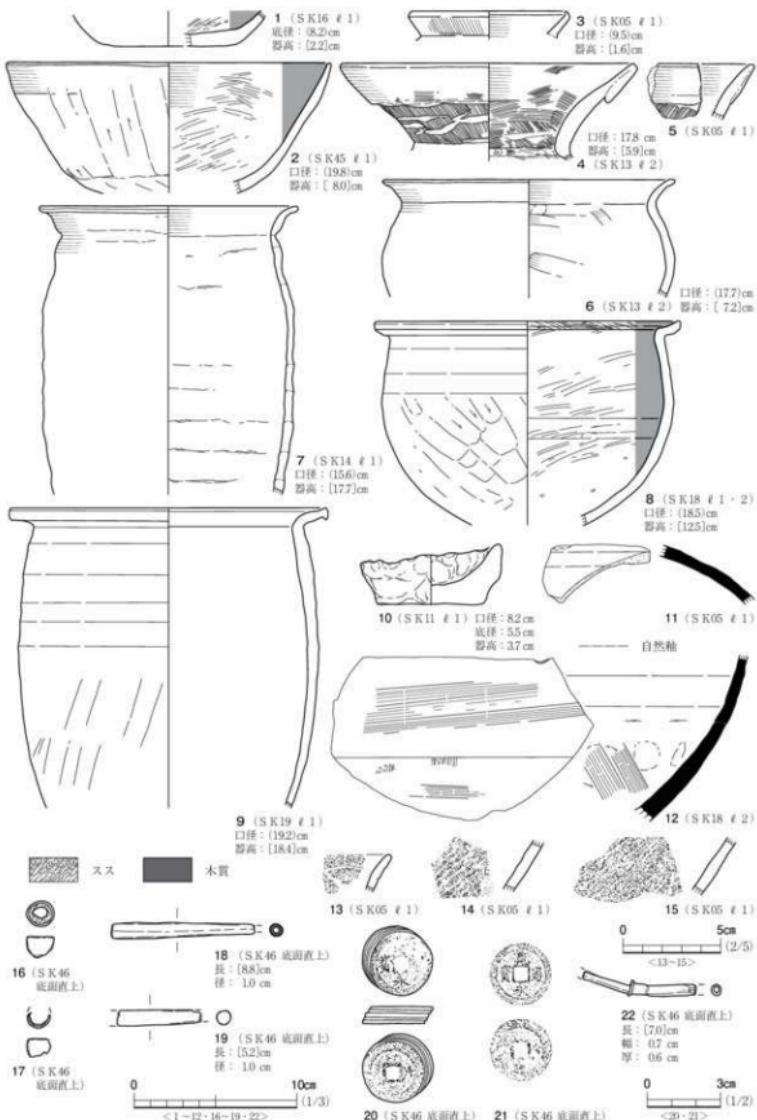


図125 5・11・13・14・16・18・19・45・46号土坑出土遺物

50号土坑 S K 50

遺構（図124、写真104）

本土坑は、調査区の東部、H-17・18グリッドのLⅢ上面から検出された。北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地する。本土坑の南東側は34号住居跡と重複し、これより新しい。本土坑の周辺には近世墓とみられる1号塚や、46・47号土坑が近接して位置する。LⅢ上面の検出作業時に、にぶい黄褐色土を基調とした範囲として確認した。本遺構の南西壁の上部は、後世の搅乱により遺存していない。

本土坑の平面形は、隅丸長方形を呈する。規模は、いずれも遺存値で長軸135cm、短軸90cm、検出面からの深さは最大で82cmである。周壁はいずれも垂直もしくは急な角度で立ち上がり、断面形は箱形である。底面はLⅤ上面で、平坦を基調とする。

遺構内堆積土は3層に分けられた。ℓ1・2は、LⅣを由来とする浅黄橙色土小塊を多量に含むにぶい黄褐色土と褐色土である。ℓ3は炭化物粒を多量に含む暗褐色土である。土質が近似することから、LⅢ・Ⅳに由来する土を用いて、本土坑の掘削後まもなく埋めたものと判断した。

遺物（図126、写真103・104・132・133）

本土坑からは、錫杖頭1点、和鉄1点、小柄1点、煙管の雁首1点・吸口1点、銭貨5枚が出土した。このうち、遺存状況が良好な錫杖頭1点、和鉄1点、煙管の吸口1点、銭貨5枚を図示した。小柄は脆弱で実測できなかつたため、現状写真とX線写真のみを掲載した（写真132）。

底面の中央から東側からは、図126-1の錫杖頭が出土している。その西側には、同図-2の和鉄、同図-3の煙管、同図-4～6の寛永通寶5枚、写真132の小柄がまとまって重なるように出土している。小柄や煙管には鋳造した繊維が付着しており、布製の袋に収められていた可能性がある。また、底面から出土した遺物の上部には黒色土・黒褐色土が堆積していた。

図126-1は錫杖頭で、内部には木柄の先端が遺存する。実測図の正面が出土時に上に向いていた面である。X線写真では、鑄造が確認できる。鑄造の銅製で、上半の輪部と下半の袋部からなる。輪部は袋部から連続して延びる枝と輪からなる。輪部の上端には棒状の突起があり、平行した沈線が4条めぐり、蓮弁文、「×」の意匠が認められる。輪部の外縁には上下4箇所に三日月形の突起を持つ。袋部の断面形は八角形で、外面には平行した4条の沈線による区画帯と、蓮弁文帯が交互に5段めぐる。両側縁には、錫杖頭と木柄を結合するための目釘孔が対になるように認められる。

輪部の中側には枝から左右一対の突起が延びる。突起は左右対称で、水平方向に短く延びたのち、二方向に分かれ、一方は垂直方向に、一方は斜め下方に緩やかなカーブを描いて延びる。

輪部の左右には、それぞれ2個と3個の遊環が付属する。いずれも円形で直径4.6cm、断面形は方形もしくはソロバン玉形を呈する。遊環bにのみ、1箇所わずかに途切れる部分がある。

木柄は直径1.6cmほどの丸棒状で、下端は遺存せず、上端はわずかに尖る。錫杖頭の袋部に挿入されていた部分はわずかに細く、両側縁には錫杖頭と結合するため、直径5mmほどの穿孔を有する

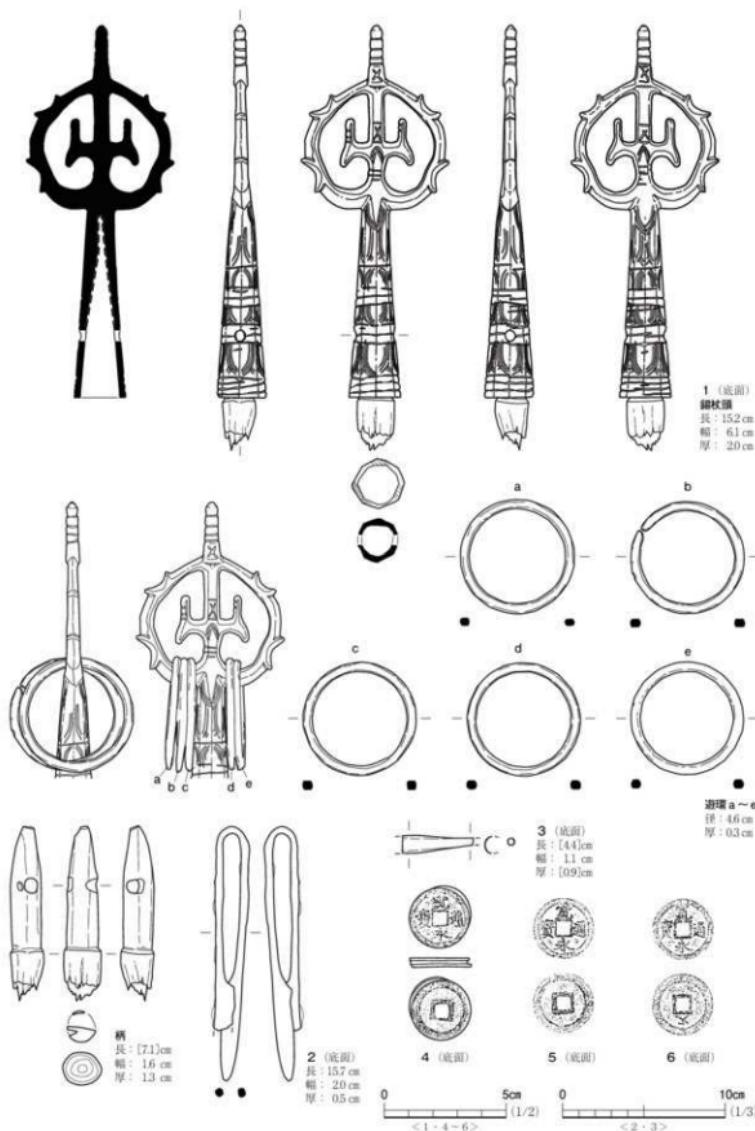


図126 50号土坑出土遺物

ものの、目釘は打たれていない。また、左側縁には盲孔が認められる。

同図-2は鉄製の和鉄である。刃部から握り部まで遺存している。鉄製の棒を折り曲げ、その先端を刃として成形している。

同図-3は銅製の煙管の吸口である。薄手で口元に向かうにつれ、すぼまる。底面から出土した未図化の雁首と、対になると考えられる。

同図-4～6は銭貨「寛永通寶」である。4・5は「古寛永通寶」、6は「新寛永通寶」で裏面に「文」の文字が認められ、いわゆる「文銭」である。4は3枚が上下に重なり、鋳着している。

写真132は小柄である。刃部は鉄製、柄部は銅製である。全長20.3cmで、X線写真を参考にするとき片刃で、刃部側にのみ閏を有する。柄部は薄い銅板を加工して成形している。

まとめ

本土坑は北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地し、密集して分布する近世墓のひとつである。平面形は隅丸長方形で、長軸135cm、短軸は90cm、検出面からの深さは最大で82cmであり、被葬者は屈葬、もしくは座葬の可能性がある。

底面から出土した錫杖頭は副葬品と考えられ、被葬者は僧侶や里修験に関連した人物の可能性がある。同じく副葬品とみられる小柄、和鉄、煙管、銭貨は、底面からまとめて重なるように出土している。小柄や煙管には鋳化した繊維が付着していることから、頭陀袋に収められていた可能性がある。5枚の銭貨はいわゆる「六道銭」と考えられる。

本土坑の性格は墓坑であり、所属時期は出土した銭貨の組成が「古寛永通寶」もしくは「文銭」であることから、江戸時代、17世紀後半と判断した。
(佐藤)

51号土坑 SK 51 (図124)

本土坑は、調査区の北西部、斜面の中腹、F-6グリッドに位置する。検出面はLIIIで、褐色土を基調とした範囲として確認した。南西側は搅乱により遺存していない。本土坑と重複する遺構はないが、南西側2mに17号溝跡が位置する。

本土坑の平面形は長方形で、規模は長軸90cm、短軸69cm、検出面からの深さは最大で23cmである。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられた。 ℓ 1は焼土塊や炭化物粒を微量に含む褐色土で、 ℓ 2は褐色土塊を微量に含むにぶい褐色土である。いずれも斜面上部からの流れ込みと判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

第5節 溝 跡

1号溝跡 SD 01 (図127、写真105)

本溝跡は、調査区東側の平坦部、J-15グリッドに位置し、LIII上面で検出された。本溝跡と

重複する遺構はない。南側に近接して3・8号住居跡が、北側12mには本遺構とはほぼ並行に2号溝跡が延びる。南西端部は後世の搅乱により遺存していない。

本溝跡は北東-南西方向に延び、北から東に65度傾く。長さは遺存値で297m、幅60cm、検出面からの深さは最大で12cmを測る。底面はやや凹凸がみられるが、周壁は緩やかな角度で立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層で、流れ込みによるものと判断した。本溝跡からは、土師器13点、須恵器1点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(吉野)

2号溝跡 S D 02 (図127・132、写真105・131)

本溝跡は、調査区の東側、丘陵頂部の平坦面、G-18・19、H-17~19、I-15~17、J-14・15グリッドに位置する。検出面はLⅢで、暗褐色土を基調とした丘陵を横断する溝として確認した。一部は木根や搅乱により遺存していない。本溝跡は27・31・34号住居跡より新しく、I-16 G P 1より古い。本溝跡の南東側1.1mには、並行して1号溝跡が延びる。

本溝跡は北東-南西方向に直線的に延び、長さは遺存値で48.20m、幅は北東部が190cm、南西部が61cmで、南西に向かって幅を減じている。深さは最大35cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は北東隅部と中央部が葉研状となり、それ以外は「V」字形、逆台形を呈する。底面はおおむね平坦で、南西から北西に向かって緩やかに下り傾斜となる。遺構内堆積土は2層に分けられた。ℓ1は炭化物粒・焼土粒を微量に含む暗褐色土で、遺構全体を覆う人為堆積土である。ℓ2はLⅢを基調とした褐色土で、最下層に薄く水平に堆積している。溝跡が開口していた時期に堆積した可能性がある。

本溝跡からは弥生土器8点、土師器189点、須恵器10点、石器・石製品2点が出土した。このうち、須恵器1点、弥生土器1点を図示した。

図132-2は須恵器で、円面鏡の脚部の可能性がある。下端は水平となる。

同図-14は弥生土器の壺の体部上半である。幅の広い平行沈線で重菱文か三角文が施されている。

本溝跡の性格は不明だが、1号道路や、10号溝跡の一部と方向が一致することから、これに関連する可能性がある。所属時期は遺構の重複関係から、平安時代以降と判断した。

(佐藤)

3号溝跡 S D 03 (図128、写真105)

本溝跡は、調査区の西部の緩斜面、J-4・5、K-5グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。1号道路と重複しており、本溝跡が古い。本溝跡の北東側2.9mには4号溝跡が位置している。

本溝跡は北西-南東方向に延び、南東端の1号道路と重複する箇所が南に張り出す。長さは遺存値で9.28m、幅は南東部で72cm、北西部で37cmと北西に向かって幅を減じている。深さは最大29cm

を測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は北西部が「V」字状を基調とし、南西部は薬研状を呈する。底面は斜面下位に向かって緩やかに下り傾斜となる。遺構内堆積土は、炭化物粒・焼土粒を微量に含む黒褐色土の単層である。この層はLⅢに由来する土質で、自然堆積と判断した。本溝跡から弥生土器1点、土師器7点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

4号溝跡 SD 04 (図127)

本溝跡は、調査区の西部、丘陵の斜面上部、J・K-5グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。本溝跡と重複する遺構は認められないが、南東側に隣接して1号道跡が位置している。本溝跡の北側と南東側の周壁の一部は搅乱により遺存していない。

本溝跡は北東-南西方向に延び、南西隅部はテラス状になる。長さは、遺存値で1.71m、幅は57cm、深さは最大34cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は南西側がくぼみ、凹凸が認められる。遺構内堆積土は炭化物粒を多量に含む黒褐色土の単層で、土質の性状から人為堆積土と判断した。本溝跡から弥生土器1点、土師器2点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本溝跡の性格は不明だが、1号道跡に隣接し、延びる方向を同様にすることから、1号道跡に関連にする可能性がある。所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

5号溝跡 SD 05 (図127)

本溝跡は、調査区の西部、丘陵頂部の平坦面、J-6・7グリッドに位置する。検出面はLⅢで、1号道跡に伴う排土除去後の精査で、褐灰色土を基調とした溝として確認した。1号道跡と重複し、本溝跡が古く、北西側は1号道跡の掘削により遺存していない。本溝跡の南東側3mには20号住居跡が、南西側3.8mには4号土坑が位置している。

本溝跡は北西-南東方向に延びる。長さは、遺存値で3.64m、幅は118cm、深さは最大10cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は皿状である。底面は北西に向かって緩やかに下る。

遺構内堆積土はLⅢ塊を微量に含む褐灰色土の単層で、土塊を含むことから人為堆積土と判断した。本溝跡から須恵器2点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は重複関係や出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

6号溝跡 SD 06 (図127)

本溝跡は、調査区の東部、丘陵頂部の平坦面、J-16グリッドに位置し、LⅢ上面で検出された。26号住居跡と重複し、本溝跡が古い。本溝跡の南東側1mには、5号住居跡が位置している。

本溝跡は、東西方向に延び、北から西に80度傾く。現状の壁上端部での規模は、長さ2.0m、幅41cm、検出面からの深さは最大で8cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状であ

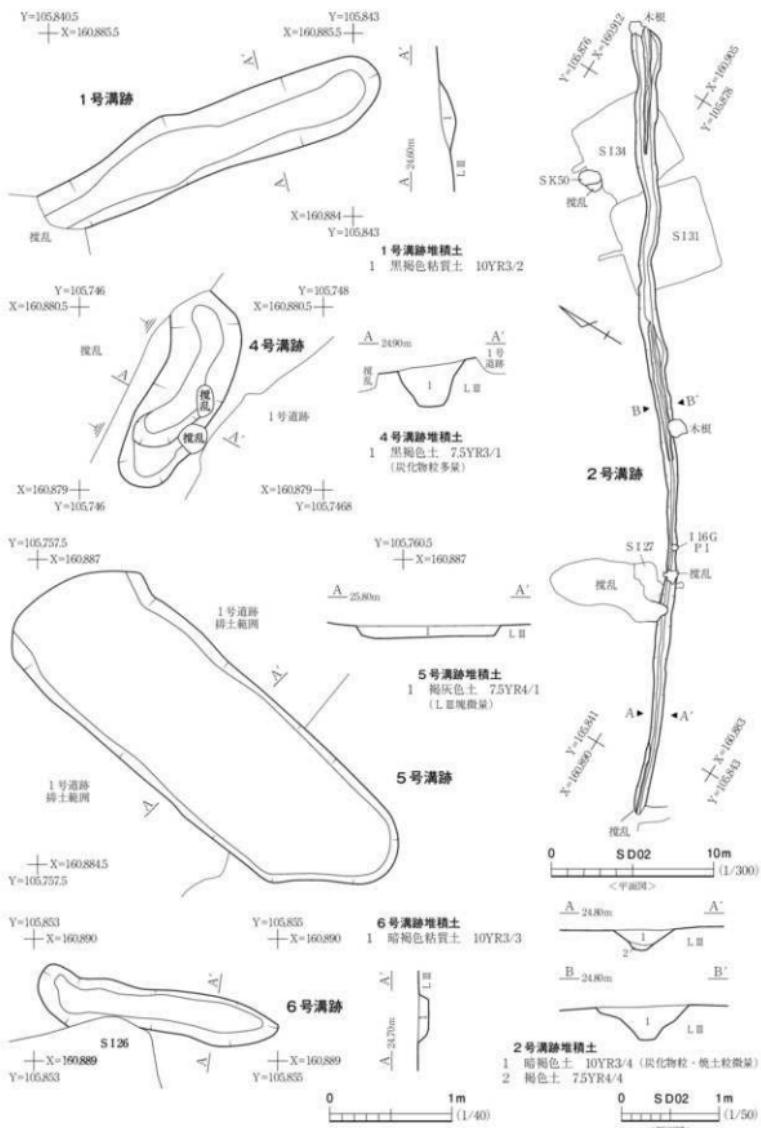


図127 1・2・4~6号溝跡

る。遺構内堆積土は、暗褐色粘質土の単層で、上位からの流れ込みと判断した。本溝跡から、遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。

(吉野)

7号溝跡 S D 07 (図128、写真105)

本溝跡は、調査区の東部、丘陵頂部の平坦面、I - 14・15グリッドに位置する。L III上面で検出された。12号土坑と重複し、本溝跡が古い。本溝跡の南側に近接して2号溝跡が位置する。左右両端部は木根の搅乱により壊され、遺存していない。

本溝跡は、おおむね東西方向に直線的に延び、北から西に80度傾く。規模は遺存値で、長さ8.21m、幅31~75cmで、検出面からの深さは16cmである。底面の標高はほぼ一定である。断面形は浅い「U」字形を呈する。遺構内堆積土は褐灰色粘質土の単層で、流れ込みと判断した。本溝跡からは土師器が11点出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(吉野)

8号溝跡 S D 08 (図128)

本溝跡は、調査区の丘陵東側の平坦面、I - 17グリッドに位置する。検出面はL IIIで、にぶい褐色土を基調とした溝として確認した。I 17 G P 1~3と重複し、本溝跡が古い。本溝跡の南東側1.9mには33号住居跡、15号土坑が近接して位置している。

本溝跡は南北方向に延びる。長さは226m、幅は84cm、深さは最大19cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は皿状である。底面は平坦で、北部は一段低くなっている。遺構内堆積土はL IV塊を微量に含むにぶい褐色土の単層で、土塊を含むことから人為堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

9号溝跡 S D 09 (図128、写真105)

本溝跡は、調査区の中央部、丘陵頂部の縁辺部、H - 10・11グリッドに位置する。検出面はL IIIで、褐灰色土を基調とした溝として確認した。本溝跡と重複する遺構は認められないが、南東端は後世の搅乱により破壊され、遺存していない。北側約2mには、16号溝跡が並行して位置している。本溝跡の南東側には、46号住居跡が隣接して位置している。

本溝跡は北西-南東方向に延び、おおむね丘陵の等高線に並行している。規模は、長さが遺存値で4.56m、幅は76cm、深さは最大9cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。遺構内堆積土は、炭化物粒を微量に含む褐灰色土の単層で、土質の性状から人為堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

10号溝跡 S D 10 (図129・132、写真7・105・131・150)

本溝跡は、調査区の北西部、北側丘陵の上位の斜面から中位の平坦面、E - 3・4・10・11、F - 4・6・9・10、G - 6・9、H - 7・8グリッドに位置する。検出面はL III・Vである。褐灰色土を基調とした丘陵を横断する溝として確認した。一部は木根や搅乱により遺存していない。本溝跡は52・54号住居跡、49号土坑と重複関係が認められ、いずれよりも新しい。本溝跡と近接して、1号道跡や17・20号溝跡が並行して位置している。

本溝跡は東半部が北東-南西方向に延び、西半部が北西-南東方向に延び、H - 8グリッド付近で方向を変える。東半部は谷筋の傾斜が緩やかな部分に掘り込まれている。G - 7、H - 7・8グリッド付近では部分的に途切れ、F - 5グリッド付近より北西側では溝が2条に分かれる。全長は94.40m、幅はF - 6グリッド付近で120cm、F - 10グリッド付近で84cm、深さは約10~20cmが大半を占めるが、北西端では1段低く掘り込まれ、最大で63cmである。壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。底面はH - 8グリッドを最高所とし、そこから緩やかな下り傾斜となる。

遺構内堆積土は、L Vに由来する円礫や炭化物粒を微量に含むL IIに由来する褐灰色土である。斜面上部から流れ込んだ土と判断した。

本溝跡から弥生土器27点、土師器121点、須恵器11点、陶器2点、石器・石製品8点、楕形滓320g、鉄滓3gが出土し、このうち、須恵器2点、陶器2点、弥生土器3点、石器1点を図示した。

図132-5・6は須恵器である。5は壺もしくは瓶類の底部で、高台が付く。6は壺の肩部で、外面には綾杉文風のタタキ目が、内面には無文の當て具痕が認められる。

同図-7・9は陶器の椀である。7は体部下半の小片で、焼成具合は須恵器に近似する。外面には鉄軸が施されている。9はケズリ高台で、内面には鉄軸が施されている。

同図-10・11・15は弥生土器である。10・11は壺の体部上半である。10の内外面には附加条の地文と二本同時施文の平行沈線が認められる。11は水平に引かれた平行沈線によって上下に区画され、上部には沈線文、下部には地文が施されている。地文は無節である。15は壺の口縁部片で、わずかに外傾する。外面には附加条の繩文が施されている。

同図-16は石庖丁である。中央やや上位には径13mmほどの穿孔が両面から施されている。腹面は斜位の研磨が顕著であるのに対し、背面は研磨が疎らで、成形時の剥離痕が認められる。

本溝跡は、北東-南西方向と北西-南東方向に丘陵を横断する溝跡である。溝の延びる方向は1号道跡と一致する。性格は不明だが、東半部の溝跡は緩やかな谷筋に掘り込まれ、底面の幅が広く平坦なことから、谷底から丘陵頂部を往還する道として利用された可能性がある。所属時期は遺構の重複関係や図132-7・9から、江戸時代以降と判断した。

(佐藤)

11号溝跡 S D 11 (図128・132、写真105・131)

本溝跡は調査区の北西部、西斜面の中腹、H - 7グリッドに位置する。検出面はL IIIで、黒褐色

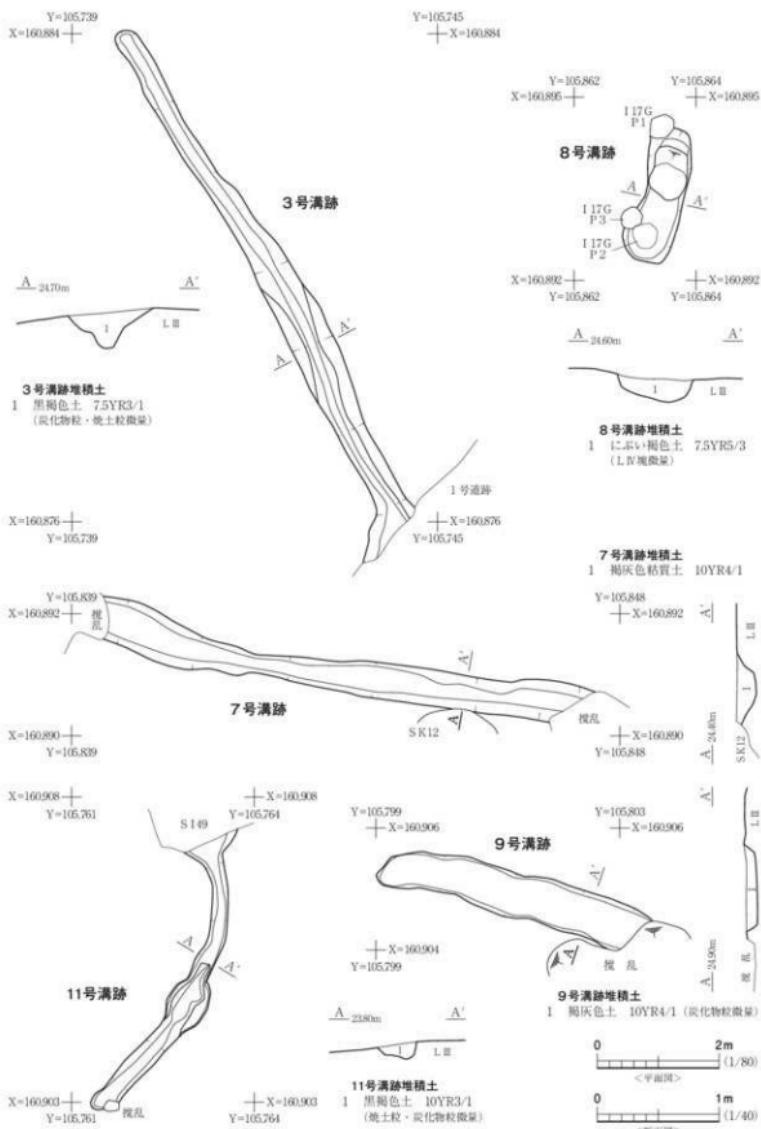


図128 3・7~9・11号溝跡

土を基調とした溝として確認した。49号住居跡と重複し、本溝跡が古い。本溝跡の南西側には50号住居跡が隣接して位置する。

本溝跡は北から南西に向かって弧状に延びる。規模は、遺存値で長さ5.04m、幅は中央部の膨らみを持つ箇所で64cm、深さは最大13cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はおおむね平坦で、中央部から南西部は1段低くなる。遺構内堆積土は焼土粒・炭化物粒を微量に含む黒褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。

本溝跡からは弥生土器13点、土師器55点、須恵器1点、石器・石製品3点、鉄滓3gが出土し、このうち、弥生土器1点を図示した。

図132-13は壺の体部上半には、平行沈線で同心円文もしくは渦文が施されている。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は遺構の重複関係から、古代以前と判断した。(佐藤)

12号溝跡 S D 12 (図129、写真106)

本溝跡は、調査区の中央部、丘陵頂部の北西縁辺部であるH・I-9・10グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。13号溝跡と重複し、本溝跡が新しい。本溝跡の北東隅部は木根の搅乱により、遺存していない。本溝跡の南西側には7・13号住居跡が、南東側には6号住居跡が近接して位置している。

本溝跡の平面形は「U」字形で、部分的に途切れる箇所が認められる。全長は遺存値で19.60m、幅は76cm、深さは最大8cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は皿状である。底面は斜面下位の北東方向に傾斜している。遺構内堆積土はLⅢ塊を微量に含む黒褐色土の単層で、土塊を含むことから人為堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

13号溝跡 S D 13 (図129、写真106)

本溝跡は、調査区の中央部、丘陵頂部の北西縁辺部であるH・I-9グリッドに位置する。検出面はLⅢで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。本溝跡は1号道路・12号溝跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。本遺構の周囲には14・15号溝跡が近接して位置している。

本溝跡は丘陵傾斜の等高線に沿って東西方向に延びている。長さは遺存値で9.80m、幅は60cm、深さは最大15cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は皿状である。底面は凹凸がわずかに認められる。遺構内堆積土はLⅢ塊を微量に含む黒褐色土の単層で、人為堆積土と判断した。本溝跡から土師器6点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

14号溝跡 S D 14 (図129、写真106)

本溝跡は、調査区の中央部、丘陵頂部の北西縁辺部であるI-8グリッドに位置する。検出面は

L IIIで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。1号道跡と重複し、本溝跡が古い。本溝跡の周囲には12・13・15号溝跡が近接して位置している。

本溝跡は丘陵の傾斜に直交し、北西－南東方向に延びている。長さは遺存値で5.10m、幅は30cm、深さは浅く、最大8cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は皿状である。底面は凹凸がわずかに認められ、斜面下位の北側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土はL III粒を微量に含む黒褐色土の単層で、土粒を含むことから人為堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。

(佐藤)

15号溝跡 S D 15 (図129・132、写真106)

本溝跡は、調査区の西部、丘陵頂部の北西縁辺部であるH-8、I-8・9グリッドに位置する。検出面はL IIIで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。1号道跡と重複し、本溝跡が古い。この他、本溝跡は13号住居跡と重複するが、同時に掘削を行ったため、新旧関係は不明である。本溝跡の周囲には12～14号溝跡が近接して位置している。

本溝跡は北西－南東方向に延びている。長さは遺存値で7.30m、幅は1.30m、深さは最大29cmを測る。周壁の立ち上がりは、上部が緩やかな角度であるのに対し、中ほどでは急角度となる。断面形は漏斗状である。底面は凹凸が顕著に認められ、斜面下位の北西に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土はL III塊を微量に含む黒褐色土の単層である。土塊を含むことから人為堆積と判断した。

本溝跡から土師器17点、石器・石製品1点が出土し、このうち土師器1点を図示した。

図132-1は高杯の脚部である。外面には縦位のハケメが認められる。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

16号溝跡 S D 16 (図130・132、写真106・131)

本溝跡は、調査区の中央部、丘陵頂部の北側縁辺部であるH-10・11グリッドに位置する。検出面はL IIIで、黒褐色土を基調とした溝として確認した。本溝跡と重複する遺構はないが、南側約2mには9号溝跡が並行して位置している。

本溝跡は北西－南東方向に延び、おおむね丘陵の等高線と並行している。規模は、長さ10.20m、幅60cm、深さは最大10cmを測る。北側の周壁は遺存状況が不良で、わずかに立ち上がりを確認できるのみである。南壁は良好に遺存し、緩やかな角度で立ち上がる。底面は斜面下位の北西側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は、L III粒を微量に含む黒褐色土の単層で、土塊を含むことから人為堆積土と判断した。本溝跡からは弥生土器1点、土師器3点が出土し、このうち弥生土器1点を図示した。

図132-12は壺の体部上半である。束線具により三本同時施文の平行沈線文が施されている。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と判断した。

(佐藤)

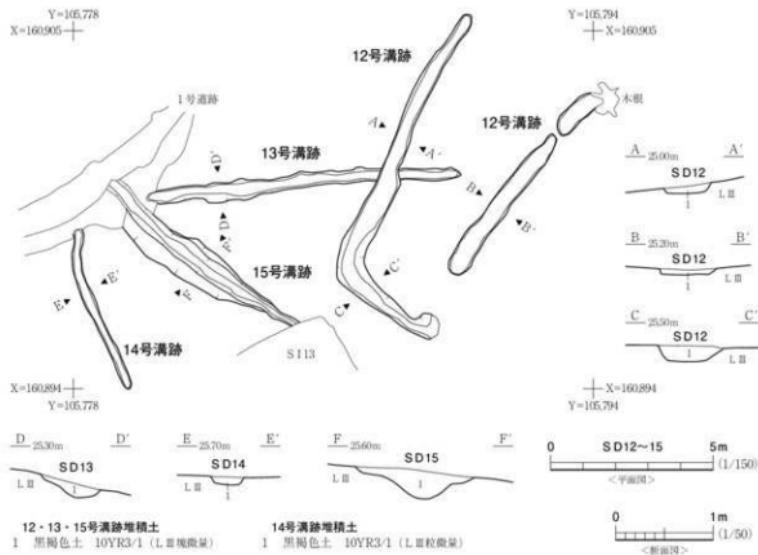
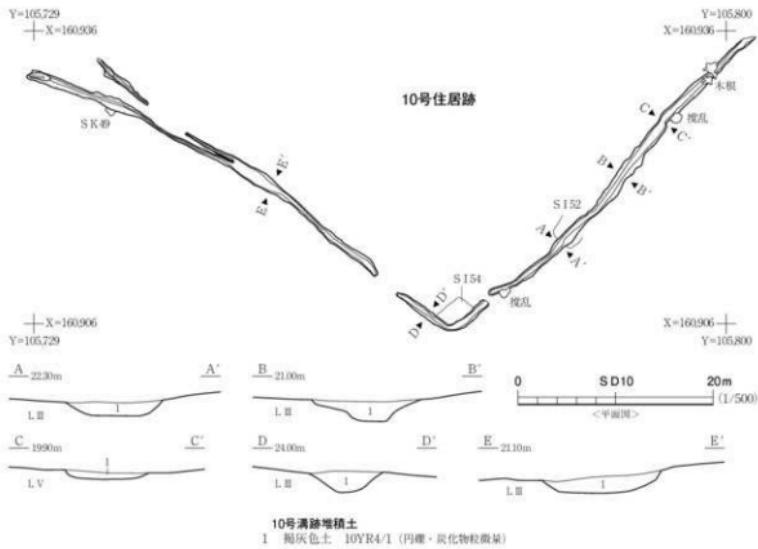


図129 10・12~15号溝跡

17号溝跡 S D 17 (図130・132、写真106・131)

本溝跡は、調査区の北西部、西側斜面の中複、F-6、G-6・7グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色土を基調とした溝として確認した。本溝跡と重複する遺構は認められないが、南西側には隣接して10号溝跡が並行している。

本溝跡は北西-南東方向に延び、丘陵の等高線と直交している。規模は、長さ12.08m、幅141cm、深さは最大12cmを測る。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は大部分でLVが露出し、細かな凹凸が認められる。底面は丘陵斜面と同様に北西に向けて下り傾斜となる。遺構内堆積土は、砂礫や炭化物粒を微量に含む褐灰色土の単層で、斜面上部からの流れ込みと判断した。

本溝跡からは土師器6点、須恵器7点、石器・石製品2点が出土し、このうち、須恵器2点を図示した。

図132-3・4は須恵器の長頸瓶である。接合はしないが、胎土の特徴から同一個体と考えられる。3は頸部は外反しながら立ち上がり、口縁端は垂下する。頸部の外面には櫛描の列点文と直線文が3段にめぐる。4は肩部から体部で、いかり肩を呈し、屈曲した部分に沈線がめぐる。

本溝跡の性格は不明で、所属時期は出土遺物から奈良・平安時代と考えられる。 (佐藤)

18号溝跡 S D 18 (図130)

本溝跡は調査区の北西部、西斜面中複の平坦面、H-7・8グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色土を基調とした溝として確認した。本溝跡と重複する遺構はないが、北東側に10号溝跡が隣接して位置する。

本溝跡は北東-南西方向に延びる。規模は、長さ3.80m、幅26cm、深さは最大12cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。北東端は削平され遺存していない。底面は北東に向かって緩やかに下り傾斜となる。遺構内堆積土はLV粒・炭化物粒を微量に含むLⅡに由来する褐灰色土で、斜面上部からの流れ込みと判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。 (佐藤)

19号溝跡 S D 19 (図130、写真106)

本溝跡は調査区の北端部、北西方向に開けた谷地形の底部、F-13・14グリッドに位置する。検出面はLVで、暗褐色土の溝として確認した。本溝跡の周辺に遺構はない。

本溝跡は北東-南西方向に延びる。規模は、長さ8.72m、幅54cm、深さは最大11cmを測る。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はLVの砂礫が露出し、凹凸が顕著に認められる。遺構内堆積土は炭化物粒を微量に含む暗褐色土で、谷の上部から流れ込んだものと判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の性格・所属時期は不明である。 (佐藤)

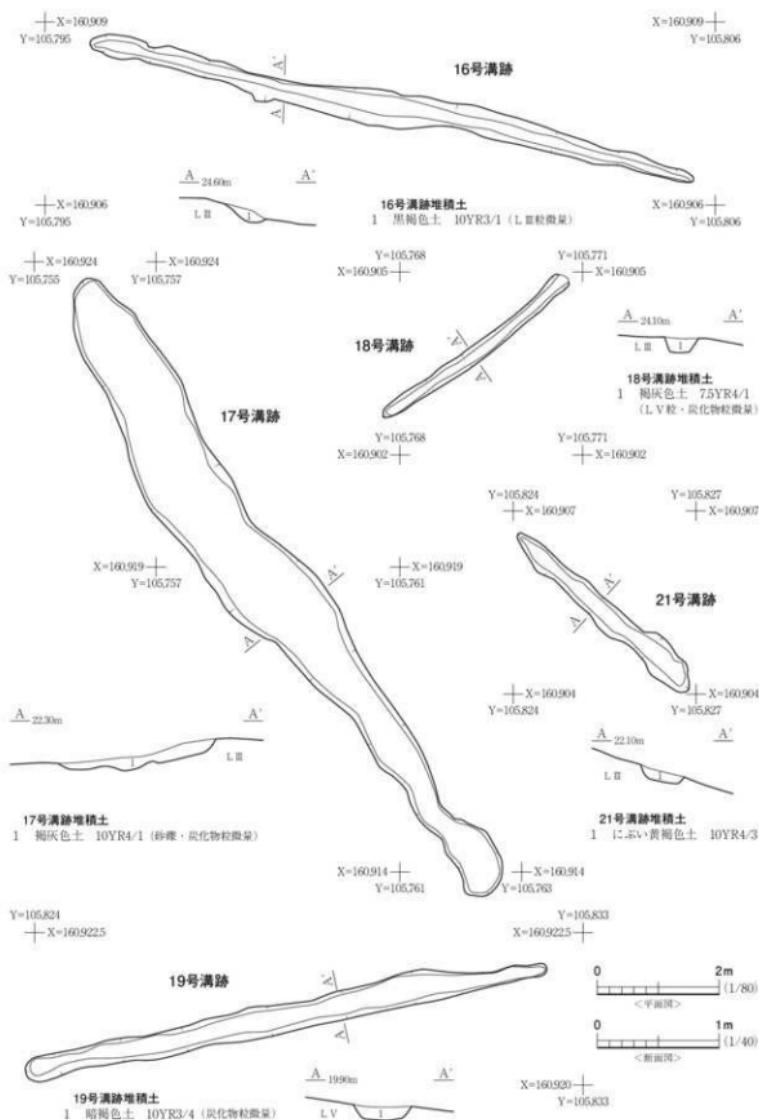


図130 16~19・21号溝跡

20号溝跡 S D 20 (図131・132、写真106・131)

本溝跡は調査区の中央部、E-11、F-11・12、G-12・13、H-13グリッドに位置する。北東斜面の裾部から北西に開けた谷地形の底部付近に立地する。検出面はL III・Vで、にぶい黄褐色土を基調とした溝として確認した。本溝跡と重複する遺構はない。本溝跡の南西部には21号溝跡が並行し、北西部には10号溝跡が並行して隣接する。

本溝跡の平面形は「L」字形である。南部は北西-南東方向に延び、北西部のE-11グリッドで直角に屈曲して北東-南西方向に延びる。規模は、長さ46.6m、幅は30~78cm、深さは最大16cmを測る。周壁は大部分が急な角度で立ち上がるが、斜面下位側は部分的に緩やかになる。底面は南部は平坦であるのに対し、北部は斜面下位に向けて著しく傾斜している。また、F-11グリッド付近を境に北西側が1段低くなる。

遺構内堆積土はL V由来の小礫や炭化物粒を微量に含むにぶい黄褐色土を基調とする。斜面上部

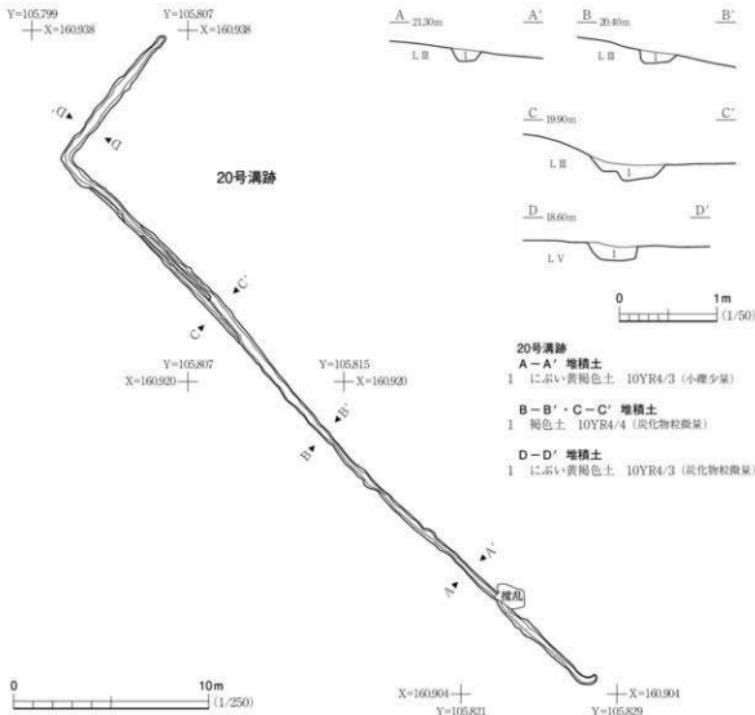


図131 20号溝跡

から流れ込んだものと判断した。

本溝跡からは土師器2点、須恵器2点、陶磁器1点、石器・石製品1点が出土した。このうち、陶磁器1点を図示した。

図132-8は大堀相馬焼の灰吹と思われる。体部は垂直で、口縁端部は内側に屈曲している。

本溝跡の性格は不明だが、北東側斜面の裾部から北西方向に開けた谷地形の底部付近に立地することから、区画溝や排水溝の可能性がある。所属時期は、出土遺物に江戸時代の陶磁器が認められることから、おおむね江戸時代以降と判断した。
(佐藤)

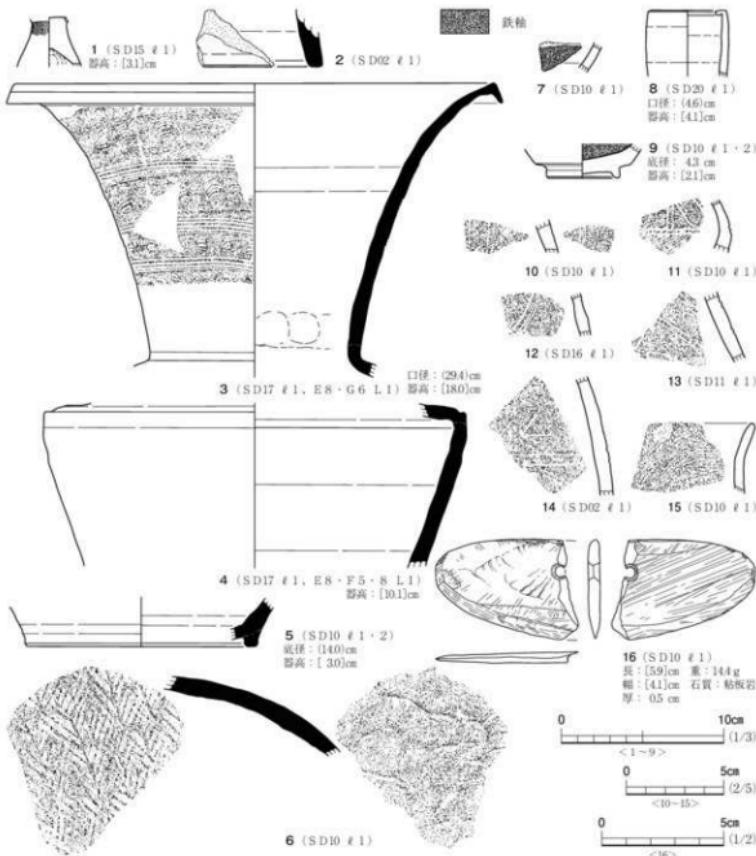


図132 2・10・11・15~17・20号溝跡出土遺物

21号溝跡 S D 21 (図130・写真106)

本溝跡は調査区の中央部、北西方向に開けた谷地形の底部、H-13グリッドに位置する。検出面はLⅢで、にぶい黄褐色土を基調とした溝として確認した。本溝跡の北東側には並行して20号溝跡が隣接する。

本溝跡は北西-南東方向に延びる。規模は、長さ380m、幅は56cm、深さは最大8cmを測る。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はおおむね平坦だが、部分的に微細な凹凸が認められる。遺構内堆積土はにぶい黄褐色土の単層で、谷部の上部から流れ込んだものと判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡は、20号溝跡が並行して隣接することから、これに関連した遺構の可能性がある。所属時期は不明である。
(佐藤)

第6節 鋼冶遺構、焼土遺構

1号鋳冶遺構 SW k 01

遺構 (図133、写真107~109)

本鋳冶遺構は、調査区北部のF・G-9グリッドのLⅢ上面で検出された。丘陵頂部から北東に向かって下る浅い谷部の斜面中腹に位置する。52号住居跡と重複し、これより新しい。検出の際は、炭化物を多く含んだ黒褐色土の範囲は認識されたものの、住居跡のような明瞭な範囲としては見えず、検出作業を繰り返すうちに堆積土に鉄滓が含まれることと鋳冶炉とその周辺の平坦面が露出したことで、鋳冶に関連することが判明した。

斜面を掘り込んで、平面形が長方形の平坦面を造成したもので、北東の壁は当初からなかったと思われる。規模は、東西が54mほど、南北が28mほどである。壁は斜面の上にあたる西隅部の残りが最も良く、床面から最大で54cmが遺存していた。

遺構内堆積土は、検出作業の際にやや削りすぎたものの、壁ぎわに堆積する2層に分けられる。 ℓ 1には炭化物の小塊と粒を多量に含み、 ℓ 2は壁ぎわに堆積する層で壁の崩落土を多量に含む。いずれも自然堆積と判断される。

床面は、掘形の底面をそのまま床面とし、おおむね水平であるが、緩やかな凹凸がみられる。

床面からは鋳冶炉1箇所とピット5基が検出され、これらをP1~5とした。

鋳冶炉は、床面中央部から西に寄った位置にある。平面形は楕円形で、規模は、長径52cm、短径47cmで、中央が擂鉢状にくぼむ。くぼみの内面は凹凸が激しく、全面が還元により青灰色に変色して著しく硬化し、その周囲はドーナツ状に赤変硬化していた。これを断ち割ると、くぼみの深さは12cm、青灰色に変色した部分は厚さ最大4cm、赤変した部分の厚さは最大6cmであった。

ピットは、いずれも床面の南東部に位置する。P1は南西の壁ぎわ中央部から30cmほど離れた

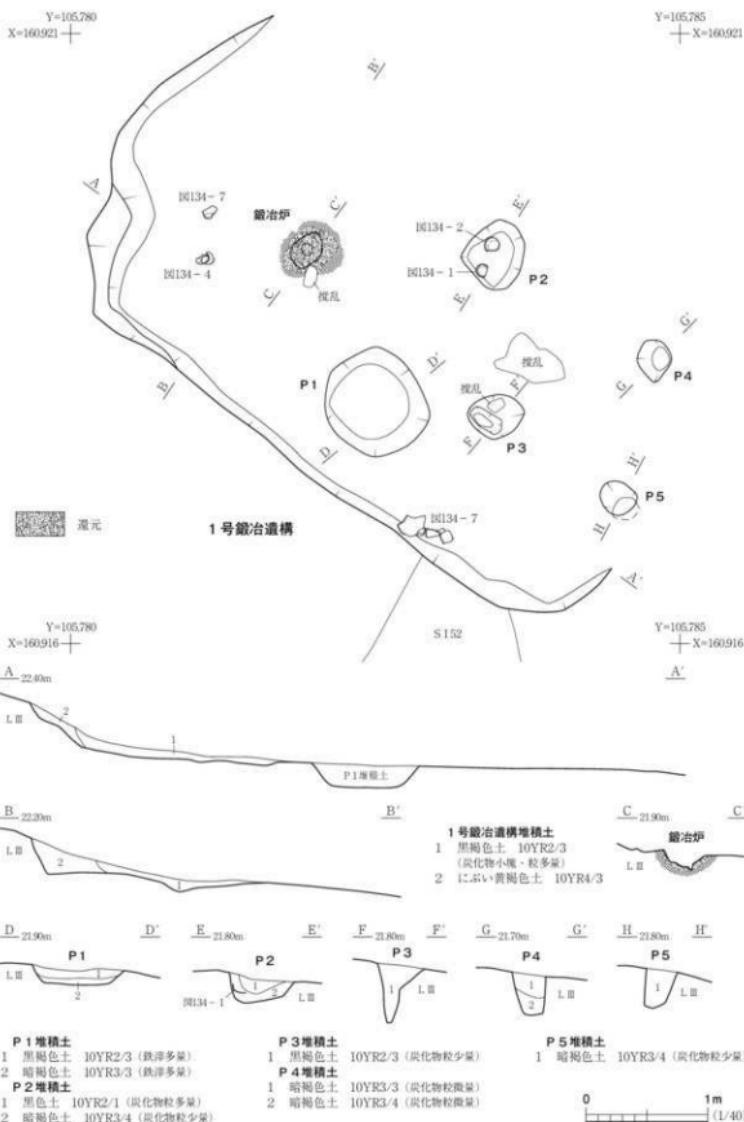


圖133 1號鋼冶遺構

場所にある。平面形は不整楕円形で、規模は、長径89cm、短径80cm、床面からの深さ13cmである。堆積土は2層からなり、このうち特にP2から2.9kgの鉄滓が出土したことから、鉄滓を埋めるために掘られたピットの可能性がある。

P2は、平坦面の北東部に位置する。平面形は不整楕円形で、長径57cm、短径48cm、床面からの深さ25cmである。堆積土には炭化物粒が含まれていた。

P3～5は、いずれも床面の南東部に位置し、柱穴とは判断できないものの一定の深さがある。平面形はいずれも不整楕円形で、規模は、この中では最大のP3が、長径47cm、短径35cm、深さ48cmである。いずれも堆積土に炭化物粒を含んでいた。

遺物（図134、写真134・146・149・151）

本殿治遺構からは、弥生土器39点、土師器（赤焼土器含む）127点、須恵器25点、石器・石製品36点、鉄製品1点、羽口片23点、炉壁片3点、鉄滓7.72kgが出土した。このうち、弥生土器19点、赤焼土器3点、土師器3点、須恵器1点、土製品1点、鉄製品1点、石器1点を図示した。

床面とピットからは数点の遺物が出土した。西隅と鍛冶炉との間で図134-4の土師器の高台付杯が、南西壁ぎわの南隅に寄った位置からは同図-7の須恵器壺の体部片が、P2の堆積土中からは同図-1・2の赤焼土器の杯が、P5の堆積土の上部からは同図-28の不明鉄製品がそれぞれ出土した。この他、P3から鉄滓250gが出土した。堆積土中からは、少量の遺物と金床石とみられる鍛冶滓の付着した礫の破片が出土した。また、本殿治遺構堆積土の一部とピットの堆積土については、ふるいがけと水洗いを行ったが、鍛造片などは一切みつけることができなかった。

図134-1～3は、赤焼土器の杯である。1・2は、平底で、体部は湾曲させながら立ち上がり口縁部にいたる。外面ともロクロナデが施され、内面にはコテナデが施されているようである。1の底面には糸切り痕が残る。2の底面は摩滅している。3は、回転糸切り痕が残る底部片である。

同図-4は、土師器の高台付杯である。糸切り痕の残る底部に高台を付し、体部は湾曲しながら立ち上がって口縁部にいたる。外面にロクロナデ、内面に幅の広いミガキと黒色処理が施されている。底面に黒色の付着物が認められる。

同図-5は、土師器の杯である。器形からすれば高台が付くものと思われる。全体に浅い器形で、口縁部は外反する。外面にロクロナデ、内面にミガキと黒色処理が施されている。

同図-6は、土師器の杯である。口縁部付近の小片からの復元である。椀形で、外面にロクロナデ、内面にはおそらくコテによるミガキと黒色処理が施されている。

同図-7は、須恵器の壺である。体上部の破片で、外面に平行タタキメ、内面には同心円文のアテ具痕がみられる。口縁部は剥離し、剥離面にもタタキメが施されている。破片の1点は、内面が研磨により平滑で、アテ具痕の大部分が摩滅していることから、砥石として使用された可能性がある。

同図-8～26は弥生土器である。8～11は口縁部片で、このうち9～11は外面に縱方向の沈線が施されている。この沈線は浅く幅広で、先端の平らな原体が用いられている。具体的な原体の形状は不明であるが、沈線幅の中に細かな筋が確認できることから、ある程度の硬さを持った植物の

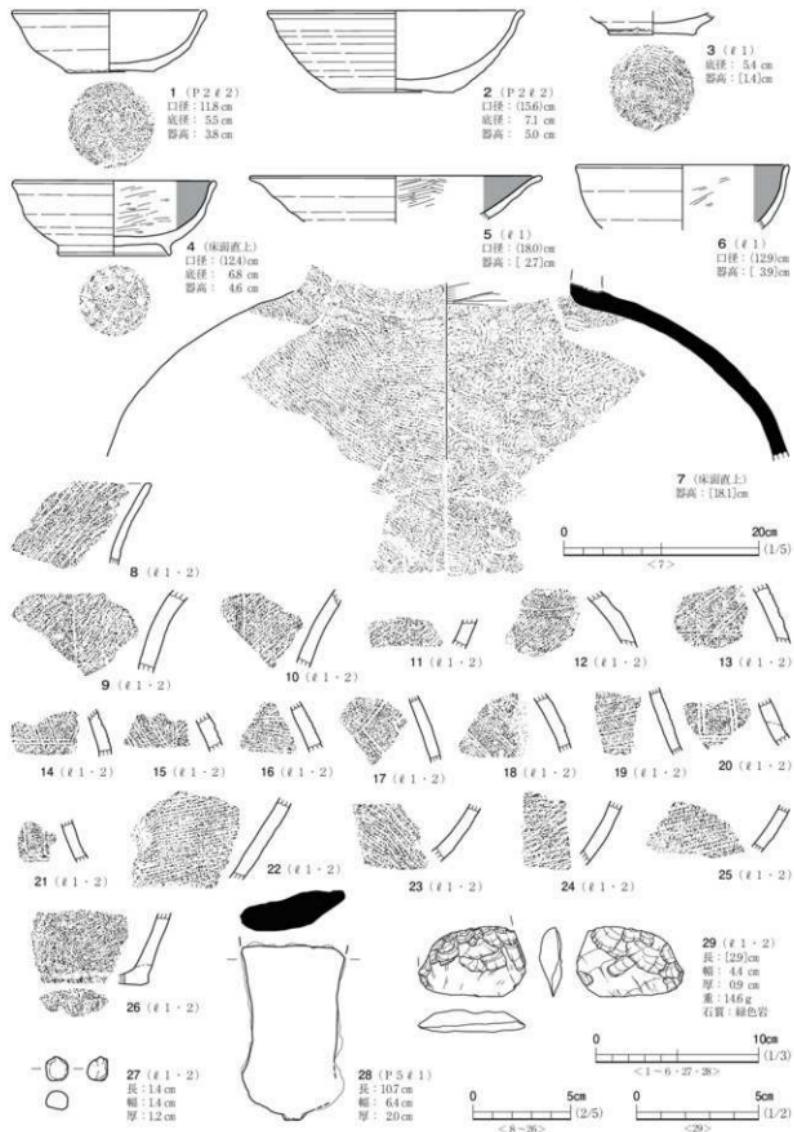


図134 1号鋼冶遺構出土遺物

茎などが候補にあがる。8~11はいずれも附加条を地文とする。12は、壺の体部片と思われ、下半に直前段多条の地文を持ち、上半に横方向の強いナデのち、上述の8~11と同じ原体を用いた縦方向の沈線がみられる。13~21は、壺の体部片である。いずれも平行沈線によって施文される。22~26は、壺か甕で、22は撫糸、23・24・26は附加条、25は直前段多条が施されている。

同図-27は、焼成された粘土塊である。不整球形で、摩滅のため不明瞭ではあるが、一部に剥離面のような平坦な面を有する。

同図-28は鉄製品で、器種は不明である。鋳造製品で、X線撮影で全体に巣がはいっていることが判明した。平面形はおおむね短冊形で、上縁は直線を、両側縁は弧を描いて中ほどがやや狭く、下縁は弧を描いてやや突出し中央に短い突起を持つ。全体に長軸を軸としてわずかに湾曲する。

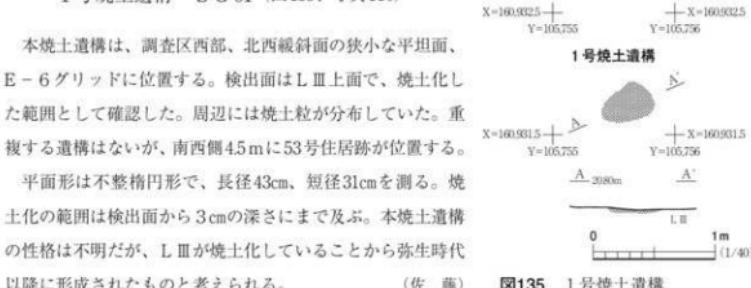
同図-29は、破損した磨製石斧の刃部片である。

この他23点出土した羽口はいずれも小片で、接合を試みたが図化できるものはなかった。排気部の破片は還元し、鉄滓が溶着している。

まとめ

本鍛冶遺構は、丘陵の中腹を掘り込み、東西5.4m、南北が2.8mほどの平坦面を造成して鍛冶炉を設けた遺構である。明瞭に柱穴と特定できるピットは確認されず、上屋の有無は明らかにできなかつた。鍛冶炉が1箇所確認され、堆積土中とピットから炉壁片、羽口片、大量の鉄滓が出土した。所属時期は、出土した土器から9世紀末葉から10世紀の前葉頃に位置づけられる。(青山)

1号焼土遺構 SG 01(図135、写真110)



本焼土遺構は、調査区西部、北西緩斜面の狭小な平坦面、

E-6グリッドに位置する。検出面はLIII上面で、焼土化した範囲として確認した。周辺には焼土粒が分布していた。重複する遺構はないが、南西側4.5mに53号住居跡が位置する。

平面形は不整梢円形で、長径43cm、短径31cmを測る。焼土化の範囲は検出面から3cmの深さにまで及ぶ。本焼土遺構の性格は不明だが、LIIIが焼土化していることから弥生時代以降に形成されたものと考えられる。(佐藤)

図135 1号焼土遺構

第7節 道 跡

1号道跡

遺構 (図136、写真7・110)

本道跡は、調査区西部のF-10・11、G-9・10、H-8・9、I-6~9、J-5~7、K-5グリッドに位置している。丘陵頂部の西縁部から北東-南西方向に延び、丘陵斜面を横断している。

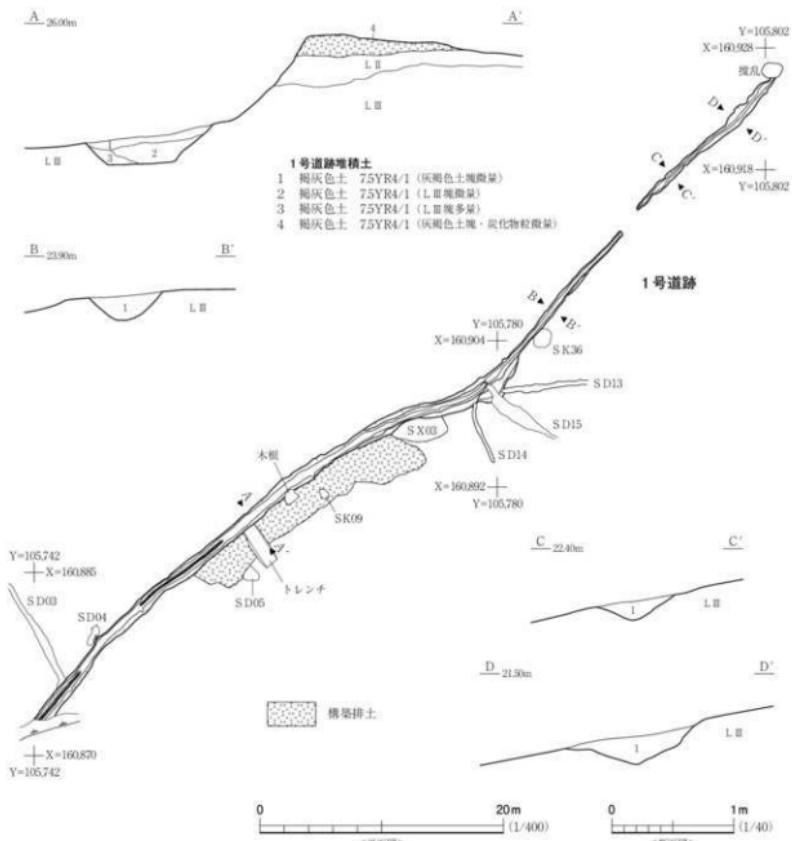


図136 1号道路

当初は宅地造成の際、不要な土砂を丘陵の縁辺に寄せ集めた高まりと予測していたが、検出・精査の結果、道跡とこれに伴う構築排土の範囲として認識した。本道跡の検出面は、道跡部分がL III、道跡に伴う構築排土がL IIである。本道跡の南東側には、住居跡が密集して分布し、北西約6~7mには10号溝跡が並行して位置する。本道跡の南西部は、宅地造成時の削平を受け、北東端は木板による搅乱で破壊されている。本道跡は複数の遺構と重複関係が認められ、3・5・13~15号溝跡、9・36号土坑、3号性格不明遺構より新しい。

本道跡は北東-南西方向を基調とし直線的に延伸するが、I-8グリッド付近で緩やかにカーブし、G-10グリッド付近で部分的に途切れる。規模は、長さが遺存値で80.5m、幅は60~240cmを

測る。深さは最大24cmである。底面はI-8グリッドより南西側は水平で、北東側は斜面下位に向かって傾斜している。J-6グリッドやK-5グリッドの底面中央には、1条の溝跡が認められる。南西側の底面の中央には、断続的に溝が掘り込まれている。

1号道路の構築排土の範囲は、1号道路の南東上端に沿って認められた。その範囲は、北東-南西方向で21.2m、幅は1.4~4mである。検出面からの高さは最大31cmである。上端はおおむね平坦だが、南西部には凹凸が認められる。

堆積土は4層に分けられ、 ℓ 1は灰褐色土塊を微量に含む褐灰色土、 ℓ 2はLⅢ塊を微量に含む褐灰色土、 ℓ 3はLⅢ塊を多量に含む褐灰色土である。堆積土はいずれもLⅡに由来する土で、壁ぎわに三角堆積が認められることから、斜面上部の風化した土塊などが自然に流入したものと判断した。 ℓ 4はLⅡを由来とする褐灰色土の単層で、灰褐色土塊や炭化物粒を微量に含む。1号道路の掘削時に生じた構築排土である。

遺 物 (図137、写真134・146・150)

出土遺物は、弥生土器19点、土師器300点、須恵器30点、陶磁器1点、石器・石製品18点が出土地した。このうち、弥生土器4点、須恵器5点、石製品2点、石器2点を図示した。

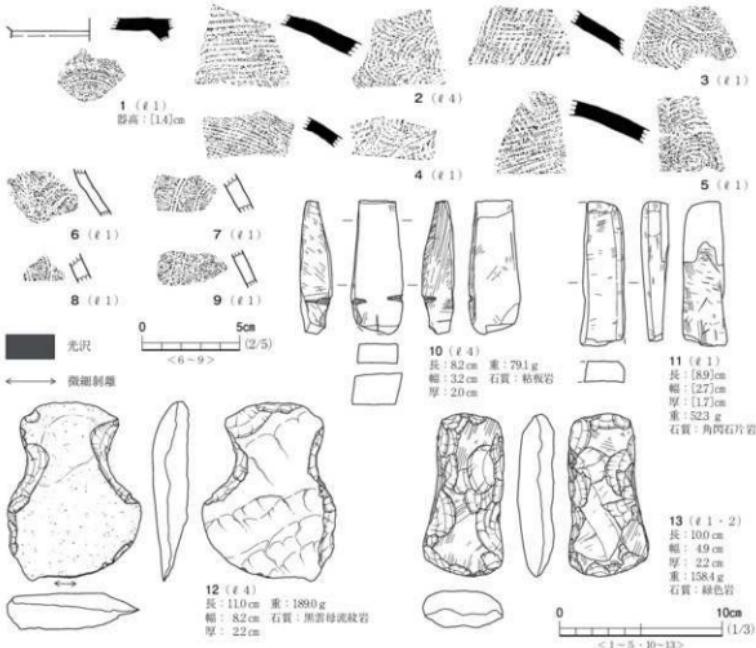


図137 1号道路出土遺物

図137-1は須恵器の高台付杯である。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

同図2～5は須恵器壺の体部である。外面には平行タタキメ、内面には同心円の当て具の痕跡が認められる。4の外面にのみ、平行タタキメより新しいカキメが認められる。

同図6～9は弥生土器の壺の体部である。6は平行沈線により重蔓文が施されている。7は平行沈線、8は束縫具により同心円文もしくは渦文が施されている。9は間隔の広い平行沈線が認められる。

同図10・11は砥石である。10は左右両端部と、下端部の左右側縁には溝がめぐる。

同図12は大型の板状石器もしくは打製石斧とした。円礫の端部に打撃を加え、貝殻状の剥片を採取し、両側縁部に連続した剥離を加え抉りを成形している。背面の刃部付近にはわずかに光沢が認められる。刃部の一部には使用による刃こぼれとみられる微細剥離が観察できる。

同図13は磨製石斧である。短冊形で、刃部はわずかに弧状を描く。研磨より新しい剥離が顕著に認められるとから、着柄の調整や他用途への転用を試みた可能性がある。

まとめ

本道跡は、丘陵頂部の西縁部から斜面を北東～南西方向に延伸する道跡である。丘陵の裾部から頂部上端に向かう道跡とみられ、底面の一部には排水用の溝跡が掘り込まれる。丘陵頂部の平坦面近くには、道跡の掘削に伴う構築排土が認められた。

本道跡の所属時期は、L II上面に構築排土が認められることや、未掲載遺物に近世の陶器が含まれることから、おおむね近世以降と考えられる。

(佐藤)

第8節 塚

1号塚

遺構 (図138、写真111)

本遺構は、調査区の東部、H-17グリッドに位置する。北東方向に延びる丘陵頂部の平坦面に立地している。本遺構は調査前の現地確認の際、塚状の高まりとして認識した。表土を人力で除去し、精査した結果、土を盛って構築された塚と判断した。37号住居跡と重複し、本遺構が新しい。本遺構と同様の平坦面の北側には35・36号住居跡が、北東側には46・47・50号土坑が近接して位置している。

本遺構は、土を盛った塚と、中央部分直下の土坑状の掘り込みで構成されている。塚の平面形は、南北方向にわずかに長い不整な円形を呈する。規模は下端の直径で4.65m～5.84m、L III上面からの高さは最大で72cmを測る。断面形は緩やかな台形状である。塚の上面には、9個の偏平な凝灰岩の礫が横位に配置されていた。

土坑状の掘り込みは、塚の中央部分直下に位置する。平面形は丸形で、規模は直径118cm、検出面からの深さは最大で60cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。掘り

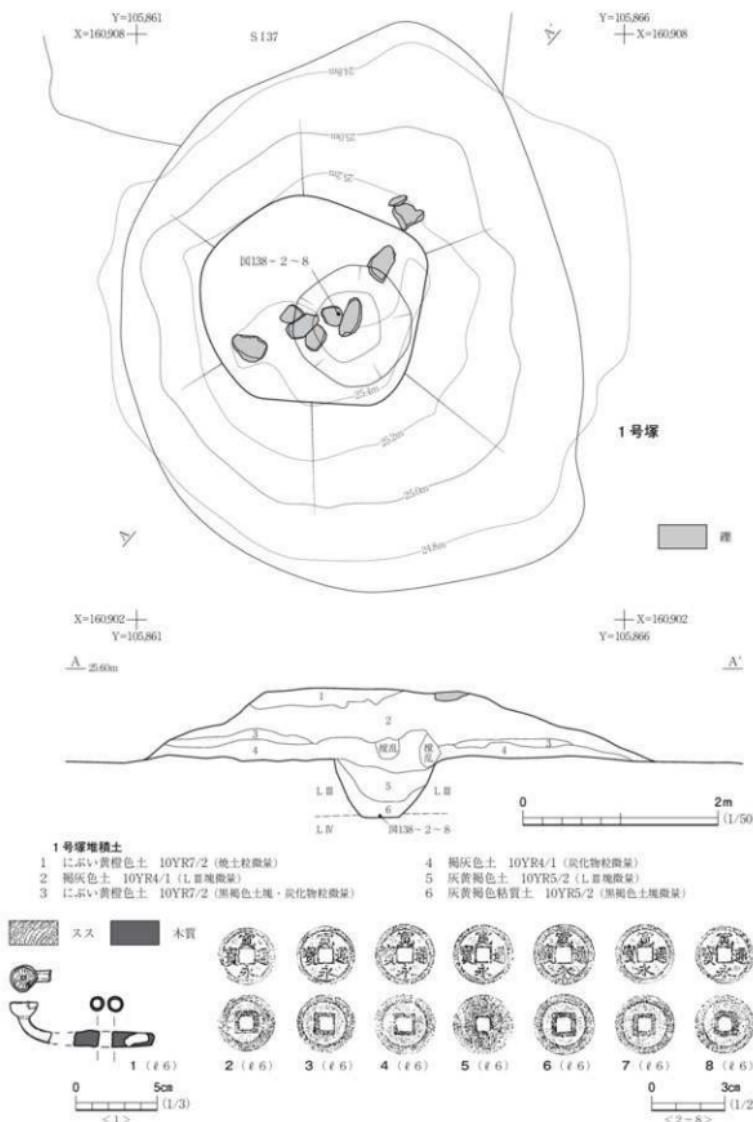


図138 1号塚・出土遺物

込みはLⅣ上面まで達し、底面は平坦である。

本遺構は、塚の構築土と土坑状の掘り込みの堆積土に大別される。 ℓ 1～4は塚の構築土である。 ℓ 1・3はにぶい黄橙色土でLⅢに由来し、 ℓ 2・4は褐灰色土でLⅡに由来すると判断した。いずれの堆積土も層界は水平を基調とする。 ℓ 5・6は土坑状の掘り込みを埋めた人為堆積土である。いずれもLⅢに由来する灰黃褐色土である。 ℓ 6は粘性があり、黒褐色土塊を微量に含む。

遺 物 (図138、写真134)

本遺構からは、土師器79点、須恵器3点、煙管1点、銭貨7枚が出土した。このうち、煙管1点、銭貨7枚を図示した。土坑状の施設の底面からは図138-1の煙管が、同図-2～8の寛永通寶が7枚、折り重なるように出土した。また、出土した土師器や須恵器はいずれも ℓ 1・2中から、塚の構築土中に混入したものと判断した。

図138-1は煙管の雁首部の小片である。雁首と吸口を連結する木製の羅字が一部遺存している。火皿の内面にはスヌとみられる黒褐色の付着物が認められる。

同図-2～8は銭貨である。すべて1636～1659年に鋳造された、いわゆる「古寛永通寶」である。

ま と め

本遺構は丘陵東側頂部の平坦面に立地する。本遺構は塚と直下の土坑状の掘り込みで構成され、形態と出土遺物から近世墓と考えられる。近接する46・47・50号土坑も同様に近世墓と考えられることから、丘陵頂部の一画が近世の墓域であったといえる。

塚は地山に由来する土を水平に積み上げ構築され、上面に偏平な礫を9個据え置く。土坑状の掘り込みは埋葬施設と考えられ、埋葬方法は座葬の可能性がある。底面から出土した煙管と銭貨は副葬品とみられ、7枚の古寛永通寶はいわゆる「六道銭」と考えられる。

本遺構の所属時期は、底面から出土した7枚の銭貨がすべてが古寛永通寶であることから、江戸時代、17世紀中葉～後葉と考えられる。

(佐藤)

第9節 番 跡

1・2号番跡 (図139、写真110・134)

1・2号番跡は、調査区の北東部、1号番跡がH-4・5グリッド、2号番跡がF-3、G-3・4、H-4グリッドのLⅢ上面から検出された。北西斜面の下位に立地する。LⅢ上面の検出作業中に、広範囲に黒褐色土が認められたことから、これを掘り下げ、再度検出作業を行ったところ、北西～南東方向に延びる間隔の狭い複数の溝跡として確認した。1・2号番跡と重複する遺構はないが東側には30・47号住居跡が、南西側には5号性格不明遺構が近接して位置している。

1・2号番跡は遺構間で約3mの空隙地を持つが、長軸方向が北西～南東方向と合致していることや畝間溝跡の幅が同様の規模を持つことから、同時に併存した可能性がある。

1号番跡は北西～南東方向に5.50m、北東～南西方向に4.75mの範囲に並ぶ6列7条の畝間溝か

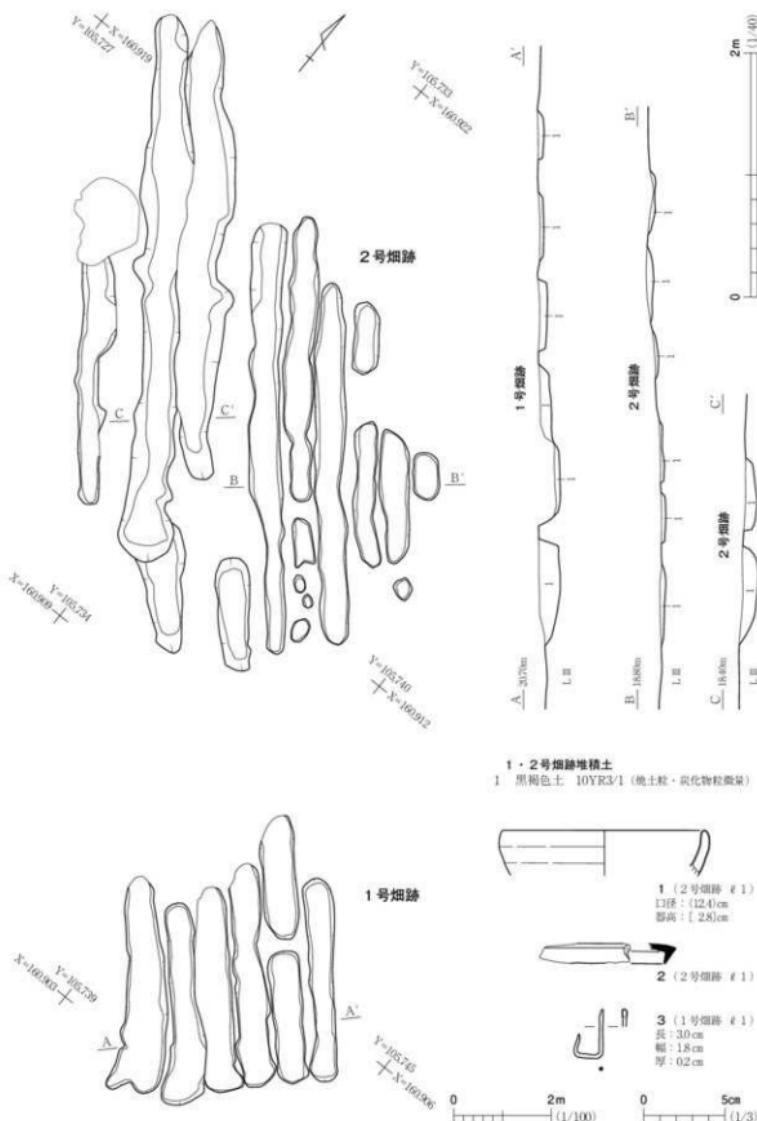


図139 1・2号烟跡・出土遺物

らなる。畠間溝の長さは最大4.62m、幅は最大98cm、深さは最大で17cmである。畠間溝は間隔をあけず、密集して掘り込まれる。

2号烟跡は北西-南東方向に13.60m、北東-南西方向に7.35mの範囲に並ぶ10列17条の畠間溝からなる。畠間溝の長さは最大11.12m、幅は最大110cm、深さは最大で15cmである。畠間溝は間隔をあけず、ほぼ隣接している。

1・2号烟跡の遺構内堆積土は、焼土粒や炭化物粒を微量に含む黒褐色土の単層である。L IIに近質することから、斜面上位から流れ込んだ土と判断した。

1号烟跡から銅製品1点、2号烟跡から弥生土器3点、土師器22点、須恵器9点、陶器1点が出土し、このうち、陶器1点、須恵器1点、銅製品1点を図示した。

図139-1は大堀相馬焼の片口鉢である。口縁端部は丸く整形し、外面には灰釉が施されている。同図-2は、須恵器蓋の口縁部付近である。

同図-3は針状の銅製品である。先端部は「J」字状に折り曲げられる。断面形は円形で、上端部は板状に整形される。

1・2号烟跡は、北西部の緩斜面に立地する烟跡で、畠間が狭いのが特徴である。所属時期は出土遺物から、江戸時代、18世紀後葉～19世紀初頭と考えられる。
(佐藤)

第10節 遺物包含層

1号遺物包含層 S H 01

遺構 (図140、写真112)

本遺物包含層は、調査区の中央部、H-11～13、I-12・13グリッドに位置する。検出面はL IIIである。H 12 G P 1・2と重複し、本遺物包含層が古い。南西側の丘陵頂部の平坦面には9・46号住居跡、28・31号土坑が、北東側の斜面下位には29・30・34号土坑が分布している。

本遺物包含層は、南北方向に延びる浅い谷地形の頂部から中腹にかけて、標高22.8～24.5mの間に形成されている。本遺物包含層の範囲は、東西18.60m、南北6.45m、厚さは最大で60cmを測る。堆積土は2層に分けられた。いずれもL IIを由来とする土で、L III粒や炭化物粒を微量に含んでいる。堆積土中のL III粒は、風化した地山が斜面上部から流れ込んだと判断した。

遺物 (図141、写真135・149)

本遺物包含層から弥生土器102点、土師器579点、須恵器25点、陶磁器4点、石器・石製品14点、土製品1点が出土している。このうち、土師器4点、須恵器4点、弥生土器11点、土製品1点、石器1点を図示した。

図141-1・2は土師器の高杯である。いずれも杯部の内面には、ヘラミガキのち黒色処理が施され、外面は継ぎのヘラケズリで調整されている。1の脚部には、ヘラ状工具による縦長の透し孔が1箇所認められる。2の脚部内面にはユビナデのち、黒色処理が施されている。

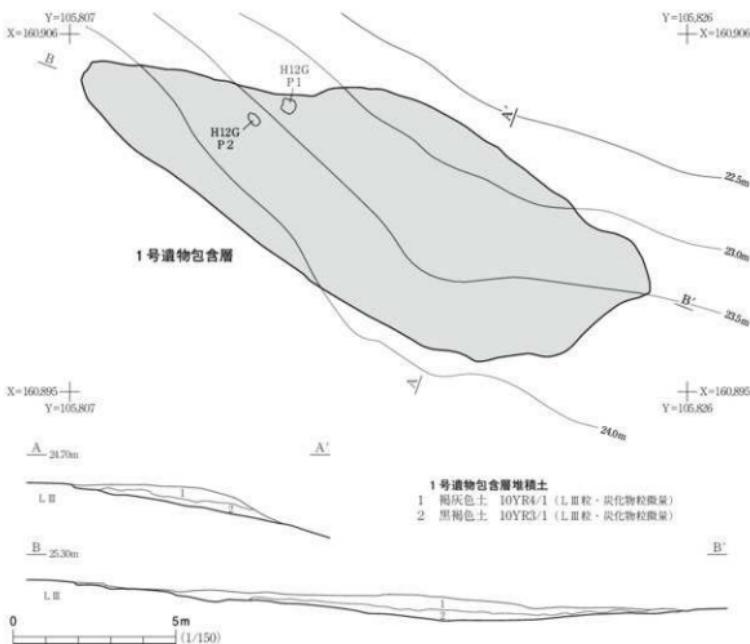


図140 1号遺物包含層

同図-3・4は土師器の鉢で、平底から湾曲しながら立ち上がる。外面にはヘラケズリ、内面にはユビナデやヘラナデが施されている。

同図-5～8は須恵器の壺である。外面には5・6・8が平行タタキメ、7が斜格子のタタキメが認められる。内面には5～7が同心円の當て具痕が、8には無文の當て具痕が認められる。

同図-9～19は弥生土器である。9は高杯である。脚部は三本同時施文の平行沈線文が認められる。10～13は壺の体部上半で、平行沈線文が施されている。10は1本引きと二本同時施文が1つの個体に同居する。11・12は二本同時施文で重菱文が、13は渦文か同心円文が施されている。14～16は壺の頭部である。14・15は二本同時施文で波状文が施され、地文は附加条である。16は地文の附加条に重ねて、東線具による横位と縦位の文様が施されている。17～19は壺もしくは甕である。17は体部下半で、地文は直前段多条である。18・19は底部付近である。地文は18が0段多条、19が附加条である。

同図-20は羽口である。先端部付近は熱変化により、帯状に灰白色となる。

同図-21は偏平片刃石斧の未成品と判断した。縦長で偏平な砾の剥片を素材とし、背面は全面に敲打調整を加え、自然面を除去している。

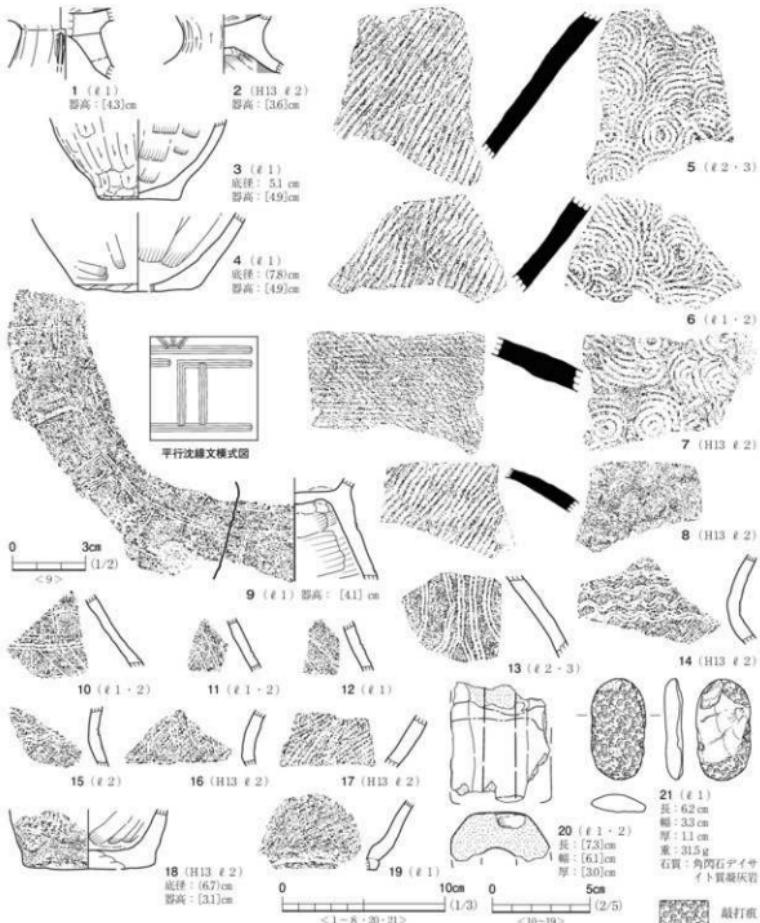


図141 1号遺物包含層出土遺物

まとめ

本遺物包含層は、南北方向に延びる浅い谷地形の頂部から緩斜面中腹にかけて、東西方向に帶状に形成された遺物包含層である。丘陵頂部平坦面の構造群に由来する遺物が、浅い谷に自然流入し、徐々に形成されたものと判断した。出土遺物からは各時代・時期を示す堆積状況・分布は認められなかったが、本遺物包含層が形成された時期は、弥生時代中期後葉、古墳時代終末期から奈良・平安時代、江戸時代と判断した。

(佐藤)

2号遺物包含層 S H 02

遺構 (図142、写真112)

本遺物包含層は、調査区北西部のE-4、D・E-5～9グリッドに位置する。丘陵の比較的急な北斜面の中腹に形成され、斜面の下方にあたる北部は調査以前に切り崩されて失われている。遺存していた部分の規模は、東西446m、南北10m、標高約17.5～20mの範囲である。

本遺物包含層が確認された発端は、丘陵頂部での遺構検出作業である。丘陵の頂部では遺構も遺物も確認されなかつたが、丘陵の斜面に検出作業が移行するにつれ、数は少ないものの弥生土器が出土しはじめ、斜面の下方に向かうにしたがってその量が増えていった。斜面の中腹以下は調査範囲から除外されていたものの、このような状況から遺物包含層が形成されている可能性が考えられたため、文化財課と開発側との協議を経て調査範囲を拡張したところ、本遺物包含層が確認された。このため、さらに調査区の範囲を広げて遺物包含層の広がっている限りの範囲まで調査区の拡張を行い、その全体を検出した。

本遺物包含層は表土(L I)の直下に形成され、最も厚い部分では40cmほどであったが、大部分は30cmほどの厚さで堆積していた。堆積土は部分的に小土塊が含まれていたことから、自然堆積の他に人为的に投げ込まれた土もあった可能性がある。

遺物 (図143～148、写真135～139、148・150)

本遺物包含層からは、弥生土器754点、縄文土器2点、須恵器3点、剥片と石器66点が出土した。弥生土器はいずれも中期後葉から末葉のものである。小片の状態で、大半は接合しなかった。こ

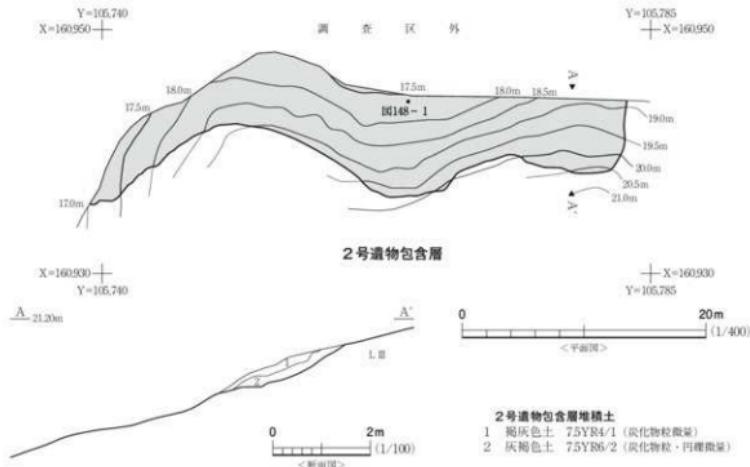


図142 2号遺物包含層

のうち地文のみが施されているものが約9割、文様がみられるものは1割ほどである。出土量は、D-7グリッドが最も多く523点、ついでD-6グリッドが140点、その他のグリッドはいずれも100点未満である。

本遺物包含層で特筆されるのは、磨製石剣が出土したことである。磨製石剣は他の土器片の出土状況と変わることなく、遺物包含層に横たわって埋もれていた。石剣が出土した周辺は本遺物包含層の中で最も遺物を濃密に含んでいた部分である。本遺物包含層から出土した土器のうち、弥生土器166点、縄文土器2点、石器4点を図示した。

弥生土器 図143-1・2は、長頸壺の頸部である。1は、平行沈線で方格文が施されている。描き順は縦線が先である。内面は荒れて大部分が剥離している。2は頸部を無文帶とし、体部に附加条縄文が施されている。

同図-3は壺で、体部上半から頸部が遺存する。頸部がすぼまり、体部と頸部の境に棱線を持たずに湾曲し、口縁部はやや外傾する。外面の体部と口縁部に直前段多条縄文が密に施され、頸部を最大幅1cmほどの無文帶とする。体部の地文の上端と口縁部の地文の下端には縄文原体の末端結節がめぐらされ、頸部無文帶の上下を画す。内面には丁寧なナデのち、口縁部に外面と同じ直前段多条縄文が施されている。外面の体部の最大径付近と口縁部には炭化物が付着している。内面に瘤状の圧痕が1箇所ある。

同図-4は壺の底部で、上述の3と接合はしないが、諸特徴が一致し同一個体と思われる。平底で、体部は外傾する。外面に直前段多条縄文、内面に指頭の圧痕とナデが施されている。

同図-5は甕もしくは鉢で、体上部と口縁部が遺存する。体部はわずかに張り、口縁部は長く外反する。外面と口縁端部に附加条縄文が施されている。頸部ないし体部の上端に無文帶がめぐるようでもあるが、口縁部に施されている縄文の下端が明瞭であるのに対し体部の縄文の上端は不明瞭で、無文帯を意図したものかは判断が難しい。口縁端部には刻み目が施されている。内面は丁寧にナデ調整される。胎土にごくわずかに纖維が含まれる。

同図-6は甕の口縁部で、緩やかに外反し、内外面に撫糸文が施されている。撫糸文と判断したのは、わずかに軸の圧痕がみられるためである。口縁端部には刻み目が施されている。

同図-7は壺の口縁部で、小片からの復元である。口縁部は緩やかに外反する。外面の口縁部と体部、内面の口縁部に直前段半撫の縄文が施されている。

同図-8は甕もしくは鉢である。体部小片からの復元である。体部は張り、外面に直前段多条と思われる縄文が施されている。頸部は無文である。内面に輪積み痕と、指頭圧痕がみられる。

同図-9は鉢である。平底で、体部はごくわずかに張り、頸部で屈曲して口縁部は外傾もしくは外反する。体部外面に直前段多条縄文が施されている。頸部はごくわずかに遺存するのみで、無文帯があるかどうかの判断は難しい。内面には丁寧なナデ調整が施されている。

同図-10・11は鉢である。両者は接合しないものの、胎土、色調、地文、調整がよく似ているので同一個体と判断した。平底で、体部は緩やかに外反する。口縁部は遺存しない。外面には無節

の縄文が雜に施され、内面には擦痕を伴う強いナデが施されている。底面には木葉痕が付される。内面に櫛圧痕が1箇所ある。

同図-12は壺の口縁部である。外面に束線具による二本同時施文の沈線文、口縁端部に刻み目が施されている。

同図-13～15は壺の体部から頭部の破片で、やや幅の広い平行沈線で重菱形文と思われるモチーフが描かれる。13・14は、特徴の類似から同一個体と思われ、内面はやや荒れて剥離する。

同図-16～24は壺で、いずれも外面に平行沈線で渦文もしくは同心円文が描かれる。内面にはナデ調整が施されているものが多いが、21・23・24は剥離が顕著である。

図143-25～29、図144-1～16は壺で、外面に平行沈線で重菱形文が描かれる。図143-25～29、図144-1～3は接合しないものの同一個体と思われる。図144-9は沈線文が施される以前に地文が施されているようでもあるが、地文が浅く不明瞭である。

図144-17～19は頭部片で、17・18は平行沈線、19は束線具を用いた沈線をそれぞれ横方向にめぐらせ、19は継のスリット文もみられる。

同図-20～26は頭部片である。20は平行沈線による波状文を上下多重にめぐらせる。21には重四角文と思われるモチーフが描かれる。22は平行沈線で、23～26は束線具を用いて継のスリット文を描き、その間をおおむね等間隔の斜位の直線で充填する。25・26は諸特徴が類似することから同一個体と思われ、いずれも破片の側縁が継のスリットの沈線に沿って破断している。文様は束線具によって描かれるが、一部は片方の沈線が器壁に届かず一本沈線のように見える。

同図-27・28は壺の体部で、平行沈線による横位の区画線を、27は2条、28は1条めぐらせ、区画線と重複させながらそれ以下に地文を、以上に沈線文が施されている。いずれもモチーフと地文は不明である。

同図-29は壺もしくは甌の口縁部片で、外面に平行沈線による鋸歯文あるいは重鋸歯文、内面には地文が施されている。地文の種類は不明である。

同図-30は壺の口縁部片で、外面に束線具で多重の横方向の沈線、口縁端部の内面側には刻み目が施されている。

同図-31～35は壺の体部片で、地文の上に平行沈線で文様を描く。31・33・34は同一個体と思われ、32・35を含めモチーフはいずれも渦文か同心円文と思われる。35は地文の上端を特に強く転がすことで区画を意図し、上方に方格文を描いて頭部文様帶とするものと思われる。

同図-36～38は束線具による三本同時施文で、36・37は渦文もしくは同心円文、38は継のスリットを2条とスリット同士の間を充填するものと思われる横方向の沈線文を描く。

同図-39～43は束線具による三本同時施文で、地文の上に文様を描く。モチーフはいずれも不明である。束線具の先端は幅広で鈍く、特に42はほぼ平坦でスジが走るだけである。

同図-44は口縁部、45・46は頭部の破片で、44・46は同一個体の可能性がある。いずれも頭部に三本同時施文の束線具を用いて文様を描く。44は口縁部に附加条と思われる地文が施され、頭部

に束線具を用いて3条の不規則で緩い波状文をめぐらせる。波状文の下部には別のモチーフが描かれている。口縁部の内面にも縄文が施されている。内面の縄文は外面とは異なる原体が用いられているようである。45は、縦のスリットの間を横方向の等間隔の沈線で充填する。46は、渦文もしくは同心円文の間を横方向の沈線で充填するものと思われる。この3点は、焼成が良好である。

同図-47・48は、三本同時施文の束線具で緩やかな波状文を描く。束線具の先端はやや鈍い。

同図-49~56は壺の口縁部片である。49・50は、外面と口縁端部に単節LR縄文、内面に丁寧なナデが施されている。49の外面には炭化物が部分的に付着する。51は、外面に附加条縄文、外反する口縁端部に深い刻み目が施されている。52~54は外面と口縁端部に直前段多条、55・56は外面と口縁端部にRLの附加条縄文が施されている。

同図-57~60・図145-1・2は壺で、同一個体と考えられる。外面に単節LR縄文が施され、内面には部分的に荒れによる剥離がある。

図145-3は壺、同図-4は器種不明で、いずれも外面に単節LR縄文が施されている。3の上端には横位の沈線が施されている。4は胎土に纖維を含む。

同図-5~10は、いずれも直前段多条が外面に施される。5は壺の口縁部、6は壺か壺、7~10は壺で、8~10の外面には炭化物が部分的に付着する。

同図-11は壺の体部片で、二本同時施文の束線具による区画線下に0段多条縄文が施されている。

同図-12~25は、直前段反燃の縄文が施されている。12~14は同一個体と思われ、胎土に纖維をわずかに含む。15~17も同一個体と思われる。14・18の外面には炭化物が付着する。

図145-26~40、図146-1~9は、外面に附加条縄文が施されている。図145-26~36は壺の口縁部で、26・28は同一個体、29~31・33~36は口縁端部にも縄文が施されている。図145-39・40は外面に炭化物がわずかに付着する。図146-1・3は接合しないが同一個体と思われる。2は頸部に無文帶を持ち、5・7は外面に炭化物が付着する。

図146-10~17は、外面に無節の縄文が施されている。10~14は口縁部片で、12は不明瞭ではあるもののいずれも端部にも無節の縄文が施されている。16は無節の燃糸と思われる。

同図-18は、外面に撚糸文が施されている。

同図-19は口縁部片で、内外面で異なる縄文が施されている。外面には単節LR、内面には撚糸のようである。

同図-20~29は壺もしくは鉢の底部である。20~23は外面に直前段多条縄文が施され、底面に布压痕が付される。24~29は外面に附加条縄文が施され、底面に布压痕が付される。25の底面に稻穂痕が1箇所みられる。

図147-1~3は、外面に無節の縄文が施され、底面に布の压痕が付される。

同図-4・5は体部外表面がわずかしか遺存しない。底面に布压痕が付される。

同図-6・7は、底面に編み物の压痕の上に布压痕を付す。6には附加条縄文が施されている。

同図-8は、ミニチュア土器である。平底で、体部内面に輪積み痕が残る。

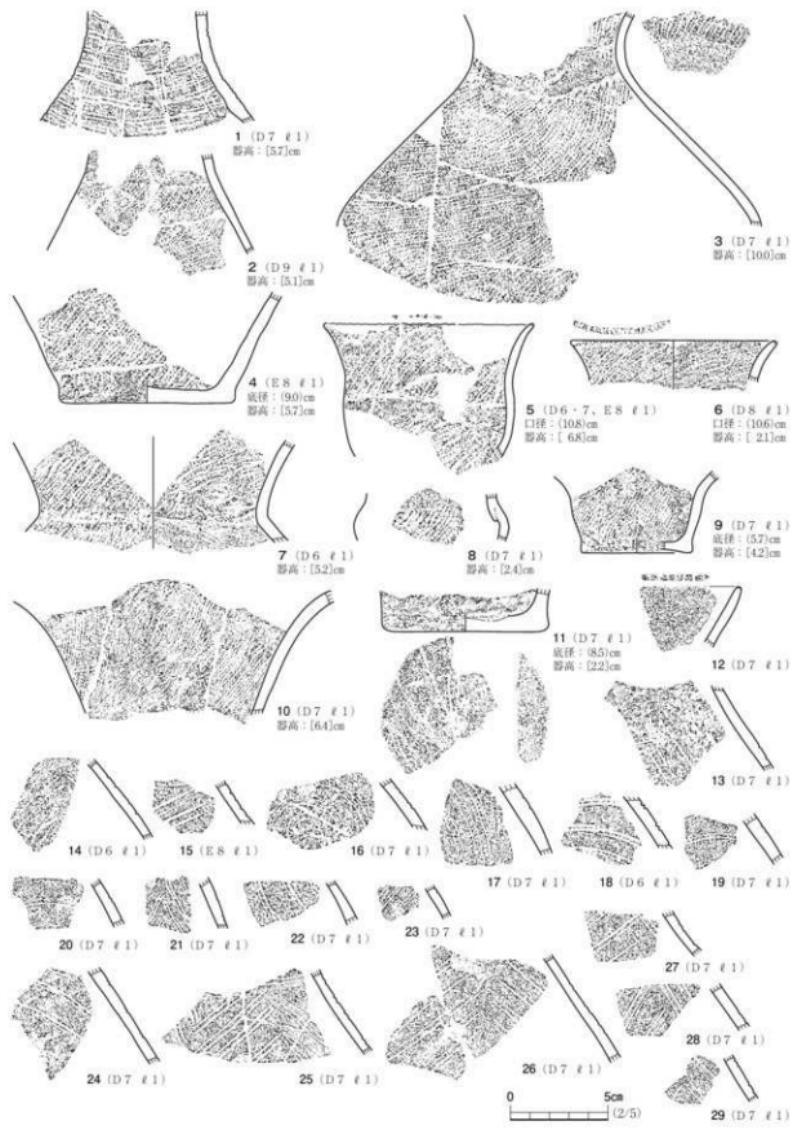


図143 2号遺物包含層出土遺物（1）

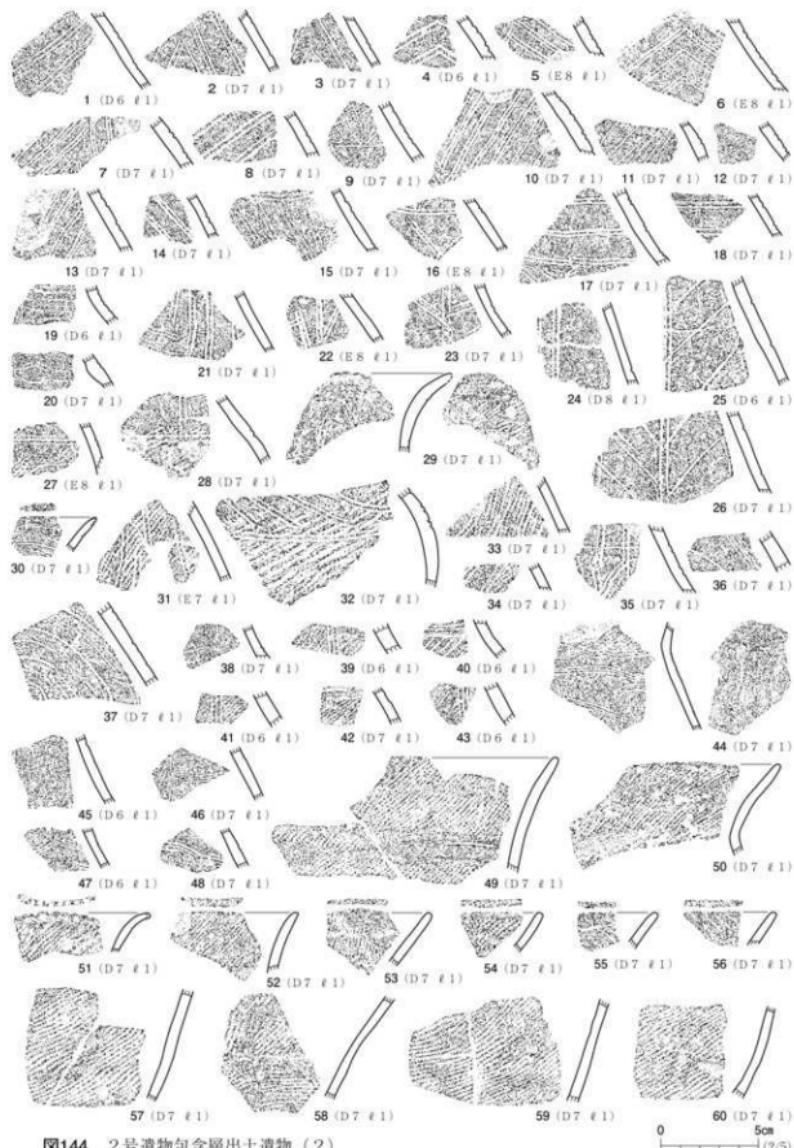


圖144 2號遺物包含層出土遺物（2）

0
5cm
(2/5)

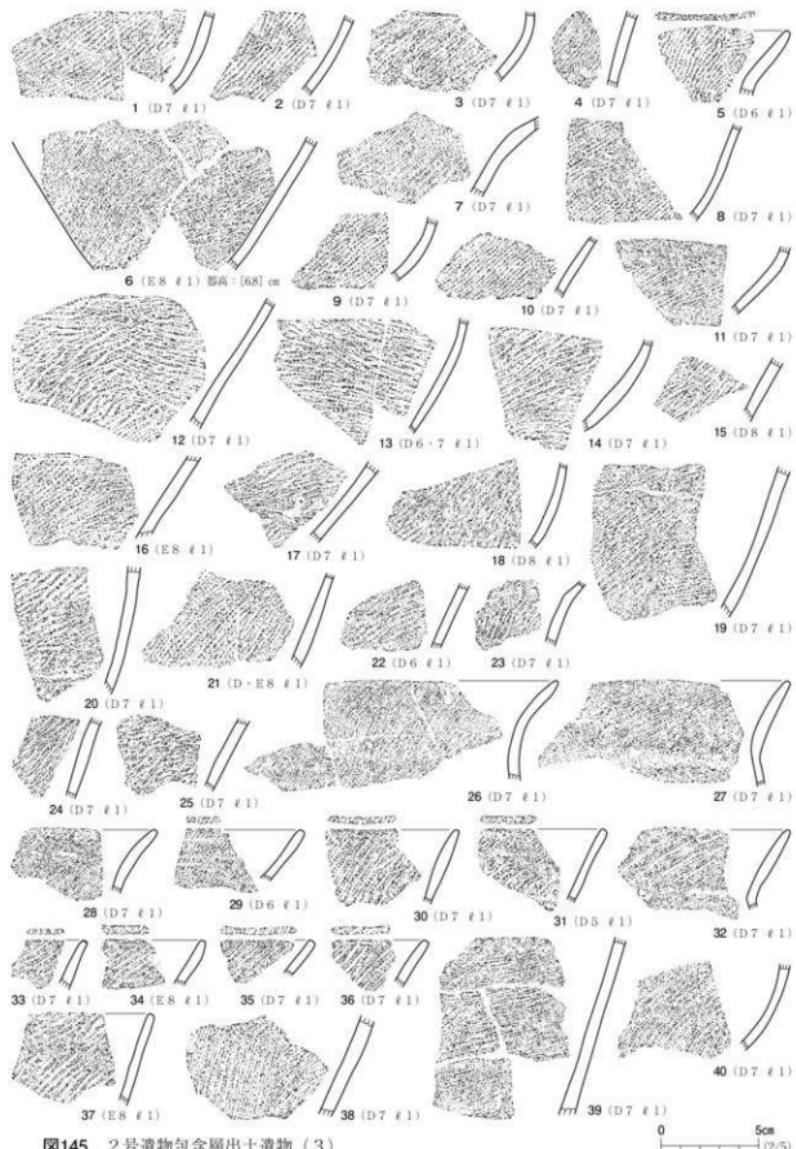


図145 2号遺物包含層出土遺物（3）

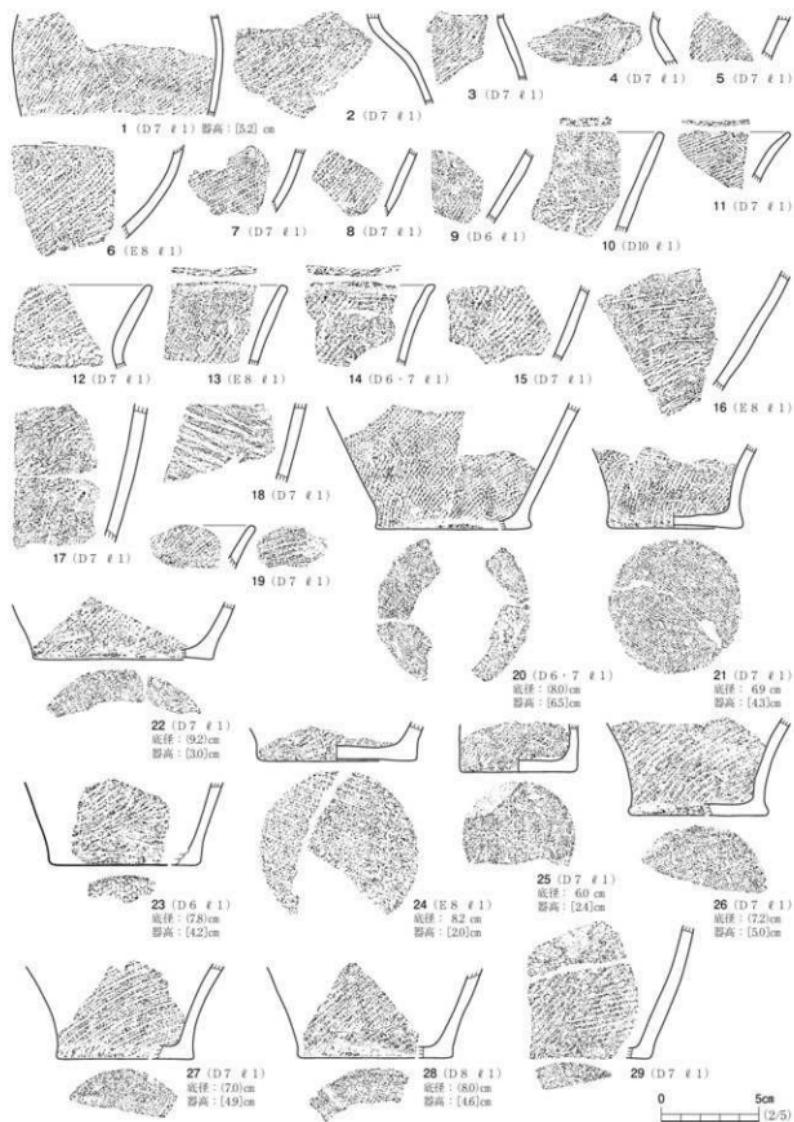


图146 2号遗物包含层出土遗物（4）



図147 2号遺物包含層出土遺物（5）

縄文土器 同図-9・10はいずれも口縁部片で、外面に沈線文が施され、10には条痕が観察される。いずれも胎土に纖維を大量に含む。
 (青山)

石器 図148-1は磨製石剣である。長さ19.2cm、幅4.4cmで、身部長12.7cmに対し、柄部長が6.6cmとなり、柄部が長いのが特徴である。身部に鎬ではなく、左右両端部は棱を持つ。身部と柄部の境には明瞭な関が敲打により作り出される。柄尻は平坦で、突起などの装飾は認められない。柄部から間にかけての厚さは1.8cmで、そこから先端に向けてしだいに薄くなる。全面に斜位基調の研磨が丁寧に施されているが、関の両側縁の敲打は磨き残されている。柄尻には研磨よりも新しい剥離が連続して認められる。身部の腹面には、研磨より古い成形時の剥離が認められる。先端部の剥離の一部は研磨の際に生じた可能性がある。

同図-2は磨製石斧の未完成品と判断した。左右両側縁から複数回の剥離が加えられている。

同図-3は石庖丁である。研磨した後、全面に再度剥離調整が加えられている。紐孔の穿孔部には微細な剥離調整を加えている。刃部には鋭角な稜が作り出される。

同図-4は大型の板状石器とした。原石の縁辺に1回の打撃を加え剥離を行い、横長の素材を探取している。剥片の下縁には剥離調整が連続して加えられ、稜が形成される。

同図-5は石鎌である。無茎で、先端は欠損している。

(佐藤)

まとめ

本遺物包含層は、丘陵中腹の比較的急な北斜面に形成され、東西43m、南北10m以上の規模を持つ。斜面下方にあたる北部は平場を造成するために切り崩されていた。出土土器は弥生時代中期後葉のものが大半で、他に縄文早期の土器と須恵器がごく少量出土した。特筆されるのは石剣が出土したことで、本遺物包含層で最も遺物が多く出土した部分に散在する土器片とともに横たわって埋もれていた。本遺物包含層が位置する斜面上には弥生時代の遺構は存在していない。磨製石剣

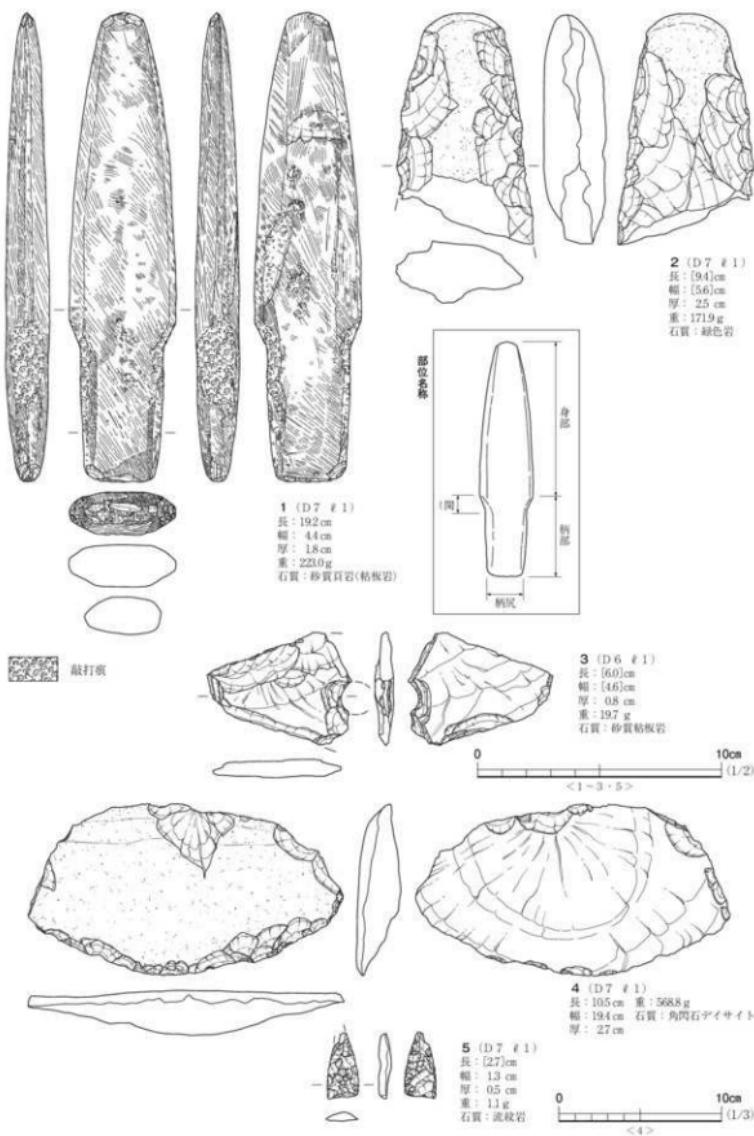


図148 2号遺物包含層出土遺物（6）

が出土した地点の北側約50cmは造成された崖がせまっていた。この造成がいつ頃行われたかは、付近の住民が遊離していることもあって聞き取り調査ができなかったものの、国土地理院がネット上で公開している航空写真を見ると1963年撮影時点ではまだなく1975年に撮影された写真には写っていることから、昭和30~40年頃に行われたことが判明する。

前述したように、本遺構包含層は遺構があるとは思えないような北に面した比較的急な斜面の中腹に位置する。当初は試掘・確認調査による要保存範囲から除外されていたが、調査の途上で遺物包含層の存在に気付き、磨製石剣等の貴重な遺物を取り上げることができた。

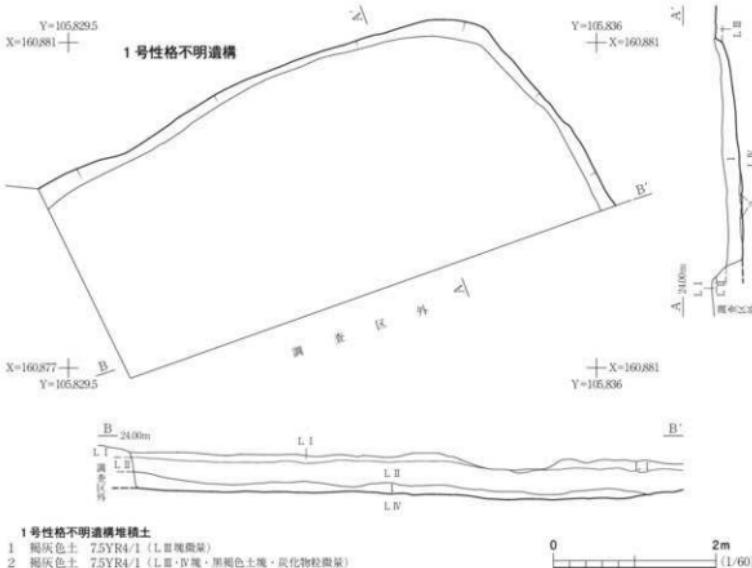
(青山)

第11節 性格不明遺構

1号性格不明遺構 SX 01 (図149)

本遺構は、調査区南東部、丘陵南斜面のK-13、J・K-14グリッドに位置する。検出面はLⅢで、褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の南側は調査区外に延びている。他遺構との重複関係は認められないが、西側4mに11号住居跡、北側6mに29号住居跡が位置している。

本遺構の平面形は長方形の可能性があり、本調査では北東隅部の付近を確認したものと考えられる。規模はいずれも遺存値で長軸6.3m、短軸3mである。検出面からの深さは最大20cmである。周



- 1 褐灰色土 7.5YR4/1 (L.I層微弱)
- 2 褐灰色土 7.5YR4/1 (L.III・IV層、黒褐色土塊、炭化物粒微量)

図149 1号性格不明遺構

壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がり、中央部には平面形が楕円形のわずかな段を持つ。底面は斜面上部から下位に向かいわずかに傾斜し、南部は平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれも褐灰色土を基調とする。 ℓ 1は遺構全体を覆う土で、L III塊を微量に含む。 ℓ IIに類似する土質であることから、斜面上部からの流れ込みと判断した。 ℓ 2は底面付近に部分的に堆積し、L III・IV塊や黒褐色土塊、炭化物粒を微量に含む。本遺構が開口していた時に堆積した土と判断した。本遺構からは土師器6点、須恵器2点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本遺構の性格は不明で、所属時期は出土遺物から古代以降と考えられる。(佐藤)

2号性格不明遺構 S X 02 (図150、写真146)

本遺構は、丘陵頂部西側の平坦面、J-8グリッドに位置する。検出面はL IIIで、現代の畠の耕作土を除去した後の精査で、褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の北東部は擾乱により破壊されており遺存していない。他遺構との重複関係は認められないが、南東側に近接して14号住居跡が、西側2.7m付近に22号住居跡が位置している。

本遺構の平面形は隅丸長方形の可能性がある。規模は、長軸1.76m、短軸は遺存値で1.03mである。検出面からの深さは最大9cmである。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がり、北西辺はスロープ状である。底面は平坦で、全面には顯著な踏み締まりが認められる。遺構内堆積土はL III塊を多量に、炭化物粒を微量に含む褐灰色土の單層で、土塊が覆土中に認められることから、人為堆積土と判断した。本遺構から土師器2点、須恵器1点、石製品が1点出土し、石製品1点を図示した。

図150-1は砾石である。背面中央付近は使用により段状になる。左側面には格子状の線状痕が顯著に認められる。

本遺構は、底面全体の踏み締まりが特徴だが、性格は不明である。所属時期は出土遺物からおおむね古代以降と考えられる。(佐藤)

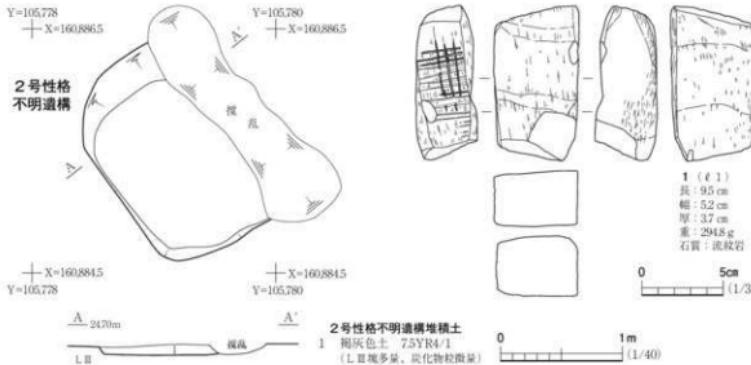


図150 2号性格不明遺構・出土遺物

3号性格不明遺構 SX X 03 (図151、写真110・140)

本遺構は、調査区西部の北西丘陵の縁部、I-8グリッドに位置する。検出面はLIIIで、黒褐色土の範囲として確認した。本遺構の北半部は1号道路により破壊されており、遺存していない。本遺構の東側2.2mには14号溝跡が位置している。

本遺構の平面形は不整規円形である。規模はいずれも遺存値で長径4.4m、短径2.1mである。検出面からの深さは最大25cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は北西側の斜面下位に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は褐灰色土塊を多量、焼土粒を微量に含む黒褐色土の単層で、土塊が認められることから、人為堆積土と判断した。

本遺構からは弥生土器38点、土師器108点、須恵器4点、石器・石製品8点、平瓦1点が出土している。このうち、平瓦1点、弥生土器9点を図示した。

図151-1は平瓦の小片である。側面は面取りされ、凹面には布圧痕が認められる。

同図-2~10は弥生土器である。2は壺の口縁部から頸部である。口縁端部には刻み目が認められる。地文は直前段反撫である。3は壺の口縁部付近で、内外面には附加条の繩文が施されている。

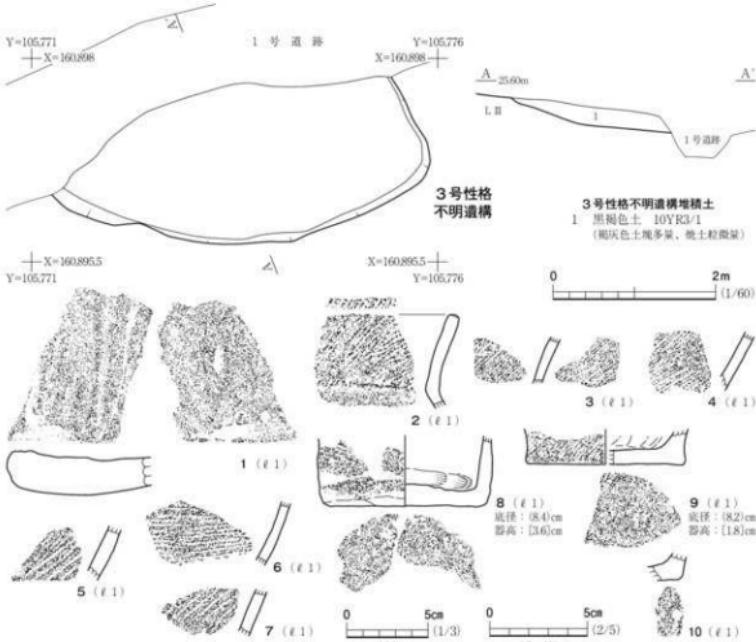


図151 3号性格不明遺構・出土遺物

る。4~7は、壺もしくは甕の体部下半の小片で、地文は附加条である。8~10の底面には、布庄痕が認められる。

本遺構は、平面形が不整梢円形で掘り込みの浅い遺構である。本遺跡の中で唯一、瓦が出土しており、近接する郡山五番遺跡や堂ノ上遺跡との関連性をうかがわせる。本遺構の性格は不明で、所属時期は出土した平瓦から奈良・平安時代と考えている。(佐藤)

5号性格不明遺構 S X 05 (図152、写真110・140)

本遺構は、調査区西部、北西斜面の裾部、H・I-4グリッドに位置する。検出面はJⅢで、褐色土の範囲として確認した。本遺構と重複する遺構はないが、本遺構の南西側1.1mには23号住居跡が位置している。

本遺構の平面形は不整な長方形を呈し、斜面の等高線と長軸が並行する。規模は、長軸2.95m、短軸1.2m、検出面からの深さ15cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面はわずかに凹凸が認められる。遺構内堆積土は2層に分けられた。いずれもLIIに由来し、レンズ状に堆積することから、斜面上部から流れ込んだものと判断した。

本遺構からは土師器36点、須恵器1点が出土した。このうち土師器2点を図示した。

図152-1・2は土師器の甕である。1は外傾する口縁部の破片である。内外面にはヨコナデが施されている。2は平底で体部はわずかに張りがある。外面の底部付近には、横位のヘラケズリが施されている。底部には木葉痕が認められる。内面はアバタ状に剥離し、斑状に炭化物が付着している。

本遺構の性格は不明で、所属時期は出土遺物から奈良時代、8世紀と考えている。(佐藤)



図152 5号性格不明遺構・出土遺物

第12節 小穴群 (図153~157、写真140)

本遺跡では小穴を182基確認した。小穴は、調査区北東部、丘陵先端部の緩傾斜に多く分布し、H・I-15グリッドより西側では極端に少なくなる。G-16グリッドやE・F-17・18グリッド付近の小穴の分布傾向をみると、丘陵が延びる方向に沿っていることから、この周辺に複数の掘立柱建物跡が存在していた可能性がある。この他、J-16・17グリッド付近に9基の小穴が分布している。検出面はすべてがLⅢ上面である。

平面形は円形や方形が多く、規模は30~50cm、深さは20~50cmのものが多い。小穴の堆積土は大部分がLⅡに由来する褐灰色土の単層で、斜面上部から流れ込んだものと判断した。断面観察の結果、9基に柱痕を確認した。

小穴群からは弥生土器13点、土師器34点、陶磁器1点、石器1点が出土した。このうち、遺存の良好な陶磁器1点、弥生土器1点を図示した。

図157-1は土瓶の蓋である。外面には暗緑色の釉薬が施されている。

同図-2は弥生土器の壺か甕の底部付近である。外面には縄文が認められる。

(佐藤)

第13節 遺構外出土遺物 (図158~167、写真140~146・149~151)

遺構外からは、縄文土器1点、弥生土器424点、土師器3,756点、須恵器278点、陶磁器8点、瓦質土器4点、石器・石製品212点、土製品2点、鉄製品4点、ガラス瓶1点、窯壁3点、粘土塊226kg、鉄滓622gが出土し、このうち、230点を図示した。弥生土器は、調査区全域から認められるが、特に弥生時代の住居跡が近接するH-16、F-6グリッドや、谷地形の裾部、F-9・10、G-9グリッド周辺から多く出土している。土師器は、丘陵頂部平坦面の住居跡が密集するI-9・10、G-17・18、H-16・17グリッド周辺で多く出土している。次いで丘陵斜面中位の住居跡が間隔をあけて分布するH-7・8、F-9グリッド周辺からも定量出土している。

(佐藤)

縄文土器 図158-1は、深鉢の口縁部片で、外面に原体不明の縄文が施されている。胎土に纖維を含む。

弥生土器 図158-2・3は壺の体部片で、一本沈線によって文様を描く。2は、横方向の区画線より下に縄文が施されている。モチーフ、縄文ともに種類は不明である。3は三角形のモチーフが描かれる。

同図-4は壺の口縁部である。受け口状で、外面に平行沈線で重三角文を描く。

同図-5~54は壺の体部片である。5~11は平行沈線で渦文もしくは同心円文を描く。12~16は平行沈線で重菱形文を描く。13・14は接合しないが同一個体である。15は中央に菱形となる上下の対角線に平行沈線を引く。16は中央の菱形内を4条以上の斜線で充填する。17~49は平行沈

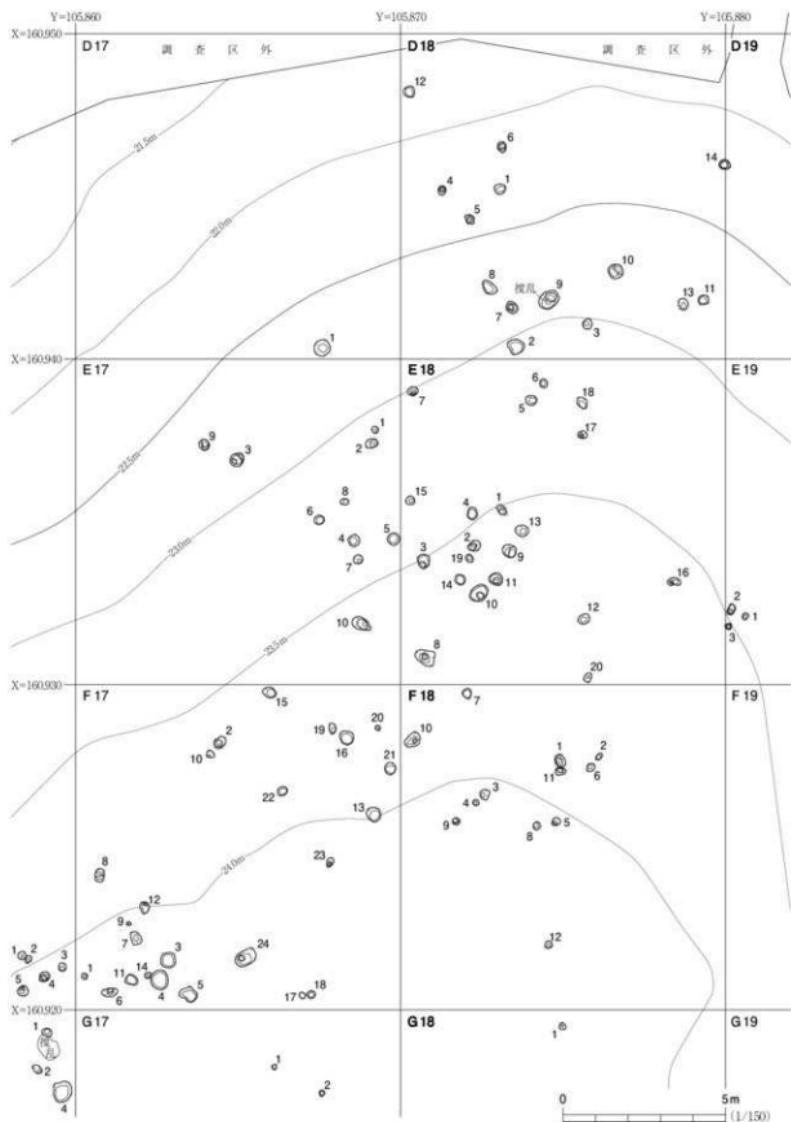


図153 小穴群（1）

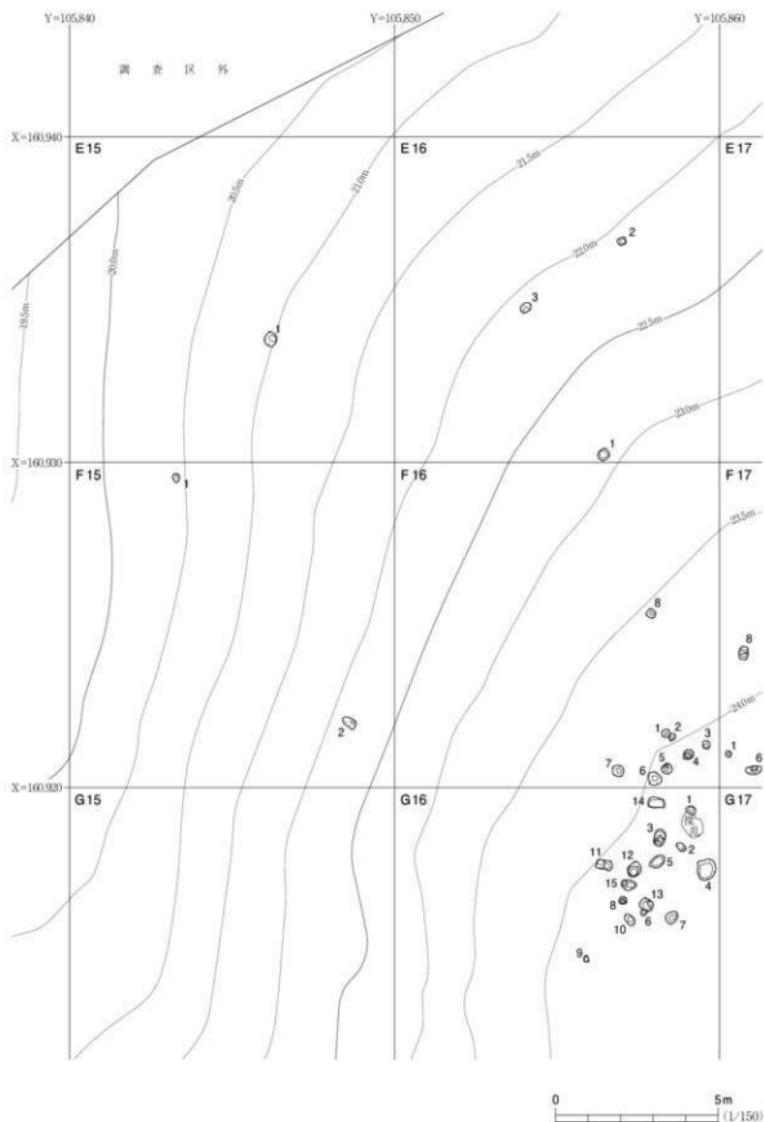


図154 小穴群（2）

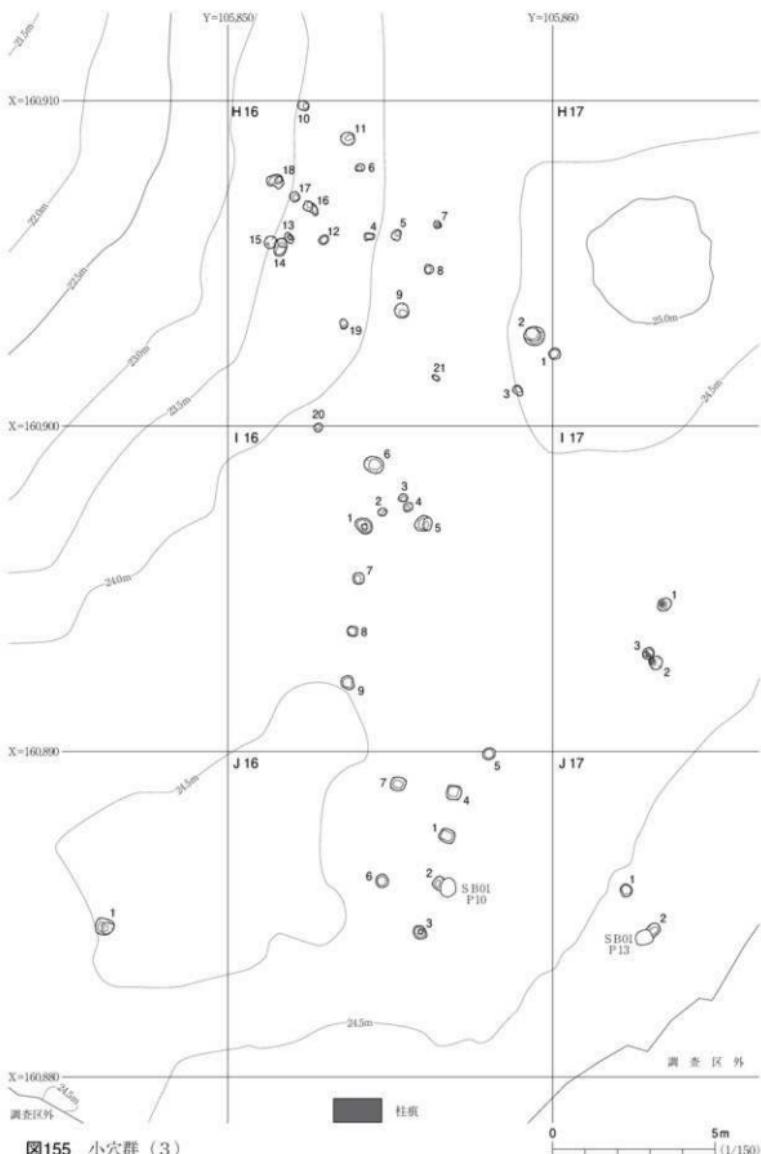


図155 小穴群（3）

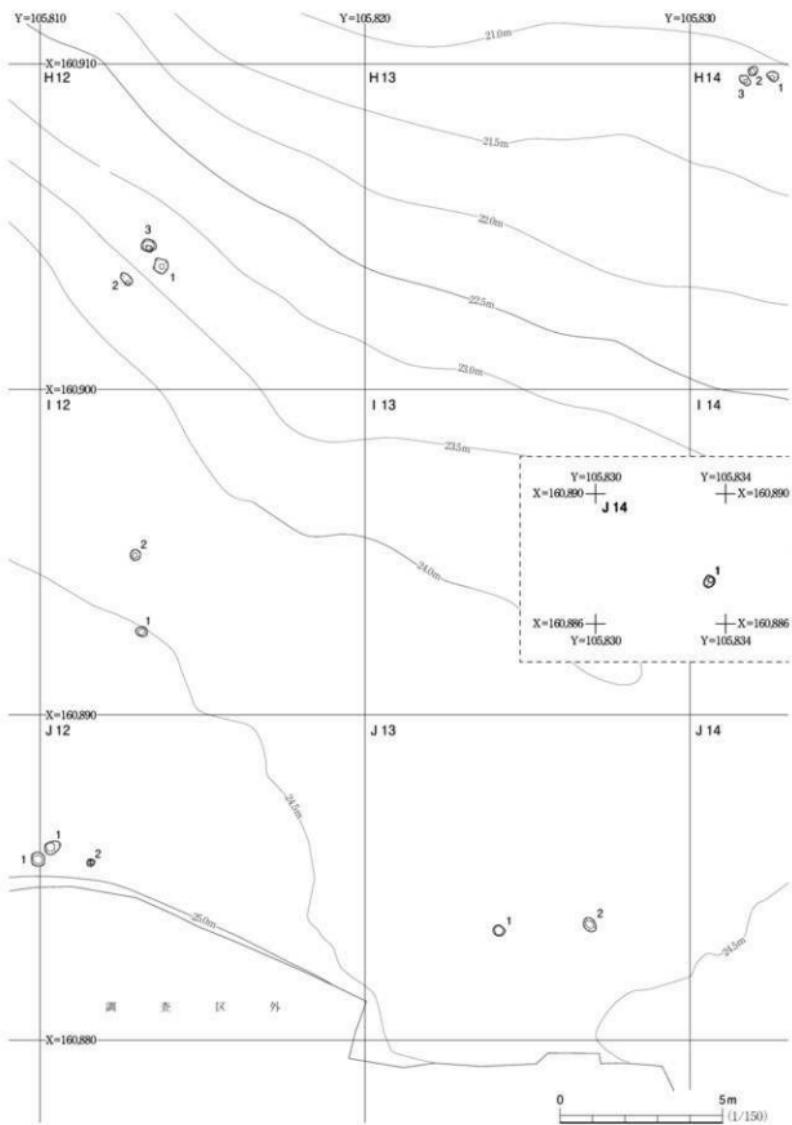


図156 小穴群(4)

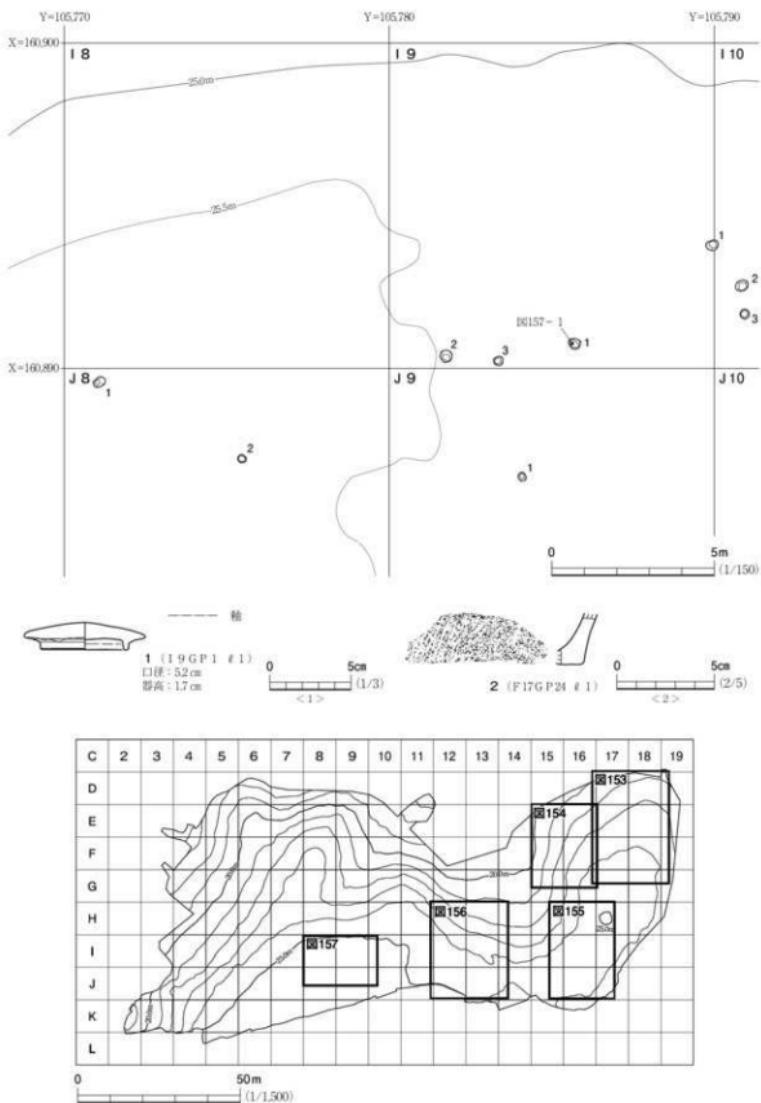


図157 小穴群（5）・出土遺物

表2 小穴一覧（1）

グリッド	番号	長軸 (cm)	深さ (cm)	備考	グリッド	番号	長軸 (cm)	深さ (cm)	備考
D17	1	50	48		E18	18	40	20	
D18	1	34	23		E18	19	28	17	
D18	2	52	23		E18	20	28	35	
D18	3	32	23		E19	1	20	16	
D18	4	28	60		E19	2	32	32	
D18	5	32	68		E19	3	18	12	
D18	6	34	46		F15	1	28	41	
D18	7	38	27		F15	2	42	73	
D18	8	52	20		F16	1	28	50	F16GP 2より新しい
D18	9	60	53		F16	2	24	28	F16GP 1より古い
D18	10	42	41		F16	3	28	42	
D18	11	32	26		F16	4	52	37	
D18	12	32	21		F16	5	32	43	
D18	13	38	28		F16	6	40	70	
D18	14	34	32		F16	7	36	66	
E15	1	34	50		F16	8	28	38	
E16	1	38	57		F17	1	18	10	
E16	2	24	20		F17	2	40	68	
E16	3	36	47	土師器12点出土	F17	3	44	37	
E17	1	20	23		F17	4	60	18	
E17	2	36	47		F17	5	58	33	
E17	3	44	30		F17	6	50	50	
E17	4	36	23		F17	7	40	2	
E17	5	36	17		F17	8	40	26	
E17	6	30	27		F17	9	12	15	
E17	7	30	31		F17	10	24	61	
E17	8	24	47		F17	11	40	5	
E17	9	34	45		F17	12	38	24	
E17	10	60	81		F17	13	44	35	
E18	1	36	38		F17	14	18	15	土師器1点出土
E18	2	36	48		F17	15	42	43	
E18	3	42	26		F17	16	44	23	
E18	4	36	36		F17	17	20	10	
E18	5	34	31		F17	18	22	23	
E18	6	24	28		F17	19	30	48	
E18	7	32	36		F17	20	16	55	
E18	8	68	58		F17	21	38	51	
E18	9	40	31		F17	22	34	28	
E18	10	62	25		F17	23	32	47	
E18	11	42	24		F17	24	72	33	図157-2出土
E18	12	34	27		F18	1	40	73	F18GP11より新しい
E18	13	40	28		F18	2	30	22	
E18	14	32	18		F18	3	30	52	
E18	15	28	51		F18	4	18	55	
E18	16	40	15		F18	5	22	64	
E18	17	28	26		F18	6	24	26	

表3 小穴一覧(2)

グリッド	番号	長軸 (cm)	深さ (cm)	備考	グリッド	番号	長軸 (cm)	深さ (cm)	備考
F18	7	32	22		H16	17	32	26	
F18	8	20	23		H16	18	48	21	
F18	9	24	30		H16	19	28	31	
F18	10	54	40	土師器3点出土	H16	20	24	32	
F18	11	36	39	F18GP1より古い	H16	21	28	44	
F18	12	20	20	弥生土器10点、土師器2点出土	I 9	1	37	37	石器1点・国157-1出土、SI07より新しい
G16	1	28	21		I 9	2	38	53	
G16	2	32	20		I 9	3	28	22	
G16	3	52	25		I 10	1	39	32	
G16	4	42	27		I 10	2	41	31	
G16	5	52	8		I 10	3	29	32	土師器7点出土、柱痕有り
G16	6	18	56	G16GP13より新しい	I 12	1	35	22	弥生土器2点出土
G16	7	42	28		I 12	2	31	18	土師器1点出土
G16	8	20	50		I 16	1	58	48	
G16	9	20	22		I 16	2	28	32	
G16	10	40	38		I 16	3	28	33	
G16	11	22	54		I 16	4	24	57	
G16	12	(22)	7		I 16	5	52	27	
G16	13	40	58	G16GP6より古い	I 16	6	58	48	
G16	14	50	26		I 16	7	36	23	
G16	15	42	10		I 16	8	28	25	
G17	1	16	19	S I 38より古い	I 16	9	44	56	SD02より古い
G17	2	20	18		I 17	1	42	76	
G18	1	18	75		I 17	2	42	75	I17GP03より新しい、底部に柱の痕跡有り
H12	1	40	55	SH01より新しい	I 17	3	38	82	I17GP02より古い、底部に柱の痕跡有り
H12	2	40	29	SH01より新しい	J 8	1	38	47	
H12	3	44	80		J 8	2	27	14	SK13に隣接
H14	1	38	45		J 9	1	27	54	
H14	2	30	21		J 11	1	39	29	柱痕有り
H14	3	38	34		J 12	1	50	45	柱痕有り
H16	1	60	30		J 12	2	25	40	
H16	2	44	59		J 13	1	38	16	土師器2点出土
H16	3	36	53		J 13	2	47	22	土師器1点出土
H16	4	32	16	S I 44より新しい	J 14	1	35	42	SI29と重複するが新旧関係不明
H16	5	36	22	SI44より新しい	J 15	1	58	27	
H16	6	28	31		J 16	1	47	47	柱痕有り
H16	7	24	35		J 16	2	39	41	SB01-P10より古い
H16	8	30	36		J 16	3	46	35	底部に柱の痕跡有り
H16	9	42	53		J 16	4	45	20	土師器4点出土
H16	10	32	43		J 16	5	41	13	
H16	11	42	16		J 16	6	38	24	柱痕有り
H16	12	32	41		J 16	7	44	27	
H16	13	36	66	土師器1点出土	J 17	1	39	33	柱痕有り
H16	14	56	45	H 16GP15より古い	J 17	2	(34)	38	SB01-P13より古い
H16	15	38	73	H 16GP14より新しい					※計測値()：道存値
H16	16	54	43						

線で重菱形文もしくは重山形文を描く。21は沈線の内外に赤色顔料が部分的に付着する。50～54は平行沈線で横方向の区画線を1条もしくは2条引き、以上に文様を、以下に縄文が施されている。モチーフはいずれも重菱形文もしくは重山形文と思われる。縄文は、50が単節、52が附加条で、その他は不明である。

同図-55～61は壺の頸部片で、平行沈線で綴のスリット文を描き、その両側を55・56・58は水平の平行線、57は斜位の平行線で充填する。

同図-62の器種は不明である。横位の波状文を上下に2条描く。

同図-63・64は壺の口縁部で、63は口縁部の下部に横位の沈線を引いて区画線とし、以下に縄文が施されている。口縁部は無文であるが、破片の左端に綴の沈線が引かれているようである。64は附加条縄文を地文とし、これに重ねて綴の沈線を引く。

同図-65は二本同時施文の束線具で文様を描く。モチーフは同心円文か渦文の可能性がある。

同図-66は高杯の脚部片で、破片の左右を画す直線的な縁は方形の透かし孔と思われる。外面に山形とその頂部から垂下する直線を平行沈線で描く。

同図-67～69は器種不明である。いずれも平行沈線で、67は方格文、68・69はモチーフ不明の文様が描かれる。

同図-70は、壺の口縁部片である。外面を肥厚させた複合口縁で、複合部の外面には綴方向の浅い刻みもしくは沈線が密に施されている。

図159-1・2は壺の体部片で、地文に重ねて平行沈線が描かれる。

同図-3・4は壺である。4は底部付近と思われることから、鉢の可能性もある。いずれも三本同時施文の束線具を用い、3は渦文か同心円文、4は綴のスリット文の間を重山形文で充填する。

同図-5～7は四本同時施文の束線具で、5は格子文、6は平行線、7はモチーフ不明の文様が描かれる。

同図-8～10は外面に単節L R縄文が施され、8は底面に布圧痕が付される。

同図-11は外面に単節R L縄文が施され、底面に木葉痕が付される。

同図-12は壺もしくは壺の底部で、外面に直前段多条縄文が施され、底面に布圧痕が付される。

同図-13・14は附加条縄文が施され、14は破片の上部に縄文原体の末端結節を回転施文する。

同図-15・16は壺の体部片で、0段多条縄文が外面に施されている。

同図-17～21は壺で、直前段半撲の縄文が施されている。17・18は同一個体と思われ、口縁部外面と口縁端部に、19は口縁部と体部に縄文が施され、頸部を無文帶とする。

同図-22～46は、附加条縄文が外面に施されている。36は底面に布圧痕が付され、41は頸部を無文帶とする。

同図-47～49は、無節の縄文が施されている。

図160-1はR Lの附加条、2は壺の隆带を持つ頸部片、3は撲糸文、4は直前段合撲か附加条、5・6は無節と思われる縄文が施されている。

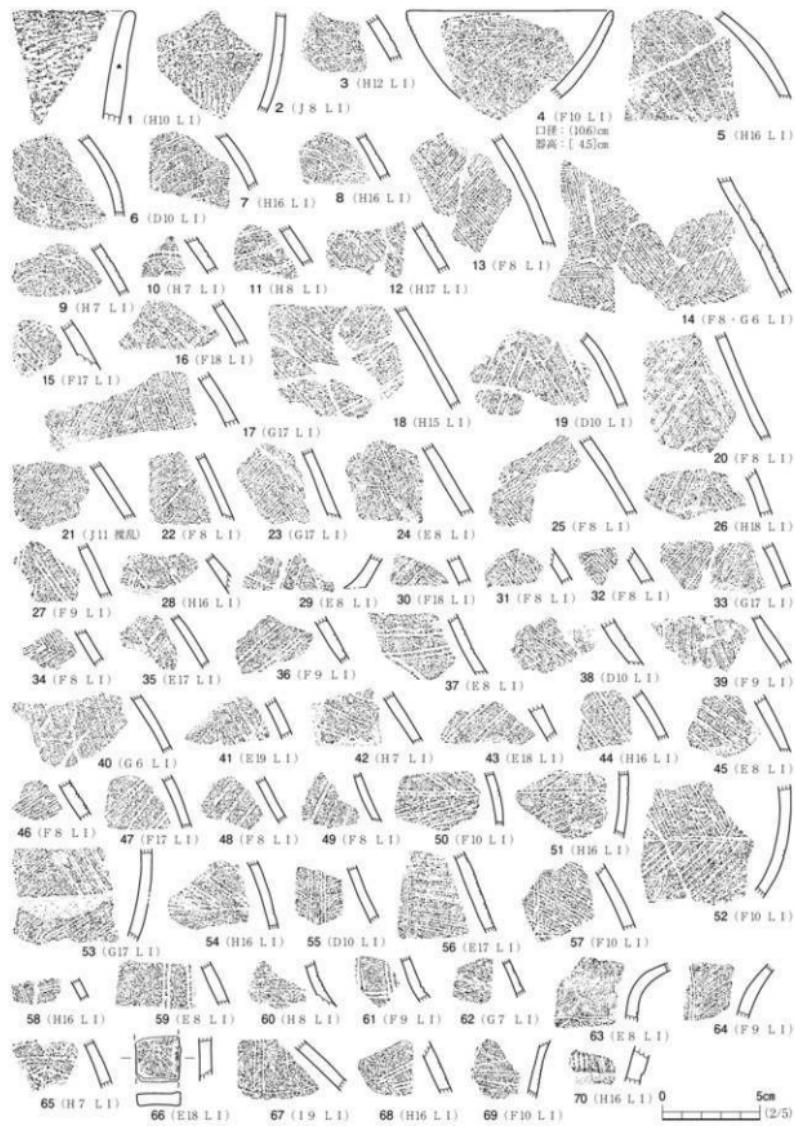


図158 造構外出土遺物（1）

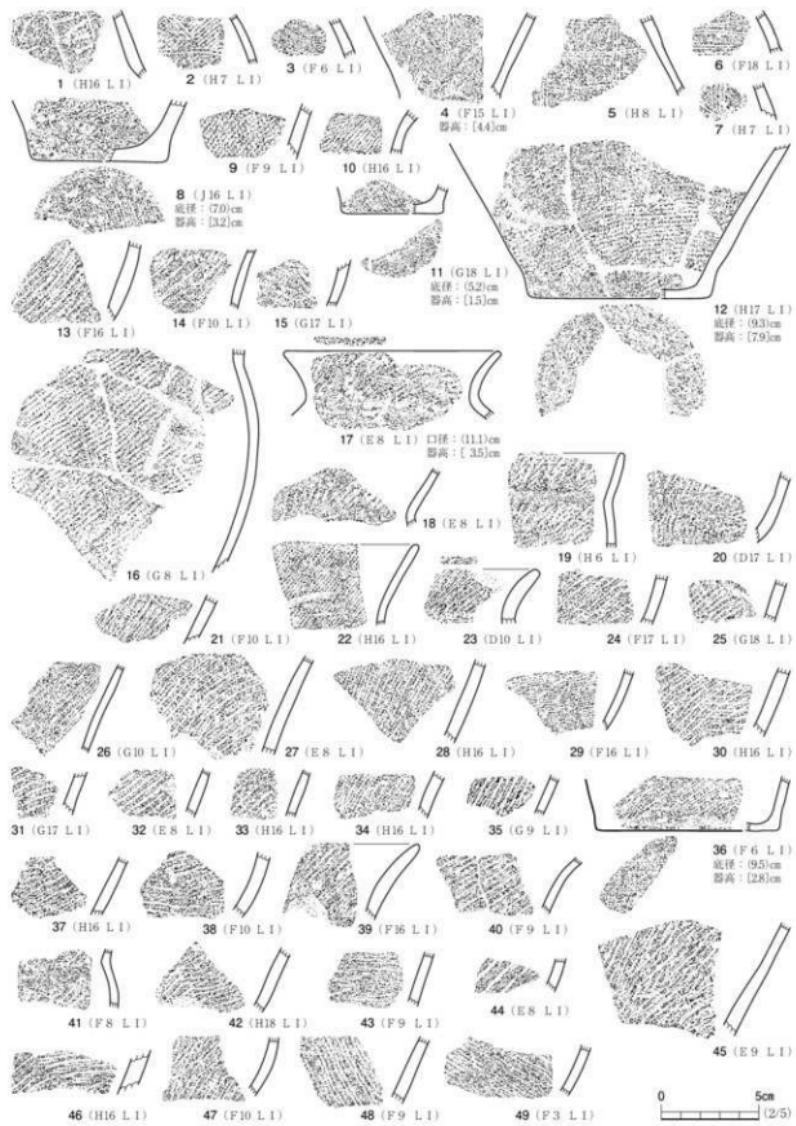


図159 遺構外出土遺物（2）

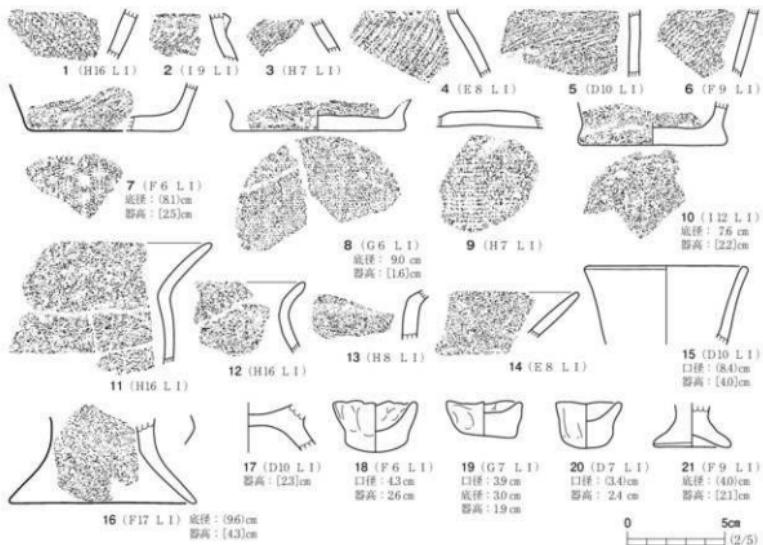


図160 遺構外出土遺物（3）

同図-7～10は底部片で、7は外面に附加条の縄文が施され、底面に編物痕に重ねて布圧痕画が付される。8は外面に附加条の縄文が施され、底面に布圧痕が付される。9は底面に布圧痕、10は底面に1箇所の種子圧痕を有する。

同図-11～17は無文のもので、11～13は甕、14は高杯か鉢、15は鉢、16・17は高杯と思われる。

同図-18～21はミニチュアで、21は高杯のミニチュアと思われる。内外面に指頭の圧痕がみられる。

（青山）

土師器 図161-1～10は杯である。1～4は輪積み成形である。1・2は平底で、わずかに湾曲しながら立ち上がる。1は成形・調整ともに粗雑で、口縁部の内外面にはヨコナデ、体部外面にはヘラケズリ、内面には粗いミガキが施されている。黒色処理は認められない。2は外面にヘラケズリのちミガキを加え、内面にはミガキが施されている。内外面には黒色処理が認められる。3・4は口縁部の小片で、緩やかに湾曲する。3は厚手で、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。4は薄手で、体部外面に稜を持つ。外面にはヨコナデ、ヘラケズリ、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。5～10はロクロ成形で、内面にはミガキのち黒色処理が施されている。5は平底で、湾曲しながら立ち上がり、口縁端部でわずかに外傾する。体部下端に回転ヘラケズリが施されている。底部切り離しは静止糸切りである。6は平底で、急な角度で立ち上がる。7は口縁部付近の小片で、直線的に立ち上がる。8～10は底部付近である。8の底部外面にはスサの圧痕が明瞭に認められる。9は体部下端が手持ちヘラケズリで調整されている。10の外面は摩

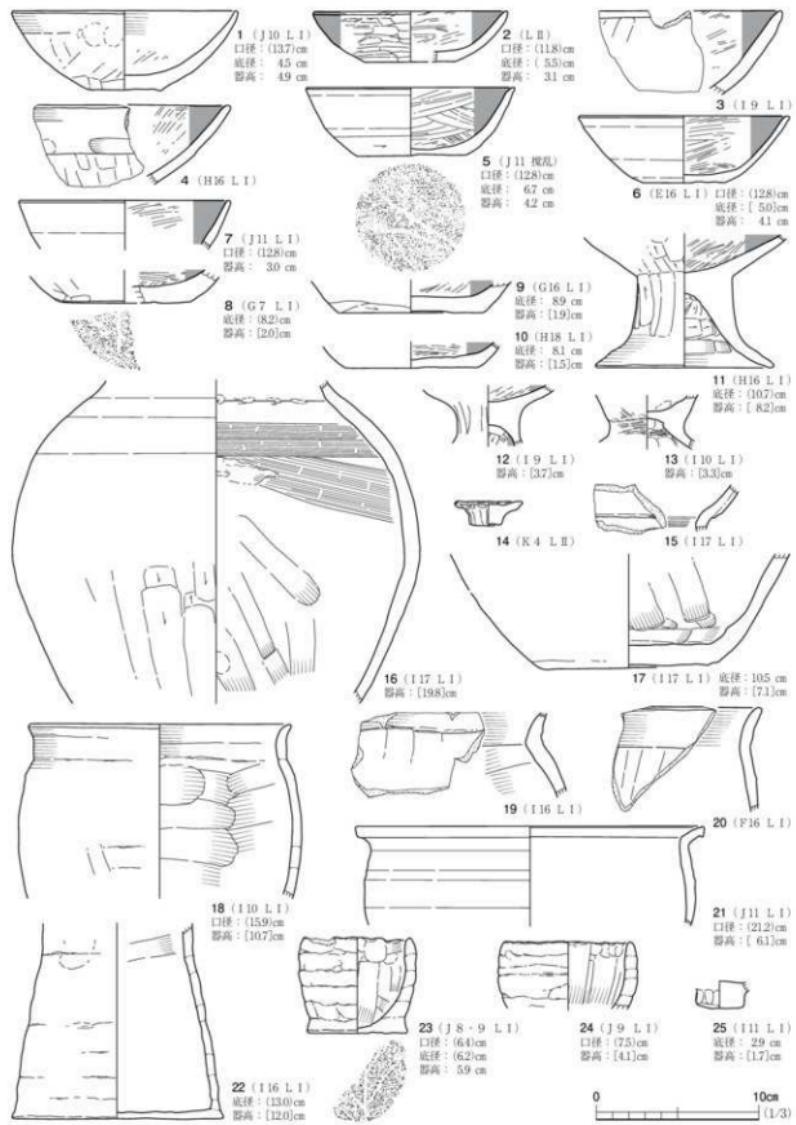


図161 遺構外出土遺物 (4)

減が顕著で調整は観察できなかった。

同図-11～14は高杯である。11は杯部は直線的に立ち上がり、脚部は「八」字に開く。調整は外面がヘラケズリ、ヨコナデが施されている。杯部の内面はミガキののち黒色処理が施されている。脚部の内面にはヘラケズリののち、柵にヨコナデが施されている。12・13は杯部と脚部の接合する部分の破片である。12は杯部と脚部の内面に黒色処理が施されている。13は内外面の接合部にミガキが施されている。内面はユビオサエにより整形される。14は高杯の杯部と脚部を接合した際の粘土の可能性がある。

同図-15～17は壺である。15の口縁部は複合口縁である。内面にはヨコナデが施されている。16・17は出土位置を同じくし、色調や胎土が近似することから、同一個体の可能性が高い。16は体部で丸みを持ち、外面には縦位のヘラケズリ、内面には体部下半がユビナデ、肩部付近はロクロの回転を利用したハケメにより調整されている。17は平底で、体部下半が直線的に立ち上がる。外面には摩滅により調整が不明で、内面にはユビナデが施されている。

同図-18～21は壺である。18～20は体部が内側に湾曲し、口縁部はわずかに外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。18の体部外面にはヘラケズリ、内面にはユビナデが施されている。19の体部外面には、縦位のヘラケズリが施されている。20は薄手で、体部外面にはヘラケズリが施されている。21はロクロ成形で、わずかに内傾する体部から口縁部は強く外傾し、口縁端部はわずかに垂下する。

同図-22は筒形土器である。平底で内傾しながら立ち上がる。外面には粘土紐の積み上げ痕が認められる。

同図-23～25は手づくね土器である。いずれも粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められ、内面にはユビナデとユビオサエが施されている。23は平底で湾曲しながら立ち上がる。底面には木葉痕が認められる。24は体部から口縁部の小片で体部は湾曲し、口縁部で垂直となる。25の底部は円盤形である。

須恵器 図162-1は高台杯である。付け高台で、接合痕が明瞭に観察できる。

同図-2は円面鏡の脚部か、盤蓋とした。下端部は平坦で、内側に湾曲しながら立ち上がる。

同図-3は杯蓋である。外面には回転ヘラケズリが施されている。内面はロクロナデののち、中心部をユビナデで整形する。

同図-4～13は壺・瓶類である。4は長頸瓶の頸部から口縁部の破片である。口縁部が外反し、端部を上に摘み上げている。頸部外面には2条のカキメが認められる。5は直線的に立ち上がり、口縁端部は、上方と水平に摘み出される。6は焼成不良で、ゆがんでいる。口縁端部は上方に摘み出される。7は短頸壺の口縁部である。口縁端部は平坦な面を持ち、わずかにくぼむ。8は低い高台が付され、体部は直線的に立ち上がる。9は直線的に立ち上がる体部で、内面には凹凸の目立つロクロナデが施されている。10は砂底で、わずかに内側に湾曲しながら立ち上がる。内面にはロクロナデののち、ハケメが施されている。11は口縁部である。器壁は厚く、口縁端部は水平に摘

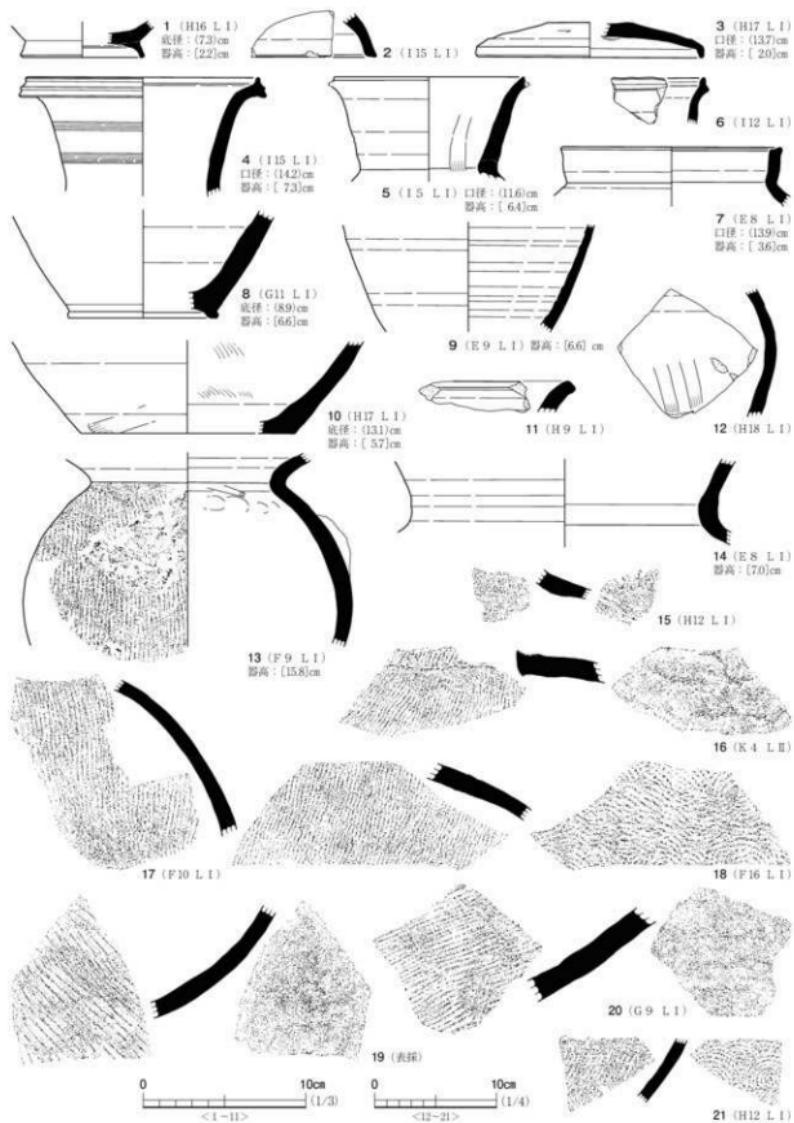


図162 遺構外出土遺物（5）

み出される。12は体部の破片である。外面に自然軸が認められ、縦位のユビナデにより調整される。13は体部上半から頭部にかけて遺存する。体部は球胴状で、頭部から強く外反する。外面には平行タタキが施され、体部上半には窓壁が溶着している。内面は調整を丁寧にナデ消しており、頭部には無文の当て具がわずかに確認できる。

同図-14～21は壺である。14は頭部付近である。接合部は丁寧なロクロナデで整形している。15・16は肩部、17・18は体部上半、19～21は体部下半の破片である。外面には平行タタキ、内面には同心円もしくは無文の当て具痕が認められる。

土製品 図163-1は紡錘車で、全面をヘラケズリにより調整している。同図-2は丸玉である。棗形で上下端部には盲孔が穿たれている。

近世・近現代の遺物 図163-3は大堀相馬焼で、蓋とした。外面には灰釉が施されている。外縁は細かく打ち欠かれ、円盤状に加工されている。

同図-4～7は瓦質土器である。4は壺の口縁部である。口縁端部は平坦で、体部外面には押印による木瓜文がめぐらされる。5は類例から焜炉の一部と判断した。外面の裾近くに1条の沈線がめぐらされ、器体に対し斜位の穿孔が施されている。6は火鉢である。口縁部は平坦で、端部の内側が肥厚する。体部には2条の突帯がめぐり、その間に巴文や円文の押印が連続して施されている。7は火鉢の脚部である。ユビオサエで、棒状に成形している。鉢部との接合部で剥離している。

同図-8～10は近現代の磁器である。8は1940年に開催予定だった東京オリンピックの記念盃である。外面には、ローマ字で「O R I N P I K U」と付され、五輪、日章旗、桜の花の絵が認められる。見込みには、「銘酒 宝富士」の文字が認められる。9は湯飲みで、外面に「壽」の文字、山水文とみられる鳥と樹木、水平線と太陽を現した風景の意匠が認められる。内面の見込みには「荒物陶器雑貨」、「富久屋商店」、「電三五」「新山町」の文字が認められる。10は銚子で、体部の外面には「新山町 富沢酒店」の文字が認められる。

同図-11はガラス製の牛乳瓶である。外面にはACL印刷により「双葉牛乳」、「福島県浪江町」、「双葉乳業株式会社」、「TEL浪江87」、「濃くて うまい」、「空罐はお買求めになったお店にお返し下さい」の文字や、ひよこをモチーフにしたロゴマークが施されている。また、体部には「まる正」マーク、「菱形にN字」のロゴマーク、「180cc」の陽刻が認められる。

同図-12は金属製のメダルである。円形で、上端部には懸垂のためのピンが溶接される。表裏面には赤褐色の塗料が斑状に残され、表面には稲穂の意匠と「農業調査」の文字が、裏面には「内閣」の文字が縦書きで鋳出される。

石製品 図164-1～4は砥石である。1は角柱状で、表面と両側面を砥面とし、連続した線状痕が認められる。下側面には研磨により古い、砥石成形時の工具痕が認められる。2は表面を砥面とし、中央が浅くくぼむ。3は両側面・裏面に粗割りの状態を残している。一部に砥面が認められる。4は表裏・左右に砥面が認められる。正面の中央部には斜位の棱があり、黒色の付着物が斑状に認められる。上側面の割れた面の一部についても、砥面として使用している。右側面には幅2・

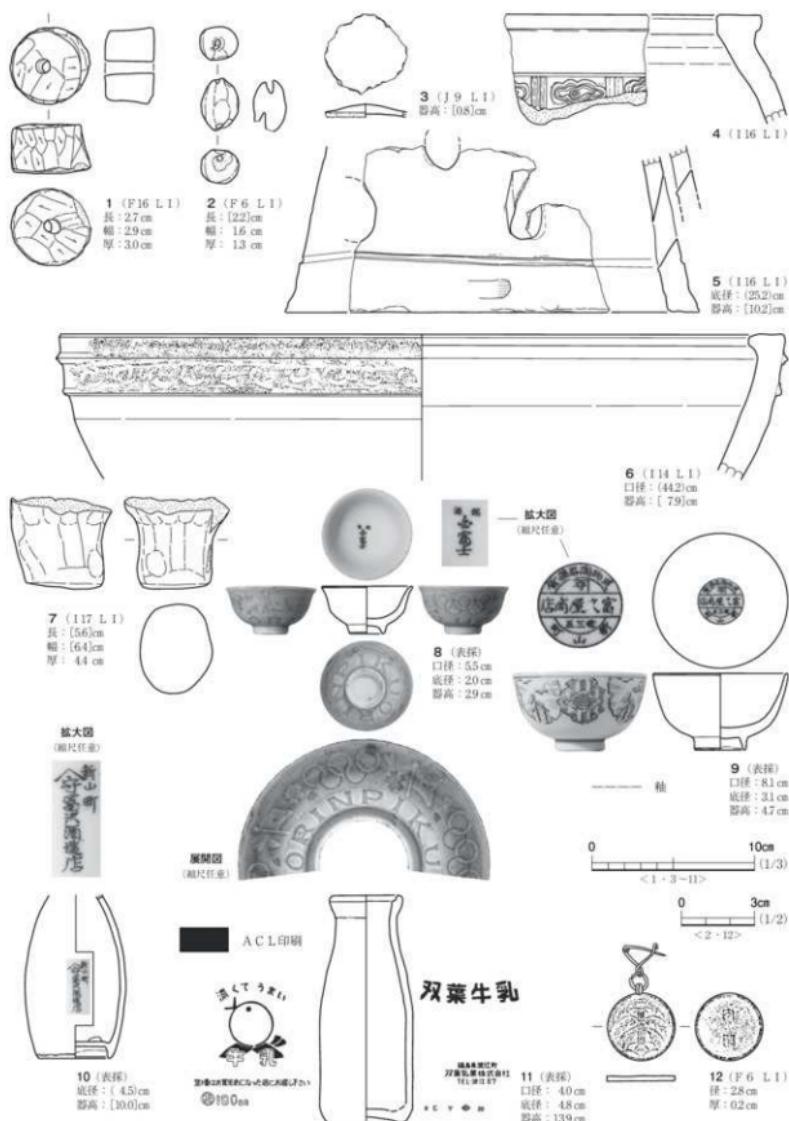


図163 遺構外出土遺物（6）

3mmの斜位の線状痕が認められる。

石 器 図164-5・6は太型蛤刃石斧の未成品である。5は全面に敲打が施され、基部には連続した剥離調整が加えられている。刃部には研磨が認められるが徹底しておらず、刃の稜線は不明瞭で、刃部の研磨を行う段階で作業が中断されたと考えられる。6は全面に敲打が施され、表裏面ともに中央部付近に研磨が施されているが、徹底していない。両側縁と刃部には、敲打より古い連続した剥離調整が認められる。刃部を研磨により形成する前段階で作業が中断されたと考えられる。

図165-1~10は偏平片刃石斧である。1の刃部には石斧使用時の剥離が認められる。2の両側縁部には研磨より新しい剥離調整が連続して施されている。3は背面に自然面を残し、両側縁に連続した剥離調整を加えている。刃部は緩やかな弧を描く。4は刃部に、微細な剥離調整を連続して加えている。腹面の主要剥離面には、研磨の痕跡は認められない。5は腹背面ともに中央の剥離は研磨より古く、両側縁の剥離は研磨より新しいことから、剥離調整→研磨→剥離調整を複数回行い、整形している。6は背面に自然面を残し、研磨より新しい剥離調整が加えられる。刃部には刃こぼれが認められる。7の腹背面中央には、研磨より古い敲打痕が認められる。背面右側縁部には、研磨より新しい連続した剥離調整が加えられる。8は全体に研磨後の剥離調整を加え、両側縁には研磨の痕跡が明瞭に認められる。9・10は偏平な短冊形を呈する。9の左右両端には、研磨より新しい剥離調整が連続して施されている。基部側にも研磨より新しい複数の剥離があり、楔としての使用も想定される。10の背面には剥離調整の棱線を除去するように研磨を加えている。

同図-11はノミ形石器の可能性がある。全体に研磨が施されている。腹面左端部や基部には、研磨より新しい剥離調整が加えられる。刃部は刃こぼれが顕著に認められる。

同図12~16は石庖丁である。12は刃部付近にのみ研磨が施されている。基部側や左右両端には、研磨より新しい剥離調整が加えられている。13は剥離調整の段階の未成品で、背面には自然面が認められる。下端は連続した剥離調整により、稜が認められる。14は全面に研磨が施され、腹面の右側には盲孔が認められることから、紐孔穿孔時に欠損したものと判断した。15は刃部付近、16は基部付近の小片である。いずれも研磨より新しい剥離調整が認められる。

同図-17は礫石器とした。腹背面に自然面が認められ、側縁の全周に剥離調整を加えている。

図166-1・2は板状石器である。1は左右両端には微細な剥離調整が連続して加えられ、抉りが認められる。2は背面に自然面を残す。左右両端には剥離調整が加えられ、抉りが認められる。一部に微細剥離が認められる。

同図-3~5は直線刃石器である。いずれも背面に自然面が認められ、礫の縁辺を素材として利用している。3は基部側に連続した剥離調整を加え、平滑な面を造作する。刃部には刃こぼれが認められる。4は左右両端に剥離調整による抉りが認められる。5の背面刃部付近には、使用による光沢が認められる。

同図-6は鋸状石器とした。上下側面には、連続した細かな線状痕が認められる。

同図-7は剥片である。不定形で背面に自然面を残し、二次調整は加えられていない。

同図-8は敲打器(ハンマーストーン)である。やや偏平な円錐を素材とし、ほぼ全面を敲打により調整している。下側縁の約3分の1は、使用による敲打の凹凸が顕著である。

同図-9はナイフ形石器の可能性がある。背面側縁の一部には微細な剥離調整が施されている。

図167-1・2は石核である。1はいびつな球形で、一部に自然面を残す。頻繁に打面を転移し剥離を行っている。縁辺には、打面の調整を意図したとみられるつぶれが顕著に認められる。2はいびつなサイコロ形となり、表面にはススが付着している。

(佐藤)

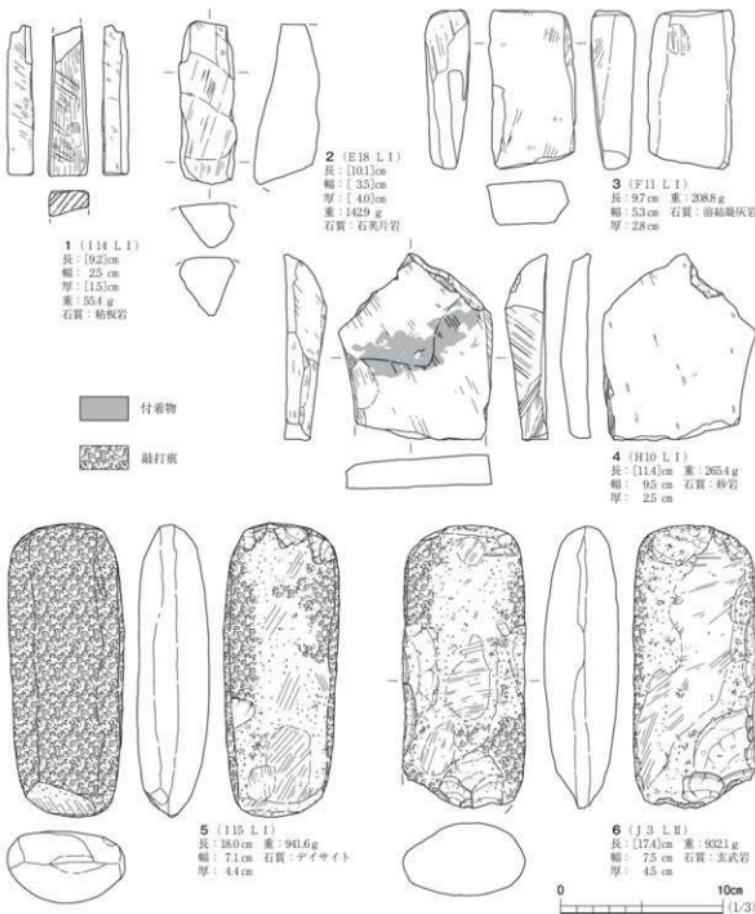


図164 遺構外出土遺物 (7)

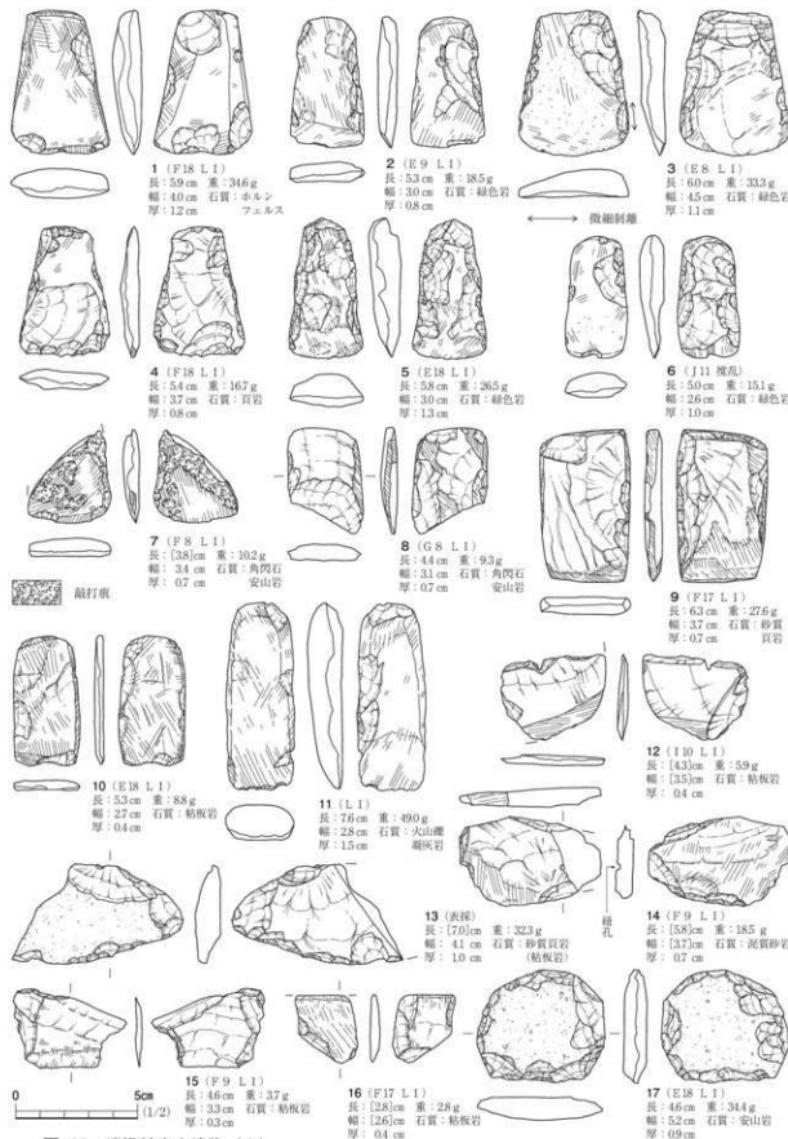


図165 遺構外出土遺物（8）

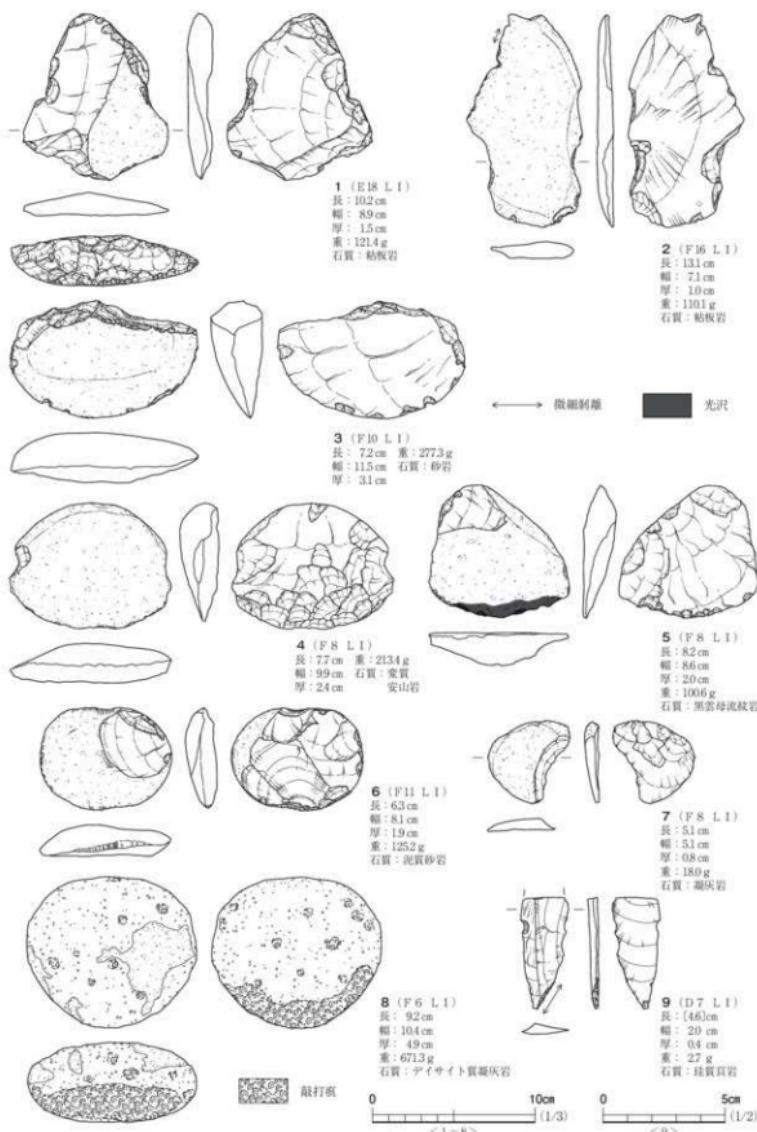


図166 遺構外出土遺物 (9)

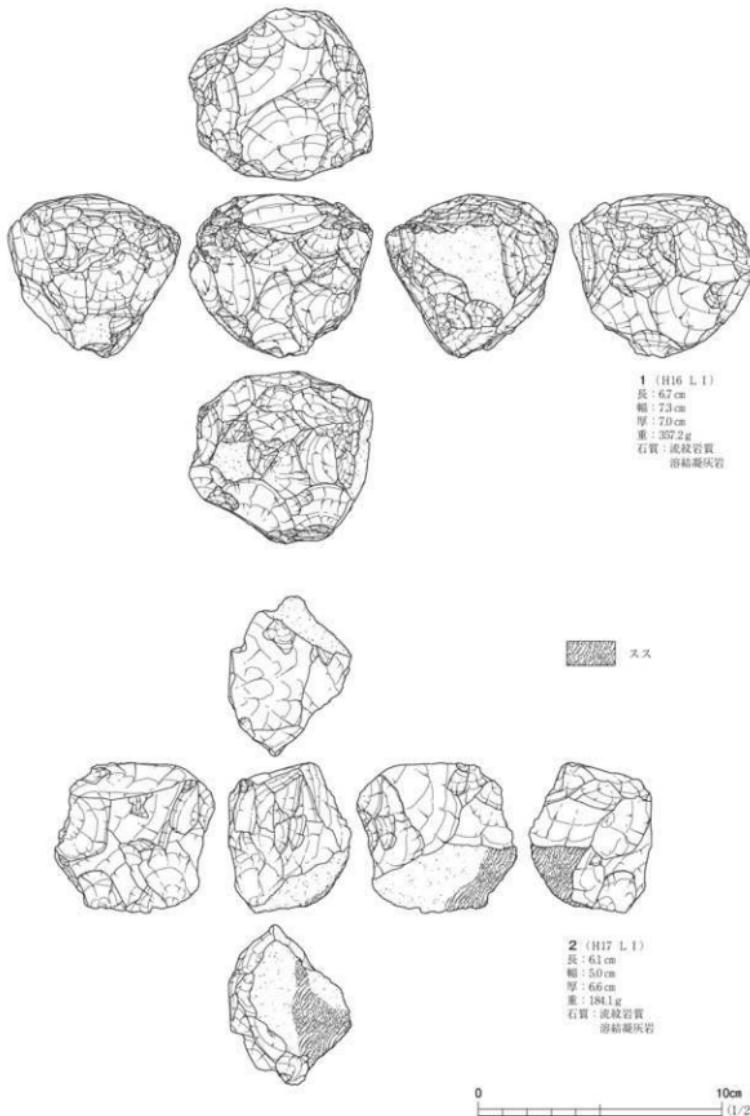


図167 遺構外出土遺物 (10)

第2章 総括

第1節 遺構

本遺跡は出土した遺物の特徴から、大きく6つの時期に分けられる。①弥生時代中期後葉、②古墳時代前期、③古墳時代後期・終末期前半、④古墳時代終末期後半・奈良時代、⑤平安時代、⑥江戸時代である。ここでは、各時期の主要な遺構の特徴を概観するとともに、周辺や他地域の遺跡の類例と比較しながら若干の検討を行う。

弥生時代中期後葉 住居跡が4軒 (S I 44・51・53・54)、遺物包含層が1箇所 (S H 02) 確認された。

住居跡は調査区の北西部、丘陵北側の緩斜面や裾部に散在している。住居跡の平面形は不整方形や不整長方形で、掘り込みは浅い。規模は、一辺が3m前後と比較的小型である。住居内施設は柱穴を持つものではなく、掘り込んだ底面を床面に利用しているものが大半で、53号住居跡のみ掘形が認められた。なお、浜通り地域における住居跡の床面に貼床や掘形を伴う例は、少数だが榎葉町の美シ森B遺跡3号住居跡(高橋ほか1997)、いわき市の白岩堀ノ内遺跡11号住居跡(井ほか1997)があげられる。本遺跡における住居跡の形態や立地の傾向は、浜通り地域における弥生時代中期後葉の緒例と類似する。2号遺物包含層は丘陵中腹の比較的急な北斜面に形成されているため、斜面上部や丘陵頂部の平坦面に活動の場が存在したことが想定される。

古墳時代前期 住居跡が3軒 (S I 07・20・28)、土坑が1基 (S K 13) 確認された。

住居跡は調査区の南西部、丘陵頂部の平坦面に比較的まとまって分布している。平面形や規模は、後世の掘削をうけているものが多く不明瞭だが、20号住居跡の平面形は方形で一辺は約5.5mである。住居内施設をみると、すべての住居跡の床面からピットが検出された。本遺跡に近傍する郡山五番遺跡からは古墳時代前期の土器が出土していることから(双葉町史編さん委員会1984)、周辺の丘陵頂部に小規模な集落が形成されたものと考えられる。

古墳時代後期・終末期前半 住居跡が6軒 (S I 04・13・15・18・34・46) 確認された。

住居跡は、調査区の中央から南西部の丘陵頂部平坦面にまとまって分布し、34号住居跡のみ北東に離れて立地している。平面形は方形を基調とするものが多く、15号住居跡のみ長方形である。規模は一辺約4~5mが多く、15号住居跡のみ7.5mと大型である。13号住居跡にのみ建て替えが認められた。18号住居跡は、埋められた15号住居跡の西端の周壁を再利用して構築されていた。カマドは遺存状態の良好な13・46号住居跡では、両袖の先端に焚口の構築材としてLIVを由来とする粘土が据えられていた。カマドの脇には貯蔵穴を持つものが多く、平面形は円形や梢円形である。大型の15号住居跡にのみ、間仕切り溝が掘り込まれている。

古墳時代終末期後半・奈良時代 住居跡が18軒 (S I 01・03・05・06・08・09・12・23・30・31・36~39・41・42・47・48)、土坑が2基 (S K 14・45)、性格不明遺構が1基 (S X 05) 確認されている。

前時代と比較して住居跡が著しく多くなり、集落が急速に拡大し、平安時代まで継続する。丘陵頂部平坦面に広く分布すると同時に、調査区西部の北西斜面に4軒の住居跡が分布している。丘陵頂部ではI・J-12~14グリッド周辺は遺構がほとんど確認できなかった。この周辺ではL III・IVの堆積が薄く、大部分でL Vの砂層が露出し、住居などの掘り込みに不適であったためと考えられる。平面形は多くが方形を基調とし、6 b号住居跡のみ長方形である。規模は2.94~6.05mと幅があるが、約3~4mのものが多い傾向にある。カマドは、ほとんどが北壁・東壁の中央付近に位置し、カマド袖を持つものがほとんどだが、8号住居跡では、カマド燃焼部が壁を掘り込んで造られている。カマドの袖は、地山で構築するもの、焚口付近にL IVを由来とする粘土や石を構築材として据えるものが認められる。カマドの脇には貯蔵穴を持つものが多く、平面形は円形や楕円形である。

カマド廃絶に伴う祭祀の痕跡も認められ、6 b号住居跡のカマド3人の為堆積土の中からは、手づくね土器が3点出土している。当該地域で手づくね土器を用いたカマド祭祀の可能性がある例は、いわき市大猿田遺跡の6号住居跡のカマド袖の両側から、完形の手づくね土器が対をなすよう出土している事例があげられる(佐久間ほか1996)。

本遺跡と同丘陵上で近接する後廻A遺跡では、8世紀を主体とする13軒の住居跡がみつかっており、丘陵上の平坦面を中心に広範囲に集落が展開していたことをうかがわせる。

本時期では、近接する郡山五番遺跡で標葉郡衙が、堂ノ上遺跡で郡守が造営・機能していたとされる。周辺には、津や官衙に関連する集団の集落と指摘される東原A遺跡や、津に関連した官衙施設と考えられる四郎田B遺跡などが位置する(大竹ほか2002)。後廻B遺跡や後廻A遺跡などは、標葉郡衙やそれに付随する施設の造営・維持するために形成された集落のひとつと想定される。

平安時代 住居跡が17軒(S I 02・11・14・17・19・22・24~27・32・33・35・40・43・49・50)、鍛冶遺構が1基(S W k 01)、土坑が3基(S K 16・18・19)確認された。古墳時代終末期後半・奈良時代と同程度の規模の集落が継続して営まれる。

丘陵頂部平坦面に広く分布すると同時に、調査区北西部の緩斜面には49・50号住居跡が、谷筋には1号鍛冶遺構が立地する。住居跡の平面形は方形や正方形を基調とするものが多いが、26・33・43・50号住居跡は長方形を基調とする。規模は一辺が、約3~4m前半となる傾向にある。カマドは、ほとんどが北壁・東壁の中央付近に位置し、27号住居跡のみ南壁に位置する。カマドの袖は、地山由来の土で構築するもの、焚口付近にL IV塊や石を構築材として構築するものが認められる。

本時期では、カマドの構築と廃絶に伴う祭祀行為が2例確認された。32号住居跡のカマド燃焼部の底面からは、古川一明により儀器と指摘される羽釜形土器(古川2014)がまとめて出土しており、カマドに伴う祭祀行為と考えられる。22号住居跡の意図的に壊されたカマドの上面からは土鉢が出土しており、カマド廃絶に伴う祭祀行為と考えられる。近隣の類例では、東原A遺跡37号住居跡のカマド内から出土した土鉢があげられる(大竹ほか2002)。

本時期では鍛冶炉が2基(S I 25・S W k 01)確認されており、いずれも調査区内で確認できた集

落の西端に位置する。25号住居跡の鍛冶炉はカーボンベッドとみられる掘形を有し、鍛冶炉の北西ぎわには、作業の際に工人が座るためのP2が設けられている。掘形を持つ鍛冶炉は南相馬市天化沢A遺跡の1号鍛冶炉跡に類例があり、作業の際に鍛冶工人が座るピットは、天化沢A遺跡2号鍛冶炉跡に付属するP2に類例がある(能登谷ほか2016)。

24号住居跡の貯蔵穴とみられるP1は、斜め下へ向かって奥行126cmまで深く掘り込まれた横穴状を呈する。浜通り地域における類例は、新地町境A遺跡11号住居跡のP2があげられるが、住居周壁から貯蔵穴奥壁までの奥行は約20cmと短い(木本ほか1988)。高木晃は、平安時代の住居跡に付属する「壁面を抉り込んで掘られる土坑」について「横穴状土坑」と呼称し、「何らかの目的を持って設置された施設の一部」としている(高木2003)。24号住居跡の横穴状の貯蔵穴については具体的な性格も含めて、類例の増加を待つて検討する必要がある。

平安時代の集落は、9世紀～10世紀初頭にかけて営まれる。しかし、10世紀後半～11世紀前半になると急速に衰退し、遺構は35号住居跡のみとなる。中山敏史によれば、10世紀に入ると、郡衙は衰微しない消滅するとされており(中山1994)、本遺跡の集落は、近傍に所在する標葉郡衙や関連する施設の消長と連動して、10世紀初頭には役割を終えたものと考えられる。

また、奈良・平安時代にかけての掘立柱建物跡が1棟確認されている。1号建物跡は柱穴の規模は小さく、桁行3間、梁行2間であり、郡山五番遺跡や四郎田B遺跡、銅谷追遺跡などで検出された官衙に関連した大型の掘立柱建物とは異なる、一般的な集落跡にみられるものである。

江戸時代 墓跡が4基(1号塚、S K 46・47・50)、溝跡が1条(S D 10)、畑跡が2箇所(1・2号畑跡)確認された。

調査区の東部、丘陵頂部の平坦面、H-17・18グリッド付近に集中して4基の墓跡が分布し、墓域を形成している。墓跡はおおむね北東～南西方向に並ぶように位置している。発掘調査前に、1号塚の南側に北東～南西方向へ延びる小径があり、墓域への参道であった可能性がある。墓跡の所属時期は、出土遺物から1号塚が17世紀中葉～後葉、46号土坑が18世紀以降、50号土坑が17世紀後半で、47号土坑は不明である。このことから、墓域は17世紀後半～18世紀代にかけて断続的に埋葬が行われていたと考えられる。

畑跡は調査区西部の西斜面に位置する。確認できたのは連続する畠間溝のみである。国土地理院が公開している1963年撮影の空中写真をみると、畑跡の範囲は、畑作地になっており、江戸時代から現代まで畑が営まれていたようである。(佐藤)

第2節 遺物

本遺跡で認められた遺物は、縄文時代早期～前期、弥生時代中期後葉、古墳時代前期、古墳時代後期、終末期前半、古墳時代終末期後半・奈良時代、平安時代、近世、近現代があげられる。ここでは、各時代の主要な遺物の特徴を概観するとともに、若干の検討を行う。年代観について、馬目

順一(馬目1996)、青山博樹(青山2010)、村田晃一(村田2007)、柳沼賢治(柳沼1996)、福島県考古学会中近世部会(福島県考古学会中近世部会1996)、関根達人(関根1998)を参考にした。

1. 縄文時代早期～前期(図168)

住居跡や遺物包含層、遺構外から、小片が4点出土しているのみである。いずれも胎土に纖維が混和され、外面には羽状縄文や沈線文、条痕文が認められることから、縄文時代早期末～前期前葉と考えられる。本調査では当該時期の遺構は確認できなかったが、周辺には郡山貝塚や塙ノ腰遺跡など縄文時代前期前葉の遺跡が立地している。

(佐藤)

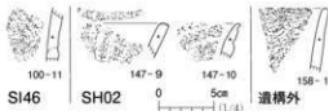


図168 出土遺物集成(1)

2. 弥生時代中期後葉(図169)

出土資料の概要 本遺跡から出土した弥生土器は、中期後葉に位置づけられる桜井式土器と天神原式土器で、いずれも2本以上の同時施文具で文様を描くことを特徴とする。

ここで桜井式と判断したものは地文のない器面に文様を描くもので、天神原式としたものは地文の上に文様が描かれる。本遺跡出土資料で両者の駆別が行える器種は壺で、それも施文のある体部上半部に限られる。壺以外では、壺の口縁部に施文するものが数点あり、やはり施文前に地文が施されているものとないものの二者がある。地文のみの部位については両者の区別は困難である。このような基準で分類した場合、量は桜井式が多く、天神原式はごく少ない。

この他に、体部下半の地文が区画線をこえて平行沈線と一部重複するものが1点みられる(図144-32)。このような特徴は、茨城県域を中心に分布する足洗式にみられるものである。

弥生土器は2号遺物包含層から最も多く出土した。これに加え、4軒の弥生時代の住居跡(44・51・53・54号住居跡)が確認された。1号遺物包含層からも弥生土器が出土したが、量は少ない。この他、弥生時代以降の遺構の堆積土への混入と遺構外から出土したものがある。本遺跡から出土した土器はいずれも破片の状態で、完形品はない。

図169は、これら弥生土器の出土量をグリッドごとに示したものである。この図には、遺構から出土した弥生土器の点数についても、出土遺構が位置するグリッドに含めて示した。複数のグリッドにまたがる遺構は点数を接分した。この図から、桜井式期の遺跡のあり方をいくつか読み取ることができる。

1つは、丘陵頂部の平坦面を中心に土器が広範に出土していることである。その多くは遺構に伴わず、1つのグリッドにわずか数点という状況で、その中に土器片が多く出土するグリッドがところどころにあり、その近傍に弥生時代の住居跡が位置する場合がある。I-9グリッドのように土器の出土点数が多いグリッドの周辺に住居跡がない場合もあるが、古代の遺構で壊されている可能性もある。この他に、丘陵北側斜面に遺物包含層が形成されていたが、その斜面上のやや離れた位

置には弥生時代の住居跡が位置する。

本遺跡における弥生土器の出土状況、すなわち、いずれも破片で完形品がないこと、破片の状態の土器が少數ずつ広い範囲に分布することは、桜井式期の多くの遺跡にみられる状況である。

本遺跡では4軒の住居跡が検出されたが、遺物は堆積土中から破片の状態で出土した。このような状況も桜井式期に多く、器種構成が判明するような一括資料が桜井式の住居跡から出土した例はこれまでに例がない。

桜井式で器形の判明する土器の大半は、土器棺として出土したものである。その場合でも口縁部や底部は失われていることが多い。桜井式の遺跡で土器が最も多く出土するのは遺物包含層で、上述のように大半は破片である。

桜井式土器を検討する際の問題と制約は、桜井式期の遺跡のこのようなあり方に起因する。器形の判明する例の少なさと器種構成の不明瞭さは、桜井式を検討するうえでのネックになっている。

器 種 上述のような状況から、本遺跡出土資料で器種を判断できる資料も必ずしも多くない。判断できたものでは壺と甕が多く、この他に、高杯、鉢、蓋、ミニチュアが少量みられる。

器 形 器形が判明するものも少ない。破片から器形が判明するものについて、壺は、口縁部が受け口状または外傾し、頭部は頭部と体部の境が不明瞭な長頸である。甕は、口縁部が緩やかに外反するもので、体部の形状が判明するものはない。鉢は大別すると、わずかに張る体部に緩やかに外反する口縁部を持つもの(図143-5・9)と、平底から体部をやや内傾するもの(図114-1)がある。高杯は、杯部の形状が判明するものは杯部全体が外反するもので(図111-1)、脚部の形状が判明するものは円錐台形のもの(図141-9)である。他に方形の透かし孔を有する脚部の小片がある(図158-66)。蓋は笠形で、摘みの形状は不明である(図109-3)。

底部はいずれも平底で、底面に布圧痕と木葉痕を付するものがあり、前者が多い。布圧痕には目の粗いものと細かいものの他に、織物痕に目の細かい布を重ねた圧痕を付するものがある。

本遺跡の土器には器形の全体が判明する個体はないものの、これまでの桜井式の器形と異なるものは含まれない。

縄文原体 それぞれの事実記載で述べたとおり、単節のLRとRL、附加条、直前段多条、直前段反撲、0段多条、無節があり、他に直前段合撲か附加条かの判断ができるないものがある。

いずれも破片のため数量の単純な比較はできないものの、多い順に、附加条51%、直前段多条15%、直前段反撲12%、単節9%、無節8%、撲糸3%、0段多条2%の割合になる。

桜井式期の縄文原体は、相馬市武井地区遺跡群(吉田1989)、竹島コレクションの南相馬市桜井遺跡採集資料(森・馬場1992)、山形県南陽市百刈田遺跡(佐藤2010)で、縄種の比率が検討されている。該期の縄文原体のうち特に附加条と直前段多条の区別はほとんどできないことが指摘され(森・馬場1992)、桜井遺跡出土資料の分類ではこれらをすべて直前段多条に含めていることなど、一律に比較することはできないものの、附加条と直前段多条を合わせたうえで比較すると、本遺跡を含めた4遺跡はいずれも附加条・直前段多条が最も多く、次いで多いのが直前段反撲であること

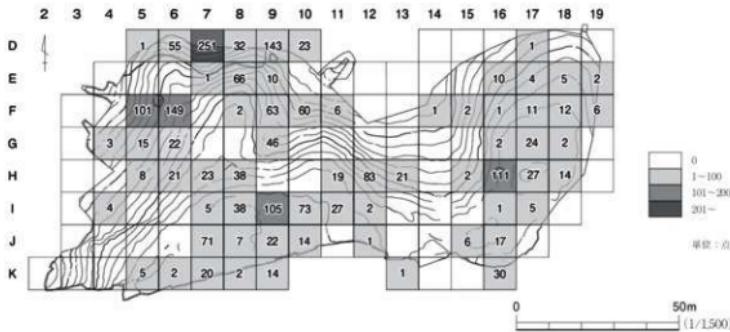


図169 グリッド別弥生土器出土量

が本遺跡と桜井遺跡で共通する。森・馬場両氏が指摘するように、該期は複数の縄をより合わせた原体が多いことを指摘できる。

文様モチーフ 本遺跡出土土器で文様を持つ器種の多くは壺である。その他、甕、高杯、蓋に文様が施されているものがあるが数は少なく、それぞれ数点である。

上述のように、本遺跡出土土器のほとんどは小破片のため全体の構図が判明するものはない。特に、渦文と同心円文は中心部分がない限りどちらか特定できない。重三角文と重菱形文も同様である。

桜井式の壺の文様モチーフで最も多いのは、体部文様が、重菱形文か重三角文か重鋸歯文(95点)、次いで渦文か同心円文(25点)、頸部文様が、平行線文4点、格子文3点、肋骨文(スリット文)2点、有軸羽状文10点である。なお、頸部文様帶に描かれるモチーフには桜井7号墳下層出土例のように重鋸歯文もあるが、破片では重菱形文や重三角文との区別は難しいため、体部文様の重菱形文・重三角文の中には頸部の重鋸歯文が含まれると思われる。

これに対して、本遺跡における天神原式の壺の文様モチーフはやや異なる傾向が認められる。最も多いのが渦文か同心円文(4点)で、重三角文・重菱形文(2点)がこれに次ぐなど、数は少なく十分なデータとはいえないものの、桜井式のあり方とは異なる様相がみてとれる。天神原遺跡でも渦文が多いことが参考になる。

甕は、本遺跡出土例はいずれも口縁部に地文が施され、モチーフには波状文と縦位の沈線がある。

施文具 本遺跡出土弥生土器の施文手法で最も多いのは、二本同施文具を用いた平行沈線である。他に、三~四本同時施文によるものが少量出土している。

本遺跡出土土器は、沈線間隔の狭いものが大半で、広いものはごく少ない。ついで多いのが三本同時施文、ついで四本同時施文である。ヘラ書きの一一本沈線によって施文されたものはない。

二本同時施文具には、これまで指摘してきたように(竹島1968、森・馬場1992、佐藤2010)、沈線間隔に広狭の違いがある他、沈線間隔が一定するものとしないものの二者があり、それぞれの施文具について半裁竹管様と束縫具と呼ばれることがある。束縫具については、沈線の本数が部分

によって必ずしも一定しないものがしばしばみられる。

この他、幅の広い沈線の底に筋状の凹凸が沈線の描かれる方向に一致してみられるものが、天神原式にのみみられる。これも束縛具の一種と思われる。

この他、外面に肥厚する口縁部に継ぎの短い沈線が密に施されている小片が1点ある。

種子圧痕 本遺跡で出土した弥生土器片には、種子の圧痕と思われるものがしばしばみられる。これについては、出土した弥生土器のすべて（接合後の1939点）について目視で圧痕の有無を確認し、不確実なものを含めて26点を見出した。これについて種実の同定を委託した結果、イネ2点、イネの桜穀1点、アワ2点、エノコログサ属1点、アサ1点、不明種実2種がそれぞれ1点ずつ、その他は種実ではないという同定結果が得られた（付章自然科学分析所収）。（青山）

3. 古墳時代前期（図170）

遺跡全体での土器の出土数は少量ながら、7号住居跡の床面やピットに伴う一括資料があり、他に13・20・28号住居跡、5・13号土坑などから認められる。器種組成は、高杯、壺（素口縁・複合口縁）、甕、小型丸底鉢、有孔鉢があり、器台は出土していない。本遺跡で出土した器種の特徴として、小型丸底鉢が認められること、高杯は脚部が短く、棒状脚が認められないこと、甕の体部には明瞭なハケメが施されていることがあげられる。以上のことを勘案すると所属時期は、青山編年（青山2010）の塩釜2式の範疇に収まると考えられる。また、5号土坑からは布留式甕の可能性のある土器（図125-3）が出土している。福島県内における布留式甕の類例は、いわき市折返A遺跡10号住居跡出土のものがあり、畿内からの搬入品と指摘されている（中山ほか1998）。

4. 古墳時代後期・終末期前半（図170）

13・34・46号住居跡の床面やカマドから土師器が一括して出土し、1軒あたりの出土量も多い傾向にある。土師器の器種には杯、高杯、鉢、壺、甕がある。

13・46号住居跡から出土した土師器杯は、いわゆる「有段丸底」と、口縁部が外反し内面に稜を持つものがある。高杯は、椀形の杯部に脚部を付した器形である。鉢は丸底で口縁部は直立し、端部でわずかに外反する。甕は球胴と長胴があり、いずれも頸部から口縁部にかけてヨコナデ、体部にはヘラケズリが施されている。甕は深鉢形で、口縁部に最大径があり、頸部に段を持たない。これらの特徴から、13・46号住居跡の土器群は、村田編年（村田2007）の2段階（6世紀中葉～後葉）に位置づけられる。その他、6・15・18号住居跡出土の土師器が2段階に該当する。

34号住居跡から出土した土師器杯は内面に屈曲を持たず、ヘラケズリにより平底に整形するものと、村田分類の「杯D」に相当する偏平な半球形の浅い体部に短く直立する口縁部を持ち、体部と口縁部に境には段を有するものがある。甕は体部上半が寸胴で、頸部に稜を持ちそこから外反し、外面にハケメが施されているものがある。これらの特徴から、34号住居跡の土器群は、村田編年の3段階（6世紀末頃～7世紀前半頃）に位置づけられる。その他、4号住居跡から出土した土師

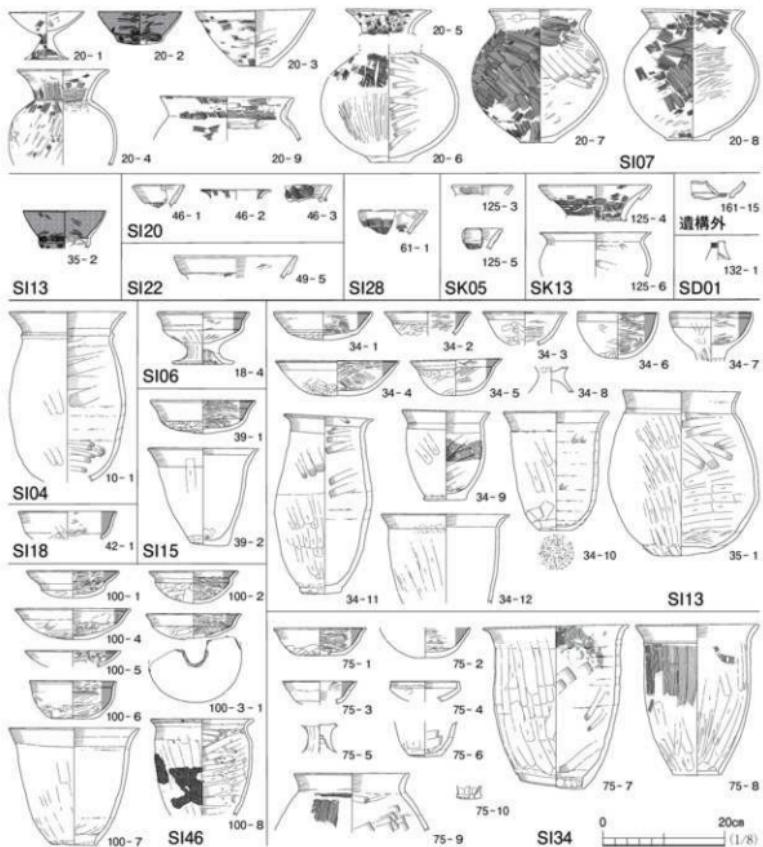


図170 出土遺物集成（2）

器壺は頸部に稜を持ち、外面にはヘラケズリが施されていることから、同じく3段階と判断した。

5. 古墳時代終末期後半・奈良時代（図171・172）

本遺跡で最も多く土器が出土した。1・5・6・12・31・48号住居跡の床面やビットからの一括資料が認められる。土師器の器種には杯、高杯、碗、鉢、壺、手づくね土器がある。

31号住居跡から出土した土師器杯は、有段丸底杯と、底部をヘラケズリで平底に整形するものがあり、器種組成に高杯が含まれることから、村田編年の5段階（7世紀末～8世紀初頭）に位置づけられる。3号住居跡から出土した高杯は、脚部が長く、透かし孔を持つ村田分類の「高杯D」

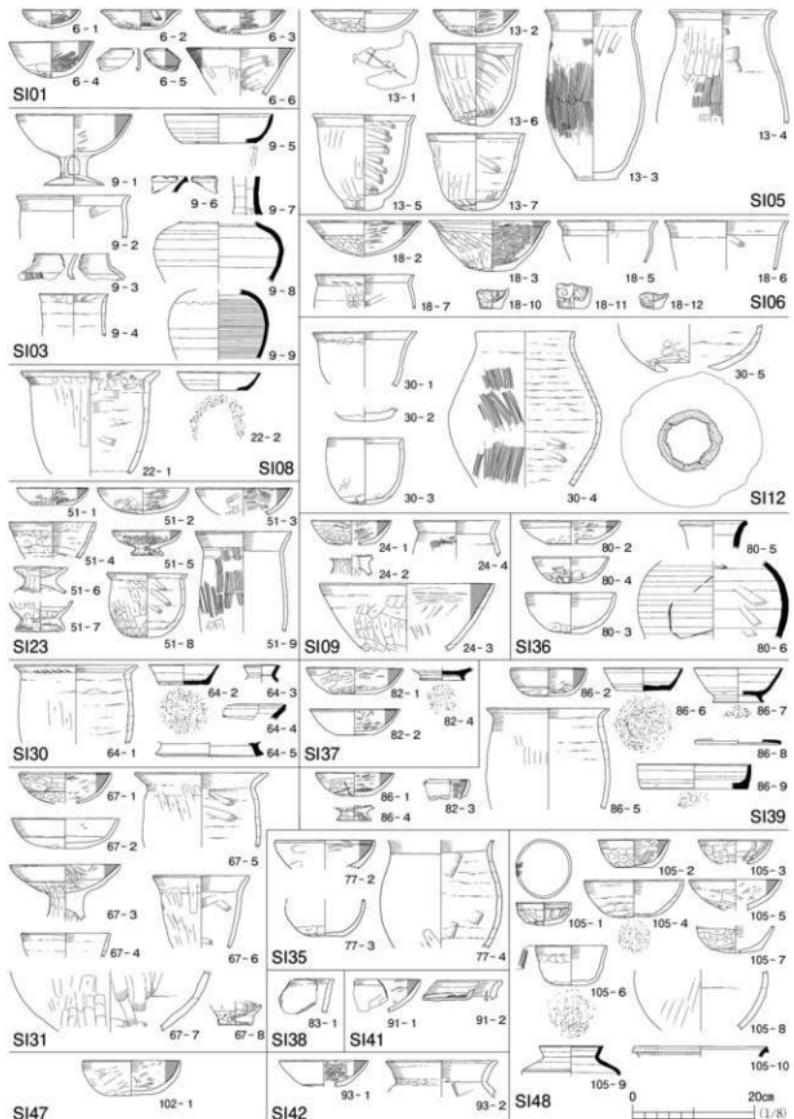


図171 出土遺物集成（3）

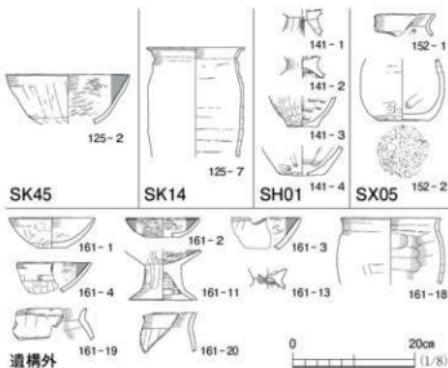


図172 出土遺物集成（4）

付杯、杯蓋、長頸壺、短頸壺、甕があり、その他、窯道具がある。貯蔵具である甕が少なく、壺・瓶類が多く認められる。39号住居跡からは窯道具（図86・9）が、遺構外からは窯壁片（写真151）が出土しており、近隣に8世紀後葉の須恵器窯が存在する可能性がある。

6. 平安時代（図173・174）

奈良時代に次いで出土量が多い。19・22・24・25・27・43号住居跡、1号鍛冶遺構の床面やピットからの一括資料が認められる。土師器・赤焼土器の器種には、杯、高台杯、鉢、甕、羽釜形土器、筒形土器、手づくね土器がある。

24・25号住居跡・1号鍛冶遺構からは、ロクロ成形で内面黒色処理が施された土師器杯・高台杯と、赤焼土器の杯・高台杯が出土している。土師器の杯は底部付近は無調整のものが多く、手持ちヘラケズリで再調整するものは1点のみである。赤焼土器の杯は、平底のものと平高台を意識して成形したものがあり、底部付近は無調整のものが多く、手持ちヘラケズリで再調整するものは1点のみである。以上の特徴を勘案すると9世紀末～10世紀初頭に位置づけられる。また、19号住居跡から出土した、赤焼土器の杯（図45-1）は底部に回転ヘラケズリで再調整を行っている。赤焼土器の杯の底部再調整には、手持ちヘラケズリを行うのが一般的で、特異な状況がうかがえる。

35号住居跡から出土した赤焼土器の杯（図77-1）は、平底の偏平な器形で、かわらけの小皿に類似する。類例は会津若松市の屋敷遺跡2号井戸跡や喜多方市の古屋敷遺跡1号土坑出土のものがあげられ、10世紀後半～11世紀前半に位置づけられる。

本時期で特筆される遺物として、32号住居跡から出土した羽釜形土器（図71-2）があげられる。福島県内では浪江町の鹿屋敷遺跡（山田1989）や、喜多方市塙川の鏡ノ町遺跡A（和田1997）、古屋敷遺跡（和田ほか1999）に類例がある（図174）。本遺跡出土のものは、古川一明の羽釜形土器分類のII A類（鍔の幅が短く、鍔から上の口縁部が長く直立するもの）に相当する（古川2014）。II

に相当し、同様に5段階に位置づけられる。23号住居跡からは無段平底と無段丸底の杯が出土しており、7段階（8世紀中頃～後半）に位置づけられる。また、23号住居跡からは併せて短い脚部を持つ高杯が出土している。

8世紀後半の高杯の類例は、宮城県石巻市新田東遺跡出土例が挙げられる（柳澤2003）。36・37・42・48号住居跡からは、無段平底杯が出土していることから、村田編年の7段階に位置づけられる。須恵器の器種には杯、高台

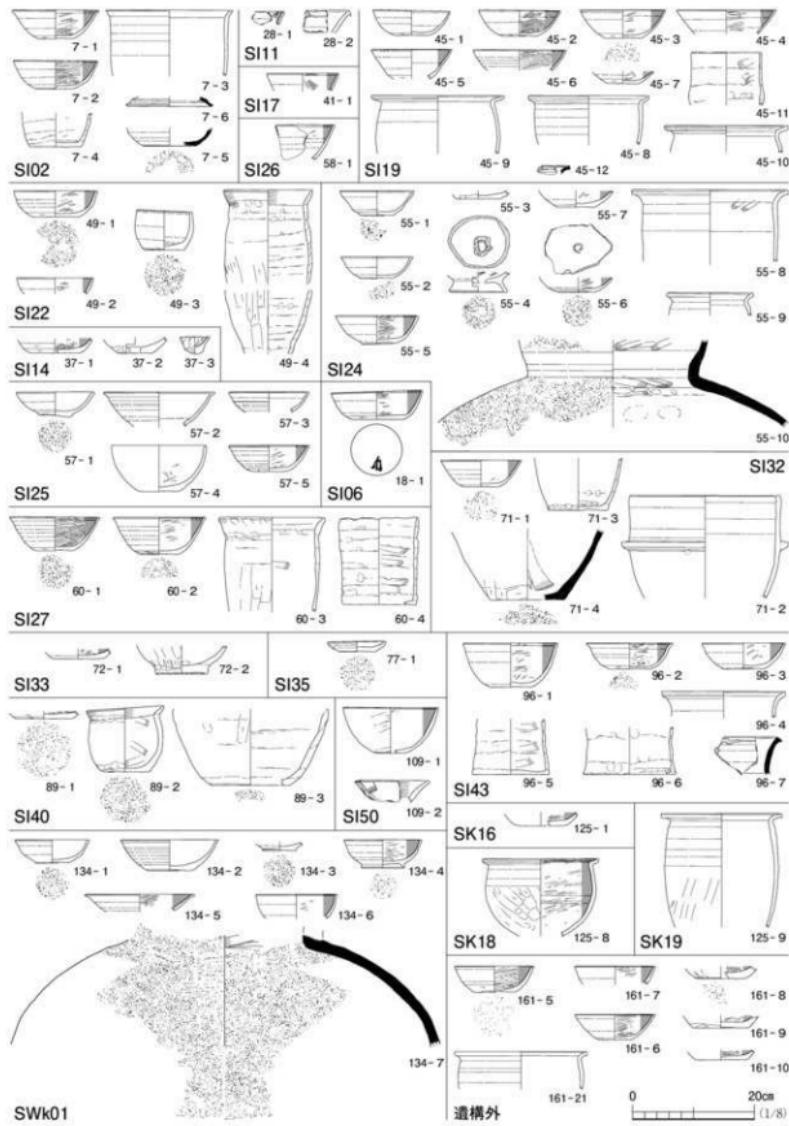


図173 出土遺物集成（5）



図174 福島県内遺跡出土の羽釜形土器

いの集落にでも散見されること、性格について実用的な煮炊具ではなく、鋳鉄製羽釜を模倣した儀器と指摘している（古川2014）。本遺跡は、標葉都衙推定地である郡山五番遺跡に近接していること、32号住居跡の羽釜形土器は、カマド下面の整地土から破片が集中して出土していることから、カマドに伴う儀礼に用いられた可能性があり、古川の指摘と整合する。

7. 近世

近世の遺物はごく少量出土している。陶器類は大堀相馬焼の灰吹や片口鉢、蓋、瓦質土器は火鉢、焜炉などが出土している。墓跡とみられる1号塚、46・50号土坑の底面からは、寛永通寶や煙管、和鉄、小柄が出土している。錢貨は、「六文錢」を意図したもので、煙管や和鉄、小柄は被葬者が生前使用していたものと考えられる。また特筆すべき遺物として50号土坑から錫杖頭（図126-1）が出土している。類例から里修験や僧侶の墓であることを示す遺物と評価できる。年代は、錢貨の組成や、大堀相馬焼の年代観（関根1998）から、17世紀後半～19世紀初頭と判断できる。

8. 近現代

造構外から、「双葉牛乳」のガラス瓶、オリンピック盃、新山町の名入りの磁器類、メダルなどが出土している。新山町名入りの磁器（図163-9・10）は、商店の屋号が記されていることから、店が挨拶用として顧客に配布する、いわゆる「印物」（鹿島2020）で、所属時期は新山町制の施行期間から1889～1951年と考えられる。湯飲み（図163-9）は雑貨店を営んでいた「富久屋商店」が、銚子（図163-10）は、享保年間に操業を開始し、2011年の東日本大震災発生まで当地で日本酒の製造を行っていた「富沢酒造店」が頒布したものである。ガラス瓶（図163-11）は、双葉乳業株式会社が販売した「双葉牛乳」の瓶である。1961年に発行された『全国乳業名鑑』には「双葉乳業」の名前が認められ、「双葉郡浪江町字上蔵役目」所在とあり（食糧タイムス社1961）。浪江町で製造・販売されたものとみられる。金属製のメダル（図163-12）は、「昭和四年勅令第九十六號農業調査令第十五條」に基づき、農業調査員に交付された「農業調査徽章」である（内閣印刷局1929）。

これらの遺物は、東日本大震災や福島第一原子力発電所事故前の双葉郡における日常風景や、農業・酒造業・酪農業など当時の生業を知る上で重要な資料と位置づけられる。

五輪の文様がある盃（図163-8）は、1940年に日中戦争の勃発により開催権を返上した東京オ

A類の年代について9世紀後半～10世紀が主体とされ、32号住居跡の年代観と整合する。また古川は、東北地方における羽釜形土器の出土例が、国府・城柵周辺に集中す

る一方、郡家周辺や交通路沿

リンピックを記念したものである。見込み部分には、岡山県倉敷市に存在した遠藤酒造場の日本酒銘柄「銘酒宝富士」の文字が認められ、「印物」と考えられる。鹿島昌也は、富山県富山城下町遺跡の陶器商の店舗跡から出土したオリンピック盃(図163-8と同型)について、当時の出荷台帳を根拠に岐阜県多治見市之倉で生産された「美濃焼」で、陶器商「堀江屋商店」が各地に出荷した「オリンピック中丸盃」に相当することを明らかにしている(鹿島2020)。これは、双葉町の戦前における東京オリンピック開催に向けた機運の高まりをうかがわせる資料として評価できる。(佐藤)

第3節 磨製石剣・磨製石戈について

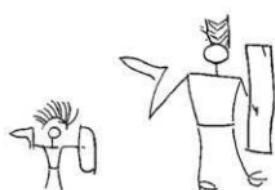
本遺跡の調査では、弥生時代中期後葉の武器形石製品とされる磨製石戈(以下、石戈)(図28-3)と磨製石剣(以下、石剣)(図148-1)が各1点出土している。東北地方における石剣・石戈の出土はきわめて稀で、当地域の弥生文化を考える上で重要な遺物と考えられる。本節では、本遺跡出土の石剣・石戈と中部高地以東で出土した資料を対象に比較・検討し、考察を加えて行きたい。

1. 石剣・石戈の性格と意味

石剣・石戈は、金属利器を石で模倣したもので、日本における弥生文化の特色を示す遺物とされる。その分布は、弥生時代前末期から中期前半は北部九州を中心に展開し、弥生時代中期後半から後期前半は北部九州での出土は少なく、畿内以東に移行するとされる(長沼1996)。

石戈の性格について下條信行は細形銅戈の代替品としての副葬品、木戈などと性格を共有する祭器を想定した(下條1982)。一方、橋口達也は弥生時代前期～中期前半の甕棺の中から出土した人骨に石剣・石戈などの切先が嵌入した例を挙げ、殺傷用の利器と想定した(橋口1996)。中村修身は、弥生時代中期初頭の無柄型石戈に「研ぎ直し」の痕跡があることに着目し、「武器として使用され欠損した戈の再生によって生じた形」と判断し、「無柄型石戈地帯」という規模の勢力・集団の再編成の戦い」の可能性を指摘している(中村1995b)。

また戈について、小林青樹は土器などに記された絵画資料(図175)や中国の文献の記載から、



奈良県田原本町 清水廬遺跡
(春成1997) より転載

「自然界のよくないこと(旱魃や洪水など)を封じることを祈願する舞を伴う儀礼」に用いられたものと想定している(小林2008)。また、銅戈が西日本や中部高地で埋納された状態で出土したことから、「辟邪を埋納することによって、自然の脅威などを除く、あるいは封じ込めた」ものとし、戈には「マイナスな状況をプラスの状況へと導く役割を持っていた」と解釈を加えている(小林2011)。

図175 土器に記された「楯と戈を持つ人」

東日本地域における石剣の性格について中村勉は、弥生時代中期後半は「社会的緊張」状態の回避に対する儀式に用いられ、後期は体制維持を目的とした「武力のシンボル」と想定している。また出土例の僅少さから、広範囲な地域共同体を統括するものと位置づけている（中村2001）。

寺前直人は、近畿地方に分布する握りのある大形打製尖頭器や有鏽磨製短剣について、規格性・携帯性の高さから「個人に属する武力のシンボル」と位置付け、このような携行可能な武器類について「武威器」と呼称している（寺前1998）。

石川日出志は、中部高地から出土する石戈や、長野県中野市柳沢遺跡から出土した複数の銅鐸や銅戈の埋納方法が近畿以西のものと共通することを指摘し、青銅器・石戈祭祀といった西日本の宗教儀礼が中部高地に出現した理由について、栗林式土器の形成過程や分布圏から想定される広域連携を挙げている（石川2018）。

2. 石剣・石戈の分類について

石剣の分類 石剣は、刃部と柄部が一体となる一体式磨製短剣（有柄式磨製短剣）と、石製の刃部と木柄を結合させた組合式磨製短剣に分けられる。ここでは一体式磨製短剣を取り扱った種定淳介（種定1990）や、寺前直人（寺前2010）の分類、中村勉の論考（中村2001）について触れたい。

種定は北陸地方の石剣に着目し、柄尻の表現から2型式（A・B類）に分類している。A類が柄の端部に柄の幅より広い把頭を持つもの、B類が持たないものである。この2型式から編年と系譜の予察を行っている（種定1990）。

寺前は、一体式磨製短剣を刃部と柄部の関部や柄尻の表現から、3型式（A～C類）に分類している。A類は柄縁と柄尻を突出させ、明瞭な柄部を作り出しているもの、B類は柄縁の突出が喪失し、刃部と柄部の区分が段表現となり、平面的な突出は柄尻のみのもの、C類は刃部と柄部の区分が段表現として残ったもの（C1類）、段差表現も失い、握り研磨面の存在から一体式と認識できるもの（C2類）である。C類の出現期は、愛媛県松山市持田町3丁目遺跡の墓坑（SK34）からC2類が出土していることから（真鍋ほか1995）、弥生時代前期前半と位置づけられる。弥生時代中期の一体式磨製短剣は圧倒的に畿内地域で多くみられ、ほとんどはA類が在地化したC類とされている。また、畿内地域を中心に展開するC2類は明瞭な鏽を有するものが多数を占め、規格性が高いのが特徴とされる（寺前2010）。

中村は東日本地域の石剣を集成して、検討を加えている。東日本地域における出土例は関東地方では神奈川県がきわめて多く、中部地方の長野県に匹敵することを指摘した。石剣の年代は、大部分が弥生時代中期後半で、弥生時代後期にはなくなるとしている（中村2001）。

石戈の分類 石戈については、下條信行（下條1982）、中村修身（中村1995a・1997）、寺前直人（寺前2010）の分類や岡本孝之の論考（岡本2015）があげられる。

下條は石戈の柄に着目し、柄を持たないものを「九州型石戈」、柄を持つものを「近畿型石戈」に分類した。さらに九州型石戈をA～Cの三型式に分類し、型式ごとの変遷を明らかにしている。ま

た、中部高地周辺から出土した石戈について、近畿型の退化形と見做している（下條1982）。

中村は、下條の地名を冠した分類名を避け、「有柄型石戈」、「無柄型石戈」とし、類例の増加した有柄型石戈を4型式に分類し、その変遷を明らかにしている。また中村は、弥生時代中期後半の有柄型石戈Ⅲ・Ⅳ類が、中部地方、北関東で作られたものとしている（中村1995a・1997）。

寺前は、「有胡式石戈」と「目釘式石戈」の二系統に大別している。「有胡式石戈」は、両側縁下半が外反して突出することにより「胡」を表現し、茎と一对一の穿孔を持つものである。また寺前は、長野県長野市榎田遺跡から製作途中の製品が出土していることから、「東日本の武器形石製品としての評価」の必要性を指摘している（寺前2010）。

岡本は東日本地域の石戈を集成し、長野県で多く出土していることを指摘した。また、日本海側と太平洋側で型式が異なり、中部高地で錯綜している点をあげ、仮に東海・南関東を無柄型石戈、近畿・北陸を有柄型石戈の文化圏と位置付けた（岡本2015）。

3. 石剣・石戈の検討

石剣の検討 図176に中部高地以東の主な石剣・石戈の出土遺跡の分布を示した。これは中村、岡本の研究成果を基に（中村2001、岡本2015）、近年の例を追加したものである。

石剣の分布状況をみると、中村の指摘のとおり中部高地周辺と太平洋側の沿岸部、神奈川県、特に相模湾沿岸を中心とした地域に多く認められる（図176）。東北地方では、いずれも東北地方南部の太平洋側の浜通り北部地域と、阿武隈高地北部の盆地に認められ、地域的な偏りが明瞭である。

石剣の形態は、組合式磨製短剣と一体式磨製短剣の両方が認められる。一体式磨製短剣は、柄尻の表現を省略した寺前分類のC類が多数を占め、A・B類はほとんど認められない（図177）。

東北地方で形態が把握できる資料を概観すると、宮城県丸森町河原畠遺跡の例は、明瞭に茎を表現していることから、組合式磨製短剣とみられる。南相馬市天神沢遺跡の例は、比較的小型のC1類である。柄部の側縁に研磨を加え、明瞭に闊部を整形している。次に東北地方以外の中部高地以東の例を概観していきたい。新潟県上越市吹上遺跡の例は、天神沢遺跡の例と同様に小型のC1類で、柄部の側縁には研磨が施されている。新潟県上越市旧大潟町採集の例はC1類に該当する。実測図から計測した規模は、全長20.9cm（柄部長8.2cm）、幅4.5cm、厚さ1.4cmである。形態は柄部が長く、柄尻は平坦で、身部に鏑を持たない。断面形は厚みを持ったレンズ形である。神奈川県横浜市の大塚遺跡出土の例は、C2類に相当する。柄部付近に敲打痕が認められる。長野県長野市の松原遺跡の例は、C1・2類に相当し、C1類は剥離調整により明確な闊部を整形している。柄部は比較的短い。その他、長野県松本市の宮沢本村遺跡や蟻ヶ崎遺跡でもC2類が出土している。いずれも偏平で、柄部の側縁には研磨により、「刃つぶし加工」が施されている（中村2001）。

本遺跡出土の磨製石剣は柄部が長く、柄尻が平坦で、刃部と柄部の区分が段状に表現され、身部には鏑を持たず、断面形は厚みを持ったレンズ形である。先行研究の分類に当てはめると、種定分類の「有柄短剣B類」、寺前分類の「一体式磨製短剣C1類」に該当する。他の特徴として、身部の

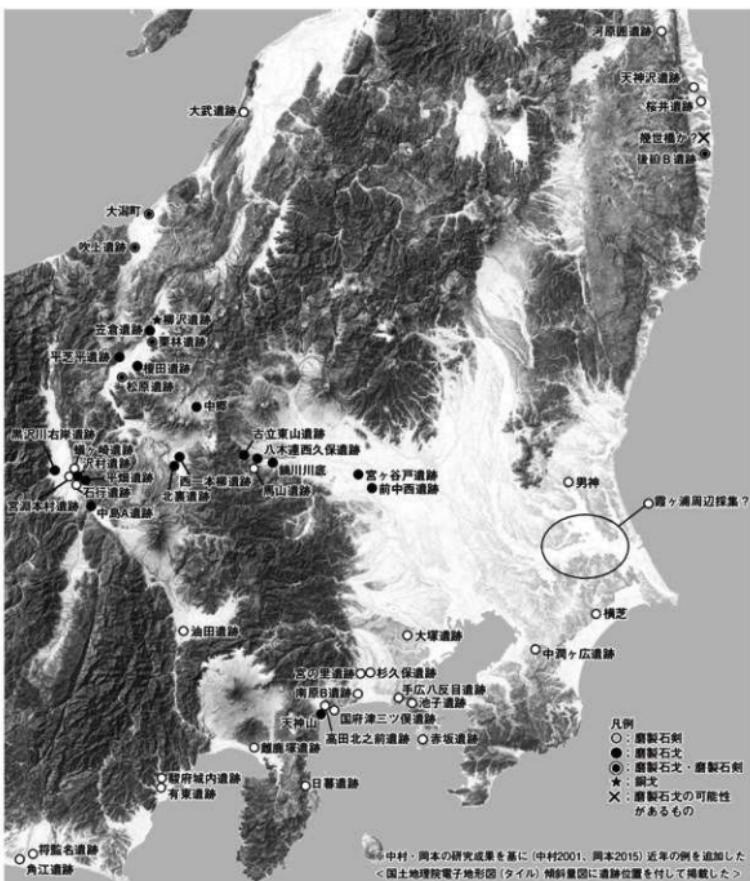


図176 中部高地以東の主な磨製石戈・磨製石劍出土遺跡

両側縁に鋭角な稜の形成が認められず、関部の側縁に敲打が施されている点があげられる。東日本地域におけるC類の多くは薄手で、身部の側縁には明瞭な稜を持ち、柄部の側縁には研磨により「刃つぶし加工」を行う例が多く、本遺跡のものとは様相が異なる。長野県松原遺跡のC1類は本遺跡のものと身部の形態は類似するが、より偏平で柄部が短い。本遺跡のものと形態や規模が類似する例として、新潟県大潟町採集の石剣があげられる。また、本遺跡のように関部の側縁に敲打痕が認められる例はないが、大塚遺跡出土の例は柄部付近の腹面に敲打痕が確認されている(武井1994)。石剣製作にあたり、研磨の前段階に敲打調整を行うことが理解できる。

年代について本遺跡出土の石剣は、桜井・天神原式土器を伴う2号遺物包含層の最下面から出土し、弥生時代中期後葉に位置づけられる。これは、先述した中村の東日本地域における石剣の年代観(中村2001)と整合する。

本遺跡例の石材は、相馬古生層で産出された砂質頁岩(粘板岩)である。天神沢遺跡、桜井遺跡、河原町遺跡の例も同様に粘板岩であり、浜通り北部地域における石剣の石材選択に共通性がうかがえる。寺前によれば、C類の石材には地域を問わず頁岩や粘板岩が用いられるとされている(寺前2010)。のことから当地域で石剣の製作に粘板岩が用いられた理由について、①産出地が近く容易に採取できること、②他地域の石剣でも選択される石材であること、③石庖丁などの石材として日常的に用いられ、研磨や穿孔などの製作技術の蓄積があったことが考えられる。

以上のことから本遺跡出土の石剣は、弥生時代中期後葉に浜通り北部地域で製作されたとみられる。当地では少数ながら石剣の出土例がある。本遺跡出土の石剣はC1類に該当し、新潟県大潟町採集の例と規模や形態が類似する一方、他の東日本地域に認められるC類との相違が確認できた。

石戈の検討 中部高地以東の石戈が出土した遺跡の分布状況をみると、岡本が指摘したとおり中部

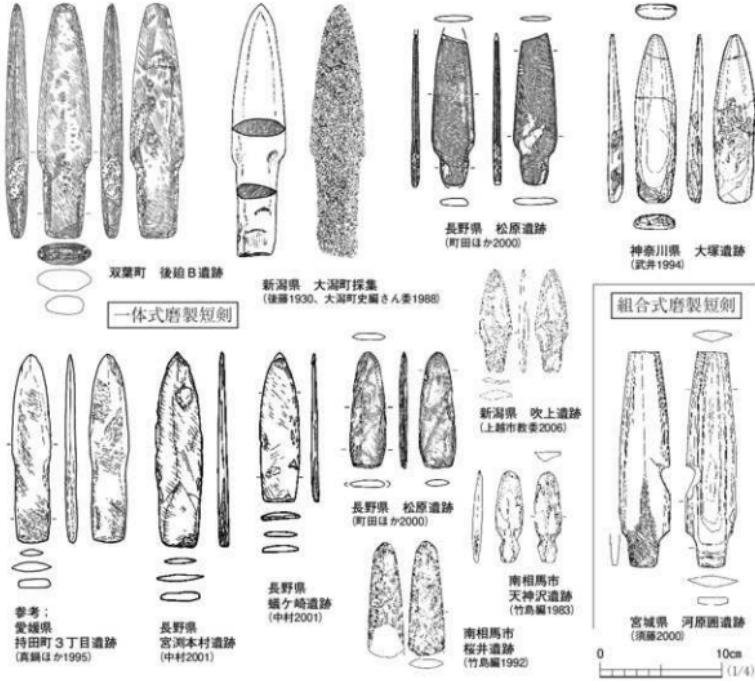


図177 本遺跡周辺の磨製石剣と中部高地以東の主な一体式磨製短剣

高地周辺から多く出土していることが分かる(図176)。特に長野盆地の千曲川流域や、松本盆地に多く認められる。長野県長野市榎田遺跡では製作途中の破損品があり、多くが遺跡裏手の山塊で産出する緑色岩製であることから、周辺で製作されたものが多いと考えられている(石川2018)。関東平野では、埼玉県深谷市宮ヶ谷戸遺跡、熊谷市前中西遺跡で出土が認められる。太平洋側では、本遺跡を除くと神奈川県小田原市天神山で採集された例(岡本2015)と、1900年に大野延太郎が福島県浪江町幾世橋(北喜代橋村)にて採集したとされるもの(大野1901)があげられるのみである。

石戈の形態でみると、中部高地では有柄型と無柄型のどちらも出土している。石川は、中部高地一帯に認められる有柄石戈について、基本的に近畿型銅戈を原型として、一部に銅劍形石劍の属性が加わり、無柄石戈は九州型石戈の特徴を色濃く継承するとされている。これら石戈にみられる近畿系・九州系の共存について、長野県中野市柳沢遺跡における近畿型・九州系銅戈の共存との類縁性が指摘されている(石川2018)。関東平野では、深谷市宮ヶ谷戸遺跡の例は下條分類の九州型C b類、中村分類の無柄石戈IV 1類に相当する。熊谷市前中西遺跡の例は、両面の柄の中に複合鋸歯

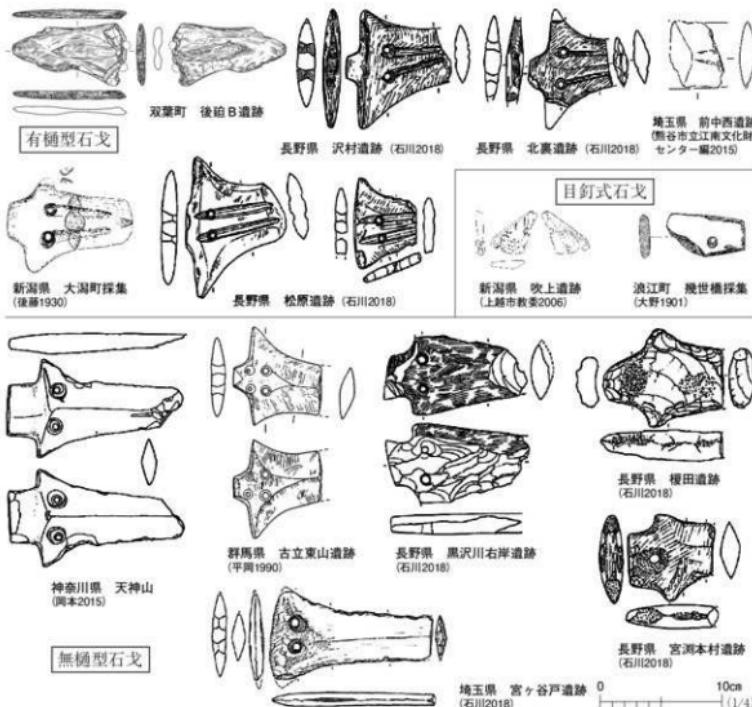


図178 中部高地以東の主な磨製石戈

文が認められ、石川は近畿型銅戈の特徴を写したものと評価している（石川2018）。小田原市天神山採集の石戈は、無柄で身部に鏑を持ち、双孔と茎部が認められ、下條分類の九州型石戈B a型式、中村分類の無柄型石戈II類に相当する（岡本2015）。浪江町幾世橋採集（北喜代橋村）のものは1箇所に穿孔が認められ、寺前の提唱する目釘式石戈の可能性があるが、未確認である。

本遺跡出土の石戈は、①湖の表現があること、②柵が認められること、③基部側に双孔が認められること、④器体は基部側の穂端部を境にわずかに薄くなり、茎を意識した造作がみられること、⑤全体を研磨していること、以上の特徴があげられる。このように部分ごとの属性を列挙すれば、石戈の範疇で捉えることが可能である。しかし、既存の分類に照合すると、下條分類の「近畿型石戈」とする条件に「身部の鏑の左右に柵が造りだされる」とあり、分類に該当しない。中村分類では、「有柄型石戈」に該当するが、細分類には該当するものがない。原則として有柄型石戈（畿内型石戈）は、双孔から先端に向かって2条の直線的な柵を前提としている。しかし、本遺跡出土の石戈は、双孔の間から1条の幅広の柵が先端に向かい延び、管見では類例が認められない。また、身部の上端側縁には稜を持たず、下端側縁に刃部の造作とみられるわずかな稜が認められ、他の類例と異なる。

年代について本遺跡の石戈は、遺跡内で出土した桜井・天神原式土器から弥生時代中期後葉と考えられる。同時期には中部高地周辺や関東地方で有柄型石戈III・IV類が多く認められ、本遺跡の石戈の年代と整合的である。本遺跡出土の石戈の石材は、相馬古生層で産出する砂質粘板岩で、畿内や中部高地からの搬入品ではなく、当地で製作されたものと考えられる。

本遺跡出土の石戈は、弥生時代中期後葉の中部高地周辺における石戈の普及と同時に当地で製作されたとみられる。形態は石戈の範疇として捉えることができるが、銅戈を模倣した有柄型石戈（畿内型石戈）とされる他の類例とは大きく異なることから、著しく変容（在地化）したものと思われる。また、性格について、刃部の稜線が不明瞭で研磨が不十分なことから、人を殺傷する武器ではなく、儀礼に用いられた可能性が想定される。

4.まとめと課題

本遺跡から出土した石剣・石戈は、東北地方南部における武器形石製品を用いた儀礼文化の波及や、遠隔地との交流を示している。東北地方で石剣・石戈が出土する遺跡は、浜通り北部地域や、阿武隈高地北部に限られ、石材にはいずれも粘板岩が用いられている。相馬古生層に産出する粘板岩は、石庵丁や偏平片刃石斧などの大陸系磨製石器の石材として多用され、南相馬市鹿島区の上真野川流域が有力な石材採取地の候補とされる（藤原2003）。当地域で石剣・石戈が認められる理由のひとつとして、好適する石材の採取が容易であったことや、石庵丁製作による穿孔や研磨などの製作技術の蓄積があったことが想定される。形態について、石剣は新潟県の大潟町採集のものと類似し、石戈は他に類例が認められず、著しく変容（在地化）したものと想定した。本遺跡の石剣・石戈の年代は、東日本地域で出土したものと同時期である。東日本地域の一部における武器形石製品の普及と連動して、製作されたと考えられる。

今後、当地域と石劍・石戈が多く出土する遠隔地域の関係性について検討を加える必要がある。新潟県新潟市の西郷遺跡から出土した弥生土器に龍門寺式が含まれること(石川2013)や、宮城県仙台市の中在家南遺跡から出土した直柄平鋸について、山陰地方を起源とし、石川県小松市の八日市地方遺跡の出土例と共に通するという指摘(樋上2014)は、遠隔地域との交流を考える上で重要である。さらに、東日本地域の太平洋側で広範囲に出土し、石劍・石戈と系譜上の繋がりが指摘されている有角石斧との関連について、検討を加える必要がある。

(佐藤)

第4節 弥生時代の石器について

本遺跡からは弥生時代とみられる石器が多く出土している。点数は未掲載を含め、武器形石製品2点、大型船刃石斧2点、偏平片刃石斧20点、ノミ形石器1点、磨製石斧3点、石庖丁9点、石鎌1点、板状石器5点、直縁刃石器3点、鋸状石器1点、敲打器1点、磨石1点、石核8点、剥片375点である。ここでは、本遺跡から出土した武器形石製品以外の石器について概観する。

磨製石斧 本遺跡の出土傾向として、加工斧とされる偏平片刃石斧が多く、伐採斧とされる大型船刃石斧が少なく、時代や立地が同様の南相馬市天化沢A遺跡の石器組成(天本2016)と類似する。

大型船刃石斧は、2点すべてが敲打後、研磨段階の未成品である(図164-5・6)。

偏平片刃石斧は多くが完成品で、使用・再加工の痕跡が認められる。形態は、最大幅を刃部に持つ撥状のものが大半を占め、刃部と基部の幅が同じ短冊状のもの(図165-6・9・10)が少数認められる。図89-7や図165-9は基部側に研磨より新しい剥離があることから、楔として使用された可能性がある。完成品の大部分には、側縁付近に研磨調整よりも新しい連続した剥離(再加工)が認められる。これは着柄の安定か、別器種への転用を意図した造作と考えられる。また、研磨した面を敲打により再調整するものも2点認められる(図111-16、図165-7)。図165-10は他より薄く石材は粘板岩であることから、石庖丁を偏平片刃石斧に変転した可能性がある。未完成品は4点あり、剥離・敲打調整段階のものをみると、偏平な礫や原石の縁辺を剥離させ、素材としている(図82-6、図141-21)。偏平片刃石斧の石材は砂岩や頁岩など多様だが、緑色岩が全体の55%を占める。他遺跡における偏平片刃石斧の石材は、天化沢A遺跡で粘板岩が78%、いわき市栗木作遺跡ではホルンフェルスが74%を占める。地域によって偏平片刃石斧の石材に相違が認められる。

石庖丁 7点が出土し、内訳は完成品が5点、未完成品が2点である。器体の剥離調整段階の図165-13は、自然面を残し、周縁に剥離調整が施されている。原石の縁辺の形状を利用する意図がうかがえ、類例として天神沢遺跡(報文第7図40)や天化沢A遺跡(報文図171-3)があげられる。器体の研磨段階の図165-14は、中央部を中心に研磨が施されている。また、破断面に貫通していない紐孔穿孔の痕跡が認められ、穿孔時の破損により廃棄された可能性がある。郡山五番遺跡でも研磨段階とみられる粘板岩製石庖丁の未完成品が出土しており、粘板岩の産出地とされる上真野川流域から直線距離で約27km離れた郡山丘陵付近まで、石器素材が搬入されていたことが理解できる。

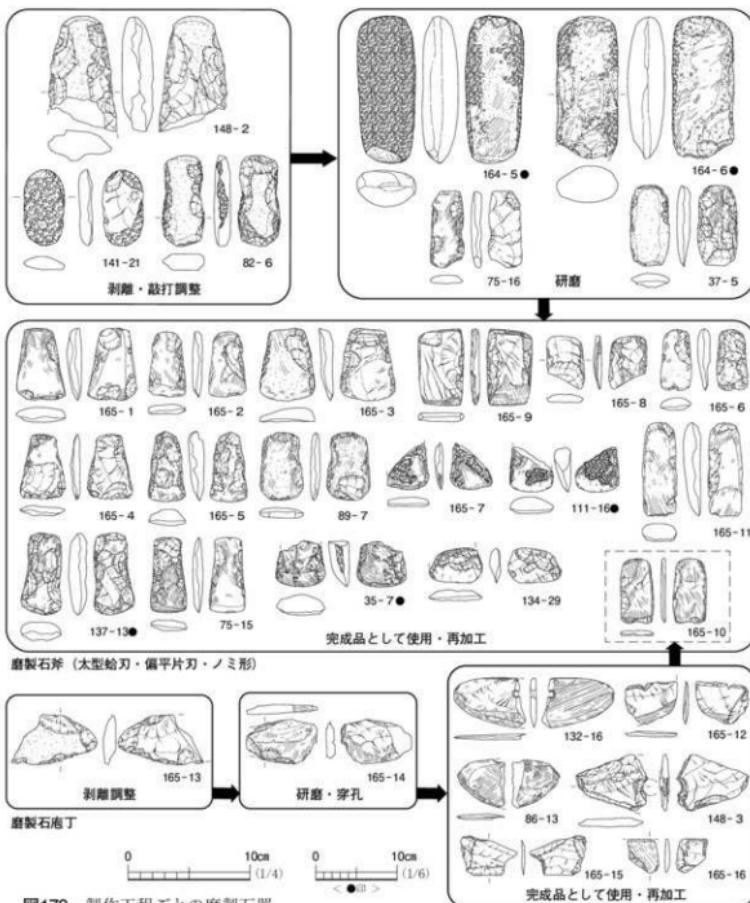


図179 製作工程ごとの磨製石器

完成品・再加工段階の図165-12は、側縁に研磨より新しい剥離が認められ、再加工を意図したものと考えられる。図148-3は研磨した面全体を剥離調整で取り除いている。下端には鋭い棱を持つことから、刃部の再生を試みた可能性がある。石庖丁の石材は粘板岩が多く、敲打調整段階のものは認められなかった。当地域における弥生時代中期後葉の石庖丁の特徴について、荒井格は器体の敲叩調整が製作工程から欠落する点、多くが粘板岩を原石とする点を指摘しており(荒井2003)、本遺跡から出土した弥生土器の年代と整合する。

図107-3は打製石庖丁で、南相馬市長瀬遺跡出土のものが例としてあげられる(飯村1991)。

その他 直縁刃石器はすべて原石の縁辺を石器素材とし、下端に半月状もしくは弧状の刃部が形成される。図166-3は基部側の側面には、丁寧な剥離調整により平滑な面が形成されている。これは作業時の持ち易さを意識した造作とみられ、手持ちでの使用が想定される（写真151）。直縁刃石器の石材は、砂岩や変質安山岩、黒雲母流紋岩と多様である。図166-6は、中山雅弘の定義する「鋸状石器」に相当し、いわき市周辺の遺跡で確認されている（中山2002）。剥片は375点中222点が流紋岩であり、全体の59%を占める。流紋岩の剥片は大半が不定形だが、2~3cm程の偏平で薄い剥片が定量みられることから、石鎚などの素材を採取していた可能性がある。（佐藤）

第5節 近世墓から出土した錫杖頭について

本遺跡の50号土坑の底部からは、副葬品の小柄や和鉄、煙管、錢貨に加え、銅製の錫杖頭が出土している。「錫杖」とは、『仏教考古学事典』によると、「比丘十八物」の一つで、僧が遊行の時に携帯する僧具とされ、音を振り鳴らし、毒蛇毒虫などを追い払う性格があり、修験十二道具のひとつとされる（阪田2003）。谷川章雄によれば、江戸遺跡における墓の副葬品には、いわゆる六道鏡とされる寛永通寶や、数珠とみられる直方体木製品が普遍的に認められ、身分・階層を越えて出土するとしている（谷川2004）。一方、錫杖頭は被葬者の身分・階層あるいは職掌を反映した副葬品として評価できる。本節では、錫杖頭の出土した50号土坑の被葬者について、若干の考察を行う。

1. 年代

50号土坑出土の錫杖頭の所属時期について、水澤幸一の年代観（水澤2006）を参考にすると、①柄の長さが輪径をこえること、②輪中の塔形・水瓶といった意匠の形骸化、③柄部の蓮弁紋の特徴から江戸時代と判断できる。また、50号土坑で錫杖とともに底面直上から出土した錢貨の組成（古寛永通寶と新寛永通寶文銘のみ）を鈴木公雄の作成した「出土六道鏡のセリエーション・グラフ」（鈴木1999）に当てはめると、17世紀後半頃と考えられる。

2. 類例

福島県内における類例は、福島市の宮脇遺跡の9号土坑があげられる。錫杖頭は遺骸腹部の下から確認され、その他に錢貨の寛永通寶が6枚出土している。所属時期は錢貨5枚が「新寛永通寶」であることから18世紀以降とされる（柴田ほか1991）。

次に江戸時代以降の墓から副葬品として錫杖頭が出土し、その被葬者の身分・階層がある程度、把握可能な類例を概観していく。

岩手県北上市岩脇遺跡 近世の墓域が発掘調査され、土坑墓41基、火葬墓4基などが確認され、このうち3基から錫杖頭が出土した。共伴した錢貨に「新寛永通寶」が含まれることから、18世紀以降と考えられる。岩脇遺跡で確認された墓域は、明治時代のはじめまで修験山伏であった家系の

累代の墓地とされ、真言系修験山伏の墓に副葬されたものと指摘されている（高橋ほか1996）。

神奈川県平塚市厚木道遺跡 古義真言宗得願寺の墓域が発掘調査されている。早桶墓から副葬品として錫杖頭、五鈷杵、錢貨などが出土している。厚木道遺跡の例は、鎌倉市浄泉寺境内で調査された歴代住職の墓穴出土遺物との類縁性から、「古義真言宗の僧侶をめぐる埋葬習俗の在り方は、その一端が仏具の副葬という行為に特徴付けられるもの」と指摘されている（小林1999）。

奈良県五條市向山遺跡 遺跡周辺は「フルバカ」と言い伝えられており、発掘調査の結果、近世の墓域が確認され、20基の土坑墓が検出されている。土坑38の底面からは錫杖頭、五鈷杵、木製の数珠玉が出土し、報告者は生前の被葬者と密接にかかわる遺物と捉えている（波多野ほか2008）。

島根県松江市檜山古墓群 近世の墓域が発掘調査され、土盛りを持つ墓17基が確認されている。このうち、6基から錫杖頭が出土している。第I号墓からは錫杖頭、製金具、数珠玉、銅鉢が出土地している。第X~IV号墓からは錫杖頭、銅鉢、錢貨3枚が出土している。所属時期は、出土した錢貨がいずれも「古寛永通寶」で、17世紀後半頃と考えられる。檜山古墓群は、出土遺物の特徴や、元禄七年（1694）の『意宇郡松江分并成山畠御検地帳』に、遺跡の近傍に「人焼場の上」、「山ぶし塚」の地名が記されていることから、修験者専用の墓地と指摘されている（近藤ほか1971）。

大分県桐ヶ追近世墓地 3基の近世墓が確認され、第1号墓から錫杖頭、摩紫金袈裟の輪宝型の金具6点、錢貨6枚が出土している（渋谷1999）。副葬品に袈裟金具と錫杖頭が認められる。

宮崎県日向市中山遺跡 近世・近代にかけての墓域が発掘され、23基の土坑墓が確認されている。錫杖頭は、17世紀末を下限とする墓穴S X 19から出土している。副葬品には錢貨、硯や和鉄、小刀などが認められる。中山遺跡の位置する塙見地区は、中世から近世にかけての修験道の行場とされ、延岡市の光明寺配下の修行地とされている（柳田2004）。

類例の傾向として、錫杖頭が出土する土坑墓は僧侶や修験者に関係するものが多いようである。また、錫杖頭の他に袈裟金具や五鈷杵、銅椀など、仏教に関連する副葬品が認められる。

時枝によれば、近世修験は村落や都市に定住する「里修験」が基本とされ、地域住民の要望に応え、様々な宗教活動を行っていたとされる。また、修験者の墓地は土坑墓が主体で、農民などの墓地と基本的に変わらないが、錫杖や袈裟金具を伴う例が多くみられることから、修験装束で埋葬されたとしている（時枝2004）。

3. 相馬藩領内の修験について

相馬藩領内の修験は、相馬藩主の祈願寺である本山派修験の高平山上之坊阿弥陀院寛徳寺（上之坊）が掌握していたとされ、相馬藩領内における享保年間（1716～1736年）の上之坊配下の寺院数は182家を数える。このうち双葉町内における江戸時代に存在した、上之坊配下の本山派修験寺の数は10家である（双葉町史編さん委員会1997）。本遺跡が位置する郡山地区には、天保三（1833）年成立の『吉野喜蔵院藏修験台帳』によれば「千法院」、文久三（1863）年成立の『本来御改ニ付院名書上帳』によれば「安養院」という本山派修験寺が所在していたとされる（藤田1989）。また、延享三

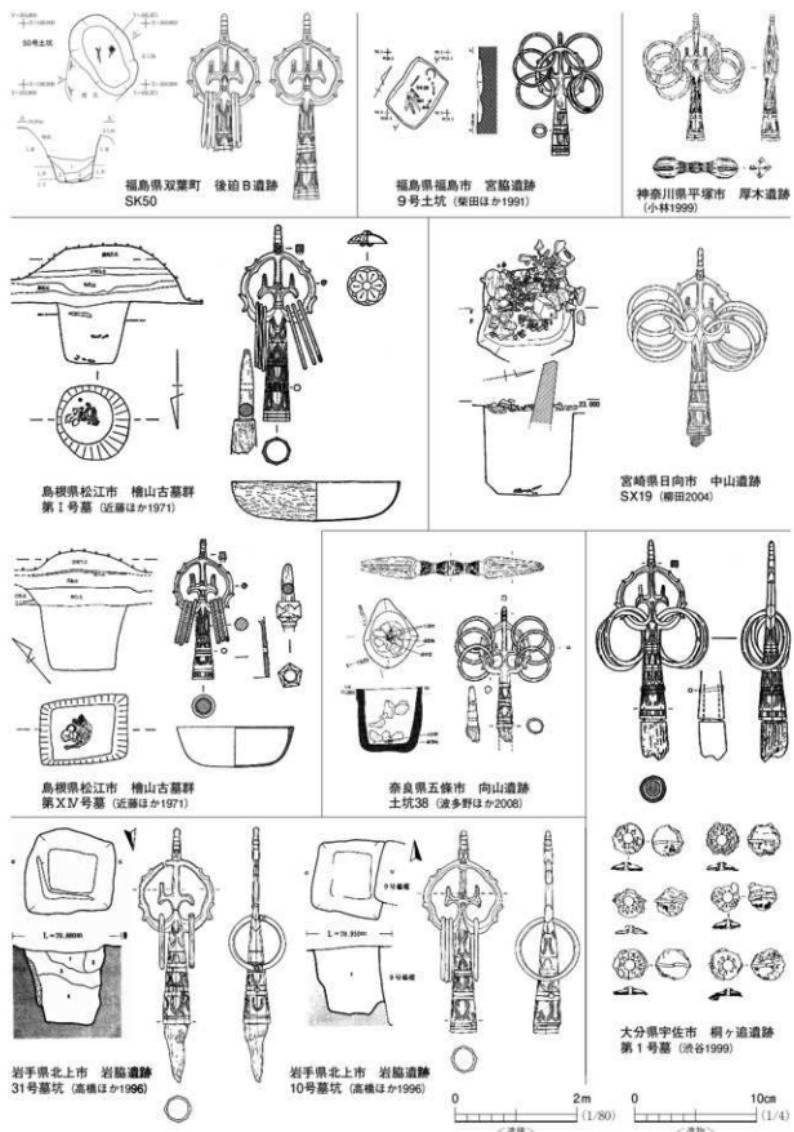


図180 近世墓から出土した錫杖

(1746)年に成立した「御領内諸社參修驗帳」には「郡山村 万福寺」の記載がある(相馬市史編さん委員会編2013)。万福寺跡は、本遺跡の北西約550mに位置し、現在でも仏堂と墓域が現存している。

本遺跡の錫杖頭を副葬品とする50号土坑の被葬者は、他遺跡の類例を考慮すると、僧侶もしくは修験者と想定される。50号土坑と同じく17世紀後半頃に位置づけられる類例には、檜山古墓群の第 XIV 号墓や中山遺跡の SX19 があげられ、江戸時代の前期から修験装束での埋葬が行われていたことをうかがわせる。江戸時代の双葉町内には相馬藩主の祈願寺が本山派修験寺であったことから、多くの修験寺が存在していたようで、50号土坑の被葬者も郡山地区に所在した「安養院」や「千法院」の修験者、もしくは「万福寺」の僧侶に関連した人物の可能性がある。
(佐藤)

第6節 まとめ

縄文時代 遺構は認められなかったが、縄文時代早期末～前期前葉の土器の破片が出土している。周辺には郡山貝塚や塚ノ腰遺跡など縄文時代前期前葉の遺跡が立地していることから、本遺跡の立地する丘陵上にも、縄文時代の遺跡が分布している可能性がある。

弥生時代 4軒の住居跡と、遺物包含層が確認された。土器は桜井式と天神原式が多く、年代は弥生時代中期後葉に位置づけられる。丘陵の緩斜面や裾部に、平面形が不整で掘り込みの浅い住居跡が散在する状況は、浜通り地域の縄例と類似する。土器の種実圧痕にはイネとアワが認められ、石製農具の石庖丁や直線刃石器が出土していることから、近傍の低地で稲作や畑作を営んでいた可能性がある。また、多くの磨製石器が出土し、特に加工斧とされる偏平片刃石斧の比率が高い。

武器形石製品の磨製石戈と磨製石剣が各1点出土している。東日本地域では中部高地や相模湾沿岸の周辺で盛行する武器形石製品を用いた儀礼が、東北地方南部に波及していた可能性を示す。

古墳時代前期 3軒の住居跡が確認された。郡山五番遺跡からは土器が出土していることから、周辺の丘陵上に散発的に集落が営まれた可能性がある。布留式とみられる甕が1点出土している。

古墳時代後期・終末期前半 7軒の住居跡が確認され、丘陵頂部に小規模な集落が営まれたようである。13・34・46号住居跡の底面やピットからは土師器の杯や壺・瓶がまとまって出土し、当地域の土器組成を知る上で重要である。

古墳時代終末期後半・奈良・平安時代 本遺跡で最も多くの遺構と遺物が確認され、7世紀末～10世紀初頭まで、長期間にわたり継続的に集落が営まれた。近傍の標葉郡衙やそれに付随する施設に関連した居住域として形成され、郡衙機能の衰退とともに役割を終えたと考えられる。

江戸時代 4基の墓跡からなる墓域と、烟跡が確認された。50号土坑の底面からは錫杖頭が出土している。文献によれば、江戸時代の郡山地区に修験寺が存在していたことから、被葬者は修験者や僧侶に関連した人物の可能性がある。

今回の中間貯蔵施設の建設に伴う発掘調査では、双葉町の知られざる歴史の一端が明らかになつた。この報告が、福島県、双葉町のさらなる文化の発展につながれば幸甚である。
(佐藤)

引用・参考文献

- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年－仙台平野とその周辺－」『北杜－辻秀人先生遺稿記念論集－』辻秀人先生遺稿記念論集刊行会
- 天本昌希 2016 「第2章総括 第1節石器群について」『農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告Ⅰ 天化沢A遺跡』福島県教育委員会 公益財団法人福島県文化振興財団
- 荒井 格 2003 「東北地方出土石棺蓋の製作工程と石材選択」『日本考古学』第15号 日本考古学協会
- 飯村 均 1991 「第4編長瀬遺跡 第2章弥生時代の遺構と遺物 第3節遺物包含層 第1遺物包含層 遺物」『原町火力発電所開港遺跡調査報告書Ⅱ』福島県教育委員会 財團法人福島県埋蔵文化センター
- 石川日出志 2013 「特論1 弥生時代の新潟県域「弥生時代にいがた 時代がわかるとき」新潟県立歴史博物館
- 石川日出志 2018 「磨製石戈と弥生文化」『季刊考古学』第143号 雄山閣
- 井 慶治ほか 1997 「白岩堀ノ内遺跡」福島県教育委員会 財團法人福島県文化センター
- 大潟町史編さん委員会 1988 「大潟町史」大潟町
- 大野延太郎 1901 「磐城線十日の旅」『東京人類學雑誌』第十六卷 第百八十一號 東京人類学会
- 岡本孝之 2015 「神奈川県の石戈」『考古叢書神奈川』第21集 神奈川県考古学会
- 大竹慶治ほか 1994 「細谷・郡山」福島県双葉町教育委員会
- 大竹慶治ほか 2002 「標棄」福島県双葉町教育委員会
- 大竹弘高 2012 「将監名遺跡」静岡県埋蔵文化財センター
- 鹿島昌也 2020 「幻の東京巨輪」記念陶磁器考」『富山市考古資料館紀要』第39号 富山市考古資料館
- 春日真実ほか 2014 「大武遺跡Ⅱ(古代・縄文時代編)」財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木本元治ほか 1988 「第3編 境A遺跡」「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ 境A遺跡 境B遺跡 善光寺遺跡」福島県教育委員会 財團法人福島県文化センター
- 熊谷市立江南文化財センター編 2015 「平成27年度前中西遺跡出土石戈速報展」
- 後藤守一 1930 「上古時代に置ける上越地方(1)」『考古学雑誌』第20卷9号 日本考古学会
- 小林青樹 2008 「盾と戈を用いた儀礼」「弥生時代の考古学」7 同成社
- 小林青樹 2011 「社宮司遺跡出土の多種無文鏡をめぐって」『佐久考古通信』No.108 佐久考古学会
- 小林康幸 1999 「14 神奈川県」「考古学論究』第5号 立正大学考古学会
- 近藤正ほか 1971 「V 松江・榎山古墓群」「鳥根県埋蔵文化財調査報告書」第Ⅲ集 鳥根県教育委員会
- 阪田正一 2003 「錦杖」「仏教考古学事典」雄山閣
- 佐久間芳雄ほか 1996 「常磐自動車道遺跡調査報告」6 福島県教育委員会 財團法人福島県文化センター
- 佐藤祐輔 2010 「F区の調査成果 弥生時代「百川田遺跡」第1～4次発掘調査報告書」財團法人山形県埋蔵文化財センター
- 佐野五十三ほか 1996 「角江遺跡Ⅱ」「江戸時代の「古河城跡」」『江戸時代の「古河城跡」』第7輯 財團法人古代学協会
- 下條信行 1982 「武器形石製品の性格」「平安博古研究紀要」第7輯 財團法人古代学協会
- 渋谷忠草 1999 「32「大分県」「考古学論究』第5号 立正大学考古学会
- 上越市教育委員会 2006 「新潟県上越市 吹上遺跡」新潟県上越地域振興局 上越市教育委員会
- 鈴木公雄 1999 「第2部出土六道鏡 第4章セリエーション分析結果の検討」「出土鏡貨の研究」東京大学出版会
- 須藤 隆 2000 「弥生時代の東北地方」「宮城考古学」「宮城県考古学会
- 柴田彰彰ほか 1991 「宮脇遺跡」福島市教育委員会 財團法人福島市振興公社
- 食糧タイムス社 1961 「全国乳業年鑑」
- 関根達人 1998 「相馬藩における近世産業生産の展開」「東北大埋蔵文化財調査年報」10 東北大埋蔵文化財調査研究センター
- 相馬市史編さん委員会編 2013 「相馬市史」第六卷 資料編Ⅲ 近世2 相馬市
- 高木 晃 2003 「第VI章考察 第2節平安時代の遺構」「細谷地遺跡発掘調査報告書－第4・5次調査－」財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 竹島國基 1968 「原町市の先史」「原町市史」原町市
- 高橋一浩ほか 1996 「岩脇遺跡発掘調査報告書」財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 高橋信一ほか 1997 「NTC遺跡発掘調査報告」福島県教育委員会 財団法人福島県文化センター
- 武井則道 1994 「II. 住居址から発見された遺物 Y49号住居跡」『大塚遺跡』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 竹島國基編 1983 「天神沢」竹島コレクション考古図録第1集
- 竹島國基編 1992 「桜井」竹島コレクション考古図録第3集
- 谷川章雄 2004 「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』江戸遺跡研究会編
- 種定淳介 1990 「北陸の磨製石剣」『福井県考古学会誌』第8号 福井県考古学会
- 鶴岡 健はか 2006 「岡井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ -市原市中洞ヶ広遺跡(上層)-」財団法人千葉県教育振興財団
- 寺前直人 1998 「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45巻第2号(通巻178号) 考古学研究会
- 寺前直人 2010 「武器と弥生社会」大阪大学出版会
- 時枝 務 2004 「近世修驗の考古学」『江戸の祈り 信仰と願望』江戸遺跡研究会編
- 内閣印刷局 1929 「内閣告示 第四號」『官報』第七百五十五號 内閣
- 中村修身 a 1995 「石戈の分類と編年について」『地域相研究』第23号 地域相研究会
- 中村修身 b 1995 「石戈誕生の意義」『地域相研究』第23号 地域相研究会
- 中村修身 1997 「石戈の形態分類と編年(再考)」『地域相研究』第25号 地域相研究会
- 中村 勉 2001 「東日本における磨製石剣の意義-三浦市赤坂遺跡出土の例を中心として-」『考古論叢神奈川』第9集 神奈川県考古学会
- 長沼 孝 1996 「4 戦い 1. 石の武器 A. 磨製石剣・石戈」『弥生文化の研究』第9巻 雄山閣
- 中山雅弘ほか 1998 「JR第三土地区画整備事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅱ 折返A遺跡」いわき市教育委員会 財団法人いわき市教育文化事業団
- 中山雅弘 2002 「第6章括弧 3石器」『いわき四倉工業団地内遺跡発掘調査報告 栗木作遺跡』いわき市教育委員会 財団法人いわき市教育文化事業団
- 能登谷宣康ほか 2016 「農山漁村地域復興基盤統合整備事業関連遺跡調査報告 I 天化沢A遺跡」福島県教育委員会 公益財団法人福島県文化振興財団
- 真鍋昭文ほか 1995 「持田町3丁目遺跡」財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 馬目順一 1996 「東北地方の縄文土器(南部)」『日本土器事典』雄山閣
- 水澤幸一 2006 「密教法具考-出土仏具を中心にして-」『考古学の諸相II』坂詣秀一先生古稀記念会
- 村田晃一 2007 「v. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学
- 森 幸彦・馬場秀之 1992 「『桜井』竹島コレクション考古図録第3集 竹島國基
- 橋口達也 1996 「4 戦い 4. 犠牲者」『弥生文化の研究』第9巻 雄山閣
- 波多野萬ほか 2008 「向山遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所
- 春成秀爾 1997 「第3章 稲祭りの絵」『原始绘画 歴史発掘』5 講談社
- 樋上 異 2014 「交流拠点としての八日市地方遺跡」『科学分析でここまでわかった八日市地方遺跡』小松市教育委員会
- 平岡和夫 1990 「古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木進疋山遺跡・八木連荒畠遺跡」妙義町遺跡調査会
- 福島県考古学会中近世部会 1996 「『かわらけ編年』の再検討 -11世紀から19世紀-(その1)」『福島考古』第37号
- 藤田定興 1989 「福島県域における有力修験とその支配院-中通り・浜通りの本山派を中心として-」『福島県歴史資料館研究紀要』第11号 財団法人福島県文化センター
- 藤原紀敏 2003 「第3章 石器に用いられる石材について」『福島県相双地域の弥生時代遺跡』福島県立博物館
- 双葉町史編さん委員会 1984 「双葉町史」第二巻原始・古代・中世資料 福島県双葉町
- 双葉町史編さん委員会 1997 「第九章 双葉町の寺社」「双葉町史」第一巻通史 福島県双葉町
- 古川一明 2014 「古代東北地方における特殊な形態の煮炊容器について」『東北歴史博物館研究紀要』15 東北歴史博物館
- 町田勝則ほか 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡」長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター
- 柳沼賢治 1996 「福島県の10世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣
- 柳沢和明ほか 2003 「新田東遺跡-三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書II-」宮城県教育委員会
- 柳田晴子 2004 「中山遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター
- 山田 康 1989 「鹿屋敷跡発掘調査報告書」福島県双葉郡浪江町教育委員会
- 山中敏史 1994 「古代地方官衙遺跡の研究」埴生房
- 吉田秀享 1989 「武井A遺跡」『相馬開闢関連遺跡調査報告書I』福島県教育委員会 福島県文化センター
- 和田 啓 1997 「塙川西部地区遺跡発掘調査報告書5 銀ノ町遺跡A」塙川町教育委員会
- 和田 啓ほか 1999 「塙川西部地区遺跡発掘調査報告書4 古屋敷遺跡」塙川町教育委員会

付 章 自然科学分析

第1節 レプリカ法による土器種実圧痕の同定

山本 華(株式会社 バレオ・ラボ)

1. はじめに

双葉郡双葉町大字郡山字後迫に位置する後迫B遺跡では、弥生時代の遺物や古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡が確認されている。ここでは、土器に確認された種実圧痕の可能性がある圧痕をレプリカ法により同定した。

2. 試料と方法

試料は、あらかじめ公益財団法人福島県文化振興財団によって、種実の圧痕の可能性があると判断され、抽出された土器25点の圧痕27点である。土器の時期は、弥生時代中期と古墳時代後期である。

レプリカの作製方法は、丑野・田川の研究(丑野・田川1991)などを参考にした。はじめに、圧痕内を水で洗い、パラロイドB72の9%アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、シリコン樹脂(JMシリコン レギュラータイプ)を圧痕部分に充填した。レプリカ作製後は、アセトンを用いて圧痕内および周囲の離型剤を除去した。

次に、作製したレプリカを实体顕微鏡下で観察し、同定の根拠となる部位が残っている圧痕レプリカを同定した。その後、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 超深度マルチアングルレンズ VHX-D500/D510)で撮影を行った。土器と圧痕レプリカは、福島県文化財センター白河館に保管される予定である。

3. 結 果

27点のレプリカのうち、7点が何らかの種実圧痕と同定された。確認されたのは、草本植物のイネ穂・穂殼とアワ有ふ果、エノコログサ属有ふ果、アサ核の4分類群である。特徴的な部位が残存しておらず、詳細な同定が困難な種実圧痕は、不明A、B種実とした。このほか、不明の木材が確認された(表4・5)。

同定された種実圧痕の分類群ごとの点数は、イネ穂が2点、イネ穂殼が1点、アワ有ふ果が2点、エノコログサ属有ふ果が1点、アサ核が1点であった。種実圧痕が確認された土器は、すべて弥生時代中期の土器であった。

以下では、確認された分類群について記載を行い、図版に走査型電子顕微鏡写真を示して同定の

根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田に準拠し(米倉・梶田2003-)、APG IIIリストの順とした。

(1) イネ *Oryza sativa* L. 穀・穀殻 イネ科

穀は上面觀が橢円形で、側面觀が長橢円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくならぶ。穀殻は破片で、圧痕では内側が残存している。

(2) アワ *Setaria italica* (L.) P.Beauv. 有ふ果イネ科

扁球形。内顎と外顎には独立した乳頭状突起がある。内顎と外顎の境界部分は平滑。

(3) エノコログサ属 *Setaria* sp. 有ふ果 イネ科

紡錘形。アワよりも細長く、乳頭突起が歓状を呈する。圧痕では外顎側のみが観察できる。アワ以外のエノコログサ属である。

(4) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

上面觀は両凸レンズ形、側面觀は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した橢円形の大きな着点があり、表面には脈状の模様があるが、圧痕では不明瞭。

(5) 不明A Unknown A 種実

破片で全体形は不明。湾曲しており、堅果類などの破片の可能性があるが、同定可能な特徴は残存していない。

(6) 不明B Unknown B 種実

やや潰れた倒卵体もしくは卵体で、形態は種実のようであるが、着点など特徴的な部分は残存していない。

4. 考 察

後迫B遺跡から出土した土器に確認された種実圧痕のレプリカを同定した結果、弥生時代中期の土器からイネとアワ、エノコログサ属、アサの圧痕が確認された。イネ、アワ、アサは食用などとして利用可能な分類群であり、アサは油料用や繊維用としても利用可能である。イネは穀と穀殻が得られ、アワも有ふ果の状態で得られたため、穀物の保管や脱稃作業の場と土器製作の場が近かつた可能性が考えられる。

福島県内の弥生時代の土器種実圧痕の事例としては、福島市大平・後閑遺跡で前期のアワが確認された例が古く、南相馬市仲沖遺跡で中期後半のイネとアワ、南会津郡流ノ入遺跡で中期後半のイネとキビが確認されている(佐藤ほか2019、佐々木ほか2017)。今回、後迫B遺跡で確認された弥生時代中期のイネとアワは、東北地方における穀物の分布を捉える上で重要な試料である。

引用文献

- 佐々木由香・米田恭子・パンダリ・スダルシャン 2017 「レプリカ法による土器種実圧痕の同定」『会津継貫南道路遺跡発掘調査報告2』pp.68-72、福島県教育委員会 公益財団法人福島県文化振興財团
- 佐藤祐輔・佐々木由香・郡須浩郎・百原・新 2019 「2017・2018年のレプリカ圧痕調査の成果報告—東北地方中・南部の縄文晩期・弥生期を中心に—」[SEEDS CONTACT] 6, pp.12-15
- 丑野 敏・田川裕美 1991 「レプリカ法による土器圧痕の観察」[考古学と自然科学] 24, pp.13-36、日本文化財科学会
- 米倉浩司・梶田 忠 2003-「BG Plants 和名-学名インデックス(YList)」<http://ylist.info>

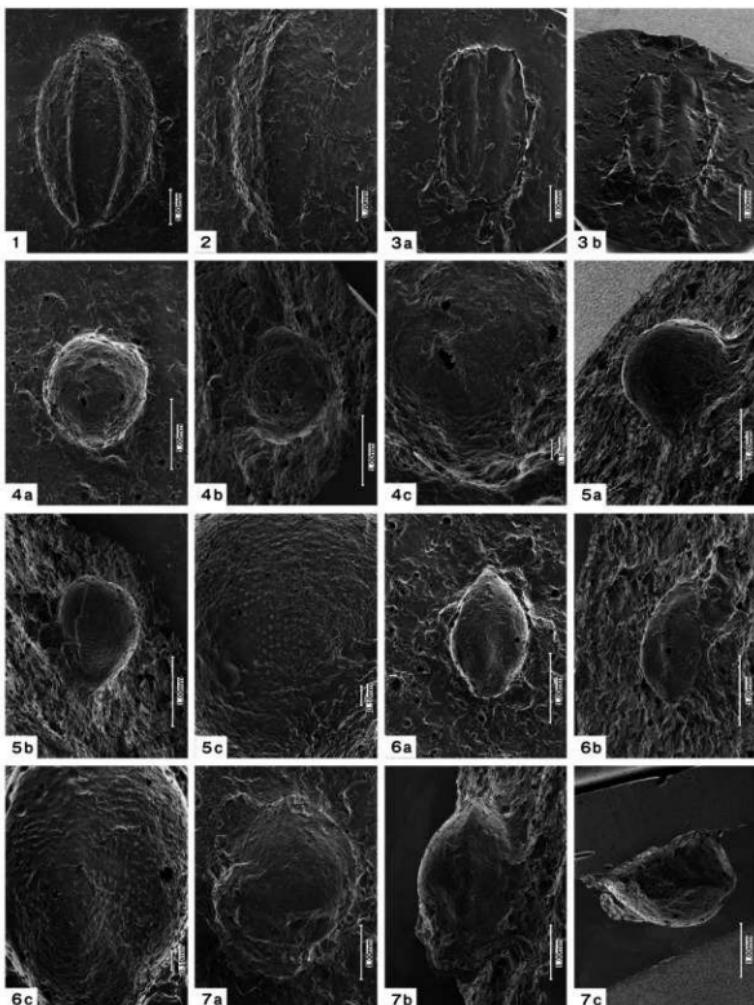
表4 後廻B遺跡出土土器の圧痕同定結果

イネ	株	弥生時代中期		古墳時代後期		合計
		2	2	1	1	
根 種	1				1	
アワ	有ふ果	2			2	
エノコログサ属	有ふ果	1			1	
アサ	核	1			1	
不明A	種 実	1			1	
不明B	種 実	1			1	
不明	木 材	8			8	
種実ではない		9		1	10	
		26		1	27	

表5 後廻B遺跡出土土器の圧痕一覧

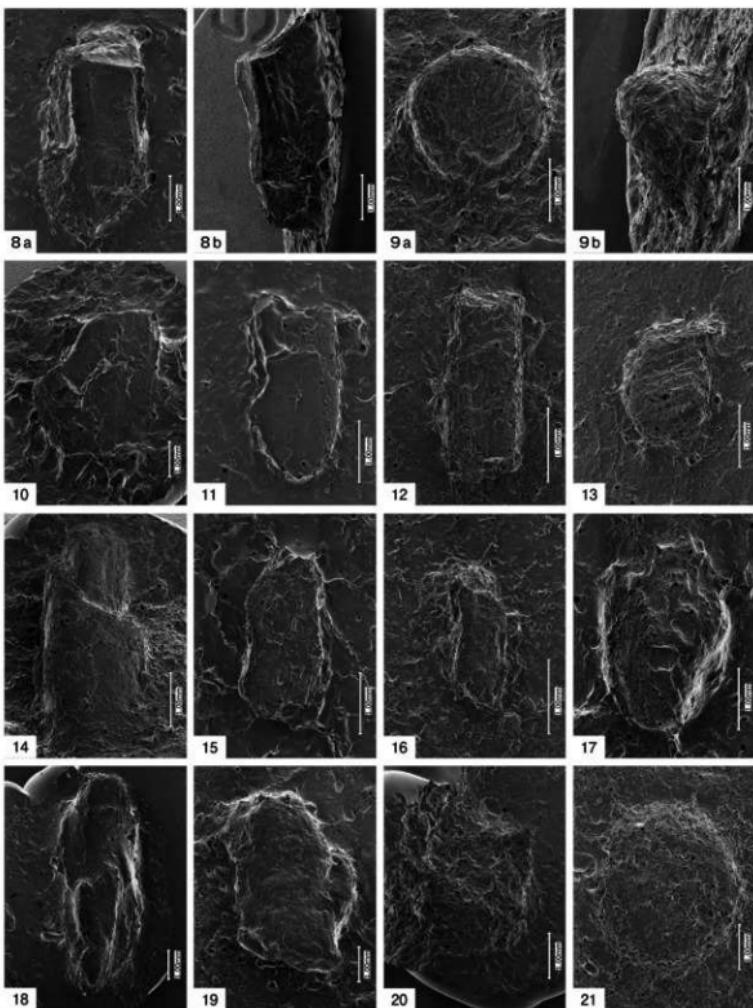
(大きさの括弧内は保存値)

試料 No	出土遺構	種別	時期	遺物の詳細		国番号	同定結果		大きさ (mm)		
				器種	圧痕の位置		分類群	部位	長さ	幅	厚さ
1	S 146	土器器	古墳後期	甕	体部 内面	100 図 8	×				
2	S H02	弥生土器	弥生中期	壺	体部 外面	143 図 2	イネ	根	564	340	(1.88)
3	S H02	弥生土器	弥生中期	壺	体部 内面	143 図 2					
4	S H02	弥生土器	弥生中期	-	底部 外面	143 図 4	不明	木材			
5	S H02	弥生土器	弥生中期	-	底部 外面	146 図 25	イネ	根	(6.87)	(3.16)	-
6	S H02	弥生土器	弥生中期	钵	体部 内面	143 図 10	イネ	根	(4.43)	(2.47)	-
7	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	143 図 24	エノコログサ属	有ふ果	183	111	(0.89)
8	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	143 図 25	アワ	有ふ果	161	147	(1.23)
9	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 内面	144 図 22	不明	木材			
10	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	144 図 22	不明 A	種実			
11	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 内面	144 図 38	×				
12	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	144 国 42	不明	木材			
13	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	頂部 外面	145 国 26	不明 B	種実	230	228	(1.56)
14	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	口縁部 内面	144 国 50	×				
15	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	口縁部 内面	144 国 57	不明	木材			
16	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 断面	144 国 5	不明	木材			
17	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	口縁部 外面	145 国 17	アサ	核	281	224	1.75
18	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	口縁部 外面	145 国 15	不明	木材			
19	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	145 国 29	×				
20	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	口縁部 内面	143 国 6	×				
21	S H02	弥生土器	弥生中期	甕	口縁部 内面	146 国 11	不明	木材			
22	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	146 国 17	×				
23	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 内面	未掲載	×				
24	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 外面	未掲載	アワ	有ふ果	170	154	1.17
25	S H02	弥生土器	弥生中期	-	- 内面	未掲載	×				
26	遺構外	弥生土器	弥生中期	-	- 内面	159 国 27	不明	木材			
27	遺構外	弥生土器	弥生中期	-	底部 外面	160 国 10	×				



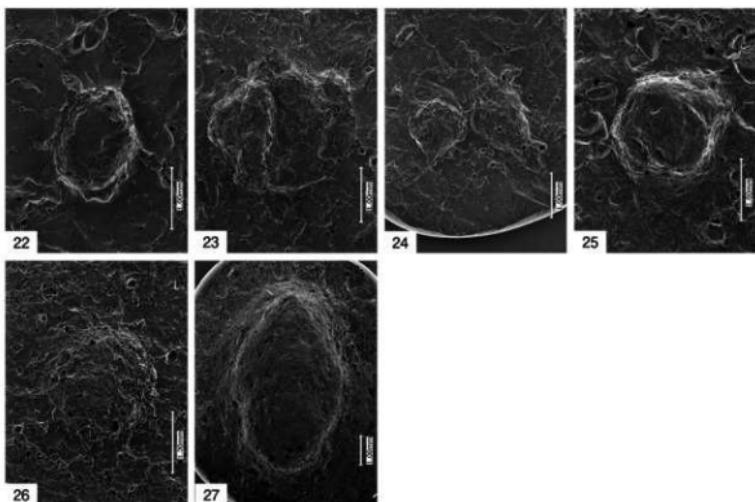
1. イネ穂 (試料No.2)
2. イネ穂 (試料No.5)
3. イネ穂殻 (試料No.6)
4. アワ有ふ果 (試料No.8)
5. アワ有ふ果 (試料No.24)
6. エノコログサ属有ふ果 (試料No.7)
7. アサ枝 (試料No.17)

図181 出土土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（1）



8. 不明A種実（試料No10） 9. 不明B種実（試料No13） 10. 不明木材（試料No4） 11. 不明木材（試料No9）
 12. 不明木材（試料No12） 13. 不明木材（試料No15） 14. 不明木材（試料No16） 15. 不明木材（試料No18）
 16. 不明木材（試料No21） 17. 不明木材（試料No26） 18. 種実ではない（試料No1） 19. 種実ではない（試料No3）
 20. 種実ではない（試料No11） 21. 種実ではない（試料No14）

図182 出土土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（2）



22. 種実ではない（試料No19） 23. 種実ではない（試料No20） 24. 種実ではない（試料No22）
25. 種実ではない（試料No23） 26. 種実ではない（試料No25） 27. 種実ではない（試料No27）

図183 出土土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（3）

写 真 図 版



1 調査区全景（上空から）



2 調査区遠景（南から）



3 調査区遠景（北西から）



4 調査区遠景（南東から）



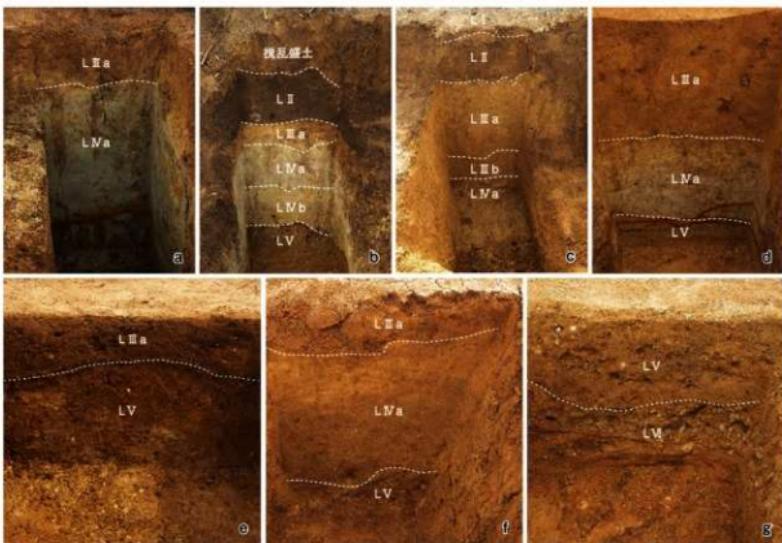
5 I・J-8~11 グリッド付近住居跡集中地区（上空から）



6 F～I-17・18 グリッド付近住居跡集中地区（西から）



7 1号道路、10号溝跡（北から）



8 基本土層

a ①(北西から) b ②(北東から) c ③(北西から) d ④(南から)
 e ⑤(西から) f ⑥(南東から) g ⑦(南から)

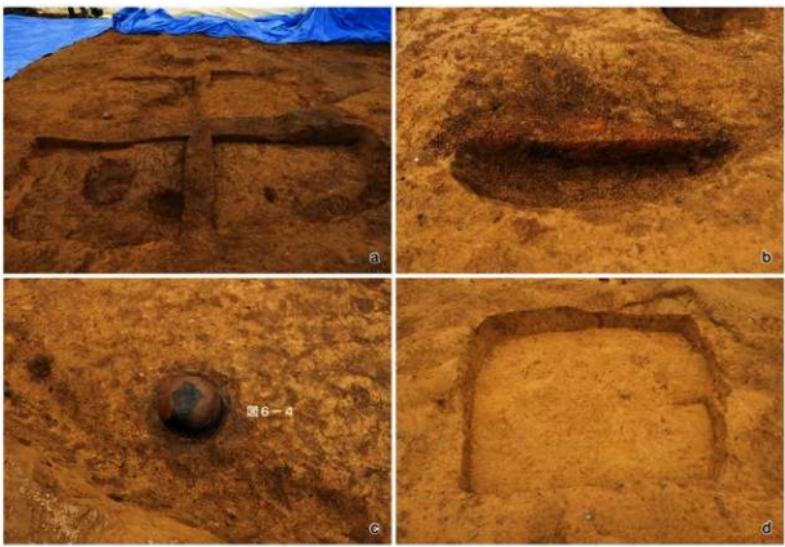


9 調査風景ほか

- a 調査前景（西から）
- b 考古除去作業（南から）
- c 造機操作作業①（南東から）
- d イノシシによる遺骸の被害状況（南東から）
- e 造機操作作業②（南から）
- f 出土遺物の放射線量測定
- g 反対町PR映像撮影（南西から）



10 1号住居跡全景（南東から）



11 1号住居跡細部



12 2号住居跡全景（南東から）



13 2号住居跡細部

a 断面（西から）
b カマド断面（西から）
c カマド全景（西から）
d 土器器皿出土状況（南から）



14 3号住居跡全景（南西から）



15 4号住居跡全景（北西から）



16 5号住居跡全景（南東から）



17 5号住居跡細部

a カマド断面（北東から）

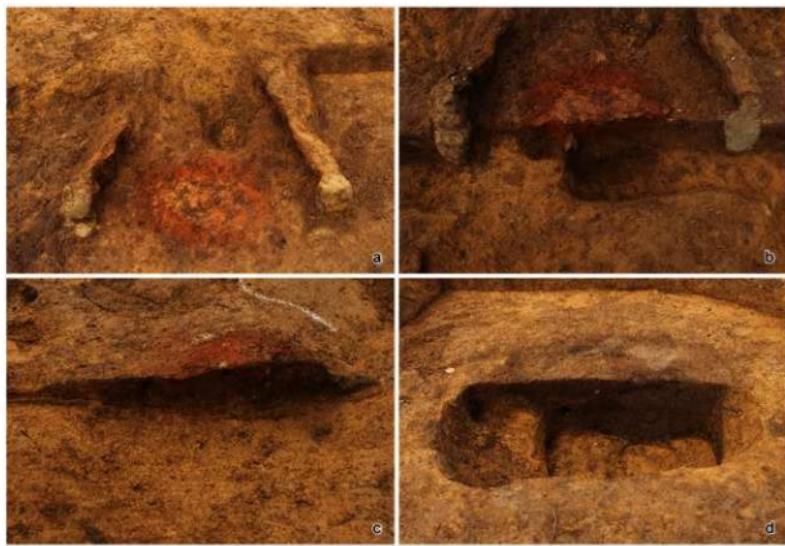
c カマド断ち割り（南東から）

b カマド全景（南東から）

d 住居圆形全景（南東から）



18 6 a 号住居跡全景（南東から）



19 6 a 号住居跡細部

a カマド1 全景（南東から）
c カマド2 断ち割り（北東から）

b カマド1 断ち割り（南東から）
d P 1断面（南東から）



20 6 b 号住居跡全景（南東から）



21 6 b 号住居跡細部

a 断面（南から）
c カマド3断面（北東から）
b カマド3検出（南東から）
d カマド3全景（南東から）



22 7号住居跡全景（南西から）



a



図20-8

b



図20-7

c



図20-3

d

23 7号住居跡細部

a 断面（南から）

c 床面東端土器出土状況（北西から）

b 床面土器出土状況（西から）

d P.1 土器出土状況（南から）



24 8号住居跡全景（南東から）



25 8号住居跡細部

a 脊面（南東から）

c カマド断ち割り（西南から）

b カマド全景（南西から）

d カマド断ち割り（南東から）



26 9号住居跡全景（北西から）

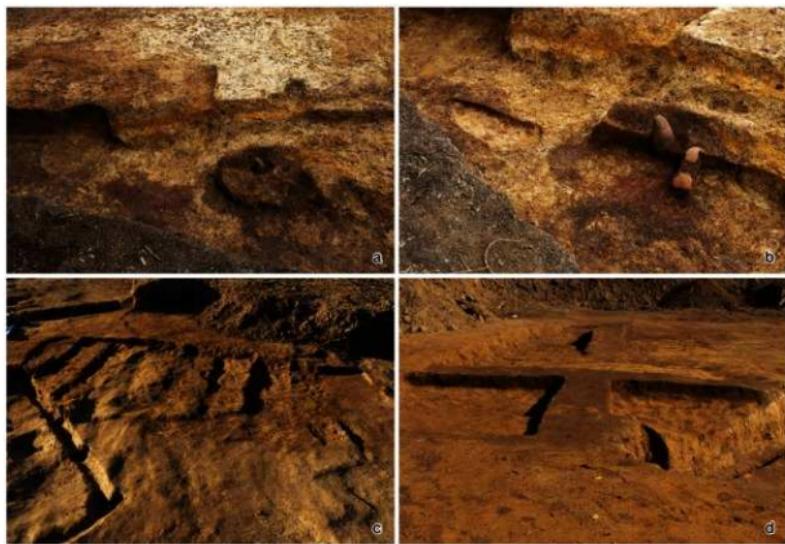


27 9号住居跡細部

a 断面（南から）
b P10断面（南西から）
c P13断面（東から）
d 住居概形全景（南から）



28 11号住居跡全景（北から）



29 10・11号住居跡細部

a 11号住居跡カマド全景（南から）
c 10号住居跡全景（南東から）
b 11号住居跡カマド断ち削り（南から）
d 10号住居跡断面（南西から）



30 12号住居跡全景（南東から）



a



b



c



d

31 12号住居跡細部

a 断面（南から）
c カマド断ち割り（東から）
b 土器要出土状況（南から）
d カマド全景（南から）



32 13a号住居跡全景（南西から）



a



b



c



d 13b号住居跡全貌（南東から）

33 13a・b号住居跡細部

a 13a号住居跡カマド全景（南西から）

c 13a号住居跡カマド断面（南から）

b P5断面（北西から）

d 13b号住居跡全貌（南東から）



34 14号住居跡全景（西から）



35 15号住居跡全景（西から）



36 16号住居跡全景（西から）



37 17号住居跡全景（西から）



38 18号住居跡全景（南西から）



39 19号住居跡細部

a 全景（北東から）
b 断面（北から）
c カマド全景（南から）
d P.3断面（東から）



40 20号住居跡全景（南東から）



41 21号住居跡全景（北西から）



42 22号住居跡全景（南西から）



a



b



図49-6

c



d

43 22号住居跡細部

a 断面（北東から）

c 土器出土状況（南から）

b カマド全景（南西から）

d 照影全景（西から）



44 23号住居跡全景（西から）



45 23号住居跡細部

a 検出（南東から）

c カマド断面（南西から）

b 検出（南東から）

d カマド断面（南西から）



46 24号住居跡全景（南西から）



47 24号住居跡細部

a カマド全景（西から）
b カマド断ち削り（西から）
c P3断面（北東から）
d P1全景（西から）



48 25号住居跡全景（北西から）



49 25号住居跡細部

a 斜面（北東から）

鍛冶炉断ち割り（南東から）

b 鍛冶炉全景（西から）

d 鍛冶炉圆形全景（南東から）



50 26号住居跡全景（南から）



51 27号住居跡全景（北西から）